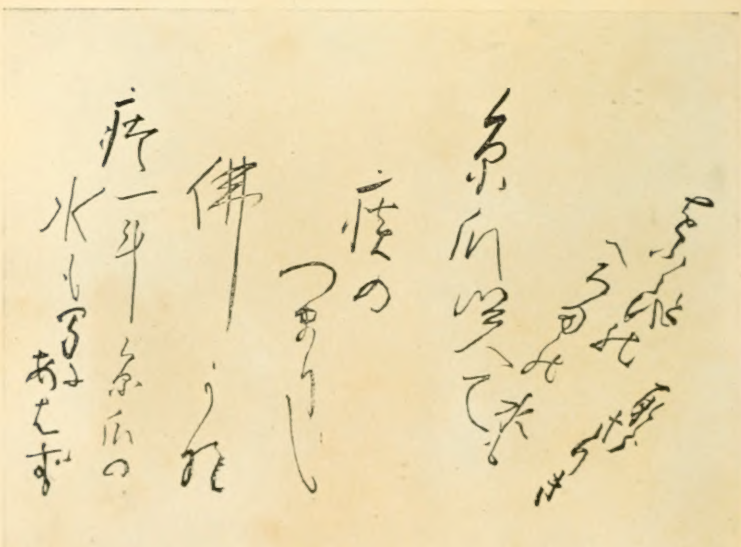
明治文學研究（2）
藤村作編

藤川忠治著

正岡子規

山海堂出版部

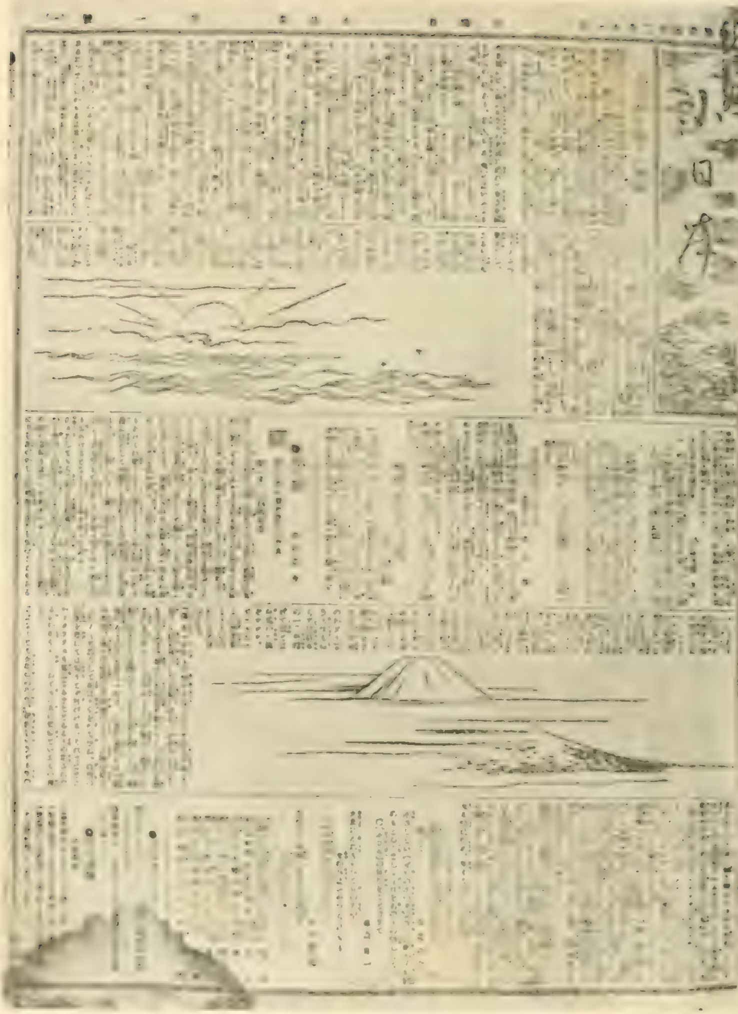




子規居士最終の寫眞と絶筆



病臥前の諸撮影


小日本

子規編輯の小日本初號

序

「明治文學研究第二篇」として、藤川忠治君の「正岡子規」を刊行して、以て汎く世に薦める。

子規は明治の文壇に於て、俳句と和歌の革新の爲に轟々たる文勳を遺した人である。その明治文學史上に印した足跡は頗る著しい。指導理論と創作品とを提げて、或は論難の衝に當り、或は創作の先蹤に立ち、身は不治の病を擁て牀上に呻吟しながら、よく多數の門弟を率ゐて、俳句、和歌の大勢を指導し得たところには、人としての彼の偉大を想望せざるを得ない。

子規研究の書は既に幾種か出てゐる。がその多くは俳人として、又は歌人としての一面を觀るに偏して、人及び藝術家としての彼の全貌を窺ふべきものは缺けてゐたと思ふ。藤川君の本書に、人としての子規、藝術家としての子規を詳細に研究し、俳諧、和歌の兩方面の業績を周到に檢討してある。

郎ち子規の全貌を窺ふに足るべき好著であると信ずる。

明治俳諧史は興味ある展開の歴史である。因襲の時代から、寫生の時代を經て、新傾向の時代に至る一線の中には、また種々なる流派もあり、傾向も含まれる。この間に闡明すべき問題は決して二三に止らない。藤川君は春秋に富む學者であり、歌人である。更にその研鑽考察を進めて他日明治俳諧史の大著を大成されんことを切望する。一言以て序とする。

藤　村　作

正岡子規　目次

正岡子規

序　説

一人や二人の力だけで時代の思潮を左右するなどは、容易に出來ることでは無い。如何なる偉人も大きな時代の空氣を呼吸してゐる以上、時代思想の影響を受けないでは居られない。併し時代の空氣を吸ひながらも、再び時代の潮流に着眼し、時代民衆に先行して、之に強力に働きかける大きな力、すぐれた意の實行者も存在するものである。一口にいふならば、時代を作るものは人であり、時代に由りて作らるゝ者は迷ふのであらうか、それは民衆がつくるものだともいへよう。只、民衆の先頭に立つ、時代の代表者として特に著しい、はつきりした個人的存在を認め得る。むしろ認めなければならないのだと思ふ。

一人や二人の個人的な力だけで時代が形成されるやうに、いつも強調し易い英雄主義的な見解は決して全てまである訳、時代一般の時勢に人は一歩も踏み出されない、民衆の前に、時代大勢の下に、個人は全く無力であると考へるのも誤謬である。私は、時代傾向の一面性と、時代に働いてゐる大衆民衆の力の大きなこととを認めると共に、一人の精神、一人の信念の、優れる個人が世界を起す強い力を信じないではゐられない。そ

はり民衆を誘掖し、支配する精神そのものには、個的な靈性の加味されてゐる事を否定し得ないのである。

文學の史的研究に於ては、時代と時代との連鎖、時代と文學との關係、即ち文學の母胎としての時代を、周密に考覈する事は重要である。日本文學史が列傳式の幼稚な敍述から、漸く時代性の究明に著しき進展を示してきた傾向は喜ぶべきである。唯物史觀に立脚した文學史の如きも、時代性を重視するといふ點では過去の文學史の缺陷を補足してゐる所も多いと思ふが、類型的な機械的な觀點に執して、極めてドグマテックである。文學史に於ては、個人的作家の敍述を主とすべきものではないけれども、もし個人的作家の研究認識が十分でないならば、そこにすでに缺陷は免れない。個人的作家・作品の研究を更に深くすることによつて、始めて完璧な文學史は生れ出ることが豫想さるべきである。この意味に於ても、個人作家の研究は、益々進められなければならないとおもふ。

實に、文學史的研究に於ても、時代そのものの洞察を必須とする以外、個人作家・作品の研究は閑却さるべきではない。而して又作家・作品を直接對象とする研究に於ても、その個的な作家・作品の、眞の特色を抉出するためには、時代――時代の思潮や他の作家等――そのものを詳細に解剖・研究することにつとめなければならない。時代を主とする研究に於ても個人的作家の研究の場合も、ひとしくこの兩方面を忘れてはならないのである。

正岡子規は、明治の和歌及び俳句方面の改革に偉業を樹てた、文學の一巨人として知られてゐる。彼の出

現は、時代そのものに改革を必要とするものがあり、革新の聲がすでに起つてゐたからである。いはば時代は、彼の生れ出づる事を切に要望してゐる狀態であつたのである。彼はまことに時代の子である。併しそのために彼の個的の偉大さと、その異常なる精進を否定する事は出來ない。もし彼が生れ出なかつたならば、明治の和歌及び俳句は、少くとも餘程違つたものとして次代に引渡されたであらう。彼の存在は、明治の和歌及び俳句の歷史に於ける最も大きな存在である。彼を傳する事は、明治和歌・俳壇史の、或重要部分を敍述する事とならざるを得ない。子規は時代の空氣を呼吸して生育したものであるが、逆に時代の空氣を喚びたから、時代の要求を早く看破し、自力に時代に影響を及ぼした、選ばれた少數者の一人でもある。子規の一生を考へる時、個人の力の偉大さを如實に示す、最も著しい生きた例證をつきつけられたといふ氣がする。

私は彼が時代に働きかけた方面を注視すると同時に、時代の子として、時代の影響を受けてゐた事を常に念頭に置いて論をすすめてみようとおもふのである。ある人は、

子規先生のことに就いては寒川鼠骨、河東碧梧桐、高濱虛子の先生方に聞くでなくては其傳を知る事が出來ない。又和歌の方面に於ては香取秀眞、赤木格堂、安江不空、岡麓の先生方の申すことでなくては其傳を知ることは出來ない。今世の人々が子規先生に直接御高敎を受けたでなく子規先生を書物の上で知つて自分の考を述べたからつてそれと間違ひが無く書くことの出來るものではない。それ故右の人々をおいて何にも申す必要はないのである。

などと書いてゐる。併し子規に師事して居られる方々も少くなつてゐるが、それらの人々の子規について書かれる

ことゝ、話されることは、子規研究の重要な一資料となり得るものであるが故に、それらの人の子規觀は(それぞれ〳〵の最も聞きたく思ふものであるが、)それは門人の子規觀に絶對の信を置かうとするものではない。子規の生涯と事業を傳した一冊の有力な書物もあらはれてゐないときへ思はれる今日、貧しい小著の出版も、多少の意義がない事もあるまいと思ふものである。たゞ子規に書物の上のみで知つた私に書くものには、子規に師事した人々からは間違つてゐると思はれる節も少くないかも知れない。その點は是正して戴きたい。

「仰臥漫錄」には、「雅名といふもの用も無く無用に洒落て古人の年表など作り雅號を紙面にいろ〳〵書き並べ候にあたり雅名といふもの甚だ多し、書込に困り中途改名などは無くもがなと存候云々」と記してゐるが、生前子規は、友人河東銓(碧梧桐の兄)と共に、「下ニヤ自分ノ死ンデモ石碑ナドハイラン主義デ石碑立テヽモ字ナンカ彫ラン主義デ字ハ彫ッテモ長タラシイコトナド書クノハ大嫌ヒデヨコンナ行コロヤリヤ一週キヤイノチヤケレド貴一己ニテ得ンコツデ字ヲ彫ルナラ自然ノ石ニ名ヲ通シトケト思フテ書イテ見タコレヨリ上一字増シテモ餘計ヂヤ但シコレハ人ニ見セル〳〵ト」と書き、次のやうな墓碑銘を自製したさうである。

正岡常規又ノ名ハ處之助又ノ名ハ升又ノ名ハ子規又ノ名ハ獺祭書屋主人又ノ名ハ竹ノ里人伊豫松山ニ生レ東京根岸ニ住ス父隼太松山藩御馬廻加番タリ卒ス母大原氏ニ養ハル日本新聞社員タリ明治三十□年□月□日歿ス享年三十□月給四十圓

富貴權勢に背き、一介の布衣に甘んじ、而も自己の文學的事業に不失の確信を持してゐた彼の面目を躍如

としてゐた。絵畫家に、藝術上の遺作がその全体を作る傑作であるものとみることもできるのである。自己を最善として、自ら律すると心掛けない。私は、俳人としては、つとめてその首を指ふべきであると信ずる。私は、子規を偶像として崇拝しようとするものではない。彼と共に、彼のなしたところのものを詳述し、研究して、彼自身をなしさ文學史的地位に置くべく、彼の詳し得なかつた部分、彼があやまつてゐた部分を補正して、これを後代に残したい、語さねばならないと考へる。彼の名誉に陥りにすとするあらず、しかしそう、その實と偽へ、それを更に明瞭ならしめたものが俳人おるであらうか。後者は彼を偶像視して、幼稚な資料や誤まれた假く事を拒み、識者にも彼の高きを知るのみで、更に彼の精神・事業を探究しようとはしない。吾々は彼を高く偶像視するのではなくて、彼のありしままに見、その精神・事業を味解し、批判したければならぬ。

私は先づ最初に「子規一生の輪廓」として、出生より死に至るまでの大略の閲歴を述べる。子規全集中の年譜は中々精細なものであるが、まとまつた書物としては、徹底的な部分に系統的に書かれてゐるものは殆んどないため、比較的精しく書く事とした。特に後半生の病臥生活の状態の説明には、彼の書簡等を多く引用したりして、讀む者をして目の前に躍如たらしめたいと思はれるのではあるが、人間子規と俳句との關係は極めて重大であるから、病臥時代のことに關しては、多く筆の費す點にはゆづつて三、俳句に就いて、更に「趣味及び思想の両面」と題し、且つ文學と宗教的な面とに觸れて、子規の諸觀を描き、後編への準備とする。

次に俳諧に於ける子規、歌人としての子規といふやうに分けて考察を進めようと思ふ。これは何等便宜的のもの、それは表はれた面の相違で、一個の人間の精神的所産であるといふ點からみて、全然異質のものではあるまい。この兩者の相關を、出來るだけ識別しなければならないと思ふ。さういふ點にも留意して、考察の眼を向けよう。俳諧については、俳論及び俳句と便宜上別けて敍述する。芭蕉論を以て初期の俳論を覗ひ、蕪村論を以て中期の俳論を代表せしめ、なほ彼の俳諧史觀を跡づけることによつて、その後の理論の成長、及び彼の總括的な俳論を知る資ともしよう。俳句については、年代順的にその成長の大體をのべ、各時期々々に於ける俳諧方面の重要事項を附加することとする。歌人としての子規については、「古歌人に對する評論」を掲げて、彼の歌論・見識をうかがひ、又各時代々々に於ける彼の和歌に關聯する重要事項を附加しながら、年代順に考察してその作歌の成長をあとづける。而して「歌と歌論との相關」の章を設けて、その作歌と歌論との相互關係を論じ、俳句と俳論との關係及び和歌方面と俳句方面との相關について、或程度までの解示を與へたい。次に彼の多方面的活動の要求の具體化として、小說及び新體詩方面を一瞥し、最後に、彼の藝術上の方法・自覺としての連作及び寫生論を一瞥して、包括的に彼の藝術的立場を闡明しようと思ふ。

改造社版の子規全集は二十二冊を算へる。これを精讀した者にとつては、私の小著はむしろ無用に近いものであるかも知れないが、貧しい力の能ふかぎり、子規の全貌を描かうとするのである。精細を極めることも、特殊な見解を挾む餘地も、この小著には豫期しないのではあるが、出來るだけ、子規その人に就いて全體的にまとまつたものに纏りたいといふ意圖の下に出發する。

第一編　子規一生の輪廓

第一章　幼年時代

子規は慶應三年九月十七日朝、伊豫國松山市花園町（當時、藤原新町といふ）正岡常尚の長子として呱々の聲をあげた。父年三十五歳、母八重二十三歳の時である。

子規歿後、少年時代からの友人で、曾て「ホトトギス」（註一）を松山で發行した柳原極堂が、（註二）松山市を貫流する中の川の清冽な流れに沿ふて老櫻の面影しに傍の川に突き出して居る一家と言つたのは、子規自身（註三）「自分が二つの歳から十六の歳迄毎日々々見たり聞いたりしてゐた此庭」と言つて回想してゐる移轉後の家のことである。明治二年、子規三歳（滿二歳）の時、新玉町から中の川畔の湊町に移り、そこに、上京するまで子規は住んでゐたのである。

（註一）明治卅年一月創刊、卅一年十月より虚子によつて東京から發行、現在に及ぶ。（第一篇第四章參照。）

（註二）日本新聞所載、子規言行錄二四五頁參照。

（註三）明治三十四年一月「ホトトギス」所載「初夢」。（改造社版子規全集第十卷四七七頁參照。）

藩命によつて、屋敷替へさせられたのらしいが、ここに移住した同年に、[illegible]、家全焼の厄にあつてしまつた。この時の火事のことは、[illegible]（註四）にも出てゐ、幼年時からの[illegible]

てゐる。子規自ら、「吾幼時の美感」（註五）中に書いてゐるし、「筆まかせ」（子規全集によつて始めて一般に発表された青年時代の隨筆）明治二十二年の部にも、「余」といふ題下で述懐されてゐる。「筆まかせ」中の文を、左に引いて置かう。

余二歳の時母に抱かれて親類に寝ね居りし折から、忽ち火事よ〳〵と呼ぶ聲あり。いづこよりかと見れば我家の方角なり。きづかはしとて、母は余を抱きて夜中に一人にて家へ急ぎたまふ。此夜我家には曾祖母と父と下女一人ありしが、曾祖母は父は酒を好みたまふ故熟睡（ジユクスイ）したまひ、下女もいぎたなく眠りゐし折から、誤て火事を起せしなり。母は我家とも知りたまはず、我家の見ゆる角に来たまひて我家と知りたまひしより力なく驚きたまひしが、余は喜びて手を叩き、提灯（チヤウチン）〳〵とて笑ひ興ぜしとぞ。後に此話を聞きし時、余の下駄をはかせて母の背にて火事の様を見し事、下駄（ゲタ）焼けたといひ給ひし。幼時なる子供心には、火事の時の事を出せり。あな悲しき哉。云々。

（註四）日本新聞連載、曽林纖語、子規全集第六卷二一六頁參照。

（註五）明治三十一年十二月「ホトトギス」所載。（改造社版子規全集第十卷三百四頁參照。）

（註六）

「傳に門を鎖したる程」であつたのに、半焼といふことで、藥のあとに焼れ、「當座で寄寓になつたといふが、持物を焼ると思ひこしまつた正岡家の家計は、一層不自由にせまられたことであらう。翌明治二年には、續きの士族の子規の家に、妹律子が生れ出た。家が再建される間、一家は、外祖父大原家の厄介になつてゐたが、新に建てられた家に住む事になつたのである（註六）。以前の家よりは餘程狹くなつたものらしい。律子刀自の記憶によつて書いたといふ圖をみると、玄關を入ると四疊の間の、その奥に床付きの八疊の間があり、土間の右に炊事場、四疊の右に臺所、八疊の右には持佛のついてゐる六疊の間があり、湯殿と

物置で、台所・浴場等の右に、便所は八畳の前に附いてゐるといふ具合である。數年後、子規が書齋として建てられた三畳の間は、土間と四畳の左に現存してゐる。三百人の家族には、非足ではあるまいが、既に衰へたおつた正岡家の生活が偲ばれる次第である。

（註六）明治三十一年十二月「ホトトギス」所載。子規全集第九卷二七五頁參照。

（註七）昭和七年九月「同人」子規居士三十周忌記念號、七四頁參照。

而も父常尚は、間もなく死んでしまつたのである。「筆まかせ」明治二十二年の條に「父ハ余ガ十一歳一六一頁）と題し、「忌日」と題つてゐる中に、「我父にておはせし人は佐伯氏より來て養嗣子となり三f祖父のあとを續ぎたまひしが、明治五年即ち余が六歳の時、四十歳を一期として失せたまひしかば、余は少しもその性質擧動を知らず。只その酒家なりしことは誰もいふ所にて、毎日五合一升位の酒を飲まれたるは、それが爲に身體の衰弱を來し、終に黄泉を早うしたまへりとの話に死後暫時にして夜間甚く黒色を呈したといへば、酒精中毒にはあらざりしかと疑はる。」と記し、又次のやうに、父の死の前後の事を追懐してゐる。

「父の病つのりたまひし頃、余は見舞の人々多きを喜びて遊びまはりければ、病の障げにもなり、又は一命にもとまふべきはずなれば、余は外祖父大原氏のもとに預けられ、折しも舊暦三月七日の夜の事なりき。余は外祖父と共に枕頭にて遊びゐしに、俄かに余の家より使來りて余に歸れといひぬ。余は何事なるやを少しも分らず、只々直様彼の使の男に負はれて家へ歸れば、十人許りも座敷に集りゐれど、しんとして話し聲もせず、いといぶかしく思ふ折から、我母の余を抱きたまふ顔ばせ見れば、兩の目を泣きはらしたまふ故ますますあやしみたり。

余は引き寄せらるゝまゝ母の膝に顔おくれば、母は泣きたまひながら父の枕元にある燭臺の火に余の指さゝせし、自分の手をそへて父の唇をぬらしたまひしが、余はその何の故たるを知らず。葬式すみて後、四十九日の中陰まで毎日墓をかざりて墓參せしが、一度もかなしいと思ひたることなし。余は此頃六歳の子供を見るに父の何たるを知らぬものはあらず。然るに余が當時の所行、げにあさましかりきと思はぬはなき種なり。いかにおろかなりけん。恥かしきことにこそ。」

父隼太は武術にすぐれてゐるといふでなく、學問を好んだといふやうなこともなかつたらしい。死ぬ前に〔註八〕發熱が高く醫者のとめるもきかないで、母によりかかつて便所へ行く等の無謀過激のことをした人で「高慢にして強情に、しかも意地わるし」の人だつたと、子規は書いてゐるが、これらの事は、子規の少年時代、主として母の回想として洩らされた所等によるのであらう。この高慢にして強情だつたといふ特質の父の性質は、子規自身うけついでゐるとも考へられぬことはない。然し、他の文に、〔註九〕「わが父にておはせし人のいつか秋山翁をそしりて、實に人のわるき人なりといひたまひしを、秋山翁は『隼太さん（父の俗稱）の樣に平生、人を是非せしことなき人がいふ位故、非常にわるきものならん』といひたまひしとぞ。若し翁の評されし如くならしめば、父にておはせし人は餘り人のことをかれこれと評論したまはざりしかたと見ゆ。わが母にておはせし人も極めて沈默にて、他人を評論するなどは成るべく避けたまふ方なり。然らばわれの好んで他人を褒貶するは果して誰の遺傳なるべきか。」等とも書いてゐるが、とにかく子規の父は、とりたてて優れた所のない人で、遺傳的に觀ても、父系からは、餘り長所をうけついでゐるものはなかつたやうに思はれる。

〔註八〕子規全集第十一卷、一六三頁參照。

(註九) 子規全集第十一巻、三一二頁参照。

父からは僅かに「いろはの手習」を習った位で、感化・影響をうける事もなく、父親の愛や有難さを意識することもない幼少の頃、死別してしまったのである。中学へ入る前頃から、山内傳蔵といふ人に詩を習ひ、習字の稽古をした事もあるさうだが、これより前、伯父の佐伯半彌に、お家流を習った事もあるといふ。上京後も稽古をしたさうだし、一生筆を離さなかった人で、晩年になってからも、うまみも出てきたやうにみえるが、字の巧い伯父には、或は父系を引いてゐるのかも知れない。(註一〇) 父から、いろはの習字を習った事、丈夫な花火筒をやったことがあるらしい話等から、不器用といふやうな事が想像されない事もないからである。

正岡家で、子規の祖父(註一一)にあたる人は、一甫といった茶坊主で、体格にはめずに一枚の文稿を紙にして「この巳かな事でございます」と言って居り、又ある時、左右衛門風呂を未熟でわかして湯に入り、一寸熱にてわかせしとば入り心地が違ふ」等と言った洒落風流の人だったと言ふし、曾祖父は、反対に、棒やくさり鎌を使ふことを教へた、武張った人で、酒好きだったといふ事が、子規の筆に残ってゐる。子規の父も母も酒が入ったので、血族関係はおそらくたらうったと思ふが、一挿話としてあげておく。

(註一〇) 子規全集第十一巻、一六三頁参照。

(註一一) 子規全集第十一巻、一六〇、一六一頁、「玄祖父」「曾祖父」の項参照。

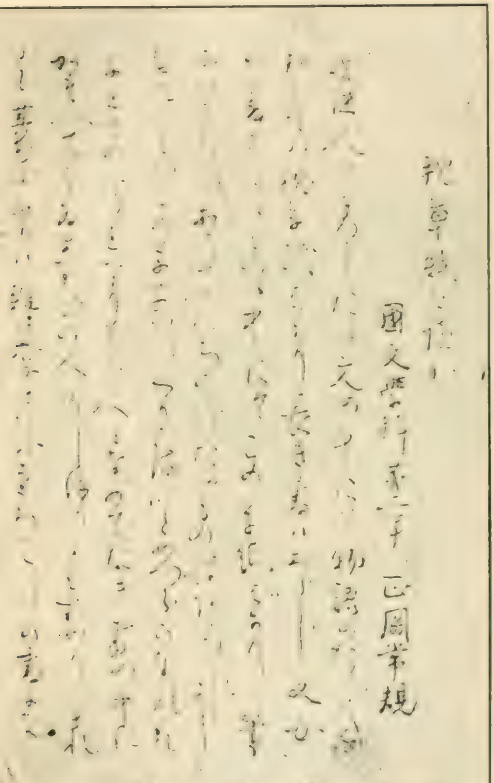
子規の母は、藩儒大原観山の長女であるが、大原家は学問を重んじた家であるといふ。「日本及日本人」の正岡子規號(明治三十年九月十九日発行)に、柳原極堂が「子規の少年時代」といふ題で書いてゐる中に、「居士として長病に

盡するに忍耐と勇氣を以てせしめた母堂八重子刀自の平生の訓育が與つて大いに力あることを私は信ずるものである。」といふ一節がある。これは松山時代の少年子規が、俳本屋の本を借りては克明に筆寫してゐたことについて、主としてその由るところを言はれてゐる言葉中にあるが、子規の全生涯についても又言はれ得る言葉でなければならない。「子規研究」は、子規の文學的事業の闡明を全からしめる意味に於ても、その時代と、その環境等々に對して、より周到綿密な注意が拂はれて來なければならない。彼を生み、か弱い女の手で彼を育てあげ、彼の長い病床生活に、彼の妹と共に、子規を慰め勵まし、全く一家を彼の奉仕的役割に甘んじた母堂の態度・心持、さういふものが、子規の態度・事業の裏に强い力になつたのではないか。子規の事業を闡明し發展せしむべき多大の餘地はなほ存するものといふべきであるが、單に一個人としてでなく、その周圍、その時代が如何に子規に働きかけたかといふ方面も、もつともつと注意が向はなければならない。その一つとして、子規の母に關して、今迄語られてゐる頁は、餘りにまづしいといふ感がする。子規は一生大原家に負ふ所が尠くなかつたのであるが、殊に在郷の少年時代、大原家の人々の精神・物質兩方面に恩惠を蒙ることが多大であつた。併し母の子規を愛育するための凜しき心づかひは、また乏しい一家を支へるための獻身的努力は、實に一入であつたらうと想像されるのである。今便宜に「日本及日本人」の正岡子規號から、すこし引用する。

古島の與惠會の方では、母堂が二十名たらずのお弟子を取つて裁縫を教授してゐられた。私は一度たりとも母堂の外へ遊びに入らせられたのを見たことは無かつたが、少女の皆々を相手に當く裁縫をしてゐられた（中略）又無口で、そして實に靜かな



母堂八重子刀自



國文學科第二年　正岡常規

學生時代の論文

時に讀ばれてゐたもので、お針教授なども其戰場足の一時であつたらうと思はれる。云々（澤田亞之介氏）

その頃子供の讀物に、一寸の蟲神と言ふのがあつた。それは僅々に三卷に過ぎなかつたが、讀本のやうなものであつた。其頃二人共上で家も貧しくはなかつたが、母甲さんは、玄關の左の方にて、讀物を讀んで居たのが、母親の好みであつた。啓發せられたらう。云々。（三浦豊氏の談）

かういふ話傳を讀むと、感情が濃いで、病弱的な嗜好にさへたるのである。少年子規のために造られた二疊の書齋!!それには夫を失つた貧しい二十歳の寡婦が、生活のために針子教授を始めたため、寡の寂しいであるも好きなくて、一人の男の子の健康の不自由になることを考慮して、やくもらたるに至つたと考へることも、別實に近いと言つてよいだらうに、それがたとへ世上にありふれた話らしからぬ現象であるにしても、何と讀をしい話をしい母の慈愛の奇聲ではないか。子規の大成の蔭には、かうして我が世に出ることを祈り、日々と嘆旋にして、この教育に專念した母のあつたことを忘れてはならない。この二疊の書齋は、子規一中學へ入つた頃増築されたものだといふが、何か往生を教へてゐた八疊の間と共に、子規の面影を留めてれてゐる正宗寺といふ寺に、それを移して作つたもの亦、現に子規堂として保存されてゐるといふ事である。

子規上京後、二疊ばかりは正岡家は移轉してゐるが、明治二十二年に、元の屋敷は賣り拂はれた。明治十九年十月二十五日附、東京から子規が大原の叔父にあてた手紙に「母様益健の事は不得已事なれども御延生と雖我は至ることは叶ても[illegible]如何ぞと存候吏八兩個[illegible]ものもたらますやうましく（中略）半年五十錢位ではきべ[illegible]と存候それとも今々あつてはさもしいとか又は矢張其を[illegible]便利などとかいふ様な

れハいづれにても宜敷候」とある。子規が母及び妹を東京に迎へたのは、明治廿五年の十一月のことであるが、上京後も母や妹が針仕事等をして子規の生活を助けてゐたといふ状態であつた。明治三十年一月、大原の叔父への手紙に、収入・支出の報告が載つてゐる中に、「月給二十九圓、隣カラ五圓(御當家ノ令孃ノ衣裳裁縫代ナリ)」等とある。當時漸く収支相償ふ程度の収入が出来かけてきたのであるが、なほこの状態であつたのである。

さて、彼の祖父であり且つ最初の師でもあつた、大原観山について少しく述べておきたい。観山は藩の儒官だつた人で、詩文の才もあり、上下の尊信をうけてゐたが、子規をば非常に愛してゐた。子規は明治五六年頃から、漢籍の素読をならひに観山翁の許に通つたのである。母は、毎朝お菓子を手に握らして、目をさまさせ、朝早く子規を観山翁の許に通はせるといふやうな状態だつたらしい。〔註一二〕子規は將來學者になつて、翁を凌がうと考へてゐたが、翁から、自分の幼い時もおまへ程は覚えなかつたなどと褒められたりして、可能な空想を、裏切られたやうに思ひ、悲観した事もあつたと、自ら回想してゐる。蓋し、當時人は學問といふことについて、翁から實際の手ほどきをうけ且つ刺戟されたことは疑ひないであらう。この頃に、もと詩の何たるかも知らなかつたのであるが、観山の塾生が、詩等を作つて先生に直されてゐるのを見て、私相交つてゐるのに、羨ましたみと感じ、早く詩といふものを作るやうになりたいなどと思つたとも、述懐してゐる。幼年の頃から子規が最も親しくしてゐたのは、三並良であつた。子規とは同年位なのに、血縁は近くにあつたし、その上、子規の母と三並良が従姉弟の関係で親類つづきでもあつたからである。観山翁の所へ

も、二人は一しよに通つた。三並氏の話によると、當時子供には門人に數へられたが、〔註一三〕子規の幼名「升」は利發で可愛いから教へう、と（私の助手）に大原觀山先生（子規の祖父）は云つて居られたが、觀山先生は面白い子だと歎へる」といふことだつたさうである。而して子規は、「升、一寸の詩もして見よ」には「升はなんぼたんと數へてやつても覚えるけれ、教へてやるのが樂みぢや」（子規言行録二五三頁）と、常をよろこばせるのが常であつたといふ。三並氏によれば、翁のところへ行く途中に犬がゐて、時々噛付つかれたが、或朝、母が棒を持つて出て來られたのに閉口はした。それは、犬の吠えるのが怒しいから、子籠らも吠えられてゐるのだらうと見つて見にきたのだと話したことがあつたと、三並氏は語つてゐる。明治五年頃から、子規達も論を結び始めたのであつたが、廢藩置縣の結果、松山城下では散髪してしまひ、子規を丁髷を斷髪したくてたまらない、觀山翁に再三せがんだがなか許されない、三並氏の父が取つて、やつとゆるされ、この時は子規も喜んで大いに喜んだ等といふ話もある。

明治七年、子規は初めて觀山翁の漢書讀みに出たが、その子の松山中學を卒へて、翁は「升は大分出に進みました」と言はれた。佐伯の私塾に轉じて、子規は太平記までにある。また、小雅へ行くと、まだ早いと云つてといはれたので、遂に漢書は持つて行かなかつたと子規自身が述べられてゐる。

〔註一三〕「日本及日本人」正岡子規號、七四頁參照。

〔註一二〕子規全集第十一卷、一二四頁、「筆まかせ」等參照。

三並氏は、〔註一四〕「先生は能書家ではあつたが、可なり西洋ぎらひであつた。先生の詩の一句に「畢生不讀蟹行書」

いふのがあつたのを覺えて居る。けれども先生は西洋の事狀に通ずることは必要と信じてゐたらしい。夜遅くまで起きて居て、西洋事狀を書いた書を謄冊に寫されたさうだ。」と書いてゐる。又藩黌に於て嘗て師事した事のある內藤鳴雪は、(註一五)觀山翁は經書・歷史・詩文何れの科でも他の多くの儒官達より勝れてゐたので最も尊敬してゐたといふやうに追懷してゐる。鳴雪は詩作を見て貰ひ、翁の推獎を受けてゐられたさうだが、その詩作の標準は、專ら倫理道德的感情を敍するが宜く、特に尊王攘夷とか國難・傷國等と內憂外患國家多事の時であつたので、この種の感懷を述べたものが、最も翁の賞讚を得るといふ有樣で、單なる山水花鳥風月の賦は餘り高點にならなかつたので、自分等も、自然美の賞讃する方にのみ走り、詩賦は寧ろ理窟的のものと決めてゐる有樣だつたと言つてゐる。而も鳴雪は、觀山翁は詩作よりも作詩とかの見地から、少年青年には道德的な理窟的なものを奬勵されたので、自分一個では、詩文に於ても、文學的興味を解しなかつたといふことを、特に辯明してゐる。

（註一四）「日本及日本人」正岡子規號、七五頁參照。

（註一五）明治三十五年六月「ホトトギス」（第五卷第九號）所載、「觀山翁と居士俳句趣味に付きて」の記事參照。

以上の言葉でも略ゝ察せられるやうに、觀山は、今日の所謂文學趣味から見れば、それ等と離れた見解の持主ではあつたらうが、また文學を解した、高潔な濟世家肌の、典型的儒者であつたと見てよいであらう。明治八年四月、五十八歲で亡くなつたので、子規が學問を教へられた期間は短時日ではあつたけれども、翁の初孫として甚く愛され、その感化・薫陶をうけた點は、單なる漢學的素質以外に、多くのものを與へられたと

いふべきである。

なほ彼の恩人の一人である加藤恒忠（拓川）は、白耳義公使をつとめたり、後、松山市長になつたりした人であるが、學生時代は、陸羯南や國分靑厓等と共に、文才を以て重んじられたといふ。この人が、子規の叔父（母の弟）であることや、明治廿八年、早稻田文學に戯曲「紫島由來」を發表して間もなく夭折した藤野潔（註一六）（古白）が、彼の從弟（子規の母が古白の母の姉）であること等を考へると、彼の血統の中には、先天的に文學的素質が流れてゐたといふ事も言ひ得るのである。

（註一六）　明治廿八年四月十二日歿、年二十四歲。子規の手によつて明治三十年「古白遺稿」出版。（子規全集第十七卷二〇二頁、「藤野古白」の文參照。）

彼の血統の中にも、文學・學問等に先天的素質を求めることが出來るのであるが、その幼年時代、外形的な不幸な境遇にもかかはらず、教育的環境にめぐまれてをり、やうやく才能をあらはしかけてゐたといふ事は、以上拙劣な文章によつても推察していただけようかと思ふ。併しながら、常人の企て及ぶべからざる非凡さがあつたわけではなく、所謂神童の部類ではなかつたのである。幼年時代の子規については、多くのことが傳へられてゐるわけではない。この章を閉ぢるに當つて、母が語つた二三の逸話を、「子規言行錄」から引用することによつて、平凡普通な子規の幼時の面影を偲ぶことにしよう。

◎赤ん坊の時はそりや丸い顔でゝ、丸い顔でゝよつぽど見苦しい顔でございました、鼻が低い〳〵、妙な顏で、ようまア此頃のやうに高くなつたものぢやと思ひます。

○小さい時分にはよつぽどへぼで／＼弱味噌でございました。松山で始めてお能がございました時に、お能の鼓や太鼓の音におぢて／＼とう／＼帰りましたら、大原の祖父に、武士の家に生れてお能の拍子位におぢるとそれは叱られました。近所の子供とでも喧嘩をするやうな事はちつともございませんので、組の者などにいぢめられても逃げて戻りますので、妹の方があだた石を投げたりして兄の敵打をするやうで、それはへぼでございます。

○物言ひを覚えるのが、よつぽど遅うて、三つの時にも「ハル」といふ下女を呼ぶのに「アブ／＼」といふて呼んで居りました。物言ひばかりか、手もえつぽど鈍で、紙鳶もえゝあげず、独楽もえゝまはしませなんでございました。

○（或時丁度米藤、大きな呉服屋〔筆者註曰、正岡家の屋敷はこの米藤の裏であつた〕の蔵の上から下女が顔を出して居たのを発見たといふので帰りに（筆者註・小学校の習字先生のところへ、勉強に行き・其の[illegible]に行つたのである〕それをこわがりました。

第二章　少　年　時　代

明治六年（七歳）法龍寺内に設けられたる寺子屋に三並良と共に通學。
明治七年（八歳）松山市智環學校に入り、後勝山小學校に轉校通學す。
明治十三年（十四歳）勝山小學校卒業、松山中學校入學。
明治十六年（十七歳）五月諸友と共に松山中學を退く。六月、叔父加藤恒忠よりの書に接し、直に上京に決す。十四日上京。

子規全集所載「子規居士年譜」から、以上を抜萃したが、この後東京へ遊學するやうになつてから、松山を去るに至る頃まで――大體、少年期に屬するとみてよい――の期間の、子規について、ここに一通り述べたいと思ふ。

多分観山先生が病弱になつた爲めであらう。私達はやはり藩の儒者土屋三平先生に漢學を學ぶことになつた。小學校へ通學しても、まだこんなことをしたのは漢學が盛んであつた爲めであらう。三平先生はどれだけの學者だつたかは知らないが、もの堅い奇人であつた。我々は冬の朝早く五時か六時頃には先生の前に出た。三平先生は何時もきちんと机の前に坐つて待つて居られた。子規は此の先生に色々學んだ。子規が漢詩の手ほどきをしてもらつたのは、此の先生だつた。漢書もそれからそれと、多くは素讀だけだつたらうが、隨分讀んだやうだつた。四書・八大家、戰國策、史

記、春秋、資治通鑑、日本外史、政記、皇朝史略等々であつたらうか、全く記憶にも居ない。三平先生は机の傍へ一人一人を置いて、ごまかしはきかない、字引を机の横に置いて、それは一生懸命であつたが、解らないと符をして置いて一々引いて下さる事にた。これが小學時代のことであつた。（日本及日本人　正岡子規號、子規の少年時代）

と、三並良は述べてゐられる。この三平氏、子規年譜に土屋久明である。觀山翁が病歿になられたので、白川といふ塾生や子規の叔父加藤恒忠の代教をしばらく受け、觀山翁の指圖で、間もなく土屋氏に就くことになつたのであるといふ事、幼學便覽を詩學として平仄のならべかたを習つたのは、明治十一年の頃のことで、それから五言絶句を毎日一つづつ作つてみてもらひ、數月にして中絶したが、間もなく詩作に熱中し、詩作は、少年時代の子規の主要な文學趣味の吐出し口となつたのである。（註一）この土屋久明は、子規に屬れて漢詩の手ほどきをしたといふ點で、記憶せられるであらう。觀山の友人で武士な人から習字の手本を書いてもらつたり、詩をみて貰つたりしたこともある。

（註一）明治二十六年一月「日本」新聞に「俳諧の一句集」の題で、この人の事を書いた。（全集第五卷五六頁參照）

中學へ入るやうになつてから、一週間に何度か、河東靜溪の許に通ひ、漢籍の講義をききに行つた。さうして明治十三年春から同親睦會といふ會を作り、諸友と毎日夜、交代で各人の家へ集まり、題詩等をして、後、靜溪を迎へ批評添削をうけた。學校の課業も終りにして、詩を競作し、土佐の高僧を、その會は繼續せられたといふ。（註二）「會の名は先生がつけて下さつたものに相違ない。私がたしかに先年その時の子供に考へ出せる筈がない。」と三並良は言つてゐる。この當時は、靜溪塾で、文章軌範や八大家文等の講義

を聽く傍ら、師の指導によつて最も詩作に力を盡してゐた時代である。靜溪塾では、太田正躬(柴洲)・竹村鍛(錬卿)・三並良(松友)・安長知之(同甫)・正岡常規(子規)、この五人が特に親しいグループで、同親吟會は、これらの人々がやつてゐたのである。少し遲れて、柳原正之(極堂)等も、一緒に勉强するやうになつた。この年から翌十四年にかけて、「莫逆詩人」「五友雜誌」「雅懷詩文」「雅賞詩文」等の回覽雜誌をつくつたりした。回覽雜誌といへば、「子規年譜」(註三)に、明治十二年十月の「櫻亭雜誌」(第六號)といふ回覽誌が、子規庵に殘つてゐると書かれてゐる。靜溪は「史學派ではなく、經學派だつたさうだが、特に我々の性質に注意し、訓戒される所があつた。私の如きは、どうも短氣であつたので、私が明治十五年上京するに際し、先生は之を戒しめる爲め、程子の句を嚴嚴な楷書で書いて下さつた。」と、三並良はいつてゐる。(註四) 觀山翁と共に、この人も子規に與へたものが相當大きかつた事が考へられる。この所謂五友の中、竹村鍛は年も子規よりは二歳の年長で、詩文にも一番すぐれてゐたらしいが、氏は靜溪先生の實子である關係上、先生は、子規の詩文を一等推稱されてゐたといふ事である。子規は靜溪塾の花形であつたらしい。鍛は後、黄塔と號したが、靜溪の第三子で、帝大卒業後、富山房に入社、後、女高師に教鞭をとるやうになつたが、卅四年二月一日逝去した。「墨汁一滴」の中にも子規はこの人を哀惜した文を殘してゐる。靜溪の第四子が銓(可全)、第五子が現在猶俳句界に健在を傳へられてゐる碧梧桐で、碧梧桐はいふまでもなく、三人共に子規の俳句革新には關係のある人々である。「筆まかせ」二十二年の部「交際」といふ文のなかに、朋友の一節をあげるとして、

愛友　綱井岩氏　　良友　武市庫氏

好友　太田明氏　　敬友　竹村鍛氏
谷友　三並良氏　　舊友　安長知氏
嚴友　菊池謙氏　　畏友　夏目金氏
文友　柳原正氏　　親友　大谷藤氏
直友　佐々田氏　　温友　神谷豐氏
剛友　秋山眞氏　　賢友　山川信氏
常友　勝田計氏　　亡友　清水達氏
高友　米山保氏　　直友　有吉行氏
少友　藤野潔氏

とある。この何友といふ名稱は、全部適切なものともいひ難いが、竹村氏に[illegible]、その他、松山時代の同親吟會當時の諸友も依然親しみを持ちつゞけてゐたことを示してゐる。

（註二）「日本及日本人」正岡子規號、七八頁參照
（註三）同、七九頁參照。
（註四）明治三十四年六月「ホトトギス」（第四卷第九號）「[illegible]」の文參照。（子規全集第九卷四六一頁）
明治十五年十月二十二日附、すでに上京してゐた三並良宛の手紙に「嗚呼今日の形勢に當て何とか[illegible]の趣を聞はず[illegible]港場にして通ずるの地たるは我國の[illegible]何て其れ此に知く[illegible]書を讀まざる

るべからざる所以なり」と冒頭して、自分は漢學にのみ熱中してゐるのではない、君の意見と同様、洋學の必要も知つてゐる、兩三人からのしらせといふから、君のこしらへたことではなからうが、自分が漢學にのみ熱中して他を顧みないやうなことであれば慙愧に堪へぬ、さういふつもりでないから、もしさうなら改める、といふやうな意味のことが、縷々釋明されてゐる。當時の思潮の影響をうけて、西洋の新智識の必要をかんじたり、自由民權論にかぶれたりして演説に熱心になりかけた頃ではあつたが、やはり他からみると、漢學・漢詩の勉強に熱中しすぎると思はれる程、根強く、作詩等への愛着のあつた事を裏書きしてゐる。松山時代の少年子規の生活・思想は、漢學趣味、漢詩愛好が重要な一部を形づくつてゐたのである。この傾向は上京後もしばらくつづいた。(註五)「東京へ來ても同じこと、少し勉强したことは詩作ばかり」等と子規自身言つてゐる。俳句に熱心になる以前は、文學趣味としては、漢詩に最も心を傾けてゐたと言つてよい。從つて詩も相當にうまかつた。夏目漱石は、大學生時代の子規のことを回想して、漢文は下手だが、詩は自分よりよほど上手だつたといふやうに評してゐたとおもふ。後年、詩人と交友もあり、詩人に對して、斷片的ながら高所から批評を下したりして、絶えずその方にも注意をしてゐたやうである。詩に對しても具眼者を以て任じてゐたらしいが、その基礎は全く少年時代の詩作の練習勉强に因る所が大であつたと言ふべきである。明治十五年八月、友人武市氏のところへゆき、朝野新聞に出てゐる鳥尾中將・中村敬宇、外一人唱和の詩作をみて、(註六)「傑作なるを悟り無欽慕に堪へず聊か其顰に倣はんと欲して千辛萬苦を經て一晝夜を過ぎ漸く成功し後種々の加刪を加へ遂に成れり」等と言つてゐるが、當時の作品及び、其評眼は、問題にならない程度のもので

あることでも、かかる熱心が、徐々に子規の詩眼を開いて行つたのである。（柳原極堂の回顧談中に、

或夏の一夜自分の近隣に剛富を率いて其の音韻を資に書くに堪へたる者……
の夜自分の宅に來て深更に至るまで韻家の備を待つて居たが……
之が唯今であつたなら直ぐ俳句になつたところだが當時は乾燥なる材料……
五頁參照）

とあるのも、この時代の一挿話としてなつかしい。古風ながら、何処にか美しい詩的な調べ、子規の興味さが偲ばれる。

　　聞子規　今作詩以誌感

一聲孤月下。啼血不堪聞。半夜空欹枕。古郷萬里雲。

これは、子規が詩作を始めたといふ明治十一年の作で、全集にも、これが最初の一首として收められてゐるのはかりである。翌明治十二年には、

　　春日送客

乘車時馬早歸來。一觴雙親喜自催。庭際芳草春欲老。……

の他、一絶が載つてゐる。同十三年には十一種十、十四、十五年の分に作られた六十を載つてゐる。十五年後の詩作も、毎年かなり作られてゐるが、上京の前後三年に平均して三十首數多く、それだけ熱心に没頭してゐたものと思はれる。あくまで模倣であり、習作・習題によつて作つた者であたし、効果をいつはたえれまでの

ものでもあらう。彼自身「もと／＼詩が子供に出來る筈なければ上達の度は極めて遲々たりき。」(註七)とも述懷してゐるのであるが、かういふ勉強も、言葉の驅使、詩眼の向上に何ら役立たなかつたとは言へない。かかる勉強を通過した事は、俳句の上に悟入するに相當役立つたであらうといふ事だけは、斷言していいと思ふ。

（註五）子規全集第十一卷、一二四頁參照。
（註六）子規全集第十五卷、二一頁參照。
（註七）子規全集第十一卷、五三頁參照。

なほ、靜溪塾以外、當時浦屋雲林からも、詩の添削を時折受けた。雲林はやはり漢學者で、詠史に長じてゐたといふことであるが、

花　木　權　雲　林　先　生　逝　な　き　や

の句は、明治廿八年、病軀を養つて、松山に歸住してゐた時の作である。

漢學を勉強し、詩作に熱心だつた一方、小説を讀んだり軍談を聞いたりする事を喜んだのも、この頃で、勝山小學校に景浦政儀といふ先生がゐて、この先生の許へ、一週間何回か夜、數學、讀書等を習ひに三並良と一しよに通つたのは、明治十二年頃のことといふが、この先生は話上手で、三國史とか漢楚軍談の話などを面白く言つてきかせるので、勉强よりもお話の方が興味を引いて、夜遲くなり、母親達が迎へにゆくやうなことも度々だつたといふ。それより前に一度連れられて軍談ききに行つたことがあつたさうだが、わけが

令らず、保元・平治物語や玉藻前等の繪本を借りて讀んだが、假名をたよりに書の解釋を求め、彼は非常ま[illegible]
つたといふ。母堂の追憶中に、「大街道の寄席(講談)を聞きに行きよりまして三並の從弟と二人で、永井と
いふ處で其お錢を借てはききに行きよりました。何でも一錢の木戸錢が少し遅く行くと八厘ですむとかいひ
ますのでございましたが、それが後にわかりまして大變に叱られました。」(「子規言行錄」二九八頁參照。)と
あるが、三並氏の書いたものの中に、

暑浦の夜學に行く晩に、子規と寄席の前を通つて、講釋の聲を聞きたくて仕方がなかつた。[illegible]
五六年だつたと記憶するが、その頃私共には小使一文も[illegible]
なかつたが、それでも何かの殘りが、[illegible]
果、子規の親類が近所にあるので、彼が其處へ借りに行つて來て、[illegible]
通學から歸つた積りにして來ると家の木戸が[illegible]
見したのかと思つて居ると、子規が[illegible]
またいいて居ると、母の聲がして「今夜はもう開けてやらん。[illegible]
がないよといふ。その中に子規のお母さんが見に來てくれて、[illegible]
に門を開いた。どうして露見したのかと云ふと、[illegible]
下駄とを持つて、暑浦先生の處まで行つたのであつたが、[illegible]
誰かに行つたと[illegible]

とあるのは、一層精しく、その時の樣子が目に見えるやうである。その寄席は「遊山」といひ、講師は、眞田三代記を最も得意として、一番子規や良に面白がられてゐた講談師だつたのである。子規も「余が軍談を好みしも明治十二三年の頃に始まりたれど、親が許し給はざりし故、月に一度か二度位行きしのみ。」(註八)と、書いてゐる。貸本屋から小說類を借りて耽讀し、それを筆寫したりしたのも、この頃である。「小說を讀むも其頃にて、淺井氏の內にありし源平盛衰記、佚光、平治物語を讀みしを始めとし、終に書肆に行きて書を借りることを覺え、更に馬琴の著作を見たり。」(註九)と自ら書いてゐる。丁度さういふ傾向をもち出す年齡でもあつたのであるが、先生から小說の話を聞いたりしてゐる中に、一層加速度的に、さういふ嗜好に驅り立てられて來たものと見える。今も昔も變りはない、小說等を讀むと邪路に陷るといふので、はじめは、母も容易には小說を耽讀することなどは許してくれなかつたらしいが、十三、四にもなれば我意を通すことも出來るので、ありふれた小說類は大分に讀破したらしい。(註一〇)馬琴の書いたものは八犬傳・弓張月等に勿論、他の作篇も大分多く見たさうだし、其他水滸傳・三國志・武王軍談・岩見英雄錄・佐野報義錄の類を讀み、自らも、水滸傳等に影響され、榛名・妙義邊の山寨に閉ぢこもる義賊を主人公とし、卷中盡く戰爭の小說を作らうと計畫したこともあつたさうである。

（註八）（註九）子規全集第十一卷、五三頁參照。

（註一〇）子規全集第十一卷「小說の嗜好」九六頁及び第十七卷「水滸傳と八犬傳」[illegible]、第十三卷十二頁所載、等參照。

貸本を大に讀んだのも此の頃からだつた。借賃は、五冊一晝夜で幾らで、一日の中なら、何度とり代へ、何冊になつ

でも、矢張り五厘だつた。我々の讀んだのは多く軍談ものであつたが、馬琴のものも大方此の店で讀んだ。水滸傳や八犬傳の中に名文があると、子規はよく寫し取つて居た。彼は一体俳句の抄記を丹野に借りて來て讀んで、非常に面白がつて、その丹野から寫して合本にして居るのを、私は見たことがある。彼は字が達者で寫本などは[illegible]、[illegible]して居たのだ。（三並良の記述）

居士は本を借りて來ては盛んに寫したものだ。學校の教科書まで寫して用ひたと話に聞いてゐる。湊町に大內屋といふ貸本屋があつたが、此店の貸本は殆んど居士の手にかゝらぬものはないと云ふことだ。（柳原極堂の記述）

一日に及日本人」に同子規氏の、かういふ記事を參考にする。明治廿五年七月廿一日附、上京してゐた三並良あての封書の中に、

又當地御存じ一の閣柳一名東西亭南北は一昨卯廿九日より大海道遠山傍邸に於て軍談興行致し[illegible]

東京橋[illegible]小伯[illegible]其容貌東にして今[illegible]其寫眞あるよし[illegible]名を付[illegible]

讀をこの[illegible]にして[illegible]席は中山[illegible]前席は可なり[illegible]面白く[illegible]中山

は隨分面白き由なれば余も本より軍談の[illegible]にして且つ[illegible]

日暮を待ちかねて[illegible]あるも之を[illegible]して出掛けたる[illegible]

したる所[illegible]因[illegible]に[illegible]必ず[illegible]することなし[illegible]に分

きたる心[illegible]を[illegible]に[illegible]貴[illegible]東京に於て[illegible]

余[illegible]に[illegible]て[illegible]に[illegible]あり

て之を聽くことを

とある等も、當時の子規の趣味や生活を見るべき一資料であらう。小學校でも遠山先生といふ人から、習字の時間などにお話をせがんで、きまつて孫悟空の話を聞き、生徒が皆無中になつてゐたといふやうな事も、三並氏の追憶中に述べられてゐるが、これは實に當時の風潮であつたのではあるが、子規も最も小說ずき軍談ずきの一人であつたのである。とにかく馬琴の小說等を耽讀したことが亦少年子規の文學趣味の一萠芽であつたといふことは言つてよいであらう。

人並以上に、詩作に熱し小說を讀む事に耽つた少年子規は、又人並はづれて、極めて筆まめで、文を作り詩をかき、又色々の本の筆寫をしたりした。(註一一)これは確かに惠まれた天性と言つてよからう。柳原極堂は、

自分の出入した君の書齋といふのは玄關から左りに這入つた三疊の間で、一脚の机と二三箇の本箱に積み重ねられた寫本と其他には別に無かつたと記憶してゐる。シカシ其寫本が徒爾に觀過すべからざるもので詩文其他何や彼やと君の抄寫に成つた寫本は常に机上に累積されて居つたので之は君が當時より今日に至るまで怠らず繼續された一の事業であつたと謂つてよからう。云々。(子規言行錄)

と言つてゐる。今傳つてゐるものは乏しいであらうが、寫本以外に、自分の作品を書いたものも、少くなかつたであらう。後、上京後書いたものに、故鄕にゐる時書いたものは價値あるものはないが、自分の進步の過程を看るには、便利だから、今後もなほ續けて筆まめに書いておくことにしようといふ風のことが書いてあるのでも、その事が想像される。子規は少年時代から筆まめで、之を實行したのである。(註一二)俳句分類とか俳家全集とかいふ面倒な仕事を繼續し果したのも、少年時代の筆寫の連續とも言ふべく、この時代の練習が一

つの基礎的なものとなつてゐると言つてもよい。それは子規の大をなさしめた一性癖と言つてよいものでもあつたのである。子規の晩年の書のよさを讃へる人も多い。能書の生れつきもあつたらうが、一つは少年時代から繼續した筆寫の習慣が、自ら書の上達を招來したといふことも忘れてならないのである。

（註一一） 三十二年三月から四月にわたつて「日本」に發表した「病牀讀書」中の教育論に、少年時代愛讀した小説の功德を認めてゐるのは注意されるが、その中に、教科用の「勸善訓蒙」を手寫した等の記事もある。

（註一二） 第二篇第一章參照。

中學を中途退學して上京したが、大體次のやうな事情であつたと思はれる。

學科もそつちのけにして詩作に熱中したり、小説を耽讀したりした子規は、決して學校好きではなかつたであらう。その上演說等にも大分メートルをあげてゐたといふから、猶更である。而も校長から、子規達の演說が政談演說めいてゐると注意され、退校さすぞとおどかされたりしたので、一層學校はいやだといふ感情を募らせたこととおもふ。親友三並良はすでに上京し、その音信等はしきりに彼の上京熱をあふることとなつた。都の學生になりたいといふやうな漠とした憧憬にみちてゐた矢先、丁度叔父の加藤恒忠から、西洋へ行く前に來いと言つて來たので、大よろこびで、その手紙の來た翌々日、上京するため松山を立ち、明治十六年六月十四日、はじめてあこがれの東都の土を踏んだのである。

この、子規が演說に熱中したこと、その他、この間の事情について、もう少し詳しく記して置きたい。

松山中學の初代の校長は、慶應出の草間時福で、彼は當時の民權論者の一人であつたため、子規等の入學し

た頃は、そこをやめて、創立された海南新聞の主筆をしてゐたらしい。子規の言葉に從へば、（註一三）「草間先生ノ此校ニ來リ演說ヲナスヤ、伊豫全國之ガ爲ニ初メテ演說ノ有益ナルコトヲ知リタルナリ、故ニ伊豫全國ノ人民ハ常ニ眼ヲ中學校ノ演說會ニ注ゲリ。」といふやうなことで、中學上級では、ギゾウの文明史、ミルの代議政體、ルソーの民約論等を讀んだり、演說の稽古をするやうな氣風が、子規等の入學の頃も殘つてゐたといふ。さうして縣令の岩村高俊や草間氏等が盛に街頭に立つて、政談演說をやるといふやうな狀態で、一方板垣氏の立志社一派の政談演說會等も度々行はれてゐたのである。三並良の語る所によれば、草間が「朝野新聞」に寄稿した「壓制政府を顚覆せよ」と題した論文が、政府の忌諱に觸れて告發され、禁錮された等の事もあつたさうである。この時の禁錮は自宅謹愼といふことで、岩村縣令が、彼を訪れ、連れだつて夜は散步に出かけるといふ風だつたといふことである。

かういふ狀態であつたので、子規が中學を退學した頃から翌年にかけては、松山中學の生徒で政論をしないものは無いといふ程で、何々社とか何々組とかいふ團體をつくつて、父兄や教師の目をかすめ、寺院や郊外等に潜行して、政論をやつてゐたといふ。子規も（註一四）「余は在鄕の頃明治十五、十六の二年は何も勉强せず、只ゝ政談演說の如きものをなして愉快となしたることあり。」と言ひ、或は（註一五）「此時余は中學校に在りながら學課は全く抛ち去りて只々夜每に寺院學校などを借り受け學友十人許りと共に「自由の權利」「參政の權利」などゝ演說するを無上の快樂とはなしたるなり。」等と述懷してゐる。

（註一三）　子規全集第十二卷、三〇頁參照。

〔註一四〕〔註一五〕全集第十一巻五七頁及び全集九巻一三八頁（廿九年一月五日發行「日本人」所載「青年と十九世紀」參照。

同親會及河東の薫香會も共に閉會仕候小生は近頃演説好に相成第一北豫青年演説會に居り（中學校講堂を借受け毎日曜日の夜開會す）第二中學校談心會に居り（毎土曜日豊岡中學校講堂に於てなす）第三明報會にも入れり（是は貴君も御入社被成候ひし興禪寺の會なり）實に愉快に奉存候（明治十六年四月二十日附、三並良宛書簡の一節）

と書いてゐるのなどをみると、上京少し前頃には、漢學の勉強よりも却つて政談演説等をする事に熱心になつてゐた事が、よくわかる。改造社版子規全集第十二巻中には、その頃の演説「自由何クニカアル」「天將ニ黑塊ヲ現サントス」等の文が收められてゐる。「日本及日本人」の正岡子規號の柳原氏の文章中の「コツクワイ演説」（子規言行錄にも觸れてゐる）といふのは、「天將ニ黑塊ヲ現サントス」といふ全集所載の文であらう。これは明治十六年一月十四日青年會の演説となつてゐる。左に柳原氏の文章を引用して置く。

松山中學では毎月一回生徒の辯論會が講堂で開かれ、其席には必ず職員が監督に出てゐることであつた。時しも自由民權國會開設要望の聲が四方に揚り、反政府熱が愈々激しくなつたため、政府は極端に壓縮をとつて言論界に警めてゐた頃だから、學生が辯論練習のための此種の會へも官憲は相當注意を拂つてゐたものらしい。今度の辯論會は正岡君外三名出演と云ふ豫定だつたから、正岡の奴なにを喋るかな、彼の漢文で先生に賞めて貰つた手並は儕輩中でも推し出して事ならんと欲せば忠ならずなどとやるのか知らんと、私は演者に正岡と云ふのを興味に早くから講堂へ出かけたものだ。居士は二人目に登壇して私の演題はと言ひつゝ、背面の黑板へ白墨で黑塊と二字書いた。本夕はこれに就て聊か所懐を述べ致したいと思ひます、之はコツクワイと讀んで頂きたいのですと言つた。黑塊と書かれた時はちよつとしたものだつたが、之を

コツクワイと讀んで頂きたいと聞いた瞬間にはハテ變な演題だなと思つて何とはなしに監督の顔を顧みると、監督は兩腕を机の上に立て肩を聳かして腰を少く浮かせた姿勢で前に乘り出してゐる。此時暫く滿堂聲なしと云ふ光景であつた。居士の演説は其用語に於てたとひ學術的であつても、當時政界の形勢から推して果塊は國會であり、其論旨の內容は國會開設要望であり、無論徹頭徹尾政談であることは聽者の誰にも容易に肯かれるところであつたが、監督から一二回注意を受けつゝ、其處に巧く話頭を轉換して最早結論に入らんとする時、監督はツト起ちて辯士中止をやつた。そして居士は直ちに職員室の方へ拉し去られた。私の豫想は全く裏切られて、居士から國會開設要望の政談を聽かされたことは實に意外でしたが、又た實に愉快でした。噫多感多情の才人なる哉とスッカリ感心させられてしまつた。學校の夜學で顔をあはすまでゞ交際しなかつた居士と私は其後至つて親密な仲善しになつてしまつた。

明治維新の變革によつて階級制度の羈絆は解かれ、人はその才能によつて自由に活躍の天地を開拓する事が出來るやうになり、又歐洲の文明に接して新たに開拓すべきものが無盡に展開されて來たのであつた。自由民權論は唯その一つの顯著な表れにすぎないものである。當時少青年が澎湃して押しよせつつあつた、さういふ時代思潮に無性の憧憬と共感を有つたといふのは、まことに止む能はざる必然である。而も武士の特權を奪はれた明治初年の士族の子弟にとつては、特に自己の將來生くべき方途を求めて、大いに決心するところがあらねばならなかつたのである。明治十五年二月（上京の一年四ヶ月前の頃）にかいた手紙の中に、

古へは學問するは富貴よりも貧賤に如くものなしといひしも古人の如く小成に安じ僅か一國中の儒者とならんは貧賤却て優れるや否やは知らざれ共今日の開化世界に出でゝ天下の人に駕載せんとするは中々我們貧生の成し得る處に不侯

と來存候(中略)雖然豈失れ貧を以て功名を博する心を抑制するを得んや功名は天下衆人の相爭ふて得んと欲する所なり私共も亦此一大競爭場に入て試に一鞭を加へ天下萬人と後先を爭はんと欲するなり(中略)其れ今日之天下は漸成を期するの時か將た速成を要するの時か私は斷じて速成を要するの時なりと云はん速成を要するには何れに於てすべきや田舍の貧々たる學校に於てせんか將た都府の隆盛なる洋富に於てせんか私は斷じて都府の學校に在りと云ふべしたとひ漸成を要せざるの時とするも前便申上候如く一文の財產もなく後來寄賴の見こみもなき私共は何を以て漸成を期して緩々と學問するを得んや今時日を空しく松山に費して一年間に一寸の智識を得んよりは寧ろ一年の時日を東京に費して一尺の智識を取らん事私の希望する所に御座候若し日本の開化をして一歩を進ましめ田舍の學校をして十分盛大に（盛大とは敎師も善良に規則も完美なるを云ふ）あらしめば我們書生は素より地方の小中學を卒業して後に都會の地に出で、一種の專門科に就て學問する事こそ順叙を經るものといふべきなれど如何せん維新以來日尙淺く學校は一般に良敎師にとぼしく良規則を得ず正に我中學校の如きは高等科を置と雖も一層善良なる敎師の來るに非ず一層高尙なる書籍を講授するに非ず其學科却て前時中學校に劣る等に至りしは私們の常に嘆して措かざる所に御座候然れば學校敎師よりは寧ろ一の先生まるかた〻の一人もあるなし實に光陰を如何せん日子を如何せん松山に一日の日子を消費すれば東京も亦一日二十時間を經過せり而して同時に多分の智識を發成せんとするは果して何れか勝れるや云々

とあるのは、論旨なれば、（政談演說が好きになり、校長に退校させるぞと脅かされたこととは、退校を決行する「動機をつくつたといへるばかりで）學校をすてゝ一日も早く上京したいといふ意志は、既に抱いてゐた事が觀はれる。子規の書簡集を見るならば、この十五六年頃京都又は東京へ遊學のため出た同年輩の

少年は甚だ多かつたことが察せられる。「我輩友中皆此專門學校を慕はざるなし」（明治十五年十月）とか「坂本信吉君は數日前出京御手洗君も近々出京のよし其他將に垂天の翼を張て遠州洋を飛揚せんと窺ふ者は太田君柳原君岩崎君小野君白岩君吉田淸太郞君西原君白方君森君宇高君湯川君（君は已に學校を止めしが妻を娶りし故に今出京甚だ遲し）及不羈生なり」（明治十六年四月）等の記述が散見する。

遂に子規は、明治十六年五月、諸友とともに中學を退學した。

松山中學只虛名。　地少良師從執鞭。　言道何須講章句。　染人不敢若丹靑。

喚牛呼馬世應毀。　今是昨非吾獨醒。　忽悟天眞存萬象。　起拔蛛網救蜻蜓。

といふ、その時の詩作によつて、少年子規の意氣が認められよう。六月十日松山を發し、十四日上京したのであるが、その時の事は、全集所載の「東海紀行」（第十二卷）「東京へ初旅」（第十一卷）等の文によつて、部分的ながら、可成り精細にうかがはれる。

この章を終るにあたつて、當時の時代思想の概觀をすることによつて、少年子規の抱懷してゐた思想の必然性を理解するに便したい。

征韓論破裂によつて、結束して坂垣・後藤・副島・江藤等が愛國公黨を組織したのは、明治七年一月十二日夜の事で、越えて十八日民選議院設立の建白書を奉つた。それは彼等の中の或者が、薩長の專制勢力を打破しようといふ個的の意企も加つてゐたであらうが、實に指導的輿論の動きを看過す事は出來ない。久

しい間、階級の鎖に縛られ、專制的壓迫を受けて來た民衆が、俄かに明るい自由の世界につれ出され、外國の文物思想に接したこの時は、囚人が長い暗い牢獄の生活から放たれて、恍れ〳〵と日光を呼吸する者の出來た歡喜・驚異の情にも比せられようか。而して明治維新が急轉直下の勢で招來された事も、明治の文明そのものも、西洋との交渉事實、又西洋の文明を度外視して考へることは出來ない。封建幕府の舊文明を破壞して、中央集權の明治の新文明を建設したのは、半ば以上外國の賜であつたと言つてもよからう。明治十年頃までの政府の施設に見ても、政治・法律・軍事・教育・交通・財政其他どの方面の事情にも、西洋から模型をとらないものはない。勿論、慶喜が大政を奉還するの餘儀ない立場に立つたのは、日本人固有の精神、大義名分感が、幕府の衰頽に乘じて勃興し來つたことにも因るが、その形勢を促進させたのは、對外關係が俄かに困難になり進展して來た際に於てである。卽ち國學の刺戟による尊王論と西洋事情に通じ西洋學にめざめた一部識者の開國港と、かうしたものの微妙な綯れあひが、將に消えようとしてゐる幕府を一息に倒してしまつたのである。明治新政の方針は勿論復古といふ方面も精神的に考へられたでもあらうが、大體として、舊來の陋習を破り智識文物を廣く世界に求めるといふ、西歐文明に倣はうとする進步的態度から割り出されたものであつた。明治四五年頃を中心とした、各地に叛亂暴動が起つてゐるが、新政を厭ふもの、薩長土の朝政を專斷するのを憤るもの、廢藩置縣に反對するもの等、その原因は一ではないが、要するに頑固保守的なるものが、進步的の政治を喜ばず、之を誤解し乃至はこれに反對した結果である事に於て、殆んどその軌を一にしてゐる。旱魃の原因が電信機の設置にあると誤解し、某國縣下の農民が電信電線に損害を加へ、傷

廳を襲うたこと等は、今から見れば實に馬鹿らしいことではあるが、當時の世情の一面を雄辯に語つてゐる。かくの如き保守的のものも多かつたのではあるが、併し乍ら政府も民間も、大勢は早くも西洋文物の摸倣に傾いてゐる。而も現實的物質的方面の摸倣を主としてゐる。大變革の第一着手としては卑近な現實的方面からとり入れられる事は無理からぬことではあるが、わが國傳統の古い尊い文物を破壞して顧みなかつたやうな遺憾事も少くなかつた。

福澤諭吉が「世界國盡」や「西洋事情」を著したのは、明治二年であつて、外國思想の紹介宣傳は新聞紙の刊行と相俟つて、この頃から盛になりつつあつたのである。モンテスキューの「萬法精理」は九年に譯されてをり、ルソーの「民約論」は服部徳が十年に紹介した。この頃から自主獨立・自由・平等・權利等の觀念が徐々に我が國民の腦裡に浸み込んで來た。長く壓迫され、自由に翼を伸ばす事の出來なかつた人々は、人才登庸の道が開かれ、自由平等の叫が叫ばれるに相呼應して、立ちあがつて、最初政治界に驥足をのばさうと志したのは當然であつた。立憲政體を立てるといふ勅語を煥發させられたのは、八年四月十四日の事で、二十三年を期し國會開設をするといふ大詔が下つたのは、十四年十月十二日の事である。新聞や著書の刊行により、又實際運動によつて、遂にさういふ形勢を招致したのである。國會開設の請願は度々行はれ、特に板垣の率ゐる愛國社の全國代表者百名近くの者が、十三年三月相携へて上京した事などは、就中忘れる事の出來ないものである。中央政府に於ても皆その抑壓する事の出來難い形勢を認めたが、殊に大隈等は急進的な國會開設論を吐いた。板垣が自由黨を起したのも、この際で、全國遊說の途、岐阜で刺されたのは十五年

四月六日のことで、その時彼が叫んだといふ「板垣死すとも自由は死せず」との氣の利いた雄々しい標語が、如何に力強い感激を當時の青年の胸に波うたせたことであつたらう。中江兆民がルソーの説を奉じて一部の人の尊敬の的となつたのも、十年代の半ば頃からである。

かういふ社會情勢を少しくふりかへつて考へてみるならば、少年子規が政談演説をいたことに熱中し、得意であつたこと等に、單に年齢が少しく社會とか政治とかの、ぼんやりした意識に目ざめ、演説等をやつてみたがる恰好の時にあたつてゐたといふ位の事ばかりでなく、時代そのものの空氣を如實に反映してゐるものである。

第三章 青年時代

漢詩を作り、軍談を喜び、政論を演つた少年子規は、そのまま時世の姿を見せてゐるのであるが、この熱中し易い、血の氣の多い、愛すべき田舍少年子規は、遂に憧れの都へと飛び出してきたのである。「半生の喜悲」（「筆まかせ」二十一年の部）といふ短かい文の中に、思はずにこ／＼して平氣でゐられなかつた程嬉しかつた事が三度あつたと言つて、第一は叔父から東京へ來いと言ふ手紙が來た時、第二は常盤會の給費生になつた時、第三は豫備門入學の時をあげ、又最もいやなことで、思はず顏をしかめたことが二度あると言つて、第一、出京の際三津出帆の時、第二、豫備門で落第した時としてゐる。又明治二十八年從軍記者として出征と決した時、五百木飄亭に與へた書簡（子規言行錄所收）には「小生今迄にて最も嬉しきもの、初めて東京へ出發と定まりし時、初めて從軍と定まりし時の二度に候」（これと同意味のこと、小說「我が病」にも書かれてゐる）とある。最初に、思ひ通り上京出來る事になつて、躍り立つ喜びを感じ乍らも、母や妹の許を離れ、故鄕の山川に別れるとなると、さすがに頼りないやうな心持がして、豊中丸の出帆の汽笛に腸をしぼられる思ひをして佇立したであらうと想像される。この上京は、彼の憧憬の實現であつて、彼にとつて最初の大きなよろこびであつたと共に、彼の生涯に於ける劃期的の重大性を有するものと言はなければならない。この上京後の子規が、大學を退學する頃までの生活及び思想の變遷のあとを、この項に於て大體のべてみたいと思ふ。

子規言行錄の序に、子規の恩人として銘記すべき陸羯南（日本新聞主筆、後、社長）は、次のやうに書いてゐる。

明治十六年の夏のころと記憶して居るが、友人加藤拓川（今の白耳義國在勤特命全權公使恒忠氏）が佛蘭西へ往かうといふので、佛學練習の爲めに築地の天主教會堂に寄宿して居た、或日予の寓居に來て色々話した中に「此の頃國元から甥のヤツが突然やつて來たが、まだホンの小僧で何の目當も無く、何にしに來たのかと聞いたら、學問しに來たと云ふても、僕も近々往くのだし世話も監督も出來るわけも無し、いづれ同郷の人に頼んで往くのだやが、君の處へも往けと云つて置いたが、來たらよろしく逢つてくれ玉へ」との話もあつた、二三日たつとやつて來たのが十五六の少年で、着衣一枚に木綿の兵兒帶、いかにも田舍から出たての書生ッコであつたが、何處かに無頓着な樣子があつて、加藤の甥だと往けと云ひますから來ましたと云つて外に何も言はぬ、ハア加藤君から話がありました、其れは折々遊びにお出なさい、私の宅にも丁度アナタ位の書生が居ますからお引合せしませうと云つて予の甥を引合はした、そこで段々話す樣子を見ると、言葉のはし／＼に餘程大人びた所がある、相手になつて居る者は同じ位の年齡でも、傍から見ると丸で比較にならぬ、叔父の加藤といふ男も予よりは二つも若い男だが、學校に居る頃から才學は勝れて居て予よりは大人であつた。流石に加藤の甥だと此の時はや感心した、云々。

かういふ記錄もなか／＼興味がある。

すでに上京してゐた藤野氏を本郷の下宿に訪ねたり、「靈臺に寄せたり」、十日間程は加藤家に身を寄せてゐたが、いつまでもぶら／＼してはゐられぬので、日本橋濱町の久松邸内の書生小屋で、しばらく自炊生活を

した。同居人は二三人であつたが、いやな不淡泊の性根のきたないものばかり、而も(註一)「新囚が舊囚に對する如く」萬事指揮をうけねばならず、炊事の番がきて、生れて初めて飯をたき豆腐を買ひに走つたりしなければならなかつた事も、實につらかつたと追憶してゐる。一ヶ月程そこに辛棒してゐた後、赤坂區丹後町九十九番地の須田學舍に入り、そこに二ヶ月許りゐて、九月下旬には久松邸へ歸り、又一ヶ月位で、神田の親戚藤野漸方に移り、そこで、東京での最初の正月を迎へた。

須田學舍といふのは漢學塾で、從弟藤野古白が落ちついて勉強しないといふので、その指導役のやうな事を兼ねて、一しよに入つたものらしい。共立學校へ入學して英語の勉強をし、翌年七月、大學豫備門の入學試驗を受けて、菊池仙湖(謙二郎)と二人は及第した。その前六月初旬には藤野家の人と共に牛込區東五軒町二十番地に移つてゐる。夏、本郷の進文學舍へ通つて英語の勉強をしたりした。秋、神田へ移つた。猿樂町五番地の板垣といふ下宿屋であつたと推定される。ここで東京での第二回(明治十八年)の春を迎へた。この年、豫備門第一年の學年試驗に落第、夏、松山に歸省、再び出京して麹町區に居ること二三日、元の神田の下宿へかへつた。年末、(註二)下宿料停滯のため、大晦日は逃れて三並氏の下宿に至り、正月を迎へてゐる。十九年春、神田の下宿で、同宿の(註三)清水則遠が脚氣衝心で急逝し、色々奔走したりした。夏は麻布永坂上の久松邸に居り(藤野氏宅が久松邸内にあつたのだから、そこにもゐたものと思ふ)舊藩主久松定靖に供して日光方面へ旅行したりした。一ヶ月許りで又もとの神田に戻り、後、同區駿河台に轉じ、(註四)翌二十年四月に一ツ橋外の高等中學(豫備門改稱)の寄宿舍に入り、そこで新年を迎へた。二十一年の夏は向島須崎村(本所區)

長命寺内月香樓に假寓し、九月下旬には、本郷の常盤會寄宿舍にあり、ここで正月を迎へた。二十三年夏歸省、十月にには不忍池畔に寓し、十二月には歸郷、出京以來しばらくぶりで、郷里で正月を迎へた。常盤會寄宿舍を退いて、本郷區駒込追分三十番地に家を借りて移り住んだのは、二十四年十二月のことであるが、その年及び前年に、夏郷里ですごしてゐる。この二十四年の六月は、學年試驗を拋擲して、信濃・木曾方面を旅行して、歸郷したのであるが、この時の甲信紀行は「かけはしの記」と題して、翌二十五年五月廿七日から六月四日にわたり、「蝶子」の號で、新聞「日本」に寄稿、文壇的に進出する處女稿となつたものである。二十五年二月廿九日に下谷區上根岸八十八番地に八疊の間借をし、その人がうつつたので、十一月に母と妹を故郷から迎へることになつたのである。（同町八十二番地の、現在の子規庵の位置にうつつたのは、翌々年の廿七年二月一日のことである。）この年の學年試驗に落第したが、六月廿六日から「日本」新聞に「獺祭書屋俳話」を連載し始め、十月には「早稻田文學」に「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」を發表した。十二月から日本新聞社に入社、子規の學生時代はここに終局を告げ、實社會の人となると共に、對外的の俳句革新運動の第一歩を踏み出すこととなるのである。

（註一）　子規全集第十一卷、一〇九頁「自炊」の文參照。
（註二）　子規全集第十一卷、一九八頁「大三十日の借金始末」の文參照。
（註三）　子規全集第十一卷、二六三頁「清水則遠氏」の文及び當時の子規の書簡參照。
（註四）　子規全集第十二卷所載、「七草集」等參照。

以上は上京後の子規の外的生活の一部、特に轉宿の狀態等を一瞥したにとどまる（子規の書簡、又當時書いたものや追懷の文によつて知られる）が、この間に於ける彼の內部生活の發達變遷を主として、二三のべてみよう。和歌・俳句等のことは、後章にやや詳しくあとづけたいと思ふ。先づ彼の哲學的嗜好について一言しておかう。

「哲學の發足」（「筆まかせ」二十一年）の冒頭に、

余はある時何故に哲學に志せしや、又哲學思想は如何にして發達せしやと考ふるに漠として捕へ所なし。前に述べし如く幼時天の無限を論ぜしことゝ、物極吏なしと演說せしこととの二事あるを知るのみ。其後明治十六年夏東京に來りて三並氏と共に惡叔々を向島木母寺に訪ふ。時に叔は余等を一町許り隔りし閑靜なる百姓家に導き、四方山の話の末、叔は余等に向つて「墨を白紙にこぼせば紙は黑くなる、實にをかしきことなり。又男も女の着物を著け女のまけをゆへば女と少しも變ることなし。併し矢張男は男にて到底女といふべからず」云々と。余の之を聞きし時の喜びは如何なりしか。三年の學問も此一場の會話に如かずと思へり。然れども未だ哲學なる者を知らざるなり。

と述べ、

其後共立學校へ行き始めて莊子の講釋を聞き、こんな面白き本がまたとはあるまいと思ひていとうれしかりしが、此時にもまだ哲學なる者を知らざりしなり。其後何によりて哲學なる者あるを知りしか詳ならざれども、余が哲學を目的とし誰がすゝめても變ずまじと思ひこみたるは明治十八年春の事なりき。

とも語つてゐる。上京した當時はおぼろに、法律を勉強して大政治家となりたいといふ風にも考へてゐたら

しい。璧叔々が、たはむれに「汝は朝に在つては太政大臣となり野に在りては國會議長となるや」といふやうに笑ひ乍ら問はれるので、子規は半ば微笑しながら半ば眞面目に「然り」と答へた等と言ふ。子規の少年時の第一の趣味は詩文をつくることにあつた。けれども漢學先生は國家經綸といふやうな事を目指して、詩人・畫師等を蔑み、詩歌・繪畫等は一生の事業とするに足らないと考へる傾向があるが、かかる儒家的見地の影響と、當時の政治熱を反映して、自己の文學的趣味は高く評價出來ず、醫は大嫌ひなり、理科的方面も趣味が合はないといふわけで、而も上京するについては、何か目的をきめなければならぬ理由で、無理にも法律をやるといふやうに人に洩らしてゐたのだといふが、上京後しばらくして、分らずながらも、哲學をやらうといふやうに考へるに至つたのである。菊池謙二郎（二高校長や水戸中學校長で鳴らし、後代議士にもなつた）が、大學豫備門時代の子規を追憶してゐる文章の中に、

　負け嫌ひの彼は、大抵の同窓生を見下してゐたが、ある朝、顏を合せると突然「君、實に豪い男が我々の級にゐるよ」と心から敬服したやうにいふのであつた。正岡が兜を脱いだのは珍らしいことであると思つて、だん／＼聽いて見ると、「昨夜米山といふ男と始めて話をして見たが澤山本を讀んでゐて色々なことを知つてゐるのに驚かされた、將來哲學を專攻するさうだが、あんな男がゐてはとても競爭は出來ない」と讚嘆された。是が唯一の動機になつたわけでは勿論あるまいが、子規は大學に入つてから國文學を專攻することになつた。この米山といふのは漱石の「猫」の中に出て來る天然居士のことであるが、居士は天才肌の男で、子規とはまた異つた型の人であつたが、明晰な頭腦を有つてゐた。明晰綜合な點では子規よりも優つてゐたが、文才の方では子規の方が秀れてゐたやうに思へる。云々。「日本及日本人」

正岡子規號）

とあるが、これは米山保三郎のことで、この事件は、明治十九年秋のことである。（「筆まかせ」中の「悟り」といふ文にかかれてゐる。）さういふ競爭者がゐたから、哲學科志望を放擲したといふのは、理由とするには甚だ薄弱で、寧ろ全然問題にならない程の事であると思ふ。子規自身の語るところによれば、最初の哲學志望の頃は、詩歌が趣味で、哲學が目的であるといふやうに揚言してはゐたが、内心この二者の關係があればよいと思つてゐた。所が、二十二年頃、審美學といふものがあつて詩歌・書畫の如き美術を、哲學的に論議する事を知つて、喜んだと言つてゐる。何か審美學の書をと求めてやつたと見え、加藤叔父が送つて呉れた（註五）ハルトマンの書物を、獨逸語の出來る友の力をかりて、少し讀んでみたこともあるさうだが、面倒なので碌々みなかつたといふ。後、鷗外の「しがらみ草紙」（註六）に、ハルトマンの審美學を譯して出した時も、大いに期待して最初は讀んだと見えるが、やはりよく分らないので、やめたといふことである。

（註五）　子規言行錄序等に據れば、歸朝する高橋健三（自恃）に託したものらしい。（廿三年）

（註六）　柵草紙は、二十二年十月創刊、二十五年十月號（三十七號）より二十六年二月號（四十一號）にわたり鷗外の「審美論」が載つた。

大學へ入つてからのことであるが、

明治二十四年の春哲學の試驗があるので此時も非常に腦を痛めた。ブッセ先生の哲學總論であつたが余には其哲學が少しも分らない。一例をいふとサブスタンスのレアリテーは有るか無いかといふやうな事がいきなり書いてある。レア

リテーが何の事だか分らぬに有るか無いか分る答が無い。哲學といふ者はこんなに分らぬ者なら余は哲學なんかやりたく無いと思ふた。（墨汁一滴）

といふやうに、學としての哲學には、結局彼は入つてゆくことが不可能であつた。彼は元來士族の家に生れ、漢文學の薫化をうけたので、その點からみても理智的な理窟つぽい方面はあつたのである。且つ才があつたから、小理窟を巧く並べるやうな事も得意だつた。禪や老莊的思想には、後、惰入して行つたやうにもみえるた、組織的な哲學の門に入るべく、餘りにも詩文を作る趣味や小説を耽讀する方面が、已に根強く深く心に巣くひ過ぎてゐた。哲學書を精讀するといふやうなこともなく、一つは外國語を不得手としたこと等から、特に哲學志望とは、離れて歩むこととなつた。哲學といふべく餘りにも幼稚な非學問的な、未だ何らの組織化を經ない中に、その志望は變更されるやうな、はかないものであつた。けれども、詩歌等に遊ぶといふ方面と共に、物を深く考へ究めようとする、思索的・研究的精神が熾烈であつた一つのあらはれと見得ると思ふ。（やうやく空想を捨てて、物を考へようとする年齢時代に入つて、總理大臣等の空想を捨て哲學志望などと考へはじめたのである事も、まはそ考へねばならぬのではあるが。）彼が後年、文學・美術の批評論議に於て、その實作よりも、文學史的にも實質的にも、却つて長所を示した事を考へるならば、彼が二十歳前後に於て哲學の嗜好に導きつけられた事實は、相當の意義が認められねばならない。彼は哲學者にはならなかつたが、當時哲學を求めた理智的精神に、少しく面を更へて、和歌・俳句に於ける堂々たる立論となつてあらはれたといふべきである。

上京後、彼は常盤會寄宿舍等に於て度々演說の稽古をしたりした。鄕里にゐた時熱中した政談演說の眞似のやうなものから、も少し哲學的乃至文學的内容を加味したものに變つてはゐるが。詩作も相變らず續けたが、この時期には俳句が加はり、遂に頭の中が俳句の事で埋められるといふ程熱心になつてくるのである。

余は此頃井林氏と共に寄席に遊ぶことしげく、寄席は白梅亭か立花亭を常とす。然れども懷中の黄衣公子意にまかせざること多ければ、或は松木氏のもとに至り或は豐島氏の許に到り、多少を借りて來りて之をイラツシヤイといふ門口に投ずること屢々なれども、未だ曾て後に其人に返濟したることなし。必ずうたてき人やとうとまれけん。又人をして余等の道樂心を滿足せしむることは度々出來ることにあらざれば、時として井林氏は著物を質に置き其金にて落語家の一笑を買ふたることもありたり。寄席につとめたりといふべし。(十九年「筆まかせ」)

とも言つてゐるやうに、寄席をきくこと等も、少年時の趣味習慣を繼續してゐるが、軍談をよろこぶといふやうな子供らしさから卒業して、江戸趣味の全面に興味を覺えて來たらうといふことは、言ひ得る。

さて次に彼の上京後から廿五年頃までの小說趣味の變遷を述べようと思ふが、それによつても、彼の思想の成長變遷を知ると共に、その時代の、又はその時代に息づいてゐた青年の、思想・趣味變遷の普遍的範圍を描くことにも役立つものがあらうと思ふ。

小說も相變らず耽讀してゐたが、故鄕にゐた頃の少年時代の嗜好とは必然的に異り變化してきた。彼自ら書いてゐる記錄にも、多少の異同はあるが、それらを取捨して大體をあとづけよう。

上京後始めて「梅暦」を讀み、妙味は十分わからないまでも、馬琴等の著作の味とは違つて珍らしく感じた。併し深入りするには、彼は餘りにまだ子供だつた。且つ小説を讀むのも忘れ、お茶の水の圖書館へ行つて、「梅墩詩抄」を讀むに餘念のない日を送るといふ狀態でもあつたのである。又野球に凝つた時代には、一時感動し、比較的高價のこの本を、友人と金を出しあつて買ひ求めたりしておきながら讀んだ。併しそのあとにつゞくものも出なかつたので、一年餘も遠ざかつてゐた「梅暦」を手にして、今度は大層面白く思へるやうになり、遂に人情本に心醉して一ヶ月壹圓の借本代を拂ふ事もあるほど耽讀したといふ。丁度その頃「書生氣質」が出はじめたのである。田舍にゐた頃も、宇喜世新聞で伊藤專三等の小説は讀んだ事はあつても、明治の新しい小説といふものは、全然見てゐない、といふより別に新しいものは出なかつたと言つてよい時代だつたのである。だから、「書生氣質」が、彼にとつて一つの驚異に價したことは想像される。「妹と背鏡」の出た時も「書生氣質」よりも一段上であると思ひ込み、喜んださうである。けれども作總體に對して心醉した時期も長いことはなかつた。英語も少しは分るやうになり且つその趣向の模倣が續々行はれるやうになつては、はじめのやうに面白いとはおもはぬやうになつた。「浮雲」などは珍しかつたらう。「書生氣質」よりは、藝術的にすぐれてゐることは彼も考へたらうと思はれる。併し「浮雲」の言文一致は趣向には大分ひきつけられたが、續々といやな言文一致の流行にはこりごりしたのださうだ。さうして紅葉の作を、偶然「讀賣」でよみ、殊によりのよい時に惚れ込んで、一時紅葉贔屓になつたといふのである。こんなところには、彼の性格・教養が、全然新しきにのみ向ふことを拒み、却つて古いものに還らさせる傾向のあつた事を、

明かにみせてゐる。彼の寫生文及び寫生文の主張は、明治文章史上逸すべからざるもので、また晩年の隨筆中の言文一致脈等は典型的で、摸倣者を出してゐると思はれるが、彼は死ぬまで文章體をも併用した。

　余は矢張言文一致を餘り好まぬ者なり。固より精細に寫すを得るは爭ふべからざる利なれど、冗長に流れ無味に失するは爭ふべからざるの弊なり。且つ調子の如きも小説に在ては時として最必要なる者なり。余はあながちに言文一致を嫌ふにはあらず。されど若し此流を用ゐんとならば、其文章を作るの目的と趣向によつて定めざるべからず。何もかも言文一致ならざるべからずといふは左袒し難し。（明治二十二年の文―子規全集十一卷參照。）

等とあるが、文體は何れをとるべきや、描寫の精粗はいかなるべきか等について、その頃から彼は小説等を讀みながらも考へてゐたのである。

　少年時代には大體馬琴、上京して、春廼屋・春水・篁村といふやうた小説嗜好の變化を、三四年間の中に經過してゐるが、文章も馬琴・春廼屋・饗庭の流儀に段々變つてゐると自ら言つてゐる。露伴のものを愛讀するやうになつたのは、廿三四年の頃であらう。新著百種の第五號（註七）として「風流佛縁起」の出版されたのは、二十二年九月のことであるが、彼がそれを讀んだのは出版後一年位をすぎてからと思はれる。はじめ友人がそれをみてゐて、その難解のこと、面白いことを説き、子規にも讀めとすゝめたさうであるが、大したものでもなからうといふ氣で、見ようともしなかつた。が、人に解し難いやうな文章を書くのも尋常ではあるまいと始終氣になつてゐたので、遂に讀むやうになつたのだと自白してゐる。讀んでみると、文章は難解であるが、非常に高尚で、一から十まで感心してしまつた。

幸なるかな獨り露伴なる一詩人（小說家といひたくばそれにても宜し）ある破天荒の筆法を以て優美と宏壯とを兼ねたる大著述をなせり（風流佛を最とす其他亦能く兩方を有す他人には決して無之　彼れの著述に有二分子を否有するの多きは明治第一なり否日本第一なり否世界第一同人の著作には缺點あるべし優美と宏壯の二分子を合むことに於ては世界第一の稱敢て諂諛に非ず云々（二十四年十二月三十一日、松山の虚子宛書簡）

と言ふに至つては、如何に當時、露伴の作に傾倒してゐたかは察せられる。

この頃彼は本郷追分の一家に一人起臥し、小說「月の都」を書いてゐた。

（前略）母上樣の事などいはれて見れば私も實に千萬無量の感情を惹起仕候故終に決心を致し假哥に御座候（中略）それは例の著述に御座候兼てより思はざるにはあらねば少々は常に材料を集め候へどもそれとても萬分の一にすぎず今急に來客謝絕之上ニテ此冬期休業中にやつてしまはんとしては書物を讀む閑も無御座（中略）よかれあしかれ名譽を棒にふつて仕上げる積りに致し候初陣の事故功名の程は固より覺束なく候へども多少の金にならぬことも有之間敷ト存候。

廿四年十二月二十五日、大原恒德宛書簡）

これによつてみるも、一つは生計のため出版し、金儲をし、且つ作家としての名乘りをあげようと空想してゐたやうである。この「月の都」は翌廿五年二月頃かきあげられたらしく、二十七年二月「小日本」の編輯を子規が擔任するやうになり、そこに發表された。廿三四年頃からは小說を書かうとする心を持つてゐたらしい。題をきめ小說めいたものを書き、友人同志の間で、みせあひ批評し合つたりしてゐた事もある。

この「月の都」の草稿を懷にして、二十五年二月下旬には幸田露伴を訪問した。それは要するに批評を求

め、推薦して貰ふ意志もあつてのことであつたらう。陸羯南に之をみせ、高橋健三の手から長谷川二葉亭あたりの手に渡つてゐる（二十五年三月）が、出版の意圖のあつた事は明瞭である（註八）。露作は「覇氣強し」と評したといふことが、子規の翠梧桐宛の手紙の中にみえるが、露作を訪問した時の詳しい様子は分らない。露作からは、小説の骨をうけとつたと喜んでゐるが、それ以上自らゆくべき俳句のみちを、氏によつて暗示される所があつた如くで、小説よりも詩歌方面に進むのが自己に適してゐると考へて來たらしい。四月頃までには度々露作宅を訪問し、かなり親しく接近してゐたらしい。俳諧の附合を興行したり、二人の俳句を一しよに國會新聞に出したりしてゐる。その後露作を屢〻訪問するやうなことはなかつたやうだが、しかし露作崇拜は、ずつと後まで持ちつづけたのである。

小説の趣向は猥褻と限り小説の文章は柔弱と定まりたる眞最中に出で之を翻したるは幸田露作なり。露作の小説出でて始めて小説にも高尙なる觀念なかる可らざる事、遒勁なる文字なかる可らざる事を世間に吹聽したるなり。是れ今日迄の小説界最後の變化にして此後復た一の大變化を見ざるなり。（明治二十六年、文界八つあたり）

樋口一葉の「たけくらべ」（註九）を稱揚してゐるなども、もとよりその所と思はれる。「月の都」が「風流佛」の影響をうけてゐることは、「風流佛」の作者に子規自身ことわつてゐる所で、子規の小説に於ける露作の影響は見逃し能はざるものである。硯友社派のものなどは餘り問題としなかつたらしく、後年、柳浪の「今戸心中」（註一〇）を評して、いいにはいいが、卑俗淫猥だなどと言つてゐるのにも、彼の好みがみえる。質はちがふが、純眞の戀といふやうなことを尙び、元祿文學等は不自然た肉的戀愛の描寫として排斥した北村透谷の藝術觀

等を思ひ出させる一味の類似がある。子規に言はせると、同級生等に我楽多文庫などいふ極めて幼稚な雑誌に才筆をふるつてゐたものがあつたため、一面羨み一面軽蔑してゐたから、紅葉の「色懺悔」も、さういふ考から、読まうともしなかつたが、是非読めと言つて本を貸してくれる友があつて、「色懺悔」はよんだ、併し読んでも感心しない、これ位なら俺でもかける、否もう少しおもしろく書けると思つたと云ふのである。要するに趣味に於て、子規は硯友社連には合はぬ所があつたのである。

国民の友に書目十種といふことをはじめ、諸名家に愛読の書十種を書かしめたり。余答曰く、実は是といふ程のものもなけれど、中にて非常に愛読せし者をあぐれば八犬伝（始めの方）梅暦（初めの二回）巴の雪、南總詩鈔（今はさまでにもなし）韻府用、院本（特に仙台萩御殿場、阿波鳴門順礼歌の段）俳諧七部集、長恨歌、琵琶行、唐宋八家、荘子、韓退之、春雨楼詩鈔、謡曲（殊に隅田川、俊寛、蝉丸等）等なり。（明治二十二年）

とあるのを見ると、上京後の読書、露伴ものを愛読する時頃までの、読書・趣味の傾向がよく分り、小説に対する嗜好も、略ぼ要約されてゐる観がある。詳しくここに記す暇もないのは遺憾であるが、「月の都」を書いた当時は小説家として立たうとも考へてゐたらしいが、露伴等の意見をきいて、その方の志望は全く断念し、この頃から、益々熱心の度を加へつつあつた俳句方面に、その全力を傾注するに至つたのである。

（註七）「筆まかせ」二十三年の部に、「風流仏」に傾倒した形迹が伺はれる。（全集第十一巻四十六頁参照）

（註八）三十五年七月の「ホトトギス」に「天王寺畔の蝸牛廬」の文をかいて、十年前の露伴との交渉を書き始めたが、子規の病没によつて、それは継続はみられなくなつたが、これは子規の小説嗜好を窺ふに重要な文献である。

（註九）「たけくらべ」は二十九年四月「文藝倶樂部」發表の一葉の代表作。隨筆「松蘿玉液」五月四日發表のところに「汚穢山の如き中より一もとの花を摘み來りて清香を南風に散ずれば人皆其香に醉ふて泥の如し。云々」と「たけくらべ」を讃してゐる。

（註一〇）「今戸心中」は二十九年七月「文藝倶樂部」發表の力作。子規は八月二十日發行の日本人に、「今戸心中は近來出色の小說とは衆口一齊唱ふる所吾も面白しと思へり。唯全篇野卑にして寄席の情話を聞くが如き心地す。云々」とかいた。

次に學生としての子規について一言してみたい。

上京して最初赤坂の漢學塾へ入り、轉じて共立學校に入つた。共立學校では高橋是清（現大藏大臣）からパーレーの萬國史を習つた位で、英語の力が不足だつたが、場慣れのためにといふ位の意味で、豫備門の入學試驗を受けた。所が案の如く、英語には參つて、隣人から話されて「法官」を「幇間」と違へて譯したやうな滑稽を演じたさうだが、とにかく僥倖にも入學出來たのであつた。で、その夏に、進文學舍へ英語の勉強に通つた。そこでは坪內逍遙さんからユニオン讀本の第四を習つたが、落語家の話のやうで講義は面白いので、夢中できいてゐたが、初步の自分等にとつては、英語の勉強にはたいして役立たなかつたと子規自ら言つてゐる。（後、夏目漱石と二人、逍遙を訪問し、その結果早稻田文學に俳壇が設けられるに至つた事情は、日本及日本人の正岡子規號に、赤木格堂が語つてゐる。）英語は力が足らぬので、豫備門入學後少しは勉強したといふが、それも「月に一度位徹夜して勉強するので每日の下讀などは殆どして往かない。」時々良心にせ

められて、洋紙の小片に英語の單語を一つ一つ書いて暗記するやうな事をやつたりしたといふが、月に一度位思ひ出してやるといふ程度で、その時勉強家ではなかつた。何かの學科の試驗の時、隣の席にゐた男は、英語ですら〳〵答案を書いてゐるので驚いたが、それは間もなく文壇に名を著はした山田美妙齋であつたといふ。彼は英語を不得手としたが、一番嫌ひなのは數學で、入學して第一年の學年試驗には幾何で落第をくつてしまつた。この時の數學の先生は隈本有尙で、數學の時間に英語以外は使はぬことにしてゐたので、數學・英語兩方面から攻められ、英語で落第したと言つてもよいやうなわけでもあつたといふ。が、落第してからは、同じところを二度やらせられるので、幾何學の初歩には非常に趣味を感ずるやうになり、數學は不得手で無智識ではあるが、試驗さへなかつたら、その理窟をきくことは面白いであらうと考へるやうになつたと言つてゐる。幾何で落第した次の學年には、日本語ばかり使ふ先生が敎へる事になつて、今度は二度習ふのだから、幾何學の用語位は英語で自由にやれるやうになつてゐたので、失望したなどと言つてゐる。故鄕にゐた時には、誰も恥ぢてカンニングなどする學生はなかつたが、上京後は周圍の學生が盛にやるので、子規も、豫備門へ入つた頃は盛にやつたが、十八年の暮頃から感ずる所があつて、斷然カンニングはやらなくなつたといふ。當時書き記した文にも、カンニングなどをしてまで學校の成績を上げようとする奴があるが、言語同斷である。一番になつたからとて一番の眞價があるわけではないと言つて、韓退之が三度進士の試驗に落第したといふやうな例まで擧げて、意氣込んでゐる。彼は偉くなつたから、こんなつまらぬ平凡な言葉にも、ある權威があるやうに感じられるが、實に模範學生といふには、かなり縁遠いものがあつたのである。一學校

から歸つて每日何をしてゐるかといふと友と雜談するか春水の人情本でも讀んで居た。」といふのは、彼の眞實な告白でもあつたらう。當時の學友菊池謙二郎が「學課は常に抛つて置いて試驗前になるとやりだす。それで相當の成績を得たのであつた。學課の中で最も嫌ひなのは語學であつて、語學ほど無趣味なものは無いと言つてゐた、それに數學も好きな方ではなかつた。學課の方は不勉强であつたが絕えず本は讀んでゐた、文章も筆まめに書いてゐた。」と言つてゐるのは、要領を盡してゐる。教室に於ける模範學生ではなかつた、學校の秀才ではなかつたが、主として自己の趣味の赴くままに、學校外に於て、普通人以上の勉强をして、自己のものを着々きづいてはゐたのである。かういふわけで、大學の國文科に入學して、卒業する一年前といふ所まで漕ぎつけたが、再び落第したので、遂に學校を斷念して退學したのである。

明治二十五年の學年試驗には落第した。リース先生の歷史で落第しただらうといふ推測であつた。落第もする筈さ、余は少しも歷史の講義聽きに往かぬ、聽きに往ても獨逸人の英語少しも分らぬ、おまけに余は歷史を少しも知らぬ、其上に試驗にはノート以外の事が出たといふのだから落第せずには居られぬ。これぎり余は學校をやめてしまふた。これが試驗のしまひの落第のしまひだ。

これは「墨汁一滴」に、「日本人」に「試驗」といふ問題が出て居たので端なく試驗といふ極めて不愉快な事件を思ひ起した。」と言つて、長々と追憶をものしてゐる所に書かれてゐる一節であるが、彼がいつも試驗に弱らせられてゐた、なまけ學生であつたことが、多少の誇張を以て書かれてゐるのである。彼は最初の喀血以後特に身體のことを考慮した點もあるやうであるが、大學へ進む頃からは、益々缺席も多く、自分の好み

のままの勉强をのみしてゐたやうである。明治二十五年に書いたと思はれる文章に、

菊池壽人學校を缺席するを得ず

菊地壽人、正岡處之助共に帝國大學にありて國文學を修む。而して二人の外更に本科生あるなし、處之助常く缺席することを以て全校に鳴る。蓋し其出席三日に一日、四日に一日位にして、しかも一日の課業中は之を續く。故に壽人時處之助の缺席に關れ、若し其出席することあれば、怪んで奇と呼ぶ。處之助一日學校に登る。壽人に語りて曰く、風雨雨雪も君必ず登校す。僕等其勉勵に驚かざるを得ず。壽人勃然として曰く、僕亦時として缺席を欲せざるに非ず。然れども我科の學生僅かに二人、少くとも一人は出席せざるべからず。而して君常に缺席す。是れ僕の常に出席せざるべからざる所以なりと。處之助笑ふて曰く、君も亦然るか、吾の言く〳〵。僕今より勉强出席する所あらんのみと。而して其年の試驗に處之助落第す。壽人終に一人となる。

とある。この彼が學生時代の最後の試驗の際は、俳句に熱中してゐたのである。試驗勉强のため身の周りをとりかたづけ、俳書等をしまひ込み、机の上にはノートばかりを置き、ノートひらいて一枚も讀まぬ中に、俳句がのこのこと浮んで來、一句又一句と面白いやうに出來るので、試驗の事等は忘れてしまひ、さうして書く物はその邊に出してないので、ランプの笠に書き付けてしまふといふ挿話があつたと自ら回想してゐる。

彼は生れつき聰明にはあつたらうが、それは勉强努力によつて、僅かに自己の才を發揮したといふ種類の人である。「筆まかせ」二十一年の項に、「點數表」といふ文を書き、表を出してゐる。これは「寄宿舍にある同級生が互に點をつけて投票したる者を平均せし結果」とある。容色・性質・色氣・食意・腕力・學

耐・勉強・才氣の八項目で、二十二人加はつてゐる。才氣は子規が第一で 82.0 勉強は十一番 72.5 である。當時の子規が、才子として同窓に推されてゐた事を知ることが出來る。菊池謙二郎が「子規は才子だつただ、世才よりも學才の方を多分に有つてゐたやうだ。やれば何でも出來た男である。」と追想してゐるのも、同感される。併しながら當時の勉強にも、到底常人は眞似られぬ底のものがあつたと思ふ。學校の學科の勉強では實にこの 72.5 といふ勉強以下だつたらうが、總量的にみたならば、やはり、同窓中の一二に推さなければならなかつたに違ひない。

最後に、當時の彼の健康について一言しておきたい。學生時代及びその後の數年はまだ比較的身體も丈夫であつたとはいふものの、既に學生時代喀血をした子規である。隨分病弱の部類なのである。七年間程の病褥生活に惱まされつづけて死んで行つた彼の事を思ふと、子規と病氣は離しては考へられない。ここには學生の頃の子規の身體がどの程度の健康を保つてゐたか、どれ程に病に惱まされてゐたかといふやうな事を書いてみたい。明治二十二年（子規二十三歲）の五月九日夜最初の喀血があつて、一週間も續けて毎夜一回づつ五句位の喀血があつたといふ。その時の事は、同年九月上旬に書いた「喀血始末」といふ文に詳しい。この文及びその他二三の文章・書簡等を主たる材料として記すのである。

子規は生れ落ちるとから餘り健康ではなかつたらしい。顔色の勝れぬ所から青瓢簞といふ綽名を附けられ又よく泣くので泣き虫等と言はれたさうである。胃が惡いためか、子供の頃から、早朝に起きると、胸がわ

るく、胃液等を吐く事は屢々だつたといふし、學校の時間休みに鬼事をやる位で、中學時代にも、家の中で所謂五友と一しよに撃劍の稽古をして遊んだこと位で、運動好きといふではなかつた。上京後特に明治二十年頃からはベースボールに熱中したことは、有名である。學生時代の隨筆「筆まかせ」中にも、所々に野球の事はかかれてをり、「松蘿玉液」中にも述べられてゐる。「筆まかせ」に書いてある所によると、常盤會寄宿舍では、子規や勝田主計等が野球を奨勵し、少し遅れて入舍した竹村鍛が之に加はり、二十二年末頃には二十人位の仲間が出來、上野公園博物館横の空地で、試合をやつたこと等も數回あつたといふ。「演說」といふ題の文に、舍生連中が得意の題をかかげて演說すると假定して、想像的に演題をかかげると、次のやうだと言つてあげてゐるが、その中に「ベース、ボールの玄論　正岡君」とかいてゐる。又「常盤の蕾くらべ」といふ題の、おどけ「番附」には、西之方前頭の末席に「ボール　正岡」とかいてゐる等、野球が子規の好んだ唯一のもので、而も野球狂といふに近い狀態だつたやうである。廿三年の書簡に野球とか能球等の號を署してゐるの等もある。喀血後も少しよいと球を手に取るやうな事が珍しくなかつた。喀血後夏休みに故郷に歸つてゐた時も、野球をしたこともあるといふが、喀血後の身體に對してはやや無謀な過激なやり方であつたと言はねばならぬ。彼は十三の時(註一一)擬似コレラにかかつた外、重病はしなかつたが、生來虛弱なのであつた。而も身體に無理なことをした點は多かつた。勉強等も規則的に學科の豫習復習をするといふやうなわけでなく、興が湧くと身體のこと等は考へないで夜を徹するやうなことも珍しくなく、學科は試驗勉强ですますといふやうなわけで、運動についても、勉强についても、同樣無理をした點は否まれない。

　上京後、煎餅とか燒芋とか鍋燒饂飩とか柿とか、買ひ喰ひを矢鱈にしたので胃を悪くしたと言つてゐるが、胃腸は普通人以上に强健で、殆んど歩かれないやうになつてからも七年もの長い間、病床に頑張つてゐられたのは、一つは、そのためだつた位であるから、決して買喰位のこと許りが主なる病氣の原因をなしたとは思はれない。それにしても、間食をし小說を耽讀して下宿にごろ／＼してゐるやうなこともあつたのであるから、病氣は一つには自ら招いた禍だつたともいへよう。しかし誰か肺病にかかることを豫知し得よう。後で、彼自身想ひあたることとして、子供の時から大きな聲が出なかつたこと、三十分も演說をしたりすると聲が涸れてしやべれなくなつた事、少し餘計に走ると苦しかつた事等は、肺が弱かつたしるしであつたらうと書いてゐる。又喀血の二年程前から痰が出るのが常で、風邪を引くことは度々だつたとも言つてゐる。咽喉から血が出るのは度々であつたらしく、二十一年夏休みに鎌倉に行つた時なども、道で一塊の血を續けざまに二度吐いたといふ。「果して咽喉なりしか何處なりしか保證の限りにあらず。」と記してゐるが、或はこの時が最初の喀血だつたのではないかともおもはれる。廿一年の九月頃から神經衰弱らしい病症で困つたらしい。ともかく二十二年五月の喀血は疑ふ餘地が無い。この年四月初、常州へ行つた時、那珂川の舟中で寒さにふるへた事があつたが、歸京後數日腹痛に伴つて戰慄を感ずることが五分間位一夜に二度もあつたが、それも近因たらうとかいてゐる。この最初の喀血以後幾分養生し、用心はしたが、無理をして試驗をすまし歸國したので、故鄕へ歸つてからも痰に血が混つて出たりした。この時は慢性氣管支炎と診斷された。例の喀血の際は、急性肺炎の診斷を受けたのであつた。病氣の當座は常よりも食事等にも注意し、西洋料理などを

食ひ、故郷に歸つてからも、牛乳・鶏卵・鶏肉・ソップ等をやつたといふから、喰ひしん坊の子規は、この點ではやや滿足したらう。それも長くは經濟上の事情が許さなかつた。病氣にとつては貧乏が一番いけない、貧乏であつたから結局病氣にもなつたのだと彼は少し憤慨して述べてゐる。彼は、食物が身體を健康にするばかりでなく、うまいものを食べてゐれば、いい智慧も出るし、いい文章もかけるといふやうな事をよく言つてゐるが、彼の御馳走論はホトトギスの消息に發表した事もあり〔註一三〕、知人の間では有名だつたものである。彼の作品から食物に關する和歌や俳句を拾つたら、かなり多い事であらう。

〔註一二〕　子規全集第十五卷（書簡集）十頁、安部國手宛の書簡は、この身體回復お禮手紙で、子規書簡の最初のものである。（それは「ホトトギス」の「子規遺墨集」（卅五年十二月）で最初に紹介されたものである。）

〔註一三〕　明治卅二年十二月ホトトギス消息。（全集第九卷三四〇頁參照。）

餘談はさておき、彼にとつては十分養生をし、營養に富んだうまいものを不自由なく食膳にのぼす等は事情が許さなかつたであらう。このことは彼の不滿に同感し、悲しむのであるが、當然出來得る養生をおろそかにし、無理をしたことのなかつた事も認めないわけにはゆかない。一例をあげると、この二十二年九月九日夜所謂最初の喀血があつた翌日、學校へ行くつもりであつたが、剛案して聞にあはないので醫者の所へ行つて診察して貰ふと醫者といひ、喀血から須くたと注意された。然るに子規は、午後九時までそこにゐて、ある集會に出掛けた。その夜十一時頃喀血したのにもかかはらず、興に任せて朝の一時頃まで時鳥の句を四五十も吐くといふやうな調子であつた。（「子規」の號は、この時以來である。）これらの事は、無理で、身のいたは

り方が足らなかつたと言ふ詐はない。確かに彼は不注意な無茶苦茶の點もないではなかつた。併し私は今それを非難しようとしてゐるのではない。むしろ普通でない無茶をして、病氣等を征服して、志す所にだん〴〵進んだのを、常人に出來ない偉いことと信じて書いてゐるのである。この年喀血後書いたと思はれる「多病才子」といふ文は、少し誇張した點はあらうが、彼の當時の身體の容態を知るには好い參考ともならうとおもふ。左に全文を引いて置く。

俗にいふ多病とは病身の意味にて、病む時の多きをいふなるべし。余は俗にいふ多病の上に、字義通りの多病をかねたり。即ち病氣の種類の多きことなり。今身體の上部より擧げんに、神經質の瘠せて腦のわるきは當り前にて、時々は眩暈を起し、又は頭蓋骨のさけんとする心地することも少なからず。第二に眼は血膜炎にて下瞼に腫物を生ずること絶えず。(併し眼力は非常に強く書生間には珍しき程なり)齒は堅固ならず、常に病む程にはあらねど、多少動搖を感ずるが如きは屢々なり。第四、肺はいふまでもなくよろしからず、殊に左方をよろしからずとなす。此春學校にて測りし時は三百二十リツトルの肺量ありしが、今は其半分位なるべし。第五、胃のわるきこと書生の通病、日本人の通病なる上に一層のはげしきを加へ、食後直ちに動けば嘔吐すること妙なり。第六、腸も面白からず。第七、肛門不都合にして糞は常に秘結し、爲に脱肛するを常とす。只々全體の上にて病氣なきは足のみ。(脚氣、リウマチスの如き病なし) されどもと貧血病なれば冬季は足指の冷却すること氷よりも甚し。才子多病といふ語あり。若し多病は才子なりといふ反對(コンバース)の眞なることを許さば、世の中に我程の者は多からざるべし。阿々。

人並より弱かつた子規が、この學生時代の喀血を境として一層病弱になつて行つたことは申すまでもない。

けれども書簡集の二十三年の部には、これといふ病氣のあつたらしいしらせは見えない。たゞ、例の「筆まかせ」に、四月一日上野美術展覽會及び第三回內國勸業博覽會を觀た夜、嘔吐十數度あつて眠れず、翌日の成田地方への旅行を中止「四月はじめより二十日間許り下痢やまず」等と記されてゐる位である。廿四年には病氣を訴へた手紙が二三ある。四月六日附故鄕の大原叔父宛の手紙の中に「私も先月末頃腦病(詩魔病の類)に罹り學科も何も手につかず候故十日の閑を偸んで(尤學校は大方休み也)房總地方へ行脚と出掛申候菅笠に日を避け簑に雨を凌ぎて旅行致候處意外に興多く去る二日歸京仕候ひしが病氣も大分宜敷樣に處申候」とある。この小旅行の後、多少身體の具合は惡かつたらしく、その二十八日附、同叔父への手紙には、十日程前から身體の具合がわるく、又牛乳を飲んだり卵を食つたりする所謂養生(一ヶ月程經費節減の目的でやめてゐた)を始めたが、色々考へると、身體のためには家を持つ事が是非必要とおもふが、お考へを聞かして貰ひたい、經費抔言つてゐる場合でも無いやうな氣がするなどと訴へてゐる。さういふ事情もあつて、十二月には駒込追分に家を借りて出た。　病氣と申てさしたる事もなく寢る樣な事ハもとより少しも無御座候得共腦のわるき時ハ(腦病頭痛にあらず)狂に近きことあり又衰弱の時は晝夜の別なくたゞねむたく寢ることとも御座候又子規病に關しては先日一寸痰中に血ノ一點ヲ見ツケ候コト有之候(中略)其後つゞきて出る譯にも無之故懸念も致さず只其積りにて少し用心致居候」(四月廿八日)とある等で、ほゞ想像される。學校をやめた事も多少は、この病弱に關係してゐるのである。

第四章　壯年時代

學生時代をきりあげて間もなく、彼は新聞記者生活に入つて徐々に俳句改革の實行にとり掛つた。一度咯血をした彼の健康は、普通人のやうな健康さを保つてゐる事は出來なかつたけれど、二十八年日清戰役に從軍記者となつて、金州の方まで行き、歸國の船中で咯血をし神戸病院のベツトに瀕死の身體を橫たへる以前は、致命的の病患に惱まされるやうな事もなく過したのである。神戸病院を退院後、須磨や故鄕に身體を養つて上京した。その上京の途中、腰部に痛みを覺えたが、これが上京後の彼の身體の自由を奪ふまで昂じた。二十八年といふ年は、子規にとつては忘れられぬ年であつた。私は學校退學後の子規の身邊について少し語らうと思ふが、まだ比較的健康だつた廿八年の前半までを健康時代とし、其後を病褥時代と便宜上區分して述べようとおもふ。

第一節　健康時代

小生の落第を喜ぶもの廣き天下に只貴兄一人矣（廿五年七月二日、五百木良三宛書簡）

とある。子規は、この年大學二年の學年試驗に落第をしたのである。この落第は彼の退校の直接原因である。

小生辭表の一件は大方御存と存候が今般いよいよ落着致しさうにて小生の願の通りに相成候左すれば今後は如何なる職業にありつくやも難計候（中略）小生の學友抔は頻りに卒業をすゝめ居候それも尤に候（二十五年十月四日、高濱

清苑書簡）

とあるが、彼の友達や親類は殆んど皆退學には反對であつたらしいが、遂に我意を徹してやめてしまつた。學校を廢めて唯居て食つてゆけるといふ身分ではなかつたから、色々生活のため奔走したであらう。その結果新聞社に入ることになつたのである。彼はこの退學を非常に後悔してゐるやうなこともなかつたさうである。活計上は餘り惠まれない方であつたけれども、自分の好きな道にすすめ、名聲欲は相當滿たす事が出來たのであるから、自分の歩いてきた路を悔恨の念を以て思ひ起すやうな事は勘かつたやうであるが、併し時には、この時の事を少し早まつたやり方であつたと思つたりする事もあつたのではないかと思ふ。高濱虛子が高等中學を半途退學しようとした時、學問上・創作上、退學の不可を論じ、特に經濟上の打擊をうけることの大きいことを說き、飜意を勸めてゐるが、子規自身の苦い體驗を語つてゐるものの如く思はれる。而して大學を廢めた事は後悔しないが、高等中學を卒業したことは非常に愉快を感じてゐるといふ意味のことを言つてゐる。その感情を僞だとは思はぬが、一種の矛盾した思想感情である。それにともかく、どういふ心持で退學を決行したのであつたか。

俳句には熱心で、廿四年秋は俳句分類に志してゐる。當時井風や飄亭は入營してゐたので、松山の碧梧桐や虛子等と一番勵み合つてゐた。廿五年春は鳴雪が本氣に俳句を作り始めるし、正月・例の歲末十二ヶ月を最初として、何々十二ヶ月といふものを子規も多く作つた。「小生去月中より十二ヶ月といふことを發明しそれ故毎日十二句宛吐出し申候」といふやうな消息を屢々寄せられた。この年五月に、「日本」新聞へ始めて園

した「かけはしの記」といふ前年木曾旅行をした時の文等には俳句十五六を交へてゐる。六月から「日本」に俳句も投稿してゐる。内的に俳句にひきつけられると同時に、少しづつ外部に向つて發表され試驗される機會を得て來たので、自信めいたものもつきつつあつたのであらう。學課は面白くない。學校へも餘り出ない。成績は思はしくない。それで猶更學校は好ましくないといふやうになつて行く。そんな時俳句が面白く又相當やれるといふ自信も出來てみれば、落第してもう一度同じ學科をやつて、二年後まで嫌な事を我慢して卒業するよりも、一層きれいさつぱり退めて、俳句の研究と作に自由に身を入れようと考へるのも無理ではない。健康狀態や經濟問題も多少退校決行に關係はあらう。即ち神經衰弱めいた故障のために試驗を強ひて受ける事等が苦痛であつたやうな事情や、何度も落第をしてまで何時迄くつついてゐても仕方が無い、早く自活する道を講じたければといふやうな考も萌してゐたことと思ふが、落第と俳句熱が、退校の主因であつた。いはば彼は世の文學に志す學生が辿る普通の道程を經て、落第――退校といふ順序を經たのである。

「日本」新聞入社の略〻確定したのは、十一月中旬で、十二月一日から出勤することになつた。母と妹を東京につれてきた翌日、故郷の大原恆德氏においた手紙の端に、

右手紙書き畢らぬ處へ陸より呼びに來り參り候處いよ／＼每日出社之事ニ相きまり候併シ別にこれといふ程の職業も無御座候故いやな時ハ出勤不致ともよろしくと申候其かはり月俸十五圓ニ御座候これハ陸一人よりいへば大ニ氣之毒がる處なれども社の經濟上豫算相定まり居候故本年中ハ致シ方無之來年になれば五圓カ十圓ノ處ハともかくも相成可申ト申居候それまでの處足らねば自分が引受可申由懇々申くれ候右之次第に候へば其御考にて御送金被下度御手數相煩申度

候尤我社之俸給にて不足ならば他ノ國會トカ朝日新聞トカノ社へ世話致し候はゞ三十圓乃至五十圓位之月俸ハ得らるべきに付其志あらバ云々と申候へとも私ハまづ幾百圓くれても右様の社へハはいらぬ積に御座候久新聞之外チヨイ〳〵の小儲けハ折々可有之心あたりも御座候先づ今日之處でハ右之次第ニ付前途の目當ハ來年にならねば何とも申上かね候

右新聞社ニ關する話ハ餘り廣く御他言被遊ぬ様奉願候

と書いてある。彼の考では、文筆で生活してゆく方針であつたから、結局新聞社あたりへ落ちつくべき必然性があつたのではあるが、この「日本」新聞へ入社したのは全く陸氏のお蔭であり、單に月給の多いかために、國會や朝日等の新聞には雇はれたいと言つてゐるに徴しても、彼か如何に「日本」新聞に共鳴し、又そこに社長だつた陸實の人間や思想を尊敬理解してゐたかがわかる。「日本」新聞の生れるに至つた世態、又陸實の人となり等について左に少しく記しておきたい。

自由民權をふりかざして一時猛烈だつた政黨運動も十七年十月、自由黨が解黨しなければならぬ破目に陷るやうな事情もあつたりして、一時屛息の狀態になつた。が、一方獨逸の學術思想が盛に入つて來て獨逸帝國主義の顯著な影響の下に政府は進みつつあつた。西洋模倣は模倣でも、幾分日本化され、國家主義に傾いて來た所は認められた。しかしほんの一時であつた。條約改正の問題で、西洋人の御機嫌を取らねばならぬ、西洋の文明に追ひつかねばならぬといふやうなわけで、政府當局は思ひ切つた若しまりを發揮した。鹿鳴館とか東京倶樂部等が建てられ、外國人との社交の靈場が現出したのは、明治十六七年の交である。伊藤首相官邸で、各大臣大官やその令閨令嬢等が外國人のために躍つた二十年四月二十日夜の假裝舞踏會の如き、

最も滑稽な一幕で、外人崇拜・自由交際の弊は、漸く一部の人によつて叫ばれようとしてゐた。外國人と雜婚をして優良人種を作らねばならぬといふ「日本人種改良論」とか國字を廢するの論なども出て、無批判に西洋のものを有難がる西洋摸倣の弊も著しく民間に擴がつた。かくて明治十年代の末期に於ては、西洋かぶれの弊が甚だしかつたのである。一方無批判の歐化主義に憤慨して、反動運動としての國粹保存の主張を強くかかげる人々もあらはれた。それは改正條約草案に、外人に關する裁判には、この國の法官の立會を要するといふ一條が加はつてゐたのを、或人が日本の屈辱であると論じた事から、政府の態度を難じ、國權伸張・國體擁護・國粹保存等々の主張をとつて立つ人が現はれ、この事件を目立つた端緒として、國粹保存の反動運動は強い勢力を得るに至つたのである。弘道會や政教社其他國體主義・國粹保存の主張の團體が蜂起したのは、二十年、二十一年の交で、落合直文らの國學者の新しい國文運動も、この大勢に伴つて起つたのである。實に子規は、かかる思想に熱烈な共感を持つた一人であつたらう。政教社の機關誌「日本人」は廿一年四月創刊され、廿九年八月からは子規もその寄稿家となつたが、子規の俳句・和歌革新運動の搖籃となり、彼の實生活を保證することにもなつた「日本」新聞は、廿二年二月十一日に創刊された所謂日本主義の新聞であつたのである。この事實はただの偶然ではない。子規は單なる新聞記者としてでなく、主義に共鳴した一人として、如何に薄給でも「日本」記者たるを滿足としたのである。

陸實は羯南と號し、日本新聞創刊時より主筆となり後、社長となつた人、子規の叔父加藤恒忠と同學の誼から、子規は上京以後、その沒するまで恩顧をうける事が甚だ多かつた。彼は谷干城等と共感してゐた國粹

保存論者で「日本」新聞によつて藩閥内閣を攻撃し、伊藤・山縣等を向うに廻し、堂々の陣を張つた人格・識見共に優れた人だつた。當時言論界一方の雄で、特に子規を識る者にとつては忘れてはならない恩人である。羯南は文學者ではないが、文學にも相當理解をもつてゐ、子規の爲にも、よき理解者であり保護者となつたのである。明治二十五年三月中旬頃のことであるが、陸氏の所へ遊びに行つてゐて、子規は即興に、

　雨にくち風にはやれし柴の戸の何をちからに叩く水鶏ぞ

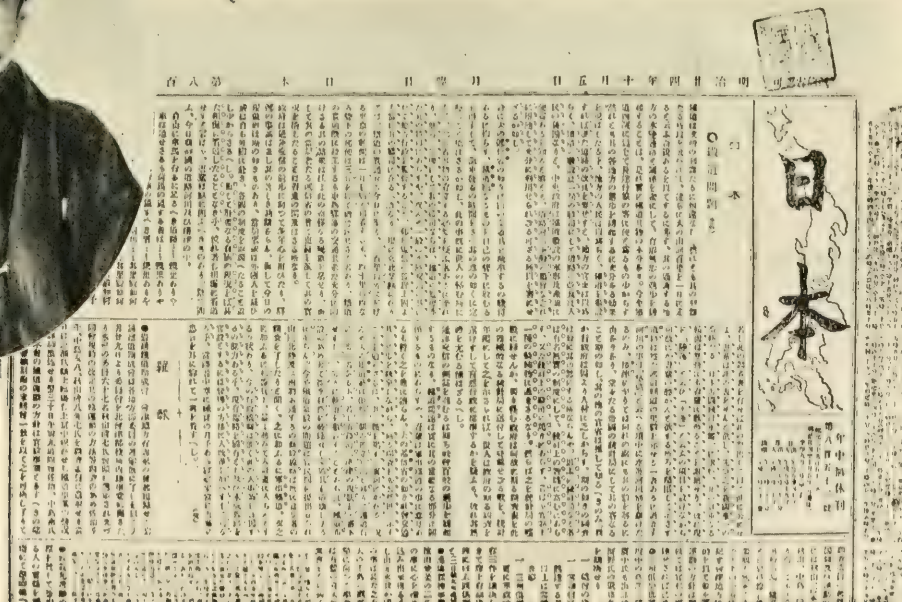
とやつたら、陸は何をちからにとあからさまに言はぬ方がよいと言つたとあるが、自然の姿の方が良い。子規等との交際が篤くなるにつれ、その文學觀も進展啓發されたものが多かつたであらう。廿九年中頃、上野の花光院の觀月會には、子規も俱に車に乘つて病軀を押し、大いに興がつてゐるが、會主は羯南で、當日交友の學者・文人を招いたのである。さういふ會合の席上では、政治論は勿論、學問・文學上の話をして談笑するといふやうな人だつたと、「子規句集講義」の中で、虚子は語つてゐる。單なる政論家とか國粹保存論者とか言ふばかりでなく、文學にも相當理解の持てる人であつたから、子規から言つても、好個話せる人であり、よけい尊敬もされたのであらう。隨分子規一家の面倒は見てくれた人で、根岸へも羯南の世話で移つたのである。廿五年春から二年近く住んだ上根岸八十八番地の住居は、羯南宅の隣で

　　羯南氏住居に隣れば

　芭蕉破れて書讀む君の聲近し（廿六年）

等と俳句を作つてゐる。羯南は八十六番地にゐたので、子規の二十七年二月から死ぬまで住んでゐた八十二





日本

陸羯南と日本新聞

番地の作居も、羯南の近所で色々厄介になつたことが多かつた。子規が廿五年十一月家族を連れて上京した時等も、何から何まで、砂糖・醤油・香の物までも、陸宅から供給されて、しばらくはやつてゐたらしい。晩年中村不折が洋行する時、子規庵に六七人の同勢が集まつて、送別会をして、傍ら、子規の歡をつくした事があるが、それなども陸の子規をおもつての催であつたのである。後年、出社も全く不可能の病となり、又ホトトギスに力をこめて、それがため日本新聞の方は疎かにする様の事があつても、陸は別に責けといふやうなことも言はず、極めて親切寛大で、子規も深く感謝してゐた。精神上にも物質上にも、陸の恩顧をうけることの多かつたことは、一々例示しきれないのである。

新聞記者として忙しい生活に入るやうになつても、俳句の方に怠らなかつた。而も新聞を俳句宣傳に利用する事をも忘れなかつた。新聞記者として記事の雑務をよく處理して行つた傍ら、有效に俳句の道を說き廣めつつあつたのである。二十九年八月頃から出してゐた、俳句で時事を諷刺した作句は、藝術としては高級なものではないが、時事を適切に諷刺してゐる點で、俳句を新聞記事的に應用し、讀者をして喝采せしめたであらう。その記者的着眼は凡でないものがあつた。廿七年二月「日本」の姉妹ともいふべき「小日本」が發刊され、子規はその編輯主任〔註一〕となつた。これは、子規が記者としても相當やれる人だといふ折紙つきになつてゐた事を實證してゐる。入社の當時は十五圓の月給で、すぐ廿六年一月には二十圓となり、この「小日本」の編輯主任となると三十圓（廿七年二月八日附、大原恒徳宛書簡参照）貰ふ事になつた。「小日本」は七月廢刊され、子規は「日本」へ歸つたが、月給は同額であつたらしい。「小日本」は「日本」新聞が發行停止に

あふやうな事が度々あるので、他に家庭的の新聞が發行されてゐる事が必要だといふやうな所から出すやうになつたらしいが、「小日本」にも政治上の批評や報導の必要があつて、紙面を擴張し、「日本」と同じく政府攻撃をやるやうになつては、二度三度發行停止を命ぜられ、財政上の打撃のため、半ヶ年で廢刊のやむない事情に置かれたのである。元來實務的で、常識のある子規には、新聞記者は適任でもあつたのに、「小日本」の編輯等で經驗を得て益々記者としての識見・手腕をたしかめたのである。二十八年八月頃碧梧桐に子規に代つて「日本」で俳句を選び、間もなく入社してゐる。その際、子規は忠告して、

俳句欄の中斷ありしは無用の事と存候何か事情ありしならば簡單に御斷あるべし新聞紙上は斯る無味の事を半段ものせる事不躰裁に候又俳句雜誌の評は猶更無用に候此の如きものは一言も評するに及ばず況して半段巳上を費すは何たる無遠慮ぞ不覺冷汗を流し申候御入社の上は是等も御斟酌あるべく候何事にても一寸簡單に書ておけばよし無暗に文章を飾りてつまらぬ事を面白く見せるは初心の心得違いに御座候今日文學欄抔は餘り御廣げなされぬ樣奉願候（廿八年九月七日）

等と言つてゐる。新聞記者として未經驗の碧梧桐には、かかる注意は必要であつたらうが、子規が俳句作家であり文學者でありながら、純記者として十分の用意があつたことを、うかがふに足るのである。

（註一）　子規の收入については「仰臥漫錄」九月二十日の條の記述が大體を知るに便利である。なほ本文二二三頁參照。

二十二三年頃の子規が、身體は衰へるところある病氣に弱つてゐるが、足だけは健全だと言つてゐる文は、さきに引用した。この足の丈夫であつた事が彼に度々の旅行を試みさせてゐる。「名句は菅笠を被り草鞋を着けて

世に生るるものなり」と、二十六年の奥州旅行中に書いてゐるが、子規の藝術と旅行の關係には見逃されぬものがある。ここに子規の旅について一瞥を與へて「健康時代」の彼の一面を眺めたいと思ふ。

學生の頃も機會ある毎に小旅行を試みてゐる。故鄕へ歸る途中などにも途中所々に立ち寄つて見物し、又時には東都を離れて清閑の地に數十日宿つてゐるやうな事もあつて、彼の詩囊を豐富にしてゐるやうである。

十八年夏、二年ぶりで歸省、歸省中か上京の途か、嚴島に遊んで祭禮を見た。九月上京後、三人の友達（清水・秋山・小倉）と一緒に鎌倉まで無錢旅行を企て、夜十一時頃出發、戶塚まで行かない中に疲れて、空しく引返し、神奈川から汽車で歸つたやうな滑稽もあつた。（「筆まかせ」中の「彌次喜多」參照）十九年夏は久松定靖（舊藩主子息）に從つて日光・伊香保方面に遊び九月歸京した。日光を詠ずるの詩十餘篇を作り、後、卅一年八月「十年前の夏」の文を發表して、この行をなつかしんだ。彼は故鄕にかへり、母や親戚・知友に會ふ事に人並以上の喜を感ずるのであつたが、歸國は隔年と決められてゐたので、それもならず、旅行するには金がなし、長い休暇中暑ぐるしい下宿にごろごろしてゐねばならぬかと悲觀してゐた時に、舊藩主の若君にお供して日光漫遊に行けとあつたので、非常に喜んだのである。多少窮屈ではあつたらうが、子規としては贅澤な旅行で、比較的長い方でもあり、且つ普通の旅行と異ひ、一種の名譽光榮の氣持が、その思ひ出の中にとり殘されたといふ點で特記すべき旅である。二十年には、夏休みに歸省した。途中下車位はしたのであらうが、徵すべき記錄がない。二十一年八月には、鎌倉・江の島（各一泊）見物をして來た事がある。一人の友（佐々田採花）と汽船で浦賀へ行き、横須賀・金澤から鎌倉に出で、翌日鎌倉見物をして江の島に

宿つた。鎌倉見物の日は暴風雨で、一本の蝙蝠傘に二つの頭を突きこみ、頼朝の墓から鎌倉宮に廻る途中で血塊を吐いた。

おのれこの夏のやすみに静かなるところを尋ねて三伏の熱を凌がんと友どちにはかり墨田の堤にそふたる月香樓をかりてすまひにき。かくて三十日ばかりを經て篠田大人より相模の國に遊べ五日許りゐて宿に歸り來りし頃、共にすまひし二人の友は打つれたちて駿河に赴きぬ。はじめの程は友のはしやぎと思ひしことも度々なりしかども、つひには淋しきになれてさみしとも思はず、あしたの月夕の風を友としていと心よく遊びゐたりしに間もなく友の歸りければよき話しときのいてきしなど戯れに留守中の事何くれとなく話しつゝ一日二日を過すうちに友どちは心ありてか、はた心なくてか、つどいてここを去りにき。

とあるが、この年の夏は六十餘日、向島の長命寺境内櫻餅屋に寓居してゐたのである。友の二人とは、藤野古白・三並良をさしてゐる。この時の作品は、「七艸集」の大部分を占めてゐる。

二十二年には、四月に往復九日（三日から七日まで）を費して水戸に遊んだ。水戸から大洗・磯濱の方を巡つて、歸りには汽車だつたが、往きは大抵歩いたので、三日目に太田泊り、その翌日那珂川まで歩くにも大分足が痛んで困つたらしく、舟を雇ひて川口に下る途中、舟中で寒さに襲はれ、それが翌月の例の咯血の近因をなした。七月歸國した。途中靜岡に一泊したらしい。九月上京、十月・十一月の頃は、不忍畔大宮内の某亭に寓した事もある。十一月二十一日、大磯に遊んだ。友人で竹村錬卿（黄塔）が病氣保養のため大磯松林館に行つてゐて、來遊を促したためである。二十三日鎌倉其他に遊び、黒ヶ崎に立寄り、廿四日歸京した。こ

の大磯行は面白かつたと見え、「水戸紀行裏四日大盡」と冠して、紀行文を物してゐる。水戸紀行は、難儀もし、宿はむさくるしかつたり、虐待されたりして而も病氣を起す近因ともなつたに反し、この大磯行は、宿でも歡待をうけ、病氣保養の旅のやうであつたといふ。この年は十二月にも、古白と一緒に歸鄕した。途中大磯の松林館に一泊し、翌日は濱松に宿り、名古屋に一泊し、京都で三十三間堂を一見したりして、神戸より乘船して歸國したのである。翌二十三年一月二十三日松山發、翌日丸龜に遊び、廿五日神戸着、途中靜岡に一泊して上京した。(「筆まかせ」中の「上京紀行」參照）この夏また歸國した。一年おきに歸るきまりにしてゐたのであるが、喀血後は保養の意味も加はつて歸省の度も多くなつたわけである。

去年の夏も歸り又去年の冬も病氣のために歸りしかば今年の夏は歸るまじと思ひゐたりしが、病氣のためと、他國へ旅行する程の金なきためと、故鄕にある藤野胡伯に逢はんためと、故鄕に母に見ゆるためと、道中の勝景を探らん爲と、此五原因にしやくられて終にまた歸省することゝなりぬ。

と理窟をつけてゐるが、この年の歸國の途中は所々に寄つたので、七月一日に東京を發し九日に歸省してゐる。他國に旅行する金もないので途中の名勝・古蹟見物旁々歸省したといふやうなことであらう。同行者は三並良と小川尚義の二人、先づ江尻に泊り、三保の松原を見物し、翌日は大垣泊、養老瀧を見るつもりであつたが、病身で、而も雨の爲め果さず、三日には大阪の上、谷藤治郎の宿に宿り、翌日大阪府博物館を觀たりして、同所に宿、五日、梅田から三ノ宮に行き、船に乘つたが、風が烈しくて一夜、船は兵庫に泊つてゐたので、翌六日は胸がむかつき出し、遂に船から下りて汽車で大阪へ戻つた。七日には紀行文を書いたりして休

み、大谷から金を借り、八日大阪を立つて神戸から船に乗つて歸國した。歸省中、八月中旬、藤野古白外一名と共に、久萬山に登つた。四日の旅行であつた。（「しやくられの記」中篇參照）上京は少し早めて、八月二十六日夜、母に別れ翌朝三津から大阪まで汽船、大津の中村屋に泊り、翌二十八日人力車にて石山寺に志し、途中、義仲・芭蕉の墓を弔ひ、石山に詣でた後、國分寺に幻住庵址を訪ひ、夜、逢坂山に遊んだ。その翌日、三井寺に詣で、月明に乘じて、小舟に乗つて辛崎に渡り、湖上の月を擅にした。翌三十日、三井寺前の井筒屋に移り、ここに一週日、清淨の空氣を吸ひ、九月六日歸京した。（「しやくられの記」下篇參照）

二十四年春に房總行脚七日を試みてゐる。三月廿五日出發、船橋に宿り、佐倉を經て、馬渡宿、廿七日千葉に至る。廿九日小湊に出で、卅日平磯宿、三十一日七浦を過ぎ野島崎に遊び、館山一泊、四月一日、那古・船形に詣で保田宿、二日、羅漢寺から鋸山に上り、同日、船で歸京した。この旅の途中購つた嚢は、現に子規庵に藏されてゐる。六月には木曾を經て歸郷した。この木曾紀行は「かけはしの記」といふ彼の最初「日本」新聞に掲載した文によつてよく知られてゐる。輕井澤で一泊し、善光寺に詣で、川中島を過ぎて篠ノ井にひき返し、ここから歩いたり馬車や馬に乗つたりして美濃路に入り、木曾川を下つたのである。卽、先づ伏見山で泊り、刈谷原（村）に宿し、松本・洗馬を過ぎ、本山に泊り、奈良井を過ぎ福島にとまり、寢覺の床を見て、須原泊、三留野で中食をとり、その夜は馬籠に宿つた。次の夜は美濃の落合村に宿り、その次の夜は伏見に宿、そこから木曾川下りの舟の人となり、木曾川から汽車に搭じて歸省したのである。又上京の時は、八月廿五日正午頃三津を發し、夕刻宇品着、翌朝人力車で嚴島參詣をして廣島にかへり、廿七日汽船で尾道

にゆき一泊、そこの寺院等を觀て翌日午後人力で笠岡まで行き、そこから汽車に乘り、夜、岡山着一泊、そこから小豆島に行き寒霞溪に遊んで歸京した。上京後、大宮公園の萬松樓といふ宿に十日許りゐた。六月に頭がいけぬといふので、試驗を中途でやめ一時歸國したので、殘りの試驗の下しらべに、保養を兼ねて出掛けたのである。竹村黄塔や夏目漱石が遊びに來て泊つたりした。十一月上旬、川越地方に旅をし、忍・熊谷・松山の百穴等にも遊んだ。子規庵に現存する笠は、途中蕨驛附近で求めたものといふ。

二十五年夏も鄕里へ歸つたが、この時は學校を落第し、退學しようか等と考へてゐた際であるから、道寄り等はしてゐなかつたらう。十月三日、養生かた〴〵例の大磯の松林館に行き、十三日大磯を發し、箱根・三島・修善寺・熱海方面を行脚した。「旅の旅の旅」はこの箱根にのぼり、伊豆方面へ廻つた時の旅行記である。十月廿九日、鳴雪と共に日光の紅葉見に出掛け、三十一日歸京した。(「日光の紅葉」參照) 十一月五日、文科遠足會で、妙義山に赴き、翌日歸つた。九日、家族出迎のため東京を發し、十日京都に着き、十一、十二の兩日は虚子と共に、東山・西山、紅葉を見て歩いたりした。當時「舊都の秋光」の一篇を「日本」に發表してゐる。十四日に母や妹を神戸に迎へ、神戸では楠公社・生田・居留地等を一緒に見て、すぐ京都に出で、翌日粟田・智恩院・高台寺・大佛・通天橋を見物して、十六日は靜岡泊、十七日夕刻歸宅した。丁度一週間程掛つてゐる。此時は、歸りには二等列車に乘つたりしたので故鄕の大原叔父の口言を喰つたと見え、子規も辯明に力めてゐる。二等に乘車した事、歸りに神戸や京都を見物した事は、確に母のためにしたことであらう。

以上は學生時代の子規の試みた旅の重なるものをのべたのであるが、郊外に一日の散策を樂しむやうなこ

とは少くなかつたし、喀血以前は學校の行軍等にも缺席する事はなかつたさうである。學校の行軍だけでも、本所の五百羅漢から洲崎に行つた事を始として、雜司ヶ谷へ行つたこと、目黑に行つたこと、千住から向島へ廻つて歸つたこと、蒲田の梅見に行つたこと、王子附近で對抗演習をやつた事等、郊外等は殆んど見盡してゐたやうである。故鄕にゐた少年の頃も、旅行は大層好きではなかつたが、十五の時、十里も離れてゐる久萬山・岩屋寺を探つた事と、十六のとき、大洲地方へ行き四五泊して歸つたこと位であつたらしい。

二十五年十二月、新聞社入社後、同七日に鳴雪と高尾山に上り、八王子に一泊し、翌日百草松連寺・府中・國分寺等に遊んで歸つた。（「高尾紀行」參照）二十六年には三月に鎌倉に行つた。藤澤に一泊し、鎌倉の知人（陸實）のところに二泊して歸つた。（「鎌倉一見の記」參照）

この廿六年は、子規一生中の大旅行である奧羽旅行を實行した。芭蕉の「奧の細道」の紀行にヒントを得て企てたものゝやうであるが、七月十九日に東京を出發し、八月二十日歸京した。此の間、日を費すこと三十三日、行程の大體を次に掲げる。

十九日宇都宮の知人の許に宿る。二十日白河下車、東半里許にある結城氏の城址を見る。白河に歸り中島某を訪ふ。二十一日朝白河の町はづれを散策し、白河發、須賀川に道山壯山を訪ふ。郡山宿。二十二日、朝淺香沼を見、郡山から汽車で本宮に赴き、歩して南杉田・安達原黒塚を訪ね一泊、二十三日、阿武隈川を渡り、滿福寺に宿る。二十四日、二本松から汽車で福島に到り一泊、二十五日文知摺石を見、福島から人力車を驅り飯坂温泉へゆき宿る。廿六日舊跡を見る。廿七日、小雨頻なるを、靈山へも行かず、人力で桑折に出で、そ

こより汽車で岩沼に行く。氣分すぐれず、笠島へ行き、増田から汽車で仙臺に入る。二十八日は疲れて終日眠る。二十九日、つゝじが岡を見、汽車で鹽竈にゆき、鹽竈神社に詣づ。小舟で松島に出、觀月樓・觀瀾亭・瑞巖寺・五大堂等を見る。三十日、雄島に遊ぶ、福浦島に遊び、富山の紫雲閣を觀る。船で鹽竈にゆき、多賀城址の壺碑等を見物、岩切驛から乘車、仙臺泊。三十一日、舊城址の麓から間道を過ぎ、廣瀬川を渡り、槐園の南山閣を訪ひ一泊、八月一日宿に歸る。槐園夜來る。二日愛宕山の佛閣にのぼる。仙臺宿。三日旅舍をひきあげ槐園宅にゆく。例の歌話俳話に夜を更かす。四日文學談盡きず、やどる。五日、南山閣を辭し、出羽に向ひ、作並溫泉泊。六日楯岡どまり。七日、楯岡から三里位にある大石田泊。八日、最上川を舟で下る。正午烏川着、古口泊。九日清川から陸にのぼる。酒田泊。十日、北に向ひ、荒瀬・遊佐を過ぎ、大須鄉に宿る。十一日、鹽越村を經、象潟・金浦・平澤を後にし、本庄泊。十二日、道川泊、十三日、馬車で秋田に入り、人力で大久保に赴き、歩いて一日市にゆき泊す。十四日、盲鼻に至り八郎潟を望み引き返して秋田に泊る。十五日、戸島から人車を驅り、大曲にゆき宿る。十六日、六鄉から岩手への新道を辿る。湯田溫泉泊。十七日、半ば人車の力をかり和賀川について下る。黒澤尻泊。十八日、宿にとゞまる。十九日汽車で水澤に行く。夜汽車で東京に向ふ。二十日、白河關邊で明けかゝる。正午上野着。

はじめ二三の俳人を訪問してゐるが、これは春秋庵幹雄等から紹介狀を貰つて行つたのである。(註二)(註三)「小生此度の旅行は地方俳諧師の内を尋ねて旅路のうさをはらす覺悟にて東京宗匠之紹介を受け已に今日迄に二人おとづれ候へども實以て恐入つたる次第にて何とも申樣なく前途茫々最早宗匠訪問をやめんかとも存候程に御

座候俳諧の話しても到底聞き分ける事も出来ぬ故つまり何の話もたくありふれた新聞咄とこにても同じ事らしく共鮮小生の年若きを見て大に輕蔑しある人は是非幹雄門へはいれと申候故少々不平に存候處他の奴は皆から取りあはぬ様子も相見え申候まだ此後どんなやつにあふかもしれずと恐怖之至に候此熱いのに御行儀に坐りて頭ばかり下げてゐなければならぬといふも面白からぬ事に候せめてはこれらの人々に内藤翁の熱心の百分の一をわけてやり度候」とこぼしてゐる。丁度かういふ折に仙臺では新文學に理解のある槐園に會つたので、大いに共鳴したことであらう。仙臺に以外に長逗留をしたのは、身體をやすめることと言ふよりも槐園に共鳴した爲であらう。槐園、性は鮎貝、落合直文の弟で、新派和歌の歴史には特筆すべき一人である。早く朝鮮に渡り、歌壇から遠ざかり、有名にもならず、歌も大成しなかつたが、歌才は直文以上であつたともいはれてゐる。今猶京城に健在をつたへられる。奥羽行脚のエピソードとして、これらのことも興味がある。

（註二） 幹雄の紹介狀の件は、「病牀六尺」に回顧されてをり、「松蘿玉液」には、休和一から二三宗匠へ紹介されたとある。

（註三） 子規全集第十五巻三四四頁參照。（碧梧桐宛の書簡）

二十七年は、小日本の編輯等で忙しかつたためもあらう、比較的健康な一年だつたにも關らず、旅行といふ旅行をしなかつた。併し郊外に一日遊び歩くやうな事は、屡々だつた。特に秋は南郊に遊んで俳句の寫生につとめたものである。文章となつて新聞に載つたものだけでも、「發句を拾ふの記」（三月）「上野紀行」（八月）「そゞろありき」（八月）「王子紀行」（八月）「閒遊半日」（十一月）「總武鐵道」（十二月）等を數へる。「發句を拾ふの記」は虛子と二人、千住街道から梅島村をすぎ草加にゆき、道を轉じて西新井に向ひ、大師堂に詣

り、王子の松宇亭に立ち寄り、最終汽車で歸つた時の文、「上野紀行」は、上野山であちこち俳句をこしらへて歩いた文、「そぞろありき」は、箕輪から三河島の方へ行き、日暮里の火葬場から諏訪明神の方を歩き、本行寺の前を通つて歸つた時のもの、「王子紀行」は、十三日王子祭見に出掛け、瀧野川の方を通つて歸つた時の文、鳴雪・不折と行を共にしたのである、「間遊半日」は、天長節の日に、車を新橋へ飛ばし、新橋から汽車で川崎へゆき、大師に詣で、六郷・蒲田の村々を通り、池上本門寺に參詣して歸つた時の文であり、「總武鐵道」は、汽車で佐倉まで行つて來た折の記である。これらは何れも「發句を拾ふための一日旅行」と名づけて然るべきものばかりである。

明治廿八年は三月三日に從軍のため、東京を發し、四日大阪一泊、五日夕刻神戸着、夜行で六日正午廣島に到る。九日、古島一念(一雄)を送つて吳に遊び、十日廣島に歸つた。十四日宇品を發し、十五日松山に歸省、十七日再び廣島に歸つた。四月七日、出發の命をうけ、十日宇品に到る。海城丸に乘船、十三日大連灣に入り、十五日柳樹屯に上陸、金州城に入る。十六日船に歸る。十九日錦川丸で旅順にゆく。この月下旬金州の附近を見た。五月十四日、佐渡國丸に搭じ十五日出帆、十七日船中で喀血、二十三日、和田岬上陸、神戸病院に入院約二ケ月、須磨に一月許り靜養し、故郷松山に五十日ほどとゞまり、十月十九日、松山を發し、途中廣島・須磨に立ち寄り、大阪に至り、奈良に遊び、同月三十日東京に歸つた。丁度東京の宅を留守にする事八ケ月許りであつた。此の間故郷に靜養してゐたのが、二ケ月近くであるが、それを差引いても、なほ六ケ月は所々にとゞまつたことになる。滿洲の地に止まつてゐた日數だけでも約一月である。彼にとつては、

病苦に苦しんだ悪い年ではあつたが、旅の味を感ずることは一等大きかつた年と言つてよい。

子規は貧しい生活の中から、旅費を作つては旅行を試みてゐる。足跡は圏に及ぶといふ上では広くないが、彼の足跡を辿ることだけでも私達にとつて直ちに行はれることではあり得ない。時代が違ふといへばいふもの、まして彼の旅行は、徒歩によるものがかなり多いのでもある。これらの小旅行は、彼にその土地特殊の人情・風俗を現し、自然の妙なる音楽を聞かしたことであらう。彼は土の香を嗅ぎ、草木のそよぎを聴き、心を楽しませ、詩嚢を満たして歸つて來た。筆まめの彼は、大抵の場合、紀行文を書くことを忘れなかつた。俳句（時々は和歌・漢詩）は作らうと努力もしたらうが、旅をすれば、俳句は苦しまずに多く生れでもくるのであつた。旅行をして、紀行文をかき俳句を作つたことばかりでも、旅の效果は具體的にあらはれてゐると言つてよいが、それ以上尊むべく有益であつたことは、彼の内面生活を豐富にし深めたこと、換言すれば彼の思想意中その自然觀が純化し深化し來つたことである。西行の旅・芭蕉の旅と、これとを同一に論ずる事は出來ない。が、子規にとつても、旅は書物の教へるところが重大であつたと等しく重要であつたでもあらう。書物は體驗を透して讀まれねば、創作上に響いてくることが尠い。旅は萬人の前にひとしく、新しい體驗の掴むに任せて存在してゐるところであるから。

彼の病床の作品には、直接に、かつての旅をうたつたもの、旅の見聞の材料をとりあつめてうたつたものも尠くない。彼の小説等には、旅の經驗が可成り多く顔を出してゐることは、「月の都」を書くために二條の松原へ二度行つた事言つてゐるに徴して既に明かである。これらも旅のお蔭であるが、私はそれと共に、彼

の旅で味つた苦しみや樂しみ又草木禽獸や山川の眞相の把握が、彼の人生觀や自然觀を深め、その深められた心が、更に藝術を深め高めたといふ、旅行の内面的影響をふとく注意したいのである。彼の藝術論に旅行の利を論じた箇所は多いが、「俳諧反故籠」等の文には、よくその思想が現れてゐる。ついて見られたい。

さて、終りに、學校を退校する頃から數年間の健康狀態に就いて、少しく記して本節を閉ぢよう。

廿五年は三月頃風邪を引いたりして氣分がすぐれぬ事もあつたが、臥床する程ではなかつたらしい。九月には病臥した。左の消息等にうかがはれる。

小生歸京後例の始末に付大奔走中之處不圖肺患にかゝり始めは押して歩行も仕りしが昨今はまづ／＼臥褥罷在候肺患といひたるは誇張のみ只痰に多少の血痕を印する位すれば咽喉だか何だか分り不申候尤醫者にさへ見せぬ位也御承知之通在鄕中より毎日／＼肩つかへ居候が歸京後も閒さへあれば寫字致候故肩のつかへは益甚しくそれらも病因の一なるべければ可成肩を休めるやうにと存じ一昨日來寢て見たれど生憎と來友もなければ手持無沙汰に苦しみ讀書致候へども生來讀書きらひ故いつしか褥中にありて寫字致候次第けふは日曜故誰か來るべしと存居候へどもそれさへ來らず無聊に堪へかねて此手紙を書き申候尤病勢は日ましに減じ今日抔大分よろしき樣なれば薄暮より竹村の送別會に臨む積なり（九月十一日、虚子宛の手紙）

廿四五年の頃も、時々病氣に罹る事もあつたが、醫者にも診せず藥ものまず、その當座少し注意する位で濟んだ。廿五年は生活上にも變動があり、新聞社入社前は色々奔走もし煩悶もしたらうし、入社したのは、

年末に近かつたから特別忙しかつたらう。而も俳句に油が乘つてうんと勉强もしたのである。無理なことが多かつたにちがひない。不眠症といふ傾のあつた場合もあつたやうだが、二時や三時迄寢ぬ夜の多かつたのは、主として俳句の勉强（句作や俳句分類）に熱中したためであつた。病弱の身體には、夜更かし等をして勉强することは、餘りに重い負擔であつたのである。儘然廿六年二月には風邪の氣味で痰が咽喉にひつかゝり、痰の中に血が混つて出るし、前年秋の病氣よりは血痰等多かつたが、間もなく癒つた。この時は陸家へ出入の宮本仲といふ醫者に診て貰つた。（宮本氏の記述によれば、子規最初の喀血の時から陸氏の依賴で診てゐた由）四五月の交も風邪の氣味で不眠症で困んだ。五月の痳目も治りきらぬのに、六月には聽になり、半月中にくらした。始めは醫者は腦膜炎か肺炎かもしくはチブスにでもなるのかと心配した位であつたが、それは一度治つた。が、すぐ氣管支炎になつたりして、計畫の松島行もしばらく醫者にとめられた。許可が出て、七月十九日に東京を發し八月廿日歸京した。一月許りの旅で、子規一生中の大旅行の一つであるが、この旅行中も步いたりしたため、身體の具合は思はしくなかつた。「少々病氣にかゝり暫く旁仙臺に八一週間許り滯在仕候」（註四）等と報じてゐる。奥羽旅行後別に病氣らしい病氣もせず、この年は過ぎた。

翌廿七年は、やゝ健康を恢復したらしく見える。

小日本終に廢刊と相成候殘念に存候廢刊後直ちに日本へ移り候に付一身上の變化は同じことにて暑中一日の休暇さへなく候へども責任は多少相減じ候に稍く輕くなりたる心地致し候近來非常に壯健に相成候は何よりの仕合せに存候相伴ひ申候に付少しにても餘計に金を作るだけ健康に相成候病氣の時はいつでも金のなき時に限り候何れ又七月廿四日、

大原叔父宛）

等とあるやうに、小日本の發刊廢刊等身邊多忙を極めたに關らず、まづまづ健全で、彼の一生中外觀上一番元氣に華やかにさへ見える。（註五）「私も昨年來病氣知らずに相過候間乍憚御放慮被下度候」と翌廿八年正月の音信にも、元氣のよい聲を出してゐるが、しかく彼の身體にとつては平穩無事た年であつた。もし事件が無かつたら、この順調な時期は、も少し繼續したらうと思ふが、稍健康を復した樣に見えた彼は、じつとしてはゐられなかつた。周圍の人の危ぶみとめるのも耳にいれず、從軍記者として滿洲へ出かけたのである。結果は死ぬ程の大患を起し、少康を得たが、つゞいて起つた病のため殆んど立つ事も出來ぬ狀態となり、一歩一歩死に近づくことになつたのである。その以後の病態と病苦の有樣は、次の「病牀時代」に於て、その病苦の如何に劇しいものであり、その間に處し、子規が精神的に如何に病苦と鬪ひ、之を克服して行つたかを、やゝ詳しくあとづけよう。

（註四）子規全集、第十五卷三四七頁（大原恆德宛書簡）參照。

（註五）一月九日、大原叔父宛書簡。（全集第十五卷三九九頁參照）

第二節　病褥時代

手足の自由を不可能にして！まひ、遂には現實の生命をも奪ひ去る「病」は怖ろしい。病褥に苦しみ續けてゐる人の噂を聞くだけでも、痛ましい感じがして、同情せずには居られない。一面から考へれば、病氣位人生を不幸にするものは無い。病氣程怖ろしく悲しいものはない。どうにか食つて行けさへすればいい、身體だけはお互に丈夫でありたいといふのが、通り言葉であり、又人皆の共通した願望でもある。併しこの願望もはかなく踏みにじられて、重い病の床に死の悪夢におびえ續く悲痛の人生は、遠慮會釋なく、到る處に繰りひろげられる。いつ病魔にとりつかれ、いつ死なねばならぬか。絶えず流轉變化する人生に、忽然として現はれる死神の在所は、誰も認める事が出來ない。明日をも知らぬ無常迅速の世に、自分の命、いのちの綱一をいとほしみ育てねばならぬのは、思へば、今の一瞬を逸してはならないのである。「明日は明日のことを思ひわづらへ、一日の苦勞は一日にて足れり」といふキリストの道破した言葉は、如何なる理想主義も、來生の甦りの信仰も、この現在の一瞬の愛惜、現實の生命の尊重を根底にしてこそ、始めて意義をもたらす事を私達に教へてゐる。豫知することを許さぬ未來の運命は、作、現在に於ける自覺努力によつて形づくられる。少くとも、明日知らぬ生命の私達は、現在に於て出來得る最善の努力、最善の行爲にまで自分をひきあげねばならぬ。これは分りきつたことのやうであつて、而も實に自覺することは困難のことである。現實に弱い、今の時に徹底せねばならぬといふ事だけさへも、健康の時には忘られ勝ちにすごすのである。が、重

患にとりつかれて、雜念が洗ひ清められ、靜かに生命・人生といふ問題に觸れてゆく時、はじめて現實の生命のかけがへの無い尊いことが切實に感ぜられることが、或はあり得るかと思ふ。「病」は、怖ろしく、厭ふべきものではあるが、「死」と一重に相接し、微かにその跫音をきくことが出來、從つていのちの眞相を摑むよい機緣となり得る場合もあることは、感謝さるべきである。人若し病によつて清められ、深められ、一瞬なりとも靜かに、眞實の生命にふれる事が出來るとするならば、苦痛は苦痛、悲哀は悲哀でも、それ以上の尊い天惠を受けたものと言つてよい。「朝に道をきけば夕に死すとも可なり」と古聖哲は言つてゐるではないか。

人は病をわづらひ餘命幾何も無い事を知つて、却つて少しでも多くの物慾を滿たし、浮世のありふれた樂しみを享樂することばかりを考へてゐるのがある。病を通じて、より眞劍に考へ、眞實努力の生活に入る者と比較して、單に性格の相異と輕々しく看過してよいであらうか。性格の差といふこともあらうが、人間の價値測定の一つの有力な標準がそこに立てられてゐることを思ふべきである。大きな障害、心身の苦痛に打克つて前進する事は普通爲し難い所、況してさういふ場合、眞に自分のたましひを摑み、強い人生自覺を喚起し得るのは、すぐれた、惠まれた人と言はねばならぬ。不治の病を身にうけても、眞に自覺し得るやうなのは稀である。徒らに健康者を羨み、自分の慘めさを歎き悲しみ、何のすることもなく終るといふのが普通な相場である。安價な無常觀を抱いて、唯くよ／＼と無爲に日を過し、あたら一生を終るのである。單なる無常感以上に出で、耀やく靈性の光を仰ぎ、強い力を内心に感ずる事の出來る人はまことに尊い。偉いといはねばならない。殊に思想家・文學者達の中には「病」といふ試煉の十字架の下に、自分の道を深め、輝やかし

い生命の流れに泳ぎ出た人が少くないが、就中わが正岡子規こそは、病に苦しみ乍ら成長進展して行つた稀有のめぐまれた人として、私の頭に強く刻み込まれてゐるのである。

ティヌは藝術家の生活の二つの時期を區別し、「初期の間、即ちその才能のまだ若々しい時と成熟期には、藝術家は物其物を注視し、それを細心精緻な態度で研究し、常にそれを目前に置いてゐる。それを描き出すために苦心し骨折つてをり、極端なくらゐの注意に注意を重ねた誠實さをもつて描いてゐるのである。それが生涯の或時期に達すると、それらを十分に知り得たと信じ、何ら新奇なものをその中から發見しなくなる。モデルは斥け、自分の經驗の中に拾集してゐるもので、劇なり小說なり繪畫なり彫像なりを作り上げる。前期は眞實さ感情の時代であり、後期は技巧の時代であり、衰頽の時期である。」と言ひ、ミケランジヤロ等は、前期が殆んど六十年に及んでゐると述べてゐる。この考へ方には同感される。長く生きてゐたからとて、生命を眞に把握し得るといふやうなわけのものでは無い。努力なく感激のない作家は、長生する程駄作を加へるにすぎないのだ。文學的事業の偉大は長生すると否とではなく、ティヌの所謂眞實の感情の時代である前期の、靈感に觸れ得るか否かによつて決定されるのである。病で夭折する作家が却つて優れた事業・作品を殘す場合の多いのは、彼らが眞に目覺め、物を掴んで燃え上る事の出來る機緣を與へられたからである。遠くに例を求める必要はない。明治の文士・思想家の中若くして逝き、事業の上、たましひの上に、かなり顯著な價値あるものを殘し得た人をあげても十指に餘る。純潔と熱情の文士北村透谷は、二十七（明治廿七年）思想と生活に悶え、病と貧と戰ひつゞけて、月明の晩縊死してしまつたし、明治の女流作家一葉も

が最初に推すに躊躇しない樋口一葉は、二十五歳（明治廿九年）の冬、肺患で斃れてしまつた。頭腦の明敏と、生來の覇氣と、文章の雄麗を以て、浪漫主義時代の評壇を獨歩した概のあつた高山樗牛も、卅三歳（明治卅五年）鎌倉で、さびしく世を捨てた。硯友社の盟主として活躍した尾崎紅葉の死んだのは、卅七歳（卅六年）で、翌年四月には齋藤緑雨が「僕本月本日を以て目出度死去仕候」と新聞廣告にまで戯作者的氣分を豊かに發散して、死んで行つた。その時彼は、卅八だつたと記憶する。新時代の文士としての素質と教養を十分に持つてゐた國木田獨歩が、茅ケ崎海岸で、貧と病の裡に死の旅にのぼつたのは、自然主義文學運動が漸く世の耳目を欹てつゝあつた明治四十一年の事で、彼はまだ三十八の、これからこそほんとうのものが書けるといふ、惜しい時だつたのである。明治の詩歌壇に異常な才を謳はれた石川啄木は、明治の世の終つた年廿七歳のうら若さで、散りうせてしまつた。明治の思想家として私の最も傾到した大西操山・綱島梁川も若くて死んでしまつた。前者は卅七歳（卅三年）後者は明治四十年に三十五歳で亡くなつてゐる。これら二十代乃至三十代で死んで終つた人々は、各〻明治文藝界に獨歩の領分を殘し不朽の光芒を投げてゐる、忘れることの出來ないものばかりである。此等の人々の事を、一人一人考へてみても、貧や病や或は戀に、人一倍の苦を嘗めてゐないものはない。云はゞ、貧しかつたがため、病に苦しんだがため、戀に純情を傾け盡したがため、自己の眞に尊い姿を發揮し得たと言つても、餘り誤つてゐないやうである。

わが正岡子規こそは、最もこの考を適用して誤らない、著しい存在である。彼が文學に力を注ぐやうになつてから、文筆生活を送り始める頃から、殆んど十年近く、貧窮にゐて病に苦しみ通したと言つてもよい。

彼の成し遂げた仕事は、盡く病床の所産と言つても過言でない位である。少くとも、その價値あるものの大部分は病床の所産であつたのだ。その自ら書いたものの片斷に見られる所であるが、實は病によつて自分へ靈をしづかにのぞきこむといふ風の宗教的な思索型の人ではなかつた。〔參考〕「耶蘇信者某一日余の枕邊に來り說いて曰く此世は短いです、次の世は永いです、あなたはキリストのおよみ返りを信ずる事によつて幸福でありますと。余は其の好意に對して深く感謝の意を表する者なれども、奈何せん余は現在の苦痛甚だ劇しくして未だ永遠の幸福を圖るに暇あらず。願くは神先づ余に一日の間を與へ二十四時の間自由に身を動かしたらふく食を食らしめよ。而して後に徐ろに永遠の幸福を考へ見んか。」(墨汁一滴、三月十九日の條)「余は今迄禪宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平氣で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平氣で生きて居る事であつた。」(病牀六尺、六月二日)「唯〻余に在つては精神の煩悶といふのも、生死出離の大問題ではない、病氣が身體を衰弱せしめた爲であるか、脊髓系を侵されて居る爲であるか、とにかく生理的に精神の煩悶を來すのであつて、苦しい時には何とも彼とも致し樣の無いわけである。併し生理的に煩悶するとても、其の煩悶を免れる手段は固より「現狀の進行に任せる」より外は無いのである。號叫し煩悶して死に至るより外に仕方の無いのである。」(病牀六尺、六月廿二日の條)「兆民居士が一年有半を著した時などは死生の問題に就いてはあきらめがついて居つたやうに見えるが、あきらめがついた上で夫の天命を樂しむといふやうな樂しむといふ域には至らなかつたかと思ふ。居士は病氣になつて後頻りに義太夫を聞いて、義太夫評をして居る處などは稍〻

わかりかけたやうであるが、まだ十分にわからぬ處がある。居士をして二三年も病氣の境涯にあらしめたならば今少しは樂しみの境涯にはひる事が出來たかも知れぬ。病氣の境涯に處しては、病氣を樂しむといふ事にならなければ生きて居ても何の面白味もない。（病牀六尺、七月廿六日の條）」

病床を見舞うた僧侶の宙ぶらりの態度を憫んだ彼には、死を怖れず十分のあきらめは出來てをり、自ら病を樂しむとさへいふやうな境地をも味つてゐたものではあるが、神や佛を絶對のものと觀じ、之にひたすら縋るといふやうな、所謂宗教味は彼のもちあはさなかつた所である。現實と闘ふことゝ、現實に對して彼一流の皮肉と透徹した觀察を示し、文藝道各人間としての確固たる一種の信念を把握した事以外の、宗教は持たなかつたのである。現實的な性格で、或點まで唯物的な科學的な生命感を抱いてゐた彼には、宗教的なところは比較的稀薄であつたといふべきであるが、病によつて、より專念になり純一になり得たことは明かである。故鄉から歸京後藤井紫影宛に出した手紙の中に「田舍樣ぎは御つらかるべくと察上候へども貧乏人の病氣したのも隨分つらきものに御座候忽ちにして宿痾療治し盡すべき良法ありとも金がなければ何にもなり不申候小生はいよ／＼やけなり文學と討死の覺悟に御座候」とかいてゐるが、實に彼は病氣によつて強い勇猛心を起し、文學と討死の決心を以てすでにのぞんだのであつた。實に、強い生命感をもつて躍進する氣を彼に起させ、その決心を固めしめたのは、一つには病の爲にあつたと云はなければならない。常人にとつては、之氣を挫折させ、明るい未來の希望を奪つてしまふ痛ましい病苦、彼にとつては反發の動力となり、病苦にめげず自分の領分を大きな努力抱負の下に開拓したのだ。彼はまた一代の偉人と言つてよい。

若い時から、虚弱で、病氣に惱まされてゐた彼の生活は、たとへ病氣に征服され、元氣を挫かれるやうな事は殆んど無かつたとはいへ、ある點まで病氣に規定された生活だつたといふ事は言ひ得るのであるが、その病氣に規定された生活は、ある點悲慘な不幸なものであつたけれども、一面には力强い生活であり、病に依りめぐまれた生活だつたことが考へられる。「病牀時代」の子規が、如何に病に苦しみ惱み、その苦惱の中に、どんな樂に求め、如何に努力したかと云ふ事を述べる前に、病が、彼の生活をよりよくし、より深くする事に、如何に役立つたかを少し考へてみようと思ふ。

子規が病氣で臥床するやうにならなかつたら、何をしてゐたであらう。病氣にもならず、もつと長生してゐたら何になつたであらう。彼を偲ぶとき、時折この種の疑問が頭をかすめるのである。

今日余若シ健康ナラバ何事ヲ爲シツヽアルベキカハ疑問ナレド文學ノ以テ目的トナストモ衣食フ道ハ必ズシモ之ト關係ナシ若シ文學上ヨリ米代ヲ稼ギ出ダスコト能ハズトセバ今頃ハ何ヲ爲シツヽアルベキカ嘗テ僻國ノ先生トヤツテ見タシト思ヘド財産少シナクテハ余ニハ出來ヌ實業ノ事ナドモ面白カルベキモ其方ノ學問セザリシ故今更山林ノ技師トモナレズハヽノ氣樂ナシ自ラ山ヲ持チテ農林セバ此上ノ樂ナレド買山ノ錢無キヲ奈何（仰臥漫錄二、十月十九日の條）

彼自身も亦斯う述懷してゐるが、子規自身にしても、今病牀にゐるのでなかつたなら、どういふ生活をしてゐたらう、如何なる方面に働いてゐたらうかといふ好奇的な疑問が屢々發せられてゐたらうと察せられる。二十二年咯血をした頃は、具體的の生活方針は考へられてゐなかつたが、哲學の志望を捨て、漸々詩歌文學

の道に思を寄せて來てゐるが、この詩歌愛好の熱が、この當時から高まりつゝあつたことは、一面性情的のものであつたと共に他面病患になり感傷的になつてゐた彼の心と多少相關があつたであらうと考へられざるを得ない。即ち彼が文學的傾向を著しくあらはし、又その方面に進んだことも幾分病によつて規定された點が認められるわけである。廿五年大學をやめて「日本」新聞へ入社した折は、當面の生活方針だけは立つてゐたと言ふべきではあるが、機會があればどの方面へ出て行つたか、未だ俄かに判定出來ないのである。卅二年三月發表の「病牀譫語」の中に「政治家とならんか、文學者とならんか、我は文學者を擇ばん。」と云ひ、文學上の成功は、政治などのやうに、閱歷の如何、年齢の老若によらず、又そのたのしみも際限が無く、文才小なる者は小なるだけの樂があり、大才は又それに應じた樂があると論じ、進んで、文學は味の無い議論をするが、繪畫は眞に感情の直接表現であつて、より以上好ましい。が、自分には畫才が無い、といふやうに書いて、自己の文學に滿足し、そこに樂しみを求めてゐる心持をのべてゐるが、それは病によつて痛切に感じさせられるに至つた境涯で、この時でさへ、文學を最も尊いと考へてゐたやうな偏狹な藝術至上論者では無く又自分の性質が文學にのみ適してゐるとのみ考へてもゐなかつたのである。病のため手足の自由も奪はれた彼は、比較的文學に親しみがあり、文學的嗜好が強かつたので、文學方面に力を集中する結果になつたばかりである。見たいとおもふ書物を貸して手元にないので、いら〳〵した氣持になつて「書物などを引證する商賣はもういやになる。才ばかりでやつてゆける政治家や實業家にでもなつたらよからうと思ふことも屢〻の事だが、それも足の立つ中で今となつては妄想ともならぬ。」といふ意味のことを虛子に訴へてゐる

のは、明治卅一年のことであるが、病褥の人となつてからも「文學にばかり終始するつもりはなかつた。病氣にならなければ、他の天地にも侵入して行つたものであるに。」といふ意味の繰言は、時々彼の洩らしてゐる所である。彼が文學の世界に終始し、そこに閉ぢこもつてゐた事は「病」といふ障害のため餘儀なくさせられた點もあるので、彼自身にとつては多少の遺憾もあつたであらうが、一面から考へれば、活動の天地は狭くしたが、それがため活動の勢力を集中し、深刻にする事の出來たといふ點で、却て幸福だつたと言はれよう。第一、彼が文學に發足した事にも病は多少の原因をなしてをり、そこに終始した事は全く病が最大因をなしてゐるといふ上述の點を認めたいと思ふ。彼が文學に志してから殆んど少しの無駄足も踏まず、心をその道に專一にする事をなし得たのは、大方病によつて得られた功徳だつたといふ事を更に一言注意したい。

天下の人餘り氣長く優長に構へ居候はゞ後悔可致候
天下の人あまり氣短く取いそぎ候はゞ大事出來申間敷候
吾等も餘り取いそぎ候ため病氣にもなり不具にもなり思ふ事の百分一も出來不申候
併し吾等の目よりは大方の人はあまりに氣長く相見え申候、

仰臥漫錄二の十月十五日の條に記されてゐる、この言葉は、頗る味深い、よい言葉で、讀むたびに胸をうたれる。どうも彼は自分でも言つてゐるやうに、[illegible]やうに想はれる。實際彼の一生は、やゝ性急に、急ぎすぎたやうにさへ見える。が、それは病氣によつて、より[illegible]に追ひ立てられる氣持になつた點が非常に多いやうに思ふ。病氣にでもならなかつたら、もつと氣長くゆつくりと是

を運んだでもあらう。氣長く構へると言つても、常人のやうに一生何事もせず、無爲にすごす事は無かつたに相違なく、六十、七十迄生きてゐたら、量的には、より多くのものを殘したではあらうが、とにかく、あれほど、駈足はしなかつたらうと思ふ。如何に聰明で、努力家でも、病氣にならなかつたら、幾らかの道草も喰ひ、無駄足も踏んだであらうと考へるのである。不治の病に罹り餘命幾何もないと知つては、多少の無理等には關つてゐられないで、目指すところに全力を傾注したのである。いつまでも死なぬ等とは思はないのであるが、健康時には直接、死ぬなどといふことが念頭にないものであるから、子規にしても、健康なら多少呑氣な氣持に送る日が少くなかつたのであらうと考へられる。アンビシアスな子規が、もう幾年も生きられぬと聞いては、生きてゐる中に出來るだけ最大のことをしようと決心して大いに努力したといふ事は、ありありとよまれる。健康者には他の樂しみがあり、雜念に驅られる場合が少くないが、病者は浮世くさい快樂や雜念に驅使されることが少い。病子規にとつての快樂は、彼の仕事である書くことの上にのみ味はれるより殆んど外の快樂はないといふ狀體でもあつたのである。要するに彼は、病によつて眞劍になる事が出來、心を專一にすることが、比較的少い努力で出來たのであつた。

さて、子規が病氣に罹らずにゐて、而も俳壇や歌壇の革新に思ひを潜め、彼が殘したと同程度の文學上の作品及び主張をなしたと假定して、果して彼の實際認められ、うけいれられたと同樣に認容されたであらうか。このことがまた問題である。私の結論をいふならば、彼の事業が世に注目され認容され歡迎され成功する事の出來たことにも、彼の病氣といふ事實が少からぬ助益を與へてゐるので、この意味に於て彼の病は、

彼の事業に幸を齎した一素因であると云ひたい。前二者は、病が彼の内部に向つて働きかけた效果で、これは彼の事業の成功といふ外部的事情が、特に關係深いといふ、外面的な效果である。これについては、子規の歿した當時、每夕新聞所載の「余が見たる正岡子規子」(末廣鐵腸)の方が要領がよいので、左にその一節を拜借して、私の考をも一緒に述べて貰はう。

兎に角かくまでに世人の同情を惹きたるは彼が八年の久しき不治の病患に苦惱しつゝも、屈せず撓まず其主張を主張し其所信を直言して一歩も回避する所なく、百難を經て百信し來るの意力と識見は向上邁進殆ど其底止する所を知らずと云ふやうな工合であつたから、大概のものは其風を聞てすら既に推かれて仕舞ふ況んや實際其病牀に近て彼の言談を目擊し、而して其議論や作品を文字の上で一讀するに於ては更に幾層の感歎を禁じ得ないのである、且に於て彼の成功(少なくとも俳句の上の)は世人の同情を博したるに因るもので、其の同情は單に熱心なると云ふよりは病魔と力戰苦闘したる點と云はねばならぬ、試みに其反對の場合を想像して、若しも彼れが無病健全でありしならば如何と考て見たならば、彼の遣り口では隨分敵も作り兼ねまじき方で、マサカ暗殺もされは無つたらうが、横鐵の二つ三つは喰つたに相違ない、併し彼には如何なる反對妨害があつたにせよ、結局は夫を通す丈の精神氣魄は備はつて居たに相違無いが、斯く平和の間に全局の勝利を收むるなどは或は出來得なかつたらうと僕は思ふ。

不幸特に重い病氣等の場合には、殊更に周圍の同情が集まるものである。病褥の身で、非常な野心を持つて敢にぶつかつて行つた子規に對しては、同情の上に更に、驚異敬服の念が加はつて行つたのである。この同情と尊敬とが一緒にあらはれた事は、彼の事業を同時に促進させたのである。彼の强い、自分の思ふ事は言放た

く言ひ、思ふ儘にぐん／＼我武者らに實行する性格は、健康であればなほ強烈だつた位のもので、正面から反撥して喰つてかゝる敵をもつと多く持つたであらうが、病床の人だといふ意識から來る同情が、この正面攻撃を幾分緩和し、それが成功を容易に捗らせたと言ふべきであつたのだ。病氣に對する同情が深く働いたので、事業の成功を早め得た等と言へば、子規は不滿不服の顏を歪めるであらう。世の人の、自分の病氣についての同情には衷心感謝して居ながら、時には作品や議論の上にもその同情が深く働いてゐる事を思ひ、いやなおもひになる彼であつたから。ともかく、子規が文學に志したこと、又そこに專念に浸つたこと、さうしてその道に終始し、實際的に成功したこと、何れも彼の病とは、かなり密接な關係がある事が認められねばならぬ。彼は病にくるしんだ人である。病に苦しみ乍ら、思索し、創作し、成長して行つた人である。而して、文學に對する愛や熱心や大望やによつて、病軀を慰め病苦に打克ち、時には病苦を忘れ自樂し得た人である。すべての境遇性質は、直ちに深くその事業や思想の上に影響し、兩者には不離不即の密な關係がある。子規にとつて、病は特に最も密接な關係がある事實であるので、多少の煩をいとはず、その初期からの病狀を略述し、その病と事業との關係についてまづい說明をしてきたのである。が、左に、この期に於ける病態を中心として、その動靜の一般について述べよう。

十四日　佐渡國丸といふ船に乘る。

十五日　出帆せり。霧深く船遲し。

十六日　今日も霧深く立ち罩めたり。

十七日　朝大なる鱶の幾尾となく船に沿ふて飛ぶを見る。此時病起れり。

十八日　晴れて暑し。午後やうやうに馬關に著く。甲板に出でゝ見れば兩岸の山青翠滴るが如く、山麓を出でゝ直にこゝに來るは誠に蓬萊の島に著きたる心地す。

　馬關までかへりて若葉めづらしや

十九日　彦島檢疫所に到り消毒す。

二十日　船中に虎列剌患者死せり。吾病稍ゝ劇し。

二十一日　船馬關を發す。

二十二日　和田岬に著く。病漸く重し。

　須磨の灯か明石のともし時鳥

二十三日　和田岬檢疫所に入る。午後放免せらる。是に於て從軍の義務全く了れり。

廿八年七月廿三日の「日本」にかゝげられた「陣中日記（四）」中には、以上のやうな事がかゝれてある。神戶病院で靜養、病後最初の句である。この記録は簡單ではあるが、卅二年十二月ホトトギスに掲げた、「病」といふ文には、精くはしくかゝれてある。拔萃してみよう。

明治廿八年五月大連灣より歸りの船の中で、何だか苦しいやうな氣持がしたから下等室で寢て居たらば、鱶が居る、早く來いと我名を呼ぶ者があるので、はね起きて急ぎ甲板へ上つた。甲板に上り著くと同時に痰が出たから船端の水の流れて居る處へ何心なく吐くと痰では無かつた、血であつた。それに驚いて、鱶を一目見るや否や梯子を下りて來て、自分

の行李から用意の藥を取り出し、それを袋のまゝで著て居る外套のカクシへ押し込んで、さうして自分の座に歸つて靜かに寢て居た。自分の座といふのは自分が足を伸ばして寢るだけの廣さで、同業の新聞記者が十一人頭を並べて居る。自分等の頭の上は假の棧敷で、そこには大尉以下の人が二三十人、いつも大聲で戰の話か何かして居る。其棧敷といふのは固より低いもので、下に居る自分等がやう／＼坐れる位のものだから、呼吸器の病に罹つて居る自分は非常に陰氣に窮屈に感ぜられる。血を喀く事よりも此天井の低い事が一番いやであつた。此船には醫者は一人居たがコレラの藥の外に藥は無いさうだ。固より病人の手あてなどしてくれる船ではないから、時々カクシの藥を引き出しては獨り呑んで見るけれど、血はやはりとまらぬ。もつとも著物は洋服一枚著たきりで日本服などは無い、外套も引つかけたまゝで寢て居るのである。航海中の無聊は誰も知つて居るが、自分のは無聊に心配が加はつて居るので、只早く日本へ著けば善いと思ふばかりで、永き夜の暮し方に困つた。…(中略)…日本が見える、青い山が見える、といふ喜ばしげな聲は處々で人々の口より聞えた。寢て居る自分も此聲を聞いて思はずほゝ笑んだ。午後には馬關にはひつた。此時室内を見まはして見ると、五六十人も居る廣い室内に殘つて居る者は自分一人であつた。自分も非常に嬉しかつたから、そろ／＼と甲板へ出た。甲板は人だらけだ。前には九州の青い山が手の屆く程近くにある。其山の綠が美しいと來たら、今迄兀山ばつかり見て居た目には、日本の山は綠青で塗つたのかと思はれた。こゝで檢疫があるので此夜は碇泊した。…(中略)翌日は彥島へ上つて風呂にはひつた。著物も消毒してもらふた。此日は快晴であつたが、山の色は綺麗なり、始めて白い砂の上を步行いたので自分は病氣の事を忘れる程愉快であつた。愉快だ／＼と、いはぬ者は一人も無い。中には此きたない船にコレラの無かつたのは不思議だ、などゝいふて喜んで居る者もある。併し此喜びと愉快が三時間とは續かなんだ。三四艘の艀は我々を載せて前後して本船に歸つてから、まだ幾分時もたゝぬに、何やら船中に事が起つたらしい。

甲板を走る靴の音は忙しくなつて、人々の言ひ罵る聲が聞える。或は誰かゞ誤つて海中へ落ち込んだでもあらうか、など想像して居る中に、甲板から下りて來た人が驚くべき報知を持ち來した。それは此船に乘つて居た軍夫が只今コレラで死んだ、といふことであつた。之を聞くと自分の胸は非常な動悸を打ち始めて容易に靜まらぬ。周圍は忽ちコレラの話となつてしまふた。只此後の處分がどうであらうといふ心配が皆を惱まして居る内に、一週間停船の命令は下つた。再び鼎の沸くが如くに騷ぎ出した。終に記者と士官とが相談して二三人づゝの總代を出して船長を責める事になつた。自分も氣が氣でないので寢ても居られぬから彌次馬でついて往た。…（中略）…自分は足がぶく／＼するやうに感ぜられて、室に歸つて寢ると、やがて足は氷の如く冷えてしまふた。これは先刻風呂に這入つた反動が來たのであるけれども、時期が時期であるから、もしやコレラが傳染したのではあるまいかといふ心配は非常であつた。此棺桶船（此船は縁が惡いので此渾名を得て居た）が我最期の場所かと思ふと恐しく悲しくなつて一分間も心の靜まるといふ事は無い。併し郵便を出してくれると聞いて、自分も起き直つて、やう／＼硯など取り出し、東京へやる電報を手紙の中へ封じてある人に賴んでやつた。…（中略）…此夜から喀血の度は一層烈しくなつた。固より船中の事で血を吐き出す器も無いから出るだけの血は盡く呑み込んでしまはねばならぬ。これもいやな思ひの一つであつた。夜が明けても船の中は甚だ靜かで人の氣は一般に沈んで居る。…（中略）…乘合一同思案にくれて居る中、午後四時頃になつて一道の光明は忽ち闇中に輝いて見えた。それは、上陸の許否は分らぬが、兎に角和田の岬の檢疫所へ行く事を許されたといふ事であつた。…（中略）……船は日の暮に出帆した。非常にのろい速力でゆつくりと行たので、翌日の午後に漸く和田の岬へ着いた。…（中略）……翌日の十時頃に上陸の事にきまつたので一同は愁眉を開いた。殊に荷物を皆持つて上れといふ命令があつたので多分放免になるのであらうと勇みに勇んで上陸した。湯に入つて（自分は拭いただけで）折詰の御馳走を喰ふて、珍しく

疊の上に寢て待つて居ると午後三時頃に萬歳々々、といふ聲が家を搖かして響いた。これは放免になつた歡びの叫びであつた。此時の嬉しさは到底いふ事も出來ぬ。

この記錄は、陣中日記より遙かに詳しくかゝれてゐるが、更につゞけて、

自分は人力車で神戸の病院へ行く積りであつたから、肩に革包をかけ、右の手には可なり重い行李を提げ、左の手は刀を杖について、喘ぎ／＼そろ／＼と歩行いて見たが、歩行くたびに血を咯くので、砂の上へ行李を卸して腰かけて休んで居た。聲を揚げて人を呼ぶ氣力も最う無い。折よく連の人が來たので、自分の容體を話し、迚も人力には乘れぬから釣臺を周旋してくれまいかと賴んだ。其の人は快く承諾して、他の連と相談した上で一人を介抱のために殘して置いて出て往た。此際に自分が同行者の親切なる介抱と周旋とを受けた事は深く肝に銘して忘れぬ。二時間ばかり待つてやうやう釣臺が來てそれに載せられて檢疫所を出た。釣臺には油單が掛つて居て何も見えぬけれども人の騷ぐ音で町へ這入つた事は分る。殊に往來の多いのと太鼓などの鳴つて居るのとで考へると土地の祭禮であるといふ事も分つた。上陸した嬉しさと歩行く事も出來ぬ悲しさで今まで煩悶して居た頭腦に、祭禮の中を寢臺で通るといふコントラストに逢ふて又一層煩悶の度を高めた。丁度灯ともし頃神戸病院へ著いた。入院の手續は連の人が既にしてくれたので直に二階のある一室へ這入つた。二等室といふので餘り廣くはないが、白壁は綺麗で天井は二間程の高さもある。三尺許りの高さほかない船室に寢てゐた身はこゝへ來て非常の愉快を感じた。殊に既往一ケ月餘り、地べたの上へ藁稈を敷いて寢たり、石の上、板の上へ毛布一枚で寢たりといふ境涯であつた者が、俄かに、蒲團や藁蒲團の二三枚も重ねた寢臺の上に寢た時は、丸で極樂へ來たやうな心持で、これなら死んでも善いと思ふた。併し入院後一日々々と病は募りて後には咯血に咽せる程になつてからは又死にたくないのでいよ／＼心細くなつて來た。やがて虚子が京都から來る、叔父が國から來る、

危篤の電報に接して母と碧梧桐とが東京から來る、といふ騒ぎになつた。これが自分の病氣のそも〳〵の發端である。

と結んである。子規が從軍記者となつて渡滿したのは、たとひ小康狀體だつたとはいへ、非常な無理な亂暴なことだつたのだ。從軍を希望した理由等については、いづれ觸れる機會が別にあると思ふが、彼の親戚や俳友・同僚皆不賛成だつたのを無理に押しきつて、ゆくことにしたのである。二十九年一月發表の「從軍紀事」といふ文章は、滿洲渡航の海城丸船中及び滿洲に於て子規の屬した近衞師團の管理部長の、新聞記者に對する不當の冷遇を痛烈に書いてゐるものであるが、未完の小說「我が病」の中にも、それはとり入れられてゐる。すでに休戰だつたので、その點では苦しまなかつたが、衣食住の件が悪く、從つて精神的にも苦勞したので、歸國の船中で血を吐くに至つたのである。

神戸病院に入院したのは五月廿三日夜で、七月廿三日に須磨保養院へ轉じたのであるが、五月廿七日から翌月廿日までの「病床日誌」(主として虛子と碧梧桐が記したものといふ)が遺つてゐる。それによつて、今その入院中の症狀の經過及び病床の出來事の大體を記して置く。

五月廿四日、竹村黃塔が見舞つた。廿七日、虛子が京都から來て看護に從ふことになつた。「日本」編輯長格の福本日南が來り、低聲に談笑、苦を覺えず、午後六時五十分喀を催し、稍〻多く血を吐いた。日南、當直醫に容體を問うた所が、「談話最も惡し謹むべし。 今二日程たてば喀血はやむべし。 快方に赴きて後もこの地近傍に止まり市街を離れて養生すべし。」の答を得た。この日、喀血の量は稍〻減じた。廿八日、喀血數度、醫者はもし萬一のことがあるかも知れないといふので、陸氏宛母堂呼寄の電報を出す。福本日南・

大原恒德・歌原識・櫻井一久・竹林黃塔等が來た。夜九時頃より熱昇騰、十時前、脈搏八十四、十時すぎから氣分泥醉の如しとて快眠。廿九日、午前牛乳五勺づゝ兩度に飮み、午に粥少しと玉子、五時すぎ牛乳をのむ。呼吸少し苦しい位で少し落ちついた。竹村夫婦見舞ふ。三十日、午後四時咯血數度、發熱三十九度七分位で苦悶甚しく、布團をぬぐ。井上藁村・竹村黃塔見舞ふ。三十一日、咳に交り時々痰に血が交つて出た。談話を嚴禁すべしと醫師に命ぜられた。六月一日、咯血例の如し。六月二日、正午頃黑き血を吐く。五時頃より發熱三十八度九分に至る。三日、十時頃、「卯の花の里を來りやけど哉」とよみ、「露あかしいちご畑の山かづら」「もりあげてやまひうれしきいちご哉」を作る。正午頃から談話を爲した。四日、母堂及び河東碧梧桐が來た。咯血數回、色皆黑し。牛乳をきらひ、粥を求む。冷えるといふので毛布を胸部にかけ足に靴足袋をはかせた。五日、體溫三十六度三分、晝、刺身一皿、粥二杯半、苺を食す。十時頃から咯血なく、二時十分一度咯血。夜鼻血が出た。六日、咯血の量極めて乏し。夕、少量のシチウを食した。夜やゝ苦しむ。七日、碧梧桐と俳談等を試む。「杜若尼寺あれて人もなし」「涼しさや昔ねる上に牛の雨」の句を作つた。大原恆德歸國。虛子、大阪の兄の召によつて去る。夜、竹村黃塔と談話。八日、大分よろし。晝飯にオムレツ少許、饅一切を喫し、午後枇杷やイチゴを食した。夜平穩。九日、朝體溫三十六度一分、太田正躬氏が來て、談話をしたためか、少し餘計に咳血を催した。夜熟睡、咳も少なく、痰中の血も極めて少くなつた。この日、一時鳥命捨てんとする女あり」の句を作る。十日、血痰を見ず、正午鰻飯一人前を食つた。鳴雪・天外・露石等について談話、其他文學談・雜談をした。十一日、午後體溫三十八度二分に至つたが、別に苦しむ様子はなく、

夜は竹村黄塔と彫刻等の談話をした。十二日、平穏。十三日、虚子松山に去る。苺食べすぎて胃を悪くするといふので、けふは食はなかつた。夕、黄塔・碧梧桐と快談、夕安眠。十四日、平穏、夕發句數句を作つた。十五日、午後、胃が快くなつたとて、粥一椀半、鯛の吸物二人前及び昔の泥鰌鍋の殘りを喜んでたべた。夕方竹村と談話、夜安眠。十六日、鳴雪老へ送る手紙を自ら書いた。病氣以來始めての執筆である。夜、風邪氣味で咳を催したが、痰は餘り出なかつた。十七日、寢臺をかへようとして、一人立たうとしたが足に力がなく、寢臺共をかついで他の方に寄せ新しい寢臺にうつした。四時すぎ、碧梧桐と大いに義太夫について談じた。十八日、朝體溫三十七度、少し苦しといふ。夜安眠。十九日、夜碧梧桐に謡はしめてたのしむ。この日根岸の借家の件につき電報を打つ。二十日、發句をつくる四五十に及ぶ。醫師の許を得て半身を起し蒲團で支へ一時間位、得色あり。終宵眠れず。廿一日、朝少し睡眠、竹村黄塔等見舞ふ。廿二日、松山の夏目漱石及び妹律子に手紙をかく。廿三日、夕食前、體溫三十八度二分に上り、呼吸せはしく心臓の鼓動劇しく苦しむやうであつたが、漸次にして心悸亢進はやんだが、熱は暫く下らなかつた。廿四日、朝體溫三十六度八分、食事も十分出來るやうになつた。廿五日、朝體溫三十七度二分、陸氏に長い手紙をかいた。廿六日、朝體溫三十六度七分、竹村氏等見舞ふ。廿七日、珍本全集上卷を買はせた。廿八日、朝、手紙一封を書し、左腕の痙攣を覺えた。日本社員中山氏が九州へ歸る途中三津へ立寄るといふので、急に母堂が松山に歸國されることになり、出發。廿九日、危坐するに至る。伊藤鼎(久松家々扶　歸橋)の逐次訪問。卅日、喀血の當時左肺には空氣の流通なかりしが今日は漸くこれあるに到れり。然れども尚全くよみえしといふには到らず云々と

と醫師に言はる。七月一日、腰をかけて自ら支ふるを得るに至る。二日、腹部の垢を拭ふ。ナマルに跨ぎて大便し始む。三日、氣分よし。四日、昨日の食ひすぎのためか腹具合わるしといふ。夜は一回も覺めず安眠、病後はじめてのことである。五日、病室をかはる。碧梧桐の肩にすがり歩いて三十間許り途中休むこともなかつた。寒川鼠骨、京都から歸國の途、來つてはじめて會ふ。夜安眠出來ず。胃惡しとて終日食すゝまず。六日、母堂・虚子松山から來著。胃惡く快眠出來ず。七日、異狀なし。午前虚子と句談を試みた。八日、この日、始めてこの病床日誌を子規にみて、「二三日來胃ヲ害シ爲メニ不快ノ感アレトモ今夕稍快シ食後始メテ病牀日誌ヲ見ル堪エズ笑壺ニ入ル　患者自記」と書した。九日、母堂は碧梧桐に伴はれ東歸した。久しぶりに血痰があつた。杖なく室を一週、虚子と小説を談じた。「朝日」社員川島・五十崎兩氏來訪、快談時餘、室を三週し得、夜竹村氏來談。十日、終日多く椅子に倚り、俳句・小說・義太夫等を論じた。竹村來談。十一日、異常なし。默阿彌の脚本・桐草紙等を讀む。十二日、異常なし。十三日、異常なし。十四日、埋木を讀了。午後理髮、涼臺に涼をとり、少しく發熱。十五日から十八日迄、別事なく、雨降りのため「庭前散步ノ壯志徒ラニ禁ズ可カラサルモノアリ」と書した。十九日、澤村・岡崎兩氏來訪。廿日、始めて外出、虚子の夢を其下宿に驚かす。少時休憩、下山手通から病院の裏門を廻つて還つた。

神戸病院に入院すること約二ケ月、始め約一週間は全く重患であつたが、徐々に快復に向つたのであつた。

碧虚抔看護致呉候後は一時間でも人が側に居らねば心細く覺え候事屢々有之從て兩人の顏を見る時は親子にても逢ひし時の感なるべしと思ふ樣の感起る事有之候それにくらぶれば入院當時の勇氣は我ながらえらきものにて看護一人さへ

あれば畳の上に死ぬるには十分なりと定め虚子の京都より電報せし時すら叶ふ筈の考はさもなかりし位に御座候ふまけに四畳敷の一人竭に押しこめられてしかも寝床の上を離れ得ず天井をながめて呻吟するそれをさへ繰よりたりし身に極楽かと迄り思ひ候それを思へば今の老耄は實に恥かしく存候併し病氣の少しづゝよくなると共に卑怯もやう〳〵に恢復し今では高濱なくとも有難淵しとも思はぬ様に相成候只勇氣の全然回復するや否やは無覺束候此一點一生の遺憾に有之候

（七月廿七日　須磨保養院から、鳴雪宛書簡）

と神戸病院退院後まもなく書いてゐるによつても、病牀中の心細さがしみじみと感じられる。七月廿三日退院、須磨保養院に移つた。この須磨保養院といふのは、旅館で、現在の料理家旅館「須磨花壇」である。當時の子規の手紙には「當地須磨寄病院へ保養院のすぐうしろに有之候故時々診察を受け申候病院は直に背後の裏山にありて近く三日に一度づゝ診察に參り申候」とある。虚子も一緒に來たが、廿五日東京に出發した。子規はここに約一ケ月ゐたのであるが、その間の詳しい事情はわからない。「虚子去りて小生の居る家の事なり）のなき皆々京去り小生只一人と相成至極氣樂に有之候而して今は再び淋居して東より二番目の所に移り候」（七月廿七日　虚子宛書簡）等とあるが、現在も殆んど建物はそのまゝ殘つてゐる由で、子規の寓居の住所は大丸なかつたのである。七月三十日かいた手紙に「病氣追々によろしく五町や十町の散步は自由に出來申候實は少しはにてもあれど二階段でも上ふ樣にはあられず實に食ふ事は毎日午後鷄肉の内といふたしろ三、喰ひ申候者には全く飽きはて何の味も無之それには困りはて候（小使）小生一將且上句には體顏可苦（五百木良三宛）とかき、又、小生今月十日邊には一旦歸鄕の考に候（八月五日附書簡）と轉

生もやう／＼に元氣づき十五日頃には當地一旦引揚歸鄕する積に有之候」（八月九日附書簡）とあつて、須磨では十日か二十日位靜養の豫定であつたらしいが、實際須磨を出發したのは八月廿日になつた。これは風邪氣味であつたため遲延したのらしい。「先日來風邪のところ昨今大分よろしく相成候近日歸鄕のつもりに候」（八月十八日附、碧梧桐宛書簡）とあるのである。須磨に來てからは、散歩位には不自由のない身體になつてゐたのであるが、つれ／″＼のまゝに俳句の方には大分身をいれてつくり、東京から「俳家全集」をとりよせ、古俳句を新によみ直したり、俳句や一般文藝に關する議論等もたび／＼手紙に認めたりした。又「日本」新聞へいくつかの文章をも寄せた。源氏須磨の卷等をよんで、殊にあはれ深く覺えて興に入つたと言つてゐる等も注意される。

八月二十日須磨出發、岡山に一泊、翌日廣島着二日滯在、鳴雪と舊を談じ、廿四日夜三津着、廿五日朝松山に歸着した。湊町四丁目十九番戸大原恒德宅に落ちつき、間もなく友、夏目漱石の下宿に移つた。漱石はこの年四月、松山中學へ赴任したので、二番町二番地八番戸上野方の離座敷にゐたのであるが、子規が來たので、漱石はその二階に移り、二階二間を漱石、下二間を子規が使用したのである。「歸鄕の舟中はげしくゆられ候ためにや其時はさしたる障もなく體溫も平常なりしが着松後とかく頭痛勝にて起居不自由に暮し居候さりとて前よりわろき程には無御坐候」（八月廿九日附書簡）とあり、九月七日の手紙にも「訪問者多きと多少の躰溫の昇降あるとの二原因にてまだ道後へも三津へも高濱へも參らず」と報じてゐる。又十月二日の手紙には「小生其後追々健全に赴き候處ふと逆上の結果鼻血と相成り二三日難儀致候へども四日目よりは全

く相やみ其後は只用心のため臥蓐致居候謂より醫師兩人に診察爲致候今日は大分よろしき故起きて手紙などしたゝめ候」とあり、十月十日の手紙には「十四五日許り前鼻血のため少し難儀いたし候へどもそれも一週間にて略全快いたし候それも毎夜運座に夜の更け候ため逆上に及び候ものと人皆申居候自分も原因はそんなことなるべしと存居候一昨晩より又々運座をはじめ候處それ故かあらぬか今朝も逆上の氣味有之用心罷在候四五日内には當地出發云々」と書いてゐる。松山の俳友と大いに運座等をして俳書につとめたことについては、やゝ詳しく、彼の俳句のことを述べる時に書いてみたいとおもふ。この松山に靜養中の容體は以上のやうであるが、最後にあげた書簡中にもある如く、漸く快復しかけた病後の身心にとつて、夜更かしをして毎晩運座等をしたことは、靜養の意味をなさなかつた觀がある。さういふわけで十分快復したのではなかつたが、十月十九日に松山を出發同日廣島にゆき、二十一日には須磨保養院から、郷里の叔父にあてた書牘には「明日當地出發可仕候廣島より須磨迄汽車にて通し候へども何のさはりもなく候今は逆上も大方なくなり心神すが〳〵しく相成候云々」とかいた。廿五日大阪の旅館でかいた碧梧桐あての手紙には「小生も大分よろしくなり候故あづまの秋もこひしく須磨迄出掛候處僂麻質斯に而左の腰骨いたんで歩行困難に相成候當地にては全く動けぬ程なりしを服藥の効によりて今日は大分心よく相成候明日は少しはあるき得べきかと樂み居候」とみえ、例の病氣の方は旅行中さほど變化はなかつたらしいが、神經痛の兆候がはじめてここにあらはれかけたのであつた。後は奈良を廻り十月末に一年以上留守にした東京に歸つてきたのである。「病氣は血中の障も無之候處只リウマチ許りは寒い日に起り來り相困り候今日抔も少し寒き爲か多少熱有之候」（中略）

歸京以來未だ好機無き故醫者の診察を乞はず候近日馴染の醫師に見せ可申と存候」（十一月二日、大原恒徳宛書簡）とあり、又十一月二十四日の手紙にも、「小生持病は少し快く先月三十一日やう／＼歸京致候處その後神經痛とか申ものにて足腰たゝず今に臥褥致居候殊に數日來感冒の氣味にて熱發少々昨今は書見寫字も不叶不自由致候」（藤井紫影宛書簡の一節） 等とあり、其他の書簡等を參照すると、歸京したばかり十一月中は出社も出來ず、十二月中は出社したこともあるが、すぐ翌年一月一日からは再び褥中に呻吟する身となつた。始め子規は單純にリウマチだと考へてゐたのであるが、三月十七日にリウマチ專門とかの醫師の診察で、通常のリウマチでは無い事を知り、大いに煩悶して居る。同日、松山歸郷中の虚子に左の如く訴へてゐる。

貴兄驚き給ふか僕は自ら驚きたり今日の夕暮ゆくりなくも初對面の醫師に驚かされぬ醫師は言へり此病は僂麻質斯にあらずと

歩行し得ざる事こゝに五旬體溫高き時は三十九度に上り低き時は三十五度七分に下る忽ち寒くして粟肌に滿ち忽ち熱くして汗胸を濡ふすしかも一日も精神の不愉快を感じたることなし詩を作り俳句を作るには誠に誂へ向きの病氣なりとて自ら喜びぬ俳友も時々おとづれくるゝに期せずして小會を開くことさへ少からずきのふは朝より繪師社友從軍同行者と漸次におとづれて點燈後鳴雪翁來給ひたりやがて碧梧桐紅綠來りぬ一會を催して別れたるは夜半近かりけん誠に面白き一日なりけりけふは歷史談など面白く讀み居る最中に醫師は來りしなり

僂麻質斯にあらぬことは僕も略ゝ假定し居たり今更驚くべきわけもなしたとひ地裂山摧くとも驚かぬ覺悟を極め居たり今更風聲鶴唳に驚くべきわけもなし然れども余は驚きたり驚きたりとて心臟の鼓動を感ずる迄に驚きたるにはあらず

醫師に對していふべき言葉の五秒間おくれたるなり

五秒間の後は平氣に復りぬ醫師の歸りたる後十分計り何もせず只枕に就きぬ其間何を考へしか一向に記憶せず云々

四月の十日前頃から少しづゝ歩行が出來るやうになり、母のすゝめで、車で上野の櫻をみてかへつたやうなこともあつたが、それも束の間のよろこびで、十五日頃は歩けないやうになつた。

扨私尻の病氣は今日始めて宮本氏の診察を得申候（同氏は先日來病氣なりし）臀尻の穴は背中の穴とは關係無く獨りとかに候由申候尤直接の關係なけれど性質は同じやうなものと申す事に候併し病人の事なれば塗布を施す譯にも行かず只放任しおくものなれば一寸直るといふものには無之候由に御座候然し此儘で一生當ることの出來ぬものなれば實に閉口の外無御座候それがために近來は毎日發熱致候發熱は少しも助力無之候からだ中寸白も傷まず病氣になることゝ覺悟致候（四月二十八日附　大原恒徳宛書簡）

とあるのでも、この頃の病態は略ゝ想像されよう。八月九日の手紙にも、病氣は依然直りもせず、へりもせず、氣候の暑いため心持は善い方である、昨日四ヶ月ぶりに行水をしたが、熱は八度許り出たが、氣分には別に變り無い等と書いてゐる。どうにか室内の歩行が出來、熱もないやうになつたのであるが、身體は衰弱してゐたので、書くことに一面熱情にたつたとはいふものの、この病氣では、新聞の俳句の選だけでも堪へられぬ程の重荷だつたのである。九月には上野の三宜亭の「新體詩人」の會に出たり、元光院に仲秋の明月を賞したりした。十月廿五日不折へのたよりに「明日は露月送別會にて日暮里へ出かけ候」とある。露月の秋田へ歸る送別會を兼ねた催であつたのであるが、幾分小康狀態を得たことが想像される。十月中、胃病を病

んだが、十二月には開花樓に平家琵琶を開き、大晦日には、假に病褥を離れた。

三十年一月には子規庵に新年發會式をやり、懇親會を長蛇亭でやつたといふやうなことも見える。胃も大分よくなり肺も別に變りはない。たゞ新聞雜誌の方が非常に忙しく一時二時まで夜を更かすといふ有樣で、多少腦を痛めたが、割合身體には障らぬといふやうな書簡を、一月末出してゐる。一月二月は概して熱もなく快かつたやうである。醫者はルチユー毒類似であらうと云ひ、佐藤三吉博士に來て診て貰ひ、外科手術を受けるやうに決め、二月十九日に佐藤博士から診察して貰つた。手術には早いと云ふので、三月廿七日に手術をうけた。三月終頃から身體の具合は段々惡く、それが少し快方に向ふと、又五月末頃から惡化し、一時は非常に苦しんだが、この年も後半期はまづまづ心持よい方ですごすことが出來たのである。快いと言つても「小生近來は先づ心よき方にて五六月大患以來漸く快復に赴き候併し足は今に立たず腰は時々疼痛を催し殊に寒氣の爲に閉口して日によりては起き出でざることも有之候」(十二月廿三日)と書かねばならない慘めさであつた。二月末から三月へかけては八度六七分の熱が普通で、九度以上に昇つた事もあつた。この時は朝は大抵熱も無いので朝の中に仕事を片づけるといふやうにしてゐたらしいが、五月の終り頃の重病の時は、熱は數日間續けて九度以上もあつて、朝も夜も引かないといふ狀態で死ぬかと思ふ程苦しかつたと言つてゐる。この時は看護婦を傭つたりした。腫物は手術後穴癒えず、時時膿汁が流出したが、醫者が穴をやいたのでふさがつた。穴が直ると又手術を受けた。九月二十日前頃元の穴の下に自然に穴が出來、膿が盛に流れ出るやうになつた。そこが一番惡い所で、始めからそこに穴を開けたかつたのださうだが、腰の下の所、背骨

のすぐ近くで骨が多く針を通すに危險で、開け得なかつたのである。で、繃帶代等大分かゝつたらしく、正月頃は藥代五六圓でよかつたのが、年の終り頃は十圓もかゝるやうな有樣だつた。翌年一月一日附の書簡によると、腰は少し腫れ膿は少しづゝ漏れ、足は相變らず立たず、先月中は背中はただれて皮が剝げ、時々針で刺すやうな痛を感じ、狂聲を發する事もあつたが、段々良く、熱も少しもないので、晝頃から夜十一時頃までは机にもたれてをり、朝から晝までは、寒いので床の中で新聞でもみるといふやうな狀態であつたのである。年の暮には俳句の點をつけるためや、新聞の記事、ホトトギスへの原稿等のために非常に忙しく四日程徹夜した。そのためか三十日の晩は珍らしく七度九分の熱が出たが、翌日は何ともなかつたさうである。

翌卅一年にはたいした變化は無く、むしろ思つた程の惡いこともなく暮したといふべきであつた。年末忙しく無理をしたためか、正月十日すぎに、突然四十度の熱を出した。が、二十日頃は平常に復した。「昨年一昨年の今頃に比すれば雲泥の差に御座候只跛ながらも足の立つやうにもならばとそれのみ念じ居候へども一向埒のあかぬ事に御座候」(二月六日)と言つてゐるが、三月十七日には、一年振(實は昨年一月以來外出しなかつたのだ)に門を出て人力車で郊外廻りをして歸つて來た。この頃血痰が出た事があるが、二十一日でなくなつたらしい。五月頃は椽に縋つて飛ぶやうにして庭に出る事が出來るやうになつた。九月廿六、廿八日に、八度五分からの九度近くの熱が出た記錄にあるが、背中の方等も存外好かつたらしく、いつも惡くなる九月もまづ無事にすぎた。時々は熱が出る事等はあつたらしいが、「昨夜鳴雪碧梧桐と共に訪ね十時過歸られて後少し發熱加ふるに胃と腸とになやまされて不寐今日は閉口致候」(八月六日)といふやうな事が記されてあ

る位で、七月向島へ行つた事、(「夕涼み」)八月日暮里迄行つた事、九月に外務省官舎に加藤の叔父を訪ひ、五百木瓢亭の宅へ寄つて歸つたやうな事もあり、大分よいやうな風であつた。九月には腰が痛み、飛び出した腫物に口があき熱が出たりした事もあつたが、「私は今頃心持よき盛りに御座候」(十月十日)といふやうになつた。

卅二年になると、一月は發熱臥床したことが多かつたやうであるが、二月は幾分良く、三月末頃から四月初にかけて、風邪の氣味で發熱した。五月にはかなり苦しめられた。

私ノ病勢其後やうやく重り五日頃より發熱亂調子にて晝夜おし通しに苦められ三四日ハ睡眠も出來ず宛然一昨年の容態に類似致居候此二三日稍心地よく昨夜よりハ熱ノさしひきが毎日一回ときまり眠も出來申候然ハ昨日の夕方ハ卅九度四分に候今の處でハまだ一昨年のやうに衰弱不致候へとも此上毎日つゞけさまにやられたら終にハ全く弱り可申候腰部は痔瘻にてハなく矢張同じものゝ由其痛の甚敷なるにハ困りきり候毎日繃帶のとりかへにハ大聲あげて泣申候平時にても痛みて堪へ難きこと多く誠にもてあまし候體の動きがむづかしく咳嗽さへ一々腰部にひゞきて困難するなど總て一昨年に似てをれども今年の方が輕くて何事もしやすく候一切の食物ハやめにして牛乳と果物ばかりに御座候(五月十二日)

とある。この時のことは「牡丹句錄」の文で發表されてゐる。四月二十日頃から臀に新しい穴が出來、そのため臥褥してゐたのに、五月五日頃から發熱して大困りであつたのであるが、それも直り、時々發熱するとか、胃腸が惡くて困るやうなことはあつたらしいが、數月を經過した。九月二十日頃からは毎晩發熱三十九度以上、偶には四十度以上にも昇るやうな狀態で、一ケ月以上もつゞいたらしい。四十度もあるやうな時、談話を續けても、これ程苦痛ではなかつたらしい。一つは病氣にも發熱にも馴れて來たためであらう。晝間は比較的

氣分よく、道灌山へ行つた（九月）こともある。この年外出したのは、三月と八月神田の虚子宅へ行つたこと、十一月本鄕金助町の岡麓宅へ行き（〔本鄕まで〕）その翌々日小石川原町の香取秀眞宅を訪ねた（〔小石川まで〕）こと等である。冬は比較的良かつたらしい。節期にも徹夜するやうな無鐵砲をせず、幾分早寢をするやうにも注意したためもあらうが、「去年よりはからだが少しよきやうに御座候」と感じながら、越年することが出來た。

卅三年には四月十八日虛子宛書簡に「一昨々夜より少し血痰あり平臥致居候」等とあり、八月十三日朝、二十八年以來ない多量の咯血をした。數日筆もとらなかつたが、この頃から特に衰弱を加へて來たやうである。十一月からは歌や俳句の例會も子規宅でやらないことになつた。

小生の衰弱は月々日々に相增候事故今更の事には無之候へども、殊に今年の夏以來衰弱一方ならず、終に例會を廢するの已むを得ざるに至り候。自分も甚だ口をしく殘念に存候へども最早致方も無之候。右の次第故俳句の添削、書狀の往復は勿論、其他一切の事皆御ことわり申上候。成るべく靜養を旨としたる上にて病氣に多少の間あらば、日本とホトトギスとの上に力を盡すべく、此新聞此雜誌に小生の名現れ候間は六疊の病室に籠りてガラス越の日光をあびつゝ猶ながらへ居候ものと御推察被下度候。（十月二十三日記、「ホトトギス」所載の消息の一節）

とある。十二月廿七日、故鄕の大原叔父宛の手紙の中に、

私は此頃局部の痛はげしく一昨々兩日の如きは苦痛も其極に達し暫くては最早生存の必要なしと迄思ひつめ候處今日は大分ゆるみ安心致候併し何のためにか横臥より起返り迄いざり行くも難儀なく御座候從て右向ても左向ても……

ば無之躰の置様に困難仕候睡眠も屢目さめて思ふ様には參らず候繃帶取換の時抔は時々泣く事も御座候併しそれにしても今年もどうやら過ぎて私も間もなく卅五歳に成候事うれしく候

と記されてゐるが、當時の病躰が察せられる。昨年頃からは俳句分類等も殆んどずつとやめてゐたのであるが、ホトトギスには始からその一部分を出してゐた。が、この年の四月號からは俳句分類の掲載をやめ、隨問隨答も、この月から載つてゐない。又十月には、「小生の宅に於ける毎月の例會は俳句の方も歌の方も皆來月より相廢し申候」(十月、ホトトギス消息)と述べ、この年の蕪村忌には子規は別室にゐて、寫眞撮影にも出來なかつたやうな狀態であつた。元氣な強い性格の彼も、涙もろくなつて度々涙を流すやうなこともあつた。翌年の五月號からはホトトギス誌の募集俳句の選をも全然やめたのである。

三十四年には更に病狀は進んで來た。昨年は、四月に秀眞・格堂の二人と一緒に、本所の伊藤左千夫を訪ね、龜戸まで廻つた事(「龜戸まで」)もあり、(この時は途中發熱したした)六月、麓のところへ行つた事もあつたが、もう外出等はおもひも寄らなかつた。「をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛の烈しい時には仕樣がないから、うめくか、叫ぶか、泣くか、又は默つてこらへて居るかする。其中で默つてこらへて居るのが一番苦しい。盛んにうめき、盛んに叫び、盛んに泣くと少しく痛が減ずる。」(墨汁一滴、四月十九日の條)等病苦の程も察せられる。隨筆「墨汁一滴」の中には、隨所に病苦の有樣を叙べ訴へてゐる。卽ち一月廿三日、一月廿四日、一月卅一日、三月七日、三月十五日、四月七日、四月九日、四月二十日、四月廿一日、五月九日、五月十二日、六月九日、七月一日發表の文等は皆病狀乃至病苦の有樣をのべてゐるのである。「仰

臥漫錄」二、十月廿六日の「此頃ノ容體及ビ毎日ノ例」といふ文は、自己の病狀をかなり精細に記してゐる。

病氣ハ表面ニサミタル變動ハナイガ次第ニ體ガ衰ヘテ行クコトハ爭ハレヌ。膿ノ出ル口ハ次第ニフエル。寢返リハ次第ニムツカシクナル。衰弱ノタメ何モスルノガイヤデ只ボンヤリト寐テ居ルヤウナコトガ多イ。

腸骨ノ側ニ新ニ膿ノ口ガ出來テ其近邊ガ痛ム、コレガ寐返リヲ困難ニスル大原因ニナツテ居ル。右ヘ向クモ左ヘ向クモ仰向ニナルモイヅレニシテモ此痛所ヲ刺激スル、咳ヲシテモコヽニヒヾキ泣イテモコヽニヒヾク。

繃帶ハ毎日一度取換ヘル。コレハ律ノ役ナリ。尻ノサキ最痛ク僅ニ綿ヲ以テ拭フスラ猶疼痛ヲ感ズル。背部ニモ痛キ箇所ガアル。ソレ故繃帶取換ハ余ニ取ツテモ律ニ取ツテモ毎日ノ一大難事デアル。此際ニ便通アル例デ、都合四十分乃至一時間ヲ要スル。

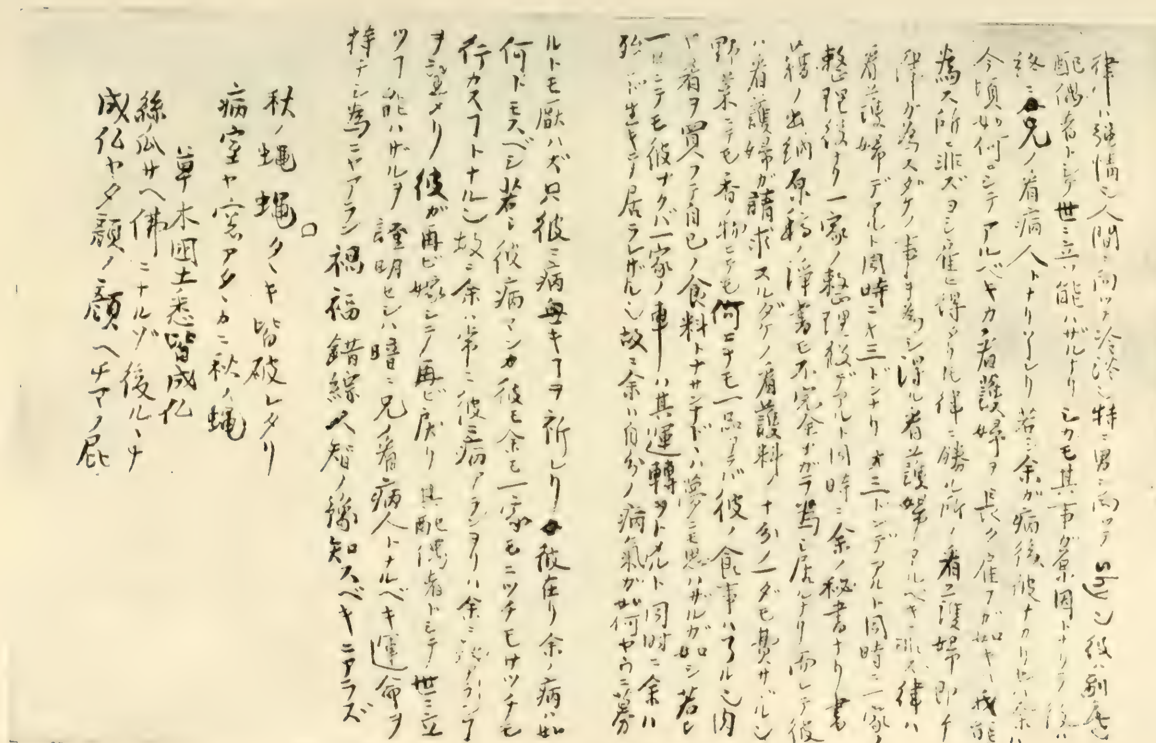
肛門ノ開閉ガ尻ノ痛所ヲ刺激スルノト腸ノ運動ガ左腸骨邊ノ痛所ヲ刺激スルノトデ便通ガ催サレタ時之ヲ猶豫スルノ力モナケレバ奥ノ方ニアル屎ヲリキミ出ス力モ無イ。只其出ルニ任スルノデアルカラ日ニ幾度アルカモ知レヌ。從ツテ家人ハ暫時モ家ヲ離レルコトガ出來ヌノハ實ニ氣ノ毒ノ次第ダ。

睡眠ハ此頃善ク出來ル。併シ體ノ痛ムタメ夜中幾度トナク目ヲサマシテハ又眠ルワケダ。

齒齦カラ出ル膿ハ右ノ方モ左ノ方モ少シモ衰ヘヌ。毎日箸先デ二三度自ラ拭ヒ取ルノデアルガ體ノ弱ツテ居ル日ハ十分ニ拭ヒ取ラズニ捨テヽ置クコトモアル。

物ヲ見テ時々目ガチカチカスルヤウニ痛ムノハ年來ノコトデアルガ昨日邊以來餘ホドツヨクナツテ新聞ナドヲ見ルト直ニ痛ンデ來テ目ヲアケテ居ラレヌヤウニナツタ。ソレデ黒眼鏡ヲカケテ新聞ヲ讀ンデ居ル。

時々湯藥ヲ入レル。熱出ヌ。小便ニハ黄色ノ交リ物アルコト多シ。



律ハ強情ナリ人間ニ向ッテ冷淡ナリ特ニ男ニ向ッテshyナリ彼ハ到底
配偶者トシテ世ニ立ツ能ハザルナリシカモ其事ガ原因トナリテ彼ハ
終ニ兄ノ看病人トナリ了レリ若シ余ガ病後彼ナカリセバ余ハ
今頃如何ニシテアルベキカ看護婦ヲ長ク雇フガ如キハ我能ク
為ス所ニ非ズヨシ雇ヒ得タリトモ律ニ勝ル所ノ看護婦即チ
律ガ為スダケノ事ヲ為シ得ル看護婦アルベキニ非ズ律ハ
看護婦デアルト同時ニオ三ドンナリオ三ドンデアルト同時ニ一家ノ
整理役ナリ一家ノ整理役デアルト同時ニ余ノ秘書ナリ書
籍ノ出納原稿ノ淨書モ不完全ナガラ為シ居ルナリ而シテ彼
ハ看護婦ガ請求スルダケノ看護料ノ十分ノ一ダモ費サヾルナリ
野菜ニテモ香ノ物ニテモ何ニテモ一品アラバ彼ノ食事ハ了ルナリ肉
ナド買フテ自己ノ食料トナサントハ夢ニモ思ハザルガ如シ若シ
一日ニテモ彼ナクバ一家ノ車ハ其運轉ヲ止ルト同時ニ余ハ
殆ド生キテ居ラレザルナリ故ニ余ハ自分ノ病氣ガ如何ヤウニ募
ルトモ厭ハズ只彼ニ病無キコトヲ祈レリ○彼在リ余ノ病ハ如
何トモスベシ若シ彼病マンカ彼モ余モ一家モニッチモサッチモ
行カヌコトトナルナリ故ニ余ハ常ニ彼ニ病アランヨリハ余ニ死アランコトヲ
望メリ彼ガ再ビ嫁シテ再ビ戻リ其配偶者トシテ世ニ立
ツコト能ハザルヲ證明セシハ暗ニ兄ノ看病人トナルベキ運命ヲ
持チシ為ニヤアラン禍福錯綜人智ノ豫知スベキニアラズ

○

秋ノ蠅蠅タヽキ皆破レタリ
病室ヤ窓アタヽカニ秋ノ蠅
草木國土悉皆成佛
絲瓜サヘ佛ニナルゾ後ルヽナ
成佛ヤ夕顔ノ顔ヘチマノ屁

妹律子に對する感謝の言葉其他

食事ハ相變ラズ唯一ノ樂シミデアルガサウ思フヤウニ食ハレヌ。食フトスグ腸胃ガ變ナ運動ヲ起シテ少シハ痛ム。食フタ者ハ少シモ消化セズニ肛門ヘ出ル。

サシミハ醤油ヲベタトツケテソレヲ飯又ハ粥ノ上ニカブセテ食フ。

佃煮モ飯又ハ粥ノ上ニ少シヅツ置イテ食フ。

歯ハ右ノ方ニテ嚙ム。左ノ方ハ痛クテ嚙メヌ。

朝起キテスグ新聞ヲ見ルコトヲヤメタ。目ヲイタハルノヂヤ。人ノ來ヌ時ハ新聞ヲ見ルノガ唯一ノヒマツブシヂヤ。

食前ニ必ズ葡萄酒(盃イノ)一杯飲ム。クレオソートハ毎日二號カフセルニテ六粒。

三十五年には愈ゝ重くなる許りであつた。正月十七日から何となく苦しく不安の狀態で、碧梧桐・虛子・鼠骨其他が警戒したが、三四日の中に快くなつたが、この事件以來諸門下は看護輪番を設け、概ね午後から深更まで枕頭に侍した。五月七日の朝から、今迄に無い程の苦痛があつて八日には少しくよく、持ち耐へてゐたが、十三日には「未曾有の大苦痛を現じ、心臟の鼓動が始まつて呼吸の苦しさに泣いてもわめいても追つ附かず」といふ風で、十五日朝は三十四度七分の低熱が一向にはらず、非常の苦しさで「土一塊牡丹生けたる其下に」の句を辭世のやうなつもりで書き殘したと言つてゐる。「五月もまた是から十五日あると思ふと、どう暮してよいやらさつぱりわからぬ。」やゝ氣を取戻してから、斯う書いてゐるが、まことに彼の心持・苦痛の程が思ひやられる。十五日午後から痛苦薄らぎ一先づもちこたへたが、日々に衰弱を加へ、劇しい苦痛に悩まされたのである。もう身動きの出來ぬやうになつては煩悶をして氣違のやうな苦しみをする。その苦

しみをうけないやう如何に工夫しても駄目だ。仕方なくて絶叫號泣する。看病人にあたり散らす。夜少し眠氣がさしてきた時、一日の苦痛が終るのであるが、朝、寝起の苦痛を思ひ出すとぞつとする。寧ろ眞の狂人となつてしまへば樂であらうと思ふけれどそれも出來ぬ。若し死ぬることが出來ればそれは何よりも望むところである。……誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか。誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか。親切な女の看病さへ、たゞ自分の苦を見てゐる外はない。去年邊まで唯一の樂であつた飲食の欲も却つて身體を損はし、晝夜もがき苦しむやうになつてしまつた。去年は謡をきき義太夫をきいて樂しんだ事もあるが、もう駄目だ、友が親切に軍談師を呼ばうか活動寫眞をやらうか等言つてくれるのさへ頭を痛める。「如何にして日を暮らすべきか」「誰かこの苦を救ふて呉れる者はあるまいか」こんなことを考へ、苦しみ、洩らしてゐるのは、死ぬ三月程前の事である。

支那や朝鮮では今でも拷問をするさうだが、自分はきのふ以來晝夜の別なく、五體すきなしといふ拷問を受けた。誠に話にならぬ苦しさである。（十二日）

人間の苦痛は餘程極度へまで想像せられるが、しかしそんなに極度に迄想像した樣な苦痛が自分の此身の上に來るとは一寸想像せられぬ事である。（十三日）

足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、大磐石の如し。僅かに指頭を以てこの脚頭に觸るれば天地震動、草木號叫、女媧氏未だこの足を斷じ去つて、五色の石を作らず。（十四日）

「日本」新聞に連載してゐた「病牀六尺」の九月十二、十三、十四日の分は唯こんなに病苦を語つてゐるだけ

で、もう彼の雄辯も聞かれない。消えかゝつてゐるいのちをおもはせる。

十八日朝の十時頃、様子が悪いといふ知らせで、河東碧梧桐は早速駈けつけた。子規の枕邊には陸氏令閨と妹律子がゐられた。「高濱も呼びにおやりや」と僅かに子規は一言言うたので、碧梧桐は電話口へ虛子をよびに行つて歸つて來ると妹律子は病人の右側で墨を磨つてゐる。子規が辭世の句を殘さうといふのであつた。

軈て例の畫板に唐紙の貼付けてあるのを妹君が取つて病人に渡されるから、何かこの場合に書けるのであらうと不審しながらも、予はいつも病人の使ひなれた軸も穗も細長い筆に十分墨を含ませて右手へ渡すと、病人は左手で板の左下側を持ち添へ、上は妹君に持たせて、いきなり中央へ

糸　瓜　咲　て

とすら〳〵と書きつけた。併し「咲て」の二字はかすれて少し書きにくさうにあつたので、こゝで墨をついで又た筆を渡すと、こんど糸瓜咲てより少し下げて

痰　の　つ　ま　り　し

まで又た一息に書けた。字がかすれたので又た墨をつぎながら、次は何と出るかと、暗に好奇心に驅られて板面を注視して居ると、同じ位の高さに

佛　か　な

と書かれたので、予は覺えず胸を刺されるやうに感じた。書き終つて投げるやうに筆を捨てながら、横を向いて咳を二三度つゞけざまにして痰が切れんので如何にも苦しさうに見えた。妹君は板を横へ片付けながら側に坐つて居られたが病人は何とも言はないで無言である。又た咳が出る。今度は切れたらしく反古で其痰を拭きとりながら妹君に渡す。痰

はこれ迄どんなに苦痛の劇しい時でも必ず設けてある痰壺を自分で取つて吐き込む例であつたのに、けふはもう其痰壺をとる勇氣もないと見えた。其間四五分間たつたと思ふと、無言に前の畫板をとりよせる。（碧梧桐記）

かくして又幾度か休み筆をつぎ、辛うじて

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をとゝひのへちまの水も取らざりき

の二句をかきしるし、子規自身もしばらくはその字を見る樣子であつたが、それ以上筆を持たうとしなかつたのである。

十八日夜及び十九日朝虚子のかいた、「終焉の記」を左に摘録しよう。

◎三並、鷹見に端書にて模樣惡しき由報知す。

◎秀眞來る。去る。

◎鳥堂來る。去る。

◎午後五時前目覺め苦痛甚だしき樣子、モヒ頓服、尚安靜を得ず。五時半宮本國手來診、胸部に注射、其より再び靜穩。

◎昨日は一度粥を食ひたる由、其後はレモン水の外殆ど飲用せず。本日は陸より貰ひしおもゆ少許の外殆ど食物取らず。

◎夕刻おまきさん、加藤令閨來る。去る。

◎午後六時過碧梧桐去る。ホトヽギスの校正を了すべき爲め。

◎午後七時過鼠骨來る。おしづさん來る。

◎午後八時前目覺め、「牛乳を飲まうか」といふ、ゴム管にてコップに一杯を飲む。「だれ〳〵が來てお居でるのぞな」と聞く。妹君、「寒川さんに淸さんにお靜さん」と答ふ。直ちに又昏睡。

◎大原恒德氏に手紙を出す。

◎鷹見令閨來る。

◎母君に大原へ打電をいかゞすべきか相談せしところ、昨日病人も「大原へは電報を打たうか」など申居りたれば打つて呉れとの事。直ちに「シキヤマイオモシ」と打電す。

◎子規子昏睡の狀打つゞく。母君妹君と蚊帳を釣る。蚊帳顏面にかゝりし時兩手を擧げて之を支ふるの狀をなせしも尙熟睡。

◎子規子熟睡の狀尙續く。鷹見氏令閨と母君と枕頭に殘り、余と妹君と臥す。

◎時々常に聞き慣れたる子規君のウーン〳〵といふ聲を聞きつゝうと〳〵と眠る。

◎暫くして枕元騷がしく、妹君に呼起さるゝに驚き覺め見れば、母君は子規君の額に手を當て、「のぼさん〳〵」と連呼しつゝあり。鷹見令閨も同じく「のぼさん〳〵」と呼びつゝあり。余も如何の狀に在るやを辨へず同く「のぼさん〳〵」と連呼す。子規君は稍顏面を左に向けたるまゝ兩手を腹部に載せ極めて安靜の狀にて熟睡すると異ならず。しかも手は冷えて冷たく、額亦僅に微溫を存ずるのみ。時に十九日午前一時。

すでに死は刻々せまつてゐたことは皆承知してゐたが、なほ四五日は持つだらうといふやうな醫師の話だつたので、遂に臨終を誰も知らなかつた。母上は、蚊帳の外にゐて時々中をのぞいてみても別に異狀がない、唯餘り靜かなので、ふと手を握つてみると、冷たいので驚いて、額をおさへると、稍微溫を感ずる許りで、

すでに息をひきとつてしまつてゐたのである。足かけ八年の間、病臥生活に苦しみ續け而も爲すべき事をなし終へて、その意味深い病床六尺の生活を終つたのである。鬪ひ拔いて、かくも靜かに瞑目したのである。

死亡廣告も出さなかつたが、各新聞に訃報が傳へられるや、各地から涙の弔詞が送られ、車を驅つてくる弔客が相接した。廿一日葬儀の日は秋晴、出棺時刻の九時には早くも會葬者約百五六十名を算した。「鳴雪翁先導、其れから迎僧、位牌、香爐、高張、柩、令妹といふ順序で」(佐藤紅綠の記述參照)門下知友は徒歩に侍し、葬列は靜かに鶯横町を出で花見寺の横を曲つて田端大龍寺に到着、令妹、親戚婦人、三並氏、鳴雪翁、陸翁、門下親昵者、一般會葬者の順に燒香を終り、十一時すぎ埋葬に着手、縱四尺横一尺八寸深さ一尺(無尺)の柩の中に、永久に子規は眠る事になつたのである。而して子規の遺志を尊重し、戒名は「子規居士の墓」と定め、柩上に、「子規正岡常規之墓　慶應三年九月十七日生　明治三十五年九月十九日歿　享年三十六」(三並良書、香取秀眞鑄)と刻した銅板を置いた。

子規の藝術を觀る者、彼の藝術論を明らめようと思ふ者は宜しく彼の病苦を必しも思はなければならぬ。この病苦を除外して、彼の藝術を解く鍵は與へられないと思ふものである。かういふ病苦の中に産み出されたものであるが故に、同情して、その作品や議論は割引して考へてやれと言ふのではない。作品や藝術論の價値は、勿論に無關係である。が、彼の作品と其の理解のためには、かういふ病苦に喘ぎつゝゐたといふ生活狀態は、よく知つておくべきものであると思ふ。彼の作を味ひ、その事業に接する人は、よくもかゝる病床で、かくの如き多量な、而もすぐれた仕事が果されたといふ事を、驚嘆せずにはゐられない。それらの作品

や議論にも實にすぐれたものが多いが、それが、くるしい病床の所産であることを考へて、子規に對する驚異と尊敬の念は一層募らざるを得ないのである。病は子規にとつて、實に生きながらの地獄の苦でもあつたらう。併し凡てはすぎ去つた。明治文壇に巨匠正岡子規の名を永久のほこりとしてもつことが出來たことは實にその病によつてはらまれたものが多きにゐる。彼が病に屈せずして、努力してなすべきを爲し得たことは、眞に私達後進に強い興奮劑を與へるものである。かく考へるとき、彼の不幸は、彼一身の外形的な不幸にしかすぎないもので、實に私達後進にとつては、幸だつたといはなければならない。現實須臾の生活の外形的不幸は精神的高貴の前に何者にも價しない。苦艱の道を經て生命は燦として榮光にかゞやく。

日本新聞に「かけはしの記」を發表した三年後には、滿洲から凱旋の船中で咯血し、以後殆んど病褥の人となつた有樣なので、句作の分量や俳句分類等の仕事は、病床生活以前が多いが、價値ある論文や作品は、主に病床の所産である。特に和歌方面の仕事は殆んど全部病床で出來たのである。新體詩は明治廿九年八月から「日本人」誌上に主として發表されたが、この以前の作は皆無と言つてもよい位である。子規の數少い小說も半、病臥生活に入つてからの作で、「花枕」は卅年三月作「月見草」もこれと同時の作である。彼が歌・俳句を作り、時には新體詩・小說を作り、隨筆・論說・小品の類を夥しくこの病床から送り出した事實は、驚くべきである。而も自己一人の仕事許りではない。病床に毎月句會・歌會を開き蕪村句集や萬葉の輪講を催し或は蕪村忌を修し、卅三四年頃も山會なる文章會をしたりして門下を誘導し、一時鳴雪宅で行はれてゐた蕪村句集輪講を病歿十日前自宅で行つてゐる等彼の熱心・努力は一通りのものでは無かつた。彼はさういふ仕事に

よつて、病の苦を増すといふよりは苦痛を慰められたであらう。病苦を忘れ乍ら筆をとつてゐた事が多いのであらう。外出するとしても一年に數回、人手を借り、車に乗つて行かねばならぬのである。室内を歩く事さへ出來ず、少し惡くなつては寢返りさへ困難を感ずる有樣で、庭の草花を眺めたり時々は繪筆を手にとつてそれを描いて喜んだり或は小鳥籠に遊んでゐる小鳥の囀りを樂んだりする以外、床の間には懸け代へて見る掛軸も無い樣な殺風景な室に終日ねてゐる彼にとつて、實に書く事は、確かに一つの慰藉であつたであらう。歌や俳句の仲間が來て珍しい話でもして笑聲が起る許り、他に變化のない病床の味氣ない苦痛の生活にとつて、書く事は、せめてもの喜びであつたであらう。彼の病床に於ける事業は、苦痛ばかりではなく一つの快樂慰安を感じつゝなされたであらう。然し、ともかく苦痛にしろ快樂にしろ、彼の生命の殆んど全部を傾け盡してゐる仕事であつたのである。この意味に於て偉大なべきであり又事實優れたものであり得たのである。

かへりみて彼の實際生活を思ふと、彼は富裕にして萬全の養生が出來たといふのではなかつた。不治の病である事を考へては、彼は益々文學と討死の決心を強めて行つたのであるが、もし彼に生活費の上に餘裕があつたならば、十分靜養し、身體の回復を待つて始めて仕事に向ふといふ心持の餘裕を或ひは生じたであらうが、彼は記者として新聞社から月給を貰つて生活費に當てる以外には、殆んど何の蓄財もなかつた。彼の書くことによつて病のつれ／＼を慰め僅かに生き甲斐を感じたといふ事實の半面には、又書くことによつて彼は生活を支へねばならなかつたといふ悲壯な不可抗の現實を見逃すことが出來ない。

明治三十年一月から物價騰貴のため卅七圓の月給を貰ふやうになり（日本新聞社ヨリ月給卅七圓ヲモラフト

と八月廿六日の條にもかゝれてゐる）卅三年一月から毎月ホトトギス發行所から拾圓貰つたので、幾分生活は樂になつたやうなものの、母と妹と三人の者が生活するには、いつも不足を告げがちであつた。

> 私ノ考ハ藥呑ンデ野菜クウテ居ルヨリモ、藥ヤメテ肴クウテ居ル方ガ肺病ノタメ宜シト存居候雖シ病氣ノタメワルシトシテモ食物ダケハ少シ贅澤セネバ何分物書クヿガ出來不申候

といふ、例の御馳走主義で、自分だけは多少食物はうまいものをたべてゐたのである。病人としての贅澤をしたのでは無いが、彼の生活程度としては贅澤であつたと言へよう。時には母の針仕事が生活を助けることもあつたし、不足の分は、大原叔父や加藤の叔父の世話になり、陸氏等から援助を受けたことも少くなかつた。内藤鳴雪や晩年には虛子・左千夫其他から援助を受けたことも相當あつたやうである。加藤の叔父から疊を代へて貰ひ、友人弟子達から、ガラス戸やストーブをこしらへて貰つた事等は非常に子規をよろこばせた。雜誌や新聞の上の知人や弟子は非常に多かつたので、それから色々のものを送つて貰つた。書簡集をみても、三十四、五年の部は、殆んど皆、その送られたものに對する禮狀ばかりのやうなものである。特に食物の送り物が多かつた。一つには子規の御馳走論者であることを、大方の者は承知してゐたからであらう。

「墨汁一滴」の二月九日の條に、

> 近日我貧厨をにぎはしたる諸國の名物は何々ぞ。大阪の天王寺蕪、函館の赤蕪、秋田のはたはた魚、土佐のザボン及び柑類、越後の鮭の粕漬、足柄の唐黍餅、五十鈴川の沙魚、山形ののし梅、青森の林檎羊羹、越中の干柿、伊豫の柚柑、備前の沙魚、伊豫の緋の蕪及び絹皮ザボン、大阪のおこし、京都の八橋煎餅、上州の干饂飩、野州の葱、三河の魚煎餅、

石見の鯖の卵、大阪の奈良漬、駿州の蜜柑、仙臺の鯛の粕漬、伊豫の鯛の粕漬、神戸の牛のミソ漬、下總の梨、甲州の月の栗、伊勢の蛤、大阪の白味噌、大徳寺の法論味噌、薩摩の薩摩芋、北海道の林檎、熊本の飴、横須賀の水飴、北海道の鰤、其外アメリカの蜜柑とかいふはいと珍しき物なりき。

と山澤ならべてゐるが、買ひ物だけでも、大分彼の味覺を喜ばせる事が出來たのである。

學生時代には、常盤會給費生だつたので、本等に比較的買へたのであるが、自活するやうになつてからは、二十圓か三十圓の月給で母や妹を養はねばならぬといふのであるから、本一冊買へぬといふ有樣で、學生時代よりも却つてきりつめた生活だつたが、晩年は五十圓もとつたので、幾分生活は落ちついて來たと言つてもよいのであるが、藥代等もかゝるので、隨分貧しいきりつめた生活をして一生を終つたのである。彼のもちもの、額や花瓶、茶托や殆んど皆友人の拵へた物乃至人から貰つた物ばかりと言つてもよいのである。

小生の俳句を金に換算してまさか一字千金といふ價もあるまじく一山百文も可愛さうなれば一句十錢の値打とつもればチト過當ナレド今迄三萬句と見て三千圓に相成申候併し三萬句の内には駄句惡句多き故かりに一萬句取れるとして一千圓也、迄に一千圓はなさけないやうにもあるが又考へて見ると素寒貧から千圓ためたのもえらいやうにもある（明治卅三年一月十一日附、大田正躬宛書簡の一節）

この書簡を「同人」の昭和六年「子規居士三十週忌記念號」で紹介した[illegible]氏は次の如く説明して居る。

「先年、松山の[illegible]氏の邸宅を訪ねた時、同君少時の話、母堂に[illegible]と話された。[illegible]氏は「サア五十圓ぐらゐでせうか」と答へると、母堂はやゝ憤慨して居られた様、[illegible]、ハラ〱と涙をこぼして、

「升（ノボ）ば生きて居る内は大變お金に困りました」と云はれ、又、やゝ暫くして「升（ノボ）は一枚の短册もお金に換へませんでした」と云はれた相である。餘裕の無い子規の病生活に、若しも一枚の短册代だけの金でも毎月餘分の收入があつたなら、子規の望んだ書物も子規の好んだ果物も思ふがまゝに買ひ與へて、先立つ我が兒に如何ばかりの滿足を授け得させたであらうか。此の感懷が急に母堂の胸に迫つたものに相違ない。母堂の令弟加藤恒忠氏は常々「姉は實に物に動ぜぬ婦人だ、姉ながら敬服する」と讃稱されたと聞くが、其れ程の母堂が杉番氏の話に人前を憚らず潸然と涙に咽ばれたのである。子規が一句拾錢に評價した事も母堂の此の述懷と對比すると、哀切の念に打たれざるを得ない。

生前物質的に惠まれなかつた子規、一枚の短册を金に代へた事もなかつた彼が、その歿後、寸簡零墨と雖も珍襲されてゐる現狀を、彼自身全く想像もしなかつたところであらう。明治の文豪の中で、森鷗外は餘り筆蹟を多く殘さなかつたらしいが、その筆蹟の市場價値から言つて漱石と子規とは兩大關の觀があるが、このことは、實に兩者の景仰者の多い證據であらねばならぬ。藝術價値は市場價値を以て測定せらるべきではないが、彼の藝術作品又その筆蹟がいたく珍重されてきた事實は、彼をして僅かに心を慰むるものがあらう。しかし彼は地下に於て、苦笑を以て酬ひるでもあらうか。彼はその信念に於てすでに物質を蹂躙してゐた。少くともその藝術的精進の前には、物質的價値は多くの顧慮を與へられてゐなかつたのである。實に彼の殘した藝術作品は、はるかに物質的世界を眼下に睥睨して千古不朽に、この地上に光りかゞやくであらう。私は一つのエピソードを語つて、この章を終らうとおもふ。

子規は死ぬ二年程前から寫生畫を描き始め、死ぬ數ケ月前から繪をかくことと又畫帖を眺める事を樂しみと

し、可成り藝術味のあるものを愛してゐる。中村不折・下村爲山・淺井忠等の畫家と親しかつたので、畫に趣味を感じ、一つは病床のつれづれに、段々描いてみようとするやうになつたのである。畫帖を眺めたりして時間を消す事も多かつた。斷片的な畫評は相當殘してゐる。死ぬ一月も前の事であるが、南岳の百花繪卷物を手に入れた時、彼は非常に喜んで、「狂喜雀躍朝夕枕邊に置きてあけては見あけては見、とりながめて暮み申居候」といふ有樣であつた。貧乏で、而もいつ死ぬかわからぬ重患の彼が、二十圓や三十圓はとうにでもしてこしらへるから、是非讓つて貰ひたいといふ非常な熱心さであつたので、遂に彼の所有に歸したのである。內田魯庵の「きのふけふ」に、尾崎紅葉が死ぬ少し前に、丸善で百何圓かのセンチュリー辭典を買つて、喜んで歸つたといふ話が、美談として語られてゐるが、智識欲を滿たす辭書と、藝術鑑賞欲を滿足せしめる畫卷の相違はあるものの、兩者の眞美を追求した純粹性は、時に一致點を見出すものである。所有慾は、むしろ純粹な美的觀賞をさまたげ美的欲求を不純にするものであるかも知れない。併し、いいものを手本に置いて、いつも眺めてゐたいといふ欲望は、藝術家として當然さうあるべきことである。もういつ死ぬかわからぬ、三日でも四日でも自分の所有にして、藝術品をおもふまゝにたのしみたいといふ心は、眞の藝術家の心境である。藝術品を物質とみることから離れて、藝術作品の純美なるものにふれようとする願望に外ならない。かういふ純粹な心が、自己の藝術を絶えず向上させて行つたことをおもふべきである。

第五章　性格及び思想の斷面

人間の性格的範疇を、大體、意志型・感情型の二つに包括して考へる事が出來よう。前者は、自分の考や理想は、困難な障害をも突破して實行しようとする、又實踐し、徹底させもし得る性格的強さを持ち合せてゐる人で、感情に惑溺し支配されて絡ふ弱々しさは無く、又それを極度に嫌つてゐる。後者は、自分の空々しい思想や感情に陶醉して、敢て實行に取りかからうとはしない、乃至實行しようとする意欲が動いたにしても、障害にぶつかつては何時もすぐへこたれる種類の人々である。實行家と空想家といふやう對立も、ある點までの一致を以て考へられるであらう。前者を哲學者型に比すれば、後者は文學者のタイプに概當するであらう。大ざつぱの考へ方ではあるが、しばらくこの考に據ると、子規はどうしても意志型の標本として好適の人間のやうに思はれる。ざつと病臥七年といふ長い間、殆んど缺かさず筆をとつて、藝術革新の意圖に餘念のなかつた、あのいたましくも尊い彼の晩年の事に思ひ及ぶものは、同時に、子規が如何に意志の固く強い性格の持主だつたかといふ事に驚異の眼を瞠らずには居られないと思ふ。普通なら愚痴を零し、自暴を起し、却つて死期を早めるより以外、何の事業を殘し得よう。病氣――特に肺患などの場合に、頭が普通人以上明晰になるものであるから――で、心が澄み、力の集中が出來、文學や宗教や哲學等の方面では、特に病者によつて立派な永久的な仕事が遺される場合は珍らしからぬ事ではあるが、子規の病のやうに悲慘な重患で、而も彼の努力精進程のすばらしいものは、殆んど比を見ない所である。偉大な力であり、卓絶した

意志力の人だつた事を思ふ。意志力が強く、思つた事を何處迄も仕遂げようとする強い性格、根氣よく仕事を續ける意志の人だつたといふ一二の例をあげてみる。

彼が歌の改革(註一)を叫んだ時、外部は勿論社の先輩とも意見が衝突し、彼の立場は非常に苦しかつた。但し一度やらうと決心した以上、而もはや改革意見を公にした以上、善惡ともあれ死ぬまで、信ずる所に向つて戰ふといふ強い意思を以て進んだのだ。少し位の自信等云ふものは、利を以てさへたやすく左右され易い。まして大業の反對には一溜りもなく粉碎されてしまふといふのが普通であるが、彼に於ては、反對されればされる程、熱意を加へ猛進の氣を起させるばかりに結果した。これは唯單なる自信力のあつた以上に、強大な意志をもつてゐたお蔭であると思ふ。日清戰爭の時、周圍の意見を斥け、病軀を以て砲煙の巷に從軍記者として出征することを願ひ、遂に彼の地に渡つた事(註二)等も、一度考へ、言ひ出した事は、決行せずには措かない意志の強固旺盛な性質をよく反映してゐる。愛國心に燃え立つたといふやうな單純な理由ばかりでもなく、戰爭記事が歡迎され俳句等紙面に優遇されなかつた不滿も内々あつたであらう。又「文學上の述作少くとも文學上の事業」に得るところあらうといふやうな目的も加味されてゐたにしろ、病弱の身を押して異國の風雨に曝されねばならない理由は少しも無かつたのである。晩年伊藤左千夫の勸めで(註三)、興津へ移轉しようと言ひ張つた事等も、何でも自分の意志通りにしようとする我儘な性情をあらはしてゐる。

(註一) 第三編第四章參照。

(註二) 征清の軍起りて天下震駭し旅順威海衛の戰捷は神州をして世界の最強國たらしめたり兵士克く勇に民庶克く奮

に以て此に國光を發揚す而して戰捷の及ぶ所徒に兵勢振ひ愛國心愈固きのみならず殖産富み工業起り學問進み美術新ならんとす吾人文學に志す者亦之に適應し之を發達するの準備なかるべけんや僕適觚を新聞に操る或は以て新聞記者として軍に從ふを得べし而して若し此機を徒過するあらんか懶に非れば即ち愚のみ傲に非れば則ち怯のみ是に於て意を決し軍に從ふ

軍に從ふの一事以て雅事に助くるあるか僕之を知らず以て俗事に助くるあるか僕之を知らず雅事に俗事に共に助くるあるか僕之を知らず然りと雖も孰れか其一を得んことは僕之を期す云々（明治廿八年二月二十五日、虛子に與へた手紙の一節）

（註三）　明治三十三年八月下旬からのことで、左千夫に「蒲移居歌」がある。子規の常時の書簡及び鳴雪其他の記述參照。

意志力の旺盛といふ事も、よいことと、わるいことと兩方に働くので、隨分片意地を張り通したやうな惡い傾向も亦免れないので、彼の場合もさうであるが、彼にして若し意志力が薄弱だつたら、彼の事業の大半は實現されなかつたらうと想はれる。漱石は「一輪花瓶にさした東菊」の描かれた子規の畫を有つてゐた。その畫について漱石は次のやうに述べてゐる。

子規は此簡單な草花を描くために非常な努力を惜まなかつた樣に見える。僅か三莖の花に少くとも五六時間の手間を掛けて何處から何處まで丹念に塗り上げてゐる。是程の骨折は、たゞに病氣の根氣仕事として餘程の決心を要するのみならず如何にも無雜作に俳句や歌を作り上げる彼の性情から云つて明かな矛盾である。云々。

この見方はあたつてゐる所があると思ふ。かういふ所に、彼の意志力のよきあらはれが、自ら說明されて

ゐるやうである。（俳句や歌を作るに無雜作といふのは、その昔と比較して言はれてよいが、いつも無雜作に作をした人と思ふのは謬であらう。但し子規は比較的作に苦吟しなかつた方の人で、彼の多作は、そこに一つの因をもつてゐることは認められてよい。猶いい意味の無雜作は、藝の極地とも言つてよいので、子規の畫に骨折つたといふ事は、畫に未熟・不案内な素人だつたといふことの一つの證明にもなる事とも考へられるのである。）彼のかゝる意志力の強さは、不治の病をうけてから確かに餘計堅固にされたのであらうとさへ思はれるが、そこに意志型の人間の好見本を示されてゐるわけである。

意志の強いといふ半面には、理性の力が發達して居て、判斷力に富み、合理的の處が必ず附隨して居る。子規を感情型の人でないと言つた事は、ここに關係づけて一層よく理解されようかと思ふ。感情家でないと云ふのは、感情が微弱で少量で、鈍重であると云ふやうな事と同一意味ではない。意志力や理性によつて、感情が、ある繩張り内に安全にされてゐるといふ事を意味するばかりである。情に冷淡のやうにも見えるのは、意志や理性の蔭にかくれて感情の外部にあらはれる部分の少いからに過ぎない。別言すれば、情に冷淡だといふのでは無く、情に脆くないといふだけのことではないか。文學者や美術家によくみられるやうな感逸たパッションに曳きづられたり、奇怪なセンチメンタリズムに擒にされるやうな弱々しさは、子規には見出されないのである。さういふ危險に瀕する時、彼の理性の眼は鋭く輝き出し、その危險地域から早く引戾す意志力を具備してゐた人だつた。そこには常識的な實際的な弊もあつて、藝術家としての彼に幾分の物足りなさを感じさせられる所がないでもない。併しながら、彼の事業の成功といふ事には、理性的・常識的

な性情が又非常な力になつてゐる事を思はざるを得ない。彼の一生に戀らしい戀(十四)の遂に發見されないのは、一に感情に溺れぬ理性的とでも言はるべき、その性格から來てゐるものではないか。意志の強さをも伴ふけれど。彼の議論には、至る處に、文學に感情の大切な事が力說されてゐるが、それは所謂感情家の持つてゐるやうな過激な強烈な或は並外れた感傷を意味しては無論ゐないのである。文學には理窟的のものを排すべきだと言つてゐるばかりで、普通に承認されてゐる、あたり前の美學常識からである。又理性的の性情が、却つて自分に缺けてゐる感情的要素の必要を、自然顯張せしめたものであるといふ解釋も成立つ餘地があるのである。彼の論の調子には意志の強さがまざまざと躍動してゐる。論旨は明快で齒切れがよく、理智の鋭さが一言一句にもゆきとどいて人の心膽を突くのである。

普通人としてはともかく、文學者として眺める時、彼は感情家と言はれる類の人では決して無い。併し涙のない人ではない。涙を人に見せたいだけの用意がいつもちやんと出來てゐた人である。この點が偉く、その冷徹な客觀の出來るところが、文士として子規の成功した點でもある。「墨汁一滴」の五月廿一日の條の言葉を、少し長いが讀んで戴きたい。

余は閻魔の大王の構へて居る卓子の下に立つて

「お願ひでござりまする。

といふと閻魔は耳を劈くやうな聲で

「何だ。

と答へた。そこで私は根岸の病人何がしであるが最早御廳よりの御迎へが來るだらうと待つて居ても一向に來んのは何うしたものであらうか來るならいつ來るであらうかそれを聞きに來たのであると譯を話して丁寧に賴んだ。すると閻魔はいやさうな顏もせず直に明治三十四年と五年の帳面を調べたが、そんな名は見當らぬといふ事で、閻魔先生少しやゝきになつて珠數玉のやうな汗を流して調べて結果、其名前は既に明治三十年の五月に帳消しになつて居るといふ事が分つた。それから其時の迎に往たのは五號の靑鬼であるといふ事も書いてあるので其靑鬼を呼んで聞いて見ると、其時迎へに往たのは自分であるが根岸の道は曲りくねつて居るのでとう／＼家が分らないで引つ返して來たのだ、といふ答であつた、次に再度の迎へに往たといふ十一號の赤鬼を呼び出して聞いて見ると、成程其時往たことは往たが鶯橫町といふ立札の處迄來ると町幅が狹くて火の車が通らぬから引つ返したといふ答である。之を聞いた閻魔樣は甚だ當惑顏に見えたので、傍から地藏樣が

「それでは事のついでに最う十年ばかり壽命を延べてやりなさい、此地藏の顏に免じて。

などとしやべり出された。余はあわてゝ

「滅相なこと仰しやりますな。病氣なしの十年延命なら嘉しもいやはございません、此頃のやうに痛み通されては一日も早くお迎への來るのを待つて居る許りでございます。此十年も苦しめられてはやるせがございません。

閻王は直に余に同情をよせたらしく

「それならば今夜すぐ迎へをやろ。

といはれたので一寸驚いた。

「今夜は餘り早うございますな。

「それでは明日の晩か。

「そんな意地のわるい事をいはずに、いつとなく突然來てもらひたいものですな。

閻王はせゝら笑ひして

「宜しい、それでは突然とやるよ。併し突然といふ中には今夜も含まれて居るといふ事は承知して居てもらひたい。

「閻魔樣。そんなにおどかしちやあ困りますよ。（此一句菊五調）

閻王から／＼笑ふて

「こいつなか／＼吾儘ッ子ぢやわい。（此一句左團調）

拍子木　　幕

卅二年九月「ホトトギス」發表の「墓」の文等も同種類のものだが、これなどは色々の意味で面白い。かういふおどけた物言ひの中にも、僞らない彼の悲壯な眞實感の籠つてゐる事は、彼の生活の外廓を知る人は既に疑はない所である。所謂涙のあとをみせない餘裕あるユーモラスな態度・性情が覗はれる。せつぱつまつた場合も落ちついて自分の姿、自分の痛ましい姿をさへ冷靜に客觀し、時には自嘲的なメスを揮ひ得る、羨ましい程の性格の毅さ、取り亂さない理智的な性情は、文學者としての一つの優越性で、子規はさういふ點には優れてゐた。滑稽・諧謔等の所謂俳諧趣味は日本人の傳統的性癖でもあるが、それ以上に彼には彼獨自の自己客觀に徹した處があつた。感情に惑溺したり誘惑されたりしない意志の固いどこか毅い所のある、理智的で頭のクリアの人、斯ういふ形容詞によつて子規の性向は輪廓的に物語られてゐると言ふべきである。

（註四）學生時代の一夏、向島長命寺境内櫻餅屋に假寓してゐた時、そこの娘と噂を立てられた事や二十七年、目黒の牡丹亭のお今の女に戀戀を感じたエピソード（病牀六尺、五月廿五日の條參照）等が著名である位の程度である。

もう少しく、彼の人間、彼の思想について考へて見たい。以上述べたやうな性質の彼にて、又清廉潔白とでも言ふべき金錢等には執着しない淡々たるところがあつた。「人に物を贈るとて實用的の物を贈るは賄賂に似て心よからぬなり。實用以外の物を贈られたる者は興深けれ。」（墨汁一滴、一月廿八日）等と書いてゐるが、坂井久良岐が「余寄て七日會を唱へ同人諸子と會し其詠草を先生に示し評閲を乞ふ。答を得ること多し。一日同人某に托して束脩を贈らんとす。某これを謝す。即ち別に金圓を寄托して先生に贈る。先生書を寄せて曰く『他人がましき振舞、大兄も其一人たらんとお恨みに存ず』と、先生の人を愛する斯の如し。」と書いてゐるのは、子規が金錢等にあくせくしなかつた、數多い實例の一つである。明治三十二年六月廿五日附、巴里在留の淺井忠畫伯に宛てた書簡の中に、

小生元來金をほしとも存せず候へども友達が百圓取つてゐるに自分は五十圓しか取らぬアイツが五十圓貰ふに自分は二十五圓しか貰はぬといふやうな事に心をなやまし居候處文士の職分を心得て後全く其煩悶なくなり申候むしろ人が多く取つてゐるだけ自分が少く取つてゐるだけ自分がえらいやうに存候何故と申せば「文士は貧乏なれ」といふ標準の役に自分が叶ひ居候故に御座候斯く金の上に悟りを開いて後小生は精神上一段の安慰を得申候それ故此上いくら貧乏になつてもちつとも驚き不申候へども此上に金をやるといふ變り者出て候はゞそれこそ實に可欣候但し又畫が列國に打ち勝つ事も不折の畫が一萬圓に賣れる時代が來てもソンナ事ある時は御互に先づ天下太平に御座候云々

とあるによつても、彼の心持は十分察せられる。高士哲人は貧に處して樂しむといふ考は、特に東洋的で、見方によれば、退嬰隱遁的思想として排斥されるかも知れぬ。子規の考にも、幾分東洋流な常套的な思想から胎み出された點はみられようし、一種のあきらめ的な反抗とも評されようが、とにかく貧しくて自分の藝術、自分の思索を樂しむ境地に入り得たのは偉いとおもふ。極めて現世的な思想の持主である彼が、この種の考のあつた事は、少しは特記して置くべきかと思ふのである。この性質が、著作良心と合體して、次のやうな非難を、好意的に仲間の友にも浴びせかけてゐるのである。

自己の著作を賣りて原稿料を取るは少しも惡き事に非ず。されど其著作の目的が原稿料を取るといふ事より外に何もなかりしとすれば、著者の心の賤しき事いふ迄もなし。近頃出版せられたる秋竹の「明治俳句」は果して何等の目的を以て作りたるか。秋竹は俳句を善くする者なり。俳句に堪能なる秋竹が俳句の集を撰びたるは似つかはしき事にして、素人の杜撰なるものと同一に見るべからず。されど秋竹は始めより俳書編纂の志ありしか、近來俳句に疎遠なる秋竹が何故に俄に俳句編纂を思ひ立ちたるか。此句集が如何なる手段によつて集められしかは問ふ所に非ず。此書物を出版するにつき、秋竹が何故に苦しき序文を書きしかは余の問ふ所に非ず。若し余の邪推を明にいはゞ、秋竹は金もうけの爲に此編纂を思ひつきたるならん。秋竹若し一點の誠意を以て俳句の編纂に從事せんか、其手段の如何に拘らず、之を贊成せん。されど余は秋竹の腐敗せざるかを疑ふなり。されば余は個人としての秋竹を攻撃せんとには非ず。今の新著作斯の如きもの十の九に居る故に特に秋竹を假りていふのみ。（墨汁一滴、三月十日）

秋竹に對する、この諷刺・非難がどれ程あたつてゐるかは疑問である。十二分の誠意は認められないとし

でも、それを唯金もうけのための仕事と攻撃し去るのは、少し苛酷すぎはしまいか。併しかゝる嚴格さを以て秋竹を鞭撻し、金もうけに汲々としてゐる世人を憎惡し、それに對する鬱憤と警戒の言葉を洩らしてゐる子規の熱意は買ふべきである。實に彼は金錢等に左右されず、爲す所を爲し、樂しむ所を十分たのしんでゐた人で、周圍の者にも金が欲しいやうでは文士としての成功覺束ないと常に戒めてゐたのである。この點、當然のやうで而も常人の容易に行ひ難い所のものを、行ひ得たものと言はねばならぬ。

夏目漱石が松山中學にゐた頃、その宿に同泊し、いつも蒲燒等を取つて食ひ、代拂つてくれといふやうな事を無雜作に云ひ殘して、而も十圓も借りて、平氣な顔で東京へ立つてしまつたといふ風の無頓着の所のある人であつた。だから持つてをれば人に與へる事にも無雜作だつた。と言つても、これは學生時代及びその後の二三年の事で、晩年は「他人のものは自分のもの」式の放縱な考はなくなり、學生時代の無頓着さを後悔した口吻を洩らしてもゐる。ホトトギスの子規追悼號で、坂本四方太は「健康な時代の子規子は至つて無頓着な不始末な不行儀な人物であつたさうだが、僕が知るやうになつてからは至つて緻密な行儀な物が氣になる質の人であつた。だから仲間同士でも少し金錢上の始末が惡いとか、酒色に溺れるとかいふ恐れのあるものは、常に注目してゐて忠告するなり面責するなり、隨分世話を燒かれた。近年フランクリンの性行を賞してこれは眞の豪い人だといつて居られたのも、つまり彼の職責に忠實なれ、粗放なる勿れといふのであつた。云々」と言ひ、佐藤紅綠も「三十年の頃から翁は一變した。時間の約束、金錢上の關係、言葉の愼み、老長に對する敬禮、此等は凡て嚴格になつて來た。」と書いてゐる。ちなみに、紅綠は廿六年子規の奧州旅行

から歸つた直後から面接してをり、四方太の直接子規に見えた最初は二十九年九月のことであつた。

健康な頃、金錢や物品に無頓着さを示した彼は晩年には自覺的に淸貧を樂しむとい風に成長して行つたが、その彼の考、彼の性癖は、淸廉等と言つてもよい程度のものであつたと思ふ。金を貯めるといふやうな慾心は文學者等には全く無くもがなの性質のもので、彼がその方面に無頓着だつたり淸廉淡泊だつたりしたところが、文士としては、特にあぐべき特殊なものではないかも知れぬ。

地位や榮爵を欲しがつたり、それを贏ち得た人を羨望し無批判に尊敬するといふやうな氣持を持ち合せてゐなかつた事を、文人としてはまさに當然であるが、その方面の彼の考をも少しあとづけてみよう。

十六七歲ノ頃余ノ希望ハ太政大臣トナルニアリキ上京後始メテ哲學トイフコトヲ聞キ哲學程高尙ナル者ハ他ニ無シト思ヒ哲學者タランコトヲ思ヘリ後又文學ノ末枝ニ非ルヲ知ルヤ生來好メルコトトテ文學ニ志スニ至レリシカモ此間理論上大臣ヲ輕視スルニ拘ラズ感情上何トナク大臣ヲ無上ノ榮職ノ如ク考ヘタリ然ルニ昨年以來此感情全クヤミ大臣タルモ村長タルモ其處ニ安ンジ公ノタメニ盡スニ於テ一毫ノ輕重ナキヲ悟リタリ。云々（仰臥漫錄、十月十九日）

地位や榮爵に不當な評價と尊敬を拂ふ舊時代的偏見に長くつきまとはれて、全くそこを逃れることはし得なかつた彼が、晩年に到り、それを解脫し得た心境が明白にここに語られてゐる。

新華族新博士の出來る每に人は、又か、といひて眉を顰むるが多し。こは他人の出世を妬む心より生ずる言葉にていとあさまし。余は寧ろ新華族新博士の益々多く出でん事を望むなり。されどこれも裏側より見たる嫉妬心といはゞいふべし。博士もお盃の巡り來るが如く來るものとすれば俗世間にて自分より頭の上にある先輩の數を數へて順番の來

るを待つべきなり。雪嶺先生なども今頃お茶を濁されては「解する君の價値も無い」とまでも言はれずなるまじ。博士若博士に博士號を辭す有り難からぬ人もたまにはあるべけれど稍單純になる程の人華族を有難がらぬは無くもなし。官内省と文部省との違ふためか、賞與と官位との違ひたるか、學者と華族と學識あるとのためか。（墨汁一滴、五月六日）

この文辭に、後半に彼一流の皮肉の說きが潔しられる。その邊に眞意が流れてゐるので、實質に對しては尊重しつつ、虛名を欲しがつたり、仰いだりする事の愚かさを嗤弄してゐるのである。若い時は誰しも漠捌とした、大望のやうなものにとりつかれてゐる時代があるものである。が、段々歳をとつて實世間の空氣に觸れるに從つて、それも影うすく消えてゆき、理想のない慘めな現實の小さい殼の中に自らを閉ぢこめてしまふといふのが、凡俗の辿る一つの著しい常軌道である。彼も若い時は漠然と總理大臣を夢みた事もあつた。大學者となつて名をあげようと子供心に思つたこともあつた。而して彼の具體的の目標に變更がとりかへられたが、總理大臣の夢を捨て大學者の希望を拋つてからも、彼は決して大望――理想の烽火――を仰望する事を忘れなかつた。そこに理想なく無爲に日を送る凡俗と異る處がある。彼の志望は漸く文學に傾きつゝあつた頃、彼に病の床に呻吟せねばならなかつた。不治の病を得るに至つて、俗界の慾望に自ら遠ざからざるを得なかつた。華族にならうとも、博士にならうとも、金を貯めようとも考へない。いやもうよし考はあつたにしても、何も出來ない身體になつてしまつてゐた爲であつたのではないか。病臥して何が出來たであらう。呻吟して何のそれらを樂しむ所であつたらう。文學的才能を有し、又そこに心懷を傾けてゐた子規居士の病床の事業と使業は、結局文學に求めるより外はなかつたのである。文學に魂を打込むことにより生命の意義

を力強く感ずる幸福が唯一のものであつたのである。文學に自己のゆくべき道を知り、そこに專念に浸り耽つて業しむことの出來た子規、さういふ境遇に置かれた彼は、しかし乍ら、文學以外の生き方、他の職業の價値をも十分認めてゐたし相當な敬意を拂ふべきことをも知つてゐた。(病氣にならなかつたら、文士として終らなかつたかわからないやうな、現實的な理智的な彼であつたから。)彼の性質を同時代の人に求めると、鷗外等と類似點が多い。意志的で根氣の强かつた事、現實的で文學以外の才のあつた點等に第一類似が認められる。文學を以て男子畢生の事業ではない等と言ひ文學者たるに滿足しなかつたらしい二葉亭等は、却つて感情の强い、理性的・現實的方面に缺けてゐる、近代的な懷疑的な文學者型の標本で遂に實行家ではなかつた。

文學以外、他の職業の價値を相當に認め、尊敬の念を拂ふと共に彼の理智判斷の力は、金や爵位や社會的地位そのものを直ちに貴いと誤認する程淺はかではまた無かつたのである。かういふ點については、彼の考は常識的ではあるが、極めて理性的な健全さを保持してゐたと評さねばなるまい。博士號を辭し、色々理窟をつけて見ねば承知出來なかつた、友人漱石の變人めいたのに對して、恰好の對比をなしてゐるのである。

彼は一面確かに淡々たる性情の所有者だつた。考へ深さとか慎み深さとかいふ者のない代りに、人柄のきびきびした洒消な何でも言つてしまふといふ良い方面があつた。彼の藝術觀にも、さういふ性質が、可成りの中心をなしてゐる感がある。自然を好きだといふのも、寫生などいふ事も、この性質と關聯がある。

余は幼き時より畫を好みしかど、人物畫よりも寧ろ花鳥を好み、複雜なる畫よりも寧ろ簡單なる畫を好めり。今に至つて尙其傾向を變ぜず、其故に畫帖を見ても御姬樣一人畫きたるよりは椿一輪畫きたるかた興深く、張飛の蛇矛を携へ

たらんよりは柳に鶯のとまりたらんかた快く感ぜらる。（病牀六尺、五月十二日）

學生時代、小説「月の都」を書いた當時、虚子に與へた手紙等に、人間は嫌ひで天然が好きだ、小説家にはならぬ、詩人になる、といふやうなことが、くど〳〵と書かれてゐるが、彼の先天的性格と言つてもよいとさへ思はれる、彼の嗜好傾向の根本的なものを指示してゐる。

函は物を納るべき爲に作らるゝ者、其物小なれば函も隨つて小なるを便とす、其物大なれば函も隨つて大なるを便とす。而して其物に至りては大にして善き者あり、小にして善き者あり。兩者各特色あるを以て一を取り他を捨つべからざるは論なし。物已に大小あり。函豈大小なきを得んや。俳句の趣味は其の簡單なる處に在り、簡單を捨てゝ複雜に就けよといふ者は終に其の簡單の趣味を解せざるの言のみ。落語家曰く大は小を兼ぬるといへども杓子は耳搔の代りを爲さずと。（松蘿玉液、七月十日）

といふやうな言説を到る處に吐き散らしてゐるが、實に彼が俳句や和歌に赴いた事は、一つにはこの簡單な趣向に赴いた事でもある。（註五）而して抒情よりも敍景にその特色を發揮したことも、同じくこの性癖から發露してゐるのである。幼い時から客觀美には心を動かされ易かつたと自ら述べてゐるが、特に自然美に心を打たれるやうになつたのは、家が貧しく何者の美を感じさせるやうな持物もないのに、造化の美は私なく貧家の少年の心を無限に富ませることが出來たからだと言つてゐる。

曖昧を嫌つて物をはつきりさせねば氣の濟まぬやうなのも、一種の潔癖で、彼の藝術や思想を裏づけてゐるものである。ここに表現の的確性とでもいふことを、彼が重視した一つの例をあげよう。

本陣の鎗に鴉や明易き

といふ虚子の句につき、鎗に鴉がとまつてゐるのか、鎗の邊に鴉が飛んでゐる景色なのかどちらかわからぬといふので、虚子に訊すと、そんなことはどうでもよく「本陣の鎗」と「鴉」といふ物をもつて來、取り合せた所に趣があるのだといふが、自分はどうしても鴉の位置を明瞭にしなければ氣が濟まされないと云ふやうな言を言つてゐる。かういふ批評態度は、彼の藝術そのものを又藝術觀を理解するにも大切の事に屬する。

以上、亂雜に無秩序に述べたところは、金錢や爵位等には比較的冷淡に構へてゐる事も出來、すべての物事に清廉淡泊といふやうな性質があり、さういふ性質が、彼の藝術の基調をなしてゐたといふやうなことに亙つてゐる。

彼は努力家でもあり且つ頭の良い、仲々暗記力の強い人だつた。けれども讀書見聞の範圍は非常に廣汎だつたわけではない。彼位の智識學問のある者が、當時その方面に存在しなかつたといふ程ではあるまい。彼程の藝術的天分の人が俳句界に皆無だつたといふわけではない。然らば子規の事業の成功は何に基因してゐるか。今まで述べた所を補足しながら、之を明かにすべく彼の性格人間についてもう少し論じさせて貰はう。

（註五）「吾幼時の美感」（卅一年十二月、ホトトギス所載）や「赤」（卅二年六月、ホトトギス所載）の文參照。

第一に擧げて置きたいのは、自分の持つてゐるものは何でも吐き出さねば氣が濟まされぬといふ、或種の潔癖性を、若い時から持つてゐたこと、並びに、自分の作品に對して非常に自信が強く、愛惜の念の至つてゐたといふ事、即ち藝術的衝動が旺盛で、その上自己に對する自信力・自愛心の非常に強かつたこと、此等

が常に併行して彼の心に活動してゐたため、文學者としての先天的素質を更に練磨し、文學的成功に導く最初の又唯一必須の階梯となつた事である。

　彼の筆鋒は妥協や中途半端を許容しない。正直に思ひのまゝをぶちまけてしまふ。はつきり言ひきつて終ふ。心に思ひ腹ふくれたなら躊躇するやうな事は出來ないで、いつもありたけの素養を曝け出したのである。で、自ら力一杯の相撲を取るといふ態度に習慣づけられてゐたのである。これには自信が無くては出來ないし、野心も手傳はなければ出來ないものであらう。惡くいへば、面の皮が厚くなくては出來ない藝當である。何はともあれ、この表現慾の旺盛で、正直にすべてをしやべり散らし、感情を吐き出したといふ所に、成功の最初の原因が潜んでゐる。筆まめで、表現慾の活潑だつたのは、少年の頃から表はれてゐた特徴だつた。この事はすでに述べて置いたが、學生時代、夏目漱石は手紙の中で、その條を指摘して次の如く警告してゐる。

　御前の如く朝から晩まで書き續けては此 Idea を養ふ餘地なからんかと掛念仕る也勿論書くのが樂なら無理によせとは申さねど毎日毎晩書いて〳〵書き續けたりとて子供の手習と同じことにて此 original idea が草紙の内から突現する譯にもあるまじ此 Idea を得るの策は手習にまさること萬々なること小生の保證仕る處なり [illegible]りあてにはならねど伏して願はくは一[illegible]にあらず一御前少しく手習をやめて讀書に力を費し給へよ

若い時漱石から、思想を練れ、本を讀め、書くばかりでは駄目だといふ非難・忠告をされたのは當然であると思はれる程、彼は書くことに熱中してゐたのである。何でも書き散らすにかけては藝術家は藝術家であつてはならない。書いたものの上に、すぐれた洞察、生を生かした實感が波立つて居らねばならないのである。子

規の書いたものには屑も多い。特に若い時のものには、彼自身としては練習乃至備忘錄程度のもの、私達からは彼の道程を知る爲の好材料であるといふに止まるものが多い。併し少くも彼の筆まめであつた事は、多少内實を疎かにする損失を作つたとしても、全體からみては、彼自身の成長のためにも幸福であつたと思ふ。

而も彼はその一つ一つの作品に限り知れぬ愛を感じてゐた。晩年殆んど缺かさず筆をとつてゐた「墨汁一滴」(註六)や「病牀六尺」の隨筆が、新聞の都合で一日でも掲載されぬことがあると、腐くさして、時には、出すところかなかつたら廣告欄へでも出してくれと駄々をこね、子供らしい怨を訴へた。病褥の苦惱と無聊の中にあつては、自分の書いたものを毎朝新聞でみて、それを最大の週期的の樂しみにしてゐたであらう彼にとつて、作品を愛惜するのは至當であるかも知れぬ。けれども私には斯ういふ愛の強さは現世に珍らしく、尊いものにさへ思はれる。

(註六)　僕ハ此頃横腹ガ痛ンデ筆ガ取レンノデソレデ殘念デ不愉快デ誠ニツマラヌ。トコロガフト一策ヲ案出シテ毎日「墨汁一滴」トイフ短文(一行以上廿行以下)ヲ書イテ新聞ヘ出サウト思ヒツイテ一昨日ノ夜一文送ツテオイタ。昨夜モ一文送ツテオイタ。ソコデ今朝ハソレガ出テ居ルダロト思フテ急イデ新聞ヲヒロゲテ見ルト、無イ。ツマラヌ〳〵。何モイヤダ。新聞モヨミタクナイ。斯ウ思ヒナガラ新聞ノ大組ヲ見ルト大物ガピツシリト塞ガツテ居ル。ソレデ墨汁一滴ヲ出ス餘地ガナカツタノデアラウ。併シ僕ハ處ヲ撰バヌ。欄外デモヨイ。寧ロ欄外ガ善イカト思フ。欄外ヲ毎日二欄借リニ欄外文學ナドヽシヤレテ居ルヨリ欄外ニ續貸ナイダローカ。若シ僕ニ金ガアツタラ廣告文學ナドヽモ面白イダロー―コレハ毎日廣告料ヲ拂ツテ自分ノ文ヲ廣告欄ニ出スノサ。面白イヂヤナイカ。(明治三十四年一月十五日附、寒川鼠骨宛

書簡）なほ随筆「病牀六尺」の載らなかつた時、古島一雄に訴へた手紙もある。（子規全集第十六巻、四十六頁参照）

「居士は嘗て余等が自己の俳句をおろそかにするのを戒めて斯ういふ事を言つたことがある。自分はたとへどんな詰らぬ句であつても一句でも其をすてるに忍びない。其は丁度金をためる人が一厘五厘の金でも決して無駄にはしないといふのと同じ事である。僅か一厘五厘だからとて其を無駄にするやうな者であれば、如何に澤山の收入があるものでも、金持になることは出來ぬ。それと同じでたとひ如何に澤山の句を作る人でも其句を粗略にしてかきとめないやうな人は一流の作者にはなれぬ。さういふ點で私は慾張りであると。」「子規居士と余」の文の中に、虚子はかうのべてゐるが、子規が作品を愛する重なる理由がよくわかるのである。子規自身、

　自分が句を作る上に於て著く他の人と違ふ所は多きを貪るといふ事であつた。それであるから一度心に浮んだ句は何でも棄てぬ。一度口から出た句は何でも書きつけて置くといふやうなわけになつて來て、年々歳々たまつたところの駄句の數は實に驚くべきばかりである。云々。（獺祭書屋俳句帖抄序）

と言つてゐるが、これは俳句ばかりでなく、彼の文筆生活全體の上の著しい態度でもあつたのである。

彼が自信に篤かつた事は色々の原因があつたらうが、どこから湧いて來るか殆んど分らぬ程のものがあつた。これも自己の作品に對する深い愛と必ず相稱へてゐる性質のものであつたであらう。その自信のあらはれた例として、一寸面白く感じて讀んだ言葉がある。

　雜誌をみる時我讀む部分と讀まざる部分とあり。我讀まざる部分は小説、新體詩、歌、俳句、文學の批評、政治上の

議論など…………新體詩は四句程讀み詩は圏點の多きを一首讀み隨筆は二三節讀みて出來加減をためす事あり、俳句は一句か二句試に讀む事もあれど歌は讀みて見んと思ひたる事もあらず。（墨汁一滴、二月八日）

といふのだ。別に皮肉を混へず、何の心構へもなしに書いたものであらう。これこそ自らにして表れた子規晩年の自信である。病氣で讀書に制限されねばならなかつたといふ理由もあつたらうが、それにしても自分の專門方面を失敬して目も通さぬといふのは、餘程他を見縊つた態度で、圖々しい程自信に滿ちてゐたといふべきである。かういふ自信ある態度で論議し、どしどし作品を發表した事は確かに有力な成功の因である。

次に、成功した原因として、彼の功名心・野心に滿ちてゐた點をあげて置きたい。

彼は性淡泊であつて、金はもとより社會的地位とか榮爵といふやうなものには、既に執着しない心境にゐた事は大方述べたのであるが、あの重患の床に臥してからも、事業慾や功名心は捨て去る所でなく、益々增大して行つた。純粹な藝術衝動の背後には、力强く活潑に野心が奔流して、彼の創作力を促してゐたのだ。良寬和尚のやうに脱俗した、自らの歌に小鳥のやうに無心に聞き惚れてゐるといふ自然さは、子規には求められない。それを彼のため惜しみ悲しむ等言ふだけ野暮なので、子規の事業は野心が强く大きく、その指導によつてこそ成しとげられたのである。人間が凡ての慾心・煩惱から脱離し得る時期は無い。眞に無私無慾で圓滿無障な存在を、私達は神と云ひ佛と名づけてゐる。どんな偉人も天才も聖者も、生きてゐる間は飢を凌ぐために食はねばならぬ。たゞ物慾に支配されるかするかの一點に優劣があるので、聖といひ愚といひ比較上の言葉に過ぎないのではないか。悠々として自然の懷に抱かれると云ひ、雜念を洗ひ落して自らの思索

の世界にユートピアの夢をたのしむと云ひ、それだけが生活の全部であり得る事は殆んど不可能であると考へられる。わが子規子は實に最も浮世臭い、野心滿々たる性格の所有者であつたのである。他に求むべき物慾を得る事の出來ない境遇にあつた彼は、貧乏に似つかぬ食物道樂であつた。他の事業に手出しの出來ぬ不治の病を抱いて、文學界の事だけにはせめて十分の野心を遂げようと焦つてゐる所があつたやうである。

　世間野心多き者多し然れども余れ程野心多きはあらじ世間大望を抱きたるまゝに地下に葬らるゝ者多しされども余れ程の大望を抱きて地下に逝く者はあらじ余は俳句の上に於てのみ多少野心を漏らしたりされどそれさへも未だ十分ならず縱し俳句に於て思ふまゝに望を遂げたりともそは余の大望の殆んど無窮大なるに比して僅かに零を値するのみ。云々

（明治二十九年三月十七日附、松山歸省中の虛子宛書簡）

このやゝ激越した言葉の中に、その一生を支配し運命づけた彼の强い大望をまざ／＼と見せられる。この種の感慨は屢ゝ彼の口にも迸り出た所であるが、それが文藝批評にあらはれては、

　又小說家ありて小說を著はすは卽ち自ら別なりと雖も、其他に於ては競爭心なる者名譽心なる者ありて多少小著の寫眞を阻ぐの一助となるものにして、三四年前迄は猶競爭心等の爲に著しく進步せしものなり。然るに今日の小說界は實に此競爭心と名譽心とを失ひ盡したり。（「文界八つあたり」―小說の部）

と論じたり、蕪村の高潔な人格は尊むべきであるが、野心が無かつた事は、彼の藝術のため遺憾である、もし野心があつたなら、俳句以外他の文學にも開拓する所があつたらうし、畫の方でももつとえらくなつたであらうに、といふやうな議論を吐かせてゐるのである。名譽心の無い野心のない人間程始末の惡い者はない。

功名心もあり野心に燃えてゐる間は世の中に有用なことも出來、向上發展してゆく事も出來るのである。野心はつとめて大に、素志を貫徹する迄戰はねばならぬ。子規の所謂大悟徹底は、この世の無常を感じ、山野に韜晦してひとり潔しとするの類では無く、大望を高揚し躍進的に戰ひ、勝利の凱歌をあげるためには如何なる苦心慘憺をも辭さぬといふ如き事にあつたのである。で、文學を心から樂しむといふ所も認められはするが、より以上、自己の心に鞭打つて進んでゆく戰鬪的行動、その行動の着々の成功が、彼の心の無上の慰藉快哉であつたであらう事は想像されてよい。正しい目的のためにも挫かれ易い私達は、子規の意志力旺盛な野心に滿ちてゐて強い自信を以て進んだ、男性的な態度には教へられ勵まされる點が多い。たとへ野心は第一義的の尊さを持たないとしても、不完全な未完成の人間の進む道程には避ける事の出來ない、且つ必要缺くべからざるものでさへもある。この點、子規がアンビシアスな野心家だつた事を非難する人には同感し難い。學ぶべきを學び、捨つべきは遠慮なく捨て去るべきである。盲信する者があれば他方に不當な攻擊者が出現するのも、亦やむを得ない狀勢ではある。私達は冷靜に、それを批判してゆかなければならない。

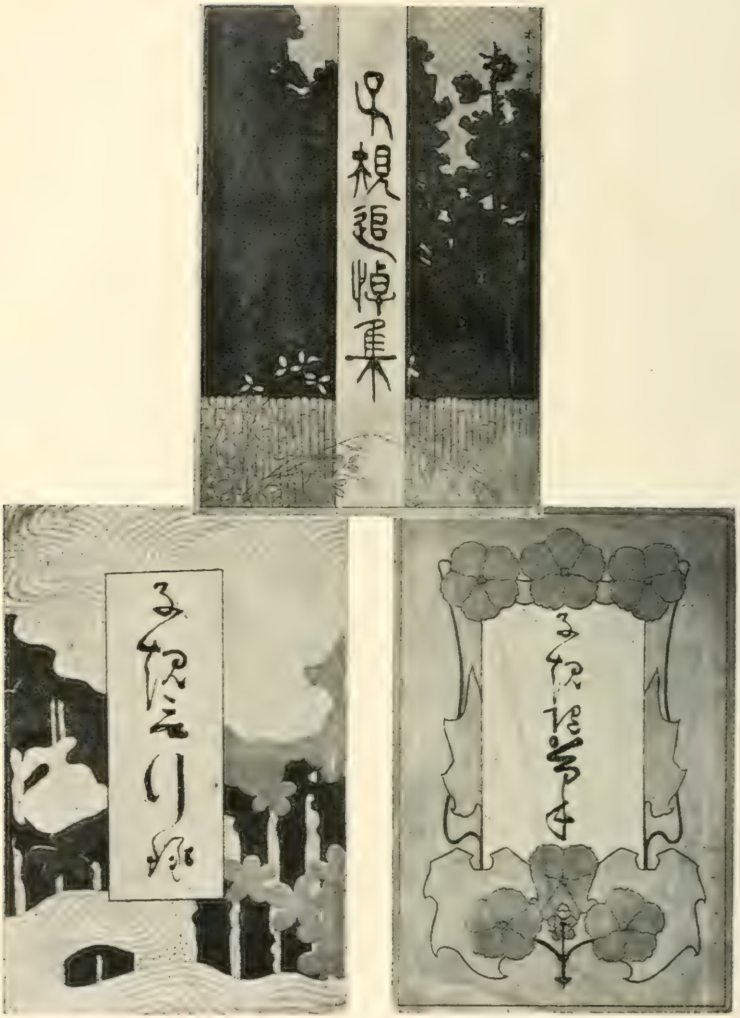
人間一匹が、人となり世に出る迄には、隱れた色々の犧牲の拂はれてゐる事に思ひ及ばざるを得ない。子規が有名になるためには、彼の野心の下に蹂躙され、下敷となつてしまつたものも無いとは言へない。少くとも、さう思はせる事實にもぶつかるのである。併しそこに至ると、全く大きな時と力の問題であるやうである。彼が俳友新海非風と疎くなつた事等は、野心のため友情を犧牲にしたといふ風の非難もあつたのであるが、さういふ非難も或點までは首肯せざるを得ない。子規自身も、その非難は覺悟してゐたに違ひない、

一方では僕は非常に殘酷な性質を持つてゐるねえ。秀吉が中川清秀を犠牲にしたり、ナポレオンが何千人一時に殺したなんていふのを聞てもそれ程殘酷とは思はない。秀吉だけの事業をするには中川一人位殺しても善いと思ふ。中川も亦秀吉程の人の犠牲にならば甘んじてなつてもよかろうと思ふ。僕が秀吉の位置に居たら矢張こんなことをやるかも知れぬ。それから考へると隨分惡人の性質を僕は持て居る。世人は惡いことをせねば善人だと思ふて居るがそれは大間違なだ。いくら惡人だつて惡いことをする機會が來なければ惡いことをする者でない。僕だつて今迄惡いことをしないのは機會がないからだ。隨分殘酷なこともやるつもりだねえ。

と自ら言つてゐるが、彼は大きな事業の前には少し位の犠牲者は出してもよいといふ風の、英雄主義・超人主義的な考があり、意情で將來見込のない様な者とは何時までも煩はしい交渉を續ける事をしたいと言ふやうな不人情な冷淡な一面もあつた。缺點といへば缺點である。私は子規の人間全體に共鳴してゐるわけでない。子規のため敢へて辯明を試みようとは思はぬ。

最後に彼の事業に成功したには事務の才に長けてゐた事、並びに統率力のあつた事が與つて力あつたことを記して置きたい。

文學者は事務の才が無く、又實地實務を輕んずる傾向の者が多く、大學卒業者などは、その點で輕視してゐた。所が子規が「日本」新聞へ入つてからの議論や行動は、全くその豫期を裏切り、事務家としての子規が偉大である事を眞にしたといふ意味を、「日本新聞に於ける正岡子規君」といふ文の中で古島一念（一雄）（註七）が述べてゐる事も、子規を知つた批評である。ホトトギスを東京で虚子が編輯する計畫のあつた頃、子規は手紙を虚



子規歿後直ちに出でたるもの

子に送り、君は俳句の方では自分よりもうまい所があるが、雜誌經營等の實務には自分よりも疎い事が危ぶまれるといふ意味の注意を與へてゐるが、自ら自分の實際的の性質を理解し自負してゐたのである。

（註七）　其技倆卽ち賣れるやうな雜誌を拵える技倆が貴兄に無いと思ふ若し自惚を打ち明けていはゞ小生が持て居る程の技倆も貴兄にはあるまいかと思ふ（中略）併し世の中へ立て雜誌でも出さうといふやうな一部俗的の事になると貴兄は未だ小生に及ばぬ所がある少くも貴兄は小生より六歳許り若い雜誌の體裁などの事は小生に任すとの御言葉は單に禮儀許りで無く或は幾何か小生の技倆を認めて居られるかとも見えるさうすれば小生も多少の自信があるから事務的の小生は一切雜誌の編纂上の事を擔當して詩人的の貴兄等の作を整理して行くといふ姿になる云々（明治卅一年七月一日、虛子宛書簡の一節）

空想よりも實景の描寫と云ふやうなことを主張し實行した彼の藝術上の立場は、彼の實行的な性格、實事を處理することを尊重した思想に根ざしてゐると視る事も出來る。次のやうな批評言等も、かういふ方面と考へ併せて理解されるであらう。

先日短歌會にて、最も善き歌は誰にも解せらるべき平易なる者なりと、ある人は主張せしに、歌は善き歌になるに從ひいよ／＼之を解する人少き者なりと他の人は之に反對し遂に一場の議論となりたりと。愚かなる人々の議論かな。文學上の空想は又しても無用の事なるべし。何とて實地に就きて論ぜざるぞ。先づ最も善きといふ實地の歌を擧げよ。其歌の選擇恐らくは兩者一致せざるべきなり。歌の選擇既に異にして枝葉の論を爲したりとて何の用にか立つべき。云々

（墨汁一滴、三月廿七日）

文學上の事業にしても、作品が非常にすぐれて居れば別であるが、多くの場合には、或る傾向に多數の人が一緒になつて働きかけなければ、一時期を劃するといふやうな成功は覺束ないのである。子規は、自ら中心となつて周圍をよく統率し、十分效化ある文學運動を展開させた。この統率力のあつた事も、今まで述べたところに歸結して推想される所ではあらうが、更に一言を費したい。

「何でも大將にならなければ承知しない男であつた。二人で道を歩いてゐてもきつと自分の思ふ通りに從をひつぱり廻したものだ。」とは、漱石が語つてゐるところであるが、實によく子規を髣髴させるものがある。彈性的で意力があり、實際的で野心があり、人に屈するやうな事なく、思ふことは何でも言つてしまふ陽性の彼には、誰でも接近し易く、慕はれたであらう。自分の知らないことは聞くことを恥とせず、知つてゐる、信じてゐる事は、熱心に談じて倦む事を知らない質の彼には、親しみ甲斐があり、力にも思はれたであらう。甘くはないが、實際的だつたから、弟子の世話等もよくしてやる事が出來る人だつた。而も彼は仕事をする上に、永遠な事業をするに當つては、自分一個の力では成し遂げられないことを知り、つとめて門流をつくるに專心であつた。積極的におのづから統率の手腕を具へてゐた上に、努力したから愼重、世話振りに富つた性格にみがきをかけ、その門閥を效果あらしめる事が出來たのである。

（註八）
彼は死後自分に代つて俳壇を率ゐる人として、虛子に再度その意志を傳へて、勸告もし、懇請もしていに囑さし望んでゐる。さういふ點について、その頃虛子は子規の意見に從ふことが出來なかつたので、子規は失望落膽して、其人數事に不平を洩らしたりしてゐるが、この子規の門流をつくるに最もつとめた態度

について、（註九）大須賀乙字等が、後の俳壇に同黨伐異の罪を殘してゐると攻撃してゐる等も一面あたつてゐるところもないではない。併し事業の永遠を深慮して、自己の信念に邁進した意氣、力强い用意周到なその態度には、いかに俗氣のまじりが多すぎるとは云へ、尊重してよいものではなからうか。少くとも、その結果を見てのみ難ずるのであるならば、非である。彼にして野心なく、自信がなかつたら、何を殘し得たらう。彼の優れた所は、作家としての力量・精進以外、人として氣力旺盛な實行的な性格の强さにあつたのである。

（註八）　小生が心中は狂亂せり筆頭は混雜せり貴兄は氣を落ちつけて讀んでくれたまへ（中略）小生須磨にありし時もしみ／＼と忠告する處あり且つ我が相續者は君なりと迄虛子に明言いたし候虛子もやゝ決心せしが如く相見え申候小生潜かに喜んで心に文學萬歲をとなへぬ先月歸京してつく／゛＼虛子の擧動を見る又是舊時の阿蒙のみ小生が彼に忠告せし處は學問の二字に外ならず候學問といふ語が小生の口を出て虛子の耳に入りしこと數百度以上なるべし須磨にての忠告は實に最後の忠告なりし覺悟也而して虛子依然たり小生呆然として諫め居候（中略）昨夜寒風凛々たるをものともせず虛子を訪ひ候ひしに虛子不在なり小生の氣はいよ／＼いらちたり直に手紙を發して今朝來れと命ず今朝起きて待てども／＼虛子來らずけふはやけになつて分類に從事致居候へども虛子の事のみ氣になりて捗取り不申やがて虛子の來りたるは十一時頃なりしならんそれより共に午餐をたうべ社へは不參の屆置虛子を携へて道灌山に到り申候小生未だ步行に馴れず行程十町三四十分を費すやう／＼に茶店に腰掛けて手詰の談判をはじめたり（中略）つまり一言にしてつゞめなば文學者にならんとは思へどもいやでいやでたまらぬ學問までして文學者にならうとまでは思はずとの答なり（中略）呼命脉は全くこゝに絕えたり虛子は小生の相續者にもあらず小生は自ら許したるが如く虛子の案内者にもあらず小生の文學は氣

息奄々として命且夕に迫れり云々（明治廿八年十一月、五百木良三宛）

（註九）「乙字俳論集」參照。

ある西洋の學者は、人間の型を、理論的・經濟的・美的・宗教的・社會的・政治的の六つに分類して、各人はこのどの型かに屬し、型としての優劣の無い事を論じてゐる。が、宗教的・經濟的等は比較的關係薄いが、他のタイプなら、どちらに屬するやうになつたかわからぬ位で、どちらの方面へも向きさうな人でさへあつた。彼の仕事は、美的方面が主で理論的方面がそれを補佐してゐる形ともみられ、むしろ理論方面に長所があつたとも言はれ得るのであるが、その成功は、社會的・政治的手腕の賜であつたと約言され得るやうである。

言ふべき事、言ひたい事は、盡くべくもないが、他の機會に色々論じなければならぬであらう。ここにのべた言葉を綜合し、關係つけて考へられるならば、幾分子規の性格や思想を理解し、その長所短所も分つていただけようかと思ふ。前章の敍述を補足すると共に、次にのべようとする子規の藝術や藝術觀の考察の理解に役立ち暗示を與へ、幾分の豫備智識を與へることになれば幸だとおもふ。

第二編　俳諧に於ける子規の業績

第一章　彼の態度・着眼

藝術家に藝術的才能の必要なことは、今更言ふまでもないが、天稟のみによつて優れた藝術が生れると考へる事は誤られ易い。ゲーテとシルレルの作品を比較するならば、前者に、より天才の富贍さがあり、後者に、修練のかゞやきの認められ、作者の人間性についての研究に於ても、略々それに相當する對比を發見する事が出來るであらう。さういふ意味では、私達が各種の藝術作品を味討する場合に、度々考へさせられるものがある。人の文章等を讀んでも、實に樂々とよく書けてゐるもの、又獨特な筆致到底容易に摸し難き感を抱かせられる者等にぶつかる時は、その作者の天稟を思はざるを得ない。源氏物語を讀んでも、近松・西鶴の作品に接しても、先づその文才といふものに驚倒する心が起るが、遠くに例を求めるまでもなく、現代日本の作家中にも多少天才的ともいふべき人を見出すことに難くない。確かに、一流の藝術家は常人の到り得ない天賦の才を持つてゐるものと言ひ得よう。併しながら、磨いて始めて玉のかゞやきを發するといふ、實に平凡な事實を、屢々全く忘れて、人は藝術家を偶像視さうとする。

子規は、明治俳句の改革者として不朽の功績を殘したが、實は天才といふよりも、刻苦勉強して作品をかがやかした類の人であつた。彼は、古俳句の研究を重んじ、その必要を力說し、自らも熱心に古俳句を渉獵

し檢討し、その研究的基礎の上に、理論と作品とを向上進展せしめたともいふべきで、藝術・天才のみのものと誤謬し易い謬想は、この邊の消息をあとづけることによつて、よき反省を與へられるのである。

俳句の上手といふ人には乏しくなかつた。俳句は拙くても俳論をやるには巧みだといふ人もあつた。が、子規以前の明治の俗俳は、その何れの人をも持たなかつたのである。子規は俳句に興味を覺えて間もなく、早く明治の俗俳と絶縁して、古俳句の蒐集研究に立發した先覺の一人である。研究といふべく幼稚・杜撰の點は免れなかつたとするも、古俳書・古俳句の研究に先鞭をつけた一人として、その功績の沒すべからざるものがある。彼の俳句並びに俳論を讃へる者の多いに關らず、その根幹をなす彼の古俳書研究については、未だ十分に闡明されない憾がないでもない。子規の俳句研究家としての事業を最も直接的に明瞭に知り得る著は「俳句分類」「俳家全集」等の編著であるが、幸にも子規全集中に「俳家全集」が收められて出版され「俳句分類」が刊行されてゐる今日では、古俳句研究家としての彼の面目は容易に窺知し得る便を得るに至つた。

「俳家全集」は、アルス版全集では、十一卷・十二卷に收められてゐる。(十二卷中には、なほ「俳書年表」「たね本」「做貫考」等未發表の、子規の學究的片鱗を示す編著遺作が收められてゐる。)この中には「俳諧叢書」として生前出版された部分も少しあるが、大部分は、それまでに未發表だつたもので、作者別に、室町時代から江戸時代にかけての俳句を蒐集した者で、俳家全集一、俳家全集二、俳家全集乙卷に分れ、前二者には毛利元就から歿年順に櫻井梅室に至る九十八家(全集一には、自元就至青蘿、七十七家、一萬二千七百句許、全集二には、自白雄至梅室二十一家、八千八十句許)を載せ、後者(乙卷)には歿年不明の俳家二十五人の句

(千七百餘)を出してある。芭蕉・其角にはそれぞれ、一葉集・五元集等の如き家集が流布してゐるやうな關係からか、この編著には收められてゐない。又召波の句等も缺いてゐる。子規生前「召波樗良句集」(俳諧叢書第六編)等出版されたのであるが、俳諧叢書としては、太祇・几董等の句集をも出してゐて、それらの句集は、やはりこの編著中に收め、召波のだけ特に缺いてゐるといふのは、どうしたわけか、要領を得ない。全集と言つても、かくの如く、當然收むべき俳家の句を收めてゐないのは片手落である。又ある俳家には、季の一部分しか集められてゐない。卽ちたとへば、千代の冬の部が缺けてゐる如きも見出され、かゝる點にも杜撰さがある。一々集められた句にあたつてみるならば、誤謬や不備な點も尠くないであらう。が、さういふ手續きを、この論稿に於ては必ず必要とはしない。この「俳家全集」は、杜撰な未完成な者である事は、彼自身が十分承知してゐたので、多少の不備・誤謬にも關らず、今も猶少からぬ便益を與へてゐる有難い編著と言はねばならない。現今世に版行される和歌・俳句の編著類の中にも、杜撰な學的良心の全く無いやうなものを屢々見うけるが、今から三十餘年前、古俳書研究の幼稚な時代に、これだけのものをまとめあげた努力は、蓋し並々でなかつたであらう。

「俳句分類」は、季題乃至内容によつて分類された者で、勞力に於て、量に於て、「俳家全集」よりも更に遙かに大きなものである。これこそ彼が學生時代から着手して、殆んど絶えず努力して繼續された畢生の大事業で、「俳家全集」等も、その分身であり、別働隊と見做さるべきものに過ぎない。それが、ホトトギス誌上に斷片的に掲げられた時、

此書中に收むる俳句は成るべく多からんことを欲するが故に完結の期ある無し。只ゝ余が力盡き身斃るゝ時を以て完結の期とすべし。是れ余が自ら好んで完結するに非ず、余は無窮に完結せざらんと欲するものなり。しかも天は人間に無限の時間と勢力とを附與するを許さず。余が計畫する無限の事業を限るに余が身命竭盡の時期を以てせんとす。余固より之を奈何ともする能はざるなり。其大成せざるを知りて且つ之を爲す、精衞海を塡むの譏は余の甘んじて受くる所なり。（卅年十二月）

と言つてゐるが、彼の熱意・抱負の程を物語つて餘りがある。ある時期には徹夜をして熱中した、この「俳句分類」の仕事も、病氣が重くなるにつれて、自然捗らないやうになつた。

自分の事業を新聞雜誌に現れた文字の數にて測らるゝ諸君は此三四年間に於ける自分の事業は年々同一の分量を示すやうに思はるべく候へ、乍併其實自分の事業は三四年來病氣の進歩と反比例に其分量を減じ申候。そは外面に現れてゐる「俳句分類」といふ事業が臥牀以後著く分量を減じたる故に候。此「俳句分類」のためにどれだけの精力と時間とを費ししか、どれだけの「金不換」と「小合笔」とを禿せしか、恐らくは諸君の豫想外と存候。一日十二時間間斷なく此仕事に掛りて一日に百句を分類するのが關の山に候。まして一日に五句十句の分類すら成し得ざる日の多く候へば一年間に積りても極めて些細の者にしか成不申候。乍併極めて些細の塵埃も積り積りて山を成すといふ如く、此日々の仕事の結果積りて七年間に等身の寫本と相成申候。（明三十二年八月二十二日、子規日記）

と、ホトトギスの消息に洩らしてゐるが、健康時に比して分量が著しく減じたのに、寔に止むを得なかつたことであらうが、明治卅年頃までは、自己の精力の半を、この「俳句分類」に賭けてゐたと言つてよい程、熱心に

やつてゐたのである。明治卅年八月二日から十一月廿一日までの「病牀手記」を殘してゐるが、これをみると、この三月半程の間に、「俳句を分類す」もしくは「俳句分類に從事す」と記されてゐる日が、四十二日もある。又同年十二月に書いた手紙に、「小生俳句分類日夜怠らず今は背丈にあまり申候」とも書かれてゐる。これらによつても知られる如く、卅年、卅一年頃までは未だ相當力を盡してゐたのであるが、其後全く放擲したと言つてよい状態になつたらしい。晩年の隨筆「病牀六尺」の六月三十日の條に、「錐錆を生ず」の嘆を生じたと彼は書いた。それは十餘年前千枚通しの丈夫な錐を買つて、俳句分類の綴纂に使用してゐた。が、その頃は毎日五枚や十枚の半紙を綴り込まぬ事は無く、ために錐は常に光を放つて滑かで、何十枚の紙も容易く突き徹された。それを、この頃ふと手にとつて見ると、全く錆びて、二三枚の紙も快く通らぬ。彼はこの錆びた錐に對し、三年程前から「俳句分類」を全く放擲してゐる事を思ひ出し、今更感慨深く、「錐に錆を生ず」といふ嘆を起さざるを得なかつたといふのである。かゝる學究的仕事に、かくの如き熱心執着を示した者は、學究者にも類稀なるものと言ふべきである。

彼は俳句に熱心になると殆んど同時に、俳句の研究的の仕事に非常な興味と熱心を以て立ち向つた。「俳句分類」は、已に明治廿四年秋冬の交に着手したらしいが、明治廿五年頃、別に「俳書年表」「俳諧系統」「俳諧血脈」「一家二十句」等の編著に志した事が書簡に見える。（改造社版全集十五卷、二一一頁參照）彼は俳句に志してから僅か數年間に、俳句の歴史を、自ら刻苦して一通り調べあげた觀がある。さうして絶えず古俳書古俳句の研究といふ方面に注意しつゞけてゐ、作句にもつとめてゐたから、實際の鑑賞眼も高まり、これと

共に、研究家としても相當強い自信を持つに至つてゐる。

大野洒竹とか伊藤松宇とか岡野知十等には、多少の敬意を拂つてゐたやうであるが、ホトトギスを中心とした自分の後輩の子弟等には、句作では相當の人もあり、虚子や碧梧桐等の俳句は十分推重されるものであるが、古俳句研究等の方面では全く駄目で、頼りなく將來が危ぶまれるとさへ思つてゐたらしい。(註一)碧梧桐がホトトギスに「俳句評釋」と題し猿蓑の句を評釋した時、彼は碧梧桐の無學を指摘し、「碧梧桐が俳句の歴史を知らないと云ふ事、卽ち元祿の特色が何處に在るかと云ふ事を知らないから出た誤謬が多い事である。」(註二)等と言つてゐる。又卅三年、國語傳習所の夏季講習に鳴雪・碧梧桐の兩氏が俳句を講じた際にも、古俳書の知識の不足を人事ならず心配したりしてゐるが、彼は俳句の史的研究にも自信を有し、單なる學究の手によつて俳諧史の述作されるまで傍觀してゐるべきではない、我々句作に携はる者こそ眞にすぐれた俳諧史をかく事が出來るのであるから、その方面にもいつかは着手せねばならないといふやうな希望を抱いてゐたのであつた。

(註一)　明治三十三年「ホトトギス」九月號の子規のかいた消息等には、明瞭に彼のこの思想を表明してゐる。(全集第九卷三六三——三七二頁參照)

(註二)　明治卅二年六月「ホトトギス」所載「俳句評釋を讀む」(全集第五卷四二三頁參照。)

實に彼が古俳書・古俳句の研究を重大視し、自ら之に沒頭した事は、單に作家としての作句のための研究といふ以上のものがあつた。俳書等に目をつけるもの少なかつた時代で、十分なだけ參考書を渉獵する事は不可能であつた。又時間や金錢にも、研究家として十分惠まれてゐなかつた憾があるが、もしそれらのハン

デキャップが除去されて、研究に、より好都合の環境の下に置かれてゐたならば、彼はもつと學究的な仕事に精進し、より勝れた仕事を殘すことが出來たに違ひない。彼は研究のための研究、功利を念頭に置かない純粹な研究に沒頭し得る、學究的素質を多分に有し、そこに、ある憧憬をさへ抱いてゐたと思はれる。實に彼は、作家としての必要以上の研究家だつたと思ふのである。

併し、彼は多くの場合、主として作家としての修業のための勉強だといふ風に、それを考へてゐたらしい。これも亦作家の道を歩いてゐた彼にとつては、僞のない、當然すぎる程當然な正しい考へ方であつたと言はねばならない。彼は學問せよ、修業せよと口ぐせに後進に言ひ又自らも念じてゐた。俳句作者乃至歌人にならうと思ふならば、俳句を作り、歌をよむために、ひとりよがりにならぬために、大きく成長するために、古人の句や歌を味ひ、その趣向や句法を研究會得し、然る上にこそ新發明も出來、はじめて古人以外獨自の領分を開拓することが出來ると考へてゐた。即ち句作・歌作の補助的指導的意味の研究を、第一に重んじてゐたのである。この事は屢〻彼の力說してゐるところである。

「俳諧大要」には、俳人の修學期を三期の階梯に分つて、種々たる注意を與へてゐるが、第一期、第二期の項にも、俳書の繙くべき事を、縷々述べてゐるが、特に第三期は、俳書の必ず熟讀玩味すべきこと、ただ俳書以外の文學書其他藝術及び百般の智識に通曉すべき事を論じてゐる。この思想を繼承したのは、俳人よりも歌人側に顯著な例をみるが、伊藤左千夫が、子規の歿した直後に「美術文學に關する書籍は勿論、哲學宗教に渉り、大いに古今の書籍を讀究せざるべからず。自ら松明を作る、必ず此の方法に據らざるべからず。」と

自他を戒めてゐる如きは、歴史的に注意すべき事に屬する。)この俳句修業の第三期と云ふのは、第二期が、才だあれば淺學・懶惰な者もたゞ入り得るに反し、勵精篤學な者でなければ入ることは出來ず、文學專門の人も自ら誇り他を侮り、研究琢磨の意の無い者は入る事が出來ないと云ふ高所で、一代に名聲ある如き者以上の、後世に遺るやうな、眞の大家の修業期と爲し、この期の修養として、

一、一讀を値する俳書は得るに隨つて一讀すべし。云々。

一、業餘を以て俳句を修する者、自己の句と古句の暗合するあるも妨げず。只〻第三期に在る者は暗合を以て其陳腐を抹殺し得べきに非ず。偶〻以て自己の淺學を證するのみ。

一、俳書を讀むを以て滿足せば古人の糟粕を嘗むるに過ぎざるべし。云々。

一、俳句以外の文學にも大體通曉せざるべからず。第一和歌、第二和文、第三小說、謠曲、演劇類、第四支那文學、第五歐米文學等なるべし。

一、文學に通曉せざるべからざるのみならず、美術一般に通曉せざるべからず。云々。

一、文學に通曉し美術に通曉す、未だ以て足れりとすべからず。天下萬般の學に通じ事に曉らざるべからず。然れども一生の間に自ら實驗し得べき事物は極めて少數なり。故に多く學び博く讀らんと欲せば書籍によるを最良しとす。云々。

等と論じてゐる。これによつても、彼の目指した所は十分に覗ひ知られよう。自己の作句の修養のために、古句の研究に親しむべき事は、更に强調說明され、次の如き議論を吐かしめた。

各家の家集はつとめて之を讀み善く味ふべし。宗集には無何多しとて手に取らぬ人あれども、そは自ら其域に到らぬ

者ぞ。大家の惡句は研究して大に益あり。例へば蕪村の集を見て『これは』と思ふ名句あるべし。又同じ集の中に『こんな』と思ふ惡句あるべし。其時其惡句に就きてよく〳〵考へて見よ。先づ第一に蕪村程の大家がなぜこんな惡句を作つたかと不審を起すべし。而して後に蕪村はどこをつかまへたかと考へ、自分にも此句が作れるだらうかと考へ、何處が惡いのだかと考へ、惡い處を何う直したら善きかと考へ、いろ〳〵さま〴〵に考へて見よ。必ず發明する所多かるべし。そんな事して居る内に惡句が段々善くなるやうな事もあるべし。稍々深く俳句に入らんとする者は家集を讀まざるべからず。云々。(「或問」—明治卅一年)

かくて彼は、どんなつまらぬ作家の句でも一讀する價値のあることを屢々說いたのである。月並の張本として彼の痛く貶してゐた、蒼虬・梅室等の句も、一度は讀む必要がある、月並を無上に恐ろしいものと思ふのは間違ひで、一度月並の中に入りそこを拔け出して、始めて月並の正體を解し得、自己の句の月並であるか否かも分るのだと云ふやうな意見であつた。子規の推重した蕪村は、「麥林支考其調賤しといへども、工みに人情世態を盡す。さればまゝ支麥の句法に倣ふも又工案の一筋ならざるにあらず。」等と言つて、凡庸の古俳人にもなほ學ぶべきものの存するを看破してゐる。略ゝ相類する考で、子規の含旨には、このあたりからヒントを得てきてゐるとは言ひ得るであらう。

單なる俳句作者としても、必ず古俳句の讀むべきこと、進んではあらゆる文藝・美術等に關する讀書の重要である事を、彼は切實に感じ、倦む事なく力說した。果してそれは正しいであらうか。勿論、創作上にも讀書は重要な一つの契機となるものである事は、殆んど何人もが否定し得る理由を見出し得ないであらう。

芭蕉は「古書撰集にまなこをさらすべし。」（祖翁口訣）とあつて、先哲の詩歌・文章を味讀する事が、修業上得る所の大である事を信じ、西行・宗祇或は杜甫を偏愛したに止まらず、自己と立場を異にした貞德や宗因をも認めてゐたやうである。蕪村は「もはら蕉翁のさびしをりをしたひ、いにしへにかへさんことをおもふ」（むかしを今の序）と書き、「三日翁の句を唱へざれば、口むばらを生ずべし」（芭蕉翁附合集序）など、芭蕉に對する尊敬を洩らし、其角・嵐雪・素堂・鬼貫・去來の諸俳人を殊に尊重し、就中其角の奔放な詩才、磊落な句法を愛してゐたらしい。而も「麥林支考雖句格賤陋各爲一家。亦有可取者」といふやうに、とにかく、一家を成してゐる程の者には、皆學ぶべきもののあることを認めてゐる。多かれ少かれ、範を先蹤に求め、傳統を自らの中に生かすといふ態度は、あらゆる藝術家に認められるものである。今、例を芭蕉と蕪村にとつたが、この兩者の態度を見較べる時、芭蕉は旅行等の實地の體驗を、より重んじ、蕪村は讀書等によつて趣味をさぐるといふ方面を、より重んじたといふ相違は認められる。子規の行き方は、芭蕉よりも蕪村に近い。それは彼が「俳人蕪村」を著して、蕪村を激賞した一事でも、既にわかるのである。實に、俳句作家として、古俳句を研究する事の必要を力說して、子規の如く熱心にして反覆言を費した者は、まことに乏しい。彼ほど讀書を重要視した俳人は、古今その類に乏しく、單にそれのみにとゞまらず自らそれを實行した者に至つては、殆んど絕無と言つても宜しからう。

繰り返して言ふ。彼は作者としての用意・利益のために、主として、古俳句研究の必要を說いたものである。が、彼自身「獺祭書屋俳句帖抄」上卷の序に、「俳句分類」を始めた頃を回想して、

自分が俳句に熱心になつた事の始りは趣味の上からよりも寧ろ理窟の上から來た原因が多く影響してをる。それは俳句分類といふ書物を編纂せうと思ひついた爲に非常に熱心になり始めた。而して此理窟的研究は他の一方に於て俳句の趣味を自分に傳へるやうになつたのである。………(中略)………俳句分類の研究が昔の連歌時代より始まつて、それから貞德派の無趣味なる滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を認めながら猶五里霧中に迷ふてをる有様であつたが、「春の日」「あらの」などゝ漸く佳境に入り始め、はじめて「猿蓑」を繙いた時には一句々々皆面白いやうに思はれて嬉しくてたまらなかつた。其頃別に「三傑集」の端本を一册持つてをつて、それも面白い句が多いやうに思ふた。これが自分が俳句に於ける進歩の第一であつた。云々。（明治卅五年）

と告白してゐる。「俳句の初歩」（卅一年二月）の中にも、彼が古俳書をみて俳句に志し、色々古人の句を研究してゆくうちに、徐々に俳句の趣味を會得した事が詳說されてゐる。ここに明らかに、彼はその研究の刺激によつて句作の興味をよび起し、自己の俳句を發展せしめた事を自ら物語つてゐるのである。かゝる徑路によつて俳道に深く入つて行つた彼であつた事を考へるならば、彼が古俳句研究を尊重し、創作のために研究の大切なことを常に力說した事は、自己の體驗を直ちに說に移した深き根據のある事が理解されよう。

物を徹底的にきわめつけようとするその性格から、又大學に於て新興國文學を修めたその教養から、純學究的態度にも理解と親昵さが彼にはあつたのである。彼はいつも作家としての修業の爲と考へようとしてゐたが、その性格・教養の點から多分に學究的な一面が根強く心の一隅に巢くつてゐた。彼には多分に古書の研究・考證を好む性癖があり、又その研究に適する頭腦をもつてゐたと思はれる。「書物などを引證する商賣は

やめて才ばかりでやつてゆける政治家か實業家にでもなつたらよからう。」等と思つたりする彼ではあるが、どんな境遇に置かれても研究的態度には離れられず、時には古書等を繙く執着心はあつたに違ひない。かく、古俳書の熟讀すべきことを主張し、その主張の忠實な實行者ともなつた所に、彼の著しい根本的態度がみられる。彼は必ずしも創作家的天分に於ては、非凡な才能が惠まれてゐたとは言はれないかも知れない。自らもこの缺點を知ればこそ、なほ讀書によつて、古俳句の研究によつて、その缺所を補はうと努めた。才の不足を努力で埋め合はさうとした、ともいふべきであらう。而して彼の努力は報ゐられた。古俳書に親しむことによつて、その鑑賞眼は漸く高められ、創作力に動力を供給する事が、實に多かつたのである。子規の俳句には、特に古句の影響摸倣の痕が著しく目立つといふ不滿をのべたてる人もある。或はさういふこともいへよう。然し、ともかく古句を研究し、古句の語法や趣味を十分味解し會得する事によつて、十年に滿たぬ間に、早くも俳諧の堂に上り得た觀がある。自己の創作家的才能の不足を、その研究的精神、その努力精進によつて填め合せ、若くして早くも一家をなした彼である。彼の全々努力の試みは有效にあらはれたといふべく、彼の着眼・方法論に、まことに賢明であつたと言ふべきである。

　百年二百年に一人しかあらはれないといふやうな、大天才者は別として、少し位の才能に、放りばなしでは決して光を發するものではない。

　古書に親しむ等いふことは、藝術家として第一義的の事ではない。古い俳句等を研究する暇があつたら、宜しく山野に出で、直接自然の懷に抱かれるがよい。畫家が摸寫によらず、實地の寫生から出發すべきであ

ると均しく、俳人は、俳書を斥けて、忠實な寫生によつて、鋭い實感を生かさなければならない等といふ、もつともらしい揚言をする者があらう。勿論それもいい。もつともである。が、譬へば、畫家は、過去の偉大な畫(たとへ摸寫したものでも)に親しむ事によつて、自己の畫の幼稚さや缺點を省察し、補足し、彫刻家は過去の力作に接して深い感激をうけ、種々新工夫を企てる誘因をつくる事が出來ると同樣、文學者も、古の秀れた作に接して、教へられ暗示される者は、決して少しとはしないであらう。俳人に限らず、作家は概ね研究の熱意を缺き、才能にたよりすぎる弊がある。子規の論じた如く、つまらぬ作家のものまで、一々味讀する必要はないかも知れぬ。劣作に接する事は、凡庸作家にとつては、却つて自己の眼を晦ませ、安易に住せしめ、墮落させる危險を伴ふ場合さへあらうが、いい作品をよむ事は、自己の藝術の開眼に利するものの多いであらう事は、多くの說明を要すまい。俳人は俳句史觀に一通り通曉して居らねばならないがために愚劣な作家の句をも、隈なく讀むといふのは、勝手であるが、單に自己の詩境を高めるためだけならば、過去のいい作品だけみておく方が危險性がなく、順路であらうと思ふ。子規が月並宗匠の俳句も見るべき事を主張したのは、理想論としてはともかく、少しく言ひすぎだつたかも知れない。併し古俳句に出來るだけ多く親しむことは、そこに束縛されない限りに於て、利する所多大であらう。特にいい作品に親しむ事に於て然りである。彼は月並的俗俳書も亦讀むべしとも論じたが、

されど若し博く讀むこと出來ずば善き本を選んで讀むべし。惡き本ばかりを讀みたらんには達人にても迷はざらんや。善き本といふは一口に言はゞ元祿の俳書と天明前後の俳書なり。元祿の俳書は多けれど七部集など中にも善かるべし。

……（中略）……天明前後の書も多かれど蕪村七部集など最も宜し。云々。（或問）

といひ、「俳諧問答」（六）には、「古人を學ばんとする者、熟讀すべきは誰の句なりや」といふ問に對して、

元祿にては芭蕉、其角、去來等、天明前後は太祇、蕪村、几董等、

と答へて、先づ讀むべきものの標準を示す親切を忘れてはゐないのである。

子規が古俳句の研究に沒頭したのは、おのづからその好みに就いたものには相違ないけれども、「今の俳句を知らんと欲せば古の俳句を知らざるべからず。今人の立脚地を知らんと欲せば古人の立脚地を知らざるべからず。云々」。（卅一年八月、「俳感」）と言つてゐるによつても明かなる如く、一面俳句作者としての向上のために企てられた古俳句研究であつたことは否まれない。かゝる着眼を以てすすんだ事は、彼の事業を成功に導く第一階梯になつたといふべきである。或意味に於て、書物は死物である。が、すぐれた感受性が働きかけると、その死物は甦つてくる。死物にして活物である書物の中から、子規は必要なる價値ある部分を發見し、引き出してきて、自己の養分として攝取したものとも言ふべきである。旅行等をして直接自然に親しむ事によつて、開眼の契機を見出したことも多いであらう。又終夜句作に沒頭し、所謂三昧の境地に入る事によつて、句作の機微を會得したでもあらう。が、彼に於ては、古俳書の中に埋まり古俳句を吟味研究する事が最も多く句作に役立つたといふ事は疑はれない。そこには勿論多少の缺點のつきまとふ事も免れ難いが、この研究熱は、彼をして彼たらしめた最も重要な見遁されぬ事實である。彼が幼稚な暗中摸索の時代を忽ちに卒業して、一通りの句作者に成長して行つた裏面には、實に並々ならぬ熱心努力が拂はれてゐた事

をおもはねばならない。而してその努力の大部分は、この古俳書研究に粉骨碎身した點を先づあげねばならない。子規は獨創的天才ではなくて、廣く讀み深く究めて、集大成の功を收めたのである。彼は單なる作家でない、彼は單なる議論家でない。彼は學究と批評家とを兼ねた、得がたい努力の一生を展開した。私は彼の作と論とに接する時、それを導いた根元としての生きた學究的素質を忘れる事が出來ない。

純學究書として、子規の俳句分類其他の仕事を、遙かに資料の整備した現在の立場から嚴密に批評する事は、少しく酷であり、又それはここにはさして必要でもないが、さういふ仕事に子規が精力を傾注したといふその研究的態度は、忘れられてはならない。この彼の學究的頭腦の所產が、その批評のふるひを通じて、如何なる形にあらはれたか、換言すれば古俳人・古俳句の研究の結果、如何なる批評の言葉となつて俳壇に働きかけて行つたかといふ方面は、最も注目すべき點である。殊に古俳人に對する彼の批評は單獨でも相當興味ある問題である。俳句より俳論、特に古俳人に對する子規の批評は、著しく當時俳壇の注目を引いたであらうと考へられる。芭蕉に對する子規の論難等は、先づ逸早く世の耳目を欹てしめたと言ふべきである。子規の俳句の進展成長をあとづける以前に、次章に於て、先づ彼の芭蕉論・蕪村論を中心として、理想のあつた所をうかゞひ、猶古俳句研究によつて確立した、その俳句史觀をあとづけ、具體的に俳論家子規の輪廓を形づくつて置きたいと思ふ。

第二章　芭蕉と蕪村について

第一節　子規の芭蕉觀

子規の芭蕉觀は「芭蕉雜談」(明治廿六年十一月——廿七年一月)に大體述べられてゐる。この前年、「日本」入社前、六月廿六日から十月二十日までに、「獺祭書屋俳話」を三十七回に亙つて掲げたが、その中には、其角・嵐雪・去來・丈草・支考・野坡に就いての小論、或は「俳諧といふ名稱」「連歌と俳諧」「延寶天和貞享の俳風」「足利時代から元祿に至る發句」等の目もあり、他に俳句を主とする趣味的雜文がかなり多いのである。この「獺祭書屋俳話」は、翌廿六年五月「日本叢書」の一篇として刊行され、子規の處女出版となつたものであるが、その序に、

曩に「日本」に載する所の俳話積んで三十餘篇に至る。今之を集めて一卷と爲さんとす、乃ち前後錯雜する者を轉置して稍俳諧史、俳諧論、俳人俳句、俳書批評の順序を爲すといへども、固と隨筆的の著作、條理貫通せざること多し。況んや淺學寡聞にして未だ先輩の教を乞ふに遑あらざれば謬見妄斷亦少からざるべし。

等と書いてゐる。子規としては、幼稚な時代の所産で、學問の讀物としてはともかく、俳論として嚴正な批判の俎上に置くまでもない程度のものである。この外、學生時代、「城南評論」に發表した「向井去來」の一篇があり、「日本」新聞連載の「歳晩閑話」(廿六年一月二日——九日)中には、蓼太・士朗・蒼虬に就いても論じてゐる。が、子規の存在を明かにした劃期的な文章としては、「芭蕉雜談」を舉げねばならない。これ

は彼の初期の俳壇的文章として代表的のものである。批評の對象になつた芭蕉其人が、俳句界最大の偉人であることは、自ら彼の眞劍味を要求し、俳壇の空氣に慊らなかつた彼の不滿は爆發して、生氣潑剌たる文章を書かしめ、世の注視をひいたのである。それは血氣に逸つて誇張し過ぎたやうな缺點も見出され、贊成出來ない部分も尠くはないが、權威を無視して自己の信念を吐露してゐる若々しい勇氣は新興の力を感ぜしめる。彼は「芭蕉雜談」に於て、初めて自己の立脚地を定め、論客として輕視出來ない力量を現したのである。

この「芭蕉雜談」は、(註一)芭蕉二百年忌にあたる明治廿六年の十一月十三日から翌年正月二十二日に亘り前後二十五回日本新聞に連載され、二十八年八月「獺祭書屋俳話」の增補再版の際、その中に收錄されたものである。

左に「芭蕉雜談」の內容を簡單に紹介批評し、其後の子規の芭蕉觀の發展を少しく附加しよう。

(註一)　芭蕉雜談發表に先だち廿六年十一月六日「芭蕉翁の一驚」を「日本」に發表した。(全集第四卷、一三一頁參照。)

「芭蕉雜談」の初めに、「年齡」「平民的文學」「智識德行」といふみだしで論じてゐる箇所は、さほど必要はないから、ごく簡單に要約すると、年齡と名譽とは伴ふのが通常であるのに、比較的壯い中に有名になつた事、芭蕉の如きは珍らしい。芭蕉の有名さは、俳句の平民的文學の性質(即ち第一、俗語を嫌はない、第二、句の短簡な事)を持つてゐるからであるが、平民的とは言へ、天保の俳句等と違ひ、元祿の俳句はそれ程解し易いものでは無い。芭蕉の句を解する者は實に少いので、唯盲目的に崇拜されて來た狀態である。平民的と言ふこと、有名と云ふ事、それ自體に必ず價値があるといふわけではないが、併しあれ程崇拜されたことは、芭蕉の偉大を物語るものである。それはすぐれた門人が苦心盡してゐたのでもわかるといふのである。

次に「惡句」の題下に、芭蕉の眞價を知るためには、これ俳諧を吟味しなければならぬ。寺を興し碑を樹て、宴會を催し、連俳か運座を興行し、單に芭蕉の句を神聖視する事は、芭蕉宗の信者の義務で、文學者としては進んで芭蕉の俳句を批評吟味すべき義務がある、

> 芭蕉の俳句は過半惡句駄句を以て埋められ、上乘と稱すべき者は其何十分の一たる少數に過ぎず。否、僅かに可なる者を求むるも寥々晨星の如し。

と斷定し、「古池や」「道のべの」「物いへば」「あか〳〵と」「辛崎の」「春もや〳〵」「年々や」「風流の」「白菊の」「梅枝に」「梅の木に」の句等は、多く「曰く附き」あるために有名なので、自分には大いに異見があると云ひ、次に「各句批評」の題下に一々意見を述べてゐるのである。

(註二)

古池や蛙飛びこむ水の音

子規はこの句について長口舌を弄してゐるが、要するに芭蕉が蕉風に悟入したのは、この句であることを認め、且つ俳諧史上の價値は認めるが、文學上はさほど問題とすべきでない、文學は常にかゝる平淡なものではなく、多少の工夫と色彩を要するものであるといふ結論を下してゐる。後、卅一年、「古池の句の辯」を書き、俳諧史上乃至芭蕉の俳歴上、この句は重大な價値を有するが、芭蕉句中ではとりたてゝあげるべき程の佳句ではないといふことをや〻精細に論じてゐる。が、「古池」の句を藝術其物として高く評價してゐないことには變りがない。私は芭蕉の句の中でこれを第一の佳句とは思はないが、やはり捨て難い味があると思ふ。子規の意には同意しかねる點もあるが、彼の好み・傾向の大分鮮明に見える點は注意すべきである。

（註二）　學生時代の稿本中にも俳諧を論じた文があり、二十二年に「古池の吟」の文がある。（全集十一卷、一〇七頁參照）

道のへの木槿は馬にくはれけり

この句に對する數說をかゝげ、出る杭は打たれるといふ俗諺の諷誡的意味があるといふ說が、或は當つてゐるようかと說き、譬喩の俳句で教訓に應用したことの珍らしく、而も教訓は俗耳に入り易いがために、歡迎されたのであらうが、句の價値からいふと、文學上最下等に屬すると論じてゐる。この考へは正當ではないと思ふが、子規の藝術觀はやはり覗ふことが出來る。子規は、この句が教訓的のもので、普通の寫實の作とすると、

道のへに馬の喰ひ折る木槿かな
道のへや木槿喰ひ折る小荷駄馬

の句法を用ひねばならぬ。少くとも「故らに「木槿は」といひ「喰はれ」と受動詞を用ゐたる處は、重きを木槿に置きて多少の理窟を示したる者と見るべし。」故に句法上から諷刺的な作とみるが當つてゐようかと言つてゐるのであるが、句法に注意を向けたことはいいが、この句に作者の主觀の加味した句法を認めるにしても、それを直ちに教訓的のものと解すべきだといふ說は成り立たない。むしろ子規の改作よりも原作には多少の主觀が加はつて、寫生句としても、より力強いものとなつてゐると言つてよい。この句は甲子吟行に「馬上吟」と詞書があり、單なる寫實の句と見るべく、「山路來て何やらゆかしすみれ草」等と共に、「甲子吟行」中の秀作と推すべきものと思ふ。一歩讓つて、諷示とか教訓の意を多少は含んでゐると解するにしても、寫實か

ら入つてゐる所に、この句の生命を認むべきであらうと思ふ。子規も、後年、この句が甲子吟行に「馬上吟」とあることを知り、寓意は無いと説を訂正したが、古池以前の句であるから、句法がいきたりで、とゝのはぬ所があると論じた。(「栖の栞」、卅二年八月)

物いへば唇寒し秋の風

教訓的の作で、道德上の名句であらうが、文學上はたいした者でない。唯教訓の意を含め、而もこれだけに言ひおほせたは流石で、木槿の句と同日の談ではないと言つてゐる。この句は教訓的の作で、句面芭蕉の壽句としてあぐべきものではない。むしろ木槿の句より遙かにいいといふやうに言つてゐる子規の文章の誇張は正すべきであると思ふ。唯この句の作句動機には、秋の自然に直面した作者の實感が存するので、その實感から教訓的意味を寓して作つた、否、自然に對する實感の作を、たゞ教訓に應用したと解釋して宜いのだとさへ考へられる。子規は、この句に就いては相變らず感心しないで、「質問に答ふ」(廿九年)には「ものいへば唇寒し秋の風」等芭蕉の惡句の一なり。」と言つてゐる。

子規は「俳句の初歩」(卅二年)に、自分が俳句に入つた最初には、「理窟を含んだ句」「警句らしい句」「擬人法を用ひた句」「人情を現した句」等しか解らなかつたと云ひ、「物いへば唇寒し秋の風」をその理窟を含んだ句の例の中にあげてゐる。「芭蕉雜談」を書いた數年前は、この句の如きものを主として愛誦した數が、やゝ自家のものに頭を向けるに至つて、今までの趣向觀に變化變動をなし、ついに自ら誤つた處と認めたのであらう。この自己革命期に、大いに氣を負つて書いたのが「芭蕉雜談」である。この意味では對俳壇的意圖ばかりでな

く、對內的にも、藝術觀の革命的變革の、強迫した、むしろ早急な逆流だつたのである。

あかあかと日はつれなくも秋の風

句解大成によると「須磨は暮れ明石の方はあか／＼と日はつれなくも秋風ぞ吹く」といふ歌の俤に似てゐるとあるが、此の歌のある以上、剽竊で一文の價値も無い。芭蕉の創意と假定するも、平凡の句で、「つれなくも」は無用でたるんでゐる。「あか／＼と日の入る山の秋の風」とした方がよいかも知れぬ等と論じてゐる。

位置・狀景を明瞭にすることは出來ても、子規の改作は却つて作品をつまらない一通りのものにしてゐる。「つれなくも」はこの句の生命で、旅行吟であるからこそなほこの言葉は利いてくるのである。「奧の細道」に「途中唫」の詞書のある句で金澤から小松に至る途上の所見であらう。風韻があつて相當よい句である。「須磨は暮れ」の類歌は作者は分らないが、もしさういふ歌から脫化したものとすれば價値は乏しいが、この歌より芭蕉の作が立ちまさつてゐることだけは言ひ得る。後、隨問隨答の中に、「あか／＼と」の句「秋の山」とせずに「秋の風」とした方がよいと北枝が答へたのに、芭蕉は其の俳才に驚いたといふが、どうして「山」より「風」がよいかとの質問に對し、子規は、自分は少しも趣味を感じないから、どちらにしても面白くないと答へてゐる。

以上の四句の中、木槿の句だけには文獻を知らなかつたがための誤解を後、訂正してゐるのであるが、他の三句についての大體の價値評價には、たいして變化を來してゐないやうである。

辛崎の松は花より朧にて

にて留りが珍らしいので諸書に引かれてゐるが、「芭蕉は法度の外に出でゝ自在に變化することを好みし」が故「朧にて」と口に浮んだまゝ改めなかつたので、何故それが思ひ浮んだといふと、後鳥羽院の「からさきの松の緑も朧にて花よりつゞく春のあけぼの」からであらう。而もその翻案の拙さは剽竊以上である。古歌がなくてもこの句の拙さは、してみようがない。芭蕉のため抹殺し去るがいいと言つてゐる。

この句は「甲子吟行」に「湖水眺望」と詞書があつて、出てゐる句、それほどの佳句ではないにしても、とにかく藝術的な匂が漂うてゐる。云はゞほのかにいい感じを持つてゐる句である。ほのかなもの、しつとりしたもの、或は物のあはれといふ風の持味を、子規は十分に理解してゐなかつたやうである。「にて留り」も、「去來抄」を持出すまでもなく、相當利いてゐると思ふ。子規の難ずる程つまらぬ句ではあるまい。

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

一通りだが、中七字は蛇足だといひ、「三日月は梅にをかしきひづみかな　不角」「すさまじや二十四日の月の梅　荷兮」「梅咲て十日に足らぬ月夜かな　曉臺」等いくらも外に言ひやうもあらう、「けしきとゝのふ」とは餘りに拙い。但し當時はこんな言ひ方も珍らしく面白かつたらうが、俳壇に言ひ古され、今は聞くも嫌になつた常套語である。

おそらく俗宗匠に使ひ古されたといふ點の嫌惡と共に[illegible]批評の一つである。「けしきとゝのふ」は句の命である。この句のおもしろさである。子規のあげた句等よりは、むしろ[illegible]としてゐて、いいと思ふ。この句への非難は子規の好みをよくみせてゐるものではあるが、芭蕉句には同情

しかねるのである。

　　年々や猿に着せたる猿の面

因縁付きで知られてゐるが、文學としては何等の價値は無いと論じてゐる。許六の問に答へて、「毎句有、仕損じたらむに何くるしみかあらむ、下手は仕損じを得せず」等と芭蕉が言つたかどうかは疑問だが、蕉翁晩年の作としてはたしかに失敗の作の部であらう。

　　風流のはじめや奥の田植歌

非難すべき句でもないが、別に面白い所もない。風流のはじめといふのは、あらはにすぎてゐるやうだと評してゐる。「奥の細道」に出てゐて、異釋の多い句であるが、私も、この句はやゝ概念的で幾分ひとりよがりに陷つてゐる弊がなくもないとは考へる。佳句として推すべき程のものではないが、併し落ちつきのある相當手腕をおもはせる句ではあると思ふ。

　　白菊の目に立てゝ見る塵もなし

句解大成には「曇りなき鏡の上にゐる塵の目に立て見る世と思はばや」の反轉であらうかと言つてゐるが、出所のあるのはむしろよいが、只白しと言はず消極的に「塵もなし」と言つたのは理窟的に落ちて拙い。芭蕉は總て理窟的に作爲する癖があつて、そのため殺風景な句を見る事屢〻であると言つてゐる。

この句、この表現を理窟と片づけるのは僻見で淺い。白いといふ事を、單に消極的に「塵もなし」と言つたと解するのが第一間違つてゐる。この句は園女の風雅の美を讃へたといふのが眞實であらうが、「塵もなし」

には明かに主觀が滲透してゐるのである。芭蕉の句が主觀的分子の多い事は事實だが、その弊としては、ややもすると理窟的といふやうなものになるが、この句は決して弊所を露出した失敗の作ではないと思ふ。

梅の木に猶やどり木や梅の花

「白菊の句と同じく理窟に落ちて趣味少し。」と記してゐるのみであるが、この句は餘りいい句でない。やや俗臭を帶びた、拙作の部である。

枯枝に烏のとまりけり秋のくれ

「枯木寒鴉」の四字は、漢學者流の熟語で、それをそのまゝ譯して、「枯枝に烏とまる」とは、今更芭蕉たらでもといふ氣がする。「幽玄の極意、蕉風の神髓」とするのは心得難い。但し芭蕉時代、この熟語、この光景が詩文や畫圖にまだ普通でなかつたとすれば、更にこの句は價値を増して數等の上級になると論じてゐる。

延寶八年の句で、「東日記」には「烏のとまりたるや」とあるが、「曠野」には「烏のとまりけり」と改められてゐる。「俳諧耳底記」にも正風躰の初めの句としてゐるが、未だ談林盛行の時代に、かゝる作品のあることは異色とするに足りる。思ふにおそらく實地の寫生であらう。少くとも寫生と思はせるだけのリズムがある。單なる飜譯ではなくて獨立した立派な句で、當時誰でもが吐ける安易な句ではない。子規が剽竊だとか、既に歌ひ古された内容だとか言つて氣を揉むのは、藝術的良心があるやうでよいが、かゝる論難は、多く非難のための準備して來たきらひさへ見えて、感心出來ない。又其角的に理窟的云々等といふ尺度をあてはめて、淺薄な觀念的批評をしてゐる事には滿足出來ないのである。

この外、「二日にもぬかりはせじ花の春」以下十三の句をならべ、芭蕉に駄句・拙句の多いことを論じてある。以上は「各句批評」の項で、子規が芭蕉の句を批評（大部分は無論非難）してある要點と、私自身が觸目に感じた所を少しく附加したのであるが、芭蕉の句の實際について非難したこの項等に、「芭蕉雜談」中最も人目を牽いたものであらう。そこには不穩當な幼稚な見解も隨所に見られ、幾分盲蛇に怖ぢず式の無鐵砲さはあるが、かくの如く芭蕉の句を勇敢に非難するだけでも、普通人には出來難い稀な離れた藝當ではある。少しく卑見をも申し添へた通り、同感されない部分は多いのである。併しながら、所謂俗宗匠が唯盲目的に跪拜する態度を攻撃し、蕉翁の句に非難を浴せたことは、盲の俳人共の肝を潰すに十分な偉力があつたであらう。非難の具體的內容には、淺薄さ、幼稚さが見られるが、芭蕉の句と雖も一々に吟味し、いいものはいい、惡いものは惡いと、嚴正な批判を加ふべき事を論じ、勇敢にそれを實行した點だけでも、偉とするには足りる。芭蕉に對し、かういふ風に無遠慮に、名句とされてゐる者迄を、こきおろした人は曾てなかつたのではあるまいか。寶暦の頃、建部涼袋が「片歌二夜問答」の中に、「世に俳諧てふもの廣く行はるゝは芭蕉の後也。故に芭蕉によらざる人なし。爰に於ておのづから作るところの言の裏も、芭蕉にも此詞ありと許して芭蕉の毒を流せることを知らず。」と言つて、芭蕉の使つた語句、第一句では「しぐれ行くや」「不性さや」「鼠にくらく」等は、下に如何なる雅言があつても一句の調をなさず、又下五文字では「御宇かとよ」「料理の間」「天窓かな」「小さかづき」「軒端かな」「男かな」等は調がつまつてゐて、倣ふべきではないと云ひ、

內裡雛人形天皇の御宇かとよ　　琴箱や古もの店の背戸の菊

御命講や油のやうな酒五升　　似合しや新年ふくべ米五升

等を駄句としてあげてゐる。これらは、芭蕉に對する惡聲を發した最たるものの一つであるが、偏狭な用語論から出發し、その非難も一小部分に止まるが、子規のは内容上の非難を主とし、より大膽に、代表的の作品に論難の鋭鋒を向けてゐるのである。而してその論旨にもやゝ首肯される部分がある。

次に「佳句」と題し、文學として千載に遺る、傑れた句が芭蕉には數句あるといひ、萬葉以後失はれた雄渾豪壯の要素は、芭蕉に於て無上の輝きを以てあらはれたと推賞し、次に「雄壯なる句」の題下に、

夏草やつはものどもの夢のあと　　五月雨を集めて早し最上川
あら海や佐渡に横たふ天の川　　五月雨の雲吹き落せ大井川
郭公大竹原を漏る月夜　　かけ橋や命をからむ蔦かづら
塚も動け我泣聲は秋の風（一笑を弔ふ）　　秋風や藪も畑も不破の關
猪も共に吹かるゝ野分かな　　吹き飛ばす石は淺間の野分かな

を例示し、讃辭を呈してゐる。たとへば、「かけ橋や」の句では、「命をからむ」と巧を弄したのは、この句の缺點と認め、「吹き飛ばす」の句では、「石は淺間の」と續く連續を少し窮屈で、自然の價値を損ずと言つてゐる。やうな、まゝ缺點の指摘もあるが、缺點は認めても、一句全體としては首肯してゐるのである。各句批評の條の非難の如くに、此等の句についての具體的賞揚言は、ここには必要でないと思ふので、一々述べないで省略に從ふ。

滑稽と諧謔とを生命としてゐた俳諧に、この種の老健雄邁な句をものした芭蕉は、破天荒で、幾多の勝れた弟子達も各々他の方面では芭蕉を凌ぐ者がありながら、豪壯雄大な句は遂に芭蕉に及ぶ者無く、其後の俳人中、蕪村・曉臺・闌更は蕉風外に出で、雄健豪壯の句もあるが、彼等の壯や大は芭蕉のそれには及ばない。この一點、芭蕉以前芭蕉なく、芭蕉以後芭蕉無し、と子規は論じたのである。一面芭蕉を貶し乍ら而も雄健豪壯の一點を稱讃して、芭蕉の最大の特異性のそこに存する事を認めた。認むべきは認め、貶すべきは貶するといふ心意氣に、眞正の批評家らしい態度を見得るが、缺點乃至美點と認むる所を著しく誇張して表現する傾のある所に、學者的といふよりも、改革家・論客として、より適當の彼の性格を現してゐる。豪壯雄健といふ一點をとり出してきたことは、子規の好み、性格の反映でもあらうが、又確かに、ある眞實を把握してゐる。雄渾豪壯といふ要素が萬葉集にあつて、その以後失はれてゐたのが、芭蕉に至つてあらはれたと、單純に論じ去るのはどうかと思ふ。さういふ議論を根據づける爲には、省略出來ない、なほ幾つかの手續きを必要としよう。が、所謂丈夫ぶりの歌は萬葉以後殆んど現はれなかつたが、芭蕉の俳句等には、ある點で萬葉の雄々しい歌に類する作の認められると言ふ結論は導かれ得ると思ふ。賀茂眞淵の如きは、この萬葉の丈夫ぶりを唱道した近世歌壇の有力な一人であるが、明治に至つては、子規以前にも國詩の改革意見には、この雄壯活潑といふ方面が力說されてゐたのが一般趨勢である。子規のこの意見は實にこの論壇の雰圍氣から主として導かれたといふことは爭はれないのである。さて、併しながら、芭蕉は雄渾豪壯といふよりも、閑寂とか幽玄とかの境地を目指してゐたと解するが、より正しくはないかと考へられる。子規は自己の好み

に偏し、當時の國詩改革意見を直ちに芭蕉に移して考へた如き傾はないであらうか。俗宗匠達が徒らに盲目的に幽玄等いふことを有難がる無自覺の態度に反抗し、且つ新説を主張する心からでもあつたらう。それは公平妥當な意見とはいへない。芭蕉への深い理解から生れた見解とは假にも認められない。萬葉調と類似な心境も芭蕉には認められるが、傳統をたづねるならば、芭蕉は萬葉よりも、むしろ新古今邊から悟入したとみられる點が却つて多いやうに思ふ。

たほ子規は更に進んで、「各種の佳句」の項で、先にあげた數句でも、芭蕉は俳諧史上第一流の作家の價値があるが、芭蕉の技倆は是だけでなく、あらゆる變化變調を一身に集めてゐる。即ち「極めて自然なる者」「幽玄なる者」「纖巧なる者」「華麗なる者」「奇拔なる者」「滑稽なる者」「蘊雅なる者」「羈旅の實況を寫して一讀三嘆せしむる者」「稍ゝ狂せる者」「字餘りの句」（格調變化せるものゝ中）「格調の新奇なる者」「一境事一風物を取り其實景實情をありの儘に言ひ放して猶幾多の趣味を含む者」等があるとて、各例句をあげ、

之を要するに雄壯豪拔なる者は芭蕉の獨得にして他人の範圍を容れず。綺麗なる者、輕快なる者、幽玄なる者、古雅なる者、新奇なる者、滑稽なる者等に至りては門葉又は後生にして芭蕉に凌駕する者無きに非ず。雖も、皆其長ずる所の一方に偏するのみ。（中略）百種の變化（拙劣なる者をも合して）盡く之を一人に該ぬる者は實に芭蕉其人あるのみ。蓋し常人の觀念に於て兩々各く相反し到底竝立すべからざる者も、偉人の頭腦中に在ては能く之を包含調和して相戻る無きを得る所以なり。

と言斷してゐる。「各種の佳句」の分類の仕方は學術的で無く、極めて雜駁で、例句の當否も問題であるが、

芭蕉が種々の句、殊に佳句を持つてゐると言ふ事を說くのが目的ならば、彼此と是非するにもあたるまい。芭蕉が各種の佳句を他の俳人に比し、滿偏なく持つてゐると云ふ意見には、殊更異見を立てる程の事もあるまい。子規は、芭蕉を偶像的に崇拜する事の非を鳴らし、その或句に對し具體的の非難を敢てしてはゐるが芭蕉が古今隨一の俳家である事は異議なく認めてゐる。難じた部分は著しく目立つのではあるが、此點、全體としてはやはり芭蕉の偉大を認め、讃嘆の聲を發してゐるのである。翁の句を難じた部分にも、公平を失した、淺い、首肯しかねる議論が少くないに關らず、相應に共鳴者もあつたであらうと想像されるのは、一つには實に惡口し乍らも、遂にかくの如く蕉翁禮讃に終つてゐるからである。

次に「或問」と題し、三つの問に答へてゐる。

(一)芭蕉集中好句$\frac{1}{5}$あるなら、多いではないか(「惡句」の項に「芭蕉作る所の俳句一千餘首にして僅かに可なる者二百餘首に過ぎずとせば、比例率は僅かに五分の一に當れり。云々」と述べてゐる。)との問に對して、好句は惡句に對する名稱で、僅かに良いと云ふばかり、この標準ですれば、元祿の俳家には好句$\frac{1}{2}$乃至$\frac{1}{3}$を有するので、芭蕉の如き他に例がないと言つてゐる。十分に調べた上でないと確言は出來ないが、芭蕉に比較的多く句が殘つてゐる關係上、惡句も多いのは事實だが、他の元祿の俳家の好意が$\frac{1}{2}$乃至$\frac{1}{3}$・等といふのは首肯し兼ねる。多少誇張しすぎた言ひ方である。併しこの問題はここに直接論ずる必要もないのである。

(二)芭蕉の俳句を評し、その名篇を抹殺し、名譽を毀損するのは、俳諧の罪人、蕉翁の不忠者だと云ふに

對して、佳句と惡句を混同し、芭蕉の句といへば無條件に有難がる俳人等から尊敬を得て、芭蕉は何で喜ばう、惡句を非難する事は佳句を尊敬することで、文學者として自分の態度は正しいと辯じてゐる。

これはわれ／＼も同感である。細部に亙つては異見が少くないが、ともかく、この考を持して立ち向つた所に、「芭蕉雜談」の價値が認められる。併し彼の態度についても、杜撰な不徹底な意見を恥しげもなく發表した所、幾分の非難は免れられないであらう。

(三)芭蕉を論ずるには、發句よりも寧ろ連句を以てすべきであるといふ問に對して、連句は文學で無く、又連句に翁が長じてゐたのは、智識多いと言ふのみで、芭蕉を論ずるには發句だけで十分だと論じてゐる。

如何に多くの作品を觀たからとて、その本質に必ず透徹出來るといふものではない。作品の理解・鑑賞は一種の神祕的交感であつて、見る人の眼力の如何にかゝつてゐる。繁雜な理解し難い部分の多い連句を一々研究する迄も無く、俳句だけでも芭蕉を理解する事は出來るとも考へられる。が、自ら連句を得意とし、又そこに力を籠めてもゐたらしい芭蕉其人の全體を、よりよく知る爲には、連句の研究も決して等閑に附してはならない。子規が「連句非文學論」を提出し、連句の附句の變化を唯和歌又は俳句を列記したのと同じいと言つてゐる等は、少し無責な言ひ方だと思ふ。連句の法則を改良乃至撤廢したとて、新時代の藝術として歡迎せらるべき性質の者とはならないではあらうが、連句は全然文學で無い等とは言へまい。蕉風の連俳には非常に藝術味の豐かな作が多い。近來、芭蕉俳諧の研究にはみるべきものが多いが、今後の芭蕉研究にはもう一層連句を深く研究味讀すべきである。芭蕉の俳句研究も、もつと深く進める餘地があるが、連句の研

究に就いては、一層その感が深い。連句について詳しく論じてゐる暇はないが、「子規と連句」の關係、子規が連句をどの程度に味つてゐたか、又作つてゐたか等の方面に就いて、少しく述べて置かう。

子規は「芭蕉雜談」を書いた以前、古俳人の連句をも、少しは讀んでゐたに相違ない。連句の簡單な法則位は心得、自分でも作つてもみたのであるが、その理解の程度の極めて幼稚だつた事は言ふまでもない。明治二十三年に書いた子規の書簡の中には、友人から送つて來た連句を批評した言葉等もみられるし、廿四年の夏歸省した時の連句は、碧梧桐編「子規の第一步」等に公表されてもゐる。

(註三)

あいさつを二度いふときやかりのこゑ　武
　まかき取りまく朝かほの花　可
空も樣二百十日のちかつきて　武
　ほいとのあとに犬のほへけり　可
表戸をぴつしやりたてゝ夕の月　可
　舟のたよりのきかまほしさよ　武
番頭も手代もよりて土用干　可
　羽おりたゝんで行く太鼓醫者　規
小便を無用とかいた建札に　武
　雀むれきてやどりもとむる　武

またれけり復こむ春の花ざかり　武

八兵衛との〻妻は八十　可

（註三）「武」は武市雪燈（蟠松）（子規の少年時代の詩文の友）可は河東可全（碧梧桐の第四兄）（古くからの子規の詩文の友）規は子規。

「羽おりた〻んで行く太鼓醫者」と云ふのが子規の句だが、此頃は俳句も幼稚なのではあるが、實際こんな連句では閉口する。俳句は其後熱心に作つたに比し、連句は面白くないと單純に思つたのであらう、殆んど作らなかつたから、「芭蕉雜談」に於て、連句非文學論を主張した頃の連句觀は、未だ門外觀と言つてもよい程度の幼稚さであつたと思はれる。連句を全く知らないとは言はれないにしても、少くとも、その味に徹するといふやうな境からは懸絶してゐたのである。其後俳句の鑑賞眼が高まると共に、連句の味をも多少づつは解して來たらしい。從軍の歸り船中で喀血した病氣の身體を、須磨や故郷に養つてゐた暇のあつた頃、殊に故郷では大いに自ら連句をも物したらしく、須磨で作つたといふ「獨吟百韻」の名で發表したものや、「養痾雜記」の終りに出した、故郷でやつたといふ作等を見ても、かの廿四年に作つた者等とは雲泥の差である。「俳諧大要」中には、特に「俳諧連歌」の章を設けて、主としてその法則を述べ、「隨問隨答」の第八回にも歌仙の法則を述べ、必ず法則に從はねばならぬので無く、芭蕉の連句等には破格が多い、各人の手心で取捨すべき事を論じてゐる等、必ずしも連句を否定し去つてゐない。「芭蕉雜談」を書いた當時に比しては連句に、より多く親しみ、その味ひをも多少解してゐたらうとは想像される。内藤鳴雪に「俳句獨習」に、

連俳は其物自身としては少しも文學上の價値はないものであるが、併し文學上の價値ある俳句を作るといふ上に於ては大なる價値があるので、言はゞ寫眞と肖像畫を基として書きあげた畫は美術品として大なる價値を保つと同樣に美術品を作るに寫眞も肖像畫も價値がある。俳句を作る上には連俳も大な價があるわけである。故に若し餘力があるなら連俳をも併せ試むるに勝つた事はない。併し連俳を試むるには多量の時間と思力とを費すから、無理に試むるには及ばない。寧ろ俳句の便利重寶なものにのみ就いて然るべきである。

と、連句の消極的價値卽ち俳句を作る準備のための附隨的價値を認めてゐる等は、子規の連句非文學論を側面から敷衍した如きものであるが、子規の考も結局この鳴雪の論程度を徘徊してゐたのであらう。卅二年頃も、「自分は連句と云ふ物餘り好まねば、古俳書を見ても連句を讀みし事なく、又自ら作りし例も甚だ稀である。」(俳諧三佳書序)と公言して憚らなかつた彼であるからである。明治の新しい俳人でも大學派の人々殊に酒井野梅等は連句の鼓吹者として知られてゐるが、一般に連句は餘り作られなかつた。少くとも藝術として顯著な發展を認めることは出來なかつた。特にホトトギス派の俳人等は連句への關心が乏しかつた。虛子は卅七年九月の「ホトトギス」に、子規や鳴雪の論に疑問を投げてゐるが、一應至當な疑義といはねばならなかつた。

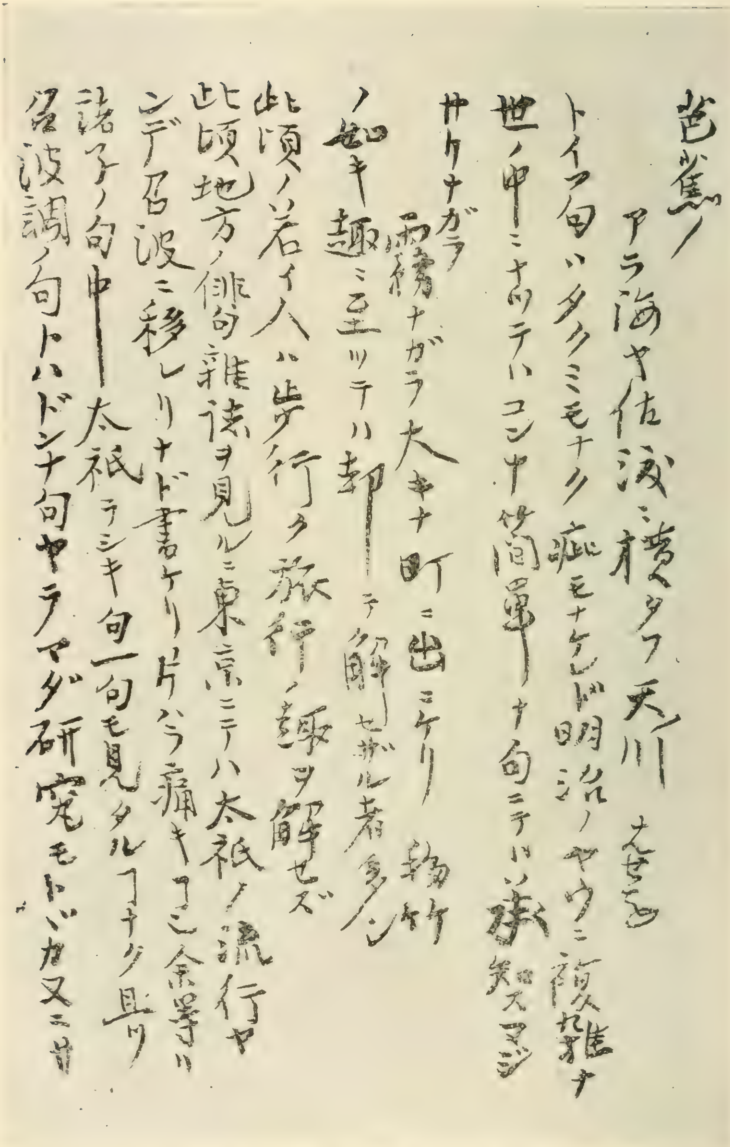
さて「芭蕉雜談」の殘りの部分を一言すると、「雞聲馬蹄」の題下に、西行・宗祇・芭蕉の、旅行好きな三人の類似・相違等に一言し、芭蕉がこの二人を慕つてゐた事を、作句等をあげて書いてゐる。又「著書」と題し芭蕉に關する著書に就いて一言し、次に「元祿時代」の項を設けて、芭蕉・西鶴・巢林子の三人を比較論評し

てゐる。（彼の隨筆、「松蘿玉液」には、この三人に就いて、やゝ詳しい論がある。）次に「俳文」と云ふ題で、彼の文章を論じ、「補遺」として、今まで言ひ足らぬ所をあげると言つて、芭蕉の略傳・死因・作潤其他に就いて書いてゐる。一々批評・考證すると際限もない事であるから、略しておくが、「芭蕉雜談」は略ゝ以上のやうなものである。

その後、「行脚俳人芭蕉」（卅年）「幻住庵の事」（卅二年三月）等芭蕉に關する文章が發表されたが、それらは子規の意見として特別注意すべき程のものではない。明治廿八年一月某氏に與へた書簡に、

日々拙著芭蕉雜談も隨分亂暴なる著述にも有之困り居候尤も自分には多少の意見も有之候へども何分筆のまはらぬため思ふやうには書け不申候今日ならば今少しは精密にも言へ可申と信じ居候加之芭蕉に就ての意見も前年芭蕉雜談を草し候時と今日とにては小部分には多少の相異も出來申候やう覺え候

とある。晩年に至つては、全體論にも句評にも、かなり多くの異見を抱いたであらうとは察せられるが、一々どういふ變化を示したかは十分にはわからないのである。「古池や」「物いへば」「道のべの」「あか〳〵と」等の句に關して、其後書いた意見によれば、彼の芭蕉觀の根本は餘り動搖しなかつたやうである。併し乍らたとへば「明治廿九年の俳句界」と題して評論に於て、碧梧桐の印象明瞭の句を推賞し、印象明瞭と餘韻とは反對するものである事を說き、餘韻と云ふ事には主として芭蕉の句を例示してゐるが、惟ふに芭蕉の句の特色として、餘韻乃至風韻といふ如き優越性を認めてゐたと考ふべきものであらう。芭蕉の句の特色として雄壯といふ點をその後說いてはゐるが、寧ろ閑寂に徹した風韻といふやうな普通說を、徐々に認容せさるを



芭蕉ノ
アラ海ヤ佐渡ニ横タフ天ノ川　[illegible]
トイフ句ハタクミモナク疵モナケレド明治ノヤウニ複雑ナ
世ノ中ニナツテハコンナ簡單ナ句ニテハ承知スマジ
サリナガラ
雨[illegible]ナガラ大キナ所ニ出ニケリ　[illegible]
ノ如キ趣ニ至ツテハ却ツテ解セザル者多シ
此頃ノ若イ人ハ歩ヲ行ク[illegible]ノ趣味ヲ解セズ
此頃地方ノ俳句雑誌ヲ見ルニ東京ニテハ太祇ノ流行ヤ
ンデ召波ニ移レリナド書ケリ片ハラ痛キコト余等ハ
諸子ノ句中ニ太祇ラシキ句一句モ見タルコトナク且ツ
召波調ノ句トハドンナ句ヤラマダ研究モトドカズ又ニ[illegible]

晩年の藝術觀の片影

得なかつたのでは無いかと思ふ。さういふ點に於いても、多少意見の變化は認められる。

彼は「元祿の人は面白くてもつまらなくても眞實をありのまゝに話し」句には、安永・天明のこれに比して稍たるみがあるが、たるみ方全體にたるんで、その程らひがよいから、元祿の俳句は自然さに於て優つてゐる者だとも言つてゐる。「俳諧大要」や「俳句問答」や「或問」に於て、讀むべき俳書として、芭蕉七部集は必ず第一にあげてゐる。殊に「猿蓑」を愛好して、「俳諧三佳書」の名の下に、「續明烏」と「五車反古」と合せて出版してゐる。彼が芭蕉を尊重してゐたことは明かな事であるが、「詩人の資格を備ふること芭蕉が如きを見ず。」（行脚俳人芭蕉）とは、一片の容御世辭では無く、彼の僞らない眞情であつたであらう。併し結局彼は眞の芭蕉の深き理解者ではなく、生涯、芭蕉に對する、或不滿を持ちつゞけた事も爭はれないやうである。「俳諧三佳書」の序にも、芭蕉・其角の句に猿蓑に出てゐるのが餘りよくない、芭蕉の句は稍ゝ理窟に墮ちてゐるが、去來等の眼には眩ゆくて、巧拙は分らなんだらしいと云ふ風に論してゐる。芭蕉の句には多少理窟臭が多いと認め、その邊に不平不滿があつたらしい。してみれば「芭蕉雜談」の頃の批評の根本的尺度は結局捨てなかつたといふべきである。而して彼は、かかる點で、より寫實的な、巧みな蕪村の句に、より愛好を感じたのであつた。子規の芭蕉觀に、認識不足で芭蕉の神髓に觸れない憾があるが、彼の好みから、又年齡から言つても、無理の無いと思はれる所もある。

彼が傾到した蕪村に就いての子規の意見を、次に語らねばならない。

第二節 子規の蕪村論

「芭蕉雜談」には、蕪村・曉臺・一茶等が多少芭蕉以外新調を出したと云ふ事を注意してゐるが、その頃は蕪村に注意に始めた、ごく最初の時期である。廿六年一月發表の「歳旦閑話」には「大島蓼太」の項があり、

俳諧の最隆盛を極めたるは元祿なりとす。芭蕉元祿に死し其角、去來、丈艸寶永に死し其他の諸門弟皆正德、享保に至りて盡しより後は寥々として聞ゆる者稀なり。明和、天明の頃に至りて俳諧再び興らんとするの兆あり。其一二力あるもの也有・曉臺、蓼太、蕪村、闌更の諸大家にして各々獨得の妙ありといへども、中に就きて縱横奔放たる者を求むれば雪中庵蓼太を第一とす。博學精通才識群に絶する者を求むるも亦蓼太を第一となす。蓼太の著書の多き、俳人中其比を見ざる所なり。

と冒頭して、推賞してゐるが、その時には未だ蕪村に深く注意するに到らなかつたのである。廿六年何月のことであるか、當時子規一派の者と一緒に句會等をした「椎の友」といふ團體に屬する片山桃雨が、蕪村句集の寫本を捜し出し、漸次に蕪村は子規派の人々から高く評價されるやうになつた。子規は「俳人蕪村」の論の最初に、鳴雪が、蕪村集を得る事を熱望し、得來つたものには賞を與へると戯れに言つたが、それが實際蕪村集を得る機會を與へたといふ事を述べてゐる。類題集中に散見する蕪村の句に、多少の尊敬は拂つてゐたらしいが、深く尊重するに至つたのは、蕪村句集が子規派の手に入り、子規自身それを讀んでから以後の事である。かくて廿七年の「俳諧一口話」の「與謝蕪村」（九月廿三日、「日本」所載）には、

　蕪村の特色は芭蕉以後一人として賞揚すべきものなれども、其最も世に著はれたるは漢語を用ゐ漢文調を爲すに在るなり。

と、漸く蕪村の偉大を認めてゐる。廿八年には「俳諧と武事」（一月）に、芭蕉等の俳句は實景實情を敍するに反し、蕪村は理想界に眼を向け、「紛々たる今古の人事、雜然たる天然の風光、千樣萬態一として蕪村の俳句に上らざるなし。」等と論じた。「俳諧大要」（十月―十二月）にも、蕪村の俳句を評釋して賞讃してゐるが主として蕪村の俳句の複雜性を指摘してゐる事等が注目される。廿九年の「俳句問答」には、「大とこの糞ひりおはす枯野かな」「いばりせし蒲團干したり須磨の里」等の蕪村の句は野趣があり雅致を具へ、何等臭氣を感じないばかりで無く、かゝる題目をとつて斯く言ひこなした腕力の程恐ろしく、これだけでも蕪村の値打が知れる等と賞揚してゐる。この年末は「獺祭書屋俳話正誤」を出してゐるが、その中に、蓼太を推賞した事は誤つてゐたと言ひ、蓼太に對する推揚言を、多く蕪村に歸してゐるのである。

　蕪村は生前或は俳名が畫名より高かつたのかも知れぬが、子規が俳壇に出た頃は多くの注意を與へられず云はゞ俳人として忘れられてゐるやうな觀があつた。然るに子規一派に由り漸く認められ、子規一派は蕪村派等と言はれたりするやうになつた。實際、芭蕉よりも蕪村を好愛してゐた後は、以上述べたやうに新聞紙上にも度々蕪村に就いて賞揚言を發してゐたのである。而して自分達が蕪村派と目されたりした事からも、思ふまゝに蕪村を推賞論評し、蕪村の眞價を世間に發表しようと考へたであらう。廿八年十月、故郷松山に靜養してゐた頃、鳴雪へ出した手紙の中にも、歸京後一篇の蕪村論を書くつもりだといふ意味のことが記さ

れてゐるが、早晩、彼の蕪村論は發表さるべきであつたのだ。かくて子規の「俳人蕪村」の稿は、明治卅年の四月から十一月に亙つて「日本」新聞に連載され、松山發行時代の「ホトトギス」にも轉載され、後、訂正されて、「俳諧叢書」の第二編として三十二年十二月刊行され、大正二年版縮刷合本の「俳諧大要」の中に收められ廣く流布したのである。この「俳人蕪村」は廿九年の草稿とあるさうだが、發表されたのは卅年であるし、卅年の日記に「俳人蕪村を草す」といふ記事が度々ある點から推して、大體は卅年に執筆されたものと思はれる。卅一年一月からは、子規・鳴雪・碧梧桐・虚子等によつて、蕪村句集の輪講が續けられ、「ホトトギス」に連載されたが、その中等にも子規の蕪村觀はみられ、他にも斷片的の意見は隨所に述べられてゐるが統一した總括的意見としては「俳人蕪村」に最も鮮明に現はれてゐる。左に「俳人蕪村」の要點を述べたがら、一通り子規の蕪村觀を紹介批評してみたい。

緒言に於て、芭蕉以後の第一人者である蕪村は、近時漸く喜ばれかけたが、漢語を用ふる特色だけ知られ、且つ何故その特色の尊むべきかも知られず、蕪村の他の多くの特色を知るものは殆無と言つてよい一般の狀態であると論じ、本稿執筆の動機を披瀝してゐる。ついで「積極的美」「客觀的美」「人事的美」「理想的美」「複雜的美」「精細的美」の各項に、主として蕪村の句の內容上の特質長所を論じ、「用語」「句法」「句調」「文法」「材料」「縁語及譬喩」の各項目では主として形式音調に關する、いい方面も惡い方面も言及し（「材料」の項はむしろ內容的評價に屬するが）最後に「時代」「履歷性行等」の二つの題下に、その人と時代に就いて一言して終つてゐる。彼の他の俳人論と等しく、傳等には殆んど觸れず、大部分は藝術評であるが、たとへば

「芭蕉雜談」は芭蕉の惡句を指摘し、從來の芭蕉觀を訂正する事が一つの意圖であつたに反し、これは蕪村の勝れてゐる事を廣く紹介する爲で、始めから賞揚推讃する目的で書かれた所に特色があつて、純學問的價値から云ふと問題である。公平を缺いた議論も多く、內容美の分類の仕方等も學問的とはいへない。併し蕪村の價値を一般に宣揚するといふ目的には十分副ひ得た、好論文であつた。

彼によれば、「積極的美」と言ふのは、壯大・雄渾・勁健・艶麗・活潑・奇警の意匠をいひ、「消極的美」といふのは、古雅・幽玄・悲慘・沈靜・平易の意匠を指してゐる。この兩者は各〻美の半面で優劣に判定され難い。芭蕉は消極的美の半面を開いた者で、他の半面卽ち積極的美の開拓は蕪村に於て爲されたといふのである。かくて彼は、四季の中、春夏は積極、秋冬は消極であるとし、蕪村の句には夏の句最も多く佳句も春夏に多いとて、「牡丹」「若葉」其他の句を以て芭蕉と比較してゐる。「いづれの題目といへども芭蕉又は芭蕉派の俳句に比して蕪村の積極的なることは蕪村集を繙く者誰か之を知らざらん。」等と言つてゐるが、艶麗といふ特長を最も注意してゐる。積極・消極美等の說明等も未だ不徹底である。艶麗といふ特色だけをあげて置いてもよかつただらう。例句をあげて芭蕉と蕪村を比較してゐる箇所は略〻同感出來るが、「積極美」「消極美」の內容もやゝ曖昧であるし、好意的に彼の說に從ふにしても、芭蕉と蕪村が各半面づゝ消極・積極美を開拓したといふ如き論じ方も、甚だ蕪雜な表現である。彼が積極美とした壯大雄渾といふ點は、芭蕉にのみ豐富に惠まれた絕體的長所として、芭蕉雜談其他で論じ乍ら、ここでは却つて蕪村の方に多いやうな口吻を洩らしてゐる。それは單に子規の意見の變化したのでは無くて、寧ろ自分の議論を都合よく展開させようとする

御都合主義で、正確さを尊重しない議論家の悪弊であらう。概して東洋の美術文學は消極的、西洋のそれは積極的、又上世には消極的美が多く、後世に積極的美が多い等と云ふ意見に對しては、先づここに異論を挟まないとしても、唐時代の文學から悟入した芭蕉は、それ故消極の意匠が多く用ひてゐると簡單に論じてゐるところに、多少の異見を言つて置かう。芭蕉は唐の詩人に影響される所も少くなかつたらうが、それを宛も全影響の如く簡單に論じ去らうとする如きは贊成されない。彼には單なる唐詩人の影響以外、儒教や老莊等の支那思想の感化もかなり著しかつたと思はれる。而して又日本人である芭蕉は、やはり日本文學の傳統の埒外には決して置かるべきものではないのである。

一々文句をつけるのも「俳人蕪村」を紹介する意に副はないが、要するに、子規の論には誇張や不用意や誤謬が少くない事は否定し能はないのである。さういふ缺點を除けば、大體の摑み方はよいので、この「積極的美」殊に艷麗等を蕪村の特色とした事は當つてゐる。

「客觀的美」に於て、芭蕉の俳句は古來の和歌に比し客觀的美を現す事は多いが、蕪村には及ばぬ。芭蕉の門弟は芭蕉よりも客觀的句を作る者が多いが、皆客觀を寫す事不完全で繪にならない。蕪村は客觀的即ち繪畫的俳句に長所を持つてゐると論じてゐる。子規は、芭蕉が客觀句を重んじ、且その作り難い事を認めてゐたことを述べ、而も芭蕉は客觀的俳句が下手であつたと云ふやうに難じてゐる。芭蕉が比較的主觀味の多い俳句を作つた事、蕪村に客觀的繪畫的の句の多いことは認められるが、客觀的と云ふことを直ちに藝術價値が優れてゐると論ずるのは早計である。かゝる根本問題は今此處に結論を急ぐべきではあるまい。子規は

なほ「客觀的美」は上代は少く、後世になるに從つてその傾向が多くなつてゐるといひ、簡單にその理由を叙してゐるが、主觀的文學・客觀的文學に歷史的あらはれは、後世程客觀美が多いと單純に觀ずる事は粗笨で、彼の說明は、常識論にすぎない事だけを附加して置く。

「人事的美」の項に於て、天然は簡單、人事は複雜、天然は沈默し、人事は活動する。活動する複雜な人事美を寫す事は、より困難である。芭蕉や去來は天然に重きを置いたが、其角・嵐雪は人事を寫さうとして佶屈聱牙に陷つた。蕪村はこの難きをやす〳〵と實行した。蕪村以後之を學んだものを見ないと云ひ、

御手討の夫婦なりしを更衣

打ちはたす梵論つれだちて夏野かな

の二句をあげ、人事中の複雜な過去乃至未來の事をよんだ、この句の如きは、蕪村以外に無いとまで極論してゐる。例の誇張に過ぎた點はあるが、大體は同意出來る。

「理想的美」は「實驗的美」に相對する者、人間の經驗する事の出來ぬ乃至實際にありさうもない事をよむといふ方面と、不可能ではないがまた見たい經驗しないと云ふ方面を含むと限定し「河童の戀する宿や夏の月」「鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな」外十五句を例示して、蕪村の理想的句に秀でゝゐた事をほめてゐる。例句をみるに、多く歷史的取材の句である。ここにも亦芭蕉と比し、芭蕉もはじめは理想的の句もないではないが、「古池」の句に立脚地を定めてからは、自己を基として之に關する事實の實際を詠ずるのみになつた。見識の低いことと笑ふべきで、芭蕉が連句で理想美を發揮しながら、俳句には甚だ卑怯だつたと論じ、文

學は實驗に據らねばならぬが、實驗や寫生のみでは妙味を發揮出來ぬ、理想の世界に縱横に美趣を求めねばならぬ、俳句界にその人を求めると蕪村一人だと言つてゐる。

實驗や寫生にばかり頼らず、自由に理想や空想の天地に翅を擴げて作品を胎む事も出來よう。一應子規の考を承認出來る。けれども歌や俳句の世界では、特に體驗や實感を尊重すべきものではあるまいか。芭蕉の俳句が實驗・實感の軌道の上を深く進んで行つた事は、實に尊重すべき本道ではあるまいか。子規の論には直ちに承服出來ない。蕪村は理想的・空想的の句を作り、なか／＼巧みであつた。が、才人蕪村をそこに示すと共に、却つてそこにこそ蕪村の俳句の弱點があつたとも見られる。併しこれは如何ともし難い見解の相異であらう。蕪村の俳句に理想的の句の多かつた事、さうして取材範圍の廣かつたことは認めるが、芭蕉の實驗的な即自己の藝術を難ずるのには同意出來ないのである。

「複雜的美」に於て、和歌は長い間簡單であつたが、俳句は複雜な意匠を現さうとし、漢語を借用し、佶屈な直譯的句法さへ用ひたが、それも一時的で、「古池」の句のやうな簡單な者が崇拜されるやうになつてしまつた。芭蕉は三種の取合等は排斥し簡單をめざしてゐたが、美の區域を狭く限つたものだと攻擊し、蕪村は複雜的美を摑へ俳句に新生命を與へた、和歌の簡單を斥けて、唐詩の複雜を借り來り、國語の柔軟な冗長なのに飽き果てて、簡勁な豪壯な漢語で其不足を補つた、其角一派が辛苦して而も失敗した事業を、蕪村は容易に成し遂げた者だと論じ、例句をあげ、

うき我に砧打て今は又やみぬ

につき、客觀の句は複雜になり易いが、主觀的のそれは非常に困難で、この句の如きは蕪村集中他になく、芭蕉をして惘然自失せしめる底のものだと結んでゐる。

この句等を複雜だとして無上に有難がる子規の鑑賞眼には滿足出來ない。さればこそ、芭蕉の俳句を簡單と貶し、單純化をめざしてゐた芭蕉を美の區域を狹くしたと難ずるのである。芭蕉に對し、理解の無い皮想の非難である。「うき我」の句等は燃燒力の弱い、單純化の足らない、さほどすぐれた作ではない。蕉の「うき我をさびしがらせよ閑古鳥」の方が、どれだけ深い複雜な心境であるかわからない。子規が外面的に物の取合せの多寡に由り、或は漢語をうまくとりいれたか否かと云ふやうな事だけによつて、複雜と簡單を決定し去つた觀があるのは、複雜のはきちがへと言ふべきである。

「精細的美」には、「外に廣き者之を複雜と謂ひ、内に詳なる者之を精細と謂ふ。精細の妙は印象を明瞭ならしむるに在り。」と言つて、芭蕉の叙事形容に粗で、風韻ある特色も一つには精細的美を知らなかつたとして、蕪村集中には精細的美を發揮した作の多い事を言つてゐる。風韻ある半面には多少明瞭さを缺くが爲に、曖昧といふやうな缺點に陷る事はやむを得ない。芭蕉にもさういふ缺點は見出される。而して蕪村の句が比較的印象明瞭の者の多い事は認められる。子規の指摘した事實には同感出來る。價値を獨斷的にきめてゐないのはよい。が、思ふに、子規は風韻よりも明瞭を尊んでゐたので、この點でも芭蕉より蕪村を好んだことは明かである。併し、これ又大いに問題となる性質のものである。

以上の藝術美の分類の方法並びにその內容の解說には、異見不滿があるが、多少の誇張を割引して考へる

たらば、蕪村の句の内容的特色として擧げてゐるものは、略ゝ賛成出來ようかと思ふ。而して芭蕉と比較して芭蕉の俳句の不得手の半面に蕪村の長所のある事を認め、兩者は各半點した美の領域に長所を有してゐた事を注意してゐるのも、先づあたつてゐよう。芭蕉の連句は子規の所謂積極的・客觀的・人事的・理想的・複雜的・精細的の各美の大部分をば、かなり豐富に持つてゐた事、決して蕪村の俳句に讓る者ではないのに、子規が蕪村の俳句をあげてゐるのは不當として、難ずる人もあるが、その事實は子規も大方承認してゐた事で彼は芭蕉と蕪村の俳句のみに就いて比較してゐるのであるから、さして、そこを難ずるにはあたるまい。唯兩者の俳句の價値に言及し、蕪村の長所はすべて尊く價値があり、芭蕉の特色は價値が少いやうに論じてゐる箇所の多いのは、たとへ蕪村を紹介し、賞揚する意圖で書かれた者としても、餘りに不公平で偏頗な價値顚倒た部分の少くない謬見で、默過出來ない。之は要するに、芭蕉の特色價値は一應認めてゐ乍ら、十分に理解し共感する事が出來なかつたためであつて、芭蕉の長所よりも短所が、常に子規には不滿に思はれ、その缺陷を長所とする蕪村に、無上の愛敬を感ぜざるを得なかつた者といふべきである。彼が芭蕉の短所とした所は、或意味で芭蕉の藝術の永遠に輝く優越性の存する所でもある。如何にその缺點を指摘しても、芭蕉は相變らず日本文學の偉大た高峯である。芭蕉の辿つた俳句の道は藝術家の歩むべき一つの標準的たみちで、むしろ本道と言つてよい。この點に於て、私は子規とやゝ認め方を異にする。

古雅幽玄の消極的美と稱し、子規はそれが俗宗匠に使ひ古されて厭味を生じたと言つてゐる。この古雅等の要素は蕪村の句にも含まれてゐると思ふが、幽玄といふやうな特色に至ると、實に芭蕉に本質的である。

此秋は何で年よる雲に鳥

秋ふかき隣は何をする人ぞ

此道や行人なしに秋の暮

等の、晩年の句も正に幽玄の名にふさはしいものである。用語上の事に、かれこれ論ずるにも及ばないが、單なる消極的藝術と解するのは淺薄皮想の見である。心耳を清澄に大きくひらくものでなければ、ひとり寂しさに堪へて孤高の幽境に勇猛に突入する者でなければ、この姿躰は得られまい。大いなる積極道と觀ずることが出來る。而して此等の句を見れば、如何にも純客觀的繪畫的要素には乏しく、主觀味が深く沁み渡つてゐる。「うぐひすや柳のうしろ藪の前」のやうな平面的な客觀的な句もあるにはあるが、概して自然を詠んだものにも、芭蕉の感情が深く織り込まれてゐるのが特色である。それだけ個性の輝きと立體感が深く、他人の企及し能はぬ長所と言ふべきである。但し單なる寫生句に相當な作が得易いに反し、所謂主觀的俳句は厭味になり易く、主客圓融の作を得ることは、遙かに困難を伴ふ。この點から考へても、蕪村の句に纒つた一通りの佳作の比較的多いに比し、芭蕉には缺點のある句が多いが、成功した作に至つては眞に生命の微妙所をあらはして、他の企及し難いものを示してゐると思ふ。又芭蕉が人事よりも、むしろ自然に重きをおいて俳句を作つたこと、又人事をよむにしても、自己の境涯をのみ作句の對照としてゐると言つてゐるが、大體その通りであるが、それで十分で、それ以外の事は望む必要はないのではないかとさへ思ふ。單に材料を廣く取つたり、物を細かく寫したり、空想で面白く作つたりする事は、餘程末の問題である。興味とか技

巧等の技術的の問題である。一つのゆき方としてはそれも宜しからう。が、短歌とか俳句とかの藝術は特に自己の痛切なる實感に即して作らるべきもので、深くその道に入れば入る程、細く嶮しい道を踏み分けて進まねばならぬものではないか。歴史上の興味ある事實を手際よくまとめあげたり、職工のやうに一々細かい所を一分の寸法も違へまいと細工するやうな事は、到底堪へられぬ、滿足されない事である。自然と一枚になるとか、實相觀入の境地に到るとか云ふ事は、自然の中に深く深く入つてゆく事であり、深く自己を掘り下げる事である。芭蕉の境地は自然と一如になつた、悩みのない境地ではなく、寂しい自然の中を風に吹かれてひとり歩いてゆく孤獨の旅人の姿を想はせる。その境地は閑寂幽玄、おそろしく澄みきつて濁がない。さうしてなほ悩んでゐる。蕪村の長所を認め、渾然たるその藝術境、技巧の冴えには深く傾倒し、その作品はなほ愛誦してやまぬものではあるが、同時に芭蕉の藝術にも限りない尊敬を捧げざるを得ない。それは矛盾撞着でなく、秀れた者に寄する偽りのない靈の聲であり、藝術美を認識する正當な鑑賞眼の發露であると信ずるものである。

饒舌をやめて、「俳人蕪村」のつゞきをみよう。

意匠の美が文學の根本で、人を感動せしめる力は多くここにあるが、「用語」や「句法」の美を伴はねば、可惜意匠の美も活動しない。蕪村の用語と句法はその意匠に適合し、而も自己創作のものが多いと言つて、「用語」の特色として、（一）漢語（二）古語（三）俗語の三に分けて論じてゐる。

（一）「漢語」の多い事は第一の特色で（1）漢語は國語より簡短で複雑な意匠を含める爲に必要で、それによ

つて叙事形容の精細を盡す事が出來ると論じ、例句をあげ、而も一句の調和上、用意なく濫りに使つてゐないと云ひ(2)國語より漢語を用ひた方が、より良くその意匠を現す場合に使つた例として(イ)漢語で勢を强くした句(ロ)漢語でいかめしくした句に分つて說明し(3)支那の成語を用ひた者の例をあげ說明してゐる。其角等が漢語をとりいれようとして失敗したのを、始めて蕪村は成功したと論じてゐるが大體贊成である。

(二)「古語」は元祿時代芭蕉一派が日常語との調和を試み、成功したが、蕪村に由り更に一步を進められたと論じ、今迄俳句界に入らなかつた古語をとりいれた功をたゝへてゐる。この蕪村の特色も認められる。

(三)「俗語」の最俗なもの、卽ち日常語を用ひた事も蕪村の特色で、元祿は雅語・俗語相半し、享保以後は無學のため雅語を知らず、不知不識卑近に流れ、俗語中なるべく古語に近い者を擇んだらしい。檀林派等も俗中の俗を用ひなかつたと云ひ、

酒を煮る家の女房ちよとほれた　　　繪團扇のそれも淸十郞にお夏かな
杜若べたりと鳶のたれてける　　　藥喰鄰の亭主箸持參
化さうな傘かす寺の時雨かな

等をあげ、一茶の俗語の用法はこれらの句から胚胎したのではなからうか、「藥喰」の句は蕪村集中最俗な者で一讀に堪へぬが、特にこの邊から悟入した感なくもない。一茶には名句もあるが、全體として、句法は蕪村の「酒を煮る」「繪團扇」の樣なしまりがなく、「意匠」は「杜若」「時雨」のやうな趣味を缺いてゐると論じ、用語だけでも、俗語を用ひた一茶の外は、「漢語」「古語」を使ひこなした事、彼に匹敵する者無く、

蕪村は用語のみでも、俳句界獨歩の人と賞めてゐる。

一茶に就いての論は、一茶の藝術の本質に理解の缺けてゐる憾があるが、かゝる缺點は多少免れなかつたと思ふ。言葉を使驅する技巧のうまさこそは蕪村の獨擅場であつたといふべく、加ふるに藝術味豐かであつたから、漢語・古語・俗語を巧みに使用して好句を殘した點では、實に蕪村は第一人者だつたと思はれる。漢語・古語乃至俗語を、單に多く使用したことだけなら、他にいくらもあげ得ようが、巧みに生かしたといふ點では、蕪村の存在は眞に珍重すべきものであつた。

「句法」の條では、俳句の句法は、貞享・元祿に定まり、享保・寶暦を經て少しも動かず、むしろ元祿の變化の自由を失ひ、「や」「かな」一點張の單調に墮し、檀林一派や東貴輩の、奇を弄する者あるのみであるに蕪村は種々句法上の變化を造つたと論じ、（イ）漢文・漢詩から來た句法（ロ）古文から取つた句法（ハ）和歌よりとつた句法等を例示し、殊に（イ）の多い事を述べてゐる。倒句には如何かと思ふ者があるが、暗示される所少くない。形容詞は印象を明瞭にする效が多いが、元祿以來極めて必要なもの以外は用ひられなかつたのが、蕪村には巧妙に使用され、殊に後は中七音の中に簡單な形容詞を用ふるに長じてゐた。後の形容詞を用ふる者、多く句勢にたるみを生じ、蕪村の簡勁と痛切に遠く及ばぬと論じ、又「うれしさよ」「ゆかしさよ」等良く使つてゐる事を指摘し、又一句の結尾に「に」の助辭を適當に用ひてゐる事を指摘し、下句に「何ぶり」「何がち」「何顔」「何心」等を据ゑて事を略み、中七字にこの類の語を用ひたものもある、後世のこれに類するものは卑俗で嫌ふべきであると言つてゐる。後世のものゝたるみ乃至卑俗といふのは、後

世の俳句一般に通じたことで、子規がここに指摘した句法に限つた事ではあるまい。又これら擧げた者は盡く蕪村專有のものとは言へないが、かゝる特色のあつた事は認められねばならぬ。句法等が變化があつて而も技法の巧い事、蕪村の如きは蓋し類稀であらう。

「句調」について述べた大體をいふと、蕪村以前は句割れはあつたにしても、七音の句は四、三又は三、四と切れてゐるが、蕪村には「夕風や水青鷺の脛を打つ」のやうに、二、五と切れ「若葉して水白く麥黄ばみたり」或は「春雨や人住みて煙壁を漏る」のやうに五、二或は五、三と切れる等おそらく蕪村の創めたものだらうと言つてゐる。が、創めたといふのは言ひすぎかと思ふ。又五七五調以外「六七五」が多いと云ひ、七七五調・八七五調・九七五調の句、五八五調・五九五調・五十五調等の句を例示し、種々變化が多い事を示し又終りの六音を「花に暮れし」「月を畔す」等のやうに三三調に用ひたのは蕪村の創意であらうと言つてゐる。創意といふのはやはりどうかとおもふ。調子のいたく變つた者として、「梅遠近南すべく北すべく」「山人は人なり閑古鳥は鳥なりけり」等を擧げてゐる。

「文法」の項目では、

鮓を壓す石上に詩を題すべく。　綠子の頭巾眉深きいとほしみ。
大矢數弓師親子も參りたる。　時鳥歌よむ遊女聞ゆなる。
[illegible]

をあげ、「たり」「なり」と言はずに、「たる」「たる」と云ひ、「べし」と言はずに「べく」と言ふ如き、殊

更終止言たらぬ語を用ひて餘意を永くしたのであらう、と言つてゐるのは、同感。

　二本の梅に遅速を愛すかな　　庭なる我蘭を存す野分かな
　夏山や京尽し飛ぶ鷺一つ　　蘭夕狐のくれし奇楠を炷ん

の連續の如く、從來の國語に無い句法で、明治俳句の一生面はこの邊から多く拓かれたといふ如き、この他二三例示してゐるが、文法等に拘泥しないで、新句法を創造して行つた事を、この項では主として論じてゐるのである。

蕪村の俳句の句法や句調は、子規が創意だとしてあげてゐる者も、必ずしもさうではないやうだが、少くとも意識的に而も堂々と新句法・新句調を工夫使用し、成功してゐる者が少くないのである。蕪村以前に使はれても餘り成功しなかつた者が、彼に於ては立派に藝術的に生かされた句法に乏しくない。かゝる句法上の甘さに私達は自づとひきつけられてゐる場合が少くなかつた。蕪村の特色はさういふ點に先づ認められねばならぬと思ふ。子規が空疎な内容論に滿足せず、句法句調等に考察の眼を向けた事は、實作家としての體驗を基礎としてゐるのであらうが、研究論稿としても、當時に於ては實質的な進歩的の者であつたと思ふ。

「材料」の題下には、新奇な者が多いと言つて、狐狸を詠じた者の少くない事、怪異をよんだ者のある事又狐狸以外幾何か怪異の聯想を起すべき動物をよんだものゝある事を、各々例示し、又此外、犬・鼠等の句が多く、怪異といふのではないが、此のやうな動物を好んで材料にしたのも特色の一つだと言つてゐる。これらの特色は明かに認められよう。更に、州名・地名等廣い地名を多く用ひたとて、

河内路や東風吹き送る巫女が袖　　初汐や朝日の中に伊豆相模

等を例示してゐる。又糞等の不淨物を巧みに詩化し、殺風景にしない許りでなく、幾多の荒寒凄涼の趣味を含ませ得たと言つて例句をあげ、而もこれと反對に上流社會のやさしく美しい樣をも巧みによんだと例をあげてゐる。蕪村の句は皆新奇であるが、特に新奇な材料を用ひたものとして「野袴の法師が旅や春の風」他十三句をあげてゐる。要するに、新奇な材料の句が多い事を、特に注意してゐるのである。が、同時に材料の廣い事をも示してゐるものと云ふべく、その取材範圍の廣い中から特殊性のある者の一部をぬき出してきたものとすれば、別に異見はない。

「緣語及譬喩」の條で、蕪村が緣語や其他文學上の遊戲を主とした俳句を作つた事は怪むべき事のやうではあるが、「巧妙にして斧鑿の痕を留めず」和歌や檀林・支麥のやうな沒趣味の作をしない所に、彼の技倆を見るに足る者があるとて、

春雨や身にふる頭巾著たりけり　　又嘘を月夜に釜の時雨哉

等二十近くの例句をあげてゐる。又俳句に譬喩を用ふるのは俗人の好む所だが、多く理窟に墮ち趣味を沒了して終ふ。蕪村も時々用ふるが、その譬喩は奇拔で多少の雅致を具へてゐて、支麥輩の夢想さへしなかつた所だと言つて、

苗代の色紙に遊ぶ蛙かな　　あたまから蒲團かぶれば海鼠かな

等十五句を例示してゐる。子規は緣語とか譬喩はてんで嫌ひな方で、常に否定してゐるのであるが、而も蕪

村のその種の句は相當認めてゐる。たしかに子規のいふやうに、蕪村の技量は、これらにも十分あらはれてゐる。

「時代」の題で論じてゐる要點は次の如くである。

俳諧は天明に盛であつたが、その隆盛を來した力、蕪村最も與つてゐる。和歌も眞淵によつて曙光をみたが、蕪村の句がその影響を受ける事の少かつたのは、音調に清新な趣味を缺いた和歌は到底俳句を利するに足らなかつたのであらう。當時の和文は多く擬古文の類で見るに足らなかつたが、擬古と云ふ事は蕪村に影響して用語に古語を使ひ取材に古のものを詠ませた原因となつたのかも知れぬ。漢詩の影響は最も多くうけた。彼は當時勃興した徂徠の說卽ち文は漢以上詩は唐以上と云ふ考をそのまゝ同意したかつたらうが、唐以上の詩を以て粹の粹とした事は疑はれぬ。春泥集の序をみても、彼が漢詩の趣味を俳句に移した事、李杜を貴び元白を賤しとした事も明かで、その認識の程度は、おぼろに感じた芭蕉と同一ではない。繪畫も大雅と併稱される大家だが、天明以後の繪畫の勃興に對しては、多少の力にはなつてゐるが、彼が後の俳壇に影響したとは同一に論じられぬ。天明は狂歌等で黄表紙漸く勢を得たが、俳句とは直接の關係はない等と論じてゐる。又變つた俳人については「蓼太は蕪村に擬したりとおぼしく、蓼太は時々ひそかに蕪村調を學びしこともあるべし。」といひ、太祇と蕪村の關係はわからぬとし、幾分は太祇に導かれた部分もある事を認め、師巴人から受けたものは多くなかつた事は蕪村の成功の晩年であつた事をみても分る等と言つてゐるのである。

天明俳壇の精神は蕪村にみるべく、俳壇勃興の功は蕪村が與つて力あつたこと言ふまでもない。蕪村に著

しい特色である古典的要素は、當時盛であつた國學並びに漢學の古典研究に影響されてゐる事は明である。その古典的傾向は黄表紙の如き者にさへ、幼稚に衒學的に表はれてゐる。眞淵等の和歌から得たものは少いとしても、眞淵の和歌も、蕪村の句の古典的要素も、古典研究熱といふ源流から發したものとも見られる。蕪村の漢詩に對する趣味は、勿論當時の漢學者の影響もあらう。服部南郭に師事したと云ふ彼であるから。が、畫家として南畫の研究をした事等からも養はれたに相違ない。「春泥集」序に、藝術は俗を離れる事が大切で、そのため讀書は最も必要である。俳諧をつくる人は詩をよまねばならぬ等と言つてゐるのは、漢詩に對する愛を物語るもので、古典趣味の立場から發せられた言葉である。此等については大體子規の考は正しいやうだ。漢詩趣味について芭蕉との比較をした箇所は、少し如何かとおもふ。蕪村は李杜を尊び元白を低しとしたのには違ひないが、彼は比較的自由な心で、美點を認め得た人ではあるまいか。詩に對する鑑賞は何れが深く到つてゐたかは定め得ないが、芭蕉よりも、より知的で、その鑑賞も、より冷靜で、且つ畫家でもあつたがため、廣く寛容なところがあつて、つまらぬと思ふ作家にもなほ詩美のとるべきを發見しつゝあつた人のやうに思ふ。蕪村の後代への影響を、畫よりも俳句の方を大とするのは正當であらう。交友の事については蓼太との交渉は未聞である。蕪村の句が上等であるから、蓼太や曉臺が蕪村に學んだ所の多いやうに考へる事も一考察であるが、互に學ぶ所はあつたが、高所にゐた蕪村は、他に學んでも自己の力の下に、個性味のあるものにし得たのだといふやうにも考へられる。それらはなほ透徹た觀察、周到な研究を必要とする。太祇については「俳人太祇」（卅一年三月）に、

太祇と蕪村との前後は能く分らぬが、若し公平にいふたならば、其時代の機運といふ者があつて、それが南に向いて居つたから二人とも南へ向いて往たといふ事かも知れぬ。勿論機運といふのも、いづれ人が作るのであるから、太祇も蕪村も共々に其機運を作り、其機運を扶けて往たであらうが、二人以前にいくらか其機運を作つた者があるかも知れぬ、等と言つてゐる。師巴人と蕪村との關係は、子規の見るよりは重要視すべきものであらう。成功の晩年だつたといふ一事から直ちに師巴人との關係はたいしたものでなかつたとは言へない。「阿里の磊落なる語勢にならはず」と言つてゐるが、俳句の上では深くは影響されなかつたかも知れぬ。併し巴人の死後、江戸を捨てゝ諸所に放浪し、遂に五十を越した年配で、師の後を繼いで夜半亭第二世としてあらはれた事に徴しても、その關係は看過出來ない。

師やむかし武江の石町なる鐘樓の高く臨めるほとりに、あやしき舍りして市中に閑をあまなひ、霜夜の鐘におどろきて、老の寢ざめのうき中にも、予とともに俳諧をかたりて、世の上のさかことなどまじらへきこゆれば、耳つふしていと〳〵高き翁にてそありける。ある夜危坐して予にしめして曰、夫俳諧のみちや、かならず師の句法に泥むべからず。時に變し時に化し、忽焉として最後相かへりみさるかことく有へしとそ。予此一棒下に頓悟して、やゝはいかいの自在をしれり。（むかしを今の序）

等書いたことは、蕪村の單なる辭令であつたらうか。彼は師巴人の恬淡な人格を尊重し、又その自由な指導下に、喜んで自己の藝術を進展せしめ得たのではなかつたか。

「履歴性行等」の題下に論じた重要點をあげると、先づ蕪村は[illegible]で法度に拘泥しない[illegible]高潔であつた

半面に餘りに名譽心を抑へすぎ、折角大成發展すべき事業を中絶させたといひ、春風馬堤曲等をみると、俳諧にばかり滿足してゐる小智小才ではなかつた。畫ももう少し努力すれば應擧輩の名を擅にするを許さなかつたらうと言つてゐる。（この點は第一編で子規の性格を論じた時、すでに例示した所である。）而して「春風馬堤曲」に就いては俳句以外の蕪村の文學として見るべきはこれのみで、彼の熱情をあらはしたものもこればかりだと言つて說明し、この外澱河歌三首があると云ひ、これらに對して、紀行的韻文とも、諸體混淆した敍情詩ともみられるが、これを一篇の長歌として新體詩の源を拓く事の出來なかつたのは惜しい。俳人として一流の彼も廣く文學界からみれば規模の小なること驚くべきであると評してゐる。子規が當時なほ俳句以外廣く文學界全體の上に着目し、新體詩に熱心だつたりした事がこゝにも反映してゐるのである。「晉我追悼曲」等は新體詩風の物であるが、子規はみなかつたのである。次に所謂五子（其角・嵐雪・素堂・去來・鬼貫）四老（其角・嵐雪・素堂・鬼貫）の事をあげ、中で其角を最も推してゐたと思はれるが、而も「其集を閱するに大かた解しがたき句のみにてよきと思ふ句はまれ〱なり」とか「百千の句のうちにてめでたしと聞ゆるは二十句にたらず覺ゆ」と批評したのは、眞に蕪村の眼中に古人がないと賞めてゐる。古典趣味を有し而も批評眼は冷靜で、古人に盲從しない蕪村の態度は、如何にも子規を喜ばせたであらう。この性質にも蕪村と子規にはかなりの類似があると言ふべきである。蕪村の畫については、南畫から入つて南畫を脫しようとしたと思はれる。田舍の風光・山村の景色等の實見を捉へて、畫界を改革しようとしたが果さなかつた。尚、眼光は高く應擧・吳春等の及ぶ所でないと云ひ、蕪村の俳畫を稱する者があるが、雅致はあるが俳畫は字の如

き者で畫でないと排斥してゐる。應擧や呉春との比較論の是非は暫く措き、俳畫については、子規の價値否定に反して私はその價値を認めたい。子規は友人の洋畫家の說に影響されて邦畫蔑視に傾いてゐたのであらう。畫については、支那の畫風よりいでて稍〻和臭があり、縱横自在で品格がないと言ひ、文章は淡泊で雅致があるが、純粹の美文とみるべきものは無いと言つてゐる。ここにいふ美文の意味範圍が分らぬが、新花摘にある怪異的な物語等は美文と言つてよい種類の者ではなからうか。次に蕪村の句の多い事、又その何れも優つてゐる事を言ひ、句作には一字も苟もしない風に推敲する人だつたらうと言つてゐる。必ずしも推敲した作許りではないが、その句をみれば、可成り句を練つた人である事は想像される。後子規は「新五子稿」を讀み、その中の蕪村の句が拙句が多く認められた事等を書いてゐるが、全然駄作とすべき者は蕪村の句には比較的少いやうである。弟子については、几董を最たるものと言つてゐる。其後も「蕪村と几董」といふ文を書いたりして、几董の價値を認めてゐる。召波の價値も、其後かなり認めたのであつたが。

以上は「俳人蕪村」の大要を紹介し、所々に簡單な卑見を附加したものであるが、子規の言には、蕪村を擧げ芭蕉を貶した憾があり、蕪村獨創の句法句調等としてあげたものにも、誇張や獨斷は免れないが、蕪村を紹介し、宣傳することに於ては、蓋し成功した文と言ふべきであらう。而して如何に蕪村を愛好し、之に傾注してゐたかは、この一篇によく伺はれる。卅年九月には大野酒竹の「與謝蕪村」が出版され、岡野知十等も蕪村については書いてゐたとおもふが、子規の蕪村論は蕪村を宣揚するに、最も效驗があり、對俳壇的にも多くの影響を與へたに違ひない。之を契機としてホトトギス誌上に蕪村句集講義があらはれたりして、蕪

村は漸次大衆化されて來るのである。卅四年「春夏秋冬の序」にも、

新俳句編纂より今日に至る僅に三四年に過ぎざれども其間に於ける我一個又は一團體の俳句上の經歷は必ずしも一變再變に止まらず。しかも一般の俳句界を概括して之を言へば「蕪村調成功の時期」とも言ふべきか。云々

と言つてゐるが、實に明治新俳句の發展は天明の俳句就中蕪村等に學ぶことによつて開拓されたことは頗る多かつたのである。とにかく、かういふ點からみても「俳人蕪村」は、子規の俳論を叙べた文獻中最も大切なものの一つである。

子規は「俳人蕪村」起草後も、機會ある毎に蕪村を讃して止まなかつた。翌年八月には、蕪村が和漢の書を涉獵してゐたから古語古事は口をついて出たので、蕪村の句を解するは困難であると云ひ、

古事古語を善く用ふる者は新意を出だす能はず。新意を出だす者は古事古語を用ふる能はず。古より詩人盡く然り。之を兼ぬる者只々蕪村あるのみ。（雜感）

といひ、「五傑集の叙」（卅二年二月）には、

蕪村は學問あり、見識あり、獨り俗俳諧の上に超然として世と名利を爭はず。其作る所の句は雄健にして變化あり、瑰麗にして雅趣を失はず。森羅萬象は之を網羅して其詩料に供し、雅俗漢語は之を鎔冶して其詩形を造る。發して中らざる無く、言ふて可ならざる無く、句甚だ錬磨を經ざるが如くにして細かに之を觀れば一字の動かすべからざる者、實に彼が今古俳壇の只一人たる所以なり。

と絶大の讃稱を發してゐる。晩年「仰臥漫錄」にも、芭蕉の「五月雨をあつめて早し最上川」の句は今日迄

古今有數の句と思うてゐたが、今日ふと此句を思ひ出してつくづく考へてみると、「集めて」といふ語は巧みがあつて甚だ面白くない」蕪村の「五月雨や大河を前に家二軒」の句は、遙かに進歩してゐると書いてゐる。これは色々考へさせられる言葉であるが、實に子規が芭蕉よりも、より蕪村に愛を持ち續けてゐたことをわれ〳〵に確實に承認せしめるのである。

子規は、簡單の趣味、天然の詩趣を自ら好むと言つてゐるが、それは小說のやうな長篇の複雜さ、人事的葛藤に比してのことで、一方に於ては出來るだけの複雜さを句に求めてゐたのである。子規が遂に平淡な境地を示すやうになつたのは、晚年二三年のことで、それ以前は出來るだけ複雜で而も印象明瞭の者を求め、人事・自然あらゆる題材に廣くゆきわたらうと志したのである。ひたむきに閑寂の境地をめざし、心境に徹した句を案じた芭蕉よりも、これらの要件を具へた蕪村を好もしく感じた事は無理からぬ事である。取材や詞の變化を多く示した達者の句作者、印象明瞭な、明快な句、感覺的な優麗な句をものした蕪村は、若い子規の心を滿足させるに十分な魅惑を持つてゐたと言ふべきである。子規等を中心とする明治俳壇の改革は、蕪村に暗示されることが多大であつた。後では芭蕉への復歸の聲も一部に盛になり、蕪村熱も下火とならざるを得なかつたが、一時は蕪村熱が俳壇を壓した觀であつた。子規は蕪村の愛好者の隨一人であり、彼によつて蕪村は一般的に高く評價される端緒を得たと言つてよい。蕉風の末流を排斥し、彼は高く高く蕪村の旗をかゝげて、明治俳壇の中心に躍り出してゐるのであつた。

第三章　子規の俳諧史観

芭蕉と蕪村に俳諧史上の最高の峰を認めてゐた子規の意見は大體上述の通りであるが、他の俳人に對し、他の時代の俳句に就いて如何なる考を持つてゐたか。俳諧の起原について、又明治に至るまでの、その興亡隆替に關し、精細綿密な研究を發表してゐるといふわけではないが、略〻彼の俳句史觀を窺知し得る文章を幸書き殘してゐる。彼の俳論・俳諧史觀にも進展成長があつた事は言ふまでもない。或點まで明かにその展開をあとづける事も可能である。が、それは彼の俳句の成長を辿る時、附隨的に論及する方が、俳句そのもの丶考察の上にも便利であらう。ここには彼の俳諧史觀の略〻確立した、卽ち明治卅年以後書かれた、過去の俳句に對する彼の斷片的文獻を總括整理して簡單に示してみよう。研究家・批評家乃至作家としての精進・見識・抱負の一端を知ることにもなり得るであらうから。

連歌の單調無味に不滿を抱いて、宗鑑や守武は俳諧の上に新方面を拓いたが、彼らは只、今迄用ひなかつた俗語・漢語を用ひ、且つ滑稽の趣味を叙べた許りである。併し無趣味な連歌に趣味を加へ、模型的連歌に寫實を敎へる事は出來なかつた。彼らは僅かに滑稽の一方面特に滑稽中の下等の一部分を得たのみで、品格に於て、趣味に於て、むしろ連歌よりも遙かに低級な一體を興したものと言ふべきである。併しながら沈滯腐敗してゐる連歌を蕩搖して他日の改革の導火線ともなつたのには、俳諧史上特筆する價値はあるのである。

その俳諧の滑稽は大凡三種で、（一）擬人法又は譬喩を用ふる者（二）言語上の遊戯に屬する者、即ち縁語・懸詞を用ふる者（三）古事・古語・謡曲等の應用乃至飜案を事とする者等、淺薄野卑たるものばかりである。

二人の死後、しばらく俳諧も中絶の形であつた。連歌は益〻衰へ、紹巴等を限として、德川時代に入つては唯形骸を保つばかりのものとなつた。而して松永貞德の俳諧は漸く擡らうとしてきた。丁度戰亂も止んで平和の光を仰望した時であつたから、無邪氣な滑稽、野卑な俳諧も當時の嗜好に合し、京に江戸に、到る處に勢力を逞うするに至つた。實に隆盛の度は宗鑑・守武時代の比ではないが、さて之を本質的に觀れば、少しの進歩も無く、一層野卑な無味な者と言つてよいのである。貞德の俳諧は鑑・武を敷衍しようとして、その糟粕を嘗めた者で、連歌よりも趣味少く、鑑・武の俳諧よりも更に活氣に乏しい。

眠れる足利の世にも、連歌の單調に飽いて俳諧を興した者がある。文運は日に月に盛にならうとする德川の治世に、何時迄貞門のつまらぬ俳諧に滿足してゐられよう。西山宗因の所謂談林派が起つた。宗因も亦滑稽の區域以外に出る事は出來なかつた觀があるが、趣味を増した點、句の結構に活氣を生じた點、貞門に比して一段の進歩である。貞門の慣用手段である擬人法は殆んど見なくなり、用ひられてゐる者は少しの趣味を含むやうになつた。譬喩は或は奇抜に或は輕妙に、連歌や古風俳諧の千篇一律な者よりは一段の進歩を示し一歩深く文學の境に入つた。古事・古語の使用は談林一派の生命とも言ふべく、貞德の好んで俳書・俗語を使用したに反し、好んで和歌・謡曲を用ひた。この一事すでに、談林が品格に於て貞門に勝つてゐる事を證するものと言ふべきであらう。

守武死後凡そ八十年、貞徳起り、貞徳起つた後卅年にして談林が興り、時勢の進歩速度を加へ、談林勃興後十年既に衰へかけ、延寶の末年に出た其角・杉風の作つた句合の如き、言葉の滑稽を離れて趣味上の滑稽を主とするに至つた。越えて三年、虚栗集（天和三年）が出た。滑稽を離れて僅かに雅致を加へたが、内容は粗笨蕪雜、言葉は佶屈聱牙で、統一調和を缺き、深く到らない。翌貞享元年、冬の日の撰があり芭蕉に野ざらし紀行があり、一歩俳境は進歩した。併し工夫の痕跡があり、まだ自然圓滿の域には到らぬのである。然るに貞享三年、古池の句に、芭蕉の態度は殆んど確立した。日常平凡な事が直ちに句となり得る事を悟つたのである。人工によらず、自然によつて進むべき事を知つたのである。かくて俳諧は、漸く滑稽を離れて文學の域に達した。以前の貞門・談林の俳諧とは同日に論じられないのである。

芭蕉を中心として多くの有力な門人が活動してゐるが、それら芭蕉派の辿つた道を知るためには、先づ必ず讀むべき者として俳諧七部集をあげねばならぬ。中にも芭蕉の眞髓とも云ふべきは猿蓑である。猿蓑の句はおとなしく上品で、趣味深く、言葉・調子がよく調うて、幾度見ても飽かぬと云ふやうな句が多い。あら野は猿蓑より不器用に、炭俵は、より器用である。共に最も注意すべき集である。續猿蓑には平凡な句が多いが、元祿の平凡の句はたゞ讀むべきである。門人中では、蕉門十哲中、其角・去來等は最も勝れた者で、その作は少いが凡兆の如きは、寫實味の多い、特殊なすぐれた作家の一人である。

元祿の蕉風も、芭蕉の死後漸く紊れ、享保に至つては、支麥の徒や其他の俗俳家のため、高雅の面影をとどめなくなつた。正徳頃から寶暦頃迄を含めた所謂享保の俗俳時代で、注意すべき程の作家もない。蕪村の

語らぬ事は言ふまでもなく、也有の俳句等も問題とするには足らぬ。

然るに明和以後俳運再び盛に、天明に至つて極盛となつた。俳家の多いこと、佳什の多いこと、共に遙かに元祿以上である。蕪村・太祇・蓼太・白雄・麥水・保吉・曉臺・闌更・几董・召波等大家と稱すべき作家も尠くない。元祿に比ぶれば、彼の自然に對し、此には人工の美があり、彼の古雅高古に比して、此は清新絢爛の趣があり、彼の悠揚迫らざる趣があるに對し、此は洗練精緻の長所がある。一は實を尚びつとめて俗に遠ざかり、一は華を競ひ新を尚び、而も野卑を免れた。一は主觀的で餘韻があり、一は客觀的で印象明瞭の句をつくるのである。このやうな差異はみられるが、ともかく上の元祿に比して天明の俳壇は好箇の對立をなし、俳句史上の二大興隆期である。而して天明俳壇を代表する最大の作家は蕪村である。移竹等はかすかに天明調を帶びてゐるが、或はこの邊から天明の萌芽があつたのかも知れない。蕪村を除けば、太祇、次に几董を指を屈しなければならぬ。太祇の句の特色は、趣向複雜で人事を詠んだ者の多いこと、雜題や俗なもの或は些細な事を、自在に取扱ひ、又人の話す言葉をそのまゝ句の中へ入れる事等も得意で、而も語句は練磨してゐる。複雜した趣向をとり入れるから、一面屈曲した句が多く、又句は垢拔けがしてゐるのである。趣味にも字句にも、多少油濃くて、流暢な、簡單な者が、俗受けし易いから、彼は餘り世にあらはれなかつたのであらうが、蕪村を除けば敵なしである。几董は蕪村の勁健の一面を得て自然の半面を得る事が出來なかつたが、その句の洗練されてゐる事は時流に超出して、蕪村も如かない所がある。蕪村より規模は小、一氣呵成の句に乏しく、蕪村の材料富贍で、配合斬新であるに比しては、尋常平凡のことに一點の生命を與へる位で

ある。要するに蕪村は天才的で、几董はその句に苦心の痕跡をとゞめてゐる。併し几董の苦心の作は捨て難いものが少くない。蕪村・太祇に次ぐものである。召波は洗練されてゐて新意を出す所、實力は侮り難い。樗良は、平淡な味を出し、相當特色ある作家である。他の作家もそれ〴〵の領分を持つてゐるが、當時最も有名であつた蓼太の如きは、徒らに俗名のみ高く、作家としては、當時の大家中では最もつまらぬ一人である。

　天明以後の俳人で特色ある者は、奥の乙二・信の一茶等で、特に一茶は、内容上は滑稽・諷刺・慈愛の特色を現はし、形式上は俗語を用ひた事、多少の新味を出した事等注意すべきものがある。江戸には白雄・蓼太の門人が居り、成美等もゐる。京では蕪村系統は絶え、僅かに月居が殘つてゐる位、其外蒼虬・梅室等のくだらぬ奴が出て、文化以後所謂俗俳時代を現出して、明治に至つてゐる。蒼虬・梅室は共に闌更に學び、二人の句は互に相類似してゐる。この二人は共に盛名があつたが、關西の俳諧社會では、やゝ蒼虬が梅室より尊ばれ、蒼虬を正風の粹とし梅室を覇としてゐるが、實に笑ふべきで、兩人とも陳腐卑俗見るべきものはないのである。併しどちらかと云へば、梅室がいくらか佳句が多い。當時はたゞ蒼虬の句にも多少の新味はあつたらうが、野卑の一點は救ふべからざる缺陷である。野卑に加へて、語句のたるみがあつて、技倆の拙は健全な意匠をさへ腐敗せしめてゐるのである。二人は月並の本尊であつて、むしろ六曉嵐外等は、これらに比して多少すぐれてゐる所があるのである。

子規の俳諧史觀のおほよその考は、以上の如きものであつたと思ふ。彼は貞德時代・談林時代・元祿時代・享保時代・天明時代・俗俳時代といふやうな時代區劃を立てゝゐるが、元祿時代と天明時代の俳句を立ちまさつてゐるとして、他は殆んど問題にしてゐない。特に貞門の俳諧は足利時代の連歌よりも、宗鑑・守武の俳諧よりも價値が無いと論じたこと等は、異見もあらうが、注意すべきである。談林派はやゝ進んだものと認め、元祿の正風に至つて、始めて文學的のものとなつたと觀てゐた。それからしばらくは暗黒時代で、明和から天明頃にかけて所謂天明俳壇の復興隆盛を齎らしたが、寛政頃までで、文化以後再び墮落して、明治に至るまで俳句は俗宗匠の手に弄ばれてゐたといふのである。各俳家に對する批評等も、ある作者については詳しく論じられてゐるし、ここに全然觸れなかつた俳人についても、言を費してもゐるのである。然しそれら悉くを紹介する頁もないし、その必要も餘り無いと思ふので、以上要所を簡略に記した。

明治廿八年八月廿九日附、故鄕松山に靜養中、東京の內藤鳴雪に送つた手紙の中に、古俳人に對する彼の好惡を、かなりよく示してゐる部分がある。それは當時彼の持つてゐた、或る標準よりは稍ゝ高い所に立つて、古人の好句を拔き、大體、好句の數を示したものである。芭蕉・其角・來山・曉臺・蓼太・闌更等、手許に句集のないものは、加へられないし、急速の仕事で精査ではないと、子規も斷つてはゐるが、彼の考を知るためには、多少の參考になる。それに據ると、

百以上　蕪村。　六十以上　白雄。　四十以上　几董。　三十以上　太祇。

自二十五迄二十九　丈艸。　許六。　支考。　尙白。

自二十迄二十四　嵐雪。　鬼貫。　凡兆。　惟然。　嵐外。
自十五迄十九　乙二。　梅室。　正秀。　北枝。　凉菟。　百明。
自十迄十四　浪化。　吏邦。　その。　卯居。　成美。　曾良。　杉風。
自五迄九　野坡。　木導。　李由。　乙州。　也有。　越人。　荷兮。
　樗良。　智月。　土芳。　米花。　宗瑞。

の類で、四點以下は枚擧に暇無く、この外零點の者は、

貞德。　貞室。　宗因。　常矩。　露沾。　和及。　舉白。　不角。　秋之坊。
沾德。　米仲。　木因。　葛三。

その外いくらもあるといふのである。續けて次のやうに書いてゐる。

士朗は秋冬のみの句あり之を算して八句を得たりされば四季を合せて二十句前後なるべし
一茶は春夏二季のみにて二十七句を得たりされば四季を合せなば四十以上となるべし
芭蕉其角は二三十の間にして曉臺蘭更は四五十もあるべし蓼太は測りかたけれど二十以上はあるべし
蒼虬は零點なるべし（此一段臆測）
我々仲間の句ならば四五十に上る人六七人はあるべきか
右の表につきて見るに意外にも且あげたるは惟然、嵐外、乙二、梅室、百明の徒に有之候野坡、越人、
鳥酔等の如きは全く見さげ申候又聴潮の如くたゞは士朗も意外に惡く一茶は格別に見あげ申候云々
一二句

貞門や談林をいかにつまらぬと思つてゐたか、元祿と天明時代を如何に重大視してゐたかは、これによつても明かである。（それは元祿頃の作家については一通りの調査が終つてゐ、それを持ち合せた故でもあらう。）幾分他の時代の作家との比較には、他の時代の作家が少くて不十分ではあるが、大體の俳人觀は想像し得る。俳家の句數の多寡、といふよりも、子規がみた句數の多寡と云ふ點をも考慮に入れなければならぬ。又非常な嚴密な意味で好句を撰定したとは云へないし、子規の意見にも、その後の成長變化を認めねばならぬ。この意味に於ては、子規が最後に到達した俳人觀を觀る料としては遺憾があるが、論說よりも書簡には、赤裸々な眞實が直接披かれるのが常で、その意味に於て、私が子規の俳句史觀として述べたものの不足を補ふ事にもならうとおもふ。

さて、讀者への些かの好意のため、子規の俳句史觀について、二三の注意を記して置きたい。

彼の最初期に發表した「獺祭書屋俳話」のはじめの方に、「俳諧といふ名稱」「連歌と俳諧」等の文があるが、俳諧といふ言葉の使はれたのは、我國では古今集に俳諧歌とあるが最初であると云ひ、又俳諧は連歌から、連歌は和歌から出たと云ふ風に書いてある位の程度で、俳諧の起原といふやうな問題については、殆んど論じてゐない。それは畢竟子規が俳句以外連歌とか俳諧連歌等には興味も無く、深く注意を向けてゐなかつた事を間接に證明してゐるわけだ。彼が宗鑑・守武乃至貞德・宗因についての立言も、連句の方は顧りみないで、發句のみの比較から得來つたらしい。この點に於て既に獨斷早計の譏は免れまいが、彼の斷案には獨自性の多い眞理眞實が含まれてゐる事も亦否定出來ない。貞德の俳諧の本質的價値の乏しい、宗鑑のもので

ある事を論ずるにとゞまらず、その歷史的地位、いはゞ彼の存在まで全然意義の無いものに見ようとしてゐるやうな極端な見解には十分賛成出來ないが、少しく用捨なく決めつけるならば、子規の言ふやうな無價値さも、拒否出來ないのである。芭蕉の句について考へてみると、寛文から延寶の初にかけては、主として貞德の古風の影響下に立つてゐたし、延寶年間は主として檀林風に滿足してゐた觀がある。貞德や宗因が藝術的眞價に秀れてゐて、その俳諧が世にもてはやされたといふのではない。彼らの偉大さに傾到し或は全く征服されて、芭蕉はその作風を模倣したといふのではない。芭蕉のやうな傑出した作家も、自己を確立する迄には相當の歲月を要した。俳壇の大勢に押されて盲目的に歩いてゐたとも云ひ得よう。何物かを求めながら甲派から乙派へと轉々した。漸く自己の道を拓き、光明を仰いだ時、彼はどう思つたであらう。貞德や宗因の俳諧からは遠く脱け出してきてゐる現在の心で、彼はどう感じたであらう。彼の心の一隅には、貞德や宗因の影響の下に句作してゐた過去の自分の辿つたみちは、馬鹿々々しいものであつた、無駄の努力の多かつた事を悔いる氣持は、たしかに起つたであらう。しかしかういふ迷つた道を歩いたからこそ、現在の境地を自覺的に把握し、十分の確信を以て押進める事が出來るので、それは悟の前の必要な迷でさへもあつたと、感謝する心持もあつたに違ひないのである。芭蕉は、初期の平俗趣味（堂上風の定型的觀相を脫した）を、貞門・談林から承けてゐるばかりでなく、後年自覺期の芭蕉にも復活されたと說く事は、多少の危險があるが、芭蕉に於ける貞德や宗因の影響を全く無意義と考へる事は出來ないのである。後年の芭蕉には直接に影響を與へてはゐないとしても、間接的には何物かを惠んでゐたと考へざるを得ない。我が俳諧を新興した芭

蕉て、「自己」の努力・才能によつて、これを顯し得たのは、言ふまでもないが、貞德や宗因の俳諧も多少は砂金をふくんだ砂であつて、或は前に金塊を掘りあててはゐたが、又この砂の中から砂金を拾ひ出して來たものともいふべきものではなからうか。芭蕉に直接貞德や宗因の影響を受けたのであるが、顧つて一個の藝術家の成長をあとづけるならば、幼稚、未完成、非藝術的な時から、高級な洗練された、藝術的なものに到達してゐる事を、よく伺ふ事が出來る。子規の云ふやうな、言葉の駄洒落滑稽から意匠の滑稽に入り、然る後滑稽以上の文學にふみこんでゆくといふのは、むしろ歌人や俳人の通る一つの道程ともみられる。子規その人も、實にこの經過をしてゐるのである。私は、芭蕉のやうな優れた藝術家も貞門・談林の遊戲に遊び、それが全然無意識ではなかつた事、又一人の文學者の成長に於て、文學史發展の順序に於て、貞門・談林・正風の進展經過に、類似の順序をしばしばあらはす事を、注意したいのである。さういふ意味で、貞德の俳諧等は殆んど文學的價値のないものではあらうが、その文學史上の存在まで全然無價値とすることには賛成し難いのである。これは私自身への覺書にすぎないもので、子規の意見を非難しようとするのではない。かゝる見方も、幾分考慮にいれて欲しいとおもふにとどまるのである。個々の作者についての子規の意見には、多少異見の存するものがないではないが、芭蕉以後の俳句の變遷に關する大體の意見はまづ承認してよいと思ふ。而してその天明俳人觀は最も特色あるもので、注意されねばならない。闌更の門人車蓋は、蕪村・曉臺・闌更の三傑集を出したが、中にも蕪村等は最も有名であつた。子規はこの有名を除して、太祇・几董等を推稱した。唯一人の創見でもないであらうが、ともかく蕪村を稱讚し宣揚した事だけでも、その功績は少く

ない。後の俳句研究者や文學史家にも、子規の天明俳壇觀は、直接間接に教示影響を與へてゐる所が少くない。この點は注目に價するのである。

子規が研究といふことに理解以上の愛を持ち、自ら俳句分類等をして熱心に古俳書を渉獵してゐたといふ事は、すでに語つたのである。が、多少ともそこに心を潜めてゐる者で、この程度の俳句史觀を抱いてゐた事は、寧ろその名に逆く者で、彼の考は杜撰であり、幼稚な部分に滿ちてゐると考へる人もあらう。それは一つには子規當時より幾進展をした現在の古俳書研究の成果を觀て、直ちにそれをあてはめる不當な要求から起つてゐるのである。私は子規を目して、當時に於ける有數の古俳句研究家となす事に些かも躊躇しない者である。而して彼は學究として世に立つてゐたのではなく、新聞記者の職業を持つてゐる、俳句作者であり、俳句並びに文藝の評論家として立つてゐたのである。私が言及した子規の俳句史觀も、作家としての鑑賞眼自覺にうらづけられた評論であつて、彼の學究的所産の忠實な叙述ではないのである。之を以て直ちに彼の研究心を云々することは出來難いのである。而も彼の評論には隨所に學者的な討究、忠實さがあらはれてゐるのを見逃し能はない。併し乍ら彼の本領は、學者の領域より、進んで批評家の圏内に入つてゐる。彼は作家として又批評家として優越を示すために學者的な仕事にも興味を以て立ちむかつたといふ事が、寧ろ主であつた事は認められる。又研究心に驅られて得た結果も、そのまゝでなく批評家として作家として應用し、原形のまゝでは投げ出すことが出來ないのが常であつたのだ。斯う考へてくるならば、彼の評論を學者的立場から即ち事實の討究の正確、結論の穩健公平等を標準として論議する事は、やゝ不當な、彼を十分理

解したい者の處置といふべきである。この意味に於ても、一々彼の意見に訂正を加へたり、細かい部分を詮索する事は、餘り重要ではないかも知れない。句作上から得た、實質のある、かなり優秀な、思ひきり大膽な彼の批評の價値を認め、獨得た卓拔な見解の多くある事に敬意を捧げる。獨斷や早計や誇張は、彼の評論の短所である。又それは一面、獨特な、勇猛な強烈な彼の批評の長所ではないか。

顧みて、私は作家としての彼を眺めたい。彼の長所は批評家（學究的なことをも含めて）としてで、彼の自信もそこにあつたらしい。けれども彼は作家の地位を重んじ、作者としての自己の[illegible]を常に心掛けてゐた。古俳句に多く親しむのも、自己の俳境を向上させ、句作に資するためにこそすゝめとらへてゐたのであつた。必ずや句作に於ても大いにみるべきものがあつたであらう。果して明治俳壇の頭目として、その名聲や自負に價する實質があつたかどうか。

註） 子規の俳諧史觀を親ふべきものとしては、「古池の句の辨」（三十一年十月、十一月、ホトトギス所載）「蕪村と几董」（三十一年十二月、ホトトギス）「古俳集の叙」（三十二年三月）「俳人太祇」（三十二年三月、ホトトギス）「俳諧三佳書序」（三十二年十二月、ホトトギス）「俳句上の京と江戸」（三十三年四月、「[illegible]」）「一日讀書貝句集序」（三十三年七月、ホトトギス）等の文を始めとして、「試問」（卅年）「或問」（卅一年）「隨問隨答」（卅二年——卅三年）等の一部分に之に觸れてをり、其他「俳句の初步」（卅三年十二月、ホトトギス）や「獺祭書屋俳句帖抄上卷序」（卅五年）其他隨筆・感想等の中に斷片的に叙せられてゐる。

第四章　俳句の年代順的考察

子規自選の「獺祭書屋俳句帖抄」上巻（明治卅五年四月出版）には、明治二十五年から廿九年までの作を載せ、句数は、廿五年、五十二句、廿六年、七十二句、廿七年、百一句、廿八年、二百六句、廿九年、三百五十六句で、かなりの厳選である。日本派の句集「新俳句」につぐ時代の句集「春夏秋冬」の春の部は、子規の選で、三十四年五月出版されてゐる。これは子規の句集ではないが、勿論自分の句も収載してゐるのである。「俳句帖抄」や「新俳句」や「春夏秋冬」を併せ見るならば、大凡子規の句もわかるのである。没後間もなく「子規随筆」等が出て、その中に句も散見するわけであるが、子規句集編纂の最初と思はれるのは、明治四十一年十月、文山堂発行、瀬川疎山編の「子規句集」である。編者に就いては、その序文によつて、ホトトギスが東京で発行されるやうになつてからの愛読者であつた事を知るばかりである。特に子規の句には親しみ千句程書きとめてゐたのを、他にも聚集して、戦争で一頓挫はみたが遂に出版するに至つたものであると云ふ。新年・春・夏・秋・冬といふ通例の分類に従ひ、句数は四千二百許り収録されてゐるが、子規句集編纂の先鞭をつけたことだけの意義はあるが、句作年代の附されてないのも物足らぬ所であり、句の選出等には何らの標準もなく、出来るだけ多く集めたといふにすぎないものである。翌四十二年六月、碧梧桐・虚子共編の「子規遺稿子規句集」が俳書堂から出版された。句数は千二百四十六句あるといふ。大體の内分をいふと、新年廿七句春約二百十句、夏約三百三十句、秋三百七十句、冬二百八十句許りである。この句集は大正四年、子規遺稿

が一冊になつて出版されたものの中に收められた。おそらく子規句集中最も多く讀まれ、信用されても來たものであらう。句の下に年代も記されてゐて便利であるが、子規の全句數の十分の一にも滿たぬ句數である事は、子規の句そのものを、又その成長の跡を精しく見ようとするには、大きな遺憾があつた。同年九月、北條素園編の「子規一代句集」が出版された。約五千句も集めてはゐるが、年代も書いてないし、とりたてて推すべき特色は無い。大正四年十二月、寒川鼠骨の「子規句集 寒山落木より」が、政教社から刊行された。新年の部六十三句、春の部四百三十四句、夏の部五百七十一句、秋の部八百二句、冬の部三百五十七句(?)で句數に於て、虛子・碧梧桐共編の句數の約二倍で、句選態度についても、編者は自信を洩らしてゐる。鼠骨も言つてゐるやうに、虛子・碧梧桐編のものに、比較的技巧本意のものが多いことに特色があるとしたら、この編著には、子規の生活・眞情に考慮を拂はれて選されてゐることに幾分の特色があらう。選句の標準は人に由りかなり相違があり、好惡は免れないが、少くとも、この選句集には碧・虛兩氏編の「子規句集」に洩れた、或種の佳句の多くを拾つてきてゐる點は認められねばならない。年代の記されてゐるのもよい。この他、大正五年八月には、千葉龜村編の「新撰子規句集」は、六千以上の句を收錄、出版された。大正七年二月には「子規名句集」が「俳句研究會」編の名の下に出版された。これには約五千句載つてゐる。この他四五の子規句集が出版されてゐるが、それらの多くは皆單に子規の句を廣く集めたといふばかりで、編纂上の良心に乏しく、十分信をおけず、特色といふ程のものがないのである。この外芭蕉・蕪村・子規の三人を一緒にした俳句集等も出版されてをり、類題句集の如きは多くの種類が出版されてゐて、その中には子規の句が收

められてゐる。又俳書堂版の「子規句集講義」（大正五年八月）を始めとして、子規の俳句を評釋した本も幾つか出版されてゐる。又碧梧桐編「子規の第一歩」（大正十四年、アルス版）は、明治廿四年から廿六年頃までの子規派の歩みを知るためには、貴重な出版であつた。

彼は自己の句集としては生前「獺祭書屋俳句帖抄」の上卷を出版したのみで、つひにその下卷を出すことなくして歿したのであるが、その死後、多くの句集が出版された。併し、その中で、特色のある、信用さるべきものとしては、碧・虚編の「子規句集」と鼠骨の「寒山落木より」位の者で、それに發表當時の新聞・雜誌を參照する勞力と便宜のないものには、多くみるためには、他の編者の句集を覗かねばならなかつたのである。然るに大正十三年から十四年に亙つて、アルスから子規全集第一、第二、第三の卷が出版され、これには年代順に殆んど子規の全俳句が載せられたので、子規の俳句を研究するものにとつて、非常に便利で、一大福音を齎らしたのである。

子規自身、自分の句を淨書分類した「寒山落木」の稿本は、明治十八年から廿九年までで、卅年以後は「俳句稿」にかきとめられたばかりで、而もそれには三十四年の句は新年及び冬の部の數句が記されてゐる程度で、子規の稿本は卅三年で終つてゐると言つてもよいものであるといふ。卅三年迄の句は「寒山落木」及び「俳句稿」の草稿に準據し、卅四五年の、「俳句稿」に缺けた部分は、編者が「墨汁一滴」「仰臥漫錄」「病牀六尺」新聞「日本」「書簡」等から集めて分類したものが、子規全集中の俳句全集三冊である。

私は子規全集中の俳句全集を基とし、子規自選の「俳句帖抄」や碧・虚編の句集、鼠骨選の「寒山落木よ

り」等を參考として、その俳句の道程を辿りたいと思ふのである。が、多數の句を十分に檢討することは一朝一夕の仕事でなく、ここにも十分の頁は許されてゐないので、ほんの概論に終らざるを得ないであらう。

最近出版された改造社の「俳句講座」鑑賞評釋篇」中に、寒川鼠骨が「子規居士の俳句研究」と題して書いてゐるものは、菊判百二十頁の分量を占め、子規の俳句の年代順的考察としては最も精細のものと言つてよい位である。その中に、各年度の作句數（子規全集の俳句全集によるものと思はれる）を表示してあるのを、ここに借用すると、

明治十八年	七句	明治十九年	一句
同　二十年	二十三句	同　二十一年	三十一句
同　二十二年	三十二句	同　二十三年	五十五句
同　二十四年	二百三十三句	同　二十五年	千六百六十二句
同　二十六年	二千七百〇一句	同　二十七年	二千〇二十五句
同　二十八年	二千八百九十二句	同　二十九年	三千〇三十八句
同　三十年	千四百七十七句	同　三十一年	千四百十二句
同　三十二年	八百九十六句	同　三十三年	六百四十二句
同　三十四年	五百二十九句	同　三十五年	四百句

である。合はせて一萬八千〇五十六句となるが、子規の實際の作句數はこれよりもなほ餘程多かつたことは

明かである。芭蕉や蕪村の俳句の殘つてゐる句數が、前者が千餘句で後者は千に滿たないのに比べて、數に於て遙かに懸絶してゐる。この多數の作を持つてゐる子規の俳句を、僅かの頁で評論批評し盡す事は到底不可能で、或はその作品を冒瀆することになりはしないかをおそれるが、精論は他日を期し、ここに大體をあとづけようとおもふ。

「俳句講座」の寒川氏の文では、第一期 習作時代、第二期 上堂時代、第三期 悟得時代と分けてゐるのである。かゝる區分にも色々見方はあらうが、私は七八年前書いた時、一、暗中摸索時代 二、古句摸倣時代 三、自己確立時代 四、圓熟時代と分けたのを、假にそのまゝ襲用して、以下、之に對して簡單な解說を試みようと思ふ。

第一節　暗中摸索時代

子規が大學を退き、「日本」新聞記者となつて俳人としてのスタートを切つたのは明治廿五年（廿六歳）の終り頃であるが、この彼の俳人としての活動が外部にあらはれる以前、いはゞ初期の準備時代を一括して、假に暗中摸索時代と名づけたのである。二十五年の初頃には小説に熱心してゐたのであるが、五月、虚子に與へた書簡には「僕は小説家となるを欲せず詩人となるを欲す」と書いてゐる。その月、始めて「日本」に「かけはしの記」を掲げ、六月から「獺祭書屋俳話」を連載し、十二月一日入社、直ちに俳句時事評を書いたりした。實に廿五年は彼が俳人として立つ決心を固め、實際のスタートをした年である。この前年廿四年後期には「俳句分類」に着手し、俳句にも熱をあげきつゝあつたのであるから、本節では便宜廿四年迄の句をあとづけ、彼の俳句への出發を眺めたいと思ふ。勿論秀句を多く拾ふといふやうなわけにはゆかぬ。幼稚な暗中摸索の時代であるが、一通り彼の俳句がどういふ径路を辿つて進んだかは、必ず尋ねらるべきである。

「獺祭書屋俳句帖抄」上巻の序の中には、

自分も何とはなしに十七字を並べて見たのは明治十八年の事であつたらう。併しもとより先生があるではなし、自分の樂にやつてをるやうなもので、まだ趣味も何もわからないのであるから、本氣になつてやつてをるわけでもない。それでも十句許り書き並べてをつたのを或人が見て、是非宗匠に見て貰へといふて自分に紹介して呉れたのは其戈といふ宗匠であつた。其人はもと藩の内に多く居た人で當時八十餘りの老人であつた。其人は自分の[illegible]

にゐるのであるから、歸省の序に訪ねて例の十句許りの草稿をなほして貰ふた事がある。其時自分は俳句に就ては何の知識もないのであるから、此宗匠に逢ふても行々子とは何と詠むか、浮葉とは何であるか、などゝ尋ねた位で其外何事もなかつた。それに其宗匠は自分が逢ふて後あまり久しからず此世を去つてしまふた。終に此宗匠に緘口をあけて貰ふと迄も行かなかつたのである。

と書かれてゐる。柳原極堂は「十七才にて上京し、十九年の夏季休暇で歸省されたと記憶するタシカ其時であつたらう。自分も偶ま歸省して居つたのだが君に誘はれて三津ヶ濱の其戎と云ふ宗匠を訪問した。其戎は八十餘りの爺さんで梅室門下の人ださうな…(中略)自分が天井など眺めて居る間に子規君は袂から十數句を記した草稿を取り出して其戎の選評を請はれた樣であつたソシテ其戎は概して賞讚して居たやうであつた」(子規言行錄)等と書いてゐるが、十九年には子規は歸省しなかつたし、「俳句を作るは明治二十年大原其戎宗匠の許に行きしを始めとす。」(我が俳句)とも自分で書いてゐるから、其戎訪問は二十年が確實である。全集の少年時代創作篇には、「大原其戎先生の手書寫し」(明治二十三年記、筆まかせ)の文が載つてゐる。

其戎先生は三津の人なり。先生の父俳諧を好む。先生六歲の時父の側に在り、吟じて曰く

川ばたのあやめは水に取られけり

恰もこれ「道ばたの木槿」の句の調なり。父君大に驚いて凡ならずとなす。先生爾後ます〳〵俳諧に志すこと深く、弱冠にして家をいで、京都に至り梅室の門に入る。先生はじめ梅室の食客となり、日々掃除などの難役を取られたりと後先生の業大に進む。終に關白某卿に召され、宗匠の號を賜けり、かつ四時園の名を賜はる。此時先生の句に

花の山ぬかつくたびに香りけり

後故郷に歸り大に俳諧をひろむ。明治十年の頃なりけん、明榮社なるものを興し、俳徒を募り、月並句を印行して、「眞砂のしらべ」と稱す。我郷里の俳諧の盛なる、實に先生の力與て大なりといふべし。先生の句、全く梅室の遺響ともいふべく、奇警俊秀、口を衝て發す。他の凡俗輩の及ぶ所にあらず。明治二十年の夏、余勝田氏の紹介を得て始めて先生に謁す。先生醜貌魁偉、年已に八十に垂んとす。耳半ばは聾し、目半ばは盲す。然れども應對に懇切に、禮儀は端正に、而して其中犯すべからざる所あり。其風調

稻むしろふむや日のあし月のあし
あさ霧や箸にもつるゝ舟旅籠
秋の蝶たのみありげに來りけり
初潮や雀となしむ小はまぐり
吹風や松をなふれとかへぬいろ
いめまても正しう見はや年男
月は容梅はあるしの姿かな
風の尾にふりけされけり朝の月
ゆかしさや山吹の戸に竹はしら
浮たかと見ゆや遙に汐干かた
連理なす松陰むすふふちの輪かな

鵜のぬれ羽こくや岩間の風薫

老弱ながら樹下石上の掟は忘れがたし

こと足るや芭蕉一葉を庵の空
雁の羽にたゝみて下す冷みかな
漲りし瀬音にそよくすゝきかな
鶯も鳩の禮あれらうめに来て
水音をいたゝくのきや苔の花
峯高し雪と時雨とわかつ空

二十年の秋のはじめ、余が再び出京の時、

盛學に赴く君が首途を祝して

新涼ふしこえて行く微笑かほ

といふ句を給はりたり。

と記し、なほ同年九月十九日附共我からきた手紙中の句を始めとして、二十二年一月廿八日附の書狀の寫し數通をのせ、

右の書狀、余が受け取りし最後の先生の手迹なり。先生實に此年四月を以て卒せられたり。享年八十。辭世。

寢姿の司や花をまくらもと

余が俳諧の師は實に先生を以てはじめとす。而して今に至るまで未だ他の師を得ず。今其手蹟を見るにそゞろにかなしくて

　　開いたる文のかほるや窓の梅

と文を結んでゐる。ここには事實の誤謬もあるかも知れない、感情の誇張もあるであらう。が、其戎訪問の事實及び彼が一年餘の間、其戎の感化の下にあつたといふことだけは確められる。この文中の其戎の書簡には、「此度之御出詠は取分語路相整ひ結構ニ存候」とか「貴作夫々御趣向宜敷候得共少々ツヽ加筆仕貴覧相待候御合考ニ候」とか「七月御出詠澤山數々正吟來り巻ニ仕候」等とあつて、子規の句を添作して示したりしてゐる。碧梧桐は少年の頃、兄黄塔から、唐紙一紙の活版刷の俳句をみせられたのが、俳句を見た初めで、それは其戎の出してゐるもので、それには兄や子規や其他の人の句が載つてゐたといふ事をかいてゐるが、其戎の書簡の「巻に仕候」とあるのは、これをさすのであらう。明治廿一年頃、子規の俳句が其戎宗匠の撰句の下に、はじめて活字になつた等いふ事も一種の興味がある。

其戎訪問以前、「寒山落木」によれば、明治十八年には、

　　梅のさく門は茶屋なりよきやすみ
　　夕立やはちすを笠にかぶり行く
　　ねころんで書よむ人や春の草
　　小娘の團扇つかふや青すだれ

木をつみて夜の明やすき小窗かな

朝霧の中に九段のともし哉

初雪やかくれおほせぬ馬の糞

の七句があり、十九年には、

一重づゝ一重づゝ散れ八重櫻

の一句が書かれてゐる。「寒山落木」の稿本には十八年十五句、十九年十三句抹殺されてゐるのださうである。上掲の句もこの年の原作のまゝであるかどうかは不明であるが、とにかくこれらの句が、われらの見得る子規の最初期の句である。「朝霧の中に九段のともし哉」の句は、碧・虚共編の「子規句集」にも採錄されてゐるが、時代を考へ、又彼の最初期の作品であることを考へると、相當立派の出來である。

二十年は、「寒山落木」に二十三句載つてゐる。

ちる花にもつるゝ鳥の翼かな

春雨や柳の糸もまじるらん

鶯や木魚にまじる寛永寺

むら鳥のさわぐ梢や初櫻

散る梅は祇王櫻はほとけ哉

花の雲かゝりにけりな人の山（上野）

落花樹にかへれど人の行へ哉（清水氏一瀾忌）

夕立や一かたまりの雲の下

宵闇や薄に月のいづる音

白梅にうすもの著せん煤拂

の如きものである。その外、書簡集には、

仇波の打てはかへす島邊哉　　海底は照さぬものか朝日影

こよひこそ嬉しそうなり雉の聲

があり、「手づくりの菜」中の「寫眞の讃」に「明治二十年の正月に胡蝶園主人てふある學友が自身の寫眞を賜はりければ御禮として戯れに遣す。云々」の文末に、

まだ花に心のこすか蝶の夢

といふのがある。虚子は「明治二十年は二十二三句あつてやはり平凡な句が並んでゐる。また月並句としても幼稚なものである。もとより後年の子規居士の芽生えと目されるものは何も認めることが出來ない」（「日本及日本人」正岡子規號）と言つてゐる。ほんとうの自分の感じを現はさうとする努力は尠く、やうやく月並の門に入つて、古句の摸倣によつて十七字を綴る愉快をかんじ始めたともいふべき時代に在つたのであるから、一々批評を下す程のものではない。二十一年のもの、「寒山落木」に三十一句ある。

見ればたゞ水の色なる小鮎哉

すつと出て莟見ゆるや杜若

底見えて小魚も住まぬ清水哉

夕立の來て蚊柱を崩しけり

女にも生れて見たき踊哉

西日さす地藏の笠に蜻蛉哉

くらがりの天地にひゞく花火哉

青々と障子にうつるはせを哉

哀れにも來て秋の蚊の殺さるゝ

明家やところ〳〵に猫の戀

の如きものである。七艸集「芒のまき」は三十七句の俳句から成つてゐる。その中の三四句しか「寒山落木」に出てゐない所をみると、子規自身抹殺した句も相當多かつたと想像される。句數前年に比しやゝ多くなり題材にも前年よりは異つた新しいものを摑へてゐるし、進歩といへば多少の進歩の認められないこともないが、先づ同程度のものと言つてよい。二十二年になると、三十二句錄されてゐる。

五月雨の晴間や屋根を直す音

鳥なくや獨りたゝずむ花の奥

燕の飛ぶや町家の藏がまへ

白露や原一ぱいの星月夜

風に舞ひあがりたる落葉哉

澁柿のとり殘されてあはれなり

一日の旅おもしろや萩の原

雪のある山も見えけり上り阪

祇園清水冬枯もなし東山（京都）

冬枯の中に家居や村一つ（袋井）

の如きものである。この外「水戸紀行」「四日大盡」等の紀行文挿入の句も二十餘句を算し、その他にもまだいろ／＼みられる。この前年、子規は常盤會寄宿舍に入り、新海非風と同室にあり、この年四月、内藤鳴雪が寄宿舍監督となり、九月、非風を通じて五百木飄亭と相知り、冬、竹村鍛（黄塔）が入舍、これらの諸氏が子規を中心として俳句に熱心することになるのであるが、漢詩・戯文・俳句等を草し、四月、常盤會寄宿生の文集「眞砂集」には、「詩歌の起原及び變遷」といふ文を發表したりした。これが子規の論文の活字になつた最初のものであらう。鳴雪の作句に熱心し出したのは廿五年のことであるが、非風・飄亭等は子規と共にこの年、作句を競つたのである。この年五月喀血をした時作つた時鳥の句は、今傳つてゐない。

翌二十三年の作句は「寒山落木」に五十五句採錄してある。例句、

盆栽に梅の花あり冬こもり

菜の花やはつとあかるき町はづれ

人黒し朧月夜の花あかり

桃さくや三寸程の上り鮎

月落ちて灯のあかるさや小夜砧

傘に落つる櫻の雫かな

朝顔や氣儘に咲いておもしろき

あたゝかな雨が降るなり枯葎

みなし子のひとりで遊ぶ雛哉

朝顔にわれ恙なきあした哉

この他、三月廿五日から四月一日に至る俳句日記ともいふべき（俳句のみで文章のない）「かくれみの句集」には、九十三句の俳句を記してゐる。「かくれみの句集」の句は一つ二つを除いて他は、「寒山落木」に入つてゐないのである。書簡集などにもぽつぽつみえる。

山を拔く手にて起せし炭火哉　　行く人に笑ひかゝるや野路の梅

初花や同じ枝より散りはじめ　　雲をふみ霞を吸ふや揚雲雀

都まで幾行歸り子規

この種の書簡中の句と「寒山落木」所收の作とを比較すると、句集中の者が遙かによい。結局選したもの

と還しない者の差であるが、十分推敲されてゐない、思ひ付きをすぐ書いたでもあらう書簡にみえる句等に却つて實力そのまゝが正直に現はれてゐるともいはれよう。ここに參考に數句拔いたのである。改造社版全集中の年表に、「二月十一日、常盤會寄宿舍に「もみぢ會」の第一回を開く。竟田四舟、竹廬居（五百木飄亭）佐伯蛙泡、あはてやぬかり（河東可全）新海非風、伊藤猿山、正岡子規の七名。運月詞を課し、歌俳狂句短文戯畫等種類を問はず。之を集めて「つゞれの錦」といふ。十月二十三日の會まで、七回分の會稿現存す。」等とあるが、碧梧桐との書信の往復もこの年に始まり、俳句に段々身をいれてゐた時であつた。

二十四年になると、寒山落木の句も二百三十三句を算へられる。この年秋冬の交から彼は「俳句分類」に着手した。それが句作にも勢力を與へた事は、俳句帖抄序に述べてゐる所である。俳句分類の編纂を思ひ立つと、毎日大學の圖書館へ行つて連歌の發句を寫し、それから上野の圖書館へ行つて毛吹草等をうつし、寛文・延寶頃のは二三の小冊子を寫した許りで天和に移り、虚栗以後は持つてゐる本も少しはあつたので、内にゐて七部集等を順次に分類して行つたらしい。猿蓑に至つて非常に愉快を感じ、俳句の趣味を悟つたやうにさへ思つた。虚栗以前の連歌や貞門・談林の俳書はつまらなく、いや〳〵ながら分類したと告白してゐる所をみると、廿四年頃は多少分りかけてきた所もあつたやうに思はれる。俳句帖抄序には、

俳句分類の事も、昔の連歌時代より始まつて、それから貞徳貞室の無趣味なる滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を認めながら猶ほ闇中に迷ふてをる有様であつたが、「春の日」「あらの」などゝ漸く佳境に入り始め、はじめて「一葉集」を讀いた時には一句々々皆面白いやうに思はれて嬉しくてたまらなかつた。其頃別に「元祿集」の編

本を一册持つてをつて、それも面白い句が多いやうに思ふた。これが自分が俳句に於ける進歩の第一歩であつた。少し眼が開いたやうに思ふので旅行をして見たくて堪らなくなつて三日程武藏野を廻つて來た。此時得た句が

凩や荒緒くひこむ菅の笠

夕日負ふ六部背高き枯野かな

雲助の睾丸黑き榾火かな

などゝいふので、これでも其當時よほど旨い句のやうに思ふてゐたのである。それが明治二十四年の暮の事で云々。

と書いてゐる。又

初め貞德派天保調などに入り、次に三傑集一部により、稍〻天明寬政を覗ひしも、俳に蓼太の俗調を稱讃せしに過ぎず。漸く七部集（殊に猿蓑）に眼を開き始めて元祿の貴ぶべきを知れり。（俳句の初步）

とも言つてゐるのは、この間の心境を語つたものである。この年非風・飄亭等は入營中であつたが、日曜には子規のところへ遊びに來、佐藤肋骨・仙田木同其他兵隊組が屢〻青山龍嵓寺に會して句を作つたりした。又松山では虛子が碧梧桐を通じて、子規に兄事することになり、さういふ周圍の事情も益〻子規の俳句熱を高からしめつゝあつたのである。藤野古白等も熱心者の一人で「古白遺稿」に、子規は、

二十四年の秋、俳句句合數十句をつくる、趣向も句法も新しく且趣味深きこと當時に在りては破天荒ともいふべく余等儕輩を驚かせり。

今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉かな　古白

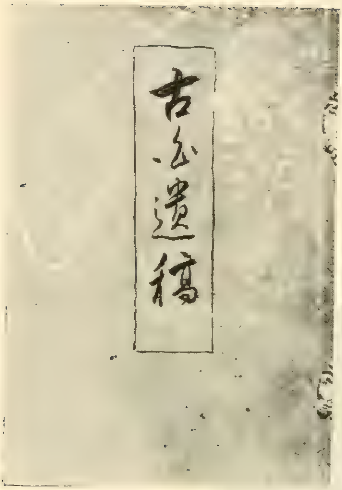
芭蕉破れて先住の發句秋の風　　吉白
秋海棠朽木の露に咲きにけり　　同

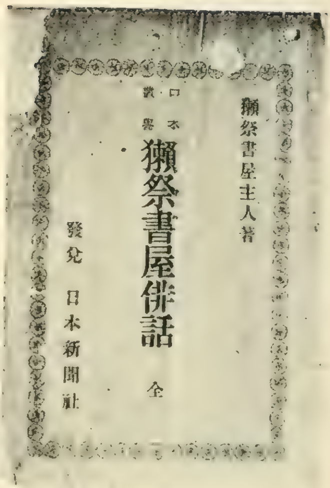
の如きは此時の句にして、此等の句は僅かに明治俳句界の黎明と目すべき者なり、年少の吉白に凌駕せられたる余等はここに始めて夢の醒めたるが如く漸く發句の精神を窺ふを得たりき。俳句界これより進歩しつつありき。

等と言つてゐる。要するにこの年は彼自身の俳句熱を増すと共に、彼の周圍にもそれによつて熱心者を出しその結果益々子規も熱度を以てき、古俳句に多く目をさらすに至つて更に一進展を來さうとしてゐたのである。所謂暗中に光を見出したやうな心持がした時期であらう。

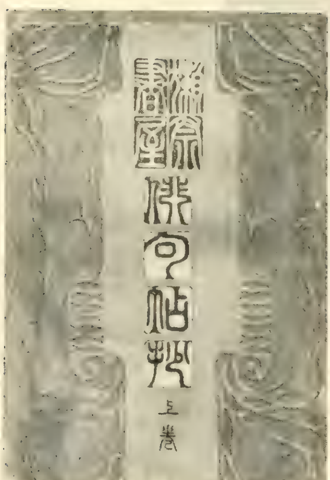
碧梧桐・虚子編の子規句集では、二十四年までの句では、

あたたかな雨が降るなり枯葎　二三
鶯や山をいづれば誕生寺　二四
八重櫻咲きけり芋に蜆汁　二四
山々は萌黄淺黄やほととぎす　二四
朝霧の中に九段のともし哉　一八
青々と障子にうつるばせをかな　二一
賈島瘦せ孟郊寒し雪の梅　二四
冬枯の中に家居や村一つ　二三





子規遺稿
子規句集





編書著書の一部と子規句集

位を選抄し、鼠骨編の「寒山落木より」では、

簑笠を蓬莱にして草の庵　二四
屋根舟に提灯多し朧月　二三
草籠を置いて人なし春の山　二四
鶯や野を見下せば早苗とり　二四
落ち行けば隣の國や揚雲雀　二四
道づれは胡蝶をたのむ旅路哉（行脚の笠に題す）　二四
土手三里花を離れぬ月夜哉　二三
人黒し朧月夜の花あかり　二三
八重櫻咲きけり芋に蜆汁（植半）　二四
桃さくや三寸程の上り鮎　二三
下り船岩に松ありつゝじあり（船下木曾川）　二四
梅雨晴や所々の蟻の道　二一
木の緑したゝる奥の宮居哉（琴平）　二二
筍のきほひや日々に二三寸（少年の寫眞に題す）　二四
猿引は妻も子もたし秋のくれ　二四

山まとゝ灯ゝ鋳く、東寒哉（用と内造書氏に宿すとき）　二四
片側は山にかゝるや天の川　二一
犬ちら〳〵是もと吉む秋の風（常盤會寄宿舎・競室にて）　二四
朝ぎりの中に九段のともし哉　一八
初汐や帆柱並ぶ垣の外（三津生簀にて）　二四
大宮に秋さひけらし醫者の顔（大宮の醫師の許に行きて）　二四
秋さびた石なら木なら二百年（岡山後樂園）　二四
一つ家に泣聲まじる砧哉　二四
曾遊に我れ患たる日蓮　二一
ふみ込んで歸る途なし萩の原（大宮氷川公園）　二四
祇園清水冬枯もなし東山（京都）　二三
冬枯の中に家居や村一つ（袋井）　二三

を遺してゐる。この遺句を十分のものと信ずるのではないか、ここに殊無意味に引用して來つた者では無い。明治廿五年以前の子規の句は、他の人によつても低く評價されてゐる事、及び廿九年以前の句では、廿四年の句は、作品も多く、それとれる作も増加してゐることは、果してそれに由つて首肯しられようかと思ふ。

予の初め俳句に入るや、自ら思ひ立ちしにあらず、人に勧められて入りしにあらず、偶に聞くにあらず、友と共にする

に非ず。たま〳〵一二卷の俳書を見る、敢て研究せず、熟讀せず、句の解せざる者十中に九乃ち卷を擲つて他を爲す。戯れに一二の俳句を作る、趣味に於て得る所あるに非ず、語句に於て練る所あるに非ず、或は緣語、駄洒落に思ひを凝らし、或は極めて淺薄陳腐なる意匠を繰り返して獨り自ら喜ぶ。それすら一二句を得れば卽ち思想凋渴して復一字を吐く能はず。或は奉納の行燈に立ち寄りて俗句に感ぜし事もあり、或は月並の卷を見て宗匠輩の選評を信仰せし事もあり我に何なし、彼の句を妙と稱す。自ら標準を立てず、他の標準を正しと爲す。俳句に心ざす所あらざりしとはいへ、實におろかにあさはかなる少年にてありき。云々（「俳句の初歩」―ホトトギス、卅二年二月號）

と言つてゐるのは、略々二十年前後の事を指して言ふのであらう。廿五年に彼が學校を退學したのは、唯意けて嫌になつたと云ふのでは無く、俳句に熱中し、俳句に或點まで自信を得た事が、一つの原因であつたので、當時の彼の意氣には却て當るべからざる概があつたと思はれる。けれども後年自分の通つた道を顧みた時、廿年頃は勿論、廿四年頃もまだ俳句の解らなかつた時代であつたと考へたのは謙遜でも何でもなく、進展し來つた彼として當然であらう。明治廿九年の「日本人」誌上に五百木飄亭をほめて、廿三四年頃自分の俳句が俳句を爲さず、天保以後の懈弛した句法を學んでゐた際に、彼の句は獨特の伎倆を現し、主に簡勁緊密な句法を用ひた事は、明治俳諧史上特筆すべき事で、又自分が一題をとり、その題許りを形容して作らうとし、一つの陳腐な材料を取つて其配合に多少の新意を出さうとしてゐたに反し、彼は早くも二箇三箇四箇の材料を一句に打ち込んだといふ意味を述べてゐるが、彼にとつて、この期は少くとも、少し高い立場に立つたならば、實際暗中摸索の時代といふべきであつたのである。廿四年秋から冬にかけては、やゝ正風の躰に

通つた作の多くなつてゐる事は認められる。この時期には元祿の俳句等にも或理解を示し、彼の俳境は一進展を來したやうに思はれる。「寒山落木」採錄の句數は、廿四年は二百三十許で廿五年には一躍千六七百句に上つてゐる。この頃を境として熟度を加へ、一進境を來したことを如實に示すものでなければならない。子規の書簡集を一見しても、明治廿三年までは理窟的のものか、つまらぬ駄洒落か、幼稚な素人法等の作、

友をまつ虫たゞ口ぐらしの蟬のこゑ　二三

朝顏やあてありさうにのびる蔓　二三

浮世より外のうき世や水と月　二三

等の如きものが主であるに反し、廿四年になると、多少寫生的な、又主觀的な者でも駄洒落でなく一歩内面に入りかけてゐる作品がみられる。亦、全體を通じてみると、幼稚な初步の修練時代、暗中摸索の時代といはなければならない。斷片的な幼稚な彼のこの期の理論を一々、紙上に上す必要もないのである。廿三年五六月の交、碧梧桐に與へた手紙に、句作の參考のため古人の名句を示すと言つて、左の句を舉げてゐる。

なんのその巖も通す桑の弓　初雪や御用の外は車どめ

此處小便無用花の山　晴れて住[illegible]十日[illegible]

いくつぞと問はれて片手あけの春　麥の葉や豚の末の二三寸

鶴を添乳花を枕の胡蝶哉　木魂の月をたゝいて戻りけり

きはだゝぬ影のゆるみや朧月　鶯の影たゝみこむ屛風哉

雲きりの月にかくるゝ今宵哉　　障子ごし月のなびかす柳哉
かけ橋や命をからむ蔦かづら　　元日や鬼ひしぐ手も膝の上
鰯やく隣にくしや窓の梅　　梅かつぐ一人にせばし渡し舟
二羽来れば雀も重し今年竹　　岩ふんで一日〳〵の櫻哉
我駒のくつあらためん橋の霜　　初雪や水仙の葉のたわむ程
白魚にもし化しやせん水の雪　　これは〳〵とばかり花のよしの山
富士にそふて三月七日八日哉　　花賣も蝶ものりあふわたし哉
元日や旅人通る日本橋　　茶の花や利休が目にはよしの山

而して「右の句をよく〳〵御翫味被成候はゞ發句の變化の程も略ゝ御了解に可相成と存候」等言つてゐる。これによつても、未だ暗中摸索時代を脱してゐないことが理解される。彼が其戎宗匠等の影響を享けた事は必ずしも重大事ではなかつたらう。たゞ、とにかく廿二年愛讀書の一つとして、梅室家集をあげてゐるのを見れば、最初の時代には俗俳の影響下に立つた事は認めねばならぬ。それが廿四年の終り頃から段々自覺して廿六年には早くも「芭蕉雜談」に大氣焔を吐いてゐる。その進展の迅速さには、驚くべきものがある。

十八年から廿四年まで、勿論年次的に進歩の跡を覗ひ得る部分もあるが、私が廿三年までの例句としてとつたものは、よいものばかりを撰んだのでは無い。殊に惡句もこの時代の特長を知るために拔いて置いた者もあるのである。藝術として幼稚なものなので、一々評する迄もないと思ふので、事實を羅列するにとゞめた。廿五年以後の作については、も少し藝術的批判を所々に加へてみたいと思ふ。

第三節　古句摸倣時代

明治二十五年から俳壇に乘り出して廿八九年頃には、子規一派の勢力は既にかたい確實な地歩を占有したのであつた。併し子規獨自の風格が顯著に發揮されたのは、それ以後である。卅年以前の句にも、佳句は少くない。この時期は最も多作した時代で、一通りの佳作は、寧ろその以後のよりも多いかも知れないが、未だ十分に摸倣期を離れない觀がある。廿五年頃は「蕪村の名にふれて」一句を知らなかつたし、廿七年頃は天明調の華麗を愛すると同時に蕉風の趣味をも解するやうになつた、暁臺・闌更等から轉じて蕪村の價値を多くするやうになつたのは、廿九年頃であるといふ意味の事を、子規自ら記してゐるが、この意味に於ては古句摸倣時代と稱して差支ないのであらう。たゞ卅年以後も二三年は、寧ろ大に蕪村の影響をうけ、召波や几董の摸倣を多分に現した部分のあつたことは否定出來ない。彼の俳句は一生を通じて古句の影響を、よかれあしかれ、受ける事の多かつたものと言はねばならぬ。更に高い所から眺めるならば、何れも類型的な前人未踏の境地には入つてゐないとも考へられよう。併し死の二三年前即ち明治卅四五年頃の句に至つては、實は或る動かぬ境地を把握してゐたとは見られると思ふ。

廿五年頃から廿九年頃までの子規は、廣く古俳句の影響を受け乍らも、旺盛な句作力を以て縱横に才を試み活動した。この以前俳作の影響を受けた時代を第一期の摸倣期とすれば、これを第二期の摸倣期となすもよい。彼の俳句が外に發表され、賞揚され、句作力の旺盛さの充實したのは、活動時代と稱するもよい。新聞

な意味の區劃は容易にし難いが、時に句作力旺盛で、撲散も多くあらはしてゐる點で、廿五年から廿九年に至る間の句を、ここでは考へてみようと思ふ。

廿五年頃の彼の句の實質はともかく、句作に非常な熱を以て向つてゐた事、そしておそろしく多作だつた事には、驚かざるを得ない。

一昨夜は南塘先生來庵競吟四五十句昨日は非風飄亭二子來庵午後競吟百七八十句飄亭歸營後非風と二人にて一題百句のせり吟興行仕候時間二時間許り（此中にて僕などくひ申候）其題は鹿也（廿五年九月五日、碧梧桐宛）

當地俳況不相變隆盛なり一題百句其後益々盛にして露萩椒茸（秋季）の四題にて都合四百句は已に出來上り今は乞食（秋季）の宿題中なり（九百句）併し百句とは固より無理なれば過半は凡調のみ（廿五年九月、碧梧桐宛）

等の如き手紙が他にもあるが、廿五年九月には一題百句といふ事を始め、熱心だつた事がわかる。主に宿題としてやつたらしいが、「鹿」の一題百句は二時間足らずに競吟でやつたといふのであるから、以てその句作力の旺盛を推す事が出來る。檀林風の俳諧師等の中には多作を誇る傾向も多かつたらしく、西鶴が二萬三千五百句を一日に吐いた等と云ひ傳へられてゐる。それらは少しく誇張であらうが、子規が當時數百の俳句を一日の中に作ることのあつたのは確實な事實で、私達からみれば、多作といふよりも濫作だつたとしか思はれない。非風とやつた「鹿」の一題百句の競吟といふのは、その一部を揭げると次のやうたものである。

○

手水鉢に鹿の水のむ夕哉　非風　　月にふしの御ざつ鹿の姿哉　子規

○

山寺に群集りし小鹿哉　非風
鹿よべば萩を廻りて來りけり
山賤も鹿も眠るや神の前
灯をけせば戸口に鳴や鹿の聲
萱われて鹿の出けり山の麓
鹿の聲谿谷川を飛でけり
けさ見れば鹿の糞あり神の庭
岩角にのびあがりけり月の鹿
戸を推せばふりむいて行く小鹿哉

宮島の神殿はしる小鹿哉　子規
町へ來て紅葉ふるふや奈良の鹿
爐にくべて紅葉を焚けば鹿の聲
月代や鹿のふしどは松の影
鹿の尾のうしろを見れば闇夜哉
夕月や眞向に立ちし鹿の影
神さびて鹿なく奈良の都哉
鹿老て猿の聲にも似たる哉
萩にねて月見上げたる小鹿哉

子規と非風のこれらの句の優劣は殆んど無い位のものであるが、どちらかといへば非風の作の方がしづかな氣分が味はれ、自然さがあり、且つ才氣をみることが出來る位である。

さて一題百句等は本質的に賞讃すべき事では勿論ないのである。彼も一つは練習のため又他面興味本位にやつたのである。「墨汁一滴」や「病牀六尺」等の晩年の隨筆には、一題百句等は第一期の修業としては認めらるるが、そんなことでいい俳句が生れるものではない事を、度々注意してゐる。

凡そ何の題にて俳句を作るも無造作に一題五六十句作れる位ならば俳句は誰にでもたやすく作れる譯につまらぬものなるべし。（墨汁一滴、六月四日）

青々の達吟に至つては實に驚く可きものであるが、さりとて杜鵑二百句といふに至つては流石の先生、無邪氣に遣つてのけた處は善いが、これで俳句になつて居る積りでは全く經驗の足らぬ科であらう。二百羽の杜鵑をひつゝかまへたといふのは一羽もひつゝかまへないといふ事であるとは題を見てもわかつて居る事であるのに。（病牀六尺　九月八日）

等の言葉は、そのまゝ當時の子規に向けることが出來るのである。併し練習的意味に於ては、たとへ實感の稀薄な多作をすることも認められ、興味に墮してゐたにしても、熱中してゐる間には、自覺して興味以上の眞實に目をひらくことが出來るのであるから、進展の初期の一プロセスとしては、却つて彼のために與ふるものが多かつたらうと思はれる。

この時分の會合の席上吟はいつも競り吟であつた。題が出るのと同時に、成るべく拙速を尊ぶ作句法で、其の題にヒントを得た境地を味ひながら少し苦吟してゐたりすると、落伍者になつてしまふ。一題の句は十乃至二十位になつて、一寸出かたが澁ると、他の題を課して氣分を新たにした。大抵一會合に十題位片づけてゐた。別に執筆といふ者もなし宗匠といふ者もない平等な位置で、自分の句は自分で書く例だつた。非風のやうに、口まめな人が一人加はると、句作の相の手に輕口洒落なども交つて、遊戲氣分を一層濃厚にする、賑やかな會合になるのだつた。競り吟にも飽いて來ると、或る題に他の條件をつけた餘興的な遊びもやつた。さうして、即席のウヰツトに罪もなく笑ひ興じたりした。さういふ席で聯句をやつた例は甚だ稀れであつた。云々（「碧」十六號所載の「子規回想」（4）碧梧桐）

とあるによつて、競吟（註一）の如何なるものであつたかは理解されよう。

（註一）（「碧」十六號（大正十三年十月）卷頭の「子規の回想」（4）に碧梧桐が、この年八月五日三津のイケスでや

つた子規・非風・虚子・碧梧桐の四人の競吟の場面を描いてゐる等は、當時の競吟の有様を忖度するに良い材料であり、非風の性格等もよく描けてゐるが、競吟・運座其他の句作形式については、子規の「隨問隨答」を參照されたし。

この年一月三十日、錬卿・非風・瓢亭と子規の試みたのが、その最初であつたと思はれる。この樣な作句練習の一種の遊戲的手段として、子規は何々十二ヶ月といふことを始めた。即ちこの年一月（或は二月？）「燈火十二ヶ月」を最初として、「風十二ヶ月」「螢草十二ヶ月」「十二支十二ヶ月」（二月）「鳥十二ヶ月」（四月）「夢十二ヶ月」（八月）其他種々やつたらしい。一例として鳥十二ヶ月をあげよう。

鳥十二ヶ月

一月　うか／＼と來て鶯を逃しけり　　二月　とろ／＼と左官眠るやつばくらめ
三月　すう／＼と鳥雲に入るひゝき哉　　四月　しん／＼と泉わきけり閑古鳥
五月　はら／＼と風にはしくや鶴の巣　　六月　たい／＼と絶え筆一揚雲雀
七月　しつ／＼と滸出の鷺やそこいさみ　　八月　むら／＼と鷹かれたまゝ小鳥哉
九月　つく／＼と聞けば初鴨鳴いて居る　　十月　さわ／＼と入江をのほる千鳥哉
十一月　おろ／＼と一夜にやせる暖めとり　　十二月　ぬく／＼と日向かゝへて鶏交む

惡くいへば出鱈目にすぎない。興味本位でやつたことで、子規自身も作句を既弃物視しゐるといふ事は承知してゐた。この多數の俳句を創造抛棄する自己の態度を決して恥かしくない立派な態度であるとは思は

なかつたらしいが、純粹な創作欲求にばかり縋つてゐる事等は理想で、實際はなか〱さうゆかない。課題を設けて俳句を考へる事は勿論いけぬ、案外に杖を曳いて俳句を拾ふ事も、純粹な立場からは問題であるとなつては、際限なく煩はしい。まづいい加減にして置いて色々得意なところをやつてみるがよいと考へてゐたやうである。自分も多忙のため特に苦辛したやうな者しか出來ないといふやうに、興味本位の作句態度を難じた碧梧桐に對して辯解してゐる。

二十六年になつてからは益々句作は多くなつてゐる。四千以上もつくつたといふから、一日平均十數句を作つたことになる。最も多作した年で「寒山落木」にも、二千七百句許を收錄してゐる。斯く油が乘つて多作したのは、一先づ「日本」新聞社へ入つて、心に或落ちつきを感じた事や奥羽旅行をした事や俳句の仲間が多くなつて度々會合して運座等をした事が、重な原因であらう。新聞社へは入社したばかりの際であるから、馴れる迄は忙しい上にも忙しかつたであらうが、學生時代を打ち切つて、目新しい生活に入つたため、且つ食つてゆく方針だけは立つたため、精神も何となく愉快で元氣に滿ちてゐた事が想像される。而も新聞といふ發表機關を得たため一層句作には力を得て進む事になつたと思はれる。廿六年には實景ならば何でも句になると云ふやうに無雜作に考へ隨分濫作をしたと子規自ら言つて、その例として奥羽旅行中、福島近傍で得た句、

淺香沼

涼しさのたゞ水臭き匂ひかな

二本松萬福寺三句

涼しさや神と佛の隣どし

御佛に尻むけをれば月涼し

寺に寢る身の貴さよ涼しさよ

福島公園三句

見下せば月に涼しや四千軒

月涼し蛙の聲の湧きあがる

笛の音の涼しう更くる野路かな

黑塚二句

木下闇あゝら涼しや恐ろしや

涼しさや聞けば昔は鬼の家

忍摺の古蹟二句

涼しさの昔を語れ忍摺

うつぶけに涼し河原の左大臣

飯坂溫泉二句

釣橋に亂れて涼し雨の脚

涼しさや瀧ほとばしる家の間

をあげ、涼しいと云ふ題で結んだ句ばかりであるが、勿論この外の題の句は澤山ある、松島だけでも涼しいといふ句は二三十は作つたと、俳句稿抄序にも語つてゐる。實景の直ちに句になる事を知つたその頃の子規が、このかなり長い旅行中だけでも澤山の句を作つた事は首肯かれる。この旅行は技巧の上に於ても多少の進步を齎したであらう。が、それより以上俳句の眞髓を悟る上に彼に與ふるものがあつたらう。しかし何より實景を手輕に無雜作に句にする事に習熟した由は、直接的にあらはれたに違ひない。この旅行の途に俳諧宗匠を訪問したことは既に略傳のところで述べたことであるが、彼の自信と改革者としての確信は、實際田舍の無學な宗匠と對談して益々強められるに至つたことも、この旅行のもたらした偶然の副産物であつた。其

行から歸つた後も、かくて益々句作に油が乘り、多作家であつたのである。

俳友のことに就いて一言すると、廿五年に子規と一緒に句作したのは、鳴雪・非風・飄亭を主とし、竹村黄塔や藤野古白等であつた。飄亭は軍隊組の肋骨・木同・笑門等の軍人と會して句作したり、なか／＼熱心だつた。虛子は九月、京都の高等中學に入り、碧梧桐は一年遲れて京都へ出たのだから、この年はまだ松山の中學生だつたのだ。碧梧桐は廿三年頃から子規と屢々文通して俳句を始め、翌年上京してしばらく子規と常盤會寄宿舍にゐた事もあり、虛子は碧梧桐を通じて廿四年から文通し始めた。廿四年の夏は子規の歸鄕を機とし、碧・虛其他子規を中心にして句作をした事もあつた。廿五年夏休みには子規も非風も歸省してゐたので度々會合をし、虛子や碧梧桐も啓發される所が多かつた。碧・虛は離れてゐても、俳句仲間として子規とは最も親密な、寧ろ子規を兄としたやうな關係で、子規の方から考へても、虛子や碧梧桐と手紙を交換して議論や作句を示しあつたことは重大な刺戟になつたと思はれる。これら以外には、勝田明庵や西原五洲等數名の者が時々加はる位であつた。然るに廿六年になると、伊藤松宇のやつてゐた「椎の友」といふ會合の連中森猿男・石井得中・片山桃雨・石山桂山等及び鳴雪の勸誘による伊豫宇和島の連中、二宮素堂・岡孤松・岡井蛙・土居藪鶯・櫻井靜堂等と合同で會合し、運座等をするやうになり、松宇等と「俳諧」と云ふ雜誌を出したりするやうな具合で、東京の會合は前年の少數でなく、幾分俳諧試合の觀があつて句作に熱心にならざるを得ないやうな狀勢にあつたのである。斯ういふやうな諸關係で必然的に多作したのであらう。

雜誌「俳諧」は僅かに二號を出して廢刊のやむなきに立ち到つたが、明治俳句史上でも劃期的の重要さが

あるので、一言その間の事情を、ここに挾んで置きたい。

「にひはり」第二巻第六號（明治四十五年六月發行）に「椎の友と雑誌『俳星』」といふ文を、當事者の一人たる猿男が發表してゐるのは、有力な資料であるが、その中に、

松宇君横濱より來りて、濱町に居を占めて居た時分、同君が俳句をやるので、僕も猿屋町に住んで居て、町名を取つて猿男と付け、初めて俳句をやつて見た、椎並びに桃雨といふ人が居た、本所に竹山といふ人が居たが之に誘ひ込んで、各家巡番に集會しては、句を作るを樂みに仕てゐた。松宇君が日本橋の書店で知り合ひに成つたとて、得中といへる人を、引張つて來て仲間に入れた。ソコデ何とか會名を付けなければならぬが、何々社何々會も、月並者流と見られて面白くない。何としたもので有らうと凝議の末、誰の提案であつたか

先づたのむ椎の木もあり夏木立　　芭蕉

といふ句に依りて「椎の友」は如何だらうとの事に、皆手を打つて賛成し、銘々にそれぞれ名を極めた、是は忘れもせぬ二十四年の青葉茂る五月の初めであつた。其翌二十五年の一月、銘々清書を持つて集まり、只では詰らぬ故、皆に一ト題と「集興」をしたら、身分不相應に、立派に揃へて知り人に配つた。……（中略）……それから五月になりて、椎の友も明年といふので松宇君が自費自筆でその句を石版摺りにして、人に分けた。句は君が勝手に撰んでやつたのである。

青嵐の水に白けて子隠　　桃雨

五月雨や葦はいつか暮れてゐる　　猿男

一色の中に色ある青田かな　　得中

見覺えた櫻も見えず夏木立　　桂山

蓑蟲の古巣見出しつ苔の花　　松宇

　　椎の友會を結びし一周年の祝に

去年うゑし椎の木ながら風涼し　　松宇

今日此に去年の木立の茂り哉

といふのである。此時僕の作つた句は

子規君の椎の友に這入つたのは、此年の秋であると思ふ。翌廿六年春に、再び久々與を揃つたが、此時は子規君も加はつて、六名となつた、……(中略)……其から間もなく、子規君が鳴雪君を同道してやつて來たが、それからといふもの、此會は非常に活氣を呈して來て、隨分徹夜して句を闘はした事も少く無かつた。

と書いてゐるので、「椎の友」の起原・性質等は理解されよう。雜誌「俳諧」については、

二十六年二月然も二十八日の夜であつた、桃雨君の家から使を通じに來た、行て見ると子規松宇の兩君も來て居て其席で、その前より寄り〳〵協議して居た、俳諧雜誌發行の事を、愈々やることに取極めた、其雜誌の名前についても種々説も出たが、結局何かなしに、唯大きく「俳諧」とする事に一決した、ソコデ印刷販賣責任を役キ、桃雨君の知人で三井某といふ、其道の經驗者に委託する事にして、我々は原稿を供給し、費用萬端は先方の負擔にて、若し幸に賣れて利益があつたら幾分の報酬を貰ふといふ約束である。紙面全體は子規君に責任を持つて貰つて、中に欄は其實銘々分擔して、筆を取る事に極めた、其欄と定めたる受持は次の通りである。

埋木欄　宗鑑の犬筑集と鬼貫のひとり言　　受持　松宇

栞草欄　素外の俳諧手引　　受持　桃雨
　　俳諧木枯冬の日註釋　　同　蕉男
古鏡欄　類題句集　　同　子規
雜錄欄　先哲遺訓　　同　同
　　近事漫錄　　同　同
　　新選佳調　此は募集句や知人又は我々の句を掲載し新派を標榜する積にて其選は評議にて決するの
　　　である。

かく定りて、夫々原稿に着手し始めて第一號を發行したのは、三月二十三日で有つた。刷高は三百冊で、定價は六錢と極められた。我々は十五部宛買つて、夫々知人に贈つたが、此時の嬉しかつた事は、今だに忘れない。第一號に書いた子規君の緒言は中々の名文で、此に全文を掲げたいが、長くなるから省略するが、中に「歌はおとなしくして力なく、詩はむつかしくしてさびし、俳諧は變化自在にして雅俗は心の上にあり、古き者は、古きが故になつかしく、新らしきものは新しきが故にめづらしとすれば、豆腐と蒟蒻は萬葉の中に溺れ、馬子の情、出女の戀は八代集にも其詞なきこそ俳諧の起りにはあるべけれ」などの詞もある。第二號は五月四日に發行した。ソコデ世間の評を聞て見ると、飽まで文學的で、月並の流俗を超脫してゐて至極いゝと、大分賞められたが投書が更れない。とう／＼三井某から、何分收支が償はないからとの苦情が出て、第三號は原稿迄皆出來上つたにも拘らず、終に二號限にて廢刊する事に成た。云々

と書かれてゐる。子規書簡集によれば、某子の寄せた百首を評した長文の手紙を、廿五年十月九日大磯松林館

から書き送つたのが、兩者の交渉の始まりであらう。十一月九日附、松宇に送つた書簡には、

　拜復先夜は押懸て推參致長談冗話に御迷惑をも憚らざりし段御海容被下度奉祈候又珍書數部拜借仕大に學問に相成候又明十日は御會御催の由にて小生をも御誘引被下難有奉存候折角の御すゝめに候へば御思召にあまへて席末を汚すべくいづれ明日尊宅迄罷出可申に付拜顔の上御禮可申上候萬事迄　恐々謹言

と書かれてあるが、この十日の會に出席したか否かは不明であるが、翌二十六年一月十五日に、鳴雪・松宇猿男・桃雨・古白等が會して句を作つたのは「根岸庵小集の記」と題して、十八日の「日本」に掲げられ、子規の書いた俳句會記事の最初の發表となつたものである。一月中には他に數會催された。

　根岸庵小集の記紙上に載せ候に付大方御覽被成候事と存候此頃は椎の友と我們俳諧仲間と合併致し度々大小の俳句會相開申候會とは席上運座若しくは宿題にてこれを各人判定して其點數をしめあげ優劣を列する方法にてはじめは面白かりしが今は俗氣紛々として少々いや氣に相成候（中略）先日小生宅近所にて一會其後鳴雪翁宅にて一會いつでも十二三人の大會俗なれども面白き事は面白く候云々（廿六年二月二日、虚子宛書簡）

等とあるによつても、その間の事情を察する事が出來る。この「椎の友」との會合をするやうになつて、始めて運座の形式を行ふに至つたが、鳴雪は、

　今日行つてゐる運座で銘々の句を認め狀袋へ入れて廻し合ふ方法は此頃藪鶯氏が牛込の宗匠岡田半翠氏の運座へ出席して見て來たのが起因で、右の法は半翠氏の發明だらうで、夫故自ら袋組と稱して居た、僕も藪鶯氏に連られて此袋組へ出席したこともある、此外同人中にも隨分舊派俳家の運座へ出掛けることもあつて子規も上根岸岡倉某老人の運座へ

と出て頗る高點を得たと笑つての話もあつた。

と言つてゐる。

子規は松宇其他の諸氏と會合して句會をし、運座をして高點を競つたりして新しい刺戟を得たのであるが俗氣をまじへ、あてこみをやる、この合同運座の雰圍氣は彼の好むところでなかつたし、又俳諧の態度についても到底滿足出來ないものがあつたらしく、「椎の友」との會合は長くはつゞかなかつたのである。

しかし廿六年にも、何々十二ケ月の試みは續け、その翌から更に、宗因調・去來調・凡兆調・來山調・素堂調・尙白調・伊丹調等、古俳人に擬して所謂俳句十二ケ月を作つて發表したりしてゐる等、まだ興味本位の立場を脫けきらなかつた。例示すると、

宗　因　調

一月　老もいさめ瘦せたりといへども午の年　　二月　大つ雲雀霞となりて失せにけり
三月　草臥てよし足引の山ざくら　　四月　時鳥御簾かけ瀧が聞きたり
五月　蚊柱や太しき立てゝ宮づくり　　六月　夕涼松風とめられ候そ
七月　天の川渡らば二匹牛と牛　　八月　月こよひ肴は三五十五文
九月　菊時はあきぞ悲しき明樽の　　十月　よつ引てひやうとぞはなす火燕
十一月　あら笑止や又霜の上りおとこ角　　十二月　老いくれ／＼もいや／＼申しゝに

の句を作てゐる。廿九年には「類題清早俳諧正風」を出して、頻りに宗因調以下を擬して作つた當時は古人(註二)

の風調を究めず、自ら眞の趣味を解しなかつたので、今からみるとその無鐵砲に實にはづかしく思ふと言つて、全部それを削ると斷つてゐる。

（註二）「獺祭書屋俳話正誤」に於て、この宗因調は或は存して置いてもよいと言つてゐる。それは宗因の特色が皮相の句法にあつて趣味は皆無であるから、宗因調として通しなくても、他の俳家に紛らないと言ふにある。

かく古人に擬して句を作ろかと思ふと、時事諷刺の俳句等を多くものしてゐる。前者は古俳句研究に根ざした興味的のもので、後者も俳句を應用した興味的のものたるに變りはない。前年十二月入社直後から、新聞に載せ始めたもので、所謂「俳句時事評」に文章の中に諷刺的な俳句を出したり、俳句のみで時事を諷刺したりしてゐるのであるが、これも廿五、廿六年に主に試みられたのである。廿六年十二月二十日發表の、

議長星隕
冴る夜や大星一つ流れ行く

官紀振粛上奏案
粛々と馬に鞭うつ霜夜かな

千島艦事件
りきむ程猶はね返す霰かな

條約厲行案
初雪や靴門内へ入るべからず

停會
凩の十日許りは休みけり

等は諷刺といふ點は殆んど表れてゐないが、たとへば十月九日發表の

首相　命には何事もなし秋のくれ

内相　稍妻の勢弱し秋のくれ

外相　鬚のびて剪刀さびぬ秋のくれ　　陸相　あどけなく笑ふ顔さへ秋のくれ

首相　なき児のまにふし悲し秋のくれ　　農相　里はなれて里に歸りし秋のくれ

藏相　縕袍の温またぬけず秋のくれ　　法相　かゝりうどの飯時寒し秋のくれ

遞相　徒らな子は寢入りけり秋のくれ　　文相　顔瘦せて眼もかすみて秋のくれ

等の句に至ると、諷刺俳句としての鋭鋒をあらはしてゐる。是等は俳句を、多數の讀者を滿足させる新聞記事に適するやうに受取り利用したので、子規の意志ばかりで始めた事ではないが、併しこの種の事は子規も嫌ひではなかつた。

新聞社入社以前、「日本」に寄せた「獺祭書屋俳話」中に、日本新聞解停の時作つた「初嵐」の文字に、

君が代も二百十日はあれにけり

といふ俳句がある。「俳諧諷刺記」（二十八年九月、毎日新聞所載）に、岡野知十が、子規を評したところにこの句をあげ、

甲は此句のまゝに一種味を帯び、蓋し君が代二百十日は有意にして一層の味ありなど評しつべしと雖も、乙に在りては此句のみにては其妙何處に存するか現今しかれ共知らず、然るに此句は新聞「日本」が發行停止の名の下に幾回も停止をみまはれたる後、日本停止の解停に際して所せるものたるに於て、稍意味を解げでなしたなりし、註釋講義をもつて説明するとも、かく迄に了解する能はざるべし。

「諷刺」によりてやゝ俳諧の味を薄めしもの「諷刺」によりて其趣味を加ふるに至りたり、而して當時の日本讀者は、諷

會の筆記にも、時事の問題にも、俳句を挿まざるはなく、評林韻詩の特色をうつし來りて、之を俳句に用ひしは、たしかに明治俳家の多數の喝采を得て、日本派風調の勢力を得たる理由ならずんばあらず。

と言つてゐるのは、確かに肯綮にあたつてゐる。彼は「日本」新聞といふ、善き發表機關を得、二十六年二月から「日本」文苑に俳句を載せ始めるまでになつて、彼の俳句的勢力は漸次否みなりの急テンポで俳壇に支配權を要求するに至つたのであるが、新聞社内に俳句の新聞的價値を認めしめたのは、彼の俳句を應用する才能に由つたもので、その所謂俳句時事吟は、俳諧の理解と普及に役立つたのであつた。

たとへ俳句を翫弄視し、興味一方で濫作に流れ、純藝術的立場からは非難すべき數々の試みが、この時代の子規にみられるとしても、それは、成長の過渡期としては許容すべき練習となり、俳句を普及させる效化は認められねばならぬ。句法や意匠の變化を知り、自在ならしめたといふ、いい結果も一面子規に與へられたに違ひない。而も彼は濫作をして駄句ばかりを作つたといふのではなく、當時俳壇のレベルからみれば、注目すべき數多の作をも示してゐるのである。

さて彼のこの期の句を少しく考察しようとするに當つて、古句の摸倣といふ觀點からは、大體廿五六年を元祿摸倣期、廿七八九年を天明摸倣期と分けてみるが便宜である。元祿の摸倣、天明の摸倣と言つても極めて大體の傾向であつて劃然と嚴密に二つに分れてゐるのではない。又多少明治の特色乃至子規の獨自的なるのを摸倣以外具備してゐる事はいふまでもない。この方面を特に强調すれば、鼠骨氏の如く「上堂時代」と冠することも許さるべきであらう。但し特色はあつても、その特色は未だ十分出きらない。古句を摸倣して

元祿にも天明にも及ばない、獨自性のない句がなか〳〵に多いのである。この點で古句模倣期と稱するのもかなり當つてゐるのである。

犬蓼の花くふ馬や茶の煙　二五　　冬籠日記に夢をかきつける　二五
松杉や枯野の中の不動堂　二五　　冬枯や蛸ぶら下る煮賣茶屋　二五
涼しさや裸でこゆる箱根山　二六　　隣からともしのうつる襖かな　二六
馬の尻雪吹きつけてあはれなり　二六　　椽に干す蒲團の上の落葉かな　二六

等の句と、

絶えず人いこふ夏野の石一つ　二七　　翡翠や水澄んで池の魚深し　二七
炬燵して語れ眞田が冬の陣　二七　　梟をなぶるや寺の晝狐　二七
鼾すなり涅槃の寺の裏門に（醉猫圖）　二八　　下駄はいて行く〳〵や燒野の薄月夜　二八
絶壁の巖をしぼる清水かな　二八　　冬ごもり煙のもるゝ壁の穴　二八
春風にこぼれて赤し齒磨粉　二九　　團扇取つて廊下舞ひ出る酒興かな　二九
美服して牡丹に媚びる心あり　二九　　詩腸枯れて病骨を藏す蒲團かな　二九

等を比較してみても、廿五六年頃の元祿（殊に猿蓑）の句に影響される所が多く、廿七八九年頃は天明調に傾いて來たと言つてよい句風だつたことが、一通り理解されよう。

然らば廿五年と廿六年の句にはどれだけの進歩がみられるか。子規自身、この兩年の趣味の上に、さした

る相異は無く、著しい進歩はなかつたが、廿五年の冬は天然を詠みこなすことが今迄よりも自在になつたと言つてゐる。この點、即ち廿六年の句が前年よりも寫實的の句の多くなつてゐること等は、著しい相違であらう。句作の多くなつた事も、一つには、今迄より樂に自然を詠み得るやうになつたからでもある。自然の寫生が容易になつた結果、濫作の極に達したと言つてはゐるが、寫實を一歩深め得た、いい作を增してゐることは否定出來ない。廿五年には、

木の葉やく寺のうしろや普請小屋

鵙鳴くや一番高い木のさきに

等の純寫生的の句もあり、

門しめに出て聞て居る蛙かな（松山堀端）

冬川の涸れて蛇籠の寒さかな

槍立てゝ通る人なし花薄（箱根）

樵夫二人だまつて霧を現はるゝ

等の、主觀を加味した、少し氣の利いた風な寫生句もあるが、概して把握が確定でないのが多い。俳句帖抄の廿五年の部所收の比較的寫實的の句をみても、上掲の者等は良き部に屬し、多くは詰らないものである。

行き〳〵てひらりと返す燕かな

の「行き〳〵て」等の言葉は十分利いてゐないで、宙に浮いてゐる。「行き〳〵てここにまた行く夏野かな」

（蕪村）の句の用法は一通りとれるとおもふが。

秋の雲瀧をはなれて山の上

この寫生等も把握が確實でない。「はなれて」等は全く生氣のない表現だ。かゝる程度の寫實の句さへごく僅かである。「俳句帖抄」廿六年の分から、寫實味のあるものを拾ふと、

萱の木に雀囀る春日かな　　行く春や商人宿の立烏帽子
鶯の淺踏へわたる日和かな　　玉川や小鮎たばしる晒し布
山吹の下へはいるや鮎取　　菜の花や野中の寺の椽の下
ちら／＼と供勢見ゆる夏野かな　　夕陽に馬洗ひけり秋の海
鵙なくや雜木の中の古社　　木槿咲く土手の人馬や酒田道
縁日へ押し出す菊の車かな　　藤棚の實ばかりになる寒さかな
路次口に油こぼすや初しぐれ　　杉の雪一町奥に仁王門
旅人の蜜柑くひ行く枯野かな　　冬枯や蓮花に咲ける田の夫
一つ家に鴨の毛むしる夕かな

等、大部分はこの種のもので、著しく寫實的傾向を帶びた事は、容易に看取されるのである。

鵙鳴くや一番高い木のさきに　二五
鵙鳴くや雜木の中の古社　二六

この二句をならべて、どちらが良いかと問ふならば、意見は區々であらう。前者は稚拙なところに多少見どころがあると云へば云へる。廿五年の作では注目さるべき句の一つと思ふ。後者は廿六年作中ではさほど目だゝぬのである。この二句ばかりで、廿五年と廿六年の句の比較論に直ちにあてはめる事は出來ない。が唯これだけの事は言つてもよからう。前者は寫生が細かく、はつきりしてゐるやうであつて、實は情景がも少し分つていいと思はれる點があるに反し、後者は情景を明確に描くことは出來なくても、前者よりはその境地のわかる事である。平面的から多少立體的に入つてゐ、配合景致の上に多少の複雜さが見られると云ふ點で、後者は前者より一歩すゝんでゐると見られる。「古社」の配合によつて、情景を想像する事が出來る。前者は單調である。單純化されたのでなくて、一本の線が畫にならないといふやうな、物足らなさがある。その點への反省が、更に後の句を生ましめ、これを自己の句集にも採錄した所以であらう。今ここでは、この二句の藝術價値を決定的に評價するといふよりも、かゝる成長を知ればよいのである。

要するに、廿六年は前年に比し、單に句數の多いばかりでなく、寫生的手法に慣れて寫實味を多く加味して來た。寫實的の句が多いばかりでなく純寫生的のものであつても、多少の複雜さと味を增し、且つ寫生が確實に、一歩深く把握され、主客融合の境を寫し得た佳句もいくらかみられるに至つてゐると言つてよいかと思ふ。しかし全體からみて句數の比例以上に佳句が多くなつたとはいへ、その傾向には非常の變化はなく、兩年を一括してその特色をみても差支ないとおもふ。殊にこの兩年を一括して、二三氣づいた點をあげよう。寫生的の句は例示したから、他の特色をみよう。「猿蓑」に最も敬服してゐたと云へば、直ちに、主觀

的傾向も少くなかつたらうと想像せられる。

生残る蛙あはれや枯蓮　二五　　椎ひらふあとに落葉哀れなり　二五
もの丶ふの河豚にくはるゝ悲しさよ（千里駿遺愛）二五　　もみぢ葉のちる時悲し鹿の聲　二五
鶯谷に一本淋し枯尾花　二五　　橋落てうしろ淋しき柳かな　二六
淋しさを猶も紫苑ののびるなり　二六　　秋三月咲て淋しき野菊哉　二六
つるされて尾のなき鴨の尻淋し　二六　　妹なくて向ひ淋しき炬燵かな　二六

「もののふの」の句は主観的の句であるが、他は客観的の句の中に「悲しい」とか「淋しい」とか「あはれ」といふやうな、主観の言葉を挟んだもので、主観的傾向に属する一類である。尤も、適切に用ひられてゐるのもあるが、多くは失敗の作となるのである。「かなしい」とか「さびしい」とかの主観的の言葉を十分適切に使用する事は容易ではない。暴露誇張に堕するが普通である。子規も模倣的に無雑作に使ひすぎ自分の感情を安價に誇張して投げ出して死んだものにした形のものが多い。「秋」とか「冬」の自然はさびしい象を多くあらはしてゐ、又常套的にさびしいといふ観念が附き纏つてゐる。又物によつて、さびしい、かなしいといふ特色を多く有し、因習的に淋しい、悲しいといふ観念と結びつけられてゐるものがある。子規も斯ういふ因習的な常套的観念に據つて、模倣的に使用し、自己の實感を瞞着し誇張した點は免れなかつた。この頃の子規の態度や實際の作句に徴すれば、かういはれても餘り抗辯の餘地のないものが多いのである。擬人法も、主観が露骨に出てゐる一種の主観的文學といへるが、この類のものも少くない。

我先に穗に出て田草ぬかれけり　二五　　明月の思ひきつたる光かな　二五
かけはしやあぶない處に山つゝじ　二五　　二三輪咲く骨折や冬の梅　二五
石原に痩せて倒るゝ野菊かな　二五　　蝸牛の喧嘩見に出ん五月雨　二六
行く春をうれしさうなる鴉かな　二六　　野は春となりけり馬の笑ひ聲　二六
悲しき灘をへだてゝ山笑ふ　二六　　世の中を悟らずもがな蟇　二六

「石原に」の句等が比較的無難であるとおもふが、多く俗俳の境地を出てゐない。擬人的表現は、多く理智的に墮し、特殊の場合以外は成功しない。一木一草の微にも、人間に對すると同樣な愛をかんずるといふ、博大なたましひを持つ事は、愛の極地であらう。實に自然詩人は多少とも、この心持に通ふものがなければならぬ。この境地に於ては既に擬人法等の用ひられる餘地はない。わかりやすくいへば、擬人法は自然を弄ぶ態度から生れる、理智乃至下級な感情の所産にすぎない場合が多いのである。低級な滑稽か、理窟のいやみに墮するのが普通なのである。「世の中を」の句のやうに道學的教訓的口吻を感ぜしめるものだ、擬人法には又屢ゝ伴つてくるのである。この當時の子規の句に、擬人的表現のなか〳〵に多い事は注意すべきであるが、比率からいふと、二十五年が遙かに多いやうである。

比喩の句は多いといふのではないが、

鹿老て猿の聲にも似たる哉　二五　　鮎澁ていよ〳〵石に似たりけり　二五
夕月や小牛のやうな沖の岩　二五　　敦盛の鎧に似たり山櫻（須磨）　二六

のやうな單純なものから、

茄子南瓜小道さゝの別れ哉（半淵村にて諸女と互に別るゝ時）二五　うつむいた恨みはやさし百合の花（戀）二五

世の中をかしこくくらす海鼠哉　一六　さそはれて面白く散る櫻哉（男女題畫の圖に）二六

泥水を見せぬ蓮のさかり哉（遊女讃）二六　風吹て廻燈籠の浮世かな　二六

の如きもの、たほとしくはない。例の「俳句時事評」の例句としてあげた者皆譬喩である。譬喩も適切なものはなか／＼得難いのであるが、子規は、側面から譬喩で題意をこなすやうな事は得意であつたらしい。緣語や懸詞の上に奇智滑稽を喜ぶやうな事は、俳句を始めた頃と異つて、非常に少くなつてゐる。例句、

これは猫や何の思ひを忍びあし　二五　永き日やそのしだり尾の下り藤　二六

我戀は引くてなぎさの小松哉　二六　ちりうけば吹かれつ蘆の花小舟　二六

白魚のすみ田河原と申さばや　二六

併し、「世の中をまるく／＼丸うまはりけり」（二五）のやうな音調の技巧を弄んだやうな句はかなり多い。これは特にこの頃多いのではないかと思はれる。

摸倣期である。自然を詠む事が樂になつたと言つても、また擬人法に頼つてゐたりするやうなものが少くなく、純寫生的な佳句が、多數あるわけではない。

今時も猶も來てのむ蒲水かな　二五

郭公大園家をすぐとけり　二五

ふるまはん深草殿に玉子酒　二五
政宗の眼もあらん土用干（瑞巖寺）　二六
水飯や辨慶殿の喰ひ殘し（蒲原寺に宿る此方にて義經飯を食ひたる由來あり）　二六

等の句が、俳句帖抄にも撰ばれてゐるが、この種の、子規の所謂理想的の句はこの期にも少くない。內容的にいふと、元祿の「寂」の摸倣に終つてゐるものが多い。たとへば淋しいとか悲しいとかいふ言葉等を安價に使つてゐるのは、それである。手法としての寫實を學んできたが、寫生はあらつぽくて、又擬人法其他安價な興味的主觀に禍されて十分眞直に成長することは出來たかつた。それらの缺點は廿七八九年頃に徐々に補はれて行くのである。

明治廿七年には「小日本」編輯をひきうけ、又半歲にして廢刊の憂目をみる等、多端の年であつたが、句數は前年よりも少いが、俳句に力を用ひたことは決して劣らなかつたであらう。大野酒竹や藤井紫影等もこの年一しよに句作をした。石井露月や佐藤紅綠等の子規に師事したのも、この年からである。廿四五年頃は虛子や碧梧桐に「歌俳句は永久のものではない。」「明治時代に俳諧の最後を見るといふ說を持つてゐる。」といふやうな意見を洩らし、「俳句の前途」といふ題で、その意見を公にした彼が、廿六年十月には、京都にゐた碧・虛二人にあてた手紙に、「十七字天地容四千萬人而有余數萬言小說不値簿中之一讀過」等と記したところをみても、俳句に對する熱心・意氣の程を察することが出來るやうな氣がする。

すでに廿六年頃は、かなり著しくあらはれはじめた傾向であるが、漢語を多く使つてゐることと又字餘りの

句の多くなつてゐること等が先づ外形上目につく。

鐵砲の調練見ゆる夏野かな　　春風や四階五階の貸座敷
山寺や石あつて壇あつてつゝじ咲く　　柳あり橋あり風の酒旗翻く
土手一里依々緑々と柳哉　　詩僧あり酒僧あり梅の園城寺
古書千卷文質彬々として梅の花　　貞女石に化す惡女海鼠に化すやらん
入ること十歩都の蠅をはなれけり　　水青く石白く兩岸の紅葉哉

この傾向は、廿八九年頃も同様で、單なる字餘りは廿九卅年頃が却つて多いかも知れぬ。今迄の句法にも飽いて變化を求めてきたのであるが、單なる外形の問題でなくて、内面の要求からも起つてゐる點は認めねばならない。前年頃のこの種の傾向は元祿の虚栗等の追從と見做され得るとするならば、この年頃からは漸く天明の俳句に有力な手本を求めてゐたと言はなければならない。ここにあげた句が、元祿と天明の何れに類似があるかといへば、無論天明の調に近似してゐる。

彼は、廿七八年頃は闌更・曉臺の風を學んだので蕪村はまだわからなかつたといふ意味の言葉を洩らしてゐる。思ふに、蕪村の摸倣を敢てしなかつたといふのではなく、蕪村の句は洗練された高等の者であるため摸倣することも十分には出來なかつたといふ意味であらう。この天明の三家に各特色を見出すことの出來ないのではないが、何よりも蕪村の詩眼が高く優秀で、技法もすぐれてゐることに、明瞭な區別がされ得る。が、蕪村と芭蕉の句の特質を區別するやうに、同時代に生きてゐた三人の特質は顯著な差別が立て難いので

ある。ともかく上例の漢語や字餘り句は、虚栗等の用法と異つて、天明に近いといふ事を肯定したいと思ふのである。漢語を多く用ひたこと、又字餘りを用ひた事、それは一つには内容の複雜を要求した必然の結果でもあつたらうが、一つには強い調子を喜ぶ事から發足した事も考へられねばならぬ。艶麗雄壯といふ方面には、天明の影響をうける事が多かつたと自ら語つてゐるが、雄壯といふ方面は、特に漢語等の使用は效果的である場合が多い。

　雄壯な句を好む所から、大といふ字をやたらに冠したのもこの頃であるといふが、彼のこの頃の句には實際「大」を冠した句が多い。例句、

大粒の霰降るなり石疊　　大木の雲に聳ゆる枯野哉
大海鼠覺束なさの姿哉　　引きすてし大鋸の日永哉
霞みけり山一番の大檜　　春月や五條橋上の大鼾
猫の戀大長刀をわたりけり　　大纖百萬石の城下かな
大山に我坐して居る涼み哉　　山里や大時鳥大月夜
大螢ものすごき夜のけしきかな　　夏草や大石みゆるところ〳〵
大村や祭は過ぎて秋の蝶

　後年、子規は「曝背閒話」（三十一年三月、「韻文學」所載）の中で、他の藝術に目のあいた人たら俳句を分らない筈はないと言つて、友人の畫家、爲山（牛伴）は習はずして俳句に巧みであるし、不折は、自分が或句に、「廣野」と

作つてゐたら、「廣」は無い方が却つて廣い感じを有效にするといふ適切な批評をしたといふ例をあげてゐるが、この大などの形容詞を置く事は、大の感じを却つて稀薄にし、句柄を惡くする場合の多いといふ事には、藝術に對する眞の開眼がなく、而も一向に雄大といふ所をめざしてゐた當時の彼には、全く考慮を省みる餘裕のなかつたのも無理がない。大といふ字を冠したのは、主として句の雄大を目的としたのであるが、同時に印象を鮮明精細に描き、繪畫的效果をあげようと云ふ考も含まれてゐたのではなからうか。而して主としてこの後者の目的からであらう、「大」と反對の「小」の字を冠した者も亦必ずしも少くはない。

春の夜や傾城買ひに小提灯　　木の間に紙すく小村霞みけり

藻がくれや春の小魚のちら〱と　　人の背に蝶ゝなぶる小猿かな

蝿たまる水道尻の小家哉

其他、小石・小道・小川・小菊・小舟・小池・小傾城・小法師等の用ひられてゐる句はあるが、大といふ字程無闇に數多く用ひられてない。而も彼が「小」の字を冠したものは一般的に使用されるものが普通と言つてよく、わざとらしい不自然さは、餘りかんじられないやうである。

又この大と小との對照を意識して作つた句も少くない。「大」「小」の文字を露骨に對照したものと、さうでないものとの差はあるが、前者は言葉の上の興味もあらうが、何れも主とする所は、畢竟は印象明瞭といふ點、換言すれば寫實の精細といふやうな所にあつたことと思はれる。例句、

小舟漕で大寺めぐる春日哉　　大木の下に子のよる春日哉

春風や大風車小風船　大伽小橋あるべきところかな

沙漠千里小草も見えず雲の峯

ある事物を配合し對照して、景象を鮮明にするやうな手段が、この頃から漸く多く行使されてゐる。この目的のためには、形容詞等も新しく多く使用されるやうになつてきた。漢語を多く一句に使ふと、和語の形容詞は用ふる餘地は少くなるわけであるが、その場合は名詞の上に漢語の形容詞を冠するといふ事になる。美しい女と云ふのを、美女と名詞にして、他の配合を多くする餘地をつくるのである。色彩の上の形容詞の多く用ひられるやうになつたこと等も注意されるのである。

草屋二軒赤白の桃咲けるかな　紫の夕山つゝじ家もなし

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり　根府川や石切る山の青密柑

水赤く泡流れけり蓼の花（王子製紙場）　鳥啼いて赤き木の實をこぼしけり

西洋の草花赤し明座敷　高楽の上に短き白帆かな

等は、俳句帖抄廿七年の分に載つてゐる句であるが、先に例示した、

水青く石白く兩岸の紅葉かな

の如きは、全く色彩の對照美から構成されてゐるのである。

赤いものを赤いといふやうな、分りきつた事をいふのは、單純化を要する短詩形式では特殊の場合の外は效果的でないので、彼の場合にも、この用法が皆成功してゐるといふのではない。が、色彩の上に、色彩の

配合の上に心を働かすことの多くなつた事は認められ、それは一種の進展といふべきであつた。以前よりも五感全體に亘つて感受性を働かし、漸く感覺の鋭さをあらはさうとしてゐることが實證されるが、それも天明の摸倣から得た點が多かつたと思はれる。「水青く」の例でもわかるやうに、對句の使用等も多くなつてゐる。たとへば卅一年頃の和歌等にも對句は多く用ひられてゐるが、併列的、說明的にすぎぬものが多く、自然な感覺的表現には到つてゐない。

色彩上は「赤い」といふ形容詞を一番多く用ひてゐると思ふが、これはこの頃からあらはれた艷麗といふ特色を直ちに思ひ浮ばせるのである。「艷麗な趣味を喜んだために春の句特に春風春雨行く春などいふやうな題を最も多く作つた。」と彼は言つてゐるが、

大江戸や錦繪を吹く春の風　　薄絹に鶯縫ふや春の風
牡丹植て美人土かふ春の風　　春風や横町横町の赤鳥居
鳩鳴くや大提灯の春の風（淺草）

等、多少艷麗といふ形容詞に近い情景の句も前年よりは增してゐる事は認められる。

廿七年秋は毎日のやうに、根岸の郊外を散步して句を拾つてゐた。寫生的の妙味はこの時から悟つたやうな心地がしたと告白してゐるが、實景に對して、出來たといふよりも、こしらへた句ではあつても、空想でこねあげたやうなものよりは、いい作が多い。

稻の花道灌山の日和かな　　一反は刈り殘す田の雀かな

掛稻や野菊花咲く道の端　　靜かさや稻の葉末の本願寺

雨含む上野の森や稻日和

要するに二十七年は寫生趣味の句が、より多くなつた一方、天明俳諧の影響によつて種々の習作をして、二十六年よりもやゝ俳境を押しすゝめたといふべきであつた。

明治廿八年も廿七年と大差はない。廿七年の特色としてのべたところを適用して大體謬らないであらう。この年は從軍記者となつて金州・旅順方面にゆき歸國の船中で喀血をし、神戸・須磨等で保養し、鄕里で靜養して歸京した事はすでに述べた所であるが、彼の一生中最も變化の劇しかつた一年であつた。一時は重患だつたが、一年を通じての俳句數は却つて前年よりも多かつた。病氣といふことは彼にとつて不幸だつたに違ひないが、俳句の成長といふ側からは、却つて病後の保養の期間は好い作句の時機でもあつたのである。特に二ケ月に近い松山歸省中に於ては、松山、松風會の人々が子規を中心として毎日のやうに運座連俳をして、勵みあつたことは、子規一個の問題といふよりも、明治俳諧史上に特筆されなければならない。

學寮へつゞくや雪の道一つ　　村一つ澁柿勝に見ゆるかな

岩橋や月にうつむく鹿二つ　　渺々と沙漠のはてや月一つ

稻妻や檜ばかりの谷一つ　　行く我にとゞまる汝に秋二つ（漱石に別る）

かういふ「何いくつ」の句法は、前年にもみられるが、この年は特に多いかとおもふ。

洛陽に春立つ二月三日かな　　三月や小松の枝に雀二羽

春の風二つ帆のある小舟哉　　咲きにけり廢院の梅五百本

この二日五月雨なんど降るべからず　　二三町淸泉を去りて苔淸水

等、正確な數字乃至大凡の數を指示することも、廿七年あたりからみられる傾向であるが、この年に、その用例を增してゐる。特に錢の數字は彼の句に少くないが、就中「一錢」といふやうな小さい數を使用したもの、

・一錢の釣鐘つくや晝霞　　二文投げて寺の椽借る凉み哉

一錢の氷少き野茶屋哉

等が、「俳句帖抄」に拔かれてゐる事は注意される。數をあらはすやうなことも、必要な場合もあらうが、彼のは試みとしてやつたもので、興味に墮してゐるのが多い。印象明瞭といふ如き事を目的としてゐたのではあるが、數を算へたり形をうつしたりする事は深い寫實ではない。實感の句も段々多くなつてはゐるが、私達からみれば、まだどうも技巧的に作りあげた、實感の稀薄の句が多すぎると思ふ。併し彼の俳句熱は益々盛で、種々の試みをし才氣をふるつてゐる。たしかに前年に一歩を進めてゐるといふことが出來る。「此年の著しい傾向は、簡單明瞭な句が多くなつて居ること、句調に於て緊密壯快を求めて居ること、蕪村の影響の益々著しくなつたこと、この三つである」と鼠骨はのべ、某氏は「明治廿八年從軍の前後は取材の多方面になつたこと、敍法の變化の自由になつたこと、卽事卽興の句が優れて來たこと等が注目される。」と云つてゐる。見方により多少の相違があるが、彼の熱心と元氣はひとしく認めざるを得ないであらう。

明治二十九年より子規は殆んど病褥の人となつてしまつたのであるが、子規派の勢力は益々世に認められ「日本」の投稿句も多くなり、俳句の運座も毎月子規庵で行はれるといふ具合で、俳句全集にも三千句以上の作句が錄されてゐる。彼の一生中、熟度が頂點にあつたと言つてもよい一年である。この年に入つてからも益々字餘りや異調の句をつくつてゐる。一月から四月にかけて發表した所謂俳句二十四體（眞率體、即興體即景體、音調體、擬人體、廣大體、雄壯體、勁拔體、雅樸體、艶麗體、纖細體、滑稽體、奇警體、妖怪體、祝賀體、悲傷體、流暢體、佶屈體、天然體、人事體、主觀體、客觀體、繪畫體、神韻體）の一體十二句づゝの試作の如きは、彼が如何に變化を試み習作に心神をけづつてゐたかを推察するに足るのである。ほめていへば、益々縱横の才氣をふるつてゐるのである。蕪村の影響を蒙つた事は、この年が最も著しいと子規は言つてゐるが、

紙燭して落葉の中を通りけり　　漂母我をあはれむ旅の餘寒かな

の如く、蕪村の語句をそのまゝ襲踏したやうなものも少くないが、多少は圓轉脱化してゐる點も認められる。

廢苑に蜘の圍閉づる牡丹かな　　牡丹伐つて其夜嵐の音すなり
宰相の詩會催す牡丹かな　　薄月夜牡丹の露のこぼれけり
卓一脚香消えんとする牡丹かな　　廊下より手燭さし出す牡丹かな
凛として牡丹動かず眞晝中　　晝中の雲影移る牡丹かな

篝火の燃えやうつらん白牡丹　　花震ふ大雨の中の牡丹かな

これらの牡丹吟は、蕪村の句に倣つて作つたものであると彼自身記してゐるものである。對照の便宜に蕪村のをあげてみる。

山蟻の覆道造る牡丹哉　　蟻王宮朱門を開く牡丹哉
牡丹切て氣の衰ひしゆふべ哉　　地車のとゞろとひゞく牡丹かな
不動畫く琢磨が庭のぼたんかな　　詠物の詩を口すさむ牡丹哉
みじか夜の夜の間にさけるぼたん哉　　やゝ廿日月も更けゆくぼたん哉
虹を吐いて開かんとする牡丹かな　　寂として客の絶間のぼたん哉
閻王の口や牡丹を吐かんとす　　日光の土にも彫れる牡丹かな
方百里雨雲よせぬぼたん哉　　山蟻のあからさまなり白牡丹
牡丹散てうちかさなりぬ二三片　　廢庭のぼたんや天の一方に

句格類似は認められるが、廿七年の、

寂寞と牡丹の開く御庭かな　　人も無し牡丹活けたる大座敷
牡丹咲いて大比枝颪來る夜かな　　夕風や牡丹崩るゝ石の上

や、廿八年の、

驀然と牡丹きりたる遊女かな

等が、餘り手際のよくない摸倣であるに比しては、遙かに進んでゐるとも云ふべく、而も蕪村の句に倣つたと明記してゐるのは、却つて摸倣より獨自のものをうみ出さんとする氣魄を思はしめる。併し卅二年の作、

三日にて牡丹ちりたる句錄哉　　林檎喰うて牡丹の前に死ん哉

床の間の牡丹のやみや時鳥（病中聞時鳥）　　鉢植の牡丹もらひし病哉

や、卅三年の

かいなでに牡丹描くや泥繪具　　散らまくの花びらたれし牡丹哉

等は、とにもかくにも、自己の境涯に卽した實感に裏づけられ、獨自性のあるに反し、この年の句は技巧はみられるが、まだ本物ではないといふ氣がする。一例を「牡丹」の句にとつて、彼の作品進展に於ける概評を下してみたので、勿論廿八年頃の牡丹の句にも實景實感を描いたものもないわけではない。

一方古句に倣ふと共に、彼はまた新發明を志してゐる。このことも一生を通じていはるべきことであるが種々なる變化を試み盡し、技巧の發達がある程度まで、否ある極點にまでなしとげられたと言つてもよい、この頃になつては、特に漸く新しいものに着目する要求に驅られたのであらう。

夏帽の白きをかぶり八字髯　　夏帽や吹きとばされて濠に落つ

夏帽も取りあへぬ辭誼の車上哉

等、「夏帽十句」を作つてゐる。內容的價値は重んずべき程の者ではないが、新題を取扱つたといふ點は注意されねばならぬ。

今の新傾向の俳人は、俳句の十七音を標準とする形式的規範を根本的な錯誤であると認めると共に、それよりももつと俳句に必須な内容的條件とされてゐる「季題」に準據する句作も、習慣的であるとして、俳句形式や季題から全然解放され、純な創作欲動の赴くまゝに、眞實に直接に、自己を表現しようといふのである。季題が先にあつて、それに據つて作らるべきものではなくて、自然詩人の端的な眞實な時には、必然的に季感は含まれるであらうが、それは作品にあらはれる單なる結果であると考へるのである。而して季題に從つて句作すれば、常套的な陳腐なものが必然的に作られざるを得ないといふやうな考は屢々彼等によつて繰返されてゐる。併したゞ多數の俳人はなほ「季」を俳句の特殊的な根本條件として、何らか之を肯定しようとしてゐる。併し季題に餘りに束縛される事は、純粹の要求からは耐へ難い所で、「季題」を擴張し自由にして、或は「季感」等と云ふ名稱で呼んでゐる一派もある。子規は上述のやうに新題は自らも作り、認めてゐるし、又過去の季題をも整理し、多少の改革を加へようとしてはゐたが、大體多くの疑問も抱かずに之を肯定してゐる。俳句では蟬を夏とし、蜩を秋としてゐるが、今年梅雨晴の夕しきりに鳴き立てるので、何かと聞くと、蜩だと云ふ。實地の研究が足らず、書物にばかり頼ると、かういふ間違つた季題に氣付かずにゐるといふ意味の言を述べ、

ゆ ふ べ 〳〵 ひ ぐ ら し 鳴 い て 秋 近 し

等とつくつてゐるのに、この年のことであるが、慣例となつてゐる季題に全然盲從しようとするのでなく、誤を正したり、新題を加へたりする程度の考であつた事は、これらによつても知られるのである。

さて「夏帽十句」の如き、「一題十句」といふことを、この年は盛にやつた。それは新花摘をみて蕪村の句が一題七八句を同じ日の中に書いてあるものが多い所から暗示を得て始めたもので、例の牡丹の句等が、その最初の試みであつたらしい。

俳句の形式に對する彼の考は、卅年頃までは出來るだけ字餘り等を多くして内容上の複雜變化を試みねばならぬといふ樣な、時には俳句の定型を否定するやうな極端な議論をしてゐる。季題に對しては、不平なく安んじて疑問を挾まなかつたに反し、俳句形式は積極的に否定し破壞すると云ふやうな意見を出してゐる。然るに卅二年一月發表の「俳句新派の傾向」の結論には、俳句定型の價値を認め、複雜とか印象明瞭の諸點は極點に達したといふ意味を述べてゐる。子規自身の句もおそらく廿九年、卅年頃が、複雜とか印象明瞭とかをめざし新趣向新材料を取り入れようとした頂上だつたとおもふ。卅一年頃にはすでに餘程態度が變つて來たやうである。

一々詳說は出來なかつたが、廿九年から廿九年まで彼の俳句は順當な成長をなしつゝあつたもの、作句力旺盛で色々古調の摸倣もし、變調異體を試みもした。寫生の技量は段々進歩したにはしたが、まだ材料を廣くするとか、言葉の上の興味にひきづられ、單なる誇張に終つたりしたものも少くない。外廓を飾つてゐて藝術の殿堂へはのぼり得なかつた觀がある。華やかな技巧はあるであらう。併ししみじみとする實感を以て心にせまる者に乏しい。實にまだ古人の調を十分蹴脱し得ない、摸倣期にあつたと言はざるを得ない。卅年代に入つて、かういふ點が徐々に除かれ、自己の藝術のひかりがかがやきはじめる。

第三節　自己確立時代

子規は「明治三十年の俳句界」（三十一年一月「日本」所載）の文中に、

> 彼の俗宗匠派なる者との關係に至りては之を論ずるの必要無し。彼等は作る人を異にし、作る物を異にし、作る目的を異にす。近日俳句の流行につれて各地新聞往々宗匠派の俳句を載す。俗氣滿紙、陳腐相倚る。しかも新聞記者先生、玉石を區別する能はず、燕石を襲藏して珍となす。殊に笑ふべし。

と、豪語してゐる。碧・虛其他自己の周圍の作家を括めて、ここに彼は新派と稱してゐるので、「俗宗匠」と稱したのは、單に所謂舊派宗匠のみを指したものでなく、子規派以外の者を總括的に貶した言葉と考へてもよいのである。かういふ彼の獨善的態度や强烈なる自信は、此時にはじめて生れてきたものでは無い。かうした態度は彼の性格とも言つてもよい、强い根ざしを有してをり、俳句についての自信は既に、廿六年頃から持して離さなかつたものであるが、この時代に入つては、彼のかゝる自負を持ち豪語を放つ事をあやしまないまでに、彼及び彼の一派は世に認められて來てゐるのであつた。

卅年頃から彼は漸く自己確立期に進み、晩年二年許りの間に於て一つの圓熟した境地を拓いて行つたともいふのであるが、卅年以後の彼の俳句の辿つた道を一通り考察しようとする前に、彼が俗宗匠と貶した當時の俳壇について簡單にでも述べておかなければならない。

他の文學形式に於ても殆んど同樣であるが、俳壇は天保の俗俳以來何らの改革もなくして明治二十年代に

及んでゐる。その間の事情をあらためて説く必要もないのである。併しさういふ俗俳を弄ぶ人間は案外多かつたのであらう。明治卅一年三月、都新聞の俳諧十傑の投票には、老鼠堂永機・蕉雨庵蕉露・善在庵孝節・春秋庵幹雄・栞庵清雅女・風光堂菊外・新日庵琴雅・蹄香庵消志・桃支庵指直・不白軒梅年が選ばれてゐる。が、この種の舊派宗匠がなほ多く生存して、その多くは點料によつて生活をしてゐたのである。この都新聞の十傑投票を摸したのであらう、翌卅二年六月の太陽には「俳諧十二傑」の投票が發表された。それには、

老鼠堂永機　正岡子規　三森幹雄　尾崎紅葉　花の本聽秋　角田竹冷
巖谷小波　雪中庵雀志　大野洒竹　幸堂得知　内藤鳴雪　桂花園桂花

が當選してゐる。これは或程度まで俳壇の分布をみることの出來るものと思ふが、この十二家の中、永機・幹雄・雀志・桂花・聽秋の五家は所謂舊派に屬する人々である。而して明治三十年前後までに最も勢力のあつた舊派宗匠の尤なる者であつたといふべきであつた。聽秋は京都にをり、桂花はこの歳六月沒してゐる。他の永機・幹雄・雀志、この三人は何れも東都に住み、子規が俳壇に活動した當時に於ける最も有名な舊派の宗匠であつたのである。左に句だけ例示しよう。

○　永機

一月も三日過ぎけり樹にからす
菓子盆に拾ひそへたる牡丹哉
動く葉はうごきながらや暮の露

風一段雪雪を打つ椅かな

○　　雀志

騒がしき作はきのふや八重櫻
ほとゝぎす此大空に音のあまる
見るよりも仰ぐものなりけふの月
かたまつて朝を受取る千鳥哉

○　　幹雄

春の草昨日は今日のむかし哉
手も足も際のあきけり蚊帳の中
夕月は空にも闇のたき夜かな
吉野にて戀しや花の吉野山

これは改造社版「現代日本文學全集」中の「俳句集」に二十句づゝ掲されてゐる中のものであるが、說明する迄もない、何らの詩も意味もない、俗つぽいものである。かういふ俳句が多くの信者を有し、勢力を以てゐた時代であつたといふ事を特に注意してほしいのである。子規は廿六年に奧州旅行をした時、幹雄の紹介状を貰つたりしてゐるし、その頃は數回訪問したこともあつたらしい。又幹雄のことをつい先頃での「俳句作法指南」を評して部分的に異見を述べたことがあるのであるが、その中に「二十日の如く商販しきせる俳諧

者流の中より此一人現れ出で、同學者の汚點と淺識とを指摘したるの勇氣と見識とは、局外者の萬言を啖々するに勝りて愉快たるを覺ゆるなり。」と言つて、多少舊派俳人にもまだ敬意を拂つてゐることは注意すべきである。廿五六年頃は此等の人の影響も多少うけた點がみえる。その頃子規のかいた議論には、「發句作法指南」等から益をうけた點があるやうである。或點からいへば、これらの俳人は所謂月並の弊は免れなかつたけれども、廿五年頃の子規の俳句よりは、俗は俗ながら俳趣味を解するに似、又技巧にまさつてゐたといふことも出來ると思ふ。併し、革新的の意氣、清新な趣向、さういふものは全く求むることが出來なかつたのである。二十九年發表の「俳句問答」には、

問　老鼠堂永機翁は俳諧師中の大家と稱せらる。左の翁の句は名句なりや否や。且つ翁の俳句の位置は如何。「時鳥戀に寢ぬ夜の若かりし」「夕立の戻りの雲や夜の雨」「霜月やはじめて松の嵐山」「夕月やさすがに雲も捨てられず」「若楓ぬれ釜かけてうつらせん」

答　老鼠と言ひ永機と言ふ人幾人もありとばかり覺えて能く其人を區別せず。故に此句の作者は如何なる價値のある人か、はた如何なる作句を詠みしかを知らず。若しこゝに列擧したる五句に就きて見れば、盡く句法のしまりたるは多少の熟練を證せりといへども意匠は皆輕くして句に重み無し。若し此種の句のみならんには到底二流以下の俳家たるに過ぎず。右五句の中にては夕立、霜月、若楓の句など面白し。夕月は俗氣多く最も厭ふべし。

と書いてゐる。子規の當時の自信と舊派宗匠を如何に目してゐたかは、これによつてわかるのである。

かくて明治廿年代の後半期には新しい俳人が漸く輩出して段々舊俳の勢力は侵蝕されてゆくことになるの

である。私はここにこれら舊派宗匠の俳句を一々あげて貴重な紙面を汚す愚を敢てする代りに、子規の月並俳句觀を紹介する事によつて、此等の俗俳と子規の新派との相異の概念に觸れて置きたいとおもふ。

「月並會」「月並連中」といふ言葉は、俳諧上の用語として用ひられてゐたものであるが、詩味のない俗俳句又は詩への理解のない職業的俳人を月並の俳句・月並の俳人といふやうに子規等が用ひ、その用語例が擴大されて、つまらぬこと、平凡な事といふやうな意味に何にでも用ひられるに至り、やゝこれも今は月並になつてゐるのであるが、俳諧社會より一般大衆の用語にまで、これが浸潤したことは、子規俳諧の弘布、この一事を以て推すべきものであるとおもふ。

月並俳句といふのは、つまり非藝術的な俳句といふ事であるが、子規は歴史的に特に天保以後の句を目して月並調といふのが常であつた。「天保以後の句は概ね卑俗陳腐にして見るに堪へず、稱して月並調といふ。」（俳諧大要）明治の舊俳はこの天保調の範圍を出ず、却つて俗化したもので、明治の舊派俳人は悉く月並俳人で、到底お話にならぬと考へたのである。勿論新派にも月並調に近いものはあらう。作句の道程として月並俳句の門をくぐる時代はあらう。併し一般的には、舊派と新派との間には著しい藝術的差異があると見た。彼は新俳句と月並俳句の差異に關し、「俳句問答」の中に、新俳句の他の者は知らず、少くとも我が俳句について云ふと、

第一、我は直接に感情に訴へんと欲し、彼は往々知識に訴へんと欲す。

第二、我は意匠の陳腐なるを嫌へども、彼は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、寧ろ陳腐を好み新奇を嫌ふ傾向あ

り。

第三、我は言語の懈弛を嫌ひ、彼は言語の懈弛を嫌ふ事我よりも少し、寧ろ彼は懈弛を好み緊張を嫌ふ傾向あり。

第四、我は音調の調和する限りに於て雅語、俗語、漢語、洋語を嫌はず、彼は洋語を排斥し、漢語は自己が用ゐなれたる狭き範圍を出づべからずとし、雅語も多くは用ゐず。

第五、我に俳諧の系統無く又流派無し、彼は俳諧の系統と流派とを有し、且つ之あるが爲に特殊の光榮ありと自信せるが如し。云々。

等の相異を認めと言つてゐる。これは單に彼の月並俳句の概念を示すにとゞまらず、廿九年當時に於ける彼の主張を明かにしてゐるものでもある。月並俳句について部分的に論じた事は度々であるが、「試問」に月並調の本尊である梅室・蒼虬の月並的要素をやゝ細かく論じてゐる所等に、その總括的な見解がみられる。虚子一派の俳人は、大正五年から六年にかけて、「ホトトギス」誌上に、「月並研究」を十三回に互つて試みたが、その第十三回に、結論的に、月並を解して次の如く言つてゐる。

先づ口合ひとか駄洒落とか、穿ちとか謎とかいつたやうな所謂低い程度の人間の智識に訴へた類のもの、道徳的な教訓を寓したもの、それから本統に趣味が分らず、只風流がるとか附焼刃的な興味を強ひて詠じた類のもの、又人間の感情を詠ずる場合でも、品のよいのでなく品の悪い下等なもの、若しくは非常にきはどいことを言つたり裏を掻いたりして人をアッといはす類のもの、大方さういふ性質を供へたものだと判つたのである。又一般の俗衆に分らす爲に成る可く普遍的であらねばならぬところから、従來古人の繰り返へし詠じ來つた事件をとつて來る。即ち陳腐な句を作る。た

とへば鶯を愛するといへば、誰も風雅なものとするところから得意に材料にする。唯其も鶯を愛すると言つたゞけでは陳腐だといふので——彼等も流石に陳腐を嫌つて——其に新味をつける爲めに下等の穿ち駄洒落等を持つて來る。

これは、子規の考と殆んど同様であるが、總括的で、解りよいので、引用した。これは直ちに明治の舊派俳句にあてはまるのである。新派の中でこの月並臭の多い派もある。子規一派についても、個人的にみて月並臭の比較的多い少いの差はある。併しこの月並であると否とは、先づ第一に新派と舊派との差を物語るものである。

先にも引用した文に明かなる如く、子規は廿八九年頃には、もう幹雄や永機を二流以下の俳人と目するやうになつてゐる。一般に弘布してゐた點では舊派の勢力はまだ新派以上だつたのであるが、藝術的生命の稀薄のものであることは、新派の勃興によつて明かになつてゐたのである。新たに擡頭した若人の群の中で、最も革新の意氣に滿ち藝術的精進を續けたのは、言ふまでもなく、子規を中心とした人々であるが、この外筑波會派・秋聲會派等の新派の幾つかの團體が既に起つてゐた。それらについて一言しなければならない。

「俳諧又聞記」(明治廿八年、十月十一月女學雜誌、岡野知十)には、いち早く秋聲會の發企を報じ、

會の主趣は風調の新舊、門派の異同を問はずといへり。即是舊派・調和調、新派(註一)、若くは連俳派、非連俳派、各その長じゝ所を以て會同を望むものなりといふ、角田竹冷戸川殘花主として之を發企す、これ所謂調和派の一層更に大なるものなり。

(註一)　知十は「俳諧風聞記」に於て、同心庵等人を新舊調和派と稱してゐる。

と言つてゐる。この秋聲會の機關誌として、明治廿九年十一月「俳諧秋の聲」が發刊されたが、その創刊號に角田竹冷は「聽雨窓漫語」を執筆、秋聲會の起原・目的等を明かにしてゐる。今その二三を引用すると、

一、我秋聲會はなるべく廣く俳諧を研究せんとして起れるものにして詞調の新古及び世に云ふ門派の異同は問ふ所にあらず偏に詞海の狂瀾を既倒にかへし琴柱に膠するの陋見を去りて眞の風雅を振ひ興さん事を期するものなり故に妄りに毛嫌ひするを許さず。

一、去る廿八年十月五日發會し今日迄に俳席二十六會出席する者恒に十五名より廿七名とす發句に長ずるものあり連句を得意とするものあり發句連句ともに爲すものあり何れも天狗にして曾て他人に下らず故に說を鬪はして大に衝突する事あるは平常にして毫も之が爲めに萬事を妨げず是偏に道に親切なるが爲なり。

一、此趣味にて俳諧を研究するは種々の便利あり文學に長じて俳諧に淺きも自身は大家たり俳諧に熟練して文學に淺きも亦自身は大家たり有體に云へば實力よりは先きに名高くなりて弟子にもなりがたき人もあるべく熟達の割には學乏しくして知つたふりにて模糊に過ごすもあるべし然るに是等の人々一堂に會して討論研究せば相互に理解して自家の短所を補ふ事を得而して猶依然と天狗たるには妨けず豈可笑からずや。

一、道をおもふの眞人は好んで相互に白眼視すべきにあらず既によしとの點を見出せし上からは何人の手を假りてなりとも其趣旨の廣く世に行はれん事こそ希ふべけれ爲すを得ば料俳家の泰斗とも云はるゝ人々の早く大に悟りて勇決し此心もて先に立たば蓋し稗益する所多からんされど結局其人は得がたからんか已なくば其等に拘らず近時の達人と共に論ずる所の欠點を注意し信ずる所の素志を貫徹せん。

等と書いてゐる。これによつてもわかる如く、一つの主義主張の下に統一された團體ではなくて、俳諧の同

好者が集まり、自由に研究し、所信を把握して俳道の進歩に資しようとするにあつた。左に長所を取つて進めばよいのであるが、お互天狗の鼻のつきあはせで、單に趣味的の集りに終るやうな弊があつた。

「秋の聲」第二號、雜報欄に「秋聲會員の職業」といふみだしで、（在京）

裁判官	二人	辯護士	三人	小說家	二人
宗教家	一人	市會議員	一人	市參事會員	一人
帝國大學生	一人	專門學校生	一人	俳諧師	二人
官吏	二人	【脱】人	一人	著述業	二人
新聞記者	二人	【軍】員	一人	洋畫家	二人
果物問屋	一人	醬油問屋	一人	農	一人
無職	一人	〆廿八人——十九種			

といふのが出てゐるが、秋聲會に關係した主なるメンバーをあげると、角田竹冷・尾崎紅葉・岡野知十・伊藤松宇・大野洒竹・戶川殘花・巖谷小波・森無黃・田村黃雨・瀧川愚佛・鶴澤四丁・板倉醉月・川村烏黑・其他數氏で舊派から桂江・澤龍も加はつた。「秋の聲」創刊號の「秋六十二句」中より重なる人々の句を見本として掲げておく。

初秋　はつ秋や弓の押手のたしかなる　愚佛

踊　月あかし踊の稽古川向ふ　無黃

角力　夕月夜顏の中の角力かな　醉月

天下泰平嶋又十日の角力かな　四丁

露　淺野千里露萬斛の朝かな　小波　　蟋蟀の暮露装束の勅使哉　酒竹
秋雨　秋雨の庭に灯ともして眺めけり　紅葉　　霧　朝霧や既に喉燒く木曾の宿　殘花
蓼穗　摺鉢の果や穗蓼の枯れ處　黄雨　　蜻蛉　蜻蛉や御成街道つうい〳〵　烏黒
秋暮　我庵は隣持ちけり秋の雨　竹冷

秋聲會の中心となつた竹冷は、政治家實業家として知られた人であるが、明治十二年「報知新聞」に俳句を掲げて以來俳句に關心をもつてゐたといふから、明治俳壇に多少とも新しく新智識を注入した人としては最も古い一人である。俳諧風聞記の著者が「新時代に屬する新人物にして、臺閣の上、江湖の間、俳諧を嗜むと稱するもの概ね此一味ならざるはなし、（角田竹冷の如き亦其一なるべし）今も尚此徒多し、若し復興俳諧を以て書生俳諧と冷評せば、此徒の俳諧は御前俳諧、旦那俳諧、隱居俳諧の嘲罵を免れざるべし。」と評したのは、或點まであたつてゐよう。竹冷等が秋聲會を起したのには、子規派等をも牽制しようとする意圖もあつたが、「元來が新舊の人物を集めて、新舊調和を試みやうとした、竹冷氏最初の考案は、今思へば間違つて居た、人を集めたからが只だ芋の子を桶の中で洗ふ樣なもの、同化するわけがない。」（俳聲第一卷第五號（明治卅四年六月）所載、知十の「秋聲會論」）結局知十の所謂「閑俳」に終らざるを得なかつたのである。しかし秋聲會は倶樂部式のもので、團體として一つの強い新潮流を產み出す事は出來なかつたとするも或は俳諧研究に於て、或は雜誌發行によつて、後の俳壇に何者かを寄與した點は爭はれない。

尾崎紅葉は明治前半期に於ける小說作家として最も著名な一人であるが、俳諧史上にも逸すべからざる一

人である。「俳諧風聞記」には、

正岡子規は復興俳諧の一傑なり、其「日本」に依りて俳名の世に騒ぐや、紅葉、人に語りて曰く、獺祭書屋主人とは正岡子なるか、己れ曾て子に俳諧の喜ぶべきを説きしことありしが、幾くならず子規の名俳諧壇上に喧し、亦一文才ならずやと、子規果して紅葉に聴きしか、紅葉果して人にかく語せしか、事の實否は知る處にあらず、世の風聞は暫く傳へられたり、假令風聞は誤りたりとするも、紅葉已に新俳境の前登者たるに疑ひなければ、子規が俳諧に於て之を紅葉に聞きたり‖間接‖とするも不可なき也。

とあるが、後、卅五年、俳諧風聞記其他を一冊にまとめて刊行した時は、序文に、

「俳諧風聞記」は事の上に間違もある、一例をいへば子規が紅葉に俳句を聴いた抔いつたやうな外、觀察にも、評論にも今日の所見とは大分ちがつて居るところが多い。

と言つて、訂正をしてゐるのであるが、少くとも「俳壇の前登者」といふ意味では、子規に先んじてゐたのである。江見水蔭の「自己中心明治文壇史」の文章を借用しよう。

森川町時代に初めて俳句の研究を始めた。それをむらさき吟社と呼んだ。紅葉の説で「俳諧は實に觀察が鋭く、寸句で非常に力の強い云ひ廻しをする。之は小説家としても學ぶべくして、移して以て文章を練るに資す。」と云つた様な意味であつた。

最初の課題が「櫻」と「田螺」とであつた。

挨　拶　に　何　と　云　は　う　ぞ　初　櫻　　　　　[illegible]

部歌や或る山寺の初櫻　水蔭
ゆるせ〳〵寡婦の家の初櫻　眉山
物言はゞ一枚をきらむ櫻花　柳浪
末社にもこぼれ錢ある櫻哉　九華
腰のして老も若やぐ櫻哉　虚心
劍拔いて風きりまくれ家櫻　紅葉
叔齊が手を出して見る田螺哉　眉山
なきものを泥中の珠田螺哉　紅葉
籠に入れて飼へるものなら啼田螺　漣
打つて出て同じ枕の田螺哉　柳浪
繪の中に聲ありと見れば田螺哉　眉山

この樣に第一回は甚だ幼稚な句ばかりで、併し互選の際は議論百出、夜の更けるのも知らぬ程であつた。

紅葉が其頃の俳號花痩として「江戸紫」第十號に「新居吟」といふのを載せてゐる。

無情　裏枯や庭はともあれ藁所
塵良　初蛙は噂に聞きて豆腐かな
野興　朝炊や睡氣覺しの雁の聲
寡居　戀なくて淋しく立てる案山子哉

樂事（紫山人同居）下戸同士團欒はどうぢや後の月
俳境　影も無し森川町の秋の暮

「我樂多文庫」時代の紅葉は、まだ俳句に手を染めなかつたかも知れない。が、少くとも明治廿三年には彼を中心とした硯友社連中の紫吟社が起り、その機關誌「江戸むらさき」に紅葉の俳句は發表されてゐる。此の點では、廿五年に「日本」新聞によつてデビューした子規よりも、早かつたといふべきである。紅葉は作家としても一家をなしてゐた人であつて、秋聲會でも最も重んぜられたであらうといふことは、「秋の聲」の創刊號に「發刊の文」を書いてゐることだけでも肯けるのである。知十の例の「秋聲會論」の中には、

子は元來が談林から出て、其當時句は天明と元祿との中間に立ちて調和を試むるかのやうに評され得るほど折衷調和の傾向が見え、即ち詞調の上に、着想の上に特色があらはれて且その特色は小說から來たことが多いので着想が人事に傾いて居た。

と論じ、而もその獨特な句體に、他宗の同化をうけ易いと共に、他の秋聲會の人々も、紅葉の句體の吟味などをしないで勝手に作つてゐたため、紅葉の調といふものも、結局秋聲會に働きかける力はなかつたといふ意味のことを言つてゐる。（彼の俳句について、ここに品騭することは避ける。）實に彼は獨自なものを有し秋聲會中では特色のある作家ではあつたが、天狗揃ひの秋聲會を指導する傾向を導き出すことは出來なかつたのである。

伊藤松宇は早く「椎の友」を結び、子規や鳴雪と交遊のあつたことは、既に述べた所である。

松宇子の俳風は田園退閑の目に、印行以外書幅等に散見する句を拾集して、蕪村外門家の句集を補つて、あの五俳集を編するといふほど、マジメに俳句を研究して、其妙味を旨しとする俳家で、大分例の秋聲會一列の門俳諸先生とはゆく樣がちがつて居る、殘花氏が梅室の聯句集を携へて居るのを見れば、松宇子は何故にそんな俗書を携へるかと難じたくなるといひたく、萬事がすべてそれである。云々（知十の「秋聲會論」（下）――「俳聲」第一卷第六號所載）

と、知十が、その研究的態度を認めてゐる如く、彼は秋聲會中でも地味な眞面目な俳人ではあつた。酒竹等もかゝる研究家として有力な一人であつたが、これは、むしろ「筑波會」の人として述ぶべきであらう。知十の言葉に從へば、「竹冷紅葉兩家ばかりではない、愚佛子の研精なる、黃雨子の老實なる、無黃子の該博なる、」各主張と特色を持ち乍ら、皆各一個にとゞまつて、會全體を同化する力はなく、各自思ふがまゝに句をつくり、思ふ方向にあるいて行つたゞけである。ここに秋聲會の特色もあり、又それが俳壇の支配的な力とならなかつた缺所でもあつた。

筑波會

筑波會といふのは、大野酒竹や佐々醒雪等を中心として、明治廿七年十月、起つたもので、大學派とも呼ばれたものである。近藤泥牛編の「新派俳家句集」には、

在東京帝國大學若しくは今大學に關係ある酒竹、崖東、愁々、臨風、嵩雲、紫影、醒雪等の諸子によりて設立されたる所謂大學派なるものなり、先に醒雪專ら同會を支配せしが同子仙臺に下りて奧羽百文會に雄を振ふにより酒竹子代りて主任たるの傾あり。云々

と記されてゐる。

佐々醒雪は作家といふよりは研究家といふべく、後、近世文學の研究家として著はれたが、既に高等學校時代から俳句に關心をもつてゐたことは、碧梧桐が第三高等學校時代（廿六年）に校友會雑誌に俳句論を書をかいた時、編輯當事者だつた醒雪等の問題になつて、議論を上下したことがあると回想してゐるに徵しても明かである。が、筑波會に最も力を盡し俳句に熱心だつたのは、醫科に學んだ大野酒竹であらう。けれどもこの人は俳書蒐集家としては記憶すべき第一人者で、子規の「俳人蕪村」と殆んど同時に、すでに「與謝蕪村」の書をあらはし、又「俳諧文庫」の校訂に携はる等、史的研究には大きな貢獻をしたが、俳家としての特異性には特に優れた點は認め難かつた。筑波會の人々は、何れも研究的態度に於ては、秋聲會よりもゝ統一を保ち足並を揃へてゐたとは云ひ得ようが、作家といふ點からは、却つて秋聲會の多士濟々たるに及ばなかつた觀さへある。

之を要するに、所謂舊派の俳人の作はつまらないものであるにしても、未だ俳壇には舊派宗匠の勢力分布が廣汎にゆきわたつてゐる一方、たとへ一致結束の力は弱く、句作に對する熱心に缺ける所があつたにしても、秋聲會や筑波會の連中が、子規派に對抗して俳壇に進出しつゝあつたのである。

子規一派の俳句團體は普通根岸派とか日本派とかホトトギス派とか呼ばれてゐる。子規が根岸に住し、そこで句會等が行はれたといふ意味では根岸派であり、「日本」新聞に子規が俳論・俳句を發表し、その文苑に「俳句」を募集して俳壇に勢力を得た點からは、日本派と稱すべく、又雑誌「ホトトギス」によつて、後の一

派が活動したことからはホトトギス派と言つても差支ないのであらう。併しホトトギス派の稱呼は、彼の死後も繼續的に使用され、現在の「ホトトギス」に據る人々迄をも包括して用ひられ得るから、誤解を招き易い。それはとにかく、主として「日本」新聞に據つて俳壇によびかけた子規の聲は、俳壇改新の曉聲として最も魅惑的な強い叫となり、年毎に共鳴者を加へ、漸く俳壇を支配しようといふ勢を示して來た。「明治二十九年の俳句界」と題し、三十年一月から三月にわたつて、子規は長々と自派の俳家を批評し紹介したのであつたが、その中にあげた俳人は、

鳴雪　碧梧桐　虚子　飄亭　紅綠　漱石　露月　四方太　霽月　極堂　牛伴
把栗　墨水　蒼苔　肋骨　共村　東雲　左衞門　別天樓　繞石　秋竹

等實に多子濟々である。

雜誌「ホトトギス」は明治卅年一月、子規の了解と援助の下に柳原極堂によつて、松山から發行されたのであるが、翌卅一年八月卅一日發行の二十號を最終として、十月からは虚子の手によつて東京から繼續發行されるやうになつた。この間の事情は、子規の書簡や「ホトトギス」に發表した文によつて大凡了解出來るのであるが、又極堂が「同人」の「子規居士三十週忌記念號」に發表した「松山回顧」の文や虚子の回想記や小說「俳諧師」等によつて更に明かにされてゐるのである。ここに詳說の煩を避けるが、しかし「ホトトギス」の發行及びその流布は、明治俳諧史上に重大な關係を齎してゐる事は注意すべきである。卽ち「日本」新聞によつて漸く俳壇に勢力を得つゝあつて子規派は、「ホトトギス」によつて更に廣く深く勢力を扶植した

のであつた。子規の作品及び主張は、この機關誌をもつと否とに拘らず、ある軌道の上に成長のみを辿つたであらう。が、少くとも彼及び彼の一派が對世間的に躍進するためには、「ホトトギス」は重大な任を果したものと言はなければならない。

子規の「俳句全集」には廿九年に三千句以上を錄してゐるのが、卅年に至つては、千五百句足らずに下つてゐる。作句數の少くなつたことは、小說を書いたり、新體詩に熱心したり、和歌革新に着手しようとして歌の勉强をしたりしたことが、最大の原因であるが、「日本」以外「ホトトギス」にも俳論をかゝげ撰句を擔當したりして、相變らず俳諧につとめたのである。翌卅一年からは、歌の改革にむしろ大きな努力を捧げて、歌論を草し歌をつくつたのである。而も病も漸く重くなつたがため、俳句の作品は一年毎に少くなつたのである。

彼は決して俳句に力を注ぐことを生涯とゞめなかつたが、卅年頃からは、他の方面に活動の天地を求めんとして、卅一年以後は俳句よりもむしろ和歌方面に力を用ひたのであつた。一方からいふならば、俳句方面に於てはある點まで成功し、碧・虛を始めとして多くの秀才を出してゐるので、その方はやゝ自分の力を離れても大丈夫だといふ安心を得たので、年來心がけてゐた歌の方面に立向つたといふわけであつたのだ。けれども彼が歌の方面に專念し出したといふ事は、また俳句に於ては種々の試みもして、ゆく所まで行き盡しもはや努力しても何程のことも出來ない。作家としても碧・虛等の開拓する境地に却つて自分が追從してゆかなければならないといふやうに考へ、一安心と一挫折が彼に來たのであるともいひ得るのである。

彼は三十年頃を境界として、自己の句を二分して、俳句への熱心さは幾分うすらいだやうに見える。この觀察はあたつてゐると思ふが、併し、そのことは彼の俳句の價値の問題とは自ら別である。

嘗て荻原井泉水は「若き俳句作者出でよ」の文に、子規系の歌人と俳人の立場の相異を論じ、次の如く言つた。

正岡子規は俳句を作り、且つ短歌を作つてゐた。子規の門下には俳人の外に伊藤左千夫氏、故長塚節の如き歌人もあつたが、其中で短歌を作る人と俳句を作る人とは其氣質や性格が違つてゐたやうである。それが子規といふ一人に依つて融合統一されてゐたのは面白いが、子規自身は短歌を作る時と俳句を作る時と、其態度が相違してゐた樣に私には思はれる。子規は歌を自己の内からの生命の發動に依つて作つた。然し俳句を作る時には外に向ふ趣味の誘引が混じてゐた。病床の子規にあつて歌は堪へがたい心の叫びであつたが、俳句は痛ましい心を鎭める爲めの慰めであつたらしい。題材といふ點から見ても子規は客觀的な景象は俳句に、主觀的な感情は短歌にと作り分けてゐた傾きがあつた。で子規が病床に籠つて客觀的な景象としての新しい印象に接する機會が稀になつて以後は、句作の材料としては、古い旅の追憶や想像的な景色より外になかつたので、晩年の句にはフレツシユな味が乏しくなつてゐる。此の子規の句作の態度が子規から弘められた廣い意味の新派俳句に踏襲されてゐる。即ち俳句といへば趣味的に作るもの、慰めに作るもの、客觀的な取材を主として想像的に架空的に作つて差支ないものと考へられる樣になつた。其間に近代の短歌は益〻趣味を離れて生命に、慰みでなくて叫びに、想像的架空的でなく、現實的生活に肉迫して行つた。で俳句を作る人と短歌を作る人と、其態度の相違が截然と分れて來たのである。

この見解も一つの見方として或點までは聞くべきであらう。井泉水の作句に對する不滿からは、かういふ

意見が吐かれたこともつともだとおもふ。が、やつぱり我田引水のきらひはないであらうか。

子規が晩年に短歌を作る時には生命的なものに、俳句を作る時は趣致的なものにと向ふと云ふ程劃然と二重の態度をとつたと解するのは、極言しすぎてゐる。幾分さういふ傾向がみられたといふ程度に解したい。俳句は客観的な材料を盛り、和歌には主観をうたつたといふのも、俳句と和歌の性質の認識から多少意識的にも、その傾向をあらはした點は認めていい。又直接自然の景象に接しなかつたから俳句にフレツシユの味に乏しいと云ふことも一面いはれよう。しかし和歌の取材としたものも所謂自然の景象を主としたのであり彼の俳句には晩年却つて空想の句が少く實感によつてゐることを見逃すことは出來ないのである。井泉水の議論は認識不足か御都合主義の所がある。井泉水の議論を補充敷衍するならば、子規の短歌は俳句より本質的にすぐれてゐた。又俳句も晩年よりは却つて句作力旺盛な頃の方が優れてゐたといふことにならざるを得ないのであるが、彼の短歌と俳句は各長所短所があつて、さう簡單に一律に決定出來ないのである。一首一句の上についてこそ優劣は指摘出來はすれ、短歌と俳句の總體からみた價値といふやうな問題は、かなり空漠としてゐる。短歌を上とする人、俳句をすぐれてゐたといふ人、意見は區々であるが、常識から言つても短歌・俳句を同一線上に置いて眺めておほよそ差支ないのではないか。兩者の優劣といふ問題が結局とりのこさるとしても、先づ兩者を平等の水準から見るといふ方面が閑却されてはいけないと私は思ふのである。

井泉水等の考へ方からすれば晩年（或はもつと後までもいい）以後の俳壇をゆきづまりとみることもできたものであるが、一種のゆきづまりではあつたが、そこに立つて彼は自己を見出したものとおもふのである。

作品が少くなつたのは、他に力を注いだといふ以外、病苦の關係もあらうし、病臥して實景に接する機會が乏しかつた事にも原因はあらう。昔日の如く一時間に五十も百も作るやうな旺盛な句作力はたゞなつてゐた。病氣で苦しんで寢てゐては句作も出來ない。一つの句に卅分も一時間も苦吟することもあるといふ風にホトトギスの消息欄などに訴へてゐるが、一面からいへば確にゆきづまりとも見られるのである。無暗に新題材を捉へようとし、新趣向を凝らさうとして、句法上字餘りや種々の異體を試み、その試みはゆく所まで行つてしまつたのである。その間には古人の句法や意匠を研究し參酌し、これを採用したといふよりも摸倣し盡したのである。結局これ以上あせり進むことの無駄を感ずるやうにさへなつたらう。此處に寸時の停滯がある。私は子規の卅年から卅二年頃までを、かういふ意味の停滯と觀る。けれどもこれは子規にとつて決して不幸な事ではなかつた。落ちついて自己の句作道程を顧る餘裕を生じたであらう事だけでも無意味ではなかつたと思ふ。實にこの時期に於て彼は自己を見出し、自己の特色をより多く發揮してきたのである。豫定より俳壇方面の事の叙述に長くなつたので、二三例句をあげるに止めて、他の機會に詳說しよう。

縁に出てたま〳〵蝶を見る日かな　三〇
山吹や小鮒入れたる樋に散る
椎の實をひろひに來るや隣の子
萩咲くや生きて今年の望足る
ちら〳〵と障子の穴に見ゆる雪

衣更て机に向ふ寫し物
雨だれの秋海棠にかゝりけり
おしろいの花に殘暑の日影かな
野分待つ萩のけしきや花遲き
鷄頭の黑きにそゝぐ時雨哉
芍藥に我生きてゐる今年かな　　三一
一輪の牡丹かゞやく病間かな
紙ににじむ秋海棠の繪具哉
霜見えて冬あたゝかやガラス窓
日のあたる硯の箱や冬の蠅

實景に即し靜かに吟じ、平淡にして至味を寓するの境地に入つて居るものが漸く多くなつてゐる。

（參考）本節では子規の史的地位を明にする爲、卅年頃迄の俳壇の狀勢に觸るゝ事少しく細かつた。俳句評釋物に出た史的研究や斷片的に諸雜誌に掲載された文章以外、單行本として出版された明治俳諧史の良書を私は未聞である。最近「明治大正俳句史」（井手逸郎著）等いふ書が出版されたが、推賞さるべき程のものではない。新派俳人紅葉・鍋十・小波・松宇・黄雨・四明・鳴雪・鳥黒・霽月・把栗・紫黄・竹冷・五城・虛子・碧梧桐・露月・青々・漱石・子規の二十家の評論を集めた中村某天著「明治の俳風」（明治四十年、□山書房版）等は便利なものである。

第四節　圓熟時代

卅年、卅一年頃はまだ意識的に努力して印象明瞭の句を作らうとしたり、所謂時間的俳句の複雜を求めたりしてゐた。概して古句の摸倣等は以前のやうに意識的に試みるといふ風は徐々になくなつてゐるが、また〳〵摸倣時代の痕跡をとゞめてゐる。然るに卅三、四、五年頃になると、意識的に努力してつくるといふ點が薄らぎ、思ひつきを、感情のまゝを放り出したやうな無雜作な所が多くみえるやうになつた。下手でも何でも自分のものをつくるのだといふ心持がみえる。勿論句作態度が全然一變したといふのではない。「柳に翡翠」の畫を見て作つたといふ、

翡翠の魚を窺ふ柳かな　　翡翠をかくす柳の茂りかな
翡翠の來る柳を愛すかな　　翡翠や池をめぐりて皆柳
翡翠の來ぬ日柳の嵐かな　　翡翠も鷺も來て居る柳かな
柳伐つて翡翠終に來ずなりぬ　　翡翠の足場を選ぶ柳かな
翡翠の去つて柳の夕日かな　　翡翠の飛んでしまひし柳かな

の如きをみても、廿九年頃から盛にやつた一題十句の方法で、たゞ捻くるといふ心持に多分に傾いてゐる。創作衝動の充實して抑へきれぬ感興が溢れ出たといふ類では無い。興味的といふ分子は、晩年の作にもかなり濃厚にあらはれてゐるのが多い。たゞ如何にも樂々とつくつてゐる。平淡にうたひ流してゐる。それでゐ

てやはり自分で言ひたいことだけは言つてあると思ふ。古人の摸倣をして艶麗な句をめざしたりした頃」は餘程趣が違つて淡雅な味を帶びてきた。句法上にも奇を弄してゐない。そこに相異がある。「蓮に翡翠」の俳句は、卅四年の作であるが、

こんな句の作り樣は、一時の戯れに過ぎないやうであるが、實際にやつて見ると句法の研究などには最も善き手段であるといふ事が分つた。つまり俳句を作る時に配合の材料を得ても句法の如何によつて善い句にも惡い句にもなるといふ事が此のやり方でやつてみると十分にわかる樣に思ふて面白い。

等と附記してゐる。この「戯れにすぎないやうであるが」などゝ言ふ所に、すでに四五年前の彼とやゝ異る態度を認めることが出來よう。配合趣味等も既に廿年代に自覺的に實行はしてゐるが、字餘りや異調を含んだ當時は、人爲的で、表現句法の妙所を悟らないかを思はしめるものがあつた。

卅年以後殊に晩年の一二年に至つて、摸倣と技巧を去り、平淡に叙し去つて、而も獨自性の豐かに發揮されるに至つてゐる。その二三の特色を記して、彼の辿り着いた晩年の藝術境を偲びたい。

雄健とか艶麗とか趣味から轉じて、平淡の味を好むに傾いてゐることが先づ注意を惹く。長い病床生活をして來た彼は雄大な天然の景象に接する機會もなく、華かな浮世の有樣には凡そ交渉がなかつた。又病氣を長くしてゐては、雄々しい心も華かな夢も、すべては實現性のない空想にすぎなかつた。而していつも自分の慘めな有樣を客觀し、つきつめた、張りきつた悲壯な氣分にばかりあつてはやりきれない。寧ろ安らかな平淡な境に心の安住を求めなければならなかつた。それは普通人にはたやすく得られない一種の悟りの境地であ

るが、彼は遂にそこに到達したのである。又かうも云へる。雄渾とか艶麗等は彼に於ては意圖的に計畫的に目標として進んだ事で、氣分を誇張し或程度まで自己を瞞着してゐたのだ。平淡の境地こそは人間としてむしろ自然な平常な態度といふことが出來る。雄渾なるべくして雄渾の句となり、艶麗なるべくして艶麗の句となる、極めて自然な感情の表現である場合は少くて、自己の感情を誇張し、古句の摸倣をして力めて雄渾や艶麗の句を作らうとしてゐた事が子規には多かつたのである。摸倣と追從と焦慮から、漸く落ちついた自己に復り、自己を欺かない正直の立場に立つた時、すでに自然な平淡な境地が拓け來るべきでもあつた。

　平淡はまゝ平板無味に終るのであるが、子規の晩年の作品は平板と思はれるものまでにも、作者の深い眞實を思はざるを得ない。作句技巧等を止揚して、自然に巧まず樂々と自己の境地をうち出したものが多いからである。藝ではなくて道・悟の域に到つてゐるからである。

五月雨や疊に上る青蛙　　蟬なくや五尺に足らぬ庭の松
四阿に日の影動く若楓　　干瓢の肌へうつくし朝寒み
秋の灯の絲瓜の尻に映りけり

卅四年中の作品より抜いたのである。「干瓢の」「秋の灯の」等は擬人的手法はありながら、自然な平淡さがある。

　空想的の作の多かつたのが、實感の作が段々多くなつた。興味的につくるといふ點はあつても、やはり實感を基調とし、眞に興味をかんじて、ほれ〴〵としてゐるのである。即ち實感を重んじ、實景に卽したもの

が多くなつてゐる。

年玉を並べて置くや枕もと　三四　病間あり秋の小庭の記を作る　三四
痩骨をさする朝寒夜寒かな　三四　書き終へて晝寢も出來ぬ疲れかな　三五
芍薬の衰へてあり枕許　三五

病臥の實景實感である。病氣の歌や俳句は、作者に對する同情から、鑑賞眼を全然曇らせて終ふやうな場合が多い。それはその眞實の叫びの前に、批評の餘地を見出せぬ程打たれるからである。即ち作者の眞實が讀者の胸に感動を波立たゝせたのである。病人は結局病人の句をつくつてゐればよいといふことになるかも知れない。

秋の蠅追へばまた來る叩けば死ぬ　三四　病牀のうめきに和して秋の蟬　三四
つく／＼と我影見るや蟲の聲　三四　ツク／＼ボーシ明日無きやうに鳴きにけり　三四
消えんとしてともし火青しきりぎりす　三四　筆先は二返り咲くべき花もなし　三五
我病んで花の句も無き句帖かな　三五　生きた目をつゝきに來るか蠅の聲　三五
首あげて折々見るや庭の萩　三五

子規は慘めな病苦に耐へてかうたつてゐる。號叫した後も、苦しみ通し、いつ死ぬかわからぬ間になつてはあきらめ乍らも、泣き言が自ら口を洩れることもあつた。その悲しみに堪へ自己を冷靜に客觀して却つて靜觀されることもあつた。死に直面した眞實の叫び、心を打つのである。これらの句の中には、技巧等を無

視した句があつたから、否み難い眞實と力とをもつてゐる。「ツクノヽボーシ明日無きやうに鳴きにけり」これ位なら出來よう。以前の彼なら、これらは露骨にすぎるとしてとらないであらう。が、彼の眞實であつたことだけは否定出來ない。「生きた目をつゝきに來るか蠅の聲」等に至つては、病子規子の嚴然たる實感の領域で、批評を超えてゐる。

秋の蚊のよろよろと來て人を刺す　三四

夕顔も絲瓜も同じ棚子同士　三四

といふやうに、擬人的手法はかなり多いのであるが、自分のさびしい心を自然によびかけてゐるとも云ふべく、全く自然の寂しさや自然のあたたかさを感じさせるまでに、自然と融合してゐる。單に興がつて擬人的に自然を描いてゐる樣でも、何かふくよかな内面の擴がりを持つてゐると思ふ。

新らしい言葉を採用しようとしたのは以前からであるが、晩年になると、樂々と自由に、たくまず言葉を使驅してゐる。ぽんと投げ出したまゝにさへ見える。斯ういふ點にも極めて自然さがある。

無花果に手足生えたと御覽ぜよ（蛙の置物の畫に）　三四

かぶりつく熟柿や髯を汚しけり　三四

棚の絲瓜思ふ處へぶら下る　三五

おくればせに蓬摘むなり彼岸過　三五

のやうな口語脈の言葉を、如何にも自由に自然にとりいれたものが多く、又

門に出て行軍を見る雪解かな　三四

花の中に運動會の圍ひかな　三五

煖爐たく部屋暖かに福壽草　三五

春の日や時計屋に立つ田舎人　三五

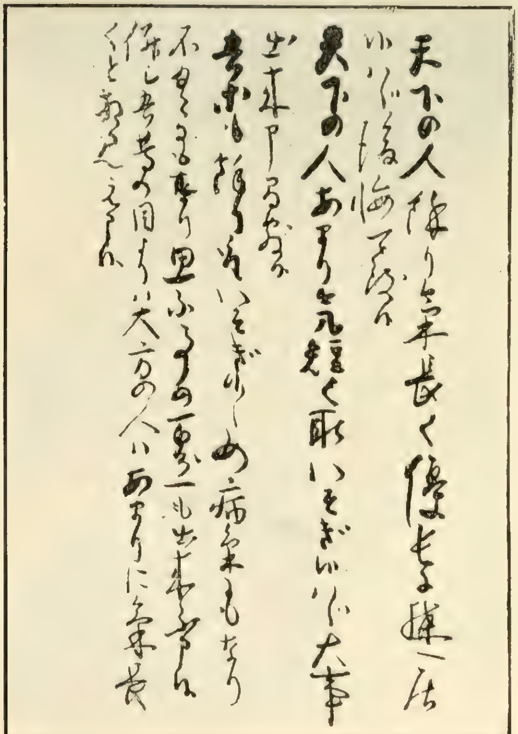
のやうな新語もどしどし、自由にとり入れてゐる。

卅三年から卅五年までの作を例句として、今まであげなかつたものの中から五首づゝあげておく。

春寒く痰の薬をもらひけり　三三　芽をふかぬ小庭淋しや下駄の跡
人をして毛虫とらしむ庭の松　筆ちびてかすれし冬の日記哉
菜の花や雨にぬれたる庭の石　氷嚙んで毛穴に秋を覺えけり　三四
雞頭のまだいとけなき野分哉　病室や窓あたゝかに秋の蠅
病間に絲瓜の句など作りける　西へまはる秋の日影や絲瓜棚
解しかぬる碧巖集や雜煮腹　三五　たらちねの花見の留守や時計見る
薔薇を切る鋏の音や五月晴　芍藥は散りて硯の埃かな
草花を描く日課や秋に入る

これらの句と共に、先に例示した句の中のよい部分を熟讀するならば、彼の晩年の境地の、實景實感に即し、平淡に赴き、自由自在のところにわかつていたゞけよう。

卅年頃までの俳句にも秀句は乏しくない。當時の他の俳人に比して遜色なく大家の貫祿を示してゐるものと思ふ。しかし一種の摸倣時代、練習時代で、まだ句をつくつた時代である。晩年に至つては、思ふまゝをうたつて、眞實な自己を發揮した時代である。芭蕉・蕪村以外、明治の俳聖子規の面目をあらはした時代である。





自畫像及び晩年の筆意

糸瓜咲て痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をとゝひのへちまの水も取らざりき

子規居士辭世の句として遍く知られてゐるこの三句は、實に境涯の句としてかなり優れた作である。興味とか趣味等云ふ程度のいかものでは無い。子規の句全體を眺めると、興味本位とか趣味とかいふ低度の、實感の稀薄な句の多い事は多少遺憾であるが、特に卅年頃以前の句に於てその缺點を感ずることが多かつたのであるが、かういふしみじみとした實感の句が晩年には餘程數を増して來てゐるのを見出すことの出來るのは、深いよろこびである。この糸瓜の三句等は一代の名匠の辭世吟として天晴なものである。「佛かな」の句等も子規ならではの感が深い。技巧ではなく、眞實の前に頭が下るのである。併し「をとゝひのへちまの水も取らざりき」が、句の價値から一番よいと思ふ。透き徹り、澄み返つた心、微かに細りゆくいのちの花火が、ぱつと一瞬輝いて、物の眞核を照し盡した趣である。

卯の花の里を氷のやけどかな

これは明治廿八年、征清の歸途船中で喀血し、神戸病院で臥床してゐた折、細い聲で口ずさんで、看病に來てゐた虚子から書きとつて貰つた句であるさうだが、後で、「死ななくてよかつた。もし死んだらあんな悪句が辭世になつたか知らないんだが」といふやうな意味の言を話したと虚子は記してゐる。子規の認める通り、これは上等の作ではない。

土一塊牡丹生けたる其下に

といふ句は、卅五年五月中旬病氣が革つて、死ぬ覺悟で辭世の樣な心持で書き殘したのだと云ふ。これなら先づ我慢が出來る。しかしを少辭世の句としての月並臭がありはしないか。彼の絲瓜の辭世吟には到底及ばないとおもふ。

「卯の花」の句と彼の辭世の三句との比較は、直ちに彼の初期の俳句と晩年の句の相異をある點まで暗示してゐる點はありはしないか。卽景的な輕い意味の敍景的な作に於ては、それ程著しい差をあらはさずにすむ場合が多いが、いざといふ場合、眞劍でぶつかつた時、眞の實力が斯く判然とした形で、あらはれてきたとは言ひ得まいか。

言ひ足りないが、晩年になつてとにかく、子規は自己といふものを漸く確實に把握し、獨自性のある昔を生みつゝあつた。退歩ではなく進歩の道程を踏み、完成に近づきつゝあつたといふことを認めたい。

彼の俳句は早く卅年頃までに練磨と集大成の功を終へ、晩年には自由に獨自の心境をうたひ、不滅の光を發してゐるものゝあることを認めたい。

第三編　歌人としての子規の業績

第一章　明治短歌史上に於ける彼の地位

正岡子規は明治和歌革新の事業に最も著しい足跡を殘した一人である。落合直文・佐佐木信綱・與謝野鐵幹を始めとして、新派歌人と呼びならされてゐる幾多の人々の辿つた道は、すでに數十年の歳月の流れた今の歌人達からは、色々の不滿も算へ立てられてはゐるが、直接現代の歌壇にもぬきさしのならぬ重要な影響を及ぼしてゐる。彼等なしに、彼等の開拓の勞なしには、現代の歌は考へられない。それは大きな歴史的役割を果したものと言ふべきである。就中わが子規は、中心を外れない確實な足どりで進み、一番根本的のものを掴み得たとおもはれるのである。

子規が歌界革新の叫をあげたのは、明治卅一年二月十一日から三月四日に亙り、十度「歌よみに與ふる書」を「日本」新聞に掲げ、二月二十七日から三月十日にかけて「百中十首」と題し、實作を發表した以來である。その年代から言へば、直文はもとより、鐵幹等よりも餘程遲れて歌壇の第一線に立つたのである。歌界に名乘りをあげる時機が遲れ、而も鐵幹一派の明星派の歌が、時代思潮に迎合し歡迎されてゐたため、子規生前は歌人として遍く認められるに至らず、俳人としての名聲のみが徒らに喧傳された憾がないでもない。子規沒後の歌界は、しばらくの間に幾變遷をしたが、彼の教を奉じ内に切磋怠らず、着々外に勢力を扶植し

つゝあつた子規系歌人は、大正に入る頃から漸く歌壇の中心勢力となる勢を示し、齋藤茂吉の歌集「赤光」（大正二年十月）があらはれて讀書市場に高く評價されるに至つた頃以後は、子規系のアララギ派は、完全に歌壇の支配權（註一）を獲得し保持してゐると言はれる程にまで發展した。子規を宗とするアララギの歌風は、多少の進展變化をしつつ、その後の十餘年間に歌壇に強力に働きかけ、自由律派・プロレタリア派・新感覺派・超現實派等々の諸派が蜂起した昭和歌壇に於ても、なほアララギの堅壘は容易に搖がない狀況である。俳壇の一部には、忘れられ、舊しとされる子規が、歌人の間には徹頭尊重されるといふ、寔も彼の生前の聲價を轉倒させた觀さへみられるのである。が、子規宗のなほ榮えてゐる現代の歌壇の情勢に照して、無理からぬ事と肯かれるのである。又彼の歌に於ける眞價が漸く今にして光を放つてきたといふのは、彼の本質にすぐれたもののあつたことを十分思はせるものでもある。

（註一）齋藤茂吉氏等は大正四五年頃をアララギの勢力の歌壇に浸潤し始めた時期とみてゐる。

彼の歌及び歌論を紹介し批評するに先だつて、少しく當時の歌壇を一瞥して、明治歌界に於ける子規の地位の樞要なことを明かにしておきたい。

新人の手によつて、明治の所謂新派の歌の鼓吹し始められたのは、二十年代の事で、それ以前の歌界は、殆んど德川時代の歌風の繼續で、沈滯萬套殆んど見るに足るものが無く、眞淵とか景樹とか、さういふ人々の糟粕をなめるより外、能のない人々ばかりであつたと言つてもよい狀態だつた。景樹の死後なほ日が淺く景樹系統が早く公卿搢紳の間に勢力を得た關係もあり、特に明治の宮廷歌人は景樹の流を汲む人が最も多く、

從つて所謂舊派歌人中では桂園派が最も有力で、中心をなす觀があつた。明治廿一年御歌所が復興され、景樹門の八田知紀に師事した高崎正風が、その所長となるに及んで、正に桂園派全盛の時を釀したのであるが萬葉を宗とし二句切短歌を鼓吹した海上胤平の如き、御歌所派及び他の舊派歌人を論難攻撃してやまない、果敢なる論客もあつた。が、新しい精神にめざめた者の口からは、それらはほゞ同小異で、

要するに歌よみの歌には感服すべきものなく、却りて歌よみならぬ人の歌に感服すべきものあり。その歌よみの歌に感服すべきものなきは、歌のために歌をよみて、そのまごゝろをうたはざればならむ。歌の道のために歎くべきことかな。

の感を起さざるを得なかつたであらう。所謂新派歌人は主として御歌所派を眼中に置き、之を論難攻撃の對象としたが、それは御歌所派の勢力が大きかつたためで、もし他に、より有力な新歌道の團體があつたならば、當然それに向つて論難の矢は放たれたに違ひない。今、手もとにある「東京大家十四家集」といふ薄つぺらな本から、所謂舊派の見本帖を提供しよう。これは平井元滿編、明治十六年の出版であるが、その附言として

此歌集は德大寺宮内卿より現今の歌人十四家に近き比より出たる得意の歌三十首つゝを書てよと所望有しにより各短冊に書てまゐらせたる歌なりそを宮内卿より天覽に備へまゐらせけるを云々

とある。實力の點から、又歌人としての聲望から、その作者の選定には異見はあるが、先づ當時の所謂舊派和歌の正體をみるには、不完全ながら、みなりに便利ではある。今各作家より三首宛を左に展べてみよう。

もえたれとうら若草の春はまた薄みとりなる野邊の色哉（若草）　　嵯峨實愛

諸ともに聞むといひし人よりも先に來て啼ほとゝきす哉（待客聞郭公）

身はふりぬ年はつみぬとわひなから猶此冬も雪を待かな（待雪）

○

思ふとち野山の花のしな定めつれ〳〵ならぬ雨のよは哉（夜春雨）　　山本實政

さやかなる月の出しほの子規聲の匂ひを見ることゝちして（月前郭公）

しら露を玉になす野の月影に身をあらはして狐なくなり（秋獸）

○

さら〳〵とわたるみ庭の河竹はよそより先に春風やこし（禁中早春）　　福羽美靜

すへらきの都の中にまとゐして秋もさかりの月を見る哉（中秋翫月）

うちつれて影もはしると見ゆるかな急く雲間の冬の夜の月（冬月）

○

かさゝんと思ひし花も鶯の木傳ふ見れはをられさりけり（花間鶯）　　黒田清綱

ほたるのみ窓の光とたのみしは此月影をしらぬなりけり（夏月）

きのふけふ衣かりかね音つれて秋風さむしをやま田の里（田家秋風）

○

道のへのしたりやなきの陰ゆけは袖寒からぬ春風そふく（行路柳）　　高崎正風

風ふけはたゝよひなから蓮葉の浮葉の露はこほれさりけり（荷露）
賤のをか苅後れたるおくて田に昨日も今日も降時雨かな（晩秋雨）

○

谷風にうきてたゝよふうすらひや流れし冬の行へ尋ぬる（春風解氷）
すみわたる心の水に流れきぬ冬より奥のさをしかの聲（鹿聲幽）
末つひにしつるゝ見れは吳竹の雪こそゆきを打拂ひけれ（雪中竹）

本居豊穎

○

たより行かけ橋よりも風わたる花の上こそ危ふまれけり（橋上花）
さみたれのをやまぬ頃は子規聲の絶間もあらぬなりけり（郭公數聲）
下染は露に任せてもみちはをこ染になすは時雨なりけり（冬紅葉）

鈴木重嶺

○

鶯はおのか囀りおもしろみ日の暮ゆくもしらすや有らむ（夕鶯）
千はやふる神田の森のせみの聲たかき夏にも成にけるかな（蟬）
仙人の千代のすかたと咲にけりやせたる谷のしら菊の花（谷菊）

間島冬道

○

心すむ草のいほりは春雨の音たにものにまきれさりけり（幽栖春雨）
ぬは玉の闇の夜風の吹さへはるかに見えて行ほたるかな（風前螢）

三田葆光

神垣の庭火はきえて朝ぼらけ杉の葉しろく積るゆきかな（社頭雪）

○

な月きていよ〳〵寒く成ぬれは春まつ外に待つこともなし（待春）　黒川眞頼

行水に枝をひたせる梅はきは咲まさるまゝに散まさりけり（水邊梅）

窓の戸をほそめに明て見つるかなあらしの後の冬夜の月（冬月）

○

山かげのあしたの庭の霜はしら立かへりても寒き春かな（餘寒霜）　池原香穉

白露の寒けかりけるゆふへより結ほゝれゆく蟲の聲かな（蟲聲幽）

哀れ世のうき瀬に沈む我よりも息つく鴉やまさりたるらし（鴉）

○

うくひすの今まて鳴し柳原いつのほとにか月はいてけむ（夕春月）　伊東祐命

秋夜を獨しるこそわひしけれまた長しとも人はいはぬに（夜初長）

下草のふきからされし木枯に松のやせたるこゝち社すれ（寒松）

○

青柳のかけ行水はみえねともかはつ鳴なりおほろ月夜に（月夜蛙）　小出粲

釣舟の影たに見えぬ波の上にたゝよひ渡るさみたれの雲（海邊梅雨）

山風に誘はれて行もみち葉のはうらさやかに夕日さす也（夕落葉）

○

松　波　資　之

若草のもえ出る春に成にけり心をのへにたれをさそはむ（春野）
山さとの若葉にやとる夕月夜涼しき物のかきりなりけり（山家夏月）
千代といふ事は白菊萬代のかめにさしてそ見るへかりける（菊）

なほ、明治十年六月出版の（註二）「明治現存三十六家撰」（山田謙益編）や、同十八年四月出版の「明治現存續三十六家撰」（豊島有常編）等の便利な一首撰をみても、當時の歌壇が大體どういふ狀體であつたかは想像に難くない。

（註二）齋藤茂吉は「現代日本文學全集」の「現代短歌集・現代俳句集」附錄の「明治大正短歌史概觀」中に、「三十六家撰」の歌を紹介し、又「短歌講座　歌史歌體篇」中の「明治大正和歌史」中に、「三十六家撰」及び「續三十六家撰」を紹介した。

當時の歌人は盡く個性味の無い、無自覺低級な作者であるといふやうな暴論を吐かうとするのではない。相當敬意を表していい歌人、才氣ある作者も認められないではないが、所謂新派歌人の出る頃までは著しい新天地の開拓が歌壇にみられなかつた點で、舊派歌壇を一括して、舊套墨守、言葉の遊戯に墮してゐたと言ひ得るのである。ここにあげた所謂十四大家の作品の如き者に、いつまで若い人々が滿足してゐられよう。歐米の新思想・新文學に刺激啓發され、文壇の情勢も頓に活氣を帶び、新體詩界は、十五年、外山・井上・矢田部共編の「新體詩抄」の譯詩集が出版されたりして、漸く草創時代を辿り始め、文藝界は、十八年に逍遙の「小說神髓」や「當世書生氣質」が出て面目を一新して新時代に入らうとしてゐる。和歌の改革も、小說

界・新體詩界・文學評論界等と共に、西歐のものをうけいれ再認識をすると共に、一方國粹保存・國體擁護の思想に伴つて活潑に目ざめた國文學隆興の機運に促されて起つてきたのである。新派の誕生は、いはゞ新思想と舊思想、西歐主義と國粹主義との合の子の觀があるが、この兩者の刺激影響が如何に結びつき、展開して行つたかといふ事は、頗る興味のある問題である。

「明治開化和歌集」（佐佐木弘綱編、明治十二年版、上下二冊）「開化新題歌集」（大久保忠保編、第一編、明治十一年版、第二編、十三年版、第三編、十七年版）等は題名の示す如く、新歌題の歌を集めてゐる。明治新政になつてから、さういふ方面に新を求めてゐた機運を察することが出來るが、唯新しい物の名を詠みこむといふばかりで、手法に於て作歌態度に於て、何ら新に價しないのであつた。叉諷刺の歌の流行の如きも、歌題を廣くしたとはいひうるかも知れないが、要するに歌のゆきづまりを打破しようとする一種の試みとは見られようが、歌壇のゆきづまりを示すものである以外、何ら新興の力をかんぜしめない。

明治二十年代に入つて、はじめて新機運が動きはじめたのであるが、その最初の一人として許されてゐる第一人者は、落合直文である。直文は「孝女白菊の歌」を二十一年五月發表してすでに喧傳され、彼及び小中村義象・萩野由之が合著編輯した「日本文學全書」の如きも、二十三年にはすでに發行されはじめてゐる、文學界にも存在を認められ、若い國文學者として事業的に意義ある活動をしてゐた。

一つもて君を祝はむ一つもて親をいははむ二もとある松

緋縅のよろひをつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山ざくら花

おのづから梢はなるゝ桐の葉のけさ目に見えて秋は來にけり

かういふ彼の歌の代表作も、すでに明治廿五年以前できてゐた。鷗外が廿二年「しがらみ草紙」を出すやうになつてからは、主にそれに作品を發表してゐた。廿六年和歌革新の目的で、淺嘉社をつくつた事は、詩歌史上忘れられてならぬ彼の事業である。淺嘉社は與謝野鐵幹・金子薫園・尾上柴舟・服部躬治其他多くの新派歌人の搖籃となつたからである。ここに直文の歌を品隲する暇を持たないのは殘念であるが、概して、御歌所派歌人等と同一視する事の出來ぬ清新さは認められるが、作家手腕に於て深く敬服する程のものではないとおもふ。溫雅な歌風ではあるが、それだけ人の心をアピールする魄力に乏しい憾がある。彼の歌其物よりも、和歌の新時代に至る橋渡しの役をしたこと、卽ち短歌の新氣運を導く人々を門下から輩出せしめた事に、主要價値を認めることが妥當であると思ふ。彼の友人、萩野由之の「和歌改良論」等は新派和歌論の第一聲として有名な議論であるが、さういふ歌論を自ら實踐せんと志し、周圍の人々を誘掖するに最も力を致したのが、わが直文その人であつたのである。

彼の門下の柴舟や薫園の活動が十二分に買はれたのは、子規や直文沒後の事だが、鐵幹は一等早く認められ、その活動はめざましかつた。廿七年には「二六新報」によつて御歌所派を攻擊し、自由放膽な歌を續々發表し、「東西南北」「天地玄黃」等の詩歌集は廿九年、卅年につゞいて出版された。市價はともかく、併し歌そのものは多くの價値を認めることは出來難い感がある。一言にいへば、古いものを打破し得てゐるかも知れぬが、未だ新しい價値あるものをうち立てゝゐない。心にこもる情熱も深思も無く、壯士的粗豪と衒氣

に満ち、幼稚な皮相な目新しさを追求する連中をよろこばしてゐたのであらう。

韓にしていかでか死なん我が死なば男の子の歌ぞまたすたれなん
韓にしていかでか死なんまだに死なば家の寶の太刀ぞ泣くべき
韓にしていかでか死なん今死なばみやび男とのみ世は思ふらん
韓にしていかでか死なん益荒夫の屍うづめんよき山もなし

この種の歌が歡迎されたことは、藝術其物よりも、時代と時代の思潮傾向によつて規定されたにすぎぬ。ともかく「鐵幹是ならば子規非なり。子規是ならば鐵幹非なり。」（卅四年）と、子規をして言はしめた程、子規の作風の理想からは遠いものであつた。卅二年、新詩社を組織し「明星」を發行して、晶子以下多くの歌人や新體詩人を育くんだことが、彼自身の作品の本質的價値よりも、遙かに大きかつたことを、ここでも認めなければならぬ。過渡時代にあらはれた者の悲哀である。石川啄木や北原白秋は「明星」から巣立つた最も特色ある歌人で、その作品の價値は、少くとも鐵幹の歌等に比し、遙かに著しくすぐれたものを、持つてゐると私は思つてゐる。

佐佐木信綱が歌壇で注目されるに至つたのは、直文や鐵幹等よりやゝおくれ、鷗外が「めさまし草」（「しがらみ草紙」の後身、二十九年）を發行するやうになり、主に同誌上に作歌を公にするに至つてからのことゝおもふ。勿論それ以前、新體詩作家として、和歌國文學上の編著者として既に世に普く認められてゐたのである。「思ひ草」（三十六年出版）は彼の最初の歌集であるが、その中には廿九年頃の作は殆んど入つてゐな

いやうだ。而して明星流の歌の影響もかたり多くなつてゐるやうである。作者は幼にして父弘綱に學び、學問研究に主力を注ぎ歌作上の努力や才のやゝ十分でないといふ憾はあるかも知れぬが、常に歴史に眼を向けながら、いつまでも新しい時代に隨伴して進まれようとする態度を示してゐるのは、敬禮すべきである。卅年頃の歌をみると、作歌にも心を傾けてゐたらうことが想像され、作品の上でも時代の先頭に立つてゐたことがわかる。子規のあの「百中十首」の歌等にも、この作者等の影響は見逃されない。「百中十首」の作の撰を諸大家に乞うた時、佐佐木信綱一人が贊成したといふ意味を坂井久良岐が書いてゐるが、當時の歌壇の狀勢を察すれば、首肯されるものがある。子規も、

近頃諸雜誌に見ゆる歌の中にて佐々木信綱氏の歌いちじるくまさりて見ゆ。めざまし草卷四に見えたるなど殊に善きが多し。

といひ、左の五首を擧げてゐる。

木葉散る南殿のあたり風たちて櫻をめぐる夕時雨かな
消殘るがすのともし火またゝきてちまたの霜に人影もなし
わきいづる雲を散らして足引の山の高嶺に秋風ぞ吹く
さゞれ踏む小鳥の聲も秋たけてわたらせ川の音の寒けさ
（註三）あしたつにのこれる仙人月清み月の都やさして行らむ

これらの歌によつて、同氏の當時の歌の如何な者であつたかは想像されよう。同氏の本領に歌學者として

でその方面で歌界に刺激を與へ貢獻してゐる所が大であるが、當時既に歌人として十分の力量があり、熱心に作歌の道を歩いてゐたのである。卅一年「心の華」を發刊し、多くの歌人を養成して現在に及んでゐる。

舊派歌壇の著名な數氏について略述したにとゞまるが、大凡當時の歌壇の分野も想像されよう。子規の推賞した平賀元義や橘曙覽達も、（註四）明治維新直前に物故した人であり、多少特色のあらはれた歌人は、所謂新派和歌勃興以前にも幾らも見出されるのであるが、先頭に立つて一世を指導するやうな役者は未だ登場しなかつたのである。丸山作樂とか天田愚庵とか福本日南等、日本新聞を通じて子規に關係ある人々の歌も、特異性があり、子規の歌にヒントを與へ影響を及ぼした點はみられるが、ここにはくだくだしく説明することを避けて、子規自身の作歌と立論の考察に入らう。

（註三）「あしたつ」の歌は「五卷」にのつた歌である。この他にも「めざまし草」誌上の信綱の歌に、子規は少々賞めてゐる。同誌上には井上通泰等も歌を出してゐたが、子規は餘り認めてゐなかつたらしい。

（註四）元義は慶應元年（六十六歲）十二月に沒し、曙覽は同四年八月、明治と改元される直前（五十七歲）で病沒した。

（參考）本章では、子規が和歌革新に着手する以前の歌界の分野を一瞥したのであるが、意をつくさない點が多い。明治短歌史の專書としては尾山篤二郎著「明治歌壇孤史」があるが、可成り杜撰な書で役にたたない。新潮社の「日本文學講座」には土岐善麿、「岩波講座日本文學」には土屋文明が書いてゐるのを始めとして、諸雜誌には斷片的研究も多い。殊に齋藤茂吉が改造社の物に執筆したのは注目すべきものではあるが、單に材料を提供し、而も資料も未だ十分整備されてゐない憾がある。

子規自ら書いたものによると、明治十八年井手眞棹先生の許を尋ねた時から歌を作り始めたといふ。夏、故郷に歸省してゐたとき訪問したのであらう。所謂普通の舊派歌人であつたのだらう。未だ眞棹については詳にしない。ともかく子規が少しづゝ歌を作つてゐたのは、この頃からで、俳句に於ける出發よりも稍ゝ早かつたのである。十八年以前の歌と想はれるものは二三にすぎぬ。

　　隅田てふ堤の櫻さけるとき花の錦をきてかへるらん

これは明治十五年七月卅一日附、すでに上京してゐた親友三並良宛の書簡に記されてゐる歌である。（註一）君の上京前、生れて初めての歌を作つたが、テニヲハも十分分らない、歌にもなつてゐないかと恥しくて見せなかつたといふ子供らしいことわりがしてある。幼なくはあるが、何となし純情といふものが動いてゐる氣がする。言ふべき心持はちやんと徹つてゐる。數へ歳十六の少年が、最初に作つた歌としては上乘の作といふべきであらう。

（註一）三並良の出京は明治十五年の七月中旬で、子規の出京に先だつ事約十一ヶ月前である。

生前自身集めた「手つくりの菜」といふ雜文集の冒頭の「書文人詩稿後」（改造社版全集第十二卷、三五九頁）の文章は、明治十七年に書いたとなつてゐるが、その中に、

　　月を見も人さま〴〵の心哉盆皿茶碗あるは四斗樽

といふ歌が載つてゐる。同文中の一節に、

思ひ〳〵の思ひを思ふ儘に言ひ出すこそ、ほんたうの詩人とも歌詠みともいふべけれ、四国猿の如何に人真似をすればとて、詩の中へは酒の字をいれざれば李白が承知せず、ほの〴〵と明石の浦の何のと出しかけねば人麿が違ひを取りにくる。蛙とか飛込むとか筆さきをまはさねば芭蕉が弟子入を拒むと思ふは誤なり。甘酒を飲んでも詩にもなり、ツケコトと明石の浦でも歌にもなり、ひきがころげこんだといふても発句にもなる。たとひ李白様や芭蕉様が日本にてはねつければとて、気打するにも及ばず、自分は自分で甘酒とでも、白酒とでも、何なり較なり、是非論なり、無論白酒なりの店開き、大夜揃きをするが宜し、何でも新発明と情死する覚悟で、古人の真似はせざるがようござる。

等とある等、戯作的文字の間に後年の俳句や和歌の革新の炎が燃え立つてゐる感がする。この歌はつまり見る所、楽しむ所は各々異ふ、人の好尚は萬態であるが、それで少しも差支は無い、といふ思想的意味が附随して作られたものであらう。この歌は、彼自身「謎歌」と称してゐる。た、上句が俳句らしい表現を持つてゐる點は、彼が俳句作者として立つた事に、ある暗示を與へてゐるともみられよう。下句もそく〳〵それでは謎歌であるが、しかし我無者羅の放蕩さに彼らしさは感じられる。

頑是なき子供心は様々をば聞かぬときの悟りなりけり

明治二十二年書いた事になつてゐる「修節」といふ文に、田舎に居る時は、身の周りの事等にかまはなかつたが、さすが東京へ来てからは、彼衣弊袴が気になるやうになつた。これは一種の精神的堕落だといふ意味を洩らし、四五年前書いた歌として右の一首をかいてゐるのである。道歌めいた、つまらぬ戯作だが、十七

八年頃の作であらう。實際の歌作は、他にいくらかはあつたのであらうが、十八年頃までの作で、目にふれたものは、これ位である。(註二) 十九、二十年の作も、殘つてゐるのはおそらくないのであらう。

(註二)　全集中の「竹の里歌」にも、十五年に「隅田てふ」の歌があり、次に廿一年度にうつつてゐる。

二十一年のものは、相當殘つてゐる。全集には六十三首收錄してゐる。書簡集には、

　　せかれては谷間の水の中々にいきほひのみぞいやまさりける

といふ一首が、友人の落第をはげます文(八月八日、大谷藤治郎宛)に書かれてゐる。又向島に遊んだ簡單な叙景文(「川の秋げしき」改造社版全集第十二卷、二六四頁)に挿入されてゐる歌に、

　　きのふ迄すゞしといひしあしの葉の風身にしみて秋や立らむ

　　今はたゞ名にしあひけり都鳥いざこと問んそのかみのこと

の二首があり、飛鳥山を散歩した時の「秋山行」(全集十二卷、三六六頁)と題した文に、

　　紅葉葉のあやにおりなす錦をばいつか我身の上に見るらん

　　のこすともつひに散るべきものならば紅葉の錦我も手折らん

　　うすくこく紅葉はゝそをこきませて野山は秋の錦なりけり

の三首が記されてゐる。又「別當のさき」(全集十二卷、一三六頁)の末に、

　　世の中になき名のたつや都鳥鳥に問へかしありやなしやと

　　いかにせんうき名を流す墨田川すみたる水もにごるならひを

の二首がある。この年、向嶋の長命寺境内の櫻餅屋にゐた折の作だといふ「七艸集」中の「女郎花の巻」（註三）といふ五十七首の歌の中には寫實味のある歌も混つてをり、その挿まれてゐるものも少くない。

（註三）上掲の「きのふまで」の歌が入つてをり、「今はたゞ」の短歌も入つてゐる。全集中の歌集には、その爲か、「川の秋げしき」のは省かれてゐる。

櫓のはにうゑつらねたる櫻の木の木枝をあらみ白帆行く見ゆ
五月雨に四方のながめもなかりけり堤をゆする隅田の川波
歌ふ聲は遠く聞えて柴舟の霧の中よりあらはれにけり
こきもせて帆をふく風に舟人の水掬ひつゝ夕涼かな
家々にふすぶる蚊遣なひきあひ墨田の川に夕けふりたつ
夏なから秋葉の杜の下かけにふきくる風そ涼しかりける

かういふ例歌を見ても、古歌以外に立つて忠實に寫生で行かうとした所が見える。注意に値する。この折の作品中にも、句含蹟詞・漢語等を使用したものはあるが、我らは古典味があり、古歌等に拘泥せず、自由に使驅してゐる趣のあるのは、愉快である。ここにあげた例をみても、前章にあげた舊派の歌等とは異つて、清新さが感じられよう。それは彼の若さにもよるが、より以上、彼の寫實性と藝術的自覺とその才能に負うてゐると言ふべきである。二十二年以後も毎年少しづゝの歌が残されてゐるが、さしたる飛躍は認められぬ。（註四）

（註四）子規全集第六卷の「竹の里歌」に據ると、二十二年、六首。二十三年、五首。二十四年、十五首。

二十五年、七首。二十六年、十四首。二十七年、十八首。二十八年、十七首。二十九年になく、三十年に六首收錄されてゐる。

この期間は、數の上でも、多く作つたのではないであらうし、實質上から云ふも、僅かに、よき素質の萌芽がみられるといふ程度のものなのである。子規自らも、

十七八歳より二十三四歳に至る五六年間は我の邪路に彷徨せし時代にして、和歌も俳句も此間に端を開きたれど、いづれも殆ど文學と稱すべからざるものなりき。和歌は智識的のものにあらざれば淺薄なる戀歌なり。されども其戀歌さへしば／＼理窟に墮ちんとしたるを見る。（「我が俳句」二十九年）（註五）

と、告白してゐるのである。

（註四）改造社版全集、第七卷の「竹の里歌」では、二十四年に四首、二十五年に一首の追加がある。

（註五）「七艸集」の「女郎花の卷」の歌等を參照ありたし。

明治二十四年頃からは、俳句に熱心し始め、廿五年からは俳句の研究と創作に全力をあげてゐたやうな關係から、歌には見るべき佳作の無かつたことは、實にやむを得なかつたのである。この所謂初期の作品の中には、ちよい／＼狂歌めいたものが見出される。例歌を少しあげると、

おこつてはふくれるふぐの腹の皮よりて聞き人は笑ふたるらん（二十二年）

よろ／＼とよろめく人かよろこんでよろふといふやよふろうの瀧（二十三年）

自由だとしやべるやつらが改しんをせねば政黨出來ぬなりけり（二十三年）

夏の日のあつもり塚に涼み居て病氣なほさねばいなじとぞ思ふ（二十八年）

横にふるかうべの里を立ちいでゝ又こりずまに鳴くほとゝぎす（二十八年）

お手紙の狂歌あすかとまつ風にまた日數ふる村雨の空（二十八年）

等の如きものである。大部分は手紙の端に記されてゐる者であるが、時代といふもの、又子規の性格の一面を思はせるものである。かういふやうな、主として文字上の遊戯による滑稽感乃至諷刺的傾向は、初期の俳句にもあらはれてゐるが、後年は、ずつと高等な脫俗淡雅な情趣のものに展化した。それは晩年の消息歌にも認められる事であるが。

三十年作の六首といふのは、愚庵から柿を貰つた時つくつた連作體の作である。

みほとけにそなへし柿ののこれるを我にぞたびし十まりいつつ

籠にもりて柿おくり來ぬふるさとの高尾の楓色づきにけん

柿の實のあまきもありぬ柿の實のしぶきもありぬしぶきぞうまき

世の人はさかしらをすと酒のみぬあれは柿くひて猿にかも似る

おろかちふ庵のあるじのあれにたびし柿のうまさはわすらえなくに

あまりうまきに文書くことぞ忘れつる心あるごとな思ひ吾師

これは十月二十九日附、愚庵に書き送つたもので、その時のは上掲の作と少し違ふ。何れも愚庵に寄り、後、改作されたものであらう。愚庵にやつたものは、

みほとけにそなへし柿のあまりつらん我にぞたびし十あまり五つ

となつてゐる如くである。改作は三首で、改作されたものは何れも原作よりよいやうにおもふ。それより一日前の二十八日附、愚庵への封書の中には、

御佛に供へあまりの柿十五

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

釣鐘といふ柿の名もをかしく聞捨がたくて

つりがねの蔕のところが澁かりき

の二句が認められてゐる。彼は屢〻同樣の題材で、歌や俳句をものしてゐるが、これなどは歌の方が、よりすぐれてゐると思ふ。兎に角、三十年迄の作では斷然光つてゐる秀作である。子規遺稿竹の里歌（三十七年十一月版）に、三十年度からの作品を選鈔し、この六首を卷頭に置いたのは、至當である。

さて、この期に於ける「歌論」方面に目を轉ずると、「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」といふ、二十五年に書いた文章等が先づ目を惹くが、二十六年五月「日本」新聞に發表の「文界八つあたり」「和歌」の條には、すでに彼の改革の念慮がほの見えてゐる。その大意は次のやうなものである。

新聞雜誌に詩歌小説を載せないものは無く、最も普通なのは和歌であるが、その和歌程つまらぬものは無い。それは現在の歌人がつまらぬのである。「國學者、神官、公卿、貴女、女學生、少し文字あるすき者、高位高官を得たる紳士、其歌を書籍雜誌の中に印刷して見たき少年」「かういふ種類の人々に弄ばれて、歌は墮落

しにしまつた。新聞雜誌の文學では、漢詩は比較的發達してゐると思ふ。それは歌人より詩人の見識が數等上であり、且「漢語の言語多く句法が變化するに反し、和歌は言語の區域狹く字數少く、而も古歌が多くて新句法新意匠を述べ難いからであると論じ、「此上は多少の新語を挿むか、短歌のみに頼らずして長歌を用ふる」外、方法もあるまい。五十や百の名歌は出來兼ぬるものでもない乎、和歌の價値を回復するには「所謂歌人（即ち愚癡なる國學者と野心ある名利家）の手を離して之を宏達詩人の手に渡すの一策あるのみ」と結んでゐるのである。かの「芭蕉雜談」の中に、芭蕉が雄渾豪壯の句に於て古今獨歩だと大いにほめてゐる所に、

和歌にては萬葉集以前多少の雄壯なる者なきにあらねど古今以後（實朝一人を除きては）一も之を見る事を得ず。眞淵出でゝ後稍ゝ萬葉風を摸擬せりと雖も近世に下るに從つて、纖巧細弱なるかたにのみ流れて宏壯なる者に至りては夢寢だに之を思はざるが如し。

と言つてゐる等も、彼の歌論の展開の上で、注意すべきである。

二十七年七月、「日本」に發表の「文學漫言」中の「和歌」の項と「和歌と俳句」の項も見逃してはならぬ。「和歌」の條には、彼の大體の和歌史觀が吐露されてゐる。萬葉については、

當時の人は質樸にして特別に優美なる歌を詠み出でんと工夫するにはあらず。只思ふ所を直ちに歌となしたる者と思しく何の歌も質樸質直一點の俗氣を帶びず。

等と推揚し、古今集開卷第一の「年の内に」の歌を、言葉の洒落で何の趣味も無い歌だと云ひ、後世この種の無風流の歌を秀歌とするに到つたが、古今集の弊風は次第に増長し、足利から徳川期に入つていよ〳〵極

端となるが、この間、定家は言語の洒落をやめ稍〻趣味に心を向けたが、言語に拘泥して遂に趣味に重きを置く事が出來なかつたと論じ、新古今歌風の長所短所を暗示してゐる。實朝に就いては「專ら萬葉を學で、古今獨歩の秀歌さへ多く詠み出にたり。」とやはり大いにほめてゐる。眞淵に就いては、萬葉論者で而もその歌の見るに足らぬ點を指摘してゐる。眞淵以後、萬葉に少しく耳を傾ける者も出て來たが、多くは古今の弊風をくみ、景樹を未曾有の歌人となすの輩で、「景樹を學んで景樹に至る能はず、古今に倣うて古今に及ぶ能はず」到底萬葉の味は分らない連中だと言つてゐる。實に後年の改革意見の根柢はすでに基礎づけられてゐたともいふべきである。「和歌と俳句」では、內容上、兩者は世人の考へるやうに相違あるものでなく、互に手をとりあつて進むべきだと論じてゐるのである。和歌俳句の調和といふ事について第一の改良の着眼點は和歌の言語に俳句の意匠を用ひる事である。和歌の言語と云ふのは單に雅言を用ひ古文法を用ふる謂では無く、俳句の意匠と云ふのは、固より俗情を穿つといふやうな事ではない。一言に言ふと「三十一文字の高尚なる俳句を作り出ださんとするに在るなり。」と論じてゐる。その論旨に、曖昧さはあるが、目の著け所は尋常歌人俳人輩の到底思及し能はぬものを持つてゐる。早晩和歌にも彼が手を伸ばさうとしてゐた事が、圏點を附けてゐた箇所等からは考へられようではないか。舊套を脱するためには、字餘りの和歌俳句が必要であるといふ意味をのべた「字餘りの和歌俳句」といふ文を發表したのも、この年八月の事である。

二十八年には「俳三昧」に歌評を試みてゐること等が注意される。

月あかき夜友來たり

門たゝく音を聞ける嬉しと見んは淋しと思ふ月夜に（高崎正風）

を評して、高崎たる人にしては善い方であらうが、「見んは淋しと」と言つてゐるのは、言ひ過ぎであらう。「唯獨り月見る夜に門叩く音こそ聞ゆれと、おとなしくありの儘に詠みたらんには今一きは氣高くこそあらめ。」と言ひ、又、

獨居

うらやすきかたもありけりかしのみのひとりすまひはさびしけれども（税所あつ子）

を評して、この歌も言ひ樣がくどいやうである。「さびしけれども」は無くてよい。「かたもありけり」も無くもがなと思ふ。「只かしのみの獨すまひこそ心やすけれとばかりあらまほし。」と言つてゐる事、言ひすぎて、淺はかに餘韻なく聞える歌が多い事を論難してゐるのである。又御歌所派と海上派とを比較し、「御歌會派は品位高くして美想低く海上派は品位低くして美想高し。」といひ、小出粲を御歌所派中では比較的よき歌人と認め、なほ海上派は美想は比較的高いが、萬葉を根據としてその範圍外に出る事の出來ない弊がある、併し古雅勁健の點、多少この派には心を寄せられるといふ意味をのべたりして、徐々に當時の歌界に接近しようとしてゐるのである。

二十九年になると、よりよく歌壇に目を向けて來、實地の歌評をも多く試みてゐる。「日本人」誌上で連載した「文學」の中に、その歌論の大部分は含まれてゐるのである。

和歌は老人の專有物となりて少年之に熱心なる者無し、是に於て和歌は消極的なるものとなりて了れり。和歌は國學

者の專有物となりて他の之に指を染むる者なし。是に於てか和歌は古來の模型の外に出づる能はざる極めて陳腐なる者となり了れり。御歌會は景樹派の占領する所となりて他派の之に交はるを許さず。是に於てか世の見識なき者或は徒らに御歌會を崇拜して宗師となし和歌はいよ／＼沒趣味の者となり了れり。しかも此等老人、國學者、景樹派の人々等皆和歌を以て文學と爲さず、往々にして文學以外に屬せしめて以て得たりと爲す。宜なり和歌の進歩せずして益々退歩するや。蓋し彼等皆文學の何たるを解せず、三十一字を並列する者皆文學なりと思惟するなるべし。普通學無き者常識なき者歌人たらんと欲するも得んや。偶ゝ少壯者にして歌に志す者老人に凌駕して一頭地を出だす者あり。彼等稍ゝ望を屬するに足るものありといへども猶常識無きがために文學の範圍を出づること屢ゝなり。

と、正面から歌界を攻撃したりして、漸く戰備整うた觀がある。近頃諸雜誌にみえる歌では佐佐木信綱氏の（註六）歌著しく優つてゐる等と言つて例歌をあげ、又「今の世に歌よみありやと言ふ者あらば心ならずも「東西南北」を示さん」等と論じ、與謝野鐵幹等にも比較的好意を示してゐるのは、元より怪しむに足らぬが、一應注意すべきだとおもふ。

又しても又しても此處も彼處も同じやうな面白くもない歌ばかりにては評するにも張合の無き事なり。吾は和歌者流に勸告す。君等は少くとも俳句を解する程の力を養はざるべからず。

といふやうな自負を度々洩らしてゐる所をみても、この頃になると、歌の方にも大いに論じ、機會あらば歌壇に進出しようといふ決心を固めてゐた事が想像される。鐵幹の「東西南北」に序した一節に、

余も亦、破れたる鐘を撃ち、錆びたる長刀を揮ふて舞はんと欲する者、只ゝ其力足らずして、空しく諸子に先鞭を著

けられたるを恨む。

とあるのは、彼の眞實の心に近いといふべきであらう。

要するに、二十一年以前の子規は、俳句に主力を注いでゐて、歌作は寥々たるもので、又高く評價さるべき佳作がないのである。

（註六）　前章、三二一頁參照。

歌の發表されたものは、主として紀行文中に挿入された作であり、二十五年の「かけはしの記」中に、

つゝら折幾重の峯をわたりきて雲間にひくき山もとの里

日はくれぬ雨はふりきぬ旅衣袂かたしきいづくにか寢ん

またきより秋風ぞ吹く山深く寒れわびてや夏もこなくに

むらきえし山の白雪きてみれば駒のあがきにゆらく卯の花

むかしたれ雲のゆきゝのあとつけてわたしそめけん木曾のかけはし

寢ぬ夜半をいかにあかさん山里は月出づるほどの空だにもなし

草枕むすぶまもなきうたゝねのゆめおどろかす野路の夕立

信濃なる木曾の旅路を人問はゞたゞ白雲のたつとこたへよ

の歌があり、二十六年の「はて知らずの記」中には、

下野のなすのゝ原の草むらにおぼつかなしや撫子の花

草しげみなすのゝ原の道たえてなでしこ咲けり人も通はず
松島や雄島の浦のうらめぐりめぐれどあかず日ぞ暮れにける
心なき月は知らじな松島にこよひはかりの旅寢なりとも
旅衣ひとりぬれつゝ夕立の雲ふみわけて君をとふかな
見し夢の名殘も涼し蟬の聲に雲吹きおこる明方の山
とく／＼と谷間の清水あつめきていはほたくだく瀧の白玉
草枕夢路かさねて最上川ゆくへもしらず秋立ちにけり
すむ人のありとしられて山の上に朝霧ふかく殘るともし火
立ちこめて尾上もわかぬ曉の雲より落つる白糸の瀧

の歌がある如くである。なほ「竹の里人」の名を署して和歌の單獨に發表されたものは、廿七年二月廿三日「小日本」紙上、「棚橋に駒たてゝをれば薄月夜梅が香遠く匂ふ夕ぐれ」の一首が最初らしく、「小日本」には前後十首發表され、「小日本」廢刊後は、「日本」にいくらか發表されたのである。（全集後記による）此等の作の中には、齒切れのよい清新な歌も混つてはゐるが、大體に於て、歌それ自體としては多くの價値を認め難いが、舊い殼の中に全く閉ぢこめられてゐた舊派歌人等に比しては數等上である。少くとも改革の芽は萌え出してゐたといひ得る。又この期の歌論は、十分なる體驗の上に組立てられたものでなく、他に同類型の歌論のすでに發表されたもののあるといふ、ハンデキヤップはあるが、とにかく卓見と稱すべく、彼の後年

の歌論の輪郭はすでに形づくられてゐたと見得るのである。社會的反響はそれ程ではなかつたであらうが、明治廿六年頃からすでに子規が上述の短歌革新の意向を公にした事は、子規の歴史に於て、又明治歌史上忘らるべきでない。二十八九年頃は俳句方面の仕事が外部的にも十分認められその方面はやゝ基を得、自己の文學的趣味、創作手腕についても十分の確信を得たので、心の内に描くのみで未だ手を着けなかつた歌界の革新にも着手しようとして、歌の歴史をかへりみ、當時の歌壇を注意するに到り、それが上述の廿八九年頃の批評となつてあらはれたのである。卅一年、「歌よみに與ふる書」の論と、「百中十首」の作を殆んど同時に發表して、歌の改革に猛進したことは、一見突然のやうであつて必ずしも突然ではない。歌の創作は未熟で、又發表したものも僅少ではあつたが、數年間練磨した俳句創作の經驗並びにそれによつて得た文學的自信が、鬱勃と胸中に動いてゐたのである。彼は小説をかいた。新體詩にも手を染めた。而して其の改革意見の大要は、卅一年以前すでに十分頭に貯へられ、小出しに世間に發表されてもゐたのである。

第三章　古歌人に對する評論

子規の歌人としての實力・識見は、俳人としての技倆・手腕に劣らぬ者があると思ふが、歌の研究と云ふ方面で殘したものは、分量に於ては多くない。俳句分類とか俳家全集とか、俳句の方面では種々手間の要る仕事をしてゐて、俳句作者・俳論家として以外、俳句の歴史的研究にも第一人者を以て任じてゐたらしく、又十分その貫祿を備へてゐた事は認められる。時間の餘裕があつたならば、和歌の歴史的研究にも見るべきものを多く殘したであらうと、やゝ遺憾に思はれるのであるが、古歌人に對して斷片的に述べられたものの中には、なほ卓拔な見解、明快な斷案が含まれてゐるのは、心强く感ずる次第である。

自己の考を全然持つてゐない者は無い。心を虛しくし、純粹無垢の白紙狀體で古人に相對する事は、事實不可能事と言つてもよい程困難な事である。而も所謂學的研究は、心の曇をぬぐひ、偏見を去つて、出來るだけ有の儘の事實を、正面から追求すべきである。自然科學は別として、文化科學の研究は、その事實の追求の上に、價値批判の利刀が揮はれなければならぬ。偏見に執せず而も鋭い價値批判を與へる事は、言ふは易くして、實現は最難事であると言はねばならぬ。事實の探索・考證・記述に力を奪はれて、事實の價値批判に思慮のゆき屆かないと云ふ學究の弊は、文學史的述作等に於て往々見られる一面であるが、之に反し、事實の追求・考覈といふ方面を等閑にし若しくは省略して、自己の好尙によつて批判を急ぎ、時に亂暴な私見を吐くといふ創作家乃至批評家の陷り易い弊所がある。弊は弊であるが、何れもそれが又半面の長所であり

强みともなるのである。研究の餘暇が十分惠まれてゐなかつた子規には、確かに、事實の討究・調査には不備不完全な粗漏は免れないが、鑑賞眼の透徹・洗練されて來た彼であつたから、その批評的方面には傾聽すべき言説が尠くない。子規の古歌人評論は、折にふれて讀んだものに對して、自分の感じた部分だけを、單的に率直に物言うたと云ふ程度のものに過ぎない。研究と云ふ名には十分適當してはゐないかも知れない。が、自分の意見を古人に託していふ、といふやうな心の据ゑ方にゐる者で、言ひ得べくは、「最も主觀的な研究」と名づけてもよいであらう。

この意味の「主觀的な研究」によつて、その歴史的作家の一生、その面影、その事業、その作品の全貌を正當に如實に思ひ浮べる事は出來ない。事實を知る事を主とするには、別に傳を繙かねばなるまい。この種の評論は、いたく省略され、又時に甚しく原形を歪められてもゐる。故に非常に危險でもあるが、併し心に最も感觸した部分から摘みとつてくるから、無駄は少く、評者・傳者が、徹底した意見を把握してをればをる程、物の核心を握り得る機緣を讀者は與へられる事にもなるのである。

子規の「古歌人に對する評論」は、この意味の鋭さ、良さを持つてゐる。被評者に關する、實つた參考として捨て難い値打がある。又一方から考へると、子規の心の記錄として、より以上に珍重さるべきものでもある。即ち子規の古歌人研究は、彼の歌論を、その中に織り込んだといふより、むしろ歌論の熱烈な主張で前後一貫してゐるともいふべく、この點に短歌革新運動に於ける偉大な奏功があつたので、私達から言へば子規の古歌人評論に據して、直ちに彼の歌論の心髓を伺ひ知られる便宜がある。

子規の、古歌人に對する鋭い批評的言說に、後の學的研究にも尠からぬ影響を與へてゐると思はれるのでここに簡單に一纏めにして置くのが便利とおもふのであるが、一つには、これによつて彼の歌論の大體を覗ひ、次章に彼の作品を解說する、豫備智識を與へる事にもしたいと思ふのである。

子規は古今・新古今を通つて萬葉集に觸れるに及んで、年來の歌壇革新の意圖を助成し、促進せしめたものの如くであつて、萬葉集との緣は斷ち切り難いものがある。實朝・曙覽・宗武・元義を稱揚して廣く歌壇に紹介した事は、「古歌人に對する評論」中主要なもので、此ら皆萬葉の歌風と裁ち離す事の出來ない關係の下に展開されたものである。併し彼は萬葉を金科玉條として、此を盲信した如き頑古一徹の古典派ではなく過去の歌集、過去の歌風中に於て萬葉の卓絶してゐる事を痛感し、時人の萬葉の核心を掴む者がなく、唯古今・新古今の盲目的な崇拜に傾いてゐるのを慨して、特に萬葉をかゝげて、凡庸愚劣の歌人に進むべき一つの目標を明示したといふに過ぎないのである。彼の念ずる所は、自己の藝道であり、自分の藝術の進展發露に外ならなかつたのである。子規と萬葉との關係については、後章に詳說するとして、今は彼の實朝論から順次紹介し、簡單な批評を加へて置く事にする。

實朝について　彼の歌壇革新の最初の烽火である「歌よみに與ふる書」の冒頭に、「仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候。」と看破し、人麿・赤人の餘唾を舐るでなく、貫之・定家の糟粕をしやぶるで無く、實朝は獨自の風格を持つてゐるが、蓋し人物も立派た見識ある人に相違なく、凡庸と評されて來たのは誤で、北條氏を憚つて韜晦したのか、或は大器晩成の人であ

つたに違ひない。人間として立派な人でなかつたら、彼のやうに力ある歌は詠み出されるものでないと云ふやうに論じてゐる。「八たび歌よみに與ふる書」には、「武士の矢並つくろふ」「時によりすぐれば民の」「物いはぬよものけだもの」の三首の歌の、句法上の特質、表現の堅確さを稱揚し、實朝の歌を賞する言を說明してゐる。(後章參照。)ついで、「九たび歌よみに與ふる書」に、一々論ずるも煩はしいから、よい歌の例をあげるとて、「山は裂け海はあせなん」「箱根路をわが越えくれば」「世の中はつねにもがもな」「大海のいそもとどろに」の四つの歌をあげ、

箱根路の歌極めて面白けれども斯る想は古今に通じたる想なれば實朝が之を作りたりとて驚くにも足らず、只「世の中は」の歌の如く古意古調なる者が萬葉以後に於てしかも華麗を競ふたる新古今時代に於て作られたる技倆には驚かざるを得ざる譯にて實朝の造詣の深き今更申すも愚かに御座候。大海の歌實朝のはじめたる句法にて候はず、

と簡單な評としてゐる。又翌年二月發表の「病牀讀書」中にも、史家は實朝を凡庸と評して來たが、實朝には才能があつたにしても、年若くては十分意氣を伸べる事が出來なかつたのである。彼は決して凡庸の徒では無い。又將軍として一事を爲さなかつたにしても、廿八歳の若さで死に、而も萬葉以後只一人たる歌人としての名譽は不朽である、と云ふ意味を洩らしてゐる。その他これと相似た意見の言葉はこの以前にも之を投げかけてゐるので、すでにのべた如く、「芭蕉雜談」や「文學漫言」中にもその片鱗はみえ、又たとへば「俳諧大要」の「俳學第一期」の項等にも、萬葉・實朝の歌を稱揚してゐるのである。

子規の論は餘りに短かく、實朝の人物乃至歌に就いて、これだけで事を盡し得ないのはもとよりであるが、

併し實朝の歌の價値が奈邊に存在するかについては、簡單に要領よく論じ得てゐる。而して彼が如何に實朝の歌を尊重してゐたかは、實朝を論じた、どの頁にもありありと感じられるのである。彼が實朝の歌を稱揚したのは廿六七年頃からであつたことは、すでに前章にのべた所であるが、その尊重敬禮は益〻深く篤く、終始變らなかつたのである。卅四年二月、平賀元義を論じた中に、「萬葉以後に於て歌人四人を得たり。源實朝、徳川宗武、井手曙覽、平賀元義是なり。」と言つてゐるに徴しても明かである。宗武を論じたのは、曙覽を論じたよりも後であるが、宗武論中に、「吾は實朝以來始めて此人を得たるを喜ぶ。」と云ひ、又同じ頃書いた物の中に、「萬葉以後の歌人は源實朝と田安宗武との二人なり。」と言つてゐる等から推して、曙覽等よりも、實朝や宗武を重んじた事に明白である。この尊信、この共鳴の中に執筆した論である事を思ふべきである。そこに短い斷篇ながら、この論の熱く強い生命があるのである。

徳川時代早く長流・契沖等の學徒の萬葉研究は、異常な努力により第一礎石を置いたのである。が、萬葉の歌風に傾倒し、自らその實現者を以て任じたのは、眞淵に最初の指を屈さねばなるまい。その眞淵が「新學」「歌意考」「初學」「金槐集附言」等で實朝の歌を稱揚してから、浮び上り、子規の無上の賞揚によつて始めて彼は古今有數の歌人と一般に認知せらるるに至つたと言ひ得るのである。在世の頃も彼はもとより歌人として、或點まで認められてゐたのである。歌界の第一人者であり、彼の師でもあつた定家も「鎌倉の右府ぞたけたる歌人とおぼえはべる。」と賛め、新勅撰集には實朝の歌二十五首を採録してゐるのである。併し彼の歌の眞價を誰が正當に認め得たであらう。彼自身もその眞價を自恃自信する事は出來なかつたのであ

らう。千古に生きる歌人であると、自負する事は出来なかつたであらう。契沖等も、實朝が萬葉風の歌を作つた事には留意してはゐるが、深く尊へ高く主張しては居ない。而して眞淵の賞め方は必ずしも十分だつたとは思はぬが、眞淵の觀賞認識眼が不徹底で稍々的を外れてゐた點のある事に對する憾らなさは、子規と同樣發せざるを得ない。子規はおそらく、その學生時代に於て實朝の歌のすぐれてゐたことを聞き知つたのであらう。明治に至つて、理論として萬葉尊重の思想は早くから起り、實朝讃も屢々發せられてはゐたので、子規がその最初の發言者といふのではないのであるが、子規以後の實朝論は、少くとも歌の方面だけに、子規の論のヒントをうけぬものは殆んど無いと言つても過言ではない。實朝が當時流行の新古今風の歌風を脱し、萬葉調の歌を詠んだこと、(註一) 又萬葉以外獨自の境涯の歌を殘した事、そこに本質的にすぐれた非凡な作歌眼力を認めねばならぬ事は、識者の一樣に認めてゐる所である。子規の推讃には、彼の鑑賞力の確かさ、正しい事を要請させずにはゐないで、その卓見には唯々驚くのである。

（註一）建暦三年十一月、實朝二十二歳の時、定家より萬葉集一部を贈られて以後、萬葉調の歌をよむに到つたといふことは從來認められてゐたが、昭和四年佐佐木博士によつて實朝に紹介された定家所傳本の奥書に「建暦三年十二月十八日」とあり、その中に萬葉調の歌がよまれてゐるので、佐佐木博士は定家書寫の萬葉集以外、すでに實朝は萬葉集を所有して讀んでゐたことをいふやうに云ひ、齋藤茂吉は、それ以前の時、萬葉を直接讀まず、當時の歌論書所收の萬葉の歌をよんだのであらうといふ風に論じたりしてゐる。又武田博士はその古鈔本萬葉集に關して、當時の萬葉調を詠み、而、新古今の調と融化したものだらうといふ新説を述べてゐる。

併しながら（實朝の歌を稱揚した事には異存なく感心するが）歌が雄勁で獨自の風のあるものを認めたからと言つて、直ちにその人物評に迄あてはめようとしてゐるのは、確に子規の如き聰明の人の持つ弱點、早計や獨斷の弊を暴露してゐるものではなからうか。歌を推奬讃歎する情を擴大して、人間までも辯護推讃してゐるのは、確實性を缺いた、やゝ走りすぎた意見であると思ふ。人と作品との間には不離の關係がある。「文は人なり」といふのは至言である。けれども人物と作品との間には、種々の意味を含めて、或ギヤツプがある事も亦忘れられてはならない。特に文學的稟性と政治的手腕とを同一水準に置く事は出來ないのである。その場合場合を深く考究せねば、一概にきめつける事は出來ないけれども、この兩者は却つて相反對する場合が多いのである。實朝が本質的に素質のいい歌作りであつた事は、政治的の天性には十分惠まれてゐなかつたと云ふ事でもある。時代と環境とは、もとより重大な關聯を、人及び作品の上に齎らす。實朝が歌を作り佛に歸依し、政道にひたむきでなかつたことは、さうさせられた十分の外部的理由はあるとしても一面彼の性情に基くもので、政治家として不遇に終つた事は、彼の稟性の弱點から招來されたことで、一面彼が武事を疎にし、殊更文事優遊に日を過してゐたためでもある。政治史上、實朝は餘りに同情なく、凡庸扱ひをされてゐすぎるといふ、不滿反感が、彼の歌を信頼する子規を驅つて、あゝいふ實朝の人物評を吐かせたといふのであれば、許容されようが、彼が實朝の歌の雄々しくすぐれてゐる事から、政治的にも決して凡庸ではないと斷定するのは、多少修正して置きたいと思ふ。おそらく子規自身文學者で而も現實的・政治的方面に長じてゐた性格の持主だつた事が、深慮なく反映して、自分の尊重する實朝の人物觀にまで出てきたとも

見られようか。

個々の歌の批評についても、子規と私達との間には、多少の異見は免れない。子規が「箱根路を」の歌を古今に通じた想であるから、實朝が作つたとて驚くには足らぬと言つてゐるのは、實朝を重んじてゐるゐたが言葉の底に響いてゐるが、特に想の新しさをさゞしてゐた彼の心をみるべきである。其頃の彼は新しければいいと云ふやうな價値の吟味の至らなかつた點が特にあると思ふが、この歌の評等もそこに多少の異議がある。なるほど偏目の景であつて新奇さはなく、人麿の歌にも類歌はある事ではあるが、この時代に、かゝる力のある微妙な景象の眞をうたひあげたものが、どこに求められよう。古今に通じた想であるから云々等いふことは皮想である。「世の中はつねにもがもな」の歌を古意古調と云うてゐるが、内容に盛られたものはむしろ當世風といふべきである。唯注意すべきは、叙景的・寫生的の歌を比較的多く作つてもゐた子規が、かういふ主觀的な感傷的とさへ言はるべき歌に傾倒してゐたことである。

大海のいそもとゞろによする波われてくだけてさけて散るかも

の歌を實朝のはじめた句法であらうと言つてゐるが、萬葉には、

伊勢の海の礒もとゞろに寄する波かしこき人に戀ひ渡るかも

聞きしより物をおもへばわが胸はわれてくだけて利心もなし

大海のいそもとゆすり立つ波のよらむと思へる濱のさやけく

等の類歌がある。子規の實朝を論じた言葉には、この外にも多少斧正すべき者があると思ふが、實朝を廣く

紹介した功績は沒せられないし、その批評は卓見と評してよいと思ふ。

曙覽について　「曙覽の歌」と題した論文は、三十二年三月から四月に亙つて「日本」に發表された。全文の三分の一以上を費して曙覽の人物觀が述べられてゐるが、それは曙覽が貧にゐて貧を樂しんでゐた事を讃し、又彼が敬神尊王主義の人であつた事を、歌を以て例證しながら論じてゐるので、ここには餘り必要でない。曙覽の歌について論じた大略を見る。曙覽の歌は萬葉に似てゐる。萬葉を學び比較的善く擬し得たその技倆・卓見共に賞揚すべきである。萬葉の歌は感情をありのまゝにあらはしてゐる點が、他歌集に勝れてゐる。古今集以下は皆「いつはりの巧」である。誠を詠め、有の儘を寫せとは、後世歌人も云ふが、實は少しも伴はぬ。この間「誠」の本質を發揮したのは、曙覽である。故に彼の歌は「自己の周圍の活人事活風光」から材料が取られ、題詠に捕はれてゐない。實地を寫した歌が大部分で、中にも飛驒の鑛山を詠んだ歌等特に珍しく、題目の新奇の外、叙述の巧みさも、萬葉以後の手際である。萬葉の語句を擬せず、その精神を傳へた者、否思ふまゝをよみ、自ら萬葉に近づいたのだ、といひ、次に「曙覽の歌想は萬葉より進みたる所あり、曙覽の歌調は萬葉に及ばざる處あり。」と斷案を下し、歌想特に客觀的歌想が進んでゐる、それは新句法・新言語を自在に活用したからであると、その點を特に例をあげて説き、併し歌の調子は、鑛山の歌等はよい方で、一般に第二句重く第四句輕く結句は力弱くて一首を結ぶに足らぬ。この頭重脚輕の病のために萬葉にも實朝にも遠く及ばない。にもかゝはらず、新趣向・新言語を求めた卓見は歌學史上特記すべく、貫之以下幾百の歌人に優つてゐるので、眞淵・景樹・諸平・文雄輩とは段違ひだが、而も彼の用ひた新言語も

者趣向も、芭蕉一派の俳句の用ひたそれに比してさへ殆んどお話にならぬ。さうして彼は調子を解さぬ。俳人であつたなら彼位のものは殆んど傳へられぬ位で、その實題には迷つたと言つてゐる。所々に歌を挾み、歌を實例として、以上のやうな事を詳細に論じてゐる子規の曙覽論は、何人も肯けるやうな周到さに據られてゐる。實朝論は、他の文章中の一部として書かれた斷片であるが、これは一つのまとまつた文で詳細綿密でもあるから、曙覽の人と作品に就いても、よりまとまつた感銘を受けるのである。曙覽の「志濃夫廼舍歌集」は竹柏園主佐佐木信綱から提供されて讀んだものであるらしい。同年夏發表の「歌話」の中に、曙覽の「萬葉三十六家撰」をみたが、眞淵の「萬葉新採百首」より遙かによい歌を撰んであると云ひ、又曙覽の家系及び傳（箭の舍嗣今滋氏筆の主として聞かせたのであらう。）について簡單の言葉があるが、他には餘り參照すべきものは無いとおもふ。

曙覽は宣長門の田中大秀に學び、殊に宣長には私淑傾倒してゐたが、歌其物はそれらの影響を餘りうけず自在に自己の境をきりひらいて行つた。實に彼は萬葉模倣では無く、その眞實、その藝術的天性が、自らにして萬葉歌人の純粹にせまつたのである。「獨樂吟」五十數首の歌だけ觀ても、彼の歌の異色あり、すぐれてゐる事は肯かれる。本文の「貧窮百首」等に比しても、その境地に於てはるかに眞實な本質的な自然さを持つてゐることと私は信ずる。明治十一年、歌集は出版されたが、未だ一般的に認められなかつた曙覽を地下により起し、廣く歌壇に紹介した功は、正に子規の眼識の偉大を確證するものでなければならぬ。

子規が新材料・新趣向・新言語等の方面に、いつも着眼してゐた事はよく伺はれ、その點に彼の實論を知る

に非常に好都合である。曙覽が、この點に開拓した境界は認めねばならぬ。新材料をとりこんだ事は萬葉以上だと云ふことも、一通りは承認出來る。併しそこを強調し、賞讃しただけのことであれば、子規の鑑賞眼を疑はずにゐられぬ。新趣向・新言語の開拓使用と云ふ事のみを標準とするならば、不徹底・淺薄さに了るであらう。果して曙覽の歌にそれほど頭重脚輕の弊があるかは多少問題とする餘地はあるが、新言語・新材料を多くとりいれただけ、多少調子の上に破綻が出來る結果になり、そこに注意の行き屆かなかつたといふ難は免れなかつたとはいひ得ると思ふ。曙覽は調子を解しないとまで極論することには異議があるが、そこに非難の隙は見出されるので、子規のこの論難は、新言語・新材料等の使用にのみ藝術の價値を置いてゐないことを自ら明かにしてゐる點だけでも賢い論じ方で、又ある點までは肯綮に當つてゐると思ふ。而も多少調子の上で弛んでゐるやうな者も見出せるとしても、彼の眞實さは、それを帳消しにしてなほ餘りがある。

幽世に入るとも吾は現世にあるとひとしく歌をよむのみ
歌よみて遊ぶ外なし吾はたゞ天にありとも地にありとも

といふ熱心さで、作歌道に運命づけられてゐたとも云ふべき彼が、眞實にひたぶるに、自分の道を開拓して行つた所には、多少の瑕瑾は物ではない。新しくきりひらいて進む道に、完成を望む事は無理な注文であるのだ。曙覽の歌は多少新しい獨自の境地を拓き、而も集奇的瑣瑕に於ても略ゝ成功してゐる事は、むしろ驚異である。彼の才と眞實性は深く敬愛されねばならない。曙覽に對する論難のやゝ誇大である事は子規自ら知つてゐたらう。それが彼の曙覽尊重を裏切るものではあるまい。子規の歌には曙覽の歌の影響は著

しいものであるとおもふが、それは曙覽が如何に子規に働きかけたかを何より正直に雄辯に物語つてゐる。

俳句界は新材料・新趣向の採用といふ點で、遙かに歌界よりも進歩してゐたとの論は、多少我田引水のきらひはあるが、傾聽すべき見解である。曙覽の人物論等も子規の人となりを知るために參考になる點が尠くない。一首一首について十分吟味し鑑賞したといふやうなものではないが、子規の曙覽論は、大體論としては聽くべき言説にみちてゐる。

宗武について　「ゐざり車」（三十一年九月、「ホトトギス」所載）といふ文によると、曙覽を論じた卅一年といふ年の八月二十三日に、はじめて宗武の歌に接し、驚喜雀躍してゐる。そして直ちに「歌話」中に、その驚喜尊敬の心をのべてゐる。

先づ眞淵と宗武の關係を述べて、宗武は眞淵から教を受けたが、歌の趣味は直ちに萬葉から得たもので、眞淵は口にするばかりで、十分わからぬ萬葉の趣味を、宗武が會得したと斷し、

　秋の野にみ草かりふき宿れりしうぢの都の假廬し思ほゆ

の額田王の歌の、假廬を、宗武はかりいほと讀み、眞淵はかりほと讀ませてゐるが、宇治の趣味を解すると解しないの差であつて、「歌に於ける眞淵の眼孔は宗武よりも遙かに小なりき。」と宗武をあげ、次に、宗武は調子の上にもすぐれてゐる、趣向も尋常歌人の陳腐平凡一律なもので無いとて、「眞淵などはとても夢に見ざりし」「樂しくそゞろなる其奇人たり」以下十首を例示し、「勁健にして高華」「古雅にして清新」といふ言葉を以て稱揚し、實朝以後の第一人者と論じてゐる。又平凡な歌にも、彼の歌の技倆はうかゞはれると言つて、

春日のかすがの野邊に今日もかも里のをとめら菫つむらむ
ひむがしの山のもみぢ葉夕日にはいよ〳〵赤くいつくしきかも
二つなき富士の高ねのあやしかも甲斐にもありとふ駿河にもありとふ
たてまつる安みてくらの安らかに守らひたまへ此もろ〳〵を

此ら皆平凡で而も俗氣の無い所到底尋常歌人の及ばぬ所であると云ひ、最後に、宗武は萬葉の骨髓を得た者だが、萬葉の範圍を脱する事の出來なかつたやうな人でなく、其歌に三句切の多く、てには止の多き、皆萬葉以外に得た所だとて、各二首づゝ例を擧げてゐる。

この論に全然同意するわけではないが、どうも動かせぬ眞實な物を摑んでゐる。彼の眞淵を貶す事は、「歌よみに與ふる書」等に於てすでに猛烈で、ここに始まつた事ではない。それはむしろ痛烈過ぎるとは思ふが、非難の目標は流石に外れてゐないやうである。眞淵を難じても、景樹は實際作歌の上にまで吟味し得てゐない。空論をしてゐると言つてよい。子規が眞淵の歌に痛快な非難を浴せてゐるのは、景樹の眞淵に對する理論的批難等よりは一段目のつけ所が上所にある。少くも歌その物を中心として發展する觀ある子規の論は、歌に對する理解の深いものと言ふべきである。宗武の聰明さは一々眞淵の說を盲信するやうな無定見にはなれなかつたであらう。歌作上も學問上も、彼はすぐれた素質の所有者だつた。だが在滿に就いてゐた時代はまづ新古今風が多く、眞淵に師事する頃から、より萬葉の趣を解し、萬葉調に傾いて來たと言つてもたいして誤らないやうである。やはり眞淵が宗武に働きかけた力は、宗武が眞淵に働きかけたりよりも大であつた

と言つてよい。さうしてこれは當然で、何も宗武の恥辱にはならないのである。宗武が眞淵の頭上に達せられず、自己の見識を持ち、自己の歌の道を押進めた點の認められるといふのはよいが、子規の言ひ方は、眞淵のため少々苛酷である。子規の考はたしかに少し極端に走つてゐるのだらうと思ふ。假庵の讀み方について假に子規の説を肯定するにしても、唯この種の一つか二つの比較から兩者全體の優劣を速斷する等は、先入見を以て物に對する非科學的の缺點を暴露したものと言ふべきである。

「勁健にして高華」「古雅にして清新」かういふ立派な特質を宗武の歌は具備してゐる事は、子規と共に認めるが、他の人を貶すに比し、餘りにこの人を褒めすぎてゐる。ほめるとか、けなすとかいふよりも、分量を多く費して論ずるのは、それだけ重んじてゐるので、たとへ貶してゐるにしろ、つまらぬと思つてゐるのでなく、それだけ多く留意し問題にしてゐるのであるといふ意味の言葉を子規はどこかで洩らしてゐるが、それも理のあることである。まことに、貶してゐても却つて重要視し問題視してゐる點もあらう。眞淵其他に對する子規の評語には、この點、參酌して頭に入れて然るべきものが尠くあるまい。

それはともかく、平凡にして尋常歌人の及ばぬと推服してあげてゐる先の四首の如き、平凡非凡の論はさておき、「天降言」中の佳作である。子規の眼孔の太く働いてゐた事をおもふのである。隨分つまらぬ歌も少くないが、一様な所、宗武には宗武らしい特質がはつきりしてゐる。表現にも特殊な持味があり、萬葉集の消化した豐富な作者だつたと思ふのである。大きさはないかと思ふが、歌作りとしては眞淵よりも少しく上ではないかと考へてゐるのである。三句切、てにをは其の萬葉に近いことは誰も認める所であるが、それ

が宗武の歌にのみ非常に多いといふやうなわけでなく（子規は萬葉に學び而も萬葉以外に出たといふことを言はうとしたのではあるが）又それが多いにしても、これ丈けで何も賞讃する程のことでは無い。その三句切、てには止が、如何に適切に使驅されてゐるかが十分に證明されて、はじめて稱讃に値するのである。併しあゝいふ事を一寸氣付いて附加することを忘れないのは、子規の頭のよさを示すものではある。

宗武の歌集「天降言」は續歌學全書本で讀んだのだらうである。

元義について

元義を紹介したのは、卅四年の「墨汁一滴」二月十四日から廿六日までに於てである。最初に、眞に萬葉集を手本として歌を詠んだものの少いことを言ひ、

> 萬葉以後一千年の久しき間に萬葉の眞價を認めて萬葉を摸倣し萬葉調の歌を殘したる者實に備前の歌人平賀元義のみ

とまで極言稱揚してゐる。

> 天下の歌人擧つて古今調を學ぶ。元義笑つて顧みざるなり。天下の歌人擧つて新古今を崇拜す。元義笑つて顧みざるなり。而して元義獨り萬葉を宗とす。天下の歌人笑つて顧みざるなり。斯の如くして元義の名は其萬葉調の歌と共に當時衆愚の嘲笑の裏に葬られ今は全く世人に忘られ了らんとす。

かういふ調子で書いてゐる。その熱意、その緊張、稀にみる名文である。

元義の歌は醇乎たる萬葉調で、古今以後の歌のやうな理窟と修飾の罪ふべき者は無く、又實事・實景でなければ歌に詠まない故、「眞摯にして古雅」後世の纖巧嫵媚の弊に少しも染んで居らぬと論じ、例歌として、

> うしかひの子らにくはせと天地の神の盛りおける麥飯の山

以下十數首を擧げてゐる。次に、元義の歌には妹又は吾妹子の歌が過半を占めてゐる程多いが、彼は熱情家で而も事實以外の歌を詠まなかつたから、吾妹子の歌も必ず實感から歌はれたであらうと論じ、例歌をあげまた彼は熱情家であつたから、狂態を演じた事もあるが、戀の奴隷となるやうな人でなく、丈夫を以て任じてゐたので、ますらをの歌も多いとて、その例歌をあげ、

元義は妹といはでもあるべき歌に妹の語を濫用せしと同じく丈夫といはでもあるべき歌に丈夫の語を濫用せり。

等と論じて、元義の性格の兩面に觸れてゐる。又元義は大丈夫を以て任じてゐたので、詠歌等は餘技だらうと云ひ、彼の皇國主義をあらはした歌をあげてゐる。

元義の歌の缺點としては、萬葉一點張の風があつて、高古で俗氣は無いが、趣向の平淡で變化に乏しい憾がある。又情の發する所、格調の如何を顧みる遑なくやめるので、異體の歌もあると言つて、

天照皇御神も酒に醉ひて吐き散らすをば許したまひき

以下八首の異體の歌の例をあげてゐる。（併しこの種の異體の歌の中には多少の瑕はあつたにしても、常則を脱する所に却つて個性味があり、且つたほ發展すべき元義のよい素質のあらはれを暗示してゐた者ではある。）

次に、元義の閲歴、風變りな性行を物語る二三のエピソードを記し、筆跡に論及し、實朝・曙覽・宗武を併せて四人の自己の最も稱揚した歌人の、境遇・性格乃至歌の簡單な比較論に及び、趣向・取材の範圍が狹く變化に乏しく、見識は保守的で、元義は大歌人とはいへぬ。彼にして大歌人とならうとする野心があつたなら、もつと成長發展することが出來たらうと論じて、筆を擱いてゐる。

元義の歌に對する子規の批評の要點は、醇乎たる萬葉調で、纖巧な輕快な風が無くて聲調の上に堂に入つてゐること、併し歌の材料に類似のものが多く、見方も餘りに變化無く單一だと云ふ缺點のあること、なほ破格な異體の歌を詠んでゐるが、それは元義の歌の發展すべき素質を物語つてゐるものであるといふ事等で略ゝ贊成し得る所である。

子規門の赤木格堂が、自身集めた二百餘首の歌と、元義の直筆十數枚と、羽生永明の「戀の平賀元義」(岡山の山陽新聞所載)の文を示し、それに據つて書いたといふ事を子規は言明してゐるが、事實の誤は少くない。大正十四年羽生永明の「註釋平賀元義歌集」の良書が出版され、最近は野田實の「平賀元義評傳」や森敬三の「平賀元義短歌傑作選」等もあるので、事實の方面では更に明らかにされたものが多いが、元義の歌の眞價を認め、廣く一般に推奬した子規の功は、蓋し沒せられぬものがある。

彼の歌には殆んど同一手法のもの、同一發想の歌が、なか／＼多いのである。又枕詞とか序のやうなもの地名を詠み込んだ歌等が多い。地名・人名を詠み込むと云ふやうな事も、却つて實景・實感の歌だといふことを證するものとも言へようが、幾分ひどすぎると思はれるものがないではない。又冠辭等も音律上必須有效の役割を果すべく、單純化の爲には自ら冠辭の使用を必要とする場合もあり、絶對に排すべきではないが、元義の歌には、餘りに無雜作に多く使はれてゐて、古典的臭味の感じられる場合さへある。彼の歌に對してはやゝ單調で材料の貧しいといふやうな感じを抱かざるを得ぬ（曙覽等に比しては殊に然りである）が、格調が堂々としてゐて、單純な見方でも、とにかく把握はしつかりしてゐるのである。子規がこの人を見出して、

その莊古な萬葉調に驚喜した心持は、肯ふ事が出來る。一々萬葉集等から元義の歌と類句や類歌を拾集して見る等云ふ事は、一部好事家に任せて置けばよい。さうして拾ひ來つた類歌等をつきつけて、元義の歌は特殊性・獨立性が無い等といふ者が現はれては大變である。私らは、反對に、類句や類歌に據つて如何にそれを生かし得てゐるかを確めようと思ふ。何物の影響もうけぬ、眞個其人の歌であると云ふやうな者は、多くあり得るわけのものでは無い。元義の歌には、萬葉の歌等の影響のかなり著しい露骨な歌が多いが、それらにもなほ彼らしい手法、彼らしい心持は見出し得る。むしろ模倣とか影響等云ふ事に無頓着に詠み散らしたやうに見える所に、嚴たる彼の風格が偲ばれる。發想の似よりの甚だ多過ぎるやうな難はありながら、確固とした態度が強く調子にも張り、近世歌人中では何としても、偉大な一人である。

眞淵について　眞淵が萬葉にもよい調と悪い調があると繰り返して言ふのは、萬葉の佶屈な歌を取り出して、萬葉はこれだから駄目だと攻撃される事を恐れたからで、少くも彼はその種の歌をよいと自信し得なかつたのである。眞淵が悪いと云ふ歌の中に自分の最も好む歌がある。彼の好む萬葉調に自分の好む萬葉調は見當らぬ。（歌よみに與ふる書）といふやうに論じ、又良歌惡歌はどの歌集にも免れぬ所で、萬葉にもよい歌も悪い歌もある等と云ふのは、萬葉に特に惡歌の多いことを認めるもので、古今・拾遺等の比較的精撰されてゐるといふ事を意味するのではないか。さうすると、萬葉の惡歌は古今の惡歌よりも惡いとするもので自分の考とは全く違ふ。要するに眞淵は萬葉を解さない。萬葉を讀せず一派を立つたとも言ふが、萬葉より劣つてゐては何にもならない。彼の歌集のつまらぬ事は、即ち彼の萬葉に對する鑑賞眼の無い事を暴露し證

つてゐる。彼の短歌は古今以下で、彼の萬葉から學んだものは、趣味ある意匠を撰ぶに傾いた事であるが、これも一部分の理解で、而も調子に於ては、なつてゐない。長歌は短歌よりはよい。それは萬葉を模倣したからだ。(「萬葉集卷十六」―三十二年發表)等とも言つてゐる。

かういふ風に、眞淵に就いては、その眼識の低い事を非難してゐる。すでに述べたが、これは眞淵を十分に重んじ認めてゐたから、時に大人氣も無く喰つて掛つてゐるのである。等しく萬葉を說き萬葉をかざしても、眞淵等より自分は遙かに徹底した理解を持つてゐる。眞に萬葉の精神を知る者は自分である。眞淵等は口ばかりで駄目だ。いはば、かういふ心持・意氣から出發した眞淵攻擊であつて、徹頭徹尾、眞淵を蔑視したやうなのとは違ひ、眞淵にしてこの程度の誤解や幼稚さであるといふ心であつたらう。さうして自分の歌はそれほどすぐれた者でなくて、萬葉にも善い歌も惡い歌もある等と說き出す眞淵の言葉を、ぢつとして聞いてゐられなかつたのでもあらう。

眞淵が古今や新古今調の歌を詠んだ時代から、萬葉調に進み、なほ記紀に溯らうとした時代のある事は、既に說かれてゐる。而して鑑賞に於て、作歌に於て、萬葉に心を傾けたとは云へ、やはり兩方面に於て、古今・新古今の情趣から拔けきらぬもののあつた事も、先づ認められねばならぬ。

古今歌集は、專は女ぶりなれど、さすがに古歌も多かれば、上にいへる如き、心高く雄々しきも交り、惣ての撰も、さる方に心高きなり。(新學)

といふ位の認め方はしてゐるし、當時歌壇の情勢を思ひ到らせば、彼が古今・新古今歌風の影響外に立つて

ゐると云ふやうな事は到底出來ない相談でもあつた。この點で、子規が言道の萬葉視を不徹底呼ばりするのは、一面あたつてゐる。併し古今や新古今の歌の撰定は選者の鑑賞眼に據つてなされてゐた故に、萬葉の撰を・不統一がなかつたのだとも考へられる。言道の萬葉にもよい歌と惡い歌があると云ふ語意は、この吟味の學究らしい親切心の發露と思へばいいのである。多少言道に不徹底な、議論に矛盾するやうな所はあつたとしても、もう少し寛容であつてもよかつたとおもふ。子規の批難に或點まで同感で無いこともないが、言道のよき方面を認め、そこを賞讃する事の出來なかつた事は、子規のため惜しまれる。「雜言集の歌も其のために」の言道の歌を、意味ばかり強くて調子は弱いやうに感ぜられる等と非難してゐるが、歌になつてゐないと言はれ乍ら、實際の作品を俎上に置いて、言道の作の詰らない事を、具體的に十分説明するやうな事は殆んどしなかつた。唯徒らに非難する許りでは空論で、子規の言道攻撃もやゝ實證に缺けた者となり了つた觀がある。この點にも遺憾があり、且つ私は子規のいふ程、言道をつまらぬとは思つてゐない。子規の心持は分り、言道を非難する要所にも突き入つてゐるとは思ふが、到底盡く同意出來るといふところには行かぬのである。

魚彦について　楫取魚彦の歌については、「萬葉を模したる歌にてよく詠みいでたれど猶これと思ふ者は極めて少く候。」と云ひ、「徒に萬葉の語句を模して萬葉の精神を失へる」などゝ評してゐる。縣門歌人中の萬葉派として有數の魚彦も、子規に出會つては散々やられてゐる形である。新語彙・新材料の採用を促進した子規は、そこを過重する結果、萬葉の用語や句法のまゝたる模倣に多くあらはれてゐる、魚彦の歌にあきたらなかつた者であらう。魚彦に對してはやゝ同情のない批評ではあるが、かういふ非難も全然否定する事は出

來ない弱點を魚彦は持つてゐたやうに思ふ。宗武の歌の藝術味があつて、時に清新な、流動した趣を呈してゐるに比べ、魚彦の歌は古典的で、やゝ形だけ出來上つてゐて、流動變化に乏しい弊がある。併しなほ、

ちちのみの父いまさずて五十年に妻あり子ありその妻子あり

天の原吹きすさみたる秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

の如き、いい歌を詠んでゐる事を考へると、ともかく子規の評するやうに、つまらない歌人とは言へない。單に萬葉の糟粕を嘗めたばかりの者とは別なものがあつたと思ふ。

蘆庵について　「小澤蘆庵は歌人として名高き方なれど、なほわからずやの一人なり。」と斷じ、萬葉・日本紀にはよい歌と惡い歌がある、古今獨歩の才人貫之の選んだ古今集は、よい歌ばかりで、歌の軌範で、それに照合して歌の善惡は知れると云ふやうな意味の、蘆庵の言葉を引き、こんな說から割り出した彼の說は謬で、彼が萬葉集中の平凡な歌を拔き、萬葉にもよい歌がある等と云ふのは笑ふべきである、と難じてゐる。又蘆庵の作品については、たゞごと歌の主張者であるだけ、平凡で蠟を嚙むやうだ。平凡もよいが平凡に加ふるに「多少の理窟と多少の言葉のたくみ」があつて、終にたゞごと歌では無いと論じ、暗に蘆庵がその主張と矛盾した歌を作つてゐる事を非難してゐる。紀行の歌は、拙いながら俗氣が無くてよい、といひ、所謂寫實の德を說いたりしてゐる。

かういふ蘆庵に對する子規の不滿攻擊は、子規の好みに偏しすぎてはゐよう。併し私達からみても、彼のただ事歌の主張を徹底させるためには、古今主義を標榜した事は、障害となり矛盾さを感じさせる者で、

彼のため常に遺憾に思ふ所である。彼の現實主義の中に、古今集といふ古い金看板がぶらさがつてゐる事は私達をしてこの店舗の前に足をとゞめるに躊躇させるのである。

あまねく世にみちみちて、誰も知れる詞をもて、卅一字をつゞくるを歌といふなり。

といひ、

いたりて高き道は、かへりて平生目前のことにあり。常の言葉によく心をつけてみるべし。

等といふ事も、當時に於ては、必要な勝れた道破であつたかも知れぬが、それが古今集と結んだ事は矛盾で大變な不幸であつたと思ふ。またしも萬葉と結びついた方がよかつたのではなからうか。要するに此のジレンマにかかつてゐる以上、攻撃されても仕方無いのである。蘆庵のたゞ事歌の主張も、景樹の調の論も、汲み取るべき所はありながら、古今主義の考が、一方に或はその中に存することによつて、私達は我慢が出來なくなるのである。萬葉を崇拜する子規が、古今集崇拜の蘆庵に非難を浴せたことは、蓋しもとより怪しむに足らぬのである。

景樹について　景樹に鋒を向け攻撃してゐる事は言ふまでもない。先づ古今集崇拜の見識の低い事を罵し、「俗な歌の多き事も無論に候」とはつきり言ひ退けてゐる。たゞ彼の崇拜する貫之よりはよい歌があるが、それは時代が進歩してゐるから、景樹が偉いことにはならぬ。歌の玉石混淆の點、門人があつて全國に門流をつくつた點等、俳人では蓼太に比せられるなどと言つてゐる。又「新學異見」で、眞淵の説をけなしたところをあげ、憤慨して、

自己の歌はことごとく古今集以下を蹈襲剽竊したる事を棚へあげて、却て創意多き實朝の歌を傷つけんとは憎さも憎き振舞かな。泥坊が人に對して泥坊とはよばはりするさへ片腹痛きに況して高潔清澤なる實朝の如きを捕へて泥坊に落さんとす、盗人たけだけしとは景樹の事なり。（三十二年、歌話）

と力み、古今和歌集正義總論中の文句にまで一々反駁を加へ、鬱憤の飛沫を浴せてゐる。

時代や個性を重大視し、徒らに古歌に倣ふの愚を排斥しながら、一方古今集崇拜の迷夢から醒め得なかつた、景樹の論に滿足出來ない私達は、彼の歌に對してもさういふ矛盾を感じないでは居られぬ。貫之の歌よりいいか惡いかは一概にきめつけられぬが、緣語とか懸詞とか譬喩等の煩らはしさがなくて、且つ時代が近いだけ私達の觀照にうけいれられるものが多いやうに思ふ。併し私は景樹の歌を餘り喜ばぬ方であつて、彼の作歌上の努力・力量は高く評價し得ないのである。當時にあつてすぐれた歌の評論家で、作歌も單に學究の餘技としてやつたといふ類ではなく、歌人として眞面目に努力して進んだ人である事は、ひそかに敬意を寄せるものではあるが、「桂園一枝」及び「桂園一枝拾遺」の大むね一通りの、實感味の稀薄な機智的の歌は、何らの感激を起さしめない。何でも一通り歌にこねあげる習練は出來てゐたらうが、彼の努力は、さういふ謬られた末技に注がれ終つたのではあるまいか。理論倒れに終つたのではあるまいか。彼のため惜しい氣がする。俳人蕪太と比較してゐるが、後世の批評家中には、門流を作つたといふ點などでは、子規自身をも、その餘り有難くない比較に置くものがあらはれるのではないかと、杞憂し、やゝ苦笑を禁じ得ない。

良寬について

一僧良寛歌集」を見る。越後の僧、詩にも歌にも書にも巧なりきとぞ。詩は知らず、歌集の初にある筆蹟を見るに絶倫なり。歌は書に劣れども萬葉を學んで俗氣無し

そのかみはさけにうけつるうめのはなつちにおちけりいたづらにして（良寛）

やまさゝに、あられたばしる、おとはさらさら、さらりさらり、さら〳〵とせし、こころこそよけれ（良寛）

所謂歌人に勝ること萬々。（病牀讀書日記、三十三年、十一月十四日）

良寛については、こんな短かい記述しか見えないやうである。良寛の歌について詳しい考が聞かれなかつた事は殘念であるが、おそらく子規からは多くをきかれなかつた運命にあつたものかも知れぬ。しみじみとした人生の相をつかみ、無邪氣に、思ひのまゝを歌ひあげた良寛、その歌の底に流れてゐるあたたかさと、一種のセンチメンタリズムの興趣は、子規が彼作共鳴する埒外であつたと考へられるからである。良寛の脱俗した平淡の境地が子規にはまるで分らなかつたと云ふのではないが、性格に於て環境に於て、かなり相背反しまつたこの二人は、遂に手を握るべき機緣はなかつた者であるとも言へる。子規は、良寛の如き人を理解する情はあつたとしても、これを世に推重するには彼の理智が許さなかつたといふやうな所があつたらうかとおもふ。フランクリンを賞し、日蓮に傾倒した彼は、少くとも無條件で良寛讃の披瀝は出來ないのだつたらう。明治十二年、新潟の小林二郎が村山半牧の集めおいたものを「僧良寛歌集」と題し、出版した本、二十九年に更に活字本として出した。その活字本の方をみたものであるらしいが、寒川鼠骨は「新潟の小林氏から僧集を贈られたと記憶する」と言つてゐる。とにかくすでに歌集に出版されてゐたが、今日のやうに良寛にまで

ユラーになつてはゐなかつた。子規門の左千夫が、「田安宗武の歌と僧良寛の歌」（明治四十一年十月、日本新聞）の文章を書き之を推奬し、左千夫門の齋藤茂吉が又ついで良寛の歌を「アララギ」誌上に釋し紹介したり、相馬御風が越後糸魚川に歸住して良寛研究に沒頭したりして、漸く良寛は今や餘りにも有名になつたのである。

さて子規のあげた第一首目の短歌等、とれぬといふ程ではないが、稚拙で、到底代表作とするに足らぬ。「やまささに」の旋頭歌をよんで思ひ到るのは、子規晩年の歌、殊にその長歌の句法や境地に餘程これに近い者のある事である。良寛を學び得たといふよりも、次第に良寛等の歌境におのづから進んで行つたとみらるべきものであらう。

言道について　「草徑集を讀む」（卅三年三月十九日「日本」所載）と云ふ文で、子規の言道觀の大要が知られる。今迄の歌人の言ひ得なかつた趣を捉へた事及び言葉の上の駄洒落が少いと云ふ特色をあげ、その上景色の歌の中に理窟を混へた如き拙な者もなく、中位の歌は割合多く、他歌集の駄歌多いのとは選を異にしてゐる。併し他歌人と等しく、調子が低くて大家と云ふ事は出來ない。縱横無盡に格を破つて進む事は出來なかつたが、景色の上の趣味を取ることは曙覽よりも「こまかにつぼら」である。言道の趣味を歌ふに、宗武の調子を以てしたら、近世無比であると論じ、十一の例歌をあげて簡單な評を加へ、最後に、

言道の歌は客觀的景色を述ぶるに長じて主觀的の事をいふは感情の上にも理窟の上にも拙し。

と言つてゐるのである。

言道の歌集「草徑集」は、當時佐佐木信綱に拾ひ出され、「續歌學全書」に採錄されてゐた。子規も佐佐木氏の「大隈言道の草徑集を見たまへ我は好まぬ歌なれど他の歌とは變りて一ふしあり」といふ注意を怪しみながら、披いて見て、やはりその一ふしある歌風を認めたのださうである。

言道は確かに近世歌人中の異色ある一人である。歌としても、その取材の新しく視察が輕妙で、他人の容易に追從し得ないものを示してゐる。個性味の著しい歌人と云ふべきである。特にその作家としての體驗自覺に惠まれた「ひとりごち」等の歌論は、景樹等のヒントは幾分あらうが、それらよりも遙かに眞剣な徹底した心の叫である。歌論も歌も、景樹等よりは實感味が横溢し、特に歌論は尊いものであると思ふ。併しそれも時代と云ふ事を頭に入れての事で、一個の藝術家としてはあれだけの覺悟は誰もが持つてゐなければならぬものとも思ふ。我々の理想からは論ずれば、「ひとりごち」の歌論にも相當文句はある。又和歌史乃至歌學史上は重要な一人であるが、歌の價値からは宗武や曙覽には一歩讓らねばなるまい。大正七年、佐佐木博士と島木赤彦との言道についての論爭では、言道の作をつまらないとした赤彦の論を抑へて賞めたいと云つたのであつた。子規が言道の特色としてあげた今迄の歌人の言ひ得なかつた趣を捉へたといふ事は、確かに言道の歌の價値を指示してゐるが、子規の嫌ふ古今集以來の陳腐とか雅言等の所謂類型的歌は、認められないにしろ、一ふしある物の見方を喜んでゐる點、換言すれば客觀的景色の歌で、擬人法等を多く使ひ、理知的着想にみちてゐる點等は、むしろ子規の嫌ふ古今集流の弊の脱けきれぬ者と見られはしないか。その上、實へよい境地も、理智の頭を出しにゐる毀してしまつたやうな歌が甚だ多い。併し「頑固ならば易き物」

で冷然と自分獨自の道を歩いた事は、古歌の摸倣にのみ終つた樣な有名歌人に比して遙かにいいのである。

この他子規は歌壇革新の叫をあげた當時、日本新聞社長の陸實にあてた手紙の中に、加納諸平を論じて彼は美を解した者でない等と言つてゐるが、おそらく陸氏が特に諸平の歌をあげたに對し、反撥的に言つたので、特に諸平をのみ蔑視してゐたのではないと思ふ。又松平定信・水野忠邦・水戸光圀・物徂徠等の專門家以外の歌を評してもゐるが、唯通りすがりに聲を掛けて過ぎたといふ程度で、ここに紹介する必要もあるまい。又千種有功の歌を評し、近世公卿中では有名だが、尋常一樣の歌で見るべきものはない。が、比枝百首は題目すでに新しく、漢語・梵語さへ混ぜて、他の作に優つてゐる等と論じてゐる。有功の歌集「千々廼屋集」等をみても、感賞に價する者は殆んど無い。子規の批評は正當で、且つここにも彼の歌論の鱗片が伺はれる。

近世以前の歌人の、子規の論評に與つた者は少いのであるが、その二三をあげてみる。

貫之について　古今集攻撃と共に、貫之は下手な歌よみといふ一言で、あつさりやつつけられた。貫之の歌は、駄じやれや淺はかな言ひざまのもの許りであるが、貫之は始めてそれらを言つたのであるから、古人の糟粕でない。その點は許さるべきであると云ひ、貫之等を有難がつて、その短所・糟粕を嘗めて喜んで居る後世の歌人こそ、いい笑ひ者だ等と看破してゐる。貫之の實際の歌の批評もしてゐるが、その二三の例をあげると、

袖ひちて結びし水のこほれるを春立つけふの風やとくらん

は、要するに理窟であると云ふ詰で、

　霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里に花ぞちりける

も、理窟で、加ふるに「霞たちこのめもはるの」といふ言葉の續み、縁語のいやみがあつて、鼻もちならぬといひ、

　春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ

は、理窟がなく、貫之集中の善い者と言つてゐる等によつて、子規の考はよく窺われるのである。

定家について　新古今の撰定をみると、定家は上手か下手か分らぬ所があるが、實際の歌をみると、やはり下手で纏なものは無い。狩野派の探幽に彼は比較されるが、兩者に傑作なく又二人とも練習の力でいつもかなりにはやりこなす。この二人以後それぞれ歌や畫の門閥が出來、藝術の腐敗を招いた。かういふ所まで似てゐる等言つてゐる。

子規は古今より新古今に稍〻すぐれた歌があると言つてゐるし、「九たび歌よみに與ふる書」で、よい歌の例として、新古今の歌を七首擧げ、ほめてゐる。

貫之にしろ定家にしろ、一代の名聲を荷つた歌道の有力者であつて、短かい言葉の裡に、かれこれ言ふことは今は避けよう。時に子規のやうな痛快な批評家のあらはれる事は面白く、必要な事でさへもあらうか。

西行について　萬葉を背景に歌にとりいれてゐ、言の値を高くす、誠を詠むといふ事を解するに傾いてゐるが、百の九十九までは「いつはりの巧」であると評した西行觀の斷片が曙覽篇中にみられる。併し西行の歌

さびしさに堪へたる人のまたもあれな庵を並べん冬の山里

をほめ、「庵を並べん」を、嶄新にして趣味ある趣向、西行ならではと云ひ、「冬の」と置いたのも尋常でない。芭蕉の寂は「庵を並べん」等から悟入し、季の結び方は「冬の山里」等から悟入したのではないか等と言つてゐる。芭蕉との關係からでも全然西行の價値を認めなかつたといふやうではなかつたのである。併し「俳諧無門關」（卅一年）の「芭蕉試論」中にも、芭蕉が、業平や實朝や西行をあげたといふ事を批評して、

萬葉を說かずして特に業平を揭げ西行を尊ぶ處（中略）確固たる標準無かりしや必せり。

と言つてゐる等、西行を餘り重んじてはゐないのである。

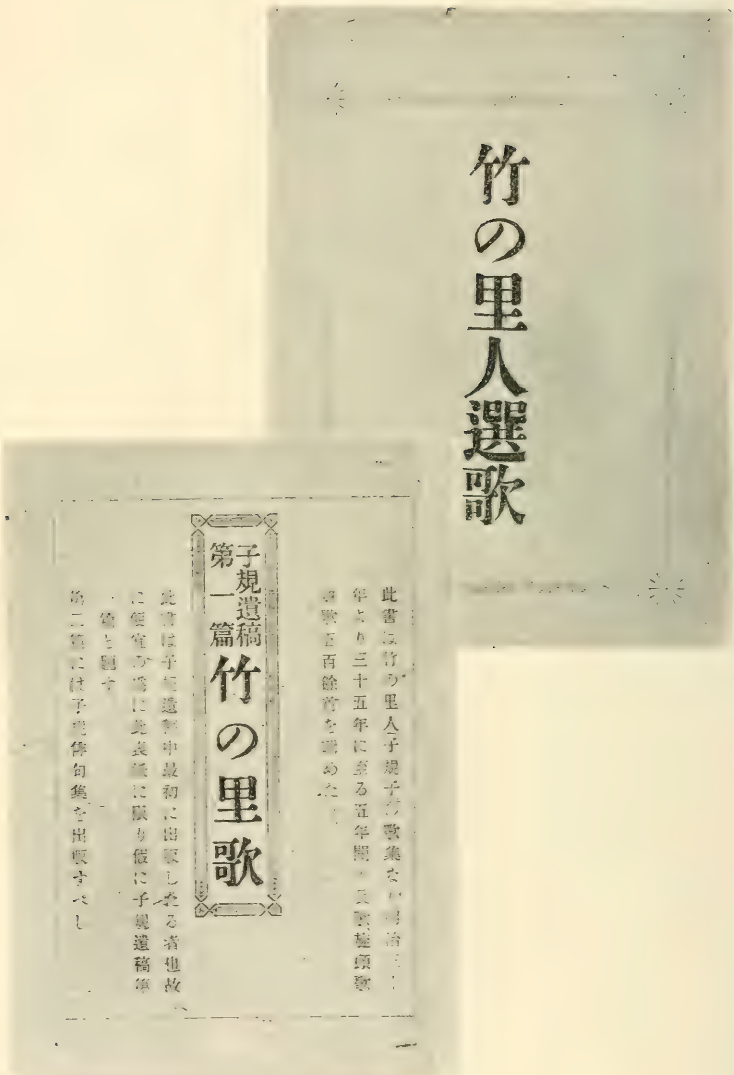
まだ多少拾へば拾へるが、先づ子規が歌の先蹤に對して如何に考へてゐたかは、以上で察せられようと思ふ。餘りに好惡に偏してゐる。又餘りに論難攻擊にすぎてゐる。今となれば事實の研究はもとより、批評言に對しても是正せねばならぬものも尠くはない。併しその缺點にも拘らず、彼の勇氣と卓見には大いに敬禮すべきものがある。卅三年五月「竹里歌話」其一に、次の如く叫んでゐる。

余曾て芭蕉の惡句を論ぜしに世人或は驚きて「大膽」と評せし者あり。今又古歌を評して惡を惡とすれば人驚きて「大膽」と評する者あり。余自ら大膽なりと思はぬに世人のしかいふはしかいふ人の小膽なるにやあらん。俳句にまれ歌にまれ自己の標準確立したる上は（其標準の正否に拘らず）古歌にても近作にても其標準にあてはめ見れば善きも惡きも直に知るゝ事猶寒暖計が大氣の溫度を示すが如くあるべき筈なり。然るに熱くなれば水銀昇り寒くなれば水銀降るの理を知らずして百度に昇り三十度に降りし寒暖計のはたらきを大膽なりと評するは寒暖計の[illegible]なり。彼等は古人

といへば一概に之を貴び、古人が名歌と呼びし歌は善きも悪きも弁へず一に之れを名歌として崇拝するなるべし、されば旧歌を罵る者に逢ひては忽ち肝を潰して大騒よばはりするこそ可笑しくも亦気の毒なれ。（五月十三日）

自己の藝術的標準にばかり依倚して、歴史的作家にぶつかることゝそれだけでは、十分とには言はれないとおもふが、しかしこれはなか／＼名文で、實によく自己の位置を簡明にし、自己の批評態度を説明して、やゝ遺憾なきものである。歌の學問、歌の智識を豊富に蓄へてゐたと云ふ類ではないが、むしろそのためにこそ却つて思ひきり勇敢な急所を穿つた批評が出来た點もあつたのであらう。

歌に對する彼の意見も、大凡分つて貰へたとおもふから、彼の作品そのものの考察に向はう。



歌集及び選歌集

第四章　和歌の年代順的考案

子規の歌は「ホトトギス」其他の雜誌に發表されたものもあるが、大部分は「日本」新聞に發表された。而して單獨に歌だけでなく、紀行文や小品・隨筆中等に於て發表したものが尠くないのである。彼自身歌集は編まなかつたが、「新體詩長歌など雜じて千首許り」記した自筆の「竹の里歌」の稿本が子規庵に藏されて(註一)ゐた。この稿本によつて、子規門下の人々が撰定して、三周忌の記念に出版したのが「子規遺稿竹の里歌」である。子規門の歌人伊藤左千夫・香取秀眞・岡麓・長塚節・蕨眞・安江秋水・森田義郎が撰に預かつたとなつてゐるが、左千夫等が主にあたつたのであらう。卅七年十一月出版され、後、大正四年二月「子規遺稿」の他の部と合冊になつて發行された。この「竹の里歌」は、明治三十年以後の作、五七一首(長歌一五首、旋頭歌一二首、短歌五四四首)を收錄してある。この「竹の里歌」を讀んで歌に志したと自身言つてゐる、左千夫門の齋藤茂吉の選で、アルス名歌選第七篇として「正岡子規選集」が、大正十年十月に出版され、次いで、茂吉と同門の古泉千樫と茂吉共編の名の下に、兩氏蒐集の歌を、千樫が整理編纂した「正岡子規竹乃里歌全集」が、大正十二年三月同じくアルスから發行された。(註二)前者は明治三十一年以降の短歌三六八首を選し、後者は明治三十年から歿年までの作一三六七首(長歌一七首、旋頭歌一二首、短歌一三三八首)他に遺補九首の短歌を收錄してゐる。

(註一)「短歌全集」の「正岡子規集」の後記に、良背氏は「左千夫が借用して行つたのであつたが、返却されず其

備になつてゐるうち左千夫は戰爭中で亡せたので、遂に分らないことになつてしまつたのである」と書いてゐる。子規自筆の稿本が將來見出されないとも限らない。

（註二） 吉泉千樫の卷末小言には、短歌千三百四十一首、長歌十六首、旋頭歌十一首とあるが、これは藝詠を分ち計定に入れないのであらうが、計算間違ひのやうだ。

三十三年の「艶麗といふ題にて」の作は十首卷末にありながら、目次には十一首となつてゐるが、但は目次の歌題の下に注した歌數は正しい。

大正十五年四月、アルスから子規全集第六卷が發行されたが、その中に俳、新體詩及び漢詩と共に「竹の里歌」が收められてゐる。明治十五年より歿年に至るまでの作歌一七五九首（長歌一八首、旋頭歌一二首、短歌一七二九首）外に年代不明の短歌四首を收めてゐる。子規自筆の「竹の里歌」は、「子規竹の里歌」編輯の際、子規文庫から持ち出されたまゝ遂に紛失したため、この子規全集出版の際、子規他の稿本や新聞雜誌を參照して出來るだけ完全のものにしようとするため大いに努力した事が察せられるが、ここにはじめて子規全歌集に近いものが讀書市場に送られたのである。昭和三年二月には「子規全集刊行會」の名の下に、「定本子規歌集」がアルスから發行された。それは子規全集中の「竹の里歌」をそのまゝ一冊にして出版したといふにとゞまるものであるが、子規の短歌をみる者には便宜を與へたであらう。寒川陽光は子規全集編輯者を代表して、この「定本子規歌集」に序文を書いてゐる中に、

「竹の里歌」は門下七弟子の選であるに拘らず、存す可くして省き、省く可くして却つて存したと思はれるものが少

くない。「竹の里歌全集」は其編輯者に對して、子規舊友連名で、子規庵所藏の原稿等に參照されたい旨を希望したけれども、返事さへ與へられなかつたほど何故か出版を急がれたので猶多くの遺漏あるを免れないのであつた。」

等と書いてゐるが、子規全集出版によつて子規の殆んど全部の作をみることが出來、又ここに單獨に「子規歌集」が發行されたことは幸としなければならない。この歌集の序文にも明記されてゐるが、主として柴田宵曲の編輯にかゝるものである。アルス版子規全集中の「竹の里歌」とこの「定本子規歌集」を比較すると、明治二十四年に、藤野古白に與へた書簡中の作四首と二十五年度の大磯客舍（十月九日）の歌一首が、單獨發行の「定本子規歌集」には加へられてゐるが、しかしこれは、全集六卷の編輯後記の追記に於て、この五首を編輯中に發見したことは斷られてゐるのである。而して「定本子規歌集」では明治廿四年の分に、古白への手紙の歌の「昔見しいもかあらぬかあれまさる檐端に白き花のゆふかほ」の歌が誤つて連續して記載されてゐるし、卅四年の山吹の歌「あき人も文くばり人も往きちがふ裏戸のわきの山吹の花」が、脫落してゐるので、却つて全集のものの方がいいのである。昭和三年十月には岩波文庫版「子規歌集」が出版された。寒川鼠骨編で、明治三十一年から歿年までの作九八二首（長歌一七首、旋頭歌一二首、短歌九五三首）を撰してある。編著の解說には「本書は三十一年卽居士三十二歲の時以後のもの丶中で、歌會の席上の惡戲氣分や樂屋落氣分から座興に作られたもの等を省き、大部分を抄出したものである。以て子規居士の和歌を傳ふるに十分だと思ふ。」と書いてゐる。ついで昭和五年五月には改造社版全集第七卷が發行されたが、その中には新體詩と共に「竹の里歌」が收められてゐる。これはアルス版全集中の「竹の里歌」より短歌五首多いだけ

で、それはアルス版全集の編輯後記中にすでに訂正されてゐる通りで、一々對照し直したのではないが、おそらく同樣であらう。同年六月には改造社の現代短歌全集第四卷に長塚節の歌と共に「正岡子規集」が出版された。編者は寒川陽光で、短歌八八八首を收錄してある。二十一年から三十年に至る作中から一二首を撰して、初期の歌風を見せしめようとしたこと等にも特色がある。

この外、大正一萬歌集等の如き類題別の編著、或は「現代日本文學全集」中の「現代短歌集」の如き作者別の編著の中に、子規の歌が採錄されてゐるものは多いし、改造社の「日本文學大全集」中の正岡子規全集にも歌集は含まれてゐるが、上記の書で略ゞ盡してゐる。子規全集中の歌集と「定本子規歌集」は全く同樣の者といふを得べく、誤植等の問題は別として、一番後で出た改造社版全集が最も完全で又一番得易いものと言ふべきであるが、一層入手し易い點では、岩波版のものは最もよく「子規遺稿竹の里歌」や齋藤茂吉の「正岡子規選集」等も、なほ無用視すべきものではないのである。左に以上の歌集所收の歌を年度別に表示して置く。

編者	刊行年代	書名	年代＼歌數		計	備考
伊藤左千夫外六氏	明治三十七年十一月	子規遺稿竹の里歌	十五年		571	卅三年長歌五首、旋頭歌十二首、卅四年旋頭歌一首、卅五年長歌九首、他に俳歌。
			廿一年			
			廿二年			
			廿三年			
			廿四年			
			廿五年			
			廿六年			
			廿七年			
			廿八年			
			卅年	3		
			卅一年	95		
			卅二年	70		
			卅三年	312		
			卅四年	67		
			卅五年	24		

編者	齋藤茂吉	齋藤茂吉 古泉千樫	寒川鼠骨 外三氏	子規全集刊行會	寒川鼠骨	寒川鼠骨 外三氏	寒川陽光
年月	大正十年十月	大正十二年三月	大正十五年四月	昭和三年三月	昭和三年十月	昭和五年五月	昭和五年六月
書名	正岡子規選集	正岡子規 竹乃里歌全集	アルス版子規全集第六巻 竹の里歌	定本子規歌集	岩波文庫 子規歌集	改造社版子規全集第七巻 竹の里歌	現代短歌全集第四巻 正岡子規集
			1	1		1	
			63	63		63	
			6	6		6	
			5	5		5	
			15	20		19	
			7	8		8	12
			14	14		14	
			18	18		18	
			17	17		17	
		6	6	6		6	
	41	465	610	610	247	610	169
	61	244	302	302	185	302	146
	188	519	527	527	423	527	442
	63	84	95	94	78	95	69
	15	49	73	73	49	73	50
計	368	1367	1759	1764	982	1764	888
備考	全部短歌。	卅三年長歌五首、旋頭歌十二首、卅四年長歌二首、卅五年長歌十首他は短歌。外に補遺として卅二年二首、卅三年三首、卅五年四首を加ふ。	卅三年長歌六、旋頭歌十一卅四年長歌二、卅五年長歌十首、他は短歌、後記に、廿四年四首、廿五年一首を補ふ。	長歌、旋頭歌の數は前者に同じ。廿四年に短歌一首重複、卅四年に短歌一首缺。	卅三年長歌五、旋頭歌十二卅四年長歌二首、卅五年長歌十首、他は短歌。	長歌、旋頭歌數アルス版全集に同じ。	全部短歌。

さて卅年までの所謂初期の作歌については、すでに一瞥した故、卅一年の作から少しくみてゆきたいと思ふが、要するに、子規が年一年、自分の境地を高め、作品を輝かして行つたといふ、實に簡單な事實を述べることに筆者の責務は果されるのであらうとおもふ。

「子規遺稿 竹の里歌」は子規自筆の「竹の里歌」の稿本から選鈔されたもので、自筆稿本に最も近い形のものと見るべき全集本「竹の里歌」に對する百分比は、卅一年15%強、卅二年23%強、卅三年20%強、卅四年10%弱、卅五年23%弱である。齋藤茂吉の選集は、すでに出版されてゐた「竹の里歌」以外、新聞や雜誌から子規の歌を蒐めてゐて、その中からかなり慎重に撰拔したものであるらしいが、後に出した千樫と茂吉の合著の歌の殆んど大部分は見てゐたと想像してもよい。で、この竹乃里歌全集に對する選集の百分比をみるに、卅一年9%弱、卅二年25%、卅三年30%強、卅四年15%、卅五年33%強となる。更に寒川鼠骨の撰をみるに、これは全集本に據つたものである事は明かで、岩波文庫本の方では、卅一年10%強、卅二年31%弱、卅三年20%強、卅四年82%強、卅五年67%強の歌數を撰した事になり、短歌全集中の正岡子規集では、卅一年18%弱、卅二年37%弱、卅三年24%弱、卅四年73%弱、卅五年69%弱の歌を拔選してゐるわけである。

左千夫外六氏撰の「竹の里歌」齋藤茂吉撰の「正岡子規選集」寒川鼠骨編の「岩波文庫子規歌集」及び「改造文庫正岡子規集」各々或程度まで其選歌數に制限を受けねばならなかつたといふ事は考へられ、且つ撰の標準・態度に相異つたものがあることはもとよりであるが、上記の比率は、一つの共通の事實を指示してゐる。即ち短歌全集本は三十三年の歌に撰した率が一寸多いが、他は卅四年が最も比率高く、卅一年から順次比率を増して居

四年に至り、卅五年には率が少くなつてゐるといふ事實である。この簡單な事實は、(撰者に多少鑑賞態度の差があり又撰抄歌數の制限を受けてはゐても)卅一年以後子規の作品が漸次進展成長してゐるといふ事實を裏書するものに外ならない。卅五年に比率が下つてゐるのは、病が高度に進み作歌の氣力も衰へたがため良歌が乏しいといふ事實を表してゐるとみる事が出來る。漫然と子規の歌集をくりひろげて通讀してさへも、彼の歌が年と共に進展し、深みのあるものに成長して行つた事を、明かに確かに感知することが出來よう。

歌の材料・用語・趣向等の雜多豊富なことは、卅一年の作が最たるものであらう。が、一面、手あたり次第何でも歌に拵へあげたと云ふ風が歴然とみえる。ほんとうの試みの時代で、暗中摸索といふやうなわけで、歌に屑が多い。卅二年になると歌數は半減したが、何でも歌にこしらへあげると云ふやうな弊がやや少くなり、實地實感の詠がかなり多く、餘程氣分に一貫したものが感じられるやうである。卅三年には大分油が乘り作歌數も多いが、手法や見方等にも一歩進め得て、秀歌も相當多く目につく。殊に後半期に佳作が多い。卅四年は病勢が段々重くなつたため作品は少くなつたが、それは一面歌を理解することが深くなるにつれ、自重して、拙作を濫造する如き事が出來なくなつたのだといへる。今迄試作錬磨した取材・手法が自らにして作品を産んだといふやうな者が多い。今迄の最もよいものが凝集して、この年の作にあらはれたといふ觀がある。歌數は少いが、傑出した歌は多くこの年にうまれたと言つてよいのである。卅五年は、病勢が非常に進んだため、作歌に力を入れることは出來なかつた。併しその數少い歌は、おのづからにして生れたと思はれるやうな、自然な平明な美があつて、捨て難いのである。長歌に特に味深いものが見出される。けれど

も、作歌力は病勢劇しきがため著しく挫かれてゐて、自然さはあるが、努力なく、十分の燃燒なく、投げ出されたまゝといふ傾きあり、頂點はやはり卅四年の秋に置かれねばならないとおもふ。

子規は、この短日月に、短歌の一高峯にまで辿り着いたのであるが、彼の歌は如何にして成長して行つたか、彼は如何に努力して、自己のみちを拓いて行つたか、等に關して、些か述べてみようと思ふのである。

三十一年二月「歌よみに與ふる書」を發表して、猛然と歌の革新に着手したが、その議論を裏づけるものとして最初發表したのが「百中十首」の歌である。その當時の子規の熱心さはすばらしいものであつた。その頃書いた書簡に據つても、彼の意氣・抱負を十分うかゞふ事が出來る。少し餘談に亘る如くではあるが、即つて彼の歌の生れた根本のものに觸れることでもあるとおもふので、書簡中から二三引用して置く。

此頃歌をはじめ候處餘り急激なりとて陸翁はじめ皆々に叱かれ候へどもやりかけたもの〻死ぬる迄やる決心に御座候昨夜も瀾村子來訪歌の話に夜の二時迄更かし申候同子も漢語が多過ぎると申て患苦いたしくれ候前月末頃は歌のため毎夜二時三時に及び或は徹夜など致し候此頃のよわりも多少はそれに原因致し候ひけんと存候尤も愚見は漢語を用ゐざれば歌にならずなど申すにては無之萬葉調などは大に好む所に御座候（卅一年二月十八日、飄庵宛）

近日歌論漸盛の趣小生も彼是さし出口叩くやうに相成應變なし御年の爲に相成候事と存じ居候尤も歌については舊年來しばしば打て出でなんとして出づる能はざりし事情有之此度の發表するが大異因に相成申候つまり感謝といふものは人を

も自分のも一切出さざる方針を相取申候然るに過日來歌論和歌（註三）續々あらはれ候につきては愚論拙歌をも並べたく羯南氏に相願ひ候上にて拙歌等掲載の儀を許され漸く數年來の宿志を遂げ申候されば或は言の急激に渉り候もの有之候も畢竟多年腹の中にためおける不平の一時に爆發したるによるものに御座候拙歌に就きては攻撃四方より至り候へども自ら多少信ずる所有之候上は死を決してやる所存に候當此事に關しては御高見も承り度愚見も申述度存候へども病中不任意大略まで申上候（卅一年三月十九日、落合直文宛）

歌ものりかゝつた船にて今更後へ戻すわけにも參らずやるだけはやり可申候自分左程危險には思はねども周圍の人（俳人は除け）が甚だあやぶみ居候處如何にも面白く候小生如何に愚なりとも將た病躰なりとも今の歌よみどもには負け申間敷候呵々（卅一年三月二十四日、得能文宛）

歌につきては内外共に敵にて候外の敵は面白く候へども内の敵には閉口致候内の敵とは新聞社の先輩其他交際ある先輩の小言に有之候まさかにそんな人に向つて理窟をのぶる譯にも行かずさりとて今更出しかけた議論をひつこませる譯にも行かず困却致候併し歌につきてはたび／＼失敗の經驗有之候故今度ははじめより許可を出願して而後に出しはじめしもの此上は死ぬる迄ひつこみ不申候（卅一年三月廿八日、夏目漱石宛）

（註三）「新自讃歌」等が發表され賛否の論が盛であつたのなどをさす。

數年來の計畫であつた短歌革新意見を公にし始めたのであるが、反對者は新聞社内にも少くない有樣で、非常に困惑した。この内外の攻撃の聲喧しい中にあつて、論や作に熱中し、三晝夜眠らず作歌に力め、友人の諫爭に依つて僅かに徹夜する等の無謀を止めたといふ風であつた。その作つた歌の百ほどの中から十首を

撰んだもので、「百中十首」の歌である。選者は信綱・鳴雪・碧梧桐・虚子・露月等十一人で、即ち百十首を集める。舊派の歌人にも選評を乞うたが、皆異端視し、嘲罵し去るのみであつたさうである。まことに頑迷な既成歌人達を改造することは出來難いのであるが、新しく作歌道に出發する人のためには、「百中十首」の歌はよい燈明となつたのである。少くとも「歌よみに與ふる書」と共に歴史的に重大な意義を齎らし、大きな役割を演じたと言ふべきである。

「百中十首」の歌の特色は、直ちに卅一年の子規の歌全體の特色をも表してゐると云ふべく、少しくここに説明を加へておかう。僅か百十首の歌の中に、材料や言葉や趣向の甚だ雜多なものがある。動物では、

犬・猿・狼・鹿・猪・狸・驢馬

雁・鷹・鶴・都鳥・鶏・鶯・雀・鶉・雲雀・時鳥・鳶・梟・雉子・燕・鵲

鯖・鮎・白魚・目高・海豚

其他蛙・蛍・蝶・蝙蝠・蠶等があり、「牛かひ」「馬車」等の如き用例は、他にもあるのである。植物では、

麥・桑・椿・牡丹・芭蕉・櫻(山櫻)・梅(紅梅)・桃・杏・山吹・柳・水仙・躑躅・連翹・菊・菫

芒(薄・尾花)萩・藤・菊・唐黍・蘆・河骨・若草・しめぢ・薬・竹・芝・榎・椎・欅

等が詠みこまれてゐる。

軒先・手水鉢・五尺のみどり・後夜の鐘・太鼓・となりの娘・南大門前・竹竿・舊友・胡人・胡笳

順禮・縁日・孤村の圃・竹籔・婆々・子守稚・關所・斬・手習・寺子屋・興補する

等、從來の歌に餘り驅使されなかつた漢語や俗語の使用は、一々あげきれないほど、充滿してゐる。

一首の詠み口からみると、新古今邊の影響を露骨にあらはしてゐる歌もあり、漢詩・漢文から脫化したと思はれる者もあり、俳句から直接得て來た趣向のものは最も多いやうに感じられる。形式上から言ふと、字餘り歌の多いこと等が最も注意される。字餘りの作が全體の四割程で、中で結句の字餘りが、その半數近くに達してゐる。

榛の木に鴉芽を噛むころなれや雲山を出でて人畑を打つ
緣先に玉卷く芭蕉玉解けて五尺のみどり手水鉢を掩ふ
人も來ず春行く庭の水のうへにこぼれてたまる山吹のはな
とばり垂れて君いまだ覺めずくれなゐの牡丹の花に朝日さすなり
武藏野に春風吹けば荒川の戸田の渡に人ぞ群れける
夜一夜荒れし野分の朝凪ぎに妹が引き起す朝顏の垣
峰こえて樛多きがけの岨道に山別れする鷹を見るかな
寢しづまる里のともしび皆消えて天の川白し竹藪のうへに
日にうとき庭の垣根の霜ばしら水仙にそひて炭俵敷く
武藏野の冬枯芒婆々に化けず梟に化けて人に賣られけり
病みて臥す窓の橘花咲きて散りて實になりてなほ病みて臥す

霜防ぐ菜畑の葉竹はや立てぬ筑波根颪雁を吹くころ

齋藤茂吉の選集では「百中十首」の中から以上の十二首が選されてゐる。而して同氏は、

俳句の方で悟入した、あらゆる見方、あらゆる技巧を試みて居られる。革新運動の要約でなければならぬ。「破壁」とか「變化」とか「新」とかいふものが盡く出て居るといつてよい。この「變化」「新」に留意されたことは先生の一生を通じてである。

と言つてゐる。用語や歌材や趣向の上に廣く變化を求めてゐる事は、確かにすばらしいものではあるが、幾分机上の試作といふ弊は免れない。私は齋藤氏の言葉を否定しようとするのではないが、その變化とか新とか云ふものを强調し意識的にめざして作つたこの期の歌は、歴史的（和歌史並びに子規の歌の發達史上）に意義は重大であつても、藝術的にはそれだけ、人爲的で破綻があつたりするといふ不滿が附纒うのである。併し俳句に於てすでに藝術美を摑み、又その表現の骨卽ち寫生的手法に習熟してゐた後であつたから、茂吉選の上掲の歌の如き、かなり秀れた歌を詠み得たのである。これは單たる試作ではなく、當時の歌壇としては作品價値からも稀有な收獲とすべきであつた。配合趣味で繪畫的なこと等は、茂吉の選歌を通じても肯かれる特色である。この外「百中十首」中のやゝ良いとおもふもの十首をあげておく。

こゝろみに君の御歌を吟ずれば堪へずや鬼の泣く聲聞ゆ（金槐和歌集を讀む）

古庭の萩も芒も芽をふきぬ病癒ゆべき時は來にけり

小餅取るわらはべ去りて門川の河骨の花に目高群れつゝ

我庭の小草も萠えぬ限り無き天地今や緑するらし（病中）

菅の根の永き春日を端居して花無き庭をながめくらしつ（病中）

金州城外の三崎山といふは國のために死したる通譯官三人を葬る處なり

三崎山に君が御墓を弔へば鵲立ちて北に向きて飛ぶ

潮早き淡路の瀬戸の海狭みかさなりあひて白帆行くなり

昔見し面影もあらずおとろへて鏡の人のほろほろと泣く（病中對鏡）

宮嶋にともす燈籠の影落ちて夕汐滿ちぬ舟出さんとす

行き暮れし眞葛が原の風寒み鶉鳴くなり人も通はず

この年から既に一つの題によつて十首位の歌をよむ事を實行してゐる。「雛祭」「雲雀十首」「春の水」「鳥の巣」「わが庭」「時鳥」「蕈狩」「車」等は十首の例で、「春雨」「釋教の歌」「馬」「太神宮火あり」「若葉」「病牀の夢」「端午」「閒適」「螢」「村居」「五月雨」「桃太郎」「佛生會」「神祇」「夕立」「故鄕を憶ふ」「海水浴」「雲の峰」「團扇」「秋のはじめ」「淸人に代りて志を述ぶ」「天長節」等八首の作は最も多いのであるが、「ベースボールの歌」等は九首の例で、其他五首、六首、七首の例もみられ、同題で一首、二首づゝ作つたといふやうたのは乏しい。俳句の習練時代一題十句といふやうたことを盛にやつた方法を以て短歌にも臨んだ（註一）のであろが、新しい意味のこの題詠は、子規の歌を所謂連作的に形づくる機緣となつてゐるもので、歌壇史上にも注意されねばならぬ。「雲雀十首」を例示しよう。

（一）空高み雲雀の聲に日はさせど里また眠れる山陰にして
（二）野の空の夕暮寒み風荒れて武藏の雲雀下總に落つ
（三）麥畑に巣立ちしあへぬ子雲雀の夕風寒く親や呼ぶらん
（四）麥の葉に風吹きわたる旅心菅笠の上に雲雀鳴くなり
（五）原中の落草淺み風吹きて夕日の雲雀巣にぞ鳴くなる
（六）山の端の峯の雲に雲雀鳴く春のあけぼの旅ならましを
（七）麥種うる小嶋を近みたまたまに雲雀鳴くなり帆檣の上に
（八）翔び上る雲雀の聲の空に消えて天つ御神の音づれもなし
（九）雲の上にわが思ふ人の住みもせばあがる雲雀にことづてましを
（十）うら〳〵と春日さしこむ鳥籠の二尺の空に雲雀鳴くなり

この各首間には別に緊密な有機的關係があるわけでなく、雲雀の演ずる種々な動作情景乃至雲雀を通じて單なる思ひ付きを歌つたといふ許りのものである。比較的主觀・感懷の詞の露出してゐる(3)(6)(8)(9)、何れも感情の切實な表現といふべき類の者ではなくて、常套的な興味本位の物といふ批評で片づけられるやうな程度のものである。それさへ當時の歌壇では幾分表現にも內容にも新鮮味があつて、レベルには達してゐたと言はれよう。この外の、平易な寫實的な歌も、生き生きした實感から生れたといふやうな者は無く、表現上にも物足らぬ箇所が多い。俳句の發想法をそのまゝ採つて來たやうなものがあつて、それらが表現上の主な點で

ある。全體からみて、何でも歌にしようとして、實感に乏しいものでも作りあげたらしい點がみえ、從つて表現上にも種々な手落ちが多い事は爭はれないが、美點をあげると、寫實味のある作風、物の配合のうまさ等は流石手に入つてゐる所がある。この一聯はこの年の初期の作としてはいい方のものであるが、(7)(10)等は佳作とするに足るであらう。

私は彼が色々の題材に手を著け、趣向にも新工夫し、用語の範圍を擴大しようと力めたが、その試みは十分成功してゐない不滿を洩らした。が、勇敢にすべての物を題材にとり入れ、ともかくこれだけに消化した事は偉いと思ふ。かゝる試みは、革新の出發にあたつては有意義で、たとへはじめは十分成功したとは言はれないにしても、彼自身の作歌體驗上非常に有益であつたに違ひない。廣くゆきわたるといふよりも深く掘り下げてゆくべきであるといふ自覺は、この時期の歌の試作の失敗によつて會得したものであり、又技巧上の進展にも、この頃の我無者らの作歌が有力なヒントを與へてゐる事を考へたならば、予規その人にとつて必ず一度は通過すべき、必須な習練の時期であつたと言ふべきである。一首づゝ拾へばいい歌もあるが、一聯全體として特色あるこの年の作としては、「われは」の歌に先づ指を屈したければならぬ。

世の人は四國猿とぞ笑ふなる四國の猿の子猿ぞわれは
ひんがしの京の丑寅松(イ杉)しげる上野の陰に晝寢すわれは
いにしへの故里人のゐがきにし黒繪の竹に向ひ坐すわれは
人皆の箱根伊香保と遊ぶ日を庵に籠りて蠅殺すわれは

富士を蹈みて歸りし人の物語聞きつゝ細き足さするわれは
吉原の太鼓聞えて更くる夜にひとり俳句を分類すわれは
昔せし童遊びをなつかしみこより花火に餘念無しわれは
菓物の核を小庭に蒔き置きて花咲き實る年を待つわれは

これらの歌はとりどりに趣があつて捨て難い。人間子規の眞面目、純眞な人間味がほのかに漂うてゐる。彼らしい生命が盛られてゐる。力があり眞實がある。「昔せし童遊びをなつかしみ」等と讀みあげてくると、何となくうれしいのである。寫生歌を信條とし得意としてゐたと思はれる彼は、却つて主觀味の多い主情的の歌に佳い作をかなり多く殘してゐるのであるが、「われは」二篇の作等は、その一例である。

子規の歌集を讀んだ事のない人のために、卅一年の作(百中十首は除く)の、比較的佳作と思はれる者を、左に二十首あげて置かう。

遠近に菜の花咲きて薄日さす椿の木隱れ人畑を打つ
岡越えて利根川近し風そよぐ麥の葉末に白帆行く見ゆ
もろ／＼の男餓鬼女餓鬼を臼に入れて搗かんとす鬼の杵ふりあぐる
寒山も豐干も虎も眠りけり四つの軒に松葉散る山
いくさ過ぎて人無き村を來て見れば鳴す、山道の邊の木に
わが庭の垣根に生ふる薔薇の芽の莟ふくれて夏は來にけり

緣立つ庭の小松のうれ低み上野の杉に鳶の居る見ゆ

若葉さす市の植木の下陰に金魚あきなふ夏は來にけり

亡き友とありし昔をかたらひて泣かんとすれば夢さめにけり

われ昔學びのわざのにぶくして叱られしことぞ夢に見えつる

岡ぞひの窪田溢れて人も馬も水蹈みわたる五月雨の頃

たま／＼にちひさき花火あがりけり夕涼み舟今や出づらん

鳴神の鳴らす八鼓こと／＼く敲きやぶりて雨霽れにけり

足立たば不盡の高嶺のいたゞきをいかづちなして蹈み鳴らさましを

足立たば北インデヤのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを

雲の峰野末に立てば道の邊の濁れる水をむすぶ旅人

夏草の枯るゝそばより葉鷄頭のくれなゐ深く伸び立ちにけり

三かゝへの樅の下陰座を占めて筑波の山にわれ向ひをり

野らの木に百舌鳴く聞けば雨晴れぬ田刈れ棉とれ妹よ背よと鳴く

川上に鷄鳴く里の名も知らず山青くして家五つ六つ

三十二年になると、現實感眞實味の幾分濃い作品の數を增してゐる。外を探し求めた眼を今や漸く內に向

けつつあるやうである。縁遠い所の物にわざ／＼目をさらさないでも、もつと卑近な自分の身邊にいくらでも歌の材料は求められるといふ事を徐々に理解してきたのであらう。「金槐和歌集を讀む」といふ六首の歌等は前年の歌に見られる、過去の特殊な題材を趣味的に即興的に扱つてゐる如き多くの作とは異り、力強い感激に滿ちてゐる。餘談ではあるが、前年にも「金槐和歌集を讀む」といふ一首があるが、あれもなか／＼強くはないが、少し惡い意味の遊んでゐる風がみえる。この年の歌に至つては、

　人丸ののちの歌よみは誰かあらん征夷大將軍みなもとの實朝

　はたちあまり八つの齡を過ぎざりし君を思へば愧ぢ死ぬわれは

　君が歌の清き姿はまんまんとみどり湛ふる海の底の玉

のやうな、單的な眞實味のある、力にみちみちた響を持つに到つてゐる。

卅一年と卅二年の歌の差が、是を以て代表出來るとは言はぬが、かかる力強い作のある事は、この年の作品が前年の作よりも現實感に基く眞實性を加へたことを直ちに納得させるのだ。「浴泉雜記」を讀みて虛子に贈る」(十首)「把栗の婚」(十一首)のやうな歌は、輕いもので、生命の何のといふ程のものではなからうが、卑近な身邊に題材を見出して來た事の一例とはならう。いい歌も混つてゐる。この年二月初旬、秀眞や麓が子規庵を訪ねてゐるし、段々歌の同志も出來、三月から毎月歌會も開き、秀眞や麓の家へ出掛けて實景實感の歌を作つたりしてゐる。歌會は前年三月二十五日、俳人仲間だけで一度催されたが、この年三月から翌年十月までは殆んど繼續して行はれた。「日本」新聞に歌會の結果が發表されたのは、七月二日の歌會からである。

香取秀眞其他の諸友への書簡の端に記した歌なども一寸目を惹く。

十四日お晝すぎより歌をよみにわたくし内へおいで下され（三月十三日、麓へ）

明日は君がいでます天氣よくよろしきうたの出來る日であれ（同日、秀眞へ）

風呂敷の包みを解けば驚くまいか土の鑄型の人が出た出た（三月廿八日、秀眞が造れる土の子供を見て）

口語的發想で、隨分大膽にやつてのけて、或程度の成功を得てゐる。前年の作にも口語はかなり自由に用ひてゐるのがあるが、これらにはそれが大膽にあらはれてゐるので、歷史的に見遁されない。何でもないやうで、生命を捉へてゐる。秀眞に與へた歌の中に、

靑丹よし奈良の佛もうまけれど寫生にますはあらじとぞ思ふ

天平のひだ鎌倉のひだにあらで寫生のひだにもはらよるべし

第一に線の配合その次もまたその次も寫生々々なり（四月廿五日、秀眞に贈る七首の歌の中より）

の歌がある。歌は第二として、彼の當時、作歌者としての態度がよく伺はれる。注意すべき歌として、「病牀喜晴」（十首）をあげよう。

臥しながら雨戶あけさせ朝日照る上野の森の晴をよろこぶ

朝牀に手あらひ居れば窓近くうぐひす鳴きて今日も晴なり

たまさかに障子をあけてながむれば空うらゝかに鳥雁の渡る

夢さめて先づひらき見る新聞の豫報に晴れとあるをよろこぶ

目をさまし見れば二日の雨晴れてしめりし庭に日の照るうれし

晴るゝ日を病の牀にすわり居て文讀み居れば文おもしろき

麗かにぬくき日和ぞ野に出でゝ桃さくを見ん車やとひ來

あたゝかき日を端居して庭を見る萩の芽長きこと二三寸

朝晴れに花賣る人を呼び入れて緋桃を買はず連翹を買ふ

カナリヤのさへづり高し鳥彼れも人わが如く晴をよろこぶ

これらの歌に生命の深いあらはれがあると云ふのでは無い。唯この種の卽現實の、病牀の歌がうまれてきた事を喜ばしく思ふのである。前年の歌には病牀生活の歌等は非常に尠いに比し、この年の歌にはそれが少くない。所謂卑近な而も切實な自身の現實生活に眼を向けて來たのである。「寫眞をとり出して昔を忍ぶ歌」等も眞實感があつてよいが、就中、

四年前寫しゝ吾にくらぶれば今の寫眞は年老いにけり

かりそめに寫し置きしかわがのちのかたみと思へば悲しかりけり

等感銘深く味はれる。前者は平易に淡々と言ひ放つてセンチメンタルをみせぬ所に、後者は反對に、正直に詠歎してゐる所に、何れもいいものがある。

特異な題材で、而もゆくところまで到つてゐると思はれる歌に、「繪あまたひろげ見てつくれる歌の中に」の詞書のある十首の作がある。

なむあみだ佛つくりがつくりたる佛見あげて驚くところ
もんごるのつは者三人二人立ちて一人坐りて楯つくところ
岡の上に黒き人立ち天の川敵の陣屋に傾くところ
あるじ馬にしもべ四五人行き過ぎて傘持ひとり追ひ行くところ
木のもとに臥せる佛をうちかこみ象蛇どもの泣き居るところ
うま人のすそごのよそひ駒立てゝ遠くに人の琴ひくところ
かきつばた濃きむらさきの水滿ちて水鳥一つはね搔くところ
いかめしき古き建物荒れはてゝ月夜に獅子の壇登るところ
屋根の無き屋かたの内にをとこ君姫君あまた群れゐるところ
看板にあべかは餅と書きてありたび人ふたり餅くふところ

かういふ歌が澤山ではまた飽きる事であらう。概して面白みが中心になつてゐる觀がある。特に詞の驅使のおもしろさ、就中結句を皆「何々するところ」といふ風にしてゐる所(これは前年の「われは」一聯の作なども同樣であるが)等が、變つてゐて面白いのである。併しこのとらへ方、うつし方、共になか〳〵巧妙で、十分の手腕を思はせるもの、子規の獨壇場の感がある。「あるじ馬にしもべ四五人行きすぎて」等の巧みな省略法を用ひた表現の接續の仕方等、誰にでも出來るといふやうなものではないのである。

卅二年は前年よりも勿論技巧上も進歩してきてゐる。漢語等の使用の多い弊も、段々拔けきつてゐる。卅

二年十二月發表の「短歌第六會」といふ文に、子規は、昨年の短歌革新の時から今日までは主として趣向の變化を求めるといふ方に心を用ひ、調子といふ方面は餘り顧みられなかつたが、今後は想と共に調に注意を向けねばならぬといふ意味をのべてゐるが、すでにこの年に於て、この方面に自覺する所があつて、それが作歌にも具現されつゝあつたと觀られるのであるが、とにかく空想で拵へたやうな歌が少くなり、卑近の現實に心を向け、歌に實感味直接性を加へた事が、最主要なことゝおもふ。歌の數は少くなり、用語や歌材はむしろ狭くなつたが、歌はそれだけ純化され深くなつてきた點が少しでも認められるといふ事は、卽ち彼の歌の成長を意味するものでなければならぬ。

左に、この年の歌の比較的佳作の部に入るべき作（すでに例示した作は除き）二十首を擧げておく。

朝な／＼竹藪になく鶯の庭の木まではいまだ來ずけり

春風に立ちいでゝ見れば上野や黑髮山に雪殘る見ゆ

大森の里過ぎ行けば蜑が住む海苔麁朶垣の梅さかりなり

借りて住む磯の家居は海見えて白帆行くなり葦垣の外に

おくり物牡丹の花のくれなゐに草のいほりは光滿ちけり

こいまろぶ病の床のくるしみのそのかたはらに牡丹咲くなり

よき妻を君は娶りぬ妻にあれど妹にかなはぬ君が妻君に（把栗新婚、錄二首）

米たくば共にかつゑん魚あらば片身わけんと此妹共住

庭の内をそゞろありけば月影にほのかに見ゆるひあふぎの花

世の中に蚕のめをとゝ歌はれて妹は肥ゆ肥ゆ伕は痩せに痩す

肩なめて寫しゝ友は今は無し病みさらぼひて世に殘る吾よ

いたく痩せし人の姿よ今さらになんぢをあはれむ足なへをとこ

足引の山のしげみの迷ひ路に人より高き白百合の花

物干のころもの袖に蟬鳴きて晝照草に日は夕なり

椎の木の木末に蟬の聲老いてはつかに赤き雞頭の花

蓬生の小庭の隅に吾妹子がめでゝ植ゑたるおしろいの花

四年寐て一たび立てば木も草も皆眼の下に花咲きにけり

青空に聳ゆる庭の葉雞頭は我にあるけといへるに似たり

我昔よく見て知りし金杉のいも屋の庭の秋海棠の花

岸の邊の花の露草花垂れてきたなき水によごれてぞ咲く

柿を守る吝き法師が庭に出でゝほう／＼といひて鳥追ひけり

火にも燒けず雨にも朽ちぬ鎌倉のはだか佛は常佛かも

旅にして佛つくりが花賣に戀ひこがれしといふ物語

あたらしき庭なつかしみ足なへのわれ人の背に負はれつゝ來ぬ

水盤のふりにし筆の跡見ればいにしへ人は善く書きにけり

新室に歌詠み居れば棟近く雁がね啼きて茶は冷えにけり

牛を割き葱を煮あつきもてなしを喜び居ると妻の君にいへ

我口を觸りし器は湯をかけて灰すりつけてみがきたぶべし

敷物をあつみうれしみ家のごと股さしのべて物うち語る

桐火桶膝に抱へし夜は更けて頤熱く歌成らんとす

斯く卑近な物に美を認め、それを歌ひあげるといふ傾向は三十三年になつては益々顯著になつてゐる。ねながら庭の草花を眺め、その移り變る四季の風情にも深く心をとめ、つれづれなるまゝに、六疊の室の貧しい什器にも、その思出をなつかしみ、一つ一つ丹念に歌につくつたりしてゐる。

先づ、病臥の身邊、心情をそのまゝ歌つたに近いとおもはれるもの、別の言葉でいへば、構へをすてたものでなく、やゝ心境的なるものが全體の半にも達してゐる。

いたつきの閨のガラス戸影透きて小松の枝に雀飛ぶ見ゆ

以下十三首の「ガラス窓」の歌、

山吹は南垣根に藤の花は東塀に咲きむかひけり

以下十首の「庭前即景」の作、

　　松の葉の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず

で始まる「五月廿一日朝雨中庭前の松を見て作る」といふ詞書のある十首の歌、

　　ほとゝぎす鳴くに首あげガラス戸の外面を見ればよき月夜なり

ではじまる「六月七日夜病牀即事」(十首)の歌、

　　眞砂なす數なき星の其中に吾に向ひて光る星あり

以下九首の「星」の歌、

　　朝ながめ夕ながめして我庭の菊の花咲く待てば久しも

以下九首の「菊」の歌、其他「我室」「我家の長物」等の散文中の歌等も皆身邊のものを詠み出でたものである。前年も道灌山へゆき又本郷金助町の岡麓宅へ行つた時、小石川原町の秀眞宅を訪問した時の歌等にはよい作を示してゐるが、この年も「龜戸まで」の紀行文をかいてゐるが、その中にはやはり歌を挾んでゐる。「週間記事」「病牀十日の內」「病牀四日間記事」「一日一諫」「體溫日記」等の作の中にも、身邊・心情をうたつたものとして佳作が少くない。

消息贈答の歌等の多くなつてゐることが注目されるが、これも卑近な物に詩美を摑んできた證據である。たゞ形式的に風流ぶつて歌を贈答するやうな惡趣味で無く、彼の贈答の歌はよく心持が徹つてゐて、そこにも容易に追從し難い長所をあらはしてゐる。

　　愚庵和尚のもとへ

歌をそしり人をのゝしる文を見ば猶ながらへて世にありと思へ

から歌につくりてめでし君が庵の梅の林は今咲くらんか

折にふれて思ひぞいづる君が庵の竹安けきか鷄恙なきか

左千夫へ

竪川の茅場の庵に住居せば二十日の月い野を出でぬらん

我庵の硯の箱に忘れありし眼鏡取りに來歌よみがてら

吾妹子をなほし見まほしと思へども眼鏡忘れて見れども見られぬ

秀眞へ（四月十日）

土がたにうつしかたどる我顔の少しゆがみて猶面白し

土がたを入れたる罐を携へて秀眞がり行く途中氣をつけよ

此次に何をこねんか驚く莫れ大慈大悲の觀世音菩薩

觀音を寫生なさんと思へども觀音あらず似たる女もが

方丈の室にこもりて捏ねんと思ふ二丈五尺の土の盧舍那佛

今成文平へ（四月十七日）

青疊青色あせし我庵に君がめぐみのくらしゝの皮

くらしゝの羊の皮をわが敷きて鷄の瀬見れば樂しも

長塚節へ（四月二十一日）

竹むらにかくれて生ふる山椒の芽のからくも君にこひわたるかも

秀眞へ（五月十日）

今日ゆのち新聞おくる新聞の月々の代は拂ふに及ばず

原千代子きのふ來りてくさ／＼の話きゝたりかすてら喰ひつゝ

たて川のさちをよべ來てくさ／＼の話ありたり君が身につきて

なりはひも大事なりけりつきあひも大事なりけり名をあぐるにしかず

左千夫へ（六月八日）

今日や來ます明日や來ますと思ひつゝ病の床に下待ちこがる

十日は發句の會なり九日の朝からきませ茶は買ひてあり

漱石へ（六月二十一日）

年を經て君し歸らば山陰のわがおくつきに草むしをらん

風もらぬ釘つけ箱に入れて來し夏だい／＼はくさりてありけり

淺井忠へ（六月二十五日）

くれ竹の根岸の豚はうまからずぱりす思へば涎し流る

左千夫へ（七月十日）

竪川の流れ溢れて君が庵の庭の木賊に水は越えずや

此外、左千夫や秀眞に與へた他の作があり、赤木格堂に與へた歌等もある。消息贈答の歌は、容易の如くして、決してさう作り易いものではない。餘り四角ばつたものでは面白くなし、常規を逸すれば惡戯氣分のものになるし、又甘いものになつたりする。得意不得意の著しくあらはれる方面であるが、しかしこれが相當に作れるといふ事は、作家として或程度の手腕が具はつてゐることである。子規はこの方面に自ら長所を持つてゐたのであるが、それは又技巧の熟達を物語るものでもある。彼の消息の歌にも卽興的機智的の弊の見られる者もないではないが、概して情味豊かな質感にみち、人間子規の面目が遺憾なく發揮されてゐる。

たらちねの母にわかれて夜泣く子を守るとし聞けば我さへ泣かゆ

等いふ秀眞に與へた歌をよむならば、人としての子規の溫みのあつた一面をよく覗ふ事が出來る。秀眞等に對しては、實生活にまで立ち入つて、その放縱を戒めたりして細かい親切を盡してゐることは、書簡に依つて知られるが、「たて川のささらをよべ來て」「なりはひも大事なりけり」等の歌は、さういふ心持が內にあるのである。歌の弟子では長塚節等は子規に一番愛されたらしいが、彼はこの年三月子規を訪ねて入門し、伊藤左千夫は少しく早く一月七日の歌會に始めて子規に會つたのであるが、以後子規の歿する迄常に子規庵に出入して子規の教を乞ひ、子規一家の面倒をみたのである。子規は病勢重くなつて遂に子規庵の歌會は十月限りでやめ、十一月からは左千夫と麓の宅で交代に催すに至つた。

實は門下に對しては、單なる友情とか愛情といふよりも、寧ろ自己の事業の後繼者として育まうとする氣

い嚴正な精神をも伴つたやうであるが、又長く病床に臥し妻子も無い佗しい生活には一入肉親に對するやうな愛情を門下の人に向ける事も多かつたのであらう。この年の作「獄中の鼠骨を憶ふ」の一聯等には、彼の正義觀と門下を思ふ至情が如實に表現されてゐるのである。

彼が三十一年以後、試みの時代から漸く心境的のものを多く作るやうになつたといふ事を、主として述べたのであるが、勿論この年も、試作研究といふ方面を等閑にしてはゐない。たとへば「艶麗といふ題にて」と題し、

　春の夜の衣桁に掛けし錦襴のぬひの孔雀を照すともし火

等十首の歌をつくつてゐる。漢詩の文句を飜案した作は三十一年にもあるが、この年は俳句を和歌に飜譯する試みをしようとして、蕪村の「白露や家こぼちたる萱の上」を、

　きのふ迄ありにし家はこぼたれて萱の上なる露の白玉

などと作つてゐる。歌會の歌には相變らず題詠をして、作歌の修練を怠るまいとつとめてゐる。特に題詠の歌を募集してゐること等は注意すべきである。「櫻の歌」(三十首)「讀平家物語」(十七首)等は新聞で題詠を募集した時、自ら作つた歌であるが、その苦心はなみ〳〵でなく、その研究心の旺盛なるは十分尊重せらるべきである。新聞に大がかりで題詠を募集し、自らも作るといふやうな態度は、今日に於ては非議される性質の事であるが、當時は、さういふ事にまで疑問を挾む者は勘なかつたに違ひない。併し題詠と言つても卅一年頃のものとは、「題詠」の意味する内容、いはゞ題詠に向ふその作歌態度に於て、著しく高度の進展を示

してゐることは忘らるべきでない。即ち一方卑近な所、實感あるものから摑みとつてくる態度を多くの場合離れなかつたと共に、一面豊かなる技法の熟達を縦横に試みてゐるのである。

この年の歌では「藤花」(七首)の歌等を大いに推奨する人もあるが、それは技法に於て一進展を示してゐるものと言へよう。「讀平家物語」等も技法・摑み方に苦心した作として注意すべき者の一つである。が、私は寧ろ「菊」の歌や「牡丹」(註、左千夫から牡丹を贈られた時の作)等を先づあげたい。ともかくこれらの歌は、卅四年の後の傑作に接續する境地の作品として、逸すべからざる者であるからである。左に歌をあげておく。

牡丹

いたつきに病み臥せるわが枕邊に牡丹の花のい照りかゞやく
病み臥せるわが枕邊に運びくる鉢の牡丹の花ゆれやまず
くれなゐの光を放つ唐草の牡丹の花は花のおほきみ

菊

朝ながめ夕ながめして我庭の菊の花咲く待てば久しも
年々になかめことなる我庭の今年の秋は菊多かりき
ガラス戸の外に咲きたる菊の花雨に風にも我見つるかも
我庭の松の木陰に菊咲けば昔の人し思ほゆるかも
我庭にさける黄菊の一枝を折らまくもへど足たゝぬわれは

我心いぶせき時はさ庭べの黄菊白菊我をなぐさむ

我うさをなごめて咲ける菊の花繪にし寫して壁にかけてん

冬寒き風松が枝を吹くなべに木陰の菊は色あせにけり

我庭にさかりにさける菊の花折りてかざさん人もあらなくに

三十三年は歌數も多く、かなりよい歌が多い。力の籠つてよみごたへのする歌、落ちつきがあつて品位のある靜かな歌、技巧にも到り盡したやうな歌、とりどりに愛誦すべき佳品に富んでゐる。冠辭の使用の多くなつた事等も注意される。段々歌が卽現實な心境的のものに深まりつつ、一方心境的なものの陷り易い安易さに墮せず、絶えず新を工夫し技法を練ることを怠らなかつたのだ。この年は作歌に最も力を注いだともいふべく、歌數も三十一年についで多く、作歌の修業は殆んど完全に近く終へてゐる觀がある。この後は苦しまずに、この修業會得した技法が、圓熟した心境をさながらに傳へたのだとも言へる。この年八月書いたものの中に、

一昨年「歌よみに與ふる書」「人々に答ふる書」「百中十首」など新聞に載せし頃之に反對せし人の今はやう／＼其說を改めたるも少からず。其中に百中十首の頃の歌をほめて今日の歌を謗り却て退歩したりといふ人あり。此人若し一二年の後には更に今日の歌をほめて其時(卽一二年後)の歌を退歩せりといふに非ざるか。こは餘り無禮なる申分なれども之を數年來の俳句界に驗するに此類の事極めて多し。一般世人の好尙は專門家の好尙におくるゝ事一二年なりとは歌俳句の上に限らざるべし。

と言つてゐるが、彼の自信は正當であつて、「百中十首」當時の試みの時代と、この年とは格段の差で、同日には談じられないのである。すでに例示した作に佳作は少くないが、左にも少し抄しておく。

夜をこめて物書くわざのくたびれに火を吹きおこし茶を飲みにけり
秋の夜を書よみ居れば離れ屋に茶をひく音のかすかに聞ゆ
うつせみのひつぎを送る人絶えて谷中の森に日は傾きぬ
道のべの楢の林に鶯の二つ來て鳴くあけ方にして
上野山夕越え來れば森暗みけだもの吠ゆるけだものゝ園
冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋干せる見ゆ
ガラス張りて雪待ち居ればあるあした雪ふりしきて木につもる見ゆ
常臥に臥せる足なへわがためにガラス戸張りし人よさちあれ
いたつきの床邊の瓶に梅いけて疊に散りし花も掃はず
後の世を願ふ阿彌陀の御佛に薄くれなゐの梅たてまつる
蕗の花植ゑし小鉢のかたはらに取り亂したる俳書歌書字書（我室）
朝な夕な字書きふみ讀むかたはらに萠黄の鳥の木にとまり居り（我家の長物）
菅の根の長き春日を言問はぬ小鳥と我と只向ひをり（鶸籠の鳥）
鎌倉の松葉ケ谷の道の邊に法を說きたる日蓮大菩薩

ある日君わが草の戸をおとづれて人屋に行くと告げて去りけり（獄中の鼠骨を憶ふ、錄七首）

天地に愧ぢせぬ罪を犯したる君麻繩につながれにけり

大御代〔都邊イ〕のまがねの人屋廣ければ君を容れけりぬす人と共に

君が居るまがねの窻は狹けれど天地のごとゆたけくおもほゆ

くろがねの人屋の飯の黑飯もわが大君のめぐみとおもへ

人屋なる君を思へば眞晝餉の肴の上に涙落ちけり

三とせ臥す我にたぐへてくろがねの人屋にこもる君をあはれむ

飼鳥の小鳥の餌にと植ゑおきし庭の小松菜花咲きにけり（病牀十日の内）

くろがねの人屋を出でし君のために筍鮓をつくりてうたげす（病牀週間記事、錄二首）

常臥の病のひまのつれ〴〵に土をつぐねて人を造りぬ

茶博士をいやしき人と牛飼をたふとき業と知る時花咲く（悟不悟の歌、錄四首）

本庄の四ツ目に咲けるくれなゐの牡丹燃やして惡き歌を焚け

寒山拾得豐干皆非なり鉢栽の小櫻草の花綻びぬ

頭痛み寢ころびて見る抱一の古繪の椿花玉の如し

年長く病みしわたれば花をこひ上野に行けば花なかりけり（櫻の歌、錄二首）

ガラズ戸の外に植ゑおける櫻花ふゝむ咲く散る目もかれず見き

かな網の鳥籠廣みうれしげに飛ぶ鳥見れば我もたのしむ（一日一詠）

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

杉垣をあさり青葉の花を踏み枝へ飛びたる四十雀二羽

山吹は散り菜の花は實になりて五月一日われ厄に入る（獺祭日記、錄二首）

みすゞ刈る信濃の奥の白坂に雪は降れゝど蕨萠ゆとふ

百花の千花を縫につらぬける藤の花房長く垂れたり（藤花、錄四首）

廣庭の松の木末にさく藤の花もろ向けて夕風吹くも

公達かうたげの庭の藤波を折りてかざさば地に垂れんかも

吾妹子が手縫の琴の絲の緒と長さあらそふ藤波の花

綠立つ小松が枝にふる雨の雫こぼれて下草に落つ（雨中庭前の松を見て作る、錄三首）

玉松の松の葉每に置く露のまねくこぼれて雨ふりしきる

庭中の松の葉におく白露の今か落ちんと見れども落ちず

夜の床に寢ながら見ゆるガラス戸の外あきらかに月更けわたる（六月十日夜病牀即事、錄二首）

月照す上野の森を見つゝあれば家ゆるがして汽車往き還る

ぬばたまの黑毛の駒の太腹に雪解の波のさかまき來る（讀平家物語、錄七首）

宇治川の早瀨よこぎるいけじきの馬の立髪浪こえにけり

橘の小嶋が崎のかなたよりいかけ引きかけ武者二騎來る

九重の雲居をいでゝ藤さけるしきたへ濱に御船はてけり

松ながら折りてさゝげし藤浪の花はむしろを引きずりにけり

みつかさの折りてさゝぐる松が枝に夏きみじかき藤浪の花

藤の花さゝげもちたるみやつこをのせて漕ぎ來る棚なし小舟

日和風そよ吹き過ぎて若松のむら立ち青芽むら／＼動く

曉のおきのすさみに筆とりて繪かきし花の墨薄かりき

玉水の雫絶えたる檐の端に星かゞやきて長雨はれぬ　（星、歌四首）

天地に月人男照り透り星の少女のかくれて見えず

久方の空をはなれて光りつゝ飛び行く星のゆくへ知らずも

ぬば玉の牛飼星と白ゆふの機織星とけふこひわたる

上にして田安宗武下にして平賀元義歌よみ二人

血をはきし病の床のつれ／＼に元義の歌よめば（うれイ）たのしも

嵐ふく闇のいさり火亂れつゝ黒戸の沖に鯛釣るらんか

卅四年には歌數はぐつと減つてゐる。「藤の歌」（十首）「山吹の歌」（十首）「しひて年をとりて」（十首）「岩手

の孝子」(十首)「かしは餅」(十首)「苗の歌」(三首)「ほとゝぎす」(十首)、此等は四月廿八日から五月十一日に亙つて隨筆「墨汁一滴」中に出したもので、この外は「新年」(五首)「牡丹」(十一首)其他ごく少數の歌があるばかりである。特に代表作として有名なのは、「藤の歌」「山吹の歌」「しひて筆をとりて」の三つの聯作的の歌である。「岩手の孝子」は、母を車にのせ、はるばる東京見物をさせた珍しい孝行美譚を新聞で見て感激し、その行爲を讃へて作つた者で、蓋しこの種の歌として上乘のものではあるが、他人事は他人事で、遂に自身のせつぱつまつた問題ではないのである。なほ多少道歌的乃至芝居掛りの弊が、この題材では免れなかつた。「かしは餅」の歌は、過去の經驗をなつかしむ懷舊の情に哀感が籠つて居て捨て難い味があるが、「かしは餅」といふ特殊な事柄に興味を持ちすぎてゐて、讀者に迫る力が稀薄のやうである。「苗の歌」は、日南も偲ばれて柔かなものさへ噛まずに呑みこまねばならぬやうになつて、衰弱するばかり、生きてゐるたのしみも無くなつてしまつたといふやうな詞書があつて、長歌一、短歌二が記されてゐるが、なかなかあはれ深い作である。反歌だけあげて置く。

下總の結城の里ゆ送り來し春の鶉をくはん齒もがも

菅の根の永き一日を飯も食はず知る人も來ずくらしかねつも

「ほとゝぎすの歌」といふのは、

根岸に移りてこのかた、殊に病の牀に[illegible]、年々春の暮より夏にかけて[illegible]
[illegible]聞きたり。然るに今年はいかにしけん[illegible]

遊ぶ。此剝製の鳥といふは何がしの君が自ら鷹狩に行きて鷹に取らせたるを我ために斯く製して贈られたるものぞ。

といふ詞書のあるによつて、作歌動機もよく伺はれる。

逆剝に剝ぎてつくれるほとゝぎす生けるが如し一聲もがも

うつ抜きに抜きてつくれるほとゝぎす見ればいつくし聲は鳴かねど

ガラス戸におし照る月の清き夜は待たずしもあらず山ほとゝぎす

ほとゝぎす鳴くべき月はいたつきのまさるともへば苦しかりけり

等、眞實味があつてよいが、多少對象に卽きすぎたと思はれる作が混つてゐる。やはり「藤の歌」「山吹の歌」「しひて筆をとりて」を代表作として擧ぐべきであらう。この三つの聯作について總括的にいふと、技巧等如何にも巧みに而も樂々と自らにして到つてゐると云ふ風がある。「只歌のやすく〱と口に乘るがうれしくて」とか「今年も咲き〱て旣になかば散りたるけしきをながめてうたゝ歌心起りければ原稿紙を手に持ちて」とか「あやしくも歌心なん催されける。斯道には日頃うとくなりまさりければおぼつかなくも筆をとりて」とか、自らその自然流露の有様をのべてゐるのである。歌の姿躰に心にくい程の自然さがある。言葉や句法上の技能はこれまでに十分鍛錬されてゐた。心の泉が漲つて流れ出したともいふべきこれらの作には、かくて技巧上の完成さも具備されてゐる。一々比較するまでもなく、これらの歌に試みられた手法や趣向は、彼が以前、特に前年に大方採用し試驗したものゝ精粹の凝集である。すでに自得し使驅された者の粹が、自ら迸出した事に、これらの歌の特質がある。貴い價値がある。

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ山吹の花

ガラス戸のくもり拭へばあきらかに寐ながら見ゆる山吹の花

春雨のけならべ降れば葉がくれに黄色乏しき山吹の花

「山吹の歌」十首皆結句に「山吹の花」の名詞止めであるが、ここにあげたものは、その終りの三首で、一聯中の佳作の部である。比較的主観が表面にあらはれてない、どちらかといふと客観的の歌である点、物の編み方とその表現のうまさ、歌柄の自然にして穏かなる事、共に感嘆すべきである。ここにあげた三首の如き、云はゞ主観客観の全く渾一融合した境地を示すものである。

「藤の歌」には、「山吹の歌」よりも、主観的感情的にいくらか濃厚であるが、少しの嫌味もなく享け入れられる。たとへば「瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて病の牀に春暮れんとす」等には、病める人の痛々しい哀感がこもつてゐるが、感傷を押ふるやうな弱々しさがなく、素直にうけいれられるのである。

瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり

に始まり、

八入折の酒にひたせばしをれたる藤なみの花よみがへり咲く

に終る「藤の歌」十首は、「山吹の歌」よりも、たにすぐれて味はれるものである。

佐保神の別れかなしも来ん春にふたゝび逢はんわれならなくに

いちはつの花咲きいでゝ我目には今年ばかりの春行かんとす

病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも

世の中は常なきものと我愛づる山吹の花散りにけるかも

別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ繪にかけるかも

夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬ我いのちかも

くれなゐの薔薇ふふみぬ我病いやまさるべき時のしるしに

薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽摘みし昔おもほゆ

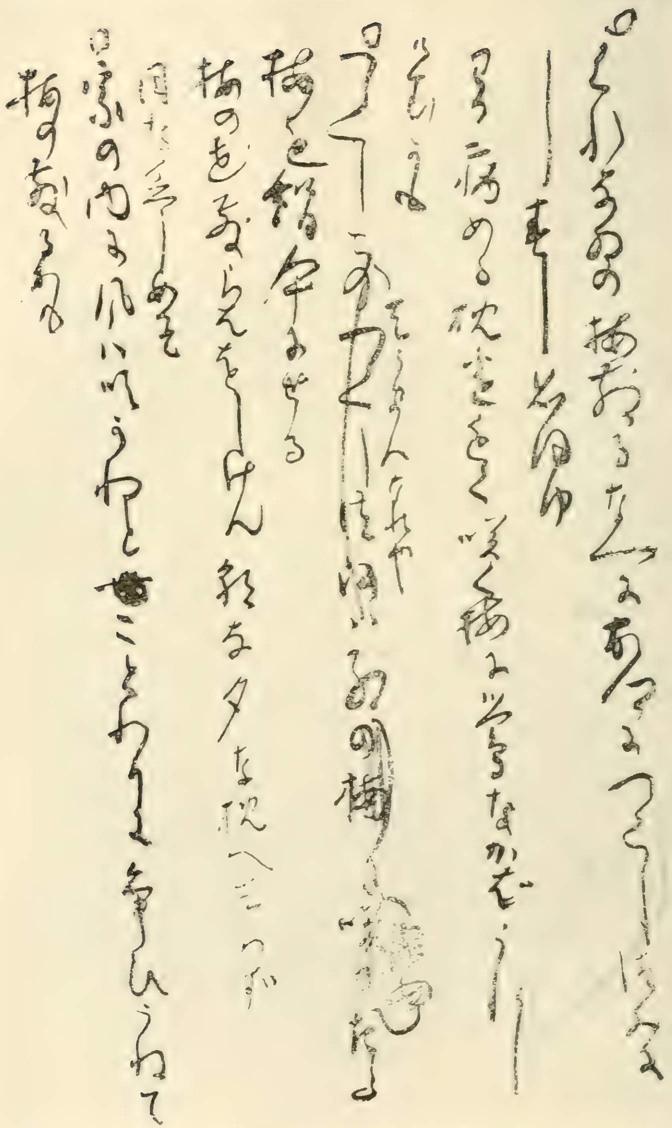
若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

いたつきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

「しひて筆をとりて」と前書きがあつて、歌の終りには「心弱くとこそ人の見るらめ」と添へてゐる此の一聯十首の歌は、子規の歌の中で最大傑作に屬する者である。それは明治短歌史上の光彩である。實にいい。これだけあれば他の作はなくてもといふ氣さへする。内に播いてゐた感動が溢れ、流れ、寸分の隙もない調を作したのである。客觀的・叙景的作風のある彼ではあつたが、花月を弄ぶ類の似而非風流歌人でなかつた事は、この一聯の作に遺憾なく發揮されてきた。主觀・感情が充實しないで、淺い感動のうちに、露はに表示される事は、藝術的陷穽として警戒すべきである。併し胸に溢れる眞實な強烈な感情、躍々として生動する主觀の叫は、直ちに尊むべき藝術であらねばならぬ。「世の中は常なきもの」と云ふやうなことは、誰もが口にする安價な月並概念であるが、これが眞實な體驗を經て叫ばれる時、具象的な感動の實を伴つてくる時、

私達の心を打つのである。病臥數年、死を目の前にみて叫んだ言葉の旋律、死を前にして悟つた眞理であることが、この歌の尊い力強い所以である。體驗のない、實感の稀薄な思想や感情は零である。彼は病褥を長く床上に横たへて而も文界の革新にひたぶる心を傾け、常人の如く泣言を言つたりしなかつた。鋭い心の彼は悲しみに堪へるといふよりは、悲しみを忘れて詩歌文事にいそしんだともいふべきである。が、避くべからざる死の豫感を切實に感じて、その感懐を吐露したのが、この作である。「病むわれを慰め顔に開きたる」等云ふやうな言も、普通人の一寸した病氣の時などに發せられたとしたらどうであらう。女々しく、一種のいやみをさへ感ぜしめる事だらう。子規のこの歌の感銘は、之に反し、この嫌味になり易い弱々しい言葉が、實に適切に、哀感を帶びて響いて來る。それは自然に素直に發せられた誠の叫であるからである。虚偽も誇張も無いのである。自分の感情をいつも芝居氣多く誇張し、偽つたり甘えたりして、藝術家ぶつてゐる人々がある。私達はそれらの人に期待する心を持たない。客觀客觀といふ、地味な歩みをしてゐても、人間的感情さへ喪失せず麻痺せしめないならば、遂に詩歌の生命を把握することが出來るのである。子規の歌も、ここに至つてはじめて獨自な高い生命を體驗してきたと言ふべきである。而も彼は死にせまられてゐる。彼の夭折は歌壇のために痛惜すべきであるが、死にせまられてゐたればこそ、このすぐれた藝術を生む事が出來たのであるとも考へられる。

なほこれらの作品は連作的のものである事が、一層の魅力となつてゐるが、これについては、後章に少しくのべようとおもふ。他の作について少しくみよう。



晩年の短歌稿

　　下總の結城の小田の田雀は友うしなひてさぶしらに啼く

長塚節に與へた歌である。「田雀とやら難有候をとゝひもたべ候きのふもたべ候今日もたべ候」とあつて、よく分かる。絶品とはいへないまでも、際どい境を生かしてゐる所、凡常で無い。卅四年頃の作であることは、言葉の調子からだけでもかんじられる。「さぶしらに啼く」といふやうな調子は、卅一、二年頃のものとは、全く趣を異にしてゐるのである。

　　　喜節見訪の歌

　　下ふさのたかし來れりこれの子は蜂屋大柿吾にくれし子

　　下總のたかしはよき子これの子は蟲喰栗をあれにくれし子

　　春ごとにたらの木の芽をおくりくる結城のたかし吾は忘れず

こんな一寸した作にも生命が通つてゐる。特に三番目の歌は味深いと思ふ。この年の歌は、どれをぬき出しても何物かが感じられる。或意味では、もう完成の境に近づいてゐたとも言へよう。

三十五年の歌を見る。紅梅の下に土筆等植ゑた盆栽を左千夫から贈られたのを朝夕眺めて作つたといふ、

　　くれなゐの梅散るなへに故鄕につくしつみにし春しおもほゆ

以下十一首の歌、「京の人より香菫の一束を贈り來しけるを」の詞書のある、

　　玉つさの君の使は紫の菫の花を持ちて來しかも

で始まる十二首の連作、「つくしほど食ふてうまきはなくつくしとりほどしても面白きはなし、岩崎橋本赤羽根村に遊びてつくしを得て歸る再び行かんといふに思ひやり興じてよめる」といふ詞書の、

赤羽根のつゝみに生ふるつく〴〵しのびにけらしも摘む人なしに

以下一聯十三首の歌等、「仰臥漫錄」に記されてゐたものだ、この年の主要作品で、「御題新年梅」九首、其他三十足らずの歌が殘つてゐるばかりである。多作家の子規としては、實に作は乏しいのであるが、九月には世を去つてゐるのであるし、重病で歌作りさへ全く思ふに任せなかつたのである。前年の「しひて筆をとりて」一聯の歌のやうな隅々まで力と情感にみちみちてゐる如き者は、この年には無いやうに思はれる。左千夫から土筆を贈られ興を催して作つた歌も、香菫を京の人から貰つて詠んだ歌も、土筆の歌も、作歌動機等は殆んど同類で、歌そのものゝ價値も大體同列に置かれよう。特に土筆摘みの事を懷かしんだ作などは、非常に淡泊に樂々と詠まれてゐる觀がある。歌の底にはやはり病者の悲哀も流れてゐるやうに感じられはするが、むしろ自分の現在の病氣等いふことは忘れ、ふら〳〵として春の野に心ばかりは土筆摘みに出てゐるといふやうな、忘我的な一種の恍惚とした心境の裡に胎まれたと見るべき所にこそ、この作の價値が認められる。土筆摘みにゆく第三者の位置に自分を置いて作をするやうな事は、普通の場合は、邪道とも見られようが、子規は重い病牀にあつて漸く打ち興じた態度で、餘裕ある思無邪の心境を示した事は、尊く羨ましい。あつさり歌ひ流したやうに見える自然さに於て、更に一歩を進めたとも言ひ得るのである。良い作品だと信ずるのである。併しながら、淡々たる境地に於て一歩を進め、又格を破つて自己の心境をさながらに、縱橫

に表現してゐると思はれる作はありながら、前年の作に比し、多少力の足らぬ憾がある。精神的緊張とか心のはりが乏しいのである。

なまよみのかひのやまめは、ぬばたまの夜ぶりのあみに、三つ入りぬその三つみなを、あにおくりこし

×

秋くさの七くさ八くさ、ことはちに集めてうゑな、きちかうはまづさきいでつ、をみなへしいまだ

×

まつしまのをしまのうらに、うちよする波のしらたま、そのたまをふくろにいれて、かへりこし歌のを
みふたり

これら小長歌の味も實にいい。よく單純化され所謂平淡のうちに至味を寓するものと言ふべき作である。

「戲嘲諸兒歌」の、

　　藥燒のするもの燒かば弓矢とる左千夫の朝臣お面かたを取れ

外四首の、萬葉の滑稽歌を思はせるやうな作もある。滑稽乃至諷刺の作も、歌・俳句共に、彼には相當見出される。あらゆる要素を一身に包括する事を理想とし、眞面目の時には眞面目な作をし、滑稽の心持には滑稽の作が産れるのがよいといふやうな考を持してゐた彼の作には、滑稽の歌などにも捨て難い味あるものある事を一言申し添へて置く。彼の晩年の作は著名でもあり、多くは連作で、一首づゝ拔く事いふ事も意味が乏しいし、且つ何れも相當な作品であるから、特に歌を抄することは避けよう。

以上極めて簡單に子規の歌を年度別にみて、その發展の跡を辿つたのであるが、初期の作は、見るもの聞くもの想像すること、何でもとり入れ、どうにかして歌にまとめ上げてゐる。これは練習としてはよく、認められもするが、藝術的な高級な態度では無い。みるものきくものにつけて驚く心、初々しい新鮮な心で物の核心を掴む事の出來る藝術良心の活溌さは、藝術家の最初の最大の素質であるのだが、唯手あたりにスケッチするなどは初心者の態度である。卅一、二年頃は、いはゞ練習的なスケッチの時代であつたのである。歌の材料や言葉の範圍を擴大しようとの意圖は、歌の改革に際しての、彼の理知的命令であつた。さうしてそれを、勇敢に努力して實行した。併しそれで彼の感情に滿足出來たであらうか。忠實な作歌道の練習は實感の尊ぶべき事を教へた。手廣くといふよりも底深く辿るべき道を明らめたのである。

彼が僅か三四年間に雜多より純一へ、複雜より單純へ、空想より實感へ、新奇より眞實へ、卽ち外邊に徘徊してゐたものが、生命の内奥に向つて、驚くべき進展の道を辿つた道程には、理知と感情のいたいたしい相克が絶えず行はれた事を思ふ。理論と實行の劇しい爭鬪・矛盾の中に、刻苦して辿つた道であつた事を思ふ。否、たいした苦しみもなく、靜かに藝術心が、理知、理論のない理論を次第に克服し、變形させつゝあつたのでもあらうか。

子規は却つて理論に於て、その長所を示した人といふべきであるが、努力して築き上げた彼の晩年の短歌藝術は、やはり第一流のもので、明治新興歌壇の中で最も價値ある、すぐれた收獲の一つである。實に永久的生命を持つ作品であると認められるのである。子規の改革意見は往々として誤ら、より作品の價値を高め、

漫然と、作品はたいしたものでないだらうといふ者がある。私はむしろ議論は今となつては検討すべきものに乏しく、作品こそ、異常の努力が拂はれ、異數の進度を以て、晩年にすぐれた藝術を産ましめるに至つてゐるもので、彼の作品の辿つた道こそは、今後の研究に俟つて、自己の作歌上の暗示をうくべきものが多いことを切つて主張したくさへ思ふのである。少くとも、私の現在の心持からは、斯くの如く主張することが正直なのである。

なほ次章に、子規の歌論を詳說しながら、歌論と歌との關係に言を費して、歌人としての子規の眞面目をうかゞひ、本章の餘りにも總括的な說明の不備を補ふ料にしたいとおもふ。

（註一）第五編第二章「子規と連作」の條參照。

第五章　歌と歌論との相關

作家と評家とは多く兩立しないのが、實際の事實であつて、比較的この傾向の少い、少なければならぬ事情にある詩歌の場合にも、なほこの弊は免れ難い。詩や歌は上手でも、批評をさせると、見當外れのことを言つたり又甚だ要領を得ぬまづい事を言つたりする人がある一方、批評眼は確かでも、作るといふ方面は案外拙いと云ふ種類の人も多いのである。藝術の鑑賞は創作の心理的經過の再驗に外ならないとするも、一度それを筆や口にあらはして批評の形式をとる時は、單なる鑑賞以外に種々附隨的な技能を必要とするのである。創作は一種の人生批評と考へることが出來るとしても、むしろ如何にビビットに人生をあらはし得るかに必須たる創作的才能が發揮せられねばならないのである。かういふことを考へただけでも、作家と批評家との或程度のギャップといふものは考へられるのである。我が正岡子規の如きは、之に反し、作家として又評論家として、兩方面に大きな業績を殘した人であつて、誠に異常な例を示した者といふべきである。俳壇に於ける彼の地位もさうであり、歌壇に於ける立場もさうであつたのだ。作家として批評家としてのどちらか一方の素質に缺くる所があつたなら、それだけ彼の業績は本質的にも價値を減殺され、歌壇や俳壇に働きかける力も小さいものになつたであらう。もし子規が、芭蕉を貶し蕪村をあげ、徒らに舊派宗匠を論難攻撃するだけで、自己の作品には、何ら特異な技倆を示し得なかつたとしたならば、多くの人にとつては如何にして道を拓くべきかといふ手懸りを得られないし、空論として排撃する者も多かつたと思はれる。又子規の俳句

そのものは本質的にすぐれたものを發表したにしても、默々と議論もせず歩いてゆくのであつては、その俳句の持つ微妙な味を確實に把握し得る者は殆んど無く、一般的に認められるには相當長い年月を要したに違ひない。歌の場合も、このことは同樣である。子規が、論作並び進めた事は、自己にとつても對他的に考へても非常に效化的であつたのである。

然らばその何れの方面に彼の精力が、より多く注がれてゐたか、又どの仕事が、より勝れた値打を持つものであるか。外部に働きかけた力も、作と論、この兩者の結合の結果であるし、子規自身の內の問題としても、不分離關係に於て觀察すべきもの、子規の作と論の優劣、乃至どちらに精力が注がれた等云ふことは、斷定を下すべき性質のものではないかも知れない。たゞ子規は批評的方面に長所をもち、且つ批評の職能を重視した人で、而も作家としての修養を等閑にせず、その方面に不斷の精進をつゞけた者であるといふだけは誤らないであらうか。私はすでに子規の古歌人に對する批評を紹介した。子規が歌について、如何なる抱負見識を持してゐたかといふ、歌論の大體の輪廓は暗示する所があつたわけである。彼の歌についても、年代順的に少しく進歩の跡を辿つたのである。子規の歌が、より價値があるか、歌論がより重大であるかといふやうな事は、むしろ大方の意見をききたいとさへ思つてゐる。これは人によつて多少異見のある性質の問題でもあるからである。どちらにより多くの精力と熱心とが注がれたかといふ如き問題は、一人に於ける創作と批評的要素を判然と分析出來ないものである以上、本人自身にとつても遂に不明瞭の問題であると私は思ふのである。子規の歌と歌論との相關をみると言つても、實は、あの歌論がなかつたら、あの歌論があの

形式に於て表現され發表されなかつたと假定するならば、あの歌は少くもあのまゝではなかつたに違ひない。又あの歌がなかつたなら、もしくはあの歌が少しでもあれと違つた時發表され、違つた形で表現されたとしたら、歌論も從つてあのまゝのものではなかつたであらう。かゝる離れる事の出來ない、關聯影響の下に兩者は立つてゐたのであると斷言する以外、容易に明言し難いのである。單に理論理窟として斯くいふのではない。子規と云ふ複合體を吟味精察する時、この兩者が緊密に絡み合ひ影響し合つてゐる現象を看取するばり、容易にその絡れ口を發見する事が出來ず、輕々しく何事も言はれない心持がするのである。

併しどちらかといへば、やはり歌論が先に立つて歌を指導誘掖して行つた方面が著しく、この事實の觀察が明白に、より容易に行はれ得るのである。理論と創作兩方面をひとしく從事したが、論は論、作は作と云ふ風に極めて無雜作に別物視して對し得る人がある。天才か、又は餘程の努力家以外には、とかく理論が先行して、作品は後に惨めにとり殘されるといふのが多くの場合みられる現象である。かく作と論は遊離的になり易く又これを遊離的に取扱つてゐる人の場合は、この兩者の關係は密接でないが、論作の一致を常に目指してゐる人であつたならば、善にまれ惡にまれ、兩者の關係は不分離である筈である。同一地盤から生れたとしても、議論が卑近なレベルの低い者であれば、論が作を指導するといふ方面は、比較的著しくないわけであるが、子規はなかなか高所に着眼して立論した人で、而も自分の作品をその目標まで引上げようと不斷の努力精進を續けたから、歌論が歌に影響し、誘導しかけた方面の關係は、特に密接でもあり重大でもあつたやうに思はれる。この稿の目ざす所も、主として歌論が歌に働きかけた方面の闡明にあるが、そ

とへこの目的は十分に效化的に成しとげられないにしても、彼の歌論及び歌を少しでも、よりよく理解するに役立てば滿足とするものである。

用語論・音律論（乃至詩形論）・趣向論の三部に別けて論ずるが、もとより便宜的の事で、特に子規の用例に從うた點が多いのである。主として前二者が形式論で、後者は内容論に亙るといふわけである。

第一節　用語論と子規の歌

子規の和歌改革意見の萌芽は既に明治二十六七年頃にあらはれてゐる。その頃から用語範圍を擴大すると云ふ考は持つてゐた。二十六年三月發表の「文界八つあたり」和歌の條には、新語を採用するか乃至は品格を降させねば、和歌の腐敗は救はれぬと結論し（「初期の歌及び歌論」の項參照）翌年七月發表の「文學漫言」中の「和歌と俳句」の條では、「俳句に面白しと思ふ限りの言葉は歌の上にても面白き言葉ならざるべからず。」と論じ、雅言のみでなく、俳句に用ひられてゐる用語に、和歌用語として採用すべき者のある事を注意し、古い言葉を雅とし、現代の言葉を俗とする如き見解の誤謬を難じたりしてゐる。雅俗共に用ひ用語の範圍の和歌よりも極めて自由である俳句に親しんでゐた彼にとつては、一般歌人の用語が極めて窮屈に感じられたのであらうが、たゞ傍觀者的觀察といふにとゞまり、切實な内的體驗の要求から發した議論ではなく、新しい用語を採用すべきであると論じただけで、具體的内容は殆ど説かれてゐないのである。然るに卅一年頃からはやゝ具體的に詳細に論ぜられ、且つ作歌に於て、それが實践されて行つたのである。「歌よみに與ふる書」十回の中から、用語論として注意すべき言説を少し抄出すると、

生は和歌に就きても舊思想を破壞して新思想を注文するの考にて隨つて用語は雅語俗語漢語洋語必要次第用ふる積りに候。（「六たび歌よみに與ふる書」）

×

此腐敗と申すは趣向の變化せざるが原因にて、又趣向の變化せざるは用語の少きが原因と被存候。故に趣向の變化を望まば是非とも用語の區域を廣くせざるべからず。…(中略)…外國語も用ゐよ外國に行はるゝ文學思想も取れよと申す事に就きて日本文學を破壞する者と思惟する人も有之げに候へどもそれは既に根本に於て誤り居候。たとひ漢語の詩を作るとも洋語の詩を作るとも將たサンスクリットの詩を作るとも日本人が作りたる上は日本の文學に相違無之候。…(中略)…併し外國の物を用ふるは如何にも殘念なれば日本固有の物を用ゐんとの考へならば其志には賛成致候へども迚も日本の物ばかりでは物の用に立つまじく候。…(中略)…源氏物語、枕草紙以下漢語を用ゐたる物を排斥致し候はば日本文學は幾何か殘り候べき。…(中略)…如何なる詞にても美の意を運ぶに足るべき者は皆歌の詞と可申、之を外にして歌の詞といふ者は無之候。漢語にても洋語にても文學的に用ゐられなば皆歌の詞と可申候。(「七たび歌よみに與ふる書」)

×

緣語を多く用ふるは和歌の弊なり。緣語も場合によりては善けれど普通には緣語かけ合せなどあればそれがために歌の趣を損ずる者に候。縱し言ひおほせたりとて此種の美は美の中の下等なる者と存候。…(中略)…歌といふといつでも言葉の論が出るには困り候。歌では「ぼたん」とは言はず「ふかみぐさ」と詠むが正當なりとか、此詞は斯うは言はず必ず斯うといふしきたりの者ぞなど言はるゝ人有之候へどもそれは根本に於て已に愚考とは異り居候。愚考は古人のいふた通りに言はんとするにても無く、しきたりに倣はんとするにても無く只〻自己が美と感じたる趣味を成るべく善く分るやうに現すが本來の主意に御座候。故に俗語を用ゐたる方其の美感を現すに適せりと思はゞ雅語を捨てゝ俗語を用ゐ可申

又古来のしきたりの通りに詠むことも有之候へどもそれはしきたりなるが故に其を守りたるにては無之其の方が美を現すに適せるがために之を用ゐたる迄に候、古人のしきたりなど申すとも其の古人が新たに用ゐたるが多く候べき。（十たび歌よみに與ふる書）

等とある。新言語の意義・内容は、ここに到つて少しく具體的に說明されてゐると言ふべきである。「美の意を運ぶに足るべき者」と云ひ、「美を現すに適せるもの」と限定することによつて、無制限・無鐵砲に用語範圍を擴張する事でない事を表示してはゐるが、用語範圍の擴大の强調は、多少リズム等の如何を等閑にした傾がないでもない。勿論彼は詩歌に於ける音樂的要素を顧慮しなかつたと云ふのではない。

綠陰に餘花素なるか日永人

この「日永人」が古句になく、而も意味通ずるとしたなら、「夜長人」「日短人」「夜短人」等の言は如何と云ふに答へて、

日短人、夜短人は音調悪きために何にはなるまじ。總て偏頗なる言葉は音調に由る者頗る多きを以て、一例を以て他に推し及ぼすべからず。例へば春風(はるかぜ)秋風(あきかぜ)と言へど夏風(なつかぜ)冬風(ふゆかぜ)とは言はず。短夜(みじかよ)と言へど永日(ながひ)とは言はず、日永(ひなが)と言へど夜短(よみじか)とは言はぬが如し。

と「俳句問答」(廿九年)に書いてゐるが、此等によつて見ても、子規は調子等の事を全く考へなかつたのではないが、幾分閑却して、新用語の使用といふことに熱中したゐた、否、革新の初期に當つて、沈滯せる時弊を匡救するためには、立論の公正などいふ事よりも、寧ろ意識的に新用語の使用等を强調すべきだつたので

あらう。それが自ら實際作歌に熱心し勞苦してゐる間に、たゞ用語の範圍を擴大する如きこと許りが能でなく、その用語の採擇には微細な注意吟味を要する事を悟つて、進んだやうである。卅二年發表の「歌話」や「曙覽の歌」等の文に言葉の論がみられる。萬葉の歌等に今までよりも餘程深く注意し、萬葉には俗語・方言・漢語・漢語直譯の新語等が少くなく、何れも立派によみこなされてゐるが、それは漢語・俗語を恐れ氣なく驅使したからであると論じ、又然し萬葉の語をのみ摸する如きは、萬葉の精神を失ふ者であると注意してゐる如きが主要所で、用語論に關して特に注意すべき程の進展變化は無い。「歌話」に、

歌は世俗に通ずるが善きにもあらず、又通ぜぬが善きにもあらず、名君の人を用ふるは其材能を見て長ずる所に從ふ。歌人の語句を用ふる亦此の如きのみ。

×

歌を作るには新しき言葉を用ふべからず、さりとて古事記萬葉の如き餘り古き言葉も宜しからず、趣向は新しき事をいふべからず、珍しき物の名などを入るるは宜しからず、と教ふ。これ人に古歌を剽竊せよと教ふるなり。

等と益々明白に、用語の自由を叫んでゐる。用語の自由論者であり、用語範圍の擴大を主張した事は前後變らないといふべきであるが、その用語擴大の適當の限度、眞に言葉が自由無礙な藝術的效果をあげる境の自覺は、徐々に彼の作歌的體驗が示唆したのであつて、實際作歌を繼續していく中に、彼の萬葉尊重は始めて深くなつて行つたと思はれる。卅二年六月發表の「萬葉集を讀む」(三)の文中に、

萬葉の歌人は造句の工夫に意を用ゐし故に面白く、後世の歌人は造句を工夫せずして有る古句を襲用するを喜びし故

に衰へたり。

と言つてゐるが、實に子規の萬葉に傾倒したのは、萬葉歌人が用語に自由で勇敢であつた事が、一つの主たる着眼點であつたのである。萬葉崇拜の念が深まると共に、彼の作歌にも實際萬葉の影響が多くみられるやうになつたが、かくて彼の周圍の人々の間には、萬葉摸倣、萬葉盲信の傾向を現出しつゝあつた。

君たちは今の處さういふ考になつたのぢやない。元からさうだ。元からすなほなのがすきで、さうして萬葉たり何たりの使ひなれた詞をその儘使つた歌をこしらへて、新造語や何かばかりで、作り上げた歌はアンマリきらつたのだ。その點で、つとめて蕨眞子をほめて、人々にも話したのだ。君等は其點へかけてるからと。君等は、今しきりと萬葉を見て、しきりと萬葉の詞をばかり使つてもみれば、それでいゝと思つてゐる。萬葉に豐旗雲とあると、すぐ豐旗雲と使つたり、道の八十隈とあると、すぐ道の八十隈と使ふ。萬葉の言葉をつかひこなしてくれゝばうれしいが、然しながら、萬葉の歌人が新らしく造り出した詞を、直ちに其儘使ふなんて……それでは、まるで泥棒だ。泥棒はしたくない。（「根岸夜話斷片」秀眞記、三十五年三月）

子規は、かゝる萬葉語の摸倣の弊に陷つた周圍の人々を戒めてゐるが、彼の到達した心境をさながら眺めてゐるこの文は、彼の用語論、並びに彼の態度・彼の主張を端的に明確に闡揭してゐる觀がある。和漢洋、雅俗、新古、何れの言葉も美感を與へ得る者は、之を歌にも用ふべきである。自由に詞を驅使し用語の範圍を擴充する事によつて、從來押込められてきた因循姑息な歌の世界を開發進展せしめ得ると考へたのであらう。言葉の變革だけで歌の改革を齎らする事が出來ると考へたのではなく、傾向・内容共に言葉を單

位として構成されるから、歌の内面的改革には先づ用語を自由に使用する事に始まらねばならぬと信じたのである。用語は自由に且つその範圍を擴大し、古語に捉はれぬ清新な言葉を創造すべき事を主張したのである。最初はやや無鐵砲に走つた如く見えるが、當時の歌壇の實狀に照して、この進歩的な、時に破壞的でもあつた用語改革論は、當然起るべき理由と、その發生をもたらした十分の效果が認められねばならない。議論を吐くと共に、この理想を大膽に勇敢に、作歌に實行し始めたが、用語を多く廣く用ひたのは、それ故、卅一年頃の歌に於て最もよく見られるのである。

漢語を取り入れた作は非常に多い。卅一年頃は少しそれが極端であつたので、非難する人もあり（愚庵の如きもその一人）自分でも多すぎると感じたらしく、徐々に露骨な漢語調は少くなつてゐる。最初漢語臭の多かつた事は、一つには蕪村あたりの俳句趣味の流を汲んだといふ點もあり、又雄勁な調子を喜ぶといふやうな事に當時の改革論者の一致した見解があつたので、彼もそれを襲踏したともいふべく、又さういふ所に彼の嗜好もあつたに因るのである。漢語の使用の目立つ彼の歌は非常に多く、例示する迄もない。漢詩や漢文の言葉を使用したものなど最初はかなり多かつた。一例をあげると、

おほやけを退りて人の委蛇々々たり庭木の柳風吹きわたる
年々歳々花あひ似たる向島歳々年々人同じからず
伴れ昔額くゝれたるの美少年花賣るをぢとなりにけるかな
天津橋上繁華の子等の影見えて天津橋下春の水青し

善き酒のふたたびの春もなごりかた惜むべき落花君掃ふ莫れ

この五首は「戯れに詩の句を取りて」と斷つてゐる作であるが、この種の作に乏しくない。

教盛の墓とぶらへば花もなし春風春雨播州に入る

春暮るゝこの川上に誰住みて落花流水掬うかみ去る

三層の樓に上れば圓ひろし春風春水ひがしより來る

等、此種の者は實にあげきれないが、何れも摸倣といふ程度で成功した者は稀である。「石壕吏」「讀杜詩」等は、言葉には漢語が非常に目立つといふ程ではないが、これは漢詩の飜譯の試みとして注意される。これとはやゝ異るが、題材を漢にとつたものも多くて、それらは大部分、必然的に漢語が多いといふ結果を示してゐる。一つの言葉は言ふ迄もなく調子や色調を持つてゐるから、漢詩漢文から脱化した如き作は、また多分に漢詩・漢文調に彩られてゐるわけであるが、ここでは、かゝる調子等迄には言及しないでおく。

地名・人名乃至山河の名等を大膽に歌に詠みこんでゐる事も、彼の歌の特色の一つに算へられよう。その地名・人名等には所謂漢語が多いのである。

洛陽の市に花賣る翁にぞ昔の春は問ふべかりける

官人の驢馬に鞭うつ影も無し金州城外柳青々

長安の市の酒屋の桃咲きて李白が新日斜ならんとす

東京は春まだ寒き鐵宗備のさかりに梅の花を賣る

野の空の夕暮寒み風荒れて武藏の雲雀下總に落つ

淵明の詩を讀み罷みて菊の根にひとり土かふ日は夕なり

天竺も震旦も知らず日の本の釋迦の産屋のうつくしくこそ

足立たば黄河の水をかち渉り華山の蓮の花剪らましを

天竺の椶櫚の葉團扇上海の絹の繪團扇さまざまの世や

津の國のみなと川邊に身を捨てゝ神となりたるくすのき正成

洋語を使用したといふ例は多くはない。外國の國名・地名・人名・山川の名等、或は日本化された外國語のいくつかが用ひられてゐる程度である。彼の外國語を取り用ひよと言つたのも、從來の歌人のやうに、やまと詞と云ふやうな狹い雅言の天地にのみ蹐蹐する弊に反動的に主張した事で、實際要求の切なるものに出發した議論ではなく、事實洋語を使用する必要は極めて少いのである。しかし、

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも

足立たば北インヂヤのヒマラヤのエヴェレストなる雪くはましを

足立たば新高山の山もとにいほり結びてバナヽ植ゑましを（以上、三十一年）

球及び球を打つ木を手握りてシヤツ著し見れば其時おもほゆ

ガリバーの小人嶋かも箱庭のするゑものゝ人の動き出でしかも

アメリカの船のりミラー橫濱に人を殺すといふ事何なり（ミラー公判）

正ちやんを誰やらに似ると思ひしはラフエルがかきしマドンナの耶蘇（以上、三十二年）

テーブルの足高机うち圍み緑の陰に茶をすゝる夏

ふらんすのぱりにゆく繪師送らんと畫をかきてくひ牛くひてかく

新聞は梅の詩に繪に文に歌にいづれのページも梅なきはあらず

スパニアのますらたけりをけだものゝ牛と闘ふますらたけり男

日の本の陸奥の寺より法の王ハツパポウロに贈る玉づさ

花の繪を我に殘しゝ山の井の淺井の君はスヱズ行くらん

アムールの川の川原のさゞれ石をひろひて寄せし君をおもほゆ

フランスの人が造りしビードロの一輪ざしに椿ふさはず

フオルモサの高砂嶋に君行かば嶋人さびてバナナくふらん

格堂はルビーか巴子はトパッツかあるじ麓は出雲青玉

團子の串ビールの屍散り亂れ歌玉いくさ日は夕なり

ガラス戸の外に据ゑたる鳥籠のブリキの屋根に月うつる見ゆ

ガラス戸の外の月夜をながむれどラムプの影うつりて見えず（以上、三十三年）

等の言葉はどしどし達者に使用してゐるが、これらは十分新語の名に値する者と言ふべきであらう。

其の使用した漢語や外來語等は、それ自身日常語であり、通俗語であると云ふ類の者でない。併かし此歌

をみても、口語とか日常語とか稱すべき種類の言葉の使用の多い事は感じられやうと思ふが、實に漢語や口語の從來の歌よりも非常に夥多なことは、子規の歌に著しい特色を與へてゐると思ふ。

口語とか日常語とか云はれる範圍の言葉を用ひた例歌を少しくあげると、

賣れ残るひひなやものを思ふらん十軒店の春の夜の雨

かつを節紙に包みてみづひきに松と薔薇とをくりそへて遣る

家と家のあはひの坂を登り行けば廣場を前に君が家あり

くろがねの人屋を出でし君のために筍飯をつくりてうたげす

寒山拾得豊干皆非なり鉢栽の小櫻草の花ほころびぬ

夜をこめて物書くわざのくたびれに火を吹きおこし茶を飲みにけり

風呂敷の包みを解けば驚くまいか土の鑄型の人が出た出た

等の圏點の部は名詞の例で、「賣れ残る」「くりそへて遣る」「驚くまいか」「出た出た」等亦この例である。從來の雅言以外自由に言葉を使つてゐる點は、前章にあげた例歌等の中にもみられるので、ここに多く引用する必要はあるまい。石川啄木を始めとし、その流を汲む所謂歌に於ける民衆派とか口語派とか言はれる連中の歌と同樣、口語脈が多く加味されてゐる歌の多い事は、かなり注意すべき事である。ともかく、純な漢語でも俗語でも構はず歌にとり用ひた事は、これ歌論を意識的に徹底しようとした意圖のあらはれとみるべく、漸次作品に於て成功を收めてゐるのである。

寒暖計を寒さはかり、天文家を空はかる人、郵便配達夫を文くばり人といふやうに、現代語をそのまゝ用ひず雅言體に譯して使用した如き類もみられる。かういふ事は舊派歌人にも試みられた事であるが、上述のもの等はおそらく子規獨特の着で、一種の造語と言つてもよからう。雅言も俗語も、臨機應變に、自在に用ふべきであるといふ考、又造語等に目を向けてゐた彼の志を同時に察知する事が出來るのである。

彼は雅言一點張の歌に、漢語・俗語を採用して面目を一新すべき事を說き、實行すると共に、從來の歌人の殆んど用ひなかつた王朝時代の物語に見える言葉等も發見採用したし、句調も遠慮なく在來の歌調を破り使用した。蕪村論に於て、彼は蕪村が漢語を驅使し、又王朝時代の或言葉をも用ひ、用語に於て、句法に於て、變化縱横である事を注意し稱讚してゐるが、その頃から十分に用語の自由論者、擴大主義者であつた事を示すと共に、一面歌に於ける用語論も、俳句方面特に蕪村あたりから暗示を得來つたものの多いことも考へられる。此點まで、彼の歌論は彼の俳論の延長であり、變形擴張せしめられた者、俳句方面の影響は特に否ずる餘地もない次第であるが、ここに念のため注意して置きたい。

但し晩年になる程古語を多く使用し、漢語俗語が減じて和臭を帶びて來てゐるやうである。換言すれば、俳句的表現を去つて萬葉的表現の方面に移したといふこともいへるので、特に萬葉調で、萬葉語の使用等が目立つてきた。歌論に於ては、著しい主張變化は見られないので、そのことは既に認められた通りだが、實作に於ては徐々に變化してゐる。歌を作つてゐる間に、實地體驗の結果、結局萬葉中心に歸せざるを得なかつたのであらうが、一方萬葉集其他萬葉調歌人の作等に多く親しんでゐる中に、この自然な影響をうけた結果でもあらうと思ふも

ふ。調の方に却つて關係が深いのであるが、冠辭の使用等も、卅四年頃特に著しくみられるやうになつた。

わが心世にしのこらばあらかねのこの土くれのほとりにかあらむ
まそ鏡直目に見ねど花すみれつみておくりし人し戀しも
玉づさの君の使はむらさきの菫の花を持ちて來しかも
草枕旅行くきはみさへの神のい添ひ守らさん吾子の車
うちひさす都の君のおくり來し菫の花はしをれてつきぬ

萬葉調への移動であるが、實に言葉を使ふのには名君の人を用ふる賢相等におけるほどといふ實を、自身體得してきたと言ふべきものがある。

睦岡のわらびおとゞは水たまる池田のあそのみ末なるべし
強飯を森田のすくね小宿禰が醉ゑ泣きするを聞けばいたしも

滑稽の作で、歌として高い價値は置かれないとするも、萬葉集をふまへて、而も彼獨特のところをみるべきである。言葉及び詞と詞との接續の具合に獨創的のもの、そこに微妙味のあるものが、晩年に多くなつてゐるやうである。これは「しひて等をとりて」一聯でもみれば直ちにわかる事である。

言葉は私達の思想感情の發表形式の單位であるが、一つ一つの言葉には藝術的生命はなく、(詞それ自身として藝術的臭のするものは勿論あるが) 言葉に活き／＼した命を吹き込む事にこそ、詩人の驚くべき魔術は行はれるのだ。新しい思想感情を盛るためには、新しい言葉、新しい措辭法が採擇されなければならぬ。一

つの言葉は音として響き、明瞭に發聲され、意味を有し、感情を表現し、諸々の影像を呼び來るものであつて、詩の要素としての言葉即ち詩語は最も有效にこの條件を働かせるものでなければならぬ。詩歌を作る者によつて、本質的な美的感受性に惠まれてゐる事は、第一條件であらねばならないが、それと、言葉に對する感覺が敏感でなければならぬ。表面的な言葉の意味しか解しないやうな者は、すでに詩人の資格を缺くものである。言葉のもつ微妙な色調を感じ、清新な感情を注ぎ込むことをなし得て、始めて詩人であり歌人である。歌の改革に際して用語の自由、その範圍の擴大に着眼し、これを實行した子規は、それだけで價値ある仕事をした者であるが、彼が作歌の道程に於て、次第に微妙な言葉の色調や音律を自覺しつゝ進んだことは、彼が言葉に對する先天的のよい感受性を持つてゐたと共に、精進努力して怠らなかつたことを證明するものでなければならぬ。このことは、更に次節に於て、明らめてゆきたいと思ふ。

第二節　詩形（韻律）論と子規の歌

子規は、詩形特に短歌や俳句の形式を如何に取扱ひ、その形式のもつ音調・韻律をどう考へてゐたか。又さういふ點が、作歌にどうあらはれてゐるかを、少しく點檢してみよう。

短歌は三十一音「五七五七七」の五句の連續で、俳句は十七音「五七七」の形式の、獨特な詩形をもつてゐると認められるが、五音・七音從つて十七音・卅一音の多少の出入、例外は認められてゐる。句割れ・句跨りの事實は、五音七音を單位とする短歌や俳句の形式に障碍らしく思はれるし、卅一音・十七音にかなりへだたつた形式の短歌・俳句も、長いその歷史過程にはあらはれてゐる。しかし大體、五七五、十七音、五七五七七、卅一音及びそれらにごく親近な形式が短歌・俳句の形式であると云へる。（大正期に入る前後からかゝる考に對しても疑惑が起つて來、自由形式の和歌俳句といふものも一方には存在してゐる現在ではあるが、そこにはまだ多くの未解決の問題が殘されてゐるとおもふ。）勿論一首一句に就いて味ふ時には、五音は更に「二、二、一」「二、三」「三、二」等に、七音は更に「三、四」「四、三」「二、二、三」「三、三、一」等に分けて、微細な音律の考へられる場合もあるが、それは個々特殊的の事で、短歌・俳句の一般形式については、五、七音を單位として考へて謬らないのである。

さて子規は、用語を廣く自由に採擇する事によつて、閉込められて來た歌界を開放しようとしたと共に、詩形も大意に「字餘り」を用ゐる事によつて、詩歌の内容を擴大し得べきとなし、その實行を說いてゐる。

「字餘り」を例外とする程度を越して、字餘りの和歌俳句を反復試作することによつて、新しい形式の和歌・俳句を生み出すことの可能乃至必要をさへ論じてゐる。これは彼が和歌革新の叫びをあげた卅一年以前の事ではあるが、彼一個の發達史上からばかりでなく、和歌史上も見逃されないものであるから、左に少しく彼の見解を抄出することにする。

明治廿五年日本新聞に連載した例の「獺祭書屋俳話」の中に「字餘りの俳句」といふ簡單な文がある。

俳句に字餘りの多きものは寛政天明の間を最甚しとす。十八九音の句は云ふに及ばず、甚しきに至つては二十五音に至るものありて却て片歌よりも猶長し。今日にありて之を見れば奇怪の觀なきにあらざれども、俳風變遷の精神としては是非とも免るべからざるものならんか。

と言つて、二十許りの古句を擧げてゐる。字餘りを認めるに極めて寛容な態度を示し、歴史的發展の一段階として認容してゐるといふのみである。然るに廿七年八月發表の「字餘りの和歌俳句」と云ふ文の中では、字餘りの和歌・俳句を辯護するばかりでは無うて、積極的に主張するに到つてゐる。その大體は斯うである。

字餘りは例外で、常に用ふべきではないと、歌人・俳諧師は言ふが、卅一文字・十七文字と定めたのは、人間の勝手にした事で、それに外れても惡い事では無い。字餘りといふ代りに卅二字の和歌、卅三字の和歌、十八字の俳句、十九字の俳句等と云へばよい。字餘りは新調の韻文で、新調の韻文を作るに例外等いふべきではない。字餘りは口調惡く口にたまる心地がするといふが、俳句・短歌の定型を標準として讀み下すからで、耳も口もその調子に許り馴れた故であらう。習慣以外「五七」「七五」等の調がよい事もあらうが、「五七調」

「七五調」等ばかりを好調とするのは僻見である。好んで字餘りの句を作るのは着を弄し奇を衒ふ者と多くの人はいふが、そは眼孔小なる者、支那古詩の結尾に一句十餘字の長句があり、それは結尾を振はせるために必要なのである。和歌・俳句も語勢を強くするため、やむなく字餘りを使ふので、新奇を弄するのではないと云ひ、

　況んや三十一字の和歌、十七字の俳句は古來より言ひ古して大方は陳腐に屬し、糞土に落ちし今日、少くとも三十二三字又は十八九字の新調を作るの必要を見る。余は向後先づ此一點より漸次陳腐を脱せんとするの志あり。

と、自分の創作上に字餘りを用ひ新方面を開拓しようといふ意圖を公言してゐる。子規は、明治卅年頃までは屢ゝこれに類似の意見を洩らしてゐる。例へば「俳句問答」(廿九年發表)の中で、「近頃の俳句を見るに十七字にはあらで十八字、十九字、其外二十字にも餘れるなど少からず。それにても差支無きや。」といふ問に答へて、

　差支あるか無きかは俳句の定義を確定したる上ならでは論し難し。若し十八字、十九字等の句にして俳句といふべからずといふ人あらば、之を俳句といはずとも可なり。假に稱して十八字の新體詩、十九字の新體詩、二十字の新體詩ともいはん。吾ははじめより俳句を作らんとて骨折るに非ず。只ゝ吾感情を見はさんとて骨折るなり。其骨折りの結果が十七字となるか、十八字となるか、はた二十字となるかは豫期する所にあらず。

と言つてゐる等であるが、和歌や俳句の定型に對し、この不滿疑惑を投げたのは、彼が俳句作者として新趣向新方面を開拓しようとして字餘りを盛につくつた體驗の所産であり、又周圍の無自覺に挑戰する幾分の誇張も

あつたであらう。即ち當時の和歌・俳句が實質上見るべきものなく、只形式形骸許りの和歌・俳句とでもいふべきものが甚だ夥しかつたがため、和歌・俳句と云ふ名稱等はどうでもよい、眞情をありの儘に表現したものが卅一音、十七音にならぬとて、それは問題でない。むしろ形式は打破して新形式の詩歌を創造すべきであるといふ、議論式な考が活潑に起つて來たのであらう。又言葉に新しいものを採用し、取材を廣く、趣向を複雜にといふやうな事許りをめざして進めば、短かい和歌や俳句の形式が甚はしく狹い者に感じられてくるのも、無理のないことである。子規が、ある時期に於て、和歌や俳句の形式を否定し破壞しようとするやうな議論をした事は、彼に於て內的にも外的にも相當の理由があつたと言ふべきであらう。俳句十七音中心の詩形、三十一音中心の短歌詩形が本質的にどんな形式價値があるかは、異見のある所と思はれるが、その形式を否定した事實がすでに劃期的のものであり、その形式を否定した若き改革者子規の意氣には學ぶべきものあることを信ずるのである。

併しながら、歌人・俳人にして、その形式を否定する時に於て、少くともその人は歌人・俳人の第一資格を缺く者といふべきではないか。言ふ意味は、その形式に不滿を感じつゝ、その形式に自己表現をする者は矛盾・無定見で、その不平の心に生れるものゝ質は決して勝れた者であり得ないであらうと言ふ事である。俳句の形式に、短歌の形式に安心して自己を投げ出すことの悅を感ずるといふ風でなければ、到底よい作は生れない筈である。形式に煩はさせられるのでは、それは眞正の形式ではない。詩の形式に對する存在理由を尊重するも、その形式に牽制された自己の生命を寄託する事を信ずる事なしに、當今作者に甘んじて安住す

ることは、矛盾であり、墮落である。子規が一方、形式打破、新形式創造の考を洩らし乍ら、主として定型に甘んじてゐられたのは、その考が主として理論から得來つた者で、深い切實な體驗から湧き出した淵であつたといふべく餘りに薄弱のものであつた事を物語るものではあるまいか。二字や三字の字餘りは今日何の不思議もなく許容されてゐるばかりでなく、俳句にも和歌にも自由律の作品がかなり夥しい現代の狀體をみせしめたならば、子規はその進展に驚き、却つて彼の理論を撤廢したでもあらうか。時に、その議論に極端さはみえるが、念とする所、子規の論の中心は、なほ二字三字の字餘りを限度としたものとも考ふべく、これ以上の定型否定新形式創造の所說は、周圍への反抗的强辯の餘唾ともみなさるべきものであらう。即ちその理論は、時代から、周圍から、主張すべき歷史的な立場に彼は直面したからで、彼自身の問題、創作に於ける自身の痛々しい體驗の結果ではなかつたと言ふべきである。かう考へてくると、作品が論に働きかけたよりも、遙かに論が作に影響してゐることの多かつたことが考へられてくる。

碧梧桐や井泉水等の新傾向の俳句及び俳論は、ある程度迄子規に源を發してゐると云へる。子規が知的に聲明しかけたものを、體驗に於て感情に於て辿らうとしたものと考へることが出來る。子規自身には遂にさういふ時代は來なかつた。「字餘り」はよく主張し、實行したが、「字餘り」から發展して、自由詩形の主張をすること等は漸く斷念したと思はれる。卅二年正月發表の「俳句新派の傾向」の結論に、

俳句の形式は十七八字を限りとして定められたる者、更に之を擴張すべきにあらず。限りある文字、僅に十七八字、如何程之を複雜にせんとするも、如何程之をして印象明瞭ならしめんとするも、終に容易に其極度に達せん。余は思ふ

今日の進歩は殆ど極端の進歩にして、最早此上の程度に於て複雑ならしめ明瞭ならしむる事能はざるべきを。

とあるが、この頃から、形式に對して消極的に滿足しようとしてゐるのである。

字餘りと云ふ事を極度に廣く自由に解釋し、新形式の創造といふやうなことまで頭に置いて、やゝ亂暴に字餘りを試用してゐたが、段々その不可を自得し、新詩形創造の主張等は、もはや斷念したやうに見える。これは自己の周圍に無闇に、字餘り俳句を製造する弊が起つた事等による反省にもよるが、主として彼自身の和歌・俳句の實作上の體驗の結果から、前説撤回となつたのである。而してこれは創作が議論を支配した點が多いから、先の關係とは逆であるのである。

さて、子規が字餘りを以て、創作上一種の新調を出さうとして苦心してゐる跡を辿ることはかなり有益であるが、歌作では、例の「百中十首」頃の作に最も多くあらはれてゐる。「百中十首」には三首に一首づゝ位の割合で、字餘りの歌が見出される。就中結句の字餘りが多い。而してそのてにをはが入れてあるためと、漢語を多く用ひたために字餘りを形づくつたものが著しい。

後夜の鐘三塔の山に月出でゝ南大門前輦塵群れて行く

この下句は、さういふ質の「字餘り」の特色をよくあらはしてゐる。すでに前章に引用したもの以外、三つ四つ例歌をあげておく。

とばり垂れて君いまだ覺めず紅の牡丹の花に朝日さすなり

ゐのしゝはつひに隱れし横山の尾花が上に野分荒れに荒る

わが船は大海原に入りにけりへさきに近くいるか群れて飛ぶ
花を絕えて沖にたゞよふ船の人の死ぬとぞ思ふ念佛高くいふ
をり／＼は不盡の嶺おろし雪を吹きて春まだ寒し武藏野の原
朝な／＼掃きあつめたる落椿紅腐る古庭の隅に

（なほ、もつと極端の字餘りも、「百中十首」其他に散見するが、他箇所で例示した歌の中にも、旣にあること故、特にここに引用しない。）

理論を直ちにあてはめたといふ缺點が幾分あつて、十分成功した者は尠いが、實行的努力は尊重すべきである。晚年に至つても、字餘り用法の、適當な十分な必要を認めてゐて、歌論や歌評にも度々その見解を示し、自己の作歌にも的確に有效に字餘りを使ふに到つてゐる。

最初字餘りを例外とせず、新詩形を創造しようとさへ言つた彼の心は、因習的な俳壇・歌壇にあきたらぬ所が主因となつて胚まれて來たものであり、後には字餘りの功用を適當に體得して、一首一首を生かす上に必要なる字餘りを例外的に認めて來てゐる。此の間の消息は餘程明かにあとづける事が出來るが、歌集を開いてみればわかる事でもあるし、ここでは略しておく。

五七五七七、卅一音の短歌形式に對し多少の疑問を抱いたものの、大體それを肯定するに到つた事は、すでに述べたのであるが、この短歌の持つ形式美卽ち五音七音の結びつきから卅一音を構成する、短歌特有の音律をどう考へてゐたか。短歌形式を認める者は、同時にその形式の持つ諧調を味覺する人であるべきであ

るが、この點について少しく子規の考察を辿つて見たいと思ふ。

歌の歌ふべきことはいふ迄もなし。古の歌を歌ひしのみならず今の歌も歌ふなり。日本の歌を歌ふのみならず支那西洋其他あらゆる國の歌は皆歌ふなり。歌ふ者なればこそ五言六言七言などそれ〴〵の調子もあれ、歌はぬ者ならば何しに字數平仄を合すべき。然るに古の歌は歌ひて今の歌は歌はずと思へるは間違なり。但歌ふ調子は古と今と異なるべし同時代にても人によりて異るべし。（「人々に答ふ」(十二)―三十一年五月三日）

等と言つてゐる。又調は歌や俳句許りでなく、散文にもある、散文には散文の調子があると云ふ事を論じてゐる。仔細にみれば異見もあるが、子規が詩歌の音律を認めてゐたことは、これでもわかるのである。和歌と俳句とを比較して、

俳句には調が無くて和歌には調がある、故に和歌は俳句に勝れりとある人は申し候。これは強ち一人の論では無く歌よみ仲間には箇樣な說を抱く者多き事と存候。歌よみどもはいたく調といふ事を誤解致居候。調にはなだらかなる調も有之、迫りたる調も有之候。平和な長閑な樣を歌ふにはなだらかなる長き調を用ふべく悲哀とか慷慨とかにて情の迫りたる時又は天然にても人事にても景象の活動甚だしく變化の急なる時之を歌ふには迫りたる短き調を用ふべきは論ずる迄も無く候。然るに歌よみは調は總てなだらかなる者とのみ心得候と相見え申候。斯る誤を來すも畢竟從來の和歌がなだらかなる調子のみを取り來りしに因る者にて、俳句も漢詩も見ず萬葉集をも讀まざる歌よみには爾か思はるゝも無理ならぬ事と存候。とにかく困つた者に御座候。なだらかなる調が和歌の長所ならば迫りたる調が俳句の長所なる事は分り申さゞるやらん。併し迫りたる調子も調なりといふ調の味は古今集などみたる人には到底分り申す間敷か。（二三十年歌よみ一

與ふる書」……三十一年二月十八日）

と論じ、眞淵等の歌も調子は弱く、なつてゐないと、一般歌人の一律になだらかな弱い調子で作歌してゐるのを攻撃し、寧ろ俳句の長所である、迫つた強い調子の尊重すべきことを暗示してゐる。が、まことにその感情內容に應じて或は細く或は太々しく、或は強く或は弱々しく自らその調子はあらはるべきものである。たとへ短かい詩形であつても、作者の技術次第で、自由に限りなく變化する所に、詩的音律の價値が存すると言つてもよい。力のない緊張しない、だら〳〵した調は五七五七七に整へられても、眞の詩的內容を持つた和歌とは言へないが、和歌の調といへば、なだらかな優美の調といふ風に一樣的に常套觀を以て對する事は、言ふまでもなく謬である。實にこの弊は、子規の出た頃の一般歌よみには多少とも免れなかつたのである。子規はよくその弊所を洞察してゐたと言ふべきである。

子規は、なだらかな調、優美な調子を和歌の本領と考へてゐた樣な當時の一般歌人の謬見を指摘し、之を攻撃して、特に雄々しい調を重んじ、愛し、主張した事に、第一の着眼があつたやうに思はれる。

言葉は自由に自由にと云ふ主張が主となつてはゐたが、晩年になればなる程萬葉語等を多く用ひてゐる傾向を來した事は、既に一言した所であるが、調子の上でも凡ゆる調の存在を認め、個性的なリズムと云ふ如き者まで認めてはゐたが、大體に於て、強い雄々しい調を尊重し、この見解から萬葉調を認め主張したやうに思はれる。「歌よみに與ふる書」には「眞淵の歌にも生が好む所の萬葉調といふ者は一向に見當り不申候。」といひ、又魚彥は萬葉を摸したが、これはと思ふもの極めて少く、いかにも古調は擬し難いものらしいとも

言つてゐる。この言葉によつて彼の萬葉尊重の精神を喚ぶ事が出來るのであるが、「人々に答ふ」(三)には、

萬葉調を以て凡百の物事を詠まんとならば大概に於て賛成致候。となりながら古今調を以て詠まんとならば大不賛成に候。

等と言つて、その態度を明かにしてゐる。明治卅一年頃から大體ここに主張の中心を置いたのであるが、歌に於ても徐々にその實を示して來た。齋藤・古泉二氏編、竹乃里歌全集に據つて、嘗つて計算した結果は、歌の結尾が「かな」「かも」で終つてゐる、卅一年の作、かな十七、かも一であり、卅二年はかな三、かも十であつた。これは全集中の作品に於ても大體同じであらうと思ふ。而して卅四五年は殆んどかなは用ひられなかつた位である。かゝる一つの詠嘆の助辭の用法で調子全體の事を論斷しようとするのではないが、彼の作歌を年代順に讀み味つてゆく時は、所謂萬葉調を徐々に濃密に加味して來てゐる事が十分わかるのである。今かもの使用の增加によつて、その一つの實例を示したばかりである。

さて彼の考へた萬葉調の範圍・內容は如何。この問題を究明する事は、また同時に彼の歌の調子に對する殆んどすべての見解を知る事でもあるのである。

「五七五七七」(卅一年七月發表)の文には、五七調から七五調に變化した事を論じて、

上世の人は鈍く、のろく、氣長く、重々し。五七調の如き尻重き歌は其氣質に應じて起れり。後世の人は輕く、はしかく、氣短く、輕々し。七五調の如き尻輕き歌は其氣質に應じて起れり。

と單純に說明し、五七調と七五調の差から生ずる二句切と三句切の和歌の比を、萬葉(一二四〇)・古今(三)、七五

後撰(一、八〇)　拾遺一、一四　後拾遺一、三一　金葉一、二四　詞花一、六八　千載二、三九　新古今二、二六　の數字で示してゐる。五七調で、三句切のごく稀である事等に萬葉の總括的特質を認めた者といふことが出來る。「宗武は萬葉を學びて其骨髓を得たる者、其歌多くは萬葉調なり。されど萬葉を固守して其範圍を脫する能はざりしが如き無能者にはあらず。其歌に三句切の多き、てには止の多き等皆萬葉以外に得たる所なり。」(歌話)等とあるのも、この考が裏に肯定されてゐるのである。「萬葉集を讀む」(卅三年五月)で、萬葉集冒頭の雄略帝の御製と記されてゐる「籠毛與、美籠母乳」の歌に就いて、五七調以外に出でゐる所に、この歌の內容にふさはしい調のあらはれてゐる事を說き、「若し此歌にして普通五七の調にてあらば言葉の飾り過ぎて眞摯の趣を失ひ却て此歌にて見る如き感情は起らぬなるべし。」と言ひ、萬葉調と云ふものは五七調に限らず、もつと種々の變化(三言、四言、五言等)を味ふべき事を論じてゐる。調を廣く深く理解したことは思はれるが、萬葉長歌の例外的の者に據つて萬葉の特色を論斷するのは早計であらう。たゞ子規が萬葉の定型的のものからなほ進んでは記紀の無定型の詩歌までに遡らうとした純一な態度、觀賞の廣さのあらはれを、ここにみるのである。

三句切の歌を彼の歌集に就いて檢してみると、卅三年の歌にはまだいくらかはみられるが、卅四、卅五の兩年になると、殆んど見當らぬのである。議論を徹底させて行く努力の結果であらねばならぬ。三句切の多かつた卅一年の歌から、例歌を少し拾つて置かう。

ほとゝぎす鳴くべき頃となりにけり青葉にこもる山の下庵

鉢植の柑子の花は咲きにけり山ほとゝぎす明日や鳴かなん

ほとゝぎす都の空にとよむなり大宮人の今か聞くらん

川かみに鷄鳴く里の名も知らず山靑くして家五つ六つ

たまたまにちひさき花火あがりけり夕涼み舟今や出づらん

夕立のやがて來るべきけしきなり俄にさわぐ風の音かな

夕立はとなりの里や過ぎつらん蟬吹き飛ばす椎の葉の風

夕立の馬は雲井にかけりけり石引く牛の濡れつつぞ行く

天人が湯あみの盥かへしけんこの里ばかり夕立のふる

須磨の海は砂うつくしく松靑し南をうけし潮あみどころ

後年にはこの種類の者は皆無で、一氣に詠み下した者か、二句切乃至四句切ばかりである。彼は三句切の歌を全然否定してゐたのではないが、俳句作者であつた彼には特に三句切の歌は一等容易にまとめられ、往々上句と下句が離れ離れのものとなつたり、下句が蛇足であつたり、單なる上句の說明になつたりして、下句の十分活躍しない弊を知つてゐたのであらう。元來三句切の弱い調子は、彼の好まない所でもあつたのである。

奈良山の兒手柏のふたおもにかにもかくにもねぢけ人の友

に對し、

此歌・役風景なる傍人を題としながら其の調の高きために歌が氣高く聞ゆるなり。此調の高き所以は初句より一氣呵成に言ひ流し最後に名詞を以て結び一箇の動詞をも著けざる處に在り。末句を八字にしたるも結ぶに力強ければなり。此調萬葉以後に無し。（明治三十二年「萬葉集卷十六」）

と云ひ、また、

　　このごろの吾が戀力記し集め功に申さば五位の冠

を許して、

「功」「五位」皆漢語なり。戀に骨折る功勞をいはゞ五位ぐらゐの値打はある、と自ら戲れいへる歌なり。戀に骨折る程度ともいふべき事を「こひぢから」といふ一語につゞめたる作者のはたらき畏るべき者あり。此活用あるため萬葉は常に調子高き事を得たるに反し、古今以後にては詞は總て古きによるの主義にて全く造語を禁じたるため皆腰拔の歌となりたり。時として近時の俗謠に調子善き者あるは詞に束縛せられずして却て詞を活用するに因る。（「萬葉集卷十六」）

と言つてゐる。

前者は句切れなく一本調子のこと、動詞なきこと、結句の字餘り等に、その特色を認め、後者では漢語を用ひた強い調子のあるのを喜び且つ戀力といふ造語を賞してゐるのである。用語によつて一首の音調も支配され釀成されてゆく。音律論はその用語に留意すべきは勿論で、彼がここに萬葉の特色をかくの如く認めた事も是認出來る。漢語を多く用ふることを論じ、又好んで自分でも使用したのは、主に強い雄々しい調を好み、それを意識的に出さうとしたからである。結句に人名を置くことが萬葉の特色だと言つて、

よろづ代に語りつげとしこの嶽にひれふりけらし松浦さよ媛

海原の沖行く船を歸れとかひれふらしけむ松浦さよ媛

行く船をふりとゞみかねいかばかりこほしくありけむ松浦さよ媛

の歌を擧げてゐる(竹里歌話參照)が、一首の据りと云ふ事に留意してゐたので、漢語等を用ふる事を好んだ彼の頭に自ら浮んで來たものでもあつたらう。漢語の用法に就いては、一首に二つ三つ用ふるか、又は長い漢語を一句だけ置いて調和する場合が多い。總體雅語のやさしい歌の中に只一つの短かい漢語や洋語を交へるのは不調和であると注意をしてゐる。是等も、よく一首の調和、調子といふ事を念頭に置き、創作上の體驗を經た者の言葉である。彼の歌には、かゝる用意はいつも忘れてゐなかつた觀がある。

結句を生かす事は重要な事であるが、彼は字餘り等によつて音調の上から結句を生かす事を常に說き、且つ實行した。

所謂新派の歌は複雜なる材料を上三句に纏めて下二句は無用の語を綴りたるが多き故に音調平闊懈怠の弊に陷る。殊に俳人の作りし歌は俳句の下に十四字を添へたる如き觀あり。いと見ぐるし。(歌話)

と云ひ、曙覽の歌に對しても、頭重脚輕の弊があると指摘し、それ故に曙覽は調子を解さずとまで貶してゐるのである。彼は卅一年頃から、力めて字餘りを使つたが、たゞ最初に、「俳句の歌」だといふやうな非難は免れられぬ弊が多かつたのであるが、彼の努力と熱心は、一年毎に作歌の上で著しい進境を見せた。

物いはぬよものけだものすらだにもあはれなるかな親の子を思ふ(實朝)

について、「此歌は第五句字餘り故に面白く候。」といひ、

　阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせたまへ（傳教）

についで、長句の用ひ方等のうまい事をいひ、又結句を九字にしたのは、自らの事であらうが、第二句の十音に對應するために必然的に要求さるべきであると論じてゐる。これらの句法上の注意は、音調論として注目すべく、これは彼の體驗の跡であり而も意識的に作品に試みられてもゐたのである。「短歌愚考」（三十三年一月發表）の中に、

　森の上の朱塗の塔の片へのみ眞白になりて雪晴れにけり

（愚考）森の上に見ゆる幾重の朱の塔の片へ眞白に雪つもりけり

から改作してゐるが、主として頭重脚輕の弊を救はんとしての改作である事は、その說明によつて明かであるが、同じく「短歌愚考」中に、

　庭を淸め座敷を拂ひ床の間に掛物掛けて茶を飮みにけり

（愚考）いにしへの竹の林に遊びけん人の書掛けて茶を飮みにけり

『歌のはじめに「庭を淸め座敷を拂ひ」など重くるしく置くは大方惡し。云々』と言つてゐる。やはり頭輕脚重を音調上の理想としてゐた彼の意見が覗はれるのである。結句の字餘りを肝要としてゐたのは、かういふ彼の考に關聯して理解さるべきものである。萬葉の特質としてのみ認めたのではないが、注意するに足りるのである。これらは彼の歌に於ける句法上の重大な特長の一つで、この論が如何に歌作にあらはれてゐるか

等と註釋する必要は全く不要であるとさへ思はれる。

あしびきの山の雫に妹待つとわれ立ち濡れぬ山の雫に

の如き、第二句を第五句に繰り返す等も萬葉集にはまゝあると云ひ、又

よき人のよしとよく見てよしといひしよしのよく見よよき人よく見つ

については、

「よき」「よし」「よく」などいふ言葉併せて八度繰返されて居り、此の如く多きは他に類例無し。

といひ、同音で韻をふんで、快適たリズムを出してゆく調子も萬葉等に多く用ひられてゐることを認めてゐる。懸詞とか緣語等は、多く言葉の洒落と理窟に墮すると言つて排斥してゐるが、彼は一音一音の細かいリズムは十分わかつてゐたやうである。科學的な、正確精密な議論は發表してゐないが、歌の音調といふことについては十分氣をつけてゐて、堂に上つたと言つてもよい境地にまで進展して行つたと考へてよい。彼の晩年の歌は同音が一首中にくりかへされてゐて甚だ快調な者が多い。又單純化に徹底し得た故でもあらうが一句全部の音は稀だが、繰返しの語法等が多く使用されるに到つてゐる。一言でいへば、晩年の歌は非常に音樂的要素が豐富にあらはれてゐるのである。

このふみを、　あましゝ人、　このふみを、　よめとたばりぬ、　そをよむと、　ふみあけみれば、　もじのへに、
なみだしたゝる、　なき人おもひて（史料大觀臺記、槐記、扶桑名畫傳）

この長歌をよんでも、十分にそれは認められるであらう。枕詞や序は歌の音調の上に大事な役割を果して

ゐる者であるが、彼が「病牀歌話」の中で、長塚節の歌をほめ、例歌をあげ、序の句が面白いと云ひ或は萬葉調が面白いといふ人、様々であるが、序の句も面白いが、結句の十分働いてゐる處が見どころだといふ意味を洩らしてゐる。これは彼の結句を重んじた考は勿論、序や枕詞の妙味を認めてゐた見解等も想像出來て參考になるが、彼の作歌を見るに、晩年になるに從つて、序や枕詞の使用も際立つてあらはれてゐる。それは萬葉集を心讀し、眞の萬葉調に理解を深めた結果でもあるが、より深く歌そのものゝ調子の眞諦を自得し得たものと言ふべきである。例はあげないが、卅四五年頃の歌を讀めば、誰人もこの間の消息を容易に窺知することが出來ようとおもふのである。

少しく前後混亂した叙述ではあるが、私の言はうとする要點は、最初短歌形式を否定するやうな口吻を洩らした子規が、追々短歌形式の美を認めるやうになり、作歌に於ける自己の體驗も手傳つて、音律にも深甚な注意を拂ひ、理解を深め、その形式美に着眼しつゝ、作歌の上にも着々實現して行つたといふ單純な徑路を認めようとするにすぎない。而して主として萬葉調に愛好を寄せ、萬葉集の理解鑑賞の進展に伴ひ、作歌の實際にもその長所を活用し得たといふことを注意したいとおもふのである。

私自身が短歌形式を如何に認めるか、その五七五七七の形式がもつ韻律の美を如何に理解するか等について、卑見を披瀝する所のなかつたことは残念であるが、それらは他の機會に讓つて、次に少しく彼の内容論にふれてみたい。

第三節　趣向論とその歌

短歌の形態・韻律・用語等に關する子規の意見の展開に就いては略ゝ述べたのであるから、ここには、歌の内容を如何に考へてゐたか、作歌態度はどうであつたかといふ方面について略說しようと思ふのである。僕は趣向とか意匠とかの言葉を用ひてゐるが、着想と云ふ程の意味で、短歌は如何なる內容を有するか、如何なる態度で素材に立向ふべきかと云ふ、短歌內容論乃至作歌態度論と云ふ方面を含んでゐると見てよいかと思ふ。卅一年四月、陸實(羯南)に與へた手紙に、

趣向　　言葉　　智識

の三より歌はなるとの御論には固より異論もなく候

但私は

趣向　　言葉

の二つに分ち申候智識は趣向の中に含めしたる者に候併しこれは枝葉の論に候

趣向ありとも言葉を借らざれば此を現すこと能はざるは勿論なれどもさりとて言葉ばかりにては何にても出來ぬ中には

と趣向まづ有て而して後に言葉に來る者なれば趣向を根本と申候わけに御座候

趣向善くとも言葉わるくば何にもならぬ事にて趣向も言葉も揃はねばならぬは固よりなれども強ていへば

趣向不可　　言葉可

よりは

趣向可　　言葉不可

の方を取りたく存候趣向が面白ければいひ樣がまづくてもいくらか面白く感じ申候

とある。藝術家は作品を産む根本の感動を尊重すべきである事はいふまでもないが、或者は表現技巧を尊重する餘り、本源となる感情を閑却し、内容の充實を忘れて形式美の條件を力説するのである。わが短歌の歴史に於て、歌は感情を本とすると云ふことは、いつもある人々によつて説かれてはゐたが、さう唱へながら、實は詞花の技法が不當に尊重され、歌が詞の遊戲に墮してゐた場合が甚だ多かつた。子規は形式の涸渇、技巧の常套を突破つて、新技法を施さうとした者であるが、もとより内容尊重論から出發して、内容を生かすための言葉や技巧を研究したものである。彼は空疎なる内容論者ではなくて、實に用語や音律についても周到なる用意を以て研究したが、世の所謂技巧論者ではなくて、詩歌内容を第一に尊重してゐたことは、上掲の手紙にもみられる所である。而してここに子規が所謂趣向と稱したのは、詩歌の本源である感動内容をどう取捨選擇すべきかといふ作者の意識的な考慮をも含めてゐるもので、單なる内容論以外、作歌の態度が附屬して考へられるべき理由を見出すのである。

私は先づ彼が「歌と俳句との關係について」の考察意見の成長を辿る事によつて、その短歌内容論の變遷を明かにしたい。

廿五年「日本」發表の「和歌と俳句」と云ふ文章は、（註一）とりたてて述べる程の者でないから略し、廿七年七月發表の「文學漫言」中の「和歌と俳句」の條を見る。ここに必要な要點を記すと、和歌と俳句とは各長所がある。例へば冠辭を置き、對向をなし、其他迂余婉曲の處は和歌の長所で、些少の事、掌大の景を簡勁な文字に綴り

多少の餘韻を持たせるのは、俳句の長所である。この長所は各〻奪ふ事が出來ぬが、唯こゝ一點の相異のみで、俳句と和歌の内容には變りはない。たとへば雄壯な處、秀麗な處、蒼老な處、質樸な處、皆その境を一にしてゐる。「韻文と散文とを問はず便宜の爲め之を分析して二元素と爲すを得、一は意匠（心）にして一は言語（姿）なり。意匠は人事を叙するあり天然を叙するあり。（中略）意匠は古今東西を通じ各種の美術を貫きて敢て異なる者に非ず。故に和歌の好意匠は俳句の好意匠なり。漢詩の好意匠なり。西詩の好意匠なり。豈啻文學の好意匠のみならんや。亦繪畫の好意匠なり。其他一般藝術の好意匠なり。」と言つてゐる。「俳諧大要」（廿八年）には、和歌の文學的にすぐれた者が現在少く、それ故和歌をやつてゐる人が俳句に入ることの困難のことを論じてゐる。江戸時代から明治時代にかけての和歌と俳句とを比較するに、俳句の方が遙かに勝れ、藝術的價値の高い者の多い事は、子規の屢〻言及してゐるので、珍とするに足らぬ。歌と俳句の實質をば、かく等差的にみてゐるのであるが、兩者のめざす内容は等しいとたゞ考へてゐたのである。卅一年三月發表の「曝背閒話」には「歌俳漢詩洋詩各〻形を異にして趣を同じうす。」といひ、但し形が異れば調子も異ひ、調子が異へば各〻その調子に適する趣向がある。例へば和歌には複雜な趣向をとり、俳句に奇警な趣向をとるが如き比較的の長所短所はある等と論じてゐる。「文學漫言」等にも、長所短所があるとは論じてゐるが、多少調子の差と云ふことは考へ乍らも、それが内容に盛るもの迄に長所短所があるとは判然と考へてゐないのであるが、ここに、内容上にも適不適のあることに論及されてゐるのは、やゝ注意すべく、それは彼が實際熱心に歌を作り始めてみて、さういふ考が頭に萌し出したのであらう。但し同年五月「人々に答ふ」（十二）

の中でも「歌は俳句の長き者、俳句は歌の短き者なりと謂ふて何の故障も見ず、歌と俳句とは只〻詩形を異にするのみ」と、なほ概論的な内容論を以て押してゐるのである。所が段々歌を作つてゐる中に、俳句と和歌の内容とすべき者に適不適があることを、實際に痛感することが益〻甚しくなつたのであらう、卅一年發表の「歌話」には、今迄よりも兩者の内容の適不適について、體驗的の言葉が語られるに至つた。即ち和歌が、全く空間的な趣向を詠むよりは、時間を含んだ趣向を詠むに適し、俳句が空間的な趣向を詠むに易く、時間を詠むに適しないといふことの相異を認めてゐることである。子規の、歌に詠むに適する時間を含んだ者といふのは、

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ不盡の高嶺に雪はふりける（赤人）
箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ（實朝）
わかの浦に潮滿ちくれば潟をなみ蘆邊をさしてたづ鳴きわたる（赤人）
大海の磯もとゞろによする波われてくだけて裂けて散るかも（實朝）

の如きもので、後の二首は前の二首のやうに長い時間を含まぬといふ説明である。續けて彼は云ふ、

故に俳人の歌を作る者多く此心得を移して純空間の趣向を捉へんとす。若し俳句十七字に詠み得る如く純空間の趣向を短歌三十一字に詠み得るとせば略〻二倍だけの複雜なる趣向をも詠み得べき筈なれども、實際歌にては俳句程の複雜なる趣向すら詠まれざるが如し。それは兩者句法の相異に因るなり。

と。又同じく、「歌話」の中に、俳句の雜の句はつまらぬが、歌では雜の句が面白い。歌の調子のせゐで、

調子上の美を感ずるからである。俳句の聯想に待つ事の多いのは、この一事でわかると云ふ意味を洩らしてゐる。作歌の經驗の結果、最初形式的差異のみを認めると漫然と論じてゐたものが、卅二年頃は形式に依つて規定される內容の相異（子規の言葉に忠實にいへば、內容に盛る素材の適不適）を認めざるを得ないやうになり、その上、短歌の音調の上にも特殊な美を味ふやうになつたらしいのであるが、これは熱心な作歌修行の賜であつたと言はねばならぬ。

卅三年一月發表の「短歌愚考」中に、

磯ばたにつもれる雪を少しづゝかどのみて引く沖つ白浪

を改作して、

荒磯のいさごにつもる雪の上にうちかぶせたる沖つ白浪

とし、

前の歌面白き趣向なれども「少しづゝ」などいふ小細工の形容は却て歌に適せず。歌は三十一文字故、十七字の俳句の如く小細工なるはわろし。

と云ひ、歌と俳句の趣向は同じものもよいが、短歌の表現はどこまでも大まかであれとて、大庭と小庭の木石の比喩で說明してゐる。素材內容の上で、等しい者を詠むによい場合もあるが、その時に於ても表現上には綿密な注意が要るといふので、別言すれば、單なる內容的要素以外、歌の音律の重視すべきことを認めてゐるともいふべきものである。

和歌・俳句の相異を徐々に具象的に認容しながら、子規の落ちついた徑路は、卅三年四月「心の花」發表の「歌と畫」の中に、今までよりも、より明白に、綜合的に述べられてゐるのである。

只一昨年と今年と少しく考の變りたるは、短歌は俳句の如く客觀を自在に詠みこなすの難き事、又短歌は俳句と違ひて主觀を自在に詠みこなし得る事、此二事に候。

一昨年頃は俳句に詠み得る景色は何にても三十一文字に入れ得べきやうに信じ候ひしかども實地經驗を積むに從ひ、短歌は俳句の如く輕快なる微細なる景色を詠み難きを發明致候。乍併俳句に詠みたる趣向は盡く短歌に適せずと申すには無之、少くとも其半は短歌にも適し可申候。若し又俳句に用ゐたる材料のみに就きていはゞ十中の八九迄短歌にも用ゐられ可申候。其程度は實地の歌に就きて申すより外無之候。斯の如く短歌が占領する客觀の區域は俳句よりは狹き代りに、短歌が占領する主觀の區域は俳句より遙に廣く候。雜の短歌、時間的の俳句に名作少きに拘らず、雜の短歌、時間的の短歌に名作多きは此故に候。

明治卅一年即ち歌の方面に大勉強をし始める頃までは、子規は單純に、文學は、藝術は皆同一の趣向內容を現し得べき事を考へ主張してゐた。小說も作り、俳句・新體詩・和歌と何でも手をつけた人であるから、各〻の長所短所を、ある程度は實感として理解してゐた筈ではあるが、なほ平等性の一面を、より多く主張してゐた。而して俳句になる題材や趣向は、同樣に和歌に於ても成功し得べき事を信じ、俳句革新の餘勢すさまじく、歌壇に躍進したのである。卅一年頃の彼の歌が非常に俳句的であるのは、これが爲である。併し歌を熱心に研究し作歌をし續けてゐる中に、內容上も又音律上からも、兩者には各〻特異な領分のあること

ね感ぜざるを得なかつた。最初は俳句も歌も同一の趣向・題材を内容とすべきで、作品的形式の差異はあつて、特殊な視野はあるべきで無いと、單純な概論できめつけてゐたものが、作歌の體驗によつて、この兩者の獨立性・特異性を深く内面に及んでゐる事を認めざるを得なくなつた。その後の體驗と自覺した兩者の特異性について、精細に吟味し批評しようとは思はないが、俳句は空間描寫に適するに對し、短歌は主觀的なものを詠むに適し、俳句が空間的な者を詠むに適するに對し、歌は時間を含んだものを詠むに適してゐるといふやうた長所を持つてゐるといふのが、主たる發見であるが、かゝる内容的差別を認める迄には、俳句と短歌に對する十年に近き體驗を經てゐる。實に小つぽけの事のやうであるが、さういふ結論によつて獲る得た事と思はねばならない。少くともこの自覺は數年の熱心な作歌によつて獲得されたもので、後の歌にはこの自覺がよく役立ち、具體化されて、作歌の進展を來す結果にもなつてゐるのである。一言にいふと、[illegible]すされた歌も、俳句的語法・取材乃至俳句的趣向の[illegible]を[illegible]してゐるのである。

歌の内容傾向は他の文學藝術の内容と同等であると云ふやうに考へてゐた時の彼は、從つてあらゆる藝術美の要素を内容とすべき事を主張してゐた。纖巧・壯麗・滑稽・簡單・奇拙、あらゆる[illegible]情趣を求むべき事即ち内容を豊富に複雜にすべきことを主張した。かくて題材の上にも出來るだけ多方面に目を注ぎ、何でも歌にまとめあげようと試みたのであるが、今迄俳句の内容となつたものの中にも、歌の内容として成功し難いもののある事を痛切に實驗しては、實際作歌の上にはある限定されざるを得なかつた。併し彼の根抵には、しばらくこの考は未練がましく働いてゐたであらう。美的要素を出來るだけ廣く求めること、素材を

出來るだけ廣汎に求めることは、改革者として言ふまでもなく、立論としても、普遍的の正しさを有する者である。併し個々の作者としては得意・不得手は免れ難く、廣くよりも寧ろ深く掘り下げるといふ態度にこそ、藝術家の矜持があらねばならない。この點に、彼の三十一二年頃の短歌理論及び作歌そのものには、多少遺憾の點があるのである。

彼は又、清新な趣向をとりいれるべき事を主張したが、出來るだけ廣い範圍のものを內容にとり入れようとした事は、この點でも有效であつた。舊來の短歌の常套を脫するためには、特につとめて新鮮な趣向を求める必要があつたのである。而して俳句的趣向を遠慮なく採用してきた等は、最初は破綻が目立つとは云ふものの、歌に新鮮味を附加した點に於て、顯著な功があつたことが認められねばならぬ。さて、彼の趣向を求める時、常に留意してゐた態度は、先づ理窟の排斥といふことである。

月見れば千々に物こそ悲しけれ我身一つの秋にはあらねど

を評し、

上三句はすらりとして難無けれども下二句は理窟なり蛇足なりと存候。歌は感情を述ぶる者なるに理窟を述ぶるは歌を知らぬ故にや候らん。此歌下二句が理窟なる事は消極的に言ひたるにても知れ可申、若し我身一つの秋と思ふと詠むならば感情的なれども秋ではないがと當り前の事をいはゞ理窟に陷り申候。同樣な歌も善しと思ふは其人が理窟を得離れぬがためなり、俗人は申すに及ばず今の所謂歌よみどもは多くは理窟を並べて樂み居候。嚴格に言はゞ此等は歌でも無く歌よみでも無く候。（四たび歌よみに與ふる書）

と言つてゐる。彼が歌評に於て最も力を極めて難じたのは、この理窟歌の排斥である。この一例でも略ゝ理解されるやうに、彼も亦簡單な理窟の歌には善いとおもふものもあると言つてゐるのであるが、妙に人爲的に技巧をめぐらし智的な趣向を弄ぶ類の者を斥けたので、單的な實感から生れたものは、概念的な理知的な者でも認めてゐたのである。

心あてに折らばや折らむ初霜の置きまどはせる白菊の花

の歌を難じて、この趣向は嘘だから趣も糸瓜も無いと言つてゐるが、これらも理窟的な趣向と見えたのであらう。總じて客觀的な歌の中に主觀的の言葉を挾む事は、言ひすぎて餘韻なく淺はかに聞えると論じてゐる。

門たゝく音ぞ聞ゆる獨して見れは淋しと思ふ月夜に（高崎正風）

の、「見れは淋し」等ことわるのは言ひすぎだと評した等もこれである。緣語や懸詞等に由る美感は末梢的な者で美の下等のものと云ふ風に論じて、理窟的構成を斥け、感情の尚ぶべきを說いてゐる。

彼は理窟を排斥し、感情を基として感情をうたひあげる事に、文學の生命を認めてゐたが、併し以上の如き考から、感情をそのまゝ言葉にあらはすより、讀む人をして美感を起させるやうに物を如實に描く事の肝要さを常に力說した。勿論人間の感情をそのまゝうたひあげる場合のある事を認めたのではあるが、詩歌の素材は何處にもみちてをり、廣大な美に滿ちてゐる自然界は、盡きる期のない詩歌の泉であると觀じた彼はその美景を出來るだけ克明に寫生することを說いたのである。譬へば橋の袂に一本の柳が風に吹かれてゐる景色を、そのまゝ歌に詠んだにしても、これを詠むことと其の事は客觀的景物を作者が美と感じて向つたので

あつて、即ちその景色をよむといふ事實、その要求は感情が本であるといふ意味に於て、歌は感情をうたひあげると言つて差支ないと考へたのである。

理窟を排斥すると共に、ものをありのまゝに寫すこと、ありのまゝに嘘の趣向を用ひないで表現することを力說した。即ち寫生の味を說いた。ここに重要な彼の作歌態度がみられる。（註二）而してこれは彼の和歌・俳句兩方面、極言すれば文學的態度の根幹をなすものであつたのである。子規の寫生論については、なほ後章に於て詳說しようと思ふ。

以上、極めて雜駁であるが、その歌論の大要並びに歌論と作歌との相互扶助的の關係について一通り述べたつもりである。

子規の歌論の價値は、古今・新古今歌風の糟粕を嘗めてゐた歌人輩を一蹴し、萬葉を說き、實朝以下の萬葉派歌人を地下から喚び起し、理窟歌を排斥し寫實的手法の要諦を力說した等誠に卓見と稱するに足るが、又常に自己の藝術の確立、新藝術の樹立を說き、單なる萬葉摸倣、古典崇拜の蒙を說いた事は多としなければならぬ。德川時代の國學者達の復古は單なる復古のための復古の境に停まつてゐた觀があつて、眞に藝術的開眼の作はなかつた憾がある。眞淵は萬葉の藝術的價値を認めたものではあるが、むしろ上代人の生活態度を尊敬し、上代研究の材料として萬葉を讀む事を勸めたやうな、少くとも藝術的價値を根柢として生れた萬葉崇拜といはれない點があつた。この點に於て、子規の萬葉集の價値の認め方は、藝術主義的立場から純粹性が認められ、江戸時代の萬葉主義者よりは一歩を進め得たものと評していいのである。而して彼は、論

おそれに、空論を避け、悪歌と良歌の實例をあげ、自己の見解を明らさまに實證し、且つ自ら率先實行して作歌に勵み、作を公にして範を示した。その用意は實に周到綿密であつたのである。

再びくり返したい。彼の歌論は本質的にもすぐれた者であり、對歌壇的意味に於ても、その改革的な意義の强い力を有し、啓蒙的な懇切を極めたものであつた。と同時に、彼自身の創作の上に、よい刺激と影響を與へた事を忘れてはならない、彼の歌は、歌論に指導され鞭撻されながら、進歩發展した所が甚大であつたのである。一方、又作歌の體驗によつて、歌論は變形され内容を與へられながら、段々完全な者に進んで行つた方面も決して等閑にはならない。而して彼の歌論が尊い體驗の結晶である事は、それが組織的でなく斷片的であり、且つ多少の誤謬の免れない缺陷を補うて、なほ十分光彩陸離たる存在たるを失はない。

私の說明は簡單で而も非科學的な斷想に陥つたが、多少とも彼の歌論と歌の考察に暗示を與へるものがあれば、幸である。

〔註一〕「獺祭書屋俳話」所載。

〔註二〕子規の短歌寫生說は勿論その俳句寫生論の延長である。寫生說と萬葉主義との複合點は見出されるが、しかし彼に於ては主に個別的・分離的に說かれてゐたのであるが、之を綜合的原理と置くべく努めたのは、後の島木赤彦其他子規系歌人の態度であつた。

第四編　小說及び新體詩

第一章　多方面的要求

明治の和歌及び俳句方面に於ける正岡子規の偉大な業績は遍く認められてゐるが、彼は單なる俳人として又歌人として有名なばかりでなく、種々の文章・美術に關する評論・隨筆の類を公にし、漢詩・新體詩・小說等あらゆる方面に手を伸したのである。

明治文學の草創期ともいふべき當時のこととて、何れの方面にも開拓の餘地が多く、少しく學識あり、才能ある者にとつては、齒がゆくて一局部の仕事に滿足し、たゞ傍觀しては到底ゐられないといふ狀態だつたのであらう。總て腐敗沈滯し盡した底から、今や漸く改新の雰圍氣が湧き上り、文壇に漲らうとしてゐる。舊人は退けられ、舊い文學觀は改變され、新人の手に依つて文壇は全く新裝を凝らさうとしてゐる。この時志あるものは一局部に沒頭し滿足しては到底ゐられない。文學界にも絶えず新陳代謝が行はれる。新しい思想・感情、新しい表現法が少しづゝ實現され、文士も獨創味のない、貧弱な舊式の頭の所有者は、いつしか新人に蹴落されて終ふといふ現象は、いつの世にもみられるのではあるが、全く文學觀が面目を一新し、從來無上の權威とされたものも、三文の値打なく踏みにじられるといふ、一大變轉期に際しては、新人の權威が絶對的のものになり、今迄歡迎された文學・文士は見る影もない狀態に陷るのである。斯ういふ時機に際

會して生れ出た子規の、新しい文學の標準を以てすれば、あらゆる文學の視野に不滿の聲を放たざるを得ない理由があつた。この變動期に出た彼は、又實行的な努力家で、野心家でもあつたから、歌や俳句に滿足せず、小說や新體詩の創作にも指を染めたのであつた。時勢已に各方面に新人の活躍に俟つものが充滿してゐた。野心ある努力家の子規が、歌や俳句以外他の方面にも着目したことは、何の不思議もないのである。

彼は歌や俳句に新しい內容を與へようと、種々工夫努力した。そのためには盛に字餘りをも使用し、新しい言葉をとり入れようともした。併し結局短詩形では、複雜な思想・感情乃至事件をうたひ上げる事の極めて困難な事を自得する外はなかつた。彼はそこに沒頭しながらも、かすかな疑惑・不滿の頭をかすめる事をどうすることも出來なかつた。病氣に苦しめられ、思ふやうな活動が出來なかつたからこそ、創作としては歌や俳句の世界に自己の生命を託するより外は無かつたのであるが、永久にそこに安住してはゐられない要求・焦慮を感じてゐた。出來ないから止むなくあきらめてゐたので、何等の不安なく、歌や俳句の世界に籠居して滿足してゐたのではなかつた。俳句は滅亡するといふやうな意見は、すでに初期の「獺祭書屋俳話」中の「俳句の前途」といふ文章にも述べられ、又當時の書簡にも幾箇所かに書かれてゐたと思ふ。明治卅一年八月發表の「椎の實」の中に、

俳句やがて盡きなんと我はいふに、俳句つくる人つくらぬ人おしなべて、そを打ち消し、さる事はあるべからずといふ。其後芭蕉の語に「俳諧は今三合世に出たり」とあるを裏面より考へ見るに、芭蕉はおぼろに俳諧の盡くることを認めたるが如し。若し芭蕉の計算を推して見んには、元祿に三合、天明に三合、明治に三合出でゝ、殘る所僅に一合のみ。

されど我臆測にては明治は元祿、天明に倍して少くも四合五合を出だすべしと思ふ。

とあるのは、その一例である。彼は晩年、一二年間は、歌や俳句をほんとうに樂しんでゐた風がみえる。それは唯心境を沈湎したからばかりといふのでは無く、病氣のため他の方面に手を下す元氣も希望もなく、さびしく諦めてゐた心から湧いた、自樂の心境であつたともいふべきであらう。

　短詩形であるから、ある時期に至ると、新言語・新趣向を出す餘地が全く無くなると云ふやうな數理的悲觀論はとるに足らない。實にそは、作家としての淺薄・不徹底を暴露するものに過ぎないと云はれるかも知れないが、短詩形なるが故に、複雜な趣向は求め難く、新趣向にもかなり制限が加へられるといふ缺點は蓋し免れまい。彼は明治廿八年末歸京、病臥し始めた頃、詩作に耽つた事がある。詩人本田種竹が近くにゐたこと等によつて、よき刺戟を受けたでもあらうが、それは青少年時代、詩作に親んだ習熟的惰力で作つてゐたとのみは言はれない。俳句よりも長い詩形で、含蓄ある漢語專用の漢詩は、それだけ、より複雜深遠なものを表現することが出來はしないかといふ風の考が、彼の頭にはなほ去來してゐたやうである。俳句は主として漢詩の一句二句の內容しか表現出來ないといふやうな考を持してゐたと思ふ。彼が小說や新體詩を作つた事は、實に和歌・俳句に盛り切れない多樣複雜な自己の感懷や世相を表はすためだつたとも言はれ得るのではないか。

　革新的な時代の趨勢、野心ある子規の努力的性格、短詩形に對する彼の不滿・疑惑と考へて來れば、子規が歌や俳句に滿足せず、時に小說や新體詩等に赴いた心理經過は、略ゝ理解することが出來る。

彼の努力は主として俳句や和歌の方面に注がれ、又そこに長所を持つてゐた。從つて文學者として子規を價値づけるものは、歌や俳句の上の仕事に、主として懸つてゐる。明治文學史上、彼の歌や俳句の事業が要求する、實に樞要な地位に比べては、彼の小說や新體詩は、いはゞ太陽の前の月のやうに微かな者でもあらう。本質的價値も、歌や俳句に比べものにはならないだらう。併しひとしく人間子規の表現であり、子規の産んだ文學的所產であるからには、彼の人及び藝術を知るためには、その小說や新體詩の考察も省略されてはならないのである。

惟ふに、彼の長所は歌や俳句方面にあつた。而もその方面に主力を注ぎ生命を傾けてゐた。小說や新體詩は餘力の所產で、高い標準を以て臨むべきではないかとも考へられる。併しながら、彼が如何に努力家であり、一通りの藝術的才能を具備してゐたかは、歌や俳句以外、小說や新體詩の作品にも筆を染め、何れも、ある點までは出來上つてゐたことが、よい證據を示してゐるといふべきである。左に子規の小說及び新體詩を概觀することによつて、その多方面的な努力と才能をうかがひたいとおもふ。

第二章 小說概觀

「龍門」といふ未完の小說稿が昭和三年九月の「日本及日本人」の正岡子規號に發表され、ついで改造社版子規全集第十二巻(少年時代創作篇)にも載せられた。全集編輯者の意見によれば、明治二十年以前のものであらうといふ。なほ同じく十二巻中には、「山吹の一枝」と題し、新海非風と交互に執筆した未完の小說が始めて發表された。この方は廿二三年頃のものであるらしい。かういふ習作的の未完の作はまだ外に殘つてゐるかも知れないが、ここでは子規全集の小說の部に收められてゐる七篇について述べることにする。

明治廿五年、學生時代に執筆され、多少の推敲を經て、廿七年、自分の編輯する事になつた「小日本」誌上に、二月十一日から三月一日に亙つて連載した「月の都」、同年三月廿三日から四月廿三日まで「小日本」に連載された「一日物語」、六月十五日から「小日本」廢刊の日、即ち七月十五日まで連載された「當世媛鏡」、卅年二月、春陽堂の依頼に應じて書いたもので、新小說第二年第四巻に載つた「花枕」、(同年九月春陽堂出版「五色筆」所收)花枕と同時期の作と思はれる未完稿「月見草」、(「小說は須磨を書きかけ候處迚も間にあはず中途でやめて花枕といふ極短篇(原稿二十枚)を一日にものし候」(二月廿六日附、碧山、虛子宛書簡)とあり、「月見草」は發端の小部分しか書かれてないが、舞臺を須磨にとつてゐるので、「花枕」を書く前に書きかけた「須磨」といふのは、この「月見草」だつたに相違ない。)この外、おそらく卅年九月十月の間に成つたと思はれる「曼珠沙華」及び卅三年の作と推定される未完稿「我が病」がある。後の病牀日記(明治卅四年九月十日から十月

十七日迄、前後八日「小說を草す」とあり、十月廿日から廿九日の間、四日「小說を淨書す」と記されてゐる。九月十五日漱石宛の書簡にも「近來たのまれて小說とやらをものし居候……一日をのばせば一日の衰弱をます者ならば少しにても元氣ある中に五枚にても十枚にても試み度存居候」とあるが、この時の作はどこにも發表されなかつた。が、それが現在子規庵に遺つてゐるといふ二種の曼珠沙華の稿本であると考へられる。

「我が病」の作は、明治卅三年「週間記事」の中に、

三月廿九日（「我が病」を草す）

ともし火のもとに長ぶみ書き居れば鶯鳴きぬ夜や明けぬらん

とあるに據つて、卅三年の作と推定されるのである。即ち表示すれば、大體次のやうなものである。

作品名	成立年代	發表年代	發表機關	備考
月の都	明治廿五年二月	明治廿七年二月十一日—三月一日	小日本	
一日物語	同廿七年三、四月	同廿七年三月廿三日—四月廿三日	小日本	
當世媛鏡	同廿七年六、七月	同廿七年六月十五日—七月十五日	小日本	
月見草	同卅年二月			未完、未發表。
花枕	同卅年二月	明治卅年四月號	新小說	
曼珠沙華	同卅年十月			未發表。
我が病	同卅三年四月			未完、未發表。

さて未完稿の「月見草」「我が病」から考へてみよう。「月見草」の梗概は次のやうである。

肺病のため須磨に靜養に來てゐる勝海正美と言ふ青年が、散歩歸りに疲れて濱邊に倒れてゐると、親切に言葉を掛ける若い女がある。眼をあけ頭を擡げようとすると、女ば逃げるやうに暇乞ひして去つてしまひ、白い單衣をちらとみたばかり、其の後餘所ながら訪ねてみようと時刻も同じ頃、例の所へ行くと、夕闇の海の中に薄月の光を片頰に受けて女神のやうに神々しく見える人がゐる。少しづゝ近づくと、砂を蹴つて少し距つた旅籠屋の裏門から入つたらしく、どことも見えなくなつてしまつた。その後毎日時刻を見定めて行くと何時もその少女はゐるが、遠くから見る許りで歸る所を見定める事は出來ぬ。偶々その姿を見ないで歸る時は、夜も面影に立つてよく眠れぬやうになつたが、遂に十日許り續けて行つても女の姿は見えない。青年も出ないやうになつた。無聊の中に貸本屋から借りた英雄傳を讀んだりして今更自己の不甲斐なさを慨く。子規の筆はこの青年が小學校時代からの秀才で、高畑權二郎といふ友と常に一二を競爭し、大學法科では正美が常に一位を占めて來たが、病氣のため洋行も出來ず恢復の見込も無い樣に衰へて須磨に靜養に來てゐるのであると云ふ說明で終つてゐるので、この小說が如何に展開されるかといふ豫想も全然つかぬ發端で筆を折つてゐるのである。子規自身に於ても、條を如何に發展さすべきかに迷つて中止したものかと思はれる。この少女と青年の戀愛と云ふやうなことを書くつもりであつたのか、或は之を小說の中心的展開には餘り關係の無い冒頭の一挿話として置いたのか、それらも全く了解の手がゝりが無い。故にこの作は批評の限りではないが、唯月光を浴び夕闇の波の中に半身を浸してゐる少女、神か人かわからぬ樣な描寫の仕方は、如何

にも空想的・浪漫的である。非現實的な怪奇不可思議の分子を小說の一要素と考へてゐたやうな前代の思想と、詩的想像との絡んで出來た描寫とでも言ふのであらう。併し彼が須磨保養院に靜養してゐた時の所見・心持も織りなされ、半ば自己の經驗や心境をこの作に盛らうとしてゐたものであることも認められるのである。

「我が病」は、日清戰爭に從軍記者として喜び勇んで東京を立つ頃の事から、講和が成立したといふやうな噂をしながら、金州の夜の舍營に新聞記者數名が、不當の冷遇に不平を零し、一日も早く內地へ歸らうと話してゐる所で筆は絕たれてゐる。やはり未完ではあるが、大體事實其儘を書いたものと思はれる。彼が稿を續けたとしたら、どんな事を書いたらうと言ふことは、これより少し前に書いた「病」と云ふ文(船中で喀血した前後のことから神戶病院入院までの敍述」等でも大方想像される。出征前同僚の五十嵐の宅へ晚餐に招かれ、妹のとよ子を嫁に呉れたいとうちあけられ、弟のやうにしてゐる玉井がとよ子を戀してゐる事を知つてゐるので當惑したが、それを口に出して言ひも得ず、とよ子の編んだシャツと靴足袋を贈られ歸るといふやうな箇所は、事實の有無はともかくとして、小說らしい趣向である。が、全體としては小說と云ふよりも寫生的紀行文と云ふべき者で、何か物足らぬ感があるが、全然第一人稱で而も事實に卽して書かれてゐる點、口語的文體で書かれ、虛飾の無い忠實な寫實的手法の見られる點等、彼としてよい特色を現してゐる。少し平板に失してゐる點はあらうが、不自然な下手な、細工に過ぎた者に勝る事實談である。卽自己の藝術卽自己の表現、それは子規の晚年に到達した境地を物語るものでもある。かういふ作品も一步進めれば心境小

説のすぐれた作品が出來たのでないかとおもふが、彼の病體はつひにもはや執筆の力を與へなかつた。「小説と云ふものは迚も吾々の感じを滿足させる樣に出來ぬものときめてしまつた。」と病歿二ケ月前に子規は伊藤左千夫に洩らしたといふが、少くとも彼の晩年の藝術觀からは小説の地位は閑却され、青少年時代小説を愛好した心持とは大分かけ離れたものになつてゐたのでもある。彼は少年時代から小説を耽讀し、學生時代の終り頃は、生活上の問題から小説家志望を發した事もあるが、新聞記者として繁雜な實生活をするに至り好きな俳句方面にのみ沒頭した。だ、廿七年「小日本」編輯に當り、嘗て書いた小説や新に執筆した作を發表したりした。而して一度俳句界の革新に實績をあげるや再び卅年頃新體詩や小説にも興味を持ち出した如くであつたが、俳句と姉妹藝術である短歌の革新に沒頭するに至つて、小説執筆の興味も失くしたのである。

「月の都」「一日物語」「當世媛鏡」「花枕」「曼珠沙華」の五篇の中「月の都」「當世媛鏡」「曼珠沙華」の三篇は戀愛を主題とした作品と云はれ得る。

月の都

高木直人と云ふ青年が水口浪子に戀の心をうちあけるが、彼は浪子の父が紳士か法學博士でなければ嫁にやらぬと言つてゐる事や浪子の結婚の噂を聞いたりして遂に出家をする。一方、浪子は直人を戀ひ慕ひ、直人の宅へ行くが已に彼はゐなかつた。直人は名も白風と改め佛へのつとめにいそしんでゐるが、師の留守に遂に迷ひを生じて山を下る。浪子の乳母に會つて、浪子が投身自殺を企て救はれはしたが、囈言を言つたりして遂に死んだと聞き、彼も亦浪子を戀ひこがれ狂亂して天上にのぼると云ふ風のことを書いてゐる

最後の場面は曖昧である。謡曲羽衣等の影響を多分に現してゐる。「これは三保の松原に白風と申す漁夫にて候」といふ風に主人公が現はれる。浪子はどこへ行つたかと探してゐると、音楽面白く、近づいて、月の都から天女の多くが下りてき、その中に浪子も見える。白風は、天の羽衣身につけて人間界を忘れ捨て去ると云ふ風になつてゐるが、最も現實的に解釋すれば、三保の浦に投身自殺して死ぬ。それで煩悶の波も平らかに、五障の雲悉く晴れ渡り、死んで始めて靈の世界に於て二人結合したと觀てよいのである。作の構成上からみて死の美化と考へられるのである。作者は象徴的に、高いものを表現し得た積りでゐたかも知れぬが、前の部分との釣合も甚だ悪いものである。それらは先づ許容するとしても、全體の潤色・叙法が簡易に陥し、頗る幼稚なものがある。露伴の風流佛の影響のあることを作者は斷つてゐるが、作品が優れて居れば他の影響の少し見出される位の缺點は何でもないが、この作は風流佛に比し遙かに幼稚な、不自然なものであるから、一寸浮ぶ瀬が無い。直人が花見の宴に行つた時、浪子に意中をうちあけ、以後煩悶するくだりは「風流佛」の珠運が、結婚する筈の花漬賣のお辰が父岩沼子爵に引きとられて後の煩悶する心持やその描寫に可成り似てゐると云ふ風の類似は、他の部分にもみられ、模倣の露骨に表はれてゐる箇所もあると云へばあるのではあるが、影響と云ふことから云へば、白風狂亂の所等は、近松・西鶴のお夏狂亂あたりに真似てある事は一層明白な者があり、風流佛の影響以外、他の作の影響をうけて出来た箇所も幾つか指摘出来るのである。風流佛の珠運は最初は結婚の意志も無かつたもので、箱根の主人に結婚を勧められ、（嬉しい、氣の毒だといふ風の感情がもやもやと唯籠めてゐたばかりであつたものが、）遂に戀愛の熱情に高まり、結婚の

意志を生じたのである。お辰の方は嬉し恥かしで、珠雲をいとしい者と思ひ始めたのであるが、娘の居所を知つて子爵がひきとつてからは、珠雲のことは忘れ勝ちにすぎたであらう。一回の音信もなく、ともかく表面喜んで結婚をすると云ふ女であつた。珠雲は戀人を奪はれ、お辰の像を彫り、自ら悩み思ひ續けるが、遂にその像をきりくづして己が藝道に直進しようとする意志を示すのである。戀愛より藝術へといふのが、そのテーマであつた。「月の都」の二人の戀は之と異り、少女は思ひ餘つて死に、男も狂つて後を追ふ程の熱烈さである。物語の經緯並びに主題に於て風流佛とは大きな差異のある事が認められねばならぬ。實に風流佛の多少の影響のみられることは何等の障害にもならない。が、風流佛の取扱つてゐる戀愛、例へば珠雲が結婚しようとする氣を起す迄の心的經過は、やゝ素直に自然にうけいれられるに反し、月の都の戀は、戀の芽ばえるまでの男女の心情も全く分らない程、事件が突然で、描寫も全く缺けてゐる。それは致命的缺點である。相手にうけいれられぬため、又は周圍の事情で愛情がせきとめられたりして、思ひ餘つて死ぬといふのは、戀愛の盲目的に強烈な極點を示す者で、文學の好題目の一つであるが、月の都の浪子の心持等はそれ程強烈なものとして請けいれられる描寫は全くない。一徹な少女心に死ぬやうな女を子規が同情・同感を以て眺めてゐたことは知られるが、戀の成立に到る感情乃至事件を、もつと具體的に描かなければ讀者は全く同感するに由ないのである。子規の頭で描いた空想の戀、小説や劇作を讀んで得た戀で、實感味は殆んど缺いてゐる。作の不自然・幼稚である事は、要するに彼が確かりと題材をこなすべく何らの實感を持たなかつた事を先づ暴露してゐると云ふべきである。

唯一度簡單に惚れてゐるとうちあけられたばかりで死なうとする女、たゞ一度戀情を相手に仄めかした許りで、自分のものと有頂天になり、少しの暗位で世の中が嫌になつて出家をするといふ男、何れも餘りに單純で而も正氣の沙汰と言はれない。見ぬ戀といふやうなこともある。十分同感させるだけの描寫を具備すればよいのであるが、この作には全然それが缺けてゐる。戀愛感情の發展を十分暗示する描寫に缺けてゐる。それは文章の缺點のみの問題でなくて、何より先づ彼の體驗の皆無から招致してゐるものと思ふのである。

直人が佛門に入る條等は、瀧口時賴が横笛を見染めたのを意見されて出家したこと等からヒントを得てゐる事は、師の留守、山の草屋に一人でゐると、浪子が訪ねてくると云ふ夢幻的な心持を書いた個所がある事等でも知れるが、彼の場合には出家になりすまし、此の場合には再び迷ふと云ふ差はあるが、かゝる出家等の取扱ひ方も餘りに無雜作で、つけ刄の感がある。佛教的信仰等は殆んど皆無で、科學的な唯物的な生活觀を持してゐた彼が、唯過去の日本文學の佛教的傾向を興味的に模倣してゐるとも見られ、根柢に於て甚だ薄弱なものである。男の出家するに到る、戀愛を殺さう殺すまいとする惱み、迷つて再び下山する邊り、愛情を生かさう生かすまいとする苦しみ、そこを描くべく彼には生きた信仰も戀愛も、體驗がなかつたのである。月の都と云ふ題は、空想的な非現實的傾向をあらはすと共に、一面からみれば、子規の自然への憧憬の萌芽と云はれよう。戀を忘れようと直人は決した。さうして富士山といふ隣人を一つ増した等書かれてゐるのはこれを裏書きする。この作品が幼稚な失敗の作で而も作者の性質と自然への愛着を示してゐるところを看取し、露伴は、小說作者よりは俳句作者として子規の立つべきことを暗示するところがあつたのであらうとも

はれる。

當世媛鏡

片岡清の從兄で許嫁の間柄の小林才吉は、官界へ出て成功しようがために、社交的な華やかな性格で、金持の娘中谷たく子と結婚し、そのためお清は尼となり、遂に自殺すると云ふ悲劇に終るのであるが、才吉の同窓で、お清を戀する中谷辯(たく子の兄)等の人物を配し、戀愛關係を多少複雜化してゐる。

幼な友達で從兄妹の關係にある、お清・才吉の二人は結婚の事を聞かせられて別に異存のある筈は無かつた。お清は才吉の學資を得るため料理屋奉公までして、何當才吉と一緒になるつもりでゐた。併し男の心がたく子に傾いてゐるのを知り、才吉とたく子との結婚を勸め、自分の戀は捨て去つたのであつた。又お清は中谷を戀しくない事はない。結婚を迫られると、斷るのも濟まぬやうな氣も起る。併し許嫁で、心にきめた夫のあつた上は、どうして他の者に嫁ぐことが出來よう。男の幸福のため自分の戀を犧牲にした苦衷も考へず、才吉はたく子と結婚して唯幸福に醉つてゐると聞いては、嫉妬の炎に燃えもしたらう。才吉の心をくやしく思つたでもあらう。彼女はさびしさと悶えの中に死んでしまふのである。お清の才吉に對する愛は、義理に絡んだ愛である。許嫁の約束一つをいつまでも忘れ得ない女である。戀愛としての純粹さはさておき、義理に絡んだお清の戀は、輕薄で無くて强靭さがある。併し彼女には、何處までも許嫁の約束を履行させようとする我意の强さはない。相手の幸福の爲には、自分の一身を犧牲にして退く可憐なつつましさを持つてゐる。弱いやうで强い心である。戀に醉ふ事は出來ないで、身を淸くして、義理の爲に靑春の華やかさをも

放擲してしまふのである。お清は、義理に生きる舊い型の女である。而にも意圖が現はれてゐるやうに、子規は義理堅く、清淨なお清を女の模範として、その行爲・精神に同情同感を表してゐるものの如くである。この作は一名「島田と束髮」と名づけてゐるが、島田娘のお清と束髮のたく子を對立させ、たく子の性格が男性的社交的で所謂新婦人であるに反し、お清のおとなしく、義理固い舊型の性質をむしろ好もしく眺めてゐるのであらう。學生時代、菲風との合作「山吹の一枝」中には、藝妓小松と山内令嬢を對照し、書生紀尾井が小松と同棲することを描き、山内令嬢の半可通の新しぶりを諷刺してゐる。それは未完であるが、これをこの作品に於て再び取扱つてゐるものとも見られる。この點は子規の女性觀にとどまらず、思想の根本的のものを示してゐると思はれる重大性があるので、ここに言を費したのである。お清が世を捨てゝ寺島のほとりに閑居してゐる所へ、元の女中が訪ねてゆき色々慰めたりする。又彼女の死後、彼岸と盆には老僕が「お嬢様八十年めでございます」と墓詣りに來るといふことで筆をとめてゐる。この一篇には、かゝる義理がたい情義の世界を、よく寫してゐるが、實にお清の戀愛は、この義理を離れない愛で、そのためには中谷に對する純な愛情をも殺してゐたのである。

さて才吉の戀愛を考へて見よう。

才吉もお清の今迄の苦勞を思つては、多少煩悶はするが、何よりも自分の成功、父が遺言して成功せよと言つた事を思ひ、たく子の性格や家柄が官界へ出ようとする自身に好適で都合よい事を考へ、成功のため、お清やお清の父に對する義理、また義理にからんだお清に對する愛情を捨てる。彼は義理よりも名譽や地位

を重んずる。友人中谷に色々厄介になつたといふ義理もあるのであるが、それはむしろ才吉には中谷の妹と結婚する良い口實となつたらう。性格や思想がお清よりたく子と一致共鳴する點が才吉にはあるのであるが又從つてたく子に對する愛情もあつたではあらうが、それよりも成功のための結婚と云ふ點に主眼があるのである。才吉といふ名の象徴してゐるやうに、實に彼は新時代の才子である。お清の立場に同情し、その態度に同感した子規は、無條件で才吉の立場に好意は示さなかつたと思ふが、才吉の立場をも是認してゐる。男は戀よりも事業慾・名譽慾に支配されてよいと云ふ風の子規の考が、才吉の立場にも或る程度の同感を示さしめたのであらう。彼の女性・男性に對する差別觀をここに見得るとおもふ。

轉じて中谷翁のお清に對する愛を見ると、お清には大分熱くなつて、遂には結婚のことを度々申し込む善良のお坊ちやん式の中谷の戀は、白熱的と云ふやうな強烈さはないが、可成り初々しい戀心を躍らせてゐたやうに見える。要するに、この作では色々の戀が描かれてゐる。併し中心點は、義理に生きたお清と名譽・地位のため義理を捨てた才吉、舊型のお清と新式のたく子等云はゞ新舊思想の對立の上に構成されてゐる觀がある。戀愛と云ふ點から云つても、深いものを示してゐる譯ではないが、「月の都」に於ける戀愛は、唯單純に戀しいといふ程度で、純粹な熱烈な戀を描かうとした事は想像出來るが、描寫も殆んどなつてゐないに反し、この作に取扱はれたお清・才吉、お清・翁等の心持は、かなり同感出來る程度に書けてゐる。「月の都」執筆當時に於ては、戀の感情の盲目的に熱烈なものであることを、主として物語等から智識的に知つてはゐても、世の中の現實にはまだ全く觸れてゐなかつたのである。社會に出て二年の歳月の間の子規の經驗は、

たゞ單純に戀愛するよりも、色々の義理や情實に絡んで戀愛が發展したり阻害されたりする場合の多いを見れば、明瞭に看取せざるを得なかつたのであらう。複雜な社會情態に胎まれる戀には、たゞ純粹に戀するといふこと以上に、種々の複雜な事情の支配下に立たねばならぬことを考へたのであらう。小說の作劣から言つても、この作は「月の都」に勝つてゐるが、戀愛に對する理解といふ點でも、深くはないが、以上述べた如く多少現實にふれて來てゐるのである。月の都の戀は多少戀の本質と云ふ樣な事を考へさせるものはあるが、實感・體驗に缺けてゐ、從つて描寫も否く出來てゐないに反し、此は或點迄は各人物の戀愛的感情も分る程度に書けてゐ、やゝ現實にふれ、明治廿年前後の新舊混淆の時代そのものゝ空氣を描き得てゐる所が見える。

曼珠沙華

曼珠沙華は、何不自由の無い富豪の息子と、特に卑しい蛇使ひの子に生れた可憐な娘の戀を取扱つて、彼らの戀のとげられない惱みを描き、男は夜になると譫言をいふやうに狂し、女はどこへ行つたかわからなくなるといふ悲劇に終るといふ物語である。

富世義員の義理に終はる戀を描いてゐるところに特色があるとすれば、ここには貧富の社會的地位に妨げられて悲劇に終る戀を描いた所に特徴があると言へようか。何不自由の無い富家の圓満息子に生れた下使に、卻つて山野に遊び廻つて居る貧家の少年の自由さを羨んだでもあらう。憂鬱な女性的な性格も、田畑の間をかけめぐる時には愉快な心に歸るのである。自然の中に嬉々として遊び廻つた時、たまたま見つけた卑しいみなりの少女、それが花賣の娘のみいさんであつた。卻つて貧しい卑賤な生れである事が、彼の心

を提へたのである。貧しく弱い者に對する一種の同情、あはれみの念が、玉枝の戀の心に火を點けたのである。愛は運命的なもので、又全く偶然から起るとも考へられるが、このやうな兩者の距離、たとへば貧富のへだたりの多いやうな場合には、却つて熱烈の度を高める事が多い。到底一しよにはなれないと思ひながら戀情の募るのをどうすることも出來ないといふ狀態に陷るのである。添ひ遂げ難いと思へばこそ、戀を堰きとめる障害が大きければ大きい程、戀の焰は餘計盛にもえ、惱み苦しむのである。戀の悲劇が、かうした兩者の地位のへだたりの甚しいものの間に多くみられるのは、理由があると云はねばならぬ。はじめて會つた時、少女は曼珠沙華をむしつてゐる。そしてこの花が一番好きだといふ。人に顧みられないやうな花であるから可哀さうだといふのである。彼女は自分の身分が人中に出られぬ樣な卑しい生れをし、早く母に訣れ、邪慳な蛇使ひの父には虐められ、誰人にも愛されずに來たかなしい心から、花にまで同情を及ぼし、人に顧みられないやうな花はかあいがつてやるといふのだ。女が曼珠沙華を愛するやさしい心は、不幸の境遇にゐる自分の身を愛し、いとしむ心でもある。標題の意味するところはこゝにあつて、子規はこの貧しい卑しい境遇に生れた人に殊更愛をかんじたであらう。新時代に、なほこの階級的差別に執する人の多いことを腹立たしく馬鹿らしい事とおもつたでもあらう。併しこれはどうにもされない世間の通り相場である。作者は、そこに着眼して、この悲劇を描いた。

空想的な題材を諸所に取扱ひ、ある點までこなしてゐる。言文一致とも云ふべき文章で、寫實味も一段加はり、前の作の理智的・說明的なるに反し、感情的・描寫的である。感傷的な場面ではあるが、少女と玉枝

が最初會つた時の場面、又花賣り娘が、弟の少年が蛇を使つてゐるのを、蛇を逃がしてやれと云ふ場面等も相當佳く書かれてゐるし、祭に、又の蛇使ひが蛇を使ふ條等も先づ描けてゐる。概して終りの方は面白くない。どう結末をつけるかに困つて、あわたゞしく事を運び過ぎたといふ嫌はある。玉枝におとなしく、二度と斷りかねて結婚をするのであるが、その結婚式の晚、餘所乍ら訣をつげようと思つたのであらう、花賣り娘は玉枝の家の庭へ入り、惱みを紛らさうと散步に出た玉枝に會ふのであるが、その夜、玉枝は媒圍の極暴風を冒して外へ走り出した時、風を起した天狗共が會話する所がある。眞面目な眞劍味の唯中へ、かういふ一種の摩訶不思議が飛び出しては、滑稽を禁じ得ない。やはり打ちこはして惜しいと思ふ。悲劇的終末にはよいのであるが、この最後の結婚式の夜の描寫はもう少し何とかならなかつたであらうかといふ氣がする。

缺點をあげれば色々あらう。併し、「月の都」に比して戀愛の心理的經過を書くことが出來、「當世氣質」の常套的なるに比べては、多少の新味と詩趣があるのである。もう少し洗練されたならば、相當藝術味ある作品となり得たであらう。何より今までの作に比して、表現が寫實的になつてゐる事は嬉しい。

これらの作品を基礎とし、他の文章をも參酌して、子規の女性觀や戀愛觀をまとめる事も面白いとおもふが、今は唯作品にあらはれた戀愛を一瞥するに滿足して、他の二作に移らう。

一日物語

春の雨夜の徒然に三四人の者が集つて色々嬉しかつたこと、怖ろしかつた事等を語し合ふ。中の一人が、一日の中に嬉しいのか悲しいのか怖ろしいのか分らぬ樣樣の事件が起つた話をすると言つて語り出す物語。

捨子で二歳の時から仙臺の玉屋といふ呉服屋に養はれ、小僧から番頭になり間もなく世帯を分けてもらひ小玉屋といふ店を出し女房をとつたが、結婚して一月程で、玉屋の用事で羽後の横手へ行く事になる。出發の朝、妻に起され、父に會つた夢をみてゐた所だつた等話してゐると、丁度父から手紙が來る。羽後の六郷にゐる五兵衞と云ふ人で病氣だから一度會ひに來てくれと云ふ手紙。二つの用を以て汽車に乘るのである。汽車中では、父にあひ仙臺に連れてくる事等を空想に描く。右の方に腰かけてた男が立つてゐなくなつた時左の方にゐた廿七八の天神髷の女が、その男を怪しいと注意する。この女もやはり横手へ行く事が分り、黑澤尻で一緒に下車し、同行する。中途で車を下り、女の後について歩いてゆくと、日もくれかゝる。横手へ行く道かどうか怪しくなり、訊ねると、横手への道は路普請のため、車がたたないといふので、この先にゐる兄の家に泊つて行くのだと云ふ。色々疑はしくなつてきたが、遂々山の中の一軒屋に着く。兄といふ人も留守で、飯を貰つたりして、寢る。うとうととまどろんで不圖目をさますと、女と男とが話してゐる。話の樣子が怪しい。穴から覗くと男は鉈を砥石にかけてゐる。女のため圖られて殺されるものと、生きた心地もしない。男も女も外へ出た樣子、この機會と素足のまゝ逃げるが、捕へられ、段々樣子をきくと、汽車に同車した男はこの女の元知つてた人で、わけがあつてその男を欺した事があるので、ひとりだと酷い目にあふかも知れないので、頓智を働かして同行して戴いたわけで、鉈をといでゐたのは、この女の兄の愛犬熊と云ふのが病んで碌々物も食はないでゐるので、いつそ殺したらとすゝめて今殺して來たのだとわかり、安心する。兄といふ男が、五兵衞さんなら知つてゐる、昨夜大層惡いといふ話をきいたときき、この兄といふ人に

案内して貰つて、漸く父五兵衛の素性等を聞かされつゝ朧げながら、父の家につく。が、丁度一時間許り前に死んだといふ。始めて父の存在を知ると、死んだお顔をみねばならなかつたといふやうな話である。

以上、拙い梗概の叙述によつても知られる通り、興味本位の、全くすら〳〵讀ませると云ふ類のもの、たゞこれだけのものである。斯ういふ話を人から聞いて書いたのならば勿論、彼の創作した部分が多少あるとした所で、この種の物語は、江戸時代の小說の一部分としていくらも散見する底のもので、時代を現代にしたのみで、實は時代物の常套をふんでゐるもの、彼の少年時代愛讀した小說趣味がここに、かゝる種類のものに興味を向けたのであらう。

舞臺を奥州にとつてゐるのは、彼の奥州行の經驗を幾分混じてゐること等は直ぐに氣付く所であるが、そのことについて少し述べておく。

彼の奥州旅行については、第一編に於て述べたのであるが、彼は六郷から岩手への街道を通り、湯田にとまり、和賀川に沿うて下り、黑澤尻に出たが、丁度この小說の主人公は、その道順を逆に通つてゐる。

「はて知らずの記」をみると、湯田に至るには夜道をしてゐる。「日くれはてゝ旅村に下る。寄川をたどりに心細くも猶一二里の道を辿りて、とある小村に出でぬ。」等とある。なほ子規作中の「くだもの」といふ文には、より詳しくかゝれてゐるが、その時の山道をした幾分氣味惡いといふ感情の背景で、この作には現はれてゐる。さういふところから、山中の一軒屋の恐ろしさに震へるやうな場面——それはよく鏡花の小說にみられるやうな——の描寫をおもひつかせたのであらうかとおもふ。

小説の題材・描寫等に旅行した時の經驗が出てゐると私の注意したのは、これらを指すので、たとへば「月の都」に於て直人の旅行した場所は、子規の見たところか、見ようと思つてゐた所ばかりで、「直人はあるゆふべ蚊遣の煙を煽ぎながら、鳥居嶺に掛りし時、腹は飢え、足は痛みて心地死ぬべかりしを知らぬ女に茱萸を惠まれ戻り馬に馬士の情知りたる事など思ひつゞけし頃、云々」とあるは、「かけはしの記」に「奈良井の茶屋に息ひて茱萸はなきかと問へば茱萸といふものは知り侍らず、珊瑚實ならば背戸にありといふ。山中に珊瑚さてもいぶかしと裏に廻れば矢張り茱萸なり。二十五六ばかりの都はづかしきあるじの女房親切にこそをとりてくれたり。峽中第一の難所といふ鳥居嶺は若葉の風に夢を薫らせて瘦せ馬の力に面白う攀ぢ登る。」と符合する如く、小説の或部分に旅の體驗を語つてゐる者、又小説「わが病」の樣に殆んど大部分旅中の印象から構成されてゐるもの、この別はあるが、彼の作には旅の經驗が比較的多く語られてゐる事等は注意されるのである。進んでは彼の體驗そのものが如何なる程度に作品に喰ひ入つてゐるかをも仔細に吟味されなければならぬ。三つの戀愛的作品を考察した時、少しく暗示する所があつたから、ここには言及しない。

花枕

「上」では、光と匂の神の子が男神の命を受けて下界に飛んで來て色々苦心して美しい花の褥を作ることを書き、「中」には、少女がその花の上に坐り、父なき後の繼母の邪慳に當り散らすのを嘆き、こんな美しい花の上で樂しい一夜の夢を結んだら死んでも本望であるが、妹の事ばかりが氣掛りで命を捨て得ない等と獨語する。「下」は、男神は光と匂を連れ、人間の艱苦を受けてゐる清いその少女を救ふ爲に下界に下りてくる。

眠らうとする少女に向つて眠れの曲を奏させ、また洗への曲をかなでさせる。神は少女を洗ひ「覺めよ」の曲をしらべさせる。少女は神と神の子の誘ひのまゝに上へ上へとのぼるが、妹を連れてくると言つて、とめる袂を拂つて身を落すといふ風のことを書いてゐる。

斯う梗概をのべただけでは至極つまらぬやうであるが、暗示的の所に捨て難い所がある。［下］だけきり離してみても、光や匂が草花を育くむ深い恩寵を思はせ又子規の草花に對する好みや愛着もおもはせられる。［中］にも、草花の與へる深い心の慰みとか、自然に對する感謝の念等が作のテーマ以外に感じられる。而して死とか神とかの問題、それは病臥の子規には時には切實にひゞくものでもあつたらうが、この作品の雰圍氣は如何にも安らかなものである。この作の傾向は、これ以上ずつと深く押し進めるといふことは困難で、それ故喜ぶべき傾向とは云ひ難いとおもふが、完成と云ふ點では彼の作中最も進歩したもので、シムボリスチックな味があり、且つ文章・內容が調和し、一つの完成した圓熟境を示してゐる。やはり子規の作中、代表作に擬すべき價値あるものとおもふ。

以上極めて簡單に、或は梗概を主とし、或は批評を交へて彼の小說を通覽した。俳句をつくつた人だけあつて、自然の描寫には異色が見出されるが、概して人情の機微を寫し得たと云ふ如きものは無い。理想はなか／＼高く標榜する所はあつたのであるが、小說の鑑賞には未だ至らないものがあつたやうで、これだけの作品では小說家として一人前の手腕があつたとは認められない。併しもつと作品に力瘤を入れてゐたならば一通りの作家にはなれたであらうし、寫實作家として特色を出すことは、比較的容易だつたとおもふ。

第三章　新體詩概觀

子規には、明治廿二年十月頃、すでに新體詩の試作がある。即ち「ひとり迷ふたむさしのに、招くと見しはむら尾花、きぬたはいづこ家いづこ、ふんで行かれぬむしのこゑ、たゝずむわれに露やおく、袂の上にきり〴〵す、見まはす原に秋の月、ひとりしよんぼりてらされて」(月下聞虫)とか「つきぬはなしのきぬ〴〵に、ひとりたゝずむ門柱、君の姿は朝霧に、かくれて見えてほの〴〵と、垣根にさくは夕顔か、名もよく似たる朝顏の、花の一枝たきしめつ、寝みだれ髪をかき上げて、あらねたましや花の色」のやうなものである。七五の形式を踏んでゐて、内容は眞面目で、傳統的優雅なものであるが、革新的な何らの新味のないものではある。又三十四年四月には、

鴉が五六羽飛んで來て、權兵衛の頭に糞かけた、アツハハ、ハツハ、アツハハハ

神鳴り四五匹ゴロ〳〵〳〵、雲の上からスツテンコロ〳〵、物ほし臺にひかゝつた。太鼓が破れて滅茶々々だ。アツハハ、ハツハ、アツハハハ

猫屋の婆さん四十島田、猫の子十匹産み居つた。白猫黒猫三毛猫山猫招き猫。アツハハ、ハツハ、アツハハハ

といふのがあり、九月には、

枝豆　枝豆　ヨクハジク枝豆　ブイト飛ンデ　三萬里　月の兎ノ目ニアテタ　目ツカチ兎　ヨクハ

　　ジク枝豆　十三夜ノオ月様

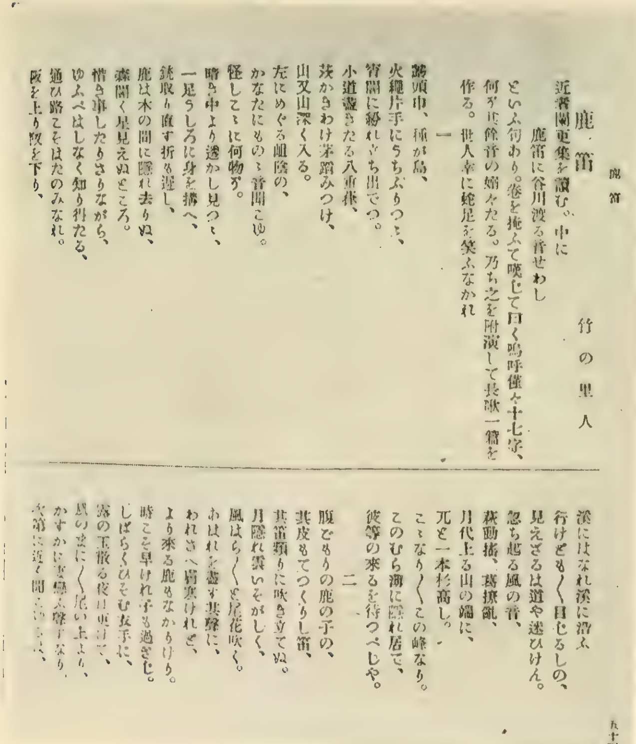
といふのを作つてゐる。前者は、病床で生れて始めて蓄音機を聞いた。その中に、日本の笑話といふのがあつて、「何のことだかわからぬが、調子は非常な急な調子で、ところ／＼に笑ひ聲が這入つてゐる歌で」その歌を想像して作つたといふのである。後者は、「俚謡に擬す」とあつて、ある日伴作俳句「枝豆」を聞し、自分でも枝豆の俳句を十ばかり作つた時、興を催して作つたのである。これらは洒落滑稽の作でなく俗謡の體であるが、兩者共におどけない童謡風の持味があり、特に後者は藝術味がある。

かく彼は十餘年にわたつて詩作をしてゐるが、主にそれに力を注ぎ、之を發表したのは僅か二三年間のことに屬する。廿八年發表の「陣中日記」には、

　きのふの嵐と過ぎさりし
　金州城の門の外
　柳の陰にうちむれて
　黑駒白馬あそぶなり

といふやうな、今様の形式の敍景的な作が挿入されてゐるが、おそらく、それが發表されたものゝ最初であらう。が、單獨に一篇の詩として發表されたものは、廿九年八月「日本人」誌上に、「竹の里人」の號で「聞笛」を出したのが最初のものと言つてよい。惟うに、學生時代から新體詩に對しても少の志はあつたと思はれるが、俳句に熱中しては遂々新體詩に筆を執る暇もなかつたが、俳句に一通りの基礎作りを了へ、漸く手





鹿笛　　竹の里人

近著國更集を讀む、中に
　鹿笛に谷川渡る音せわし
といふ句あり。卷を掩ふて嘆じて曰く嗚呼僅々十七字、何ぞ其餘音の婦々たる。乃ち之を附演して長歌一篇を作る。世人幸に蛇足を笑ふなかれ

一

鷲頭巾、種が島、
火縄片手にうちぶりつゝ、
宵闇に紛れさち出でつ。
小道盡きたる八重葎、
茨かきわけ茅蹈みつけ、
山又山深く入る。
左にめぐる岨陰の、
かなたにものゝ音聞こゆ。
怪しこゝに何物ぞ。
暗き中より透かし見つゝ、
一足うしろに身を構へ、
銃取り直す折を遲し、
鹿は木の間に隠れ去りぬ、
森闇く星見えぬところ。
惜き事したりさりながら、
ゆふべはしなく知り得たる、
通ひ路こそはたのみなれ。
阪を上り阪を下り、
溪にはなれ溪に沿ふ
行けども／＼目じるしの、
見えざるは道や迷ひけん。
忽ち起る風の音、
萩動揺、薄撩亂、
月代上る山の端に、
兀と一本杉高し。
こゝなり／＼この峰なり。
このむら薄に隠れ居て、
彼等の來るを待つべしや。

二

腹でもりの鹿の子の、
其皮もてつくりし笛、
其笛頻りに吹き立てぬ。
月隠れ雲いそがしく、
風はら／＼と尾花吹く。
あはれを盡す其聲に、
われさへ腸寒けれど、
より來る鹿もなかりけり。
時こそ早けれ子も過ぎむ。
しばらくひそむ叢中に、
露の玉散る夜は更けて、
鼠の音に／＼鳴いよよ、
かすかに聲ふ聲すなり、
笛に近く聞こゆなへ、

日本人創刊號と日本人所載鹿笛の一部

規一派の俳風が、文壇的に認められた頃から、彼は新體詩界にその餘勢を驅つて進出してきたのである。さうして明治卅一年に和歌方面の改革に專心する頃までの二ヶ年間位の間に、新體詩作家として活動したのである。明治廿九年・卅年の兩年が主で、卅一年に七篇、卅二年に二篇の作を發表したが、その以後は遂に單獨に發表しなかつたのである。而して彼は主に「日本人」誌上に作品を發表したが、三十年三月には、新詩會の連中の新體詩集「この花」が出版され、佐佐木信綱・武島羽衣・鹽井雨江・杉鳥山・與謝野鐵幹・大町桂月・落合直文の諸氏と共に、子規は、「おもかげ」「鹿笛」「父の墓」「小蟲」「戈」「筆」「四季」といふやうな作を載せたのである。

子規の新體詩を概觀するに當り、先づ便宜のため、子規全集によつて、大體の作品目次を摘錄して置く。

作品名	發表機關	發表年月日
鹿笛	日本人	明治廿九年八月五日
父の墓	同	同　八月廿日
小蟲	同	同　九月五日
戈	同	同號
筆	同	同號
四季	同	同　九月二十日
音頭の瀬戸	同	同　十月五日
園の秋	同	同號

金州雜詩（廿八年金州滯在中所觀）	日本人	同　十月廿日
洪水	同	同　十一月五日
病の窓	同	同　十二月廿日
明治二十九年	日本新聞	明治卅年一月一日
筆はじめ	同	同號
新年	日本人	同　一月五日
新年雜興	早稻田文學	同　一月號
老嫗某の墓に詣づ	日本人	同　一月廿日
田中館甲子郎を悼む	同	同號
少年香鹿を悼む	同	同號
古白の墓に詣づ	同	同號
おもかげ	？	明治三十年？
皇太后陛下の崩御遊ばされたるをいたみたてまつる	日本新聞	同　一月廿五日
蒼苔を懷ふ	日本人	同　二月五日
子の愛	同	同　二月廿日
俳歌に擬す	同	同　三月五日
花草	同	同　三月廿日
奈翁假面の圖を見る	同	同號
微笑	同	同　十一月廿日

花四種	？	明治卅年
病中新年	日本人	明治卅一年一月五日
花賣る歌	ホトトギス	同　十月
豐年の歌	同	同號
猩々	同	同　十一月
菊合せ	日本人	同　十一月五日
村の光	ホトトギス	同　十二月
芒老ゆ	同	同號
内地雜居の歌	同	明治卅二年八月
富士山	？	明治卅二年
古城の月	？	？

之を形式の方面から見ると、大部分は七五調である。七五調といつても、或は「八五」「七六」等、一つの作中にも多少の變躰をば自由に混じてゐる。俳句に於ても、彼は廿七年頃から卅年頃にかけては、字餘りは用捨なくどしどし使ひ、五七五以外可及的新調を出さうと努めてゐるが、新體詩に於ても、さういふ意見を持ち、作品の上にも實行をしたのである。五七調の作は極めて尠い。「皇太后陛下の崩御遊ばされたるをいたみたてまつる」「猩々」「村の光」等位のものである。「猩々」の最後の一聯は、

風は杉を動かし
雲冴ゆる眞空のけしき

からす照る寒き月夜に
人臭き夜著うちかぶり
子の夢か見る
あはれ　妻の夢か見る

で、この最後の二行は五七形式を離れてゐる。「子の夢か見る」までを考へれば、完全な長歌の形式で、「村の光」の最後が五七七の形式で終つてゐる所に併せ考ふれば、むしろ「村の光」等と共に、長歌の形式を踏んでゐると言つてもよいのである。「金州雜詩」中の「若菜」も五七の長歌形式の作である。彼の晩年には、

たまよみのかひのやまゐに、ぬばたまの夜ぶりのあゐに、三つ入り臥その三つあみたを、あにおくりこし

×

秋くさのむくさ八くさ、ひとはちに集めつらむ旦、うちかうはまつさきいでて、とふたへしいまだ

其他長歌には秀作を示してゐる。所謂新體詩には彼は十分異色ある秀作を示さなかつたが、晩年の長歌は單純化のゆきとどいた、すぐれた作品で、彼の長所があらはれてゐるのである。其他「芒花」は六六調であり、俚謠風の作には七七調其他多少の變調のあることが注意される。

用語に漢語をかなり多く用ひてゐることは、先づ何人も注意を引く所であらう。新體詩集「この花」の作者の中では、鐵幹や子規の作は漢語脈の多い方で、他の人々には多少の差はあるが、和文脈が多く、調子は

優美によまれる。それらの人は、多く平安朝の和歌や文章等の脈を引いてゐるとも見られ、俳句から入つた子規のとは趣が異ふのである。當時の新體詩人は、主として國文畑に培はれた人も、西詩の影響を多く蒙つた者も、優雅な和文臭を帶びた作をするのが常であつた。讀んでゐて如何にも調子がよく、すら／＼と靜かな水の面を滑つてゆくやうな快さを持つたものが多い。子規のそれは、或る點まで佶屈聱牙ともいふべき、調子に多少難澁な圓滑でない所のあるのは、主として漢語を多く用ひたことと又日常使ふ名詞等をどし／＼使つたからで、それら皆俳句から來てゐると見られる。漢語使用といふ點では、土井晩翠等の作は、確かに特色があるが、日常語といふやうなものの使用を藝術的に生かした人は全く尠い。この點にも子規の作品の特色は認められねばならぬ。子規の句の優麗といふやうな方面の缺けてゐることは、この外に字餘り等を用ひた事にもよるが、特に注意すべきは、韻を踏むといふことを、餘程無理にも行つてゐたことなどにも原因がある。「新體詩押韻の事」(卅年)といふ文章の結論に、

吾は調子の上より新體詩に韻を踏まざるべからずとは言はず。されど今の散文的新體詩を韻文的ならしむる一方便として韻を踏むことを勸むる者なり。韻を踏みたるがために佶屈聱牙ともならん、支離滅裂ともならん、佶屈聱牙も支離滅裂も刺激劑として必要なりと信ず。

とあるが、實際押韻の無理の實行のために、彼の意圖に反し却つて音律・内容共に害されてゐる點も、多少は免れないやうである。

左に子規の押韻論と、その理論の具體化としての作品を簡單に一瞥しよう。

子規の韻を踏むといふのは、最後の一字を韻とするので、「い」と「い」、「か」と「か」、「ぶ」と「ぶ」の如きものを主としてゐた。あ、え、さ、た、な等同韻といふ風に、最後の母音を以て標準とせず、又最後の一字と其前の字の母音が等しい、たとへば「きん」と「りん」、「つく」と「すく」等の場合をも餘り問題にしてゐなかつた。漢詩等と異つて、日本の詩歌では韻を踏むといふことは特殊的なことである。彼は俳句には句尾に名詞が多い事等から、俳句の構造を利用したりして、新體詩に韻を踏むと云ふ事を實行しようと企てた點がみられる。實驗の結果、一、名詞を韻とすることが困難で、而も名詞を韻にしたければならぬ必要を認めたことと、二、韻とするに便利なのは副詞（又は代名詞、間投詞）で、句の上に於ける位置が動かし易いからである事、三、押韻の上から倒句法の必要を認めた事、四、「し」「き」「り」「る」「こ」等の韻を用ふる必要が多く、その用ひ易い事等を知つたと言つてゐる。さうして押韻は、言葉や内容を限定するといふ缺點もあるが、次のやうな利益もあると論じた。

第一、狹き範圍に在れば却つて自己の技術を現はすに適すること

第二、言語の範圍を限らるゝがために却つて思想の上に變を生ぜず早く作り得ること

第三、限られたる韻語を探して韻語より思想を得るがために卻て奇想警句を得ること

韻を踏むといふやうなことを、強制的に實行することは、日本語本來の性質から考へても無理がある。彼の押韻論は全局を見透して、論理的に押進めたものでなく、部分的に多少の發明があるといふ程度の者で、曲說なこじつけはなくもない。その押韻の利益としてあげた上記の三箇條の如きも、消極的な、隨分苦しい

議論で、われ／＼の同意する能はざる所である。併し試みとしては決して無意味のものではなかつたらう。彼にして、其後つづけて何年か詩作を繼續してゐたならば、必ず、無理にも押韻詩を作るといふ、馬鹿々々しい偏見からは脱れ出たらうと思ふ。子規全集によつて「韻さぐり」の草稿が公表されたが、さういふ苦心までして、努力して押韻等いふことを色々研究し、作品にも實地に試みた事は、それが詩の大道を離れた、やゝ愚に近い事であつたにしても、日本語に於ける押韻の可能の範圍を確める一つの手懸りになることだけでも、詩歌人乃至學究にとつて、全然意味の無いことではなかつた。

斯ういふ議論を發表する少し前頃から、それを作品に實地に試み、その後の詩作には殆んど、多少ともこの押韻の痕跡の見られないものは無い位である。三四の例をあげると、

　われ幼くて恩受けし
　姥のなごりの墓じるし、
　せめては水を手向けんと
　行くや、湯月の村の外。
　昔辿りし田の小道、
　寺を廻りて埋葬地、
　三年過ぐればこは如何に、
　墓滿ち滿ちぬ、尾に谷に。（「老媼某の墓に詣づ」の一部）

×

世を憤るそのために
名士の末に生れけん、
不平に驅られ、君終に
都を出れば行路難。（「田中館甲子郎を悼む」の一節）

×

浮世は汝に　負きしと、
　汝一人こそ　思ひけめ、
汝に負きし　ことをゆめ
知らず、浮世も　我も人。（「古白の墓に詣づ」の一節）

×

棧橋長う海の上、
あわただしげにわめく聲、
船今出づと彼方なる
黑煙に近く人のよる。（「子の愛」の一節）

×

斷頭臺、三丈の空、
見えず十字架、見えず耶蘇。
ほとけ既に無し、況んや魔、
紫雲來迎あらばこそ。（「微笑」の一節）

等、押韻の距離と配置は異るものの、皆子規の所謂押韻の實現である。押韻の位置は行末であるが、押韻を踏む行間の距離は、同一作品に於ては、どの一聯をとつても、一定してゐること勿論である。成功する事もあり得ようが、言葉を探す興味に墮し易く、自由な感情の發想に不自然な制肘を加へる結果になる事は明白で、また概ね詩的効果をあげ得ないであらう。この種の末節的押韻のみに注意して、他の音律的要素を等閑にするならば、既に韻律的にも失敗を豫想しなければならないのである。彼の詩作は、その後一二年で絶たれた形であるが、それは、この主張及び實行の結局間違つてをり徒勞にすぎないことを反省し、一頓挫を境として、新しく踏み出すことも面倒臭く、放擲したといふこともあるであらう。賢明な彼であつてみれば、かゝる自覺も間もなく感ぜざるを得なくなつたらうと思はれる。

倒句法・擬人法・問答法・對句法等は當時の新體詩界全般に多くみられることではあるが、子規のには、子規らしい特色のある點も認められないことはないが、藝術價値の上には何程の寄與をもなしてゐない。で細かい修辭法等の考察は全然省略して、直ちに内容方面に少しくふれておきたい。

新體詩は、和歌や俳句の樣に音數が細かく限定されてゐないがため、叙景・叙事・抒情を明確に含むこと

が出來る。感情の發露には相違ないが、短詩形では、外面的にみるならば叙景の作ともいはれべき者に、却つて好ましい作が多いに反し、これは詩形が短かく限られてゐないがために、必然的に抒情とか叙事等をあらはに混ずる場合が甚だ多いのである。彼の場合も新體詩は、その和歌や俳句に比し、遙かに叙景的要素以外の分子を多く含み、遙かに思想的でもあるといふ特色をあらはしてゐるのである。島崎藤村の詩作は、子規も十分認め、「若菜集」の出版された時、之を賞揚してゐるが、なほ內容的缺陷として、抒情的で特に戀愛をうたふことに偏してゐる點をあげ、抒情の外に叙景・叙事を假つて變化を多くし、主觀の外に客觀の世界を描き、戀愛の外に忠孝・友愛・慈悲等を含むべき事を論じてゐる。藤村の詩と子規のそれとはやゝ比較にはならないのではあるが、藤村の詩の缺陷として要求した以上の條件は、作品價値の高揚に必ずは至らないとしても、ともかく、子規の新體詩には具つてゐた觀があると思ふ。俳味を帶びた叙景的の作に特異性のあるものがあるが、多くは中心的には抒情詩の特色をあらはに具備しながら、而も叙事とか叙景とかの分子を多分に含んでゐる。而して戀愛の外に忠孝・友愛・慈悲等の感情乃至觀念をうたつてゐるものゝ乏しくない點を見得るのは、卽ち思想的とも言はれ得る特色のある所以と理解するのである。

例をとれば、「鹿笛」は、關東の「鹿笛に谷川渡る音せばや」を敷衍して作つたものと斷つてゐるが、雌鹿が打たれた後で、雄鹿は每夜々々雌鹿を尋ねて空しくさまよひ歩くと云ふ、鹿の戀を中心とし、動物の世界の愛戀と無常を歎つたもので、同時に人間世界の戀と無常を暗示的にうたつたものと見るべきであらう。この意味に於て、抒情的であるが、無骨な蒐頭巾をかむり種々な鳥を手にして山深く入つて、鹿の來るのを待つと

いふ所など叙事的でもあり、叙景的分子も多い。抒情を中心とし、筆は自ら叙景をふくみ、事件的・叙事的に運ばれてゐるともいふべきである。「猩々」等の作品も全然之と同じゆき方をしてゐる。この事實は殆んど大部分の作に認められ、他の作家に比しても、目立つて著しい傾向のやうに思ふ。

「病の窓」の前後は自然の細かい寫生的手法に於て特色のみられる作の一つであるが、病床に徒然にくらしてゐると窓の所に蝶が來る。その蝶の身のあはれを感傷的につぶやくのであるが、蝶はそれに對して「廣き宇宙にものはあれど　苦み多く樂みの　少きところ、君が住む　人間界の如きは無し。吾等が受くる樂みは今の今なり。今を置きて、思ひ出すべき昨日なく、推し測るべき明日も無し、吾等が暮らす生涯は　今と今とのつづきにて、樂と樂とのくさりなり。あはれよ、君よ。人間の　執着多き心もて、五欲の外に風に乘る。吾等をはかること莫れ　さらば」と言つて去つてしまふ。その後の瞑想的な心持を、暮れゆく自然の描寫に託してゐるのであるが、それは佛教的な思想で、彼獨自の思想でないといへばいふものの、やはり彼の人生觀とか自然觀の片鱗が、かなり濃厚にあらはれてゐるのである。少女が嬉しさうに羽根をついて遊んでゐる所へ、白髪の翁がよろめいて來て石に腰をかけ、何が新年は樂しいのかと突然問ひをかけ、少女は之に答へるといふ問答體に綴られてゐる「新年」といふ作の、老人の間には、子規の病んで樂も希望も少い境にゐる心に根ざした哲學的思想が語られてゐる。かく色々の思想が彼の新體詩には浮び上つてゐる。この事は直ちにその作品を價値づけるものとはなつてゐないが、少くとも彼の考を知るために大分參考になるのである。

たとへば「筆一」といふ詩を考へてみる。自分の作の人物としてのべてきた少女といよ／＼お別れせねばな

らぬ。實際は初めから殺すために設けたのである。併しいざとなると、筆の上でも、け高い御身を殺すにしのびず、筆は滑らない。自分は御身のため萬斛の涙を注ぐ。自分が文學者の名を成したなら、それは御身の功である、と云ふ風のことをのべてゐて、彼の小說「當世媛鏡」のヒロインのお清のこと等を想はしめる。「筆」の中の一聯に、

圓滿なる人　只一人
うき世の中に　求めかね、
無垢清淨の　御身をば
しばらくかりに　設けつゝ
神聖にして　濁りなき
情をこゝに　寄せたれど
御身もとより　若くして
死すべき運を持てりしなり。

とあつて、之は子規の女性觀を語ると共に、お清を如何に取扱つたかを暗示し、「當世媛鏡」の構想の一部にも觸れる所がある。

さて、彼には回想の戀を取扱つた「おもかげ」現實の戀を主題とした「村の光」等、多少戀愛詩と稱してもよい詩もあるが、それ以外他の思想・感情、彼の言葉に從へば忠孝・友愛・慈悲等の要素を內容としたも

のが尠くない。「皇太后陛下の崩御遊ばされたるをいたみたてまつる」といふ挽歌や「金州雜詩」中の「三詩山」等を忠の思想の表現とすれば、「父の墓」等は孝の思想の具體化とも言へよう。友人の死を悼み弔うた作も幾つかあるが、それは友愛の感情乃至思想の發現である。「鹿」や「猩々」の態を歌つた事等は慈悲心の顯現であるとも言へよう。それらも單なる感情でなく、彼の日本主義的な思想的背景を思はせるものがある。

以上彼の作品内容の一面にふれたのであるが、これを直ちに彼の新體詩を價値づける特色とすることは出來ない。藝術的價値の點からは、滿足するに足るものは殆んどない。「明治大正詩史」の著者は、「子規は新體詩の創作にも留意し、二十九年の頃より、しば／＼試作を公けにしたが、この方面では全然見るに足るものなく、一口に云へば、かれの俳句を引延ばして、そのところを新詩として見た類のもので、しかも枯燥した說明のみあつて、感情の律呂ある進行も、いみじい想像力の展開もない駄作ばかりであつた。」と評してゐるのに對しても、先づ不服を申しのべる餘地は餘り無いのである。併し未だ新詩は試みの域を多く出でゐなかつた時代のことであるから、彼の作に佳作の寥々たることは、むしろ當然であつたとさへ思はれる。

彼の新體詩は、その短歌・俳句の寫生的手法に加ふるに、敍事・抒情的要素を更に多く加へ、思想的なものさへ表現してはゐるが、是を藝術價値の上から判定するならば、却つて統一を缺き、饒舌な說明に流れ、安價な主觀を露出せしめて、失敗に終つたものが多いのである。この意味に於て、彼の新體詩の良き特色は結局やはり、その寫實的手法の確實纖細にあらはれてゐる部分に求められなければならないのであらう。又その作品は未熟ながら、多種多樣の試みをし、尊い藝術的な萌芽の見出される點に、彼の才と識をおもはせ

たものがある。

彼の晩年の作に、童謠乃至民謠風の作のあることは、この文の始めの方に例示しておいたが、「俚歌に擬す」と題した、三十年發表の作に、

ねんねんやおころりや。
ねんねの坊やは誰が子ぞや。
お城の上の星の子か、
南の海の河豚の子か。
坊やを産んだ母の子ぞ。
坊やを抱いた母の子ぞ。

×

大凧あがれ、
天まであがれ。
天から落ちたら
梅にかかれ。
梅の枝に
一羽の鶯が

みんな逃げて
しまつた。

×

昔おれのかか樣が
　四國遍路に行く道で
病氣とやらで死なれたが
　戀ひしユて〳〵、こゝへ迄、
喰ひつき犬に吠えつかれ
　とろ〳〵阪でころんだり、
驛の宿屋でことわられ
　しヨぼ〳〵雨にふられたり、
わらぢ、菅笠、旅の空、
　來たこと來たが、苔深く
蒸したお墓のどれぢヤやら、
　賴むは大師のおん利益。
これにも信女と書いてある、

こちらの信女がそであろか。
あれにも信女と書いてある、
　あちらの信女がそであろか。
お墓は野道に出る處、
　戒名も無いといふうはさ、
大方こゝの石であろ、
　咲いとる花が母子草。

等の作があるが、前二者は童謠風、後者は民謠風といふべき作である。この作の詞書には、

俚歌の中に子守歌、及び小兒の謠ふ歌は言葉ひなびたれども面白き節少からぬを、小學校に唱歌を敎へしよりやうやうに唱歌行はれて俚歌は跡を絶たんとす。なかなかに唱歌よりも俚歌の文學趣味多しと思ふに、其多く皆に忘られたる事も口をしく此頃幼き時に覺えたる歌の忘れたるを老人に聞き出して書きつけ見るに、一人興に入りて、終に其口まねをそこゝろみける。我は韻語の自然ならぬを笑ふ、人は事の益なきを笑はん。

と述べてゐる。かういふ方面の作は、卅一年十月發表の、

車に積まば　七車、
舟に載すれば　こゝの舟、
さツさ、稲舟、稲車、

動かにヤ、嫁御も　押しに來い、
重たきヤ、そこらへ　うち捨てろ、
豐年ぢヤ、滿作ぢヤ。

他二聯より成る「豐年の歌」や、卅二年八月發表の、

鄰のお蝶さんはアーエ
綠の黑髮、鷲の鼻、
あか金光（かねびか）りに窪眼、
著物は西洋、島田髷、
あれは誰の子、世界の子。
　イギリス、フランス、ドイツ、ロシヤ、アメリカ、パー

他一聯から成る「內地雜居の歌」等があり、前者は所謂民謠體、後者は流行唄の調であるが、とり／＼に興味がある。子規が童謠や民謠風なものに藝術的價値を見出し、自らさういふ試作をした事は卓見と言つてよい。さういふ意見を發表した人は尠くなかつたが、作品の上に之を實行して、相當みられるものを作つた人は殆んどまだなかつたやうにおもふ。大正期になつて盛行した民謠や童謠は、この子規の影響を受けることが多かつた等といふわけでは勿論ないが、子規が、かゝる所に目をつけてゐた事は、特筆に値するものでなければならない。かゝる方面にこそ、却つて子規の長所が發揮出來たのではないかとおもふ。子規當時の新

體詩にも、多少藝術的な佳作を殘した人もあるが、一般的水準は、たゞ眞面目で形が整つてゐたといふだけで、或は詞の徒らなる修飾に過し、或は甘い感傷だけのものだつたりで、一向とりとめのない低劣なものが多かつたのである。實に非藝術的な、唱歌や軍歌等を作つて得意とし、諸國の民謠等に藝術的に豊かなもののあることに氣付かない、專門家が乏しくなかつたのだ。そこに目をつけてゐた彼が、もつとこの方面に突き進んで行かなかつた事は、やゝ惜しまれるのである。

彼は新體詩作家として僅々一二年の活動をしたのみであるが、實にすぐれた作家とは云ひ難いまでも、十分特色ある、一人前の恥しくない仕事はしてゐると思ふ。が、この民謠風の作に、もう少し積極的に突き進んだならば、先驅者の名を詩史上にとゞめることが出來たであらうに。

子規は如何な道案内者に導かれて、如何なる道程を踏んで和歌・俳句の殿堂に參入したのであつたか。彼の俳句と和歌は大體どんな風なものであつたか、歌論と俳論は如何。これらに就いては、輪廓的・平面的ながら一通りの叙述を果したのである。その歌論と歌との關係、又俳論と俳句、歌と俳句、歌論と俳論等の相互影響に就いても、或は具體的に之をあとづけ或は多少暗示して、これらを統合した藝術家子規の全面にふれたつもりである。併し彼の藝術及び藝術觀の本質的價値といふやうな問題は、極めて重大ではあるが、此蕪雜な論稿では十分に吟味し盡せぬ憾があつた。又子規の後の文壇・思想界狹く考へて歌壇・俳壇に及ぼした影響についても、殆んど言及する事が出來なかつた。これは甚だ遺憾であるが、彼の本質的價値を徹底的に究明するといふ事は、藝術及び藝術論に關する、あらゆる徹底的研究を豫想せねばならず、彼の影響を少しく精密に叙述することは、畢竟明治大正昭和にわたる和歌・俳句の歴史的展開を辿ることゝなるが故、問題は根本的で而も廣汎にわたるのである。それ故これらはなほ他日を期して、更に詳説しようとおもふのである。なほ彼の全面貌を知るためには、彼の宗教觀・社會觀・女性觀等々の問題もとりあげられなければならず、又文藝批評家として繪畫鑑賞家としての方面等に於ても紹介すべき言說が多く、更に突きこんで考へてみなければならないことが勘くないのである。が、豫定の頁を超過したために、割愛しなければならない

ことになつた。

ただここには、子規の寫生的手法や連作的構成について、その由來する所を述べ、第二編及び第三編を補足すると共に、後の藝術の方法・態度について一括して考へてみたいと思ふのである。

第一章　寫生及び寫生說

子規が寫生的の句の妙味を少しく感じ始めたのは、明治廿五年頃からである。その以前にも寫實的の句を作つてはゐるが、それは寫生の功德を認め、その妙味を知つてゐたのではなかつた。「獺祭書屋俳句帖抄」序によれば、「冬の始に鳴雪翁と高尾の紅葉見に行た時は天然の景色を詠み込む事が稍〻自在になつた。

麥蒔や束ねあげたる桑の枝

松杉や枯野の中の不動堂

などいふ句は此時出來たので、平凡な景、平凡な句であるけれども、斯ういふ景をつかまへて斯ういふ句にするといふ事がこれ迄は氣の附かなかつた事であつた。」と言つてゐる。それから一年毎に寫生といふ事の味を深く感じて行つたのであるが、廿七年の秋から冬にかけては毎日のやうに根岸の郊外等を散步して、俳句を實地の寫生から作る事につとめた。その際寫生と言ふ事に一段の妙味を感ずるに到つたさうである。「俳句帖抄」序には、「寫生的の妙味は此時に始めてわかつた樣な心持がして、毎日得る所の十句二十句位な獲物は平凡な句が多いけれども、何となく厭味がなくて垢拔がした樣に思ふて自分ながら嬉しかつた。」と、この

時のことを回想してゐる。

畫家が寫生旅行をしてスケッチ帖に收獲を描きとめる樣に、彼は手帳と鉛筆を携へ郊外へ出て、實景を俳句に收めることを盛にやつた。斯ういふ方法から寫生の味を徐々に深く悟るやうになつたのである。天然が好きだといふのは、以前からの彼の好みであつたのではあるが、かういふ風に自然の實景を句にしようとつとめてゐる間に、自然、より多くの親しみやこまかい觀察を自然界に向けるやうになつたのである。彼の寫生の味を悟る上には、古句――元祿や天明期――に親しんだ事が有力な暗示を與へた事實は忘れられてはならない。殊に蕪村の句の寫實味のある繪畫的な作風の影響は否定すべくもないのである。併し鉛筆と手帳を持つて郊外へ出て句を練り、書き記したといふ事實こそは、最も直截に彼に寫生の實地體驗を教へ、寫生句の妙を感得させたことであらう。而してこれは子規が當時の少壯洋畫家の態度を學んだのであることは特記すべきであると思ふ。即ち中村不折や下村爲山等の友人の畫家から、繪畫に於ける寫生の德を聞かせられた事が、彼の開眼には少からぬ力になつたと想像されるのである。このことは一通りは注意されてゐるのであるが、その間の事情を先づここに明かにして置きたい。

中村不折との交渉を例として考へてみるに、子規が、廿七年二月「小日本」編輯主任となつて間もない頃、淺井忠畫伯が挿畫畫家として不折を紹介し、神田淡路町の新聞社樓上で二人は始めて會つたのである。不折の生活もこの時から僅かに多少惠まれるやうになつたのであるが、「後來余の意見も趣味も君の教示によりて幾多の變遷を來し」（墨汁一滴）と、子規自ら告白してゐる如く、子規にとつても不折の出現は、重大な意

味があつたのである。それまで子規は頑固な日本畫崇拜者であつたため、不折の洋畫家であることには滿足されないものがあつた。が、不折と議論を上下し又その實際を親しく瞻るに及んで、彼は洋畫趣味に改宗し一時は全く日本畫乃至日本畫家を不當に蔑視するやうにさへなつたのである。

時々鳴雪老をとひ中村畫伯と放談するなど此頃の快事に御座候（廿七年七月、五百木飄亭宛書簡の一節）

等とあるが、子規と不折との交渉は加速度的に親密を加へて行つた。八月に子規は、「王子紀行」一篇を發表したが、その時の同行者は鳴雪と不折で、不折に子規は戯れに畫と俳句の腕を競べようと言つたが、數日を經て不折の畫を見せられるに及んで、自分の俳句は到底及ばない、よい出來であることを知つた等と記してゐる。このやうに、共に郊外に出て寫生の腕を競ふといふやうな事もあつた。少くとも互に畫と俳句に競爭的氣分を以て二人は接觸してゐたのであつた。子規が不折の畫論に啓發された事は、「君の畫く所を以て今迄自分の專攻したる俳句の上に比較して其一致を見るに及んでいよ〳〵悟る所多く」と子規自身語つてゐるに據つても明かである。不折の勉强心の旺盛なのを賞めて「毎日草鞋辨當にて終日あたりへ油畫の寫生に出かけ、云々」等とも言つてゐる。子規は不折の畫論を聽き勉强の實際を見るに至つて、日本畫より西洋畫の嗜好に、より多く惹きつけられるやうになり、又進んでは俳句の上の寫生趣味の確信を固め、自己の俳道精進の氣持を更に深めて行つたと言ふべきである。

我嘗て日本畫を愛し、洋畫を排す。牛伴（註、下村爲山）我が爲めに日本畫の不完全と洋畫の完全とを比較して說く。我信ぜず。後不折、我が爲めに日本畫の中に就きて巧拙を比較し、西洋畫の中に就きて巧拙を比較し、日本畫と西洋畫

と個々別々に說く。我、僅に悟る所あり。退いて之を文學上我得る所の趣味と對照するに符節を合すが如し。而して後に洋畫を觀る、生氣充滿し物々生動す。（明治卅二年、病牀譫語）

とも言つてゐるが、彼の俳句の寫生及び寫生說が、不折や爲山等の說に大いに啓發されたものである事は、これ以上多くの說明は要しないともおもふ。なほ詳しくは「墨汁一滴」其他を參照されたい。

隨筆「松蘿玉液」（廿九年）九月十一日の條には、

> 寫生といふ一事は少くとも西洋畫をして日本畫の如き陳腐に陷らしめざるの利あり。況んや寫生ならずして好畫を作すこと極めて難きをや。日本畫家曰く寫生は卑き手段なり、理想の高きに如かずと。此言を爲す者多くは寫生を知らざる者なり。繪畫の能事は寫生を以て終る者に非ること論を俟たずといへども、高尚なる理想も寫生によらざれば成功すること難かるべし。云々。

と述べてゐる。この繪畫論は彼の實感として體得した事には違ひないが、その由來する所は、すでにのべた如く、爲山や不折の直接の刺激影響に由る所大きに居るのである。而してこの繪畫論は直ちに彼の俳論に接續し、俳論は又その歌論の核心ともなつて發展して行つたのである。而して實に寫生及び寫生論は子規藝術の中樞で、最も根本的なものの一つであると云はねばならない。

東洋畫論に用ひられた寫生の語は、時代に依り個人の傾向に應じて、深い意味と淺い意味とを必然的に含んでゐたものと觀るのであるが、所謂氣韻生動に相通ふ高遠な寫生といふ考もあつたことは否定出來ない。子規は「寫生は畫家の語を借りたるなり。」（叙事文）と言つてゐるが、それは言ふ迄もなく、東洋畫論中の

用語例から直接學んだのではなく、當時の洋畫家の用語例をとり用ひたものである。形似を寫すに頓て、遠近法等に關心の乏しい日本畫の缺點を痛感してゐた當時の若い西洋畫家が、單なるスケッチをすると云ふ程度の、輕い意味に用ひてゐた寫生の語を直ちに借り用ひた者に過ぎない。引用した「松蘿玉液」の子規の言葉に依つても分るやうに、藝術の高所に到達する手段として文藝術的手法として主として寫生說を稱し、之を實行したのであつて、後、島木赤彥や齋藤茂吉が內容を與へてゐるやうな、藝術の究竟所を直ちに表現してはゐなかつたのである。子規の所謂寫生は藝術の方法論であつて、本質論ではなかつたといふことは、大體一應は認められるべきだと思ふのである。併しながら子規の藝術及び藝術觀の發展深化に伴ひ、淺い意味の寫生から徐々に深い意味のそれに移行し、寫生は單なる手段・方法ではなくて、寫生に依つて藝術の至境が具現されることを信ずる迄に至つてゐると思はれる。本質論と云ひ方法論といひ、遂に兩者は極まつては完全な提携を見るに到らざるを得ない。藝術本質論が全く方法論を除外しては成立せず、正しき方法に依つてのみ本質は顯現されるべきものであるからである。その點はなほ後で附加したいとおもふが、實に彼の寫生的態度は、和歌・俳句のみならず、文章の上にも同樣あらはれてゐるのである。

子規自身寫實的の文章をものした許りでなく、ホトトギス誌上に於ては課題を設けて短文・日記等を一般から募集し、自ら之を選し、自宅に山會なる文章會を開いて寫生文の研究會をひらいたりした。而して彼の所謂寫生文が文壇の一角に根強い力を張り、後の文學に或程度の影響を與へてゐるのである。俳人側では漱石・虛子・四方太・紅綠等、歌人方面では左千夫・節等の、小說を書く一動機となり、且つその文體や態度

の上にも影響を及ぼしてゐると思はれる。言ふまでもなく、それらの人の小說を書く動機にはもつと深い根本的誘因があつたであらう。たとへば、虛子が始めて子規と書信の往復をし始めた頃に於ては、虛子は俳句よりも小說にあこがれを持つてゐたのである。あたかも子規がはじめ小說家を志した如く、虛子も、その初期に於て俳句以前に小說は一層魅惑的だつたやうである。これは他の人の場合も或點まで言はれ得ることであるとおもふ。又それらの人は各〻自身の藝術的立場を保持してゐたことは申すまでも無い。けれどもこれを大きな流れの上でみるならば、子規を中心とした「ホトトギス」の寫生文派から誕生したものである事は否定出來ないのであつて、この點に於て子規の啓蒙的意義は、相當重視すべきものであると思ふのである。これについては、もつと詳しく考察すべきであるが、ここでは簡略に從つて置く。

さて彼の寫生文論は、明治卅三年に「敍事文」論一篇としてデビューしたのである。他にも參照すべきものはあるが、この文によつて大體を覗ひ知ることが出來る。その要所を揭げると、「世の中に現れ來りたる事物(天然界にても人間界にても)を寫して面白き文章を作る法なり。或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、そを文章に直して讀者をして己と同樣に面白く感ぜしめんとするには、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず、只ありのまゝ見たるまゝに其事物を模寫するを可とす。」「寫生といひ寫實といふは實際有のまゝに寫すに相違なけれども固より多少の取捨選擇を要す。取捨選擇とは面白い處を取りて、つまらぬ處を捨つる事にして、必ずしも大を取りて小を捨て、長を取りて短を捨つる事にあらず。」等の如きものである。子規の寫生の概念は此によつても大凡その中心を知り得るのであるが、「天然界にても人間界にても」と斷

つてゐるが、歌や俳句の方面では、子規は主として天然界の描寫に寫生の語を用ひてゐるのである。

　子規の所謂寫生文は、表現上の自然主義で、云はゞ自然主義前派とも目されよう。明治の所謂自然主義の諸作家は、主として外國文學の影響下に誕生し、卑近な現實生活の矛盾・葛藤・醜惡・悲慘な方面を、如實に解剖しようとしてゐたと異り、子規は表現上に於ける自然な如實な相を尊び、內容的には寧ろ愉快な面白いと云ふやうな事を目指してゐた。これを思想的にみるならばプリミチブな幼稚さを免れない。が、文章構成法の基礎的な要件を指示してゐる點に、文章史的には注目すべき提言であつたとおもふ。當時の浪漫派・理想派作家達の表現態度を始めとして一般民衆の文章觀は、子規の寫生文の說に由つて教へられ、救はるべき缺陷を少からず有してゐたことは、ここに細說を要しない、明瞭な事實である。美辭麗句をならべ、誇張法を好んで使用した觀念的な文章の横行した時代にあつて、子規の提言は、最も價値あり效化ある一啓蒙運動であつたと言つて過言でない。それが當時及びその後の文壇に或るヒントを與へたことは、認められなければならないのである。

　翻つて、彼の寫生畫や寫生說の發展といふ方面の問題にふれてゆかう。

　子規は晩年には日本畫の簡素な味にも非常に愛好を感じるやうになつて來、死ぬ一月程前まではモルヒネを飲んでは草花の寫生等をして親んでゐた。「病牀六尺」八月七日の條には、「草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に寫生してゐると、造化の秘密がだんだん分つて來るやうな氣がする。」等と述べてゐるが、數年前の寫生に對する考とは、大分深い所に入つて來たことが、かういふ一寸した言葉によつても、分ると思ふ。

一人の人間の用ふる言葉を考へてみても、智識體驗が進むにつれ、用語の意義内容にも變化をあらはし、深い複雜なものを含むに到ることは當然の理である。子規が始め用ひた寫生といふ言葉の内容は、たゞ自然を在りのまゝに寫すことに藝術は出發すべく、そこに趣が生ずるのであるといふ位の意味しかなかつたのが、晩年になると、物をうつしてゐる中に自然に造化の微妙なはたらきが分つてくるといふことまで感じられる境に到つてゐる。方法を徹底せしめて、藝術の極地に悟り入つたのである。最初は唯卑近な確實な一般向きの表現手段としての寫生を考へる場合が多かつたが、後には物を寫生することは、直ちに自己の生命の深所を表現することでもあると感じる程に進展深化して行つたと思はれる。物心融合の至境に到つたのである。即ち寫生と云ふ同樣な言葉を使つても、二十年の後半期と、死ぬ一二年前のそれとは、その心境の深淺に應じて、かくの如き相異が認められるやうに思ふ。この進展は、藝術觀の上にも作品の上にも、ひとしくあらはれてゐるのである。子規・左千夫の傳統に立つアララギ派歌人の中には、寫生といふことを、「實相に觀入して自然・自己一元の生を寫す」（註一）といふ風に、又「物及び現象の中核に潜み入つて直ちに共生命を捉へる」（註二）といふ如く意義づけ、藝術終局のものゝ把捉その事に解してゐる者もある。それは子規の用語例そのまゝの形ではないが、子規の用語例を訂正發展せしめたものとしては蓋し正當な順路であつたと言ふべきである。子規がかくの如き藝術の本質論として常に寫生を考へてゐたと說くならば、それは反對されねばならないけれども、子規は方法論として寫生を說きながら、遂にはその悟入によつて至境所に到達してゐる事を顧み、寫生を以て藝術本質論にまで適用しようとする態度は是認出來ると思ふのである。それは、寧ろ當然擴大せ

らるべき言葉の發展であつたかも知れない。子規自身もつと生きてゐたら、寫生を手段視する論を進めて、或は藝術の終局目標として寫生を提唱したかも知れないと思ふ程である。

彼は晩年には寫生の深所に潜入してはゐたが、しかし寫生は物の生命をうつし同時に自己の生命をうつすとかいふやうな議論は、明白には示さなかつた。而して晩年を除いては、主として實物について物を描くことの妙味を感じ、手段として啓蒙運動として自己の體驗した寫生の利得を主張してゐたと言ふべきであつた。子規の寫生説と、その後の歌人・俳人の或者の唱道する寫生説との間には、かゝる點に多少の逕庭の存することは認められねばならない。「形似をうつす」「物の趣をうつす」「生命を把握する」かゝる發展は、子規自身の寫生及び寫生説にも多少認められるが、生命を寫すといふやうな終局點を、寫生説の中心として強調してはゐない所が、現在のある人々の寫生説と異る點である。子規の寫生説を直ちに傳神道といふやうに説明することは賛成し得ないのであるが、子規の説が茂吉や赤彦によつて更に發展せしめられた事實は興味があり、必然性が認められると思ふ。

子規はその隨筆や藝術論中に屢々寫生とか寫實とかいふ風の言葉を用ひ、大いにその方法を鼓吹してゐる。而して大體に於て、往々深い意味に寫生といふことを解するやうにはなつてゐる。が、子規の寫生説の一等纏つて觀はれるのは「病牀六尺」の六月廿六日發表の意見であらう。煩はしいかも知れないが、參考のため全部轉載して置く。

寫生といふ事は、畫を畫くにも、記事文を書く上にも極めて必要なもので、此の手段によらなくては畫も記事文も全

く出來ないといふてもよい位である。これは早くより西洋では、用ゐられて居つた手段であるが、併し昔の寫生は不完全な寫生であつた爲に、此頃は更に進歩して一層精密な手段を取るやうになつて居る。然るに日本では昔から寫生といふ事を甚だおろそかに見て居つた爲に、畫の發達を妨げ、又文章も歌も總ての事が皆進歩しなかつたのである。それが習慣となつて今日でもまだ寫生の味を知らない人が十中の八九である。畫の上にも詩歌の上にも、理想といふ事を稱へる人が少くないが、それらは寫生の味を知らない人であつて、寫生といふことを非常に淺薄な事として排斥するのであるが、其の實、理想の方が餘程淺薄であつて、とても寫生の趣味の變化多きには及ばぬ事である。理想の作が必ず惡いといふわけではないが、普通に理想として顯れる作には、惡いのが多いといふのが事實である。理想といふ事は人間の考を表すのであるから、其の人間が非常な奇才でない以上は、到底類似と陳腐を免れぬやうになるのは必然である。固より小供に見せる時、無學なる人に見せる時、初心なる人に見せる時などには、理想といふ事が其人を感ぜしめる事が無い事はないが、略〻學問あり見識ある以上の人に見せる時には非常なる偉人の變つた理想でなければ、到底其の人を滿足せしめる事は出來ないであらう。是れは今日以後の如く教育の普及した時世には免れない事である。之に反して寫生といふ事は、天然を寫すのであるから、天然の趣味が變化して居るだけ其れだけ、寫生文寫生畫の趣味も變化し得るのである。寫生の作を見ると、一寸淺薄のやうに見えても、深く味へば味ふ程變化が多く趣味が深い。寫生の弊害を言へば、勿論いろ〳〵の弊害もあるであらうけれど、今日實際に當てはめて見ても、理想の弊害ほど甚しくないやうに思ふ。理想といふやつは一呼吸に屋根の上に飛び上らうとして却て池の中に落ち込むやうな事が多い。寫生は平淡である代りに、さる仕損ひは無いのである。さうして平淡の中に至味を寓するものに至つては、其妙實に言ふ可からざるものがある。

これによれば、子規は寫生と云ふ事を、主として自然の客觀的描寫の意味に解し、主觀的な理智的な表現よりも無難な一般的軌道であるとして、その手法としての確實性を認め、力說したのである。而してその到達點を平淡にして至味を寓するの境に置いたのである。この寫生は彼の藝術觀の中核をなし、その作品の基調をなしてゐたのである。

彼の寫生及び寫生論の批判・檢討、又彼以後の歌人・俳人等はこれを如何に解して進んだか等の問題には觸れ得なかつたのであるが、以上、大體を紹介したのである。

（註一）　齋藤茂吉の說。同氏著「短歌寫生の說」參照。

（註二）　島木赤彥の言葉。赤彥全集第四卷三十五頁參照。

第二章　子規と連作

複雑な主観・感懐を短詩型の中に表現するには單純化の奏功されない場合があらうし、或る繼起的事件に應じて發動する感動を一つの歌や俳句に盛る事も不可能の事である。比較的思想・感情の單純であつた上代人にあつては、短歌型式に必然的に附隨する、この種の缺陷の不自由さを痛感することは尠かつたと思はれる。而して短歌の表現に不適當なもの、一首の短歌に盛り切れぬものをば長歌の形式で表現することをおのづから修得してゐたのが萬葉時代の歌人である。而して彼らの間には幾首かの短歌を連鎖的に詠む場合もまま自然的に行はれてゐた。彼らはすでに十分なる短歌技術を有してゐたが故に、眞實素朴の感情を遺憾なくうたひ出すことが出來たが、技法の末に流れるやうなことは少かつた。然るに平安朝期以來、徐々に遊戲的賞玩の具となり、歌壇の大勢は一首の技巧を誇るといふ範圍を多く出ず、新材料を採用し、新言語を驅使することも殆んどみられず、因習的に古歌に追從して本歌取の如きに甘んじてゐる狀態であつた。短歌形式に附隨する上述の缺點を痛感し、それを打破し乃至その缺陷をうめ合さうとするやうな何らの試みも起らなかつた。一つには散文藝術——物語やドラマやエツセイ——が、自由に盛行するやうになつて、短歌の持つ缺點は、その方で埋め合せをしたためもあるが、歌が眞情と遊離した言葉の遊戲に墮しつゝあつたのは爭はれない事實である。江戶時代に至つては、やゝ革新の萌芽が認められるが、大體に於て、深く疑義を發する者もなくて、墮性で繼續され、その結果は、歌の領域を極めて狹い範圍に局限して滿足するといふ事情であつ

た。然るに世間の實情も俄かに外國の文物を輸入して複雜化し、人智・學問も大いにひらけ面目一新し、あらゆる傳統に對して懷疑の眼を向けざるを得なくなつた明治時代に至つて、自ら短歌の世界にも革新的氣運が釀成され、その内容も複雜な新要素を混へ、新工夫が加へられ、又短歌形式に對しての疑問も種々の點から發せられるに至つたのである。

三十一音を中心とする在來の短歌形式を疑ひ、また之を破壞しようといふ考も一部に起り、實行されてもきたが、短歌形式の持つ美を實感し、そこに愛着をかんじてゐる多くの歌人達の中には、自分の思想・感情を一首に盛りきれない時は、幾首かの歌の中に、それを表現して、その效果を自然的にあげ得るとして、短歌形式の缺陷を補充しようとしてゐる。意識して、それを實行してゐるのと、無意識の中に自ら幾首かの中に自己表現をしてゐるといふ、比較的の差は認められるが、斯かる連作的傾向は明治から大正にかけて、新興歌壇の著しい特徵の一つと言つてよいものとなつてゐる。而して一首一首の吟味よりも、この數首乃至數十首とつらねられた歌全體が、感動を如何ほど如實に表現してゐるかを主として問題とするのと、全體としての綜合的な感動の波の效果許りでなく、一首の獨立性の上に深甚の注意を拂ふべきであるとなす、兩者の相異はあるが、斯く幾つかの歌を連續的に作るといふ事は、極く普通な自然な、正當のことゝ認められるやうになつてゐる。

大ざつぱに云ふならば、纏起的な事件や思想・感情を、幾つかの歌に連續的に表現せられる作を、普通「連作」(連作)といふ名で呼ばれ、今日は何人も亦普通に行つてゐるものである。大正期に於ては、この「連作」

に對する論議が盛であつた。それは、一首の獨立性を尊重する立場と全體の綜合感に重點を置く態度の相異によつて、結局一致的見解に統合せられなかつたのであるが、「連作」の效果は一般的に承認され、連作は短歌の生命に新しい息吹を與へ得るものとして期待さへもしたのであつた。連作全體の綜合感を尊重し、その爲には一首の獨立價値を必ずしも顧慮する必要を認めないといふ風に論じた石原純の如きは、遂に自由律に轉身し、今やその論議は鳴りを潜めてゐる。

私はここに近代歌壇に於ける連作及び連作論を批判し、その決算報告を齎らさうとする者ではない。たゞ子規の影響が現代歌壇の連作的傾向には潜在してゐることを注意し、子規の歌に於ける連作的傾向について語るべき責を果したいとおもふのである。

「聯作」といふ言葉を用ひたのは、おそらく子規が最初ではなかつたらうかと考へるのである。募集歌「讀平家物語」に就きて（卅三年七月）といふ文の中に、募集歌の題を無雑作に「讀平家物語」と定めたが、後それが難題である事に氣付いた。投稿を見て選題の悪かつたことを今更悔い、自ら作つてみて益々難題であることを悟つたと述べ、又投稿を見て大方の人は題に對する詠み方が悪かつたことをも知つた。然らばどういふ風に詠むべきかと云ふと、それには二つの方法がある。即ち「第一は平語全體を詠ずる主觀的の作なり。されど此類の歌は變化すべき餘地無ければ多く作る能はず。第二は平語中の或る一事實を擇び其事實に關する本文以外の光景を想像して客觀的に詠むに作り。此類の歌は無數に出來得べく且つ一題にて數首聯作を爲すに利あるべし。」（圏點は筆者の附せしもの）と述べてゐるのが、即ちそれである。次に實例を示すために

「予は第二の方法を取りて先づ宇治川先陣を詠まんと思ひ

宇治川の早瀬よこぎるいけじきの馬の立髪浪越えにけり

ぬば玉の黑毛の駒の太腹に雪解の波のさかまき來る

飛ぶ鳥のさきをあらそふものゝふの鎧の袖に波ほとばしる

さきがけのいさを立てずは生きてあらじと誓へる心生食知るも

など試みしが終に多くを得ざりき。」と云ひ、固有名詞(人名・地名・馬名)を用ふる歌として面白くなく、用ひなければ常人が馬に乗り川を渡ると云ふ一般の光景を詠むものとなつてしまふと述懐してゐるのである。子規は、他にも嚴島行幸の歸途備後敷名浦で、上皇が藤の花を折らせしめられる所(平家物語卷四)を自ら作つた例歌を擧げ、やはりそれも題意に遠ざかり成功してゐないと云ひ、つまる所「源平家物語」といふ題は歌にならぬにあらねど、募集歌の題としては適當の者にあらざりき。予は題の選擇に當りて失敗し、諸君は歌の詠み方に就きて失敗せられたり。」と述べてゐる。

さて子規の宇治川先陣の歌は、歌集には、

(一)ぬばたまの黑毛の駒の太腹に雪解の波のさかまき來る

(二)飛ぶ鳥の先を爭ふものゝふの鎧の袖に波ほとばしる

(三)宇治川の早瀬よこぎるいけじきの馬の立髪浪こえにけり

(四)橘の小島が崎のかたたよりいかけ引きかけ武者二騎來る

(五)もののふのかためきびしき宇治川の水嵩まさりて橋なかりけり

(六)先がけのいさを立てずば生きてあらじと誓へる心いけじき知るも

の六首を掲げてある。(一)(二)(三)は、川浪高い宇治川を渡つて行く馬と人とを想像して詠んでをり(四)はそれを對岸で眺めた狀景を想像して詠んで居る。(五)は物語の叙述そのまゝを述べ、(六)は頼朝の前で、高綱が決心を披攊した事を想像して面白く斯く言つたのである。思うに宇治川先陣を歌つたと云ふばかりで、その物語の事實を知らぬ人も分るやうに層序的に一々歌ひあげたいといふ類の者でもなく、又宇治川先陣に對して、ある種の批判的感懷乃至一種の感激を以て貫いてゐるといふ風のものではない。言はゞ、たゞ宇治川先陣を題材にして詠んだ歌を數首製作したといふばかりのことである。

この種の者ならば、明治卅三年になつて始めてあらはれたといふべきではない。彼の歌に於ても、卅一年頃の作には幾らもみられると思ふ。卅年の愚庵和尚から柿を貰つた時の歌の如きも、これらの者よりは却つて連作歌として高等なもので成功してゐると言ひ得る樣である。要するに聯作といふ言葉を使つたのは子規はこの際が最初で、聯作又は連作といふ言葉が歌壇に廣く用ひられるに到つたのは、ここに有力な因を貽んでゐるのであるが、この時作つた聯作が聯作の要件を滿足に具備した高等の作といふのではなく、この以前の作にも、この程度の連作的なるものはあつたといふことを、先づ注意したいのである。

然らば、子規の連作的傾向を促したものは何であるか。その點を少しく考へてみたい。

廿五年頃盛にやつた一題百句等は全く練習的意義しかないものであるが、同じ題で斯く多數の俳句を作つ

である間には、その中の幾何かは所謂連作的に自ら構成されたでもあらうし、自覺的に進めば、それは連作にもなるわけで、一題百句の試み等から糸をひいてゐるとも云ひうるともおもふが、この無自覺な練習的の句作態度をやゝ進めたものが一題十句の方法である。これは蕪村の新花摘等に暗示され、廿九年の夏頃から始められたもので、その頃に到ると、子規も廿五年頃の、何でも十七字にするといふ無自覺の態度から進んで多少實感を盛らうとする態度が濃厚にあらはれてゐ、從つてこの一題十句には各句間に幾分有機的關係のみられる連作的の者も出來たのである。併し晩年に到つても、一題十句は唯同じ題で十句を作るといふにすぎない程度のもので、現在われ／＼がいふ短歌の連作に合致しない者が多かつたのである。「明治卅一年三月廿六日の條に、

昨日左千夫鯉三尾を攜へ來り之を盥に入れて看病牀の傍に置く。いふ、君は病に籠りて久しく春を知らず、故に今鯉を水に放ちて春水四澤に滿つる樣を見せしむるなりと。いと面白き趣向なり、されば吾も一句ものせんと思ひしに思ふやうに成らず。とかくと作り直し果ては更へてやう／＼十句に至りぬ。されど數は十句にして十句にあらず、一題を十樣に言ひこゝろみたるのみ。

と述べ、左の十句を錄してゐる。

春水の盥に鯉の命かな　　盥淺く鯉の背見ゆる春の水

鯉の尾の動く盥や春の水　　頭並ぶ盥の鯉や春の水

春水の盥に滿ちて鯉の眉　　春の水鯉の活きたる盥かな

鯉多く狭き盥や春の水　　鯉の吐く泡や盥の春の水
鯉の背に春水そゝぐ盥かな　　鯉はねて淺き盥や春の水

これらは、今いふ連作とはやゝ異るものであるが、とにかくこの「一題十句」を直ちに歌に應用して、彼は同題の下に數首(多くは十首内外)作ることが多かつた。明治卅一年、彼が熱心に歌を作り、發表した最初の頃から、これは行つてゐたことである。いつも一首に盛りきれぬ感動を數首にまとめあげたといふのでは無く、常套的な趣向の歌の弊を打破すべく色々と試み作ることを目的として、意識的に、同じ題で十首内外の歌を作つたのである。それは連作ではない。が、斯うして十首内外の歌を一題に作つてゐる中には、その中の數首に連作的關係の者が出來る場合もあり、連作的に作歌する興味や利益を感じ、後には連作的の作をしようとする意圖を起すに至つたのである。斯くして、全然自己の實感に據つて作歌するといふ境地に到達した晩年の彼の歌には、遂におのづからにして連作歌をなすと言つてもよいやうな、自然な好ましい境地に入つたものが認められるのである。卽ち子規の和歌の連作は、俳句に於ける練習的意味の方法を、短歌に應用して遂に自覺的に連作短歌を作らんとし、又おのづからにして連作的短歌のよき標本をのこすまでにも到つたのであつたと言つてよいとおもふ。

一題に一つか二つの歌しか出來ないやうな貧しい想では仕方が無いと云ふやうに、彼は口癖にしてゐた。題に束縛されずに自由に色々詠むことを、それ故自ら實行し、その方法として一題十句の方法を歌にとり入れたのであると思はれる。俳句に季をよみこむ事がやゝ自由の態度でされてゐるに反し、歌の題は單に詠み

込みばかりで無く、題意に副ひ、これを生かすやうに詠まれねばならず、著しく題に縛られてゐた。曙覧の如く、「歌だによからば、題は其歌にかなへむやうに、あらためたらむも、なでふ事かはあらむ」（囲爐裡譚）と言ひ放ち、之を實行した歌人は誠に乏しかつたのである。この點を子規は遺憾とし、俳句の季の樣に單に詠み込めば足りるといふ程度に、歌題に捉へられず作歌すべきであるといふのが、その主張であつた。

曙覧云歌の材料として取り來る者は多く自己の周圍の活人事活風光にして、題を設けて詠みし腐れ花腐れ月に非ず。

等といふ如く、過去の題詠の弊をば人一倍に痛感してゐたのであるが、題詠の弊は江戸時代の歌人達が著目した人も少くなく、ひとり子規の考を卓説として稱讃することはないかも知れないが、題詠の弊に痛感し、これを打破しようと實行した所に、彼の革新的の歌の生命があり、彼の連作的傾向も又そこに生れてきたといふべきだと思ふのである。一題に十首内外の歌を意識的に作つた事は、俳句方面に自ら試みてゐた方法を直ちに應用したのであるが、かゝる根據に由つてゐるのは重大な事實である。それは、實に過去の題詠にあきたらず、その救治策として企てられたものともいふべきである。ここに一通り彼の題詠觀をあとづけてみたいとおもふのである。

「歌の題」（卅一年六月）には、最も纏つた題詠觀が現はれるから、左にその大要を掲げよう。

詩經の詩や催馬樂の歌のやうに始めから題があつたので無く、後人が稱呼の便に題をつけたと云ふやうなのが、古いものには多い。作者が作つて後自ら題をつけるといふやうな事も段々生じたが、歌合が盛になつて題意に適するか否かと云ふ事が吟味されるやうなことから、題を豫め定めると云ふ風の事が常習となり、

題のため歌を詠み、題のため歌を改めるといふやうになつた。「題をよく心得べきやう」（非俊）「歌は題の心をよく心得べきなり」（無名抄）等云ふに至つて、もはや題詠の弊は十分深くなつたのである。かくて秘傳等云ふ事も起り、歌の材料を狹め、千遍一律のものにしてしまつた。題詠であらうが無からうが、それは問題ではなく、いい歌を作ればよいのであるが、題意に拘泥しては良歌は出來るものでない。それ故端書以外は廢した方がよいと思ふ。あるとしても廣義に解し、單に歌の符合として取扱ひたい。

圏點を附して置いた部分に、子規の題詠觀が要約されてゐる。大體に於て私は贊成する者であるが、端書以外廢すると云ふ理想の實現は卅四年以後と見るべきであるが、歌の符合として廣義に題意を取扱ふといふのは、卅一年頃から常に實行してゐた、一題に十首内外の歌を作るといふ方法は、卽ちそれに該當するのだとおもふ。斯く考へてくると、子規の連作は、過去の題詠の變革であり、又その好ましい發展だつたともみられるのではないか。

さて彼と同時代に於て、連作的傾向を最も著しくあらはしたのは、彼自らであつたと云つて差支ないとおもふが、この點を問題としてとりあげたのは、子規のよき歌の友であり弟子でもあつた伊藤左千夫が、卅五年一月の「心の花」誌上に「連作の趣味」と題し發表したのが最初である。卽ち左千夫に由れば、子規の卅三年の「五月廿一日朝雨中庭前の松を見て作る」（十首）が、眞の連作のはじめだといふのである。その歌は、

松の葉の細き葉毎に置く露の千露もゆらに玉もこぼれず

松の葉の葉毎に結ぶ白露の置きてはこぼれこぼれては置く
綠立つ小松が枝にふる雨の雫こぼれて下草に落つ
松の葉の葉さきを細み置く露のたまりもあへず白玉散るも
青松の横はふ枝にふる雨に露のしら玉ぬかぬ葉もなし
もろ繁る松葉の針のとがり葉のとがりしところ白玉結ぶ
玉松の松の葉毎に置く露のまねくこぼれて雨ふりしきる
庭中の松の葉におく白露の今か落ちんと見れども落ちず
若松の立枝はひ枝の枝毎に葉毎に置ける露のしげけく
松の葉の葉なみにぬける白露はあこや珊瑚の玉にかも似る

である。左千夫はこの歌に對して、左の如く言つてゐる。

是等は尚ほ連作の始にして、今より之を見る、多少完全せざる點なきにあらずと雖も、或題目の趣味ある個所を見出して、之を四方八方より、詠み盡し、長短相補ひ出入相扶けて、一個の新趣味を歌ふ上に、遺憾なからしむ、作歌の手段より見るも尤も良法にして、其の新工夫たるや爭ふべからざるものあり。古人以外に始めて新なる領域を開き根岸派の國歌の上に、一段の進歩を自認するは、即ち此の雨中松十首の歌を紀元とす。

次に左千夫は、「六月七日夜雨歸郎即事」の作をあげ、雨中松の作よりも更に進歩したものといひ、例の「しほて寧之十四十二」の傑作をあげて、之を「完璧なる連作」と稱してゐるのである。同じく四月號には、「再

び歌の連作趣味を論ず」の文を發表して駁論に答へてゐるが、それに依れば左千夫は、佛足石歌、大伴卿讃酒歌、曙覽の銀山の歌は連作では無く、萬葉ではたゞ大伴卿の鞆の浦の天木香樹の歌三首があるだけで、それも偶然のもので、連作の趣味を悟つてやつたのは子規がはじめであると論じ、連作歌の條件として、

〔一〕連作は必ず二個以上の材料(或は主觀或は客觀)を配合せる連關を有すること。

〔二〕連作は必ず位置と時間と共にまとまつて居て餘り散漫たらざること。

〔三〕純客觀の連作はあるとも純主觀の連作は成立しがたきこと。

〔四〕連作は必ず數首を連關すべき趣向あること。

〔五〕連作は必ず現在的なること。(往事を追憶し後事を想像するとも必ず現在の事實に基づける感想ならざるべからざること)

〔六〕陳列的ならずして必ず組織的ならざるべからざること。

等をあげてゐる。左千夫の連作論の檢討が當面の問題でないから、詳しい紹介は省略するが、左千夫のいふ連作歌は子規の最初作つたものだと斷定することはやゝ過言だとおもふが、子規の歌に連作的のものの多いこと及びそれを十分自覺して試みたことは子規の歌の特色であることは認めねばならない。

卅五年七月の「心の花」には、子規の談話を秀眞が記した「病牀歌話」が載つたが、その中に左千夫の連作論に對する所感が洩らされてゐる。子規は、左千夫の連作論は大體賛成であるが、多少不穩當なところがあると言つて、自分の松の露の歌と曙覽の鑛山の歌を比較して、植込に譬へると、十本の樹のまとまる處である

とするならば、前者は植込全體を右から、左から見る、立つて見座つてみるといふ風にして十首の歌となつたのであるし、後者は十本の樹を一本づゝ一首の歌として十首の歌に作つたと云ふ如き者で、鐵山の歌と同じ格に松の露の景色をよむとするなら、先づ庭に松の木のあることを詠み、次に松の木に雨の降る事を詠みその次には雨が松葉に溜ることをよむと云ふ風に詠んで行かねばならぬ。その善惡は形式的に論ずべきでは無い。どちらも面白い歌はおもしろいと云ふ意味の言葉を述べてゐる。

子規の歌だけで考へてみても、「松の露」の歌が連作の始めであるか否かは私には異論があるのではあるが、有機的關係もなく、統一した氣分で作る等いふのでもなく、唯十首内外の歌を作つてゐた彼が、この頃に至つて明かに連作的ともいはるべき歌を意識的に作り出し、間もなく卅四年の「しひて筆をとりて」のやうた優れた連作を遺すまでに進展して行つたといふことは認められるのである。

繰り返していふ。實際の作歌に於て意識的に或は無意識的に連作的發想法を取るに至る事は思想・感情の複雜になつて來ると共に、忠實に自己の實感を表現しようとする念願が自覺的に歌人の心に起ると共に、必らず發生すべき現象で、今日の和歌の連作的傾向には、子規の歌及び歌論を考へなくとも、種々起るべき理由はある。それは彼一人にみられる傾向ではなく、歌壇の趨勢がそこに向つてゐた、少くともさういふ形勢を孕んでゐたといふことは言つてよろしい。が、殊に彼に於てその傾向は顯著にあらはれてをり、子規の連作的傾向が、左千夫の說によつて一般の注目を呼び、現代歌壇に大きな影響を與へてゐる。即ち子規が題詠の拘束を解放し、特に意義を附與する意氣込みで一題十句を短歌に應用し一題十首と云ふ樣な試みをやつてゐ

る中に段々「連作」の事實效化を強く自覺して、連作的の歌を作り、そのことを認めて左千夫が連作論を公にした。その後の歌壇はかくて連作的傾向が盛になり、數年前の歌壇に於ける一の重要問題として、連作論が論議研討されたことは、從つて子規から直接傳統を引いてゐると云ふべきでもあるのである。

連作は主として歌壇の問題であるが、この私のあわたゞしい敍述によつても、短歌の連作は彼の俳句とも關聯し、子規の根本的な態度から生れ出たものであることを理解していたゞけようかとおもふ。

なほ、子規は實感を尊重したから、おのづから連作體の歌をなしたと單純に說くことは、誤られ易く、彼の藝術及び藝術觀の成長を考慮し、彼の精進の跡を忠實に辿ることによつてのみ、始めて正當に理解さるべきものである。

結論

俳人としての正岡子規の名聲は生前すでに遍く喧傳されてゐた。當時も現代も一部の人の間には、子規に對する非難・攻撃のこゑが叫ばれてもゐる。彼の俳句の眞價に對し、俳論其物に對し、又評論及び創作の態度に關して、非難や不滿の叫があげられてゐる。なるほど彼の態度は餘りに排他的で公平寛大さに缺けてゐたでもあらう。藝術論等も、今から見れば幼稚で、理窟の排斥等いふことも餘りにわかりきつた文學入門であり、彼の所謂美的と言ふ意味は趣味的とでも言ふべき範圍を餘り出てゐなかつた。それ故、作品は血の出るやうな眞實の表白が缺けてゐる等といふことも理想論として言はれないではない。理想的な註文を提出するとすれば、私自身も不滿に思ふ點が數々ある。ありし儘の子規が現在私達の前に現はれても、驚喜したかつたかも知れない。併しながら、俳句の形式に藝術的生命の呼吸を吹きかける事を全く忘れてゐたとも言ふべき、腐敗し盡した當時の俗宗匠との差を考へて見よ。また他の同時代の新派の人々と比べ合せてみよ。そこに子規は嶄然として高所に位置してゐるのではないか。この歷史的觀點を全く離れて、自らの存在が子規の影響をうけてゐた事實も忘れて、自ら高しとして子規に反撥を放つ者があつたならば、誠にあはれむべきである。現代の俳壇に活躍してゐる者の中には、なほ子規門乃至子規の孫弟子といはるべき人々が多い。子規と同時代及びその後の俳壇は、多少に關らずその影響をうけてゐるといふ事實は否定されない。子規



子規系諸雜誌の中

系以外の俳壇の先進も、子規が俳壇革新の最大な功勞者であることは認めざるを得ないであらう。少くとも時代といふものを考慮に入れるならば、彼の爲した事業は大きな意義と價値を有してゐたと言はねばならないのだ。

彼は舊派宗匠の添削を受けたこともあつたが、「芭蕉忌やわれに師もなし弟もなし」と云ふ風に、敢て常師を持たなかつた。古俳人殊に蕪村等の影響は甚大であつたが、自然そのものからも直接學ぶ所が少くなかつたであらう。周圍の人殊に自分と一緒に勵ましあつた友、自分に從つて勉強した人々から、刺激を受け、得た所のものも尠くなかつた。けれども實に彼は不斷の努力、不屈の精進によつて始めて自己の道をきり拓き得たのである。現在の立場からは、その議論は修正せらるべきものがある。幼稚であつたり、誇張に失したりしてゐる部分も少くない。が、その幼稚さはなほ當時の俳句界の革新には不足する者ではなかつた。その誇張は却つて有效に人々の心を革新に向はせたのである。現在彼の句や論に滿足せず、その缺點を容易に指摘し得る人も、さういふ鑑賞批評眼の進歩は、實に子規その人の理論等にふれて啓發させられたものではなかつたか。彼は現在の俳壇の進歩に至る最も大きな踏石の役割を果してゐるのである。しかも彼以上の眞價を十分有してゐる俳論や俳句が幾何我々に示されてゐるであらう。而して何人も子規の熱誠努力に對しては感嘆せざるを得ないと思ふ。子規は俳句方面だけでも永久に文藝史上を飾るに足る事業を殘してゐる。その俳論、その俳句、その俳句研究の仕事、これらを獨立的に離しても、何れも一人前以上の仕事が果されてゐると認むべきである。

而も俳句方面だけに滿足せず、和歌革新の事業に猛進した。數年にして死んだが爲、生前には十分この方面の努力は世に認められるに至らなかつたが、最も根柢的な強い力を歌壇の一隅に植ゑつけたのであつた。當時に於ては、外的に明星派の隆盛に及ばず、死後も明星派の人々や、直文門の柴舟・薫園系統の歌人が歌壇の中心たる觀を呈し、しばらく子規の眞價は衆人から認められずにゐた。けれども彼の蒔いた種は、沃土に芽をふきずんずんと成育してゐたのである。左千夫や節や其他の門下の胸に子規の精神は傳はり豐かな收穫の時期は、子規歿後十年にして到つたのである。子規系と稱することを自らの誇として、子規の精神を祖述してゐる人々、殊に「アララギ」派の歌風は、大正の初頭から漸く注目され、大正昭和にかけては、子規は俳名よりも歌名が喧傳された如くであつた。今後の歌界が如何に變化するとも、子規の事業は明治和歌革新の名に於て永久に輝くであらう。果して子規の歌がどれほどの價値を有するか。歴史的價値のみでなく、眞實尊い生命がその歌にありとするならば、それは如何なる者であるか。これはアララギ派の人々によつて或る點まで闡明されてはゐるが、しかしなほ吟味すべき多くの問題をのこしてゐる。與謝野氏の歌其他同時代の他の歌人とも比較して十分に吟味がなされねばならない。それらの詳密な研究に、今後われ〳〵に課されてゐる問題の一つである。(これは俳句についても同樣である。) 卅四五年に於ける子規・鐵幹の作を比べるならば、私は子規の歌に軍配をあげるものであるが、も少し早い時代を比べてみたら、果してどうか。これらについては未だ俄かに確定的に言へないものがある。又子規の歌には、左千夫や節の實作程の者はないといふ言葉も屢〻耳にするが、果してそれは正しいであらうか。子規より後に、子規の精神を身に着けて進ん

だ左千夫や節に、子規の領分以外に出た作品のあること、子規のよりも優つてゐる作品のある事は、當然の順路ではある。このため子規の眞價は一毫も損するものではない。吾々は一應、左千夫や節の作に、子規より傑れた作のある事を認めるとして、もつと突きこんでそれらを考へてみる必要はないか。彼の「しひて筆をとりて」の作の如きは、神品に近いものをあらはしてゐて、一の究極所と思はれるからである。

彼の歌論盡くを承認するのではないが、所謂名論卓說にみちみちてゐることは、今もたほ嚴とした事實である。萬葉主義を提唱し、實朝・宗武・曙覽・元義の萬葉調歌人を賞揚した、あの歌論だけでも、すでに歌論史上有數の人たる資格を具へてゐるといふべきである。彼の歌論、彼の歌を單獨的に考へても價値が多いのであるが、この兩者が結合し協力して歌壇に働きかけた影響は、その內面的價値にも增して大きなものがあつたのだ。歌の方面だけの子規の事業も、遂に消し難き不滅の光を發してゐると云はなければならない。おそらく彼が明治俳壇で最も大きな存在であつた如く、明治歌壇に於ける子規は、又最大の偉勳者と言ふべきであらうと思ふ。彼は明治歌壇革新の第一人者であり、その歌の中にはまた明治の古典として、得やすからざる逸品とおもふものがある。

和歌方面だけ、俳句方面だけで考へるならば、他に匹敵する人があらう。が、この兩者に於て、子規の如く偉大な事業を殘したものは、絕對に無いのである。

撓まない努力、多方面の才能、偉大な抱負、無限の野心は、病軀を驅つて歌・俳句以外の領分にまで手をのばさせた。小說・新體詩・小品文・漢詩等の創作は、これを示すものである。

生活費を得るため、多方面的野心・才華を充足させるため、はじめ小説を書いて立身しようとした結果です、その後、新聞「小日本」を編輯してゐた際、興味的に筆を執つたし、青年頃有名になつてゐたから、雑誌に頼まれて書いたこともある。が、ここには十分努力したといふわけではなく、つひに独自のものを出すには到らなかつた。文體も着想も多くは舊式で、本質的價値はもとより、文學史的價値にも乏しい。ただ、その或る作品は、彼の小品・随筆と共に、寫生的手法が可成りに徹底され、描寫や句法上、注目されてよいものである。漢詩は青少年時代熱心であつたが、晩年は殆んど作らなかつた。但し少青年時代の漢詩の修養で、俳句や和歌の境地を高めるに利益を得、藝術鑑賞眼を豊富にし得たことも加はつて、晩年は漢詩に対しても堂々たる一家の見を持するに至つてゐる。漢詩の如きは段々文藝界から除外されてゆく運命にあるが、子規がもつと生きてゐて、この方面に力を盡したならば、革新的な新味あるものを注入し、漢詩壇の最後のかゞやきを示したのではなからうか。新體詩は、多く七五調で、特異な藝術境を開拓してゐると云ふ程ではないが、押韻詩といふやうな主張を努力して裏づけ、一時はかなり熱心に作つたのである。古典的な俳諧的な和歌とか俳句等が彼にはふさはしかつたらしいが、その多方面の才と努力のあらはれとして、彼の新體詩方面の事業も一顧せらるべきものである。なほ彼の藝術觀や人生觀を詳しく觀るためには、この外、幸にのこされてゐる多くの文藝批評や書簡・所感・随筆の貴重なる資料がわれ〳〵の自由な閲覧を許されてゐるのであるが、それらの所見は、後の機會に落ちついて纏つてみたいとおもふのである。

彼の文章（その形式的方面）等についても、殆んど述べることが出來なかつたが、各時期々々に於ける文章

を比較的多く引用して置いたから大體如何なるものであるかは知つて載けた筈である。候文あり、なり調あり、口語文ありといふ具合で、各〻おもしろいものがある。修辭等に凝つて内容を疎かにするといふ當時の所謂文章家の弊の餘りみられない點は、珍重すべきである。一句もゆるがせにしないと云ふ風の人ではないが、縱横の才智が不用意に書いたものにもあらはれてゐる。晩年の隨筆等は、秩序なく思ひついたことを書きなぐつたやうな放蕩な所がありながら、隨筆としてかなりすぐれたもので、親しまれる。「墨汁一滴」や「病牀六尺」等には、勿論内容的に子規の人間を赤裸々に描いて、高度の眞實、悲痛な體驗が脈々として波打つてゐるからでもあるが、文章そのものの巧さを稱すべきものが尠くない。「松蘿玉液」の中で、擬古の文を拙いと貶してゐるが、さう言はれても文句のない程、子規には子規としての文章のうまさがあつた。

何と言つても子規は一代の才人であつた。またそれにも增して、異常な努力家であつた。大きな野心家であつた。和歌・俳句に關する彼の業績は、まことに偉大なものであるが、而もその仕事が、歩くことも出來ず、一室に病臥しながら着々築かれたことを思ふと尊く嚴肅な氣持になる。子規は偉人であつたといふ感情が募るのである。

明治文學史上に歌や俳句の占める位置は必ずしも大では無からう。しかし歌や俳句に一脈の清鮮さが流れこみ、多少とも見るべき詩美が復活させられたのには、時代そのものの影響に由るものであると共に、子規等を始めとして、ある少數の具眼者が先頭に立つて倦まず撓まず民衆を教導し、清新の空氣を注入してゐた功に由るものであつて、忘れられてはならないのである。

而して短歌や俳句の讀書市場的價値は大でないが、長い傳統を持つてゐるこれらの短詩形には、私達の祖先の尊い血が通つてゐる。民族の精粹が凝集されてゐる。萬人向きの手輕い創作形式として而も内面に向つてどこまでもその短い形式の中に掘り下げてゆくことの出來る深み——私達の祖先からうけた精髓に更に私達の眞髓を加へて——をも盛り得ることによつて、この形式はおそらく不滅であらう。その形式の美、その形式に凝集される感情の精粹は、日本人の頭から全く忘れられてしまふ等といふことは考へられない。もし少數者の間にでも、短歌や俳句が長く長く生命を保つてゐるとするならば、子規の事業は直接的にそれらの人の胸から胸に生きて傳はるであらう。短歌や俳句の形式が、いつしか直接に人の心を引かぬ時代が到來することが、もしあると假定するも、明治文學史を回顧する人に巨人正岡子規の俤は消し難いものであらう。而してその努力の一生、長い、不自由極まる、苦艱の病牀に、一日の休息なく精進をした、むしろ悲壯なる努力精進の彼の人生こそは、何よりも高い、仰がるべき價値を有するものと云ふべきである。それこそ、いつの時代にも、人間の心を革正し得べき、普遍的な、魂に働きかける靈力を有するものと云ふべきである。

巻末に

正岡子規が明治の和歌・俳句界の偉人だつたといふことは、少年の頃、父や祖父から聞かされたことはあつたが、二十歳頃までは、その作品を直接讀んだことはなかつた。高等學校に入學後、比較的自由な讀書時間を惠まれるやうになつて、漸く文學書耽讀の機會を得たのであるが、短歌は赤彥・茂吉・憲吉等のアララギ派歌人其他當代諸家の集を讀みながら、一方却つて啄木歌集に愛著するやうな氣分がなほ濃厚であつた。それ故、その頃一讀した筈の正岡子規選集等にも、感銘した記憶は更によび起し難いのである。大學の國文科に入つたころから、やゝ作歌に熱をもち、且つ讀書は國文學圏内に制限を受けつゝあつたが、さういふ時正岡子規は一つの尊敬すべき對象として考へられはじめたのである。

子規全集の出版は大きなよろこびであつた。大正十四年、卒業論文として「明治短歌史」を書く豫定だつたが、子規全集を讀み、子規の歩いた道を辿つてゐる中に、子規一人のあとづけだけでも實に容易ならぬことを痛感し、忽卒にまとめた「正岡子規」の拙稿を、あわただしく年末に提出したのであつた。

この貧しい著作は、當時の原稿に多少の取捨を加へて成つたものである。幼稚な不滿足の部分が隨所に目立ち、今、校正を了して、滿ち足らぬ、嫌惡の情がなか〳〵に深い。けれども私にとつては思ひ出多きもので、さすがに喜びの蔽ひ難いものがある。大學に於ける藤村・佐佐木・久松其他諸先生の御講義の態度・方法、また歌壇・俳壇の諸先輩の論・作等によつて、僅かに幼い歩みを踏み出した許りの私は、未だ獨自の道

を言ふ資格はない。殊に本書は自ら謙らぬもので、一種の入門書程度のものとおもつてゐる。たゞ本書の如きものの出版もまた多少必要なのではないかといふ、微かな自負もあるのである。

昨春、藤村・久松兩先生の御斡旋で「明治文學研究叢書」刊行の事が確定した以後、或程度迄滿足されるものに書き代へるべく微力を盡したのであるが、單に全文を清書したといふだけで、十分の改竄を加へる餘裕も根氣もなかつた。この點は、校閲を賜はつた藤村先生をはじめ、讀者諸氏にも詫びなければならない。

本書初稿の際は、アルス版子規全集に依つたが、今度は、引用文等は悉く改造社版の全集によつて校合した。實は子規全集等もなほ多少吟味すべきであるかも知れないが、さういふ基礎的作業に多くの勞力をかけることは第一義ではないと信ずるし、又現在の私にとつては不可能のことでもある。改造社版の子規全集によつたことは、それが子規の最も多くの著作を網羅してをり且つ最も普及してゐて手に入れ易いといふことからで、主として讀者の便宜を考慮した結果である。

附錄の年譜も極めて不完全なものであるし、子規研究文獻目錄は、僅かに一部分を示したものに過ぎず、索引も不備であるが、幸にして版を新にするやうな機會があつたならば、訂したいとおもつてゐる。

本書の出版は、專ら藤村・久松兩先生の御骨折によることである。その上藤村先生からは序文や題簽を頂き、寫眞撮影に關し明治新聞雜誌文庫の宮武外骨氏、友人[illegible]・池田龜鑑[illegible]から種々厚意を得た。こゝに兩先生始め明治文學會同人其他御示教を得た多くの先輩・友人に、感謝の言葉を述べさせていたゞく。

昭和八年春

著　者

正岡子規略年譜

年代	慶應三年(1867)	明治元年(1868)	明治二年(1869)
動静	九月十七日伊豫國松山新玉町正岡家の長子として生る幼名處之助、四五歲にして升と改む。父隼太(佐伯氏の出)三十五歲。母八重(大原氏の出)二十三歲。		母と共に外戚大原家に在る夜、自家燒失。中の川畔の湊町に新築移住。
作品			
時代	三月、將軍慶喜開國のやむべからざるを上奏。五月、兵庫開港の勅許下る。十月、慶喜、大政奉還を上表す。十二月、官制大改革、王政復古を全國に布告。阪本龍馬ら京都にて刺殺さる。 初編「厚化粧萬年島田」(二世春水)完、紅葉、露伴、漱石、綠雨、思案、王堂、梅花、極堂ら生る。望東、野雁ら歿す。	一月、鳥羽、伏見の戰。新に外國と和親を結ぶの令を發す。三月、五ケ條の御誓文發布さる。五月、彰義隊潰る。七月、江戸を東京と改稱。九月、改元、一世一元の制を定む。十月、車駕東京に着す。この年、三井八郎右衞門貿易會社設立。 太政官日誌、中外新聞、江湖新聞等發行さる。闔名諸八犬傳(魯文)訓蒙窮理圖解(福澤諭吉)立憲政體略(弘之)等出づ。美妙、透谷、蘆花、魯庵、紫影、幾太郎、麗水、爲守ら生る。曙覽、言道、節軒、節齋ら歿す。	三月、東京奠都。六月、版籍奉還。七月、官制を改革して太政、神祇の二官及び六省を設置す。九月、慶喜の謹慎を宥す。この年、府縣に小學校を設置、昌平校を改めて大學校となす。東京、橫濱間の電信線成る。 新聞紙印行條例(二月)出版條例(五月)等公布さる。世界國盡(諭吉)西洋事情第二篇(諭吉)等出版さる。眉山、水蔭、桂月、雨江、孤蝶、崗江、青々、千亦、月郊、露月、別天樓、四丁ら生る。小楠ら歿す。

明治三年(1870)	明治四年(1871)	明治五年(1872)
妹律子生る。	十一月十五日、上下著の時金巾の紋付を作り、上下と大小は他より借ひて濟す。倭少なるを以て大小に釣らるゝが如しと云ふ。	三月七日夜、父常尚歿。享年四十歲。
二月、樺太開拓使を置く。三月、集議院を設く。七月、各藩より貢進生を召し大學南校に西洋學藝を修めしむ。十月、英佛普國に留學生を送る。兵部省を置く。又海軍を英國式、陸軍を佛國式に則り、十一月徴兵規則頒布さる。人力車の營業許可(三月)庶民帶刀の禁(十一月)等あり。岩崎彌太郎、九十九商會を起す。後三菱會社と改稱。 貸借會始めて行はる。(一月)横濱毎日新聞創刊(十二月)西洋道中膝栗毛(魯文)眞政大意(弘之)等出づ。小波、乙羽、寛水、臨風、得花、半風、鳴雪ら生る。	一月、郵便規則頒布され、三都の實施を行ふ。七月、廢藩置縣。司法文部兩省設立。十一月、岩倉ら歐米派遣。この年、散髪、廢刀の令出づ。五月、非人穢多を民籍に編す。(八月) 西國立志篇(正直)安愚樂鍋(魯文)會社辨(源一郎)學士のよる讀(三月)等出づ。聖書の翻譯印行。樗牛、抱月、秋水、秋聲、花袋、獨歩、玉茗、古白、勁節、五城ら生る。文雄、隆正ら歿す。	二月、陸海軍兩省設置。三月、神祇省を廢して教部省を置く。八月、學制發布。十一月、太陽暦採用、十二月三日を六年一月一日となす。この年、東京に圖書館及び女學校を設く。品川、横濱間に汽車開通。普く郵便を國内に通じ、東西兩京間に電信通ず。僧侶の妻帶、肉食、蓄髪の禁を解く。(第一銀行許可) 東京日々新聞(二月)郵便報知新聞(六月)等創刊さる。學問のすゝめ(諭吉)其他出づ。藤村、鶴宇、鬼太郎、一葉、信綱、羽衣、隅情、酒竹、臨雪、寶石、雪人、三亭、是人等生まる。龍之ら歿す。

明治六年 (1873)

法龍寺内に設けられたる寺子屋に通學す。この頃か或は少しく以前より外祖父大原觀山に漢籍を習ひ、伯父佐伯半彌に習字を習ふ。

一月、徵兵令布告さる。四月、日淸條約成立。六月、集議院を廢し、事務を左院に屬せしむ。九月、具視ら歸朝。十月、征韓の議破れ、隆盛等挂冠。十一月、内務省設置。この年、耶蘇教禁絕一掃、太陽曆廢止一掃等あり。海底電線沈置さる。

正直ら同人社創設。(二月)明六社設立。(二月)東京假名書新聞(一月)等創刊さる。理學書の刊行多し。通俗伊蘇普物語(溫)横文字百人一首(眞賴)文字の教へ(諭吉)等出づ。

泡鳴、鏡花、梁川、鐵幹、四方太、露月ら生る。知紀ら歿す。

明治七年 (1874)

松山市智環學校に入り、後勝山小學校に轉校通學す。

一月、退助ら民選議院設立建白。愛國公黨生る。二月、佐賀の亂起り、三月平定。四月、征臺の軍起る。退助ら、立志社を起す。十月、淸國と談判整ひ、十二月、撤兵す。この年、初めて西洋紙製造さる。(六月)米の輸出禁止さる(八月)生絲輸出試みらる。(十一月)神戸、大阪間汽車開通。(五月)

歌御會始に一般詠進許可(一月)明六雜誌(三月)讀賣新聞(十一月)等創刊さる。

東京新繁昌記(誠一)社會の說(周)小學讀本等出づ。

虛子、醉茗、敏、小劍、天來、霞村、秀眞、猪之吉、花外、紅綠、鶯娘ら生る。

明治八年 (1875)

四月、大原觀山逝去。享年五十八歲。これより後、土屋久明に就き、素讀を學ぶ。

一月、利通、孝允ら、退助と大阪に會す。四月、立憲政體に關する詔書煥發。五月、千島樺太交換條約を結ぶ。八月、江華島事件起る。

この年、郵便貯金法開始。王子製紙會社成る。

襄ら同志社創立(一月)英學校を開校。平假名繪入新聞、假名讀新聞等發刊。明六雜誌廢刊。國體新論(弘之)等出づ。ミルの「代議政體」譯さる。

風葉、紫紅、米次郎、躬治、純石、旬佛、和壽、海南、鳳骨、鳥堂、㖀石、鳥水、天随ら生る。

蓮月ら歿す。

明治九年（1876）	明治十年（1877）	明治十一年（1878）
		詩を作り、久明の添削を受く。山内傳藏の許に習字に通ひしも此の頃ならん。立花神社に大文字を上げしことあり。
		この夏、初めて漢詩を作る。「洋犬の説」なる文「自笑文草」にあり。「書道獨稽古」なる書を筆寫せしものあり。
二月、朝鮮との修好成る。九月、元老院に憲法取調の一局を置く。十月、熊本・秋月、萩の亂起る。この年、大阪京都間の鐵道開通（六月）三井銀行及び三井物産會社設立（七月）美術學校設立さる。（十一月）一月、熊本花岡山に彈正、猪一郎らキリスト教同盟の誓をなす	二月、隆盛ら兵を薩摩にあげ、九月平定せらる。一月、太政官日誌の頒布を止む。五月、博愛社成立、赤十字社の前身なり。八月、第一回内國勸業博覽會ひらかる。十一月、電話、京濱間に試設さる。夏、コレラ流行。	四月、地方官會議ひらかる。五月、利通刺殺さる。六月陸軍士官學校開校。十二月、陸軍參謀本部設置。東京府會議員第一回選擧行はる。この年、東京及び大阪に株式取引所ひらかる。
東京新誌（四月）等發刊。春雨文庫（春水）等出づ。モンテスキユの「萬法精理」譯さる。有明、天溪、秋江、華園、柴舟・水穗、赤彦、眞、青嵐・素琴、風葉、白星ら生る。息軒ら歿す。	花月新誌、團々珍聞、穎才新誌を始め、法律雜誌・地學雜誌、[illegible]雜誌等出づ。日本開化小史（卯吉）民約論（德譯）、[illegible]氏經濟學、明治現存三十六歌撰等出版さる。[illegible]、[illegible]、[illegible]浪、[illegible]、百穗、瓊音、麥人、左衛門、清白、[illegible]ら生る。千廣、穎則ら歿す。	六月、新富座ひらかる。鳥追阿松海上新話（彦作）八十日間世界一周（忠之助譯）花柳春話（純一郎譯）自由交易日本經濟論（卯吉）通俗民權論（諭吉）、[illegible]（忠保編）志濃夫廼舍歌集等出づ。天眠、[illegible]、[illegible]、[illegible]雨、[illegible]夢、東洋城、晶子、寅彦、[illegible]、[illegible]子ら生る。[illegible]、[illegible]、[illegible]山ら歿す。

明治十二年(1879)	明治十三年(1880)	明治十四年(1881)
景浦氏の許に數學、讀書を習ひに通ひ、屢〻漢楚軍談の話等を聞き喜ぶ。軍談を聞き、稗史小説を借覽し、貸本を筆寫せしも此の前後なり。勝山小學校卒業、松山中學校入學。夏、擬似コレラに罹り、一週日にして癒ゆ。	春より竹村錬卿、三並松友、太田柴洲、安長松南の諸友と同親吟會を起し、毎金曜日夜各人の家に集り、河東靜溪の添削を乞ひ、詩作の勉強をなす。十五年まで繼續。	三並、太田、竹村と共に松山城南八里なる久萬山、岩屋に遊び、一泊して歸宅。
櫻亭雜誌、辨論雜誌等の回覽雜誌を作る。	この年より翌年にかけて、莫逆詩文、五友雜誌、雅懷詩文等の回覽雜誌を作る。	
三月、初めて東京府會開かる。六月、初めて區町村會議開催。八月、嘉仁親王（大正天皇）御降誕。十一月、愛國社同盟組織。十二月、國會開設請願行はる。この年一月、學士會院設立。七月、帝國大學に於て學位授與式行はる。九月、教育令制定さる。 大阪朝日新聞（一月）歌舞伎新報（二月）東京經濟雜誌等創刊さる。高橋於傳夜叉譚（魯文）通俗日本民權眞論（丹羽純一郎）修辭及華文（大槻譯）等出版。新約聖書の邦譯成る。白鳥、荷風、節、月斗、涯浪、登美子ら生る。由清ら歿	四月、集會條例布告さる。五月、民法編纂局を元老院に置く。六月、顯義、十二月、博文、立憲政體に關する議を上奏。十一月、退助ら自由黨組織。この年、十一月、東京鐵道馬車會社設立。 東海經濟新報、六合雜誌（十月）等創刊。春風情話（逍遙）理財原論（清一譯）明治開化歌集（弘綱編）等出づ。白村、孤雁、梅溪、夢想庵ら生る。芳樹、耕玉、季知ら歿す。	警視廳（一月）農商務省（四月）設置さる。五月、裔任、立憲政體に關する議を上る。十月、二十三年を期し、國會開設の詔下る。退助ら、自由黨結黨式をあぐ。この年、三月、第二回内國勸業博開催。七月、明治生命保險會社設立。八月、日本鐵道會社開業。 東洋自由新聞（三月）東洋學藝雜誌（十月）等創刊。鳥衙月白浪（默阿彌）政理叢談（兆民）小學唱歌集等出版。草平、鼎、孝太郎、葉舟、汪洋、乙字、綠、英子ら生る。式部、忠秋ら歿す。

明治十五年(1882)

八月十八日竹村と共に永田村に武市庫太を訪ひ、二泊して歸る。又大洲に遊び四五泊せしことあり。
この頃東都遊學熱高し。
この冬、諸友と民權自由雜誌を作らんとして成らず。
夏、コレラ松山に流行。

六月下旬、詩文を輯め「自笑文學」を作る。
七月、東都三並良宛ての書簡に、始めて作れるといふ和歌一首見ゆ。
十二月の演說稿「自由何クニカアル」等「無花果艸紙」中にあり。

一月軍人に五ケ條の勅諭下る。二月博文、憲法制度取調の爲歐洲に派遣さる。三月重信ら改進黨組織。四月退助傷けらる。七月京城のわが公使館暴徒に襲はる。十一月退助、象二郎、巡歐の途に上る。十二月福島事件あり。この年、日本銀行創立、十月東京專門學校開校。三月上野動物園ひらかる。九月、第一回繪畫共進會開催。

時事新報(三月)自由新聞(六月)等創刊。虛無黨退治奇談(忠之助譯)民約譯解(兆民譯)美術眞說(フエノロサ)人權新說(弘之)新體詩抄等出づ。
未明、長江、三重吉、雨情、生馬、茂吉、水巴、青峯、比露思、穎ら生る。千浪、松塘、魚貫ら歿す。

明治十六年(1883)

この少し前頃より演說に熱中、五月諸友と共に松山中學を退校す。六月、叔父加藤恆忠の書に接し、上京。はじめ赤阪の須田學舍に入り、後、共立學校に入學す。上京後、はじめて人情本に親しむ。

上京途中までの紀行文「東海紀行」其他の文章あり。

四月、陸軍大學開校。六月、退助、八月、博文歸朝。九月、徵兵令改正。帝國教育會成立す。
この年、東京電燈會社(五月)神戸株式取引所(七月)淺野セメント會社(十二月)設立。

四月、新聞紙條令改正、七月、官報發行さる。經國美談(龍溪)維氏美學(兆民)學問の獨立(諭吉)天賦人權論(辰猪)東京大家十四家集(元瀞編)等出づ。
直哉、雨雀、白川、次郎、御風、蕭々、光太郎、甲之、能成、東明、夕暮、洸ら生る。其觀ら歿す。

明治十七年(1884)

親戚藤野方に泊し、始めて東京にて新年を迎ふ。七月大學豫備門に入學。夏進文學舍に通ひ、英語を勉强す。共立學校にては莊子の講義を聞き、興味をかんず。龍溪の「經國美談」等を愛讀す。

この年より隨筆「筆まかせ」を草す。

二月、大山巖ら兵制視察のため歐洲出張。五月、區町村會法を改正す。七月、華族令を定む。九月、加波山事件決起。十月、自由黨解黨。十二月、京城の變あり。此年、名古屋事件、秩父一揆等あり。秀英舍職工勞働組合を組織す。五月、大阪商船會社成立。野球行はれ始む。

茂樹ら日本講道會設立。伊藤定憲、壯士芝居を始む。かなのくわい設立。春窓綺話(誠一譯)春鶯囀(直彦譯)牡丹燈籠(圓朝)文明東漸史(鳴鶴)等出づ。
律、豐隆、星湖、井泉水、暮鳥、秀湖、[illegible]、[illegible]月、白[illegible]ら生る。[illegible]北、仙果、春盛ら歿す。

明治十八年 (1885)

神田猿樂町の下宿にて新年を迎ふ。學年試驗に落第。夏、はじめて歸國、井手眞棹に和歌を問ふ。九月、「書生氣質」を讀み、傾倒す。下宿料停滯のため大晦日に三並良の下宿に逃る。この年、春頃哲學志望を目的とせり。

この年より俳句を作る。「寒山落木」には七句を存す。その他の文章は主に「筆まかせ」中に存す。

一月、大山ら歸朝。四月、天津條約成る。十月、大井憲太郎ら朝鮮に事をあげんとして捕はる。十二月、新官制の組織成る。遞信省設立さる。この年、日本郵船會社設立(十月)婦人の束髪始まる。

一月、ローマ字會起る。三月、硯友社結成、我樂多文庫を出す。中央學術雜誌(三月)女學雜誌(七月)都新聞(九月)等出づ。當世書生氣質(逍遙)佳人の奇遇(四朗)小說神髓上卷(逍遙)文學論(長雄)十二の石塚(半月)等出づ。實篤、白秋、杢太郎、秀雄、牧水、善麿、秋聞、介春、萬里、泰三、笙、放哉、雄子、光子ら生る。三世種彥歿。

明治十九年 (1886)

三並の下宿にて新年を迎ふ。四月、同宿の淸水則遠、脚氣にて急逝、種々奔走す。夏、久松定靖(舊藩主子息)に從ひ、日光にあそぶ。秋、米山保三郎來訪一泊、哲學を談ずるを聞き、畏敬の念を起す。

三月、帝國大學令公布さる。六月、明治學院創立。十一月、萬國赤十字條約に加盟。十二月、靜岡事件あり。

逍遙ら演劇改良會を設立す。反省雜誌(一月)大八洲學會雜誌(七月)やまと新聞(八月)東洋學會雜誌(十月)等創刊。演劇改良私考(正一)演劇改良意見(謙澄)言文一致(高見)雪中梅(鐵腸)新體詞選(美妙)等出づ。潤一郎、啄木、千樫、勇、紘二郎、武羅夫、利玄、嘉香、夕咲、鐵衣、石鼎、零餘子、不二子、茂子ら生る。二世春水歿す。

明治二十年 (1887)

神田の下宿にて正月を迎ふ。四月、高等中學寄宿舍に入舍。七月歸省、三津濱に大原其戎を訪問、俳諧を問ふ。九月上京。十二月一日、常盤會寄宿舍創立され、給費生となる。この年の暮、「一々會」を作り、同級生の演說の練習をなす。

三月、金剛石の御歌下賜さる。四月、假裝會の醜聞流る。五月、井上馨各國公使と條約改正會議を開く。學位令公布さる。七月、條約改正中止。この年十年、音樂學校開設。

四月井上邸にて演劇を天覽せらる。十二月新聞條令改正。國民之友(二月)を始め、以良都女、哲學雜誌、出版月評等創刊。新粧の佳人(南翠)浮雲(四迷)日本道德論(茂樹)新日本の青年(蘇峯)國學和歌改良論(義象、由之)等出づ。有三、善藏、瀧太郎、幹彥、迢空、一碧樓、普風、かな女ら生る。直助ら歿す。

明治二十一年 (1888)

高等中學寄宿舍にて新年を迎ふ。夏休みに、向島長命寺境內月香樓に寓す。八月、横須賀、鎌倉方面旅行、鎌倉にて血を吐く。秋、常盤會寄宿舍に入舍、新海非風と同室たり。この前後數年ベースボールに耽る。

夏、向島假寓中、和歌俳句其他を作る。七艸集これなり。學校の作文に「一川の秋けしき」「秋山行」等を草す。其戎宗匠の發行せる卷に子規の句錄さる。活字となるもの〻始ならん。

四月、樞密院設置、市町村制公布さる。八月、海軍大學設置さる。十一月、大隈外相、條約改正に着手。十二月、高島炭坑事件。この年弘之ら博士號をうく。五月、哲學館(七月)東京美術學校(十月)創立。

宮中御歌所設置(六月)二月、政教社結成、日本人創刊。五月、我楽多文庫公賣さる。めざまし新聞、東京朝日新聞と改稱さる。(七月)大阪毎日新聞(十一月)を始めとして、都の花、大和錦、少年園、明治文庫等創刊さる。夏木立(美妙)あひびき(四迷)宗教革命[illegible]論(圓了)孝女白菊の歌(直文)和歌を論ず(萩軒)等刊行。[illegible]彌、美郎、武雄、萬太郎、柳虹、元麿、民藏、篤二郎、阿佐緒、吉志子ら生る。芳岸、[illegible]、行[illegible]ら歿す。

明治二十二年 (1889)

常盤會寄宿舍にありて新年を迎ふ。四月、水戸方面旅行。內藤鳴雪、舍監となる。五月九日夜喀血。六月、五百木飄亭入舍。七月歸省、十月、不忍池畔に寓す。十二月再び歸國。

四月、舍生の文集「眞砂集」中に「詩歌の起原及び變遷」を載す。活字となれる文章のはじめならん。言志會を結び、鳴雪、飄亭らと漢詩その他の韻句を試みしは、この秋頃ならん。「筆まかせ」の文等やゝ分量多きを加ふ。

二月、憲法發布。七月、東海道線全通。十月、條約改正につき御前會議開かる。十一月、皇太子册立。この年、五月、博物館・東京、京都、奈良に設立。十一月歌舞伎座落成式。十一月、[illegible]。森文相刺殺され(二月)大隈外相傷けらる。(十月)

二月、新聞「日本」・新小説等の創刊を始として、しがらみ草紙(十月)其他創刊。我楽多文庫は文庫と改題(三月)。新著百種刊行され始む。色懺悔(紅葉)風流佛(露伴)蝴蝶(美妙)細君(逍遙)[illegible]竹(草村)於母影(鷗外ら)[illegible]等刊行。寛、暉星、雷吉、万太郎、實篤、健、[illegible]、十三郎、杉[illegible]、龍之介、英二ら生る。作造、直吉、[illegible]ら歿す。

明治二十三年(1890)

郷里にありて新年を迎ふ。一月上京、七月歸省、八月下旬大津附近の勝を探り、九月上旬歸京。

この年、碧梧桐との交遊はじまる。

九月、ハルトマンの美學をみる。

風流佛(露伴)を讀み、傾倒せしは、この年ならんか。

この年、執筆せる文章多く「大部分一筆まかせ」中にあり。學期試験、學年試験のため作りし論文等も「無花果艸紙」中にあり。歸省中、松山の佛教雜誌「法の雨」に一雷哉二篇を寄稿す。

二月、金鵄勲章創定さる。四月、陸軍大觀兵式擧行。七月、衆議院議員選擧施行。十月、教育勅語降下。十一月、帝國議會召集さる。この年四月、はじめて火災保險會社設立。七月、國學院創立。社會問題研究會起る。

國民新聞(二月)等創刊、六月、江戸紫創刊、十二月廢刊。日本文學全書、日本歌學全書等板行され始む。一口劍(露伴)舞姫(鷗外)日本韻文論(美妙)詩歌論一班(外山)詩歌の精神及餘情(忍月)千代田歌集(弘綱)日本文學史(參次ら)等出づ。與志華、碎花、省吾、耿之介、惣之助、邦子ら生る。冬道、襄ら歿す。

明治二十四年(1891)

常盤會寄宿舍にありて新年を迎ふ。春季學の試験に苦しみ向島木母寺境内茶店に寓する事三日、勉強の傍俳句和歌を作る。

六月學年試験を放擲、信濃木曾方面を巡りて歸國。歸省中俳句會をひらく。

八月下旬歸京、追試験準備のため大宮公園内萬松樓に十日許り寓す。漱石、鎌倉ら來り泊す。

十二月、本鄕追分三十番地に一家を借り、小説「月の都」の執筆に耽る。

三月碧梧桐上京、常盤會寄宿舍に入りしも夏歸國再び松山中學に入る。五月虛子始めて書を寄す。秋、[illegible]亭ら青山龍巖寺に句會を催す。

この冬、「俳句分類」に着手す。「莊子を讀む」「老子を讀む」「源氏物語と枕草紙との區別」「成務天皇以前の日本文學」等を大學の論文として書く。

一月、兆民ら四十餘名自由黨を脱す。五月、露國皇太子大津にて傷けらる。九月、上野青森間に汽車開通。十一月、大隈、板垣會見、改進、自由兩黨聯合の機熟す。衆議院第一回解散。

この年、濃尾大地震(十月)あり。駿河臺ニコライ堂成る。(三月)

川上音次郎、新劇板垣退助上演。(五月)

早稻田文學(十月)を始めとして、文學世界、なにはがた、史海、葦分船、千紫萬紅、青年文學等創刊。

油地獄(綠雨)伽羅枕(紅葉)五重塔(露伴)黃金丸(小波)水沫集(鷗外)沒理想論(逍遙)早稻田文學の沒理想(鷗外)眞善美日本人(雪嶺)新體梅花詩集(梅花)青年唱歌集(美妙)新說歌がたり(秋香)新撰歌典(直文)言海(文彥)等出づ。

正雄、精二、四郎、香村、百三、犀星、文明、襄子ら生る。

實美、弘綱、敬宇、三溪、枕山、梅花ら歿す。

明治二十五年(1892)

駒込追分の家にて新年を迎ふ。
一月五日、小說會。錬卿、非風、飄亭、古白等會す。
この頃競吟、何々十二ヶ月等を試み漸く句作に熱心す。
二月下旬露伴を訪問、「月の都」の批評をきく。
二月末、下谷區根岸八十八番地に移る。
學年試驗に落第、七月歸省。
八月上京。
十一月家族出迎のため京阪に赴き、京都に愚庵和尚を訪ふ。十二月一日、「日本」入社、出勤。
この春、鳴雪俳句に志す。
九月、錬卿兵庫縣に赴任。
十二月初旬、子規、始めて伊藤松宇にあふ。

二月「月の都」成る。この年戲文「一重ざくら見遣」等の作あり。
城南評論(四月)に「向井去來」早稻田文學(十月)に「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」をかゝげし外、「日本」に紀行文、俳話等を執筆。即ち「かけはしの記」(五月廿七日—六月四日)を最初として、大磯の月見、旅の旅の記、日光の紅葉、舊都の秋光、日比谷八景、馬糞紀行(高尾紀行)等の紀行文以外、獺祭書屋俳話、識晩閑話等發表。入社後執筆掲載の「俳句時事評」等も注意すべきものなり。

二月、衆議院臨時總選擧行はる。四月、條約改正調査委員任命さる。十一月、軍艦千島、英船と衝突沈沒し、乘組員七十餘名溺死。
この年、東洋社會黨成る。

萬朝報(十一月)を始め、歌學、歌林、明治の歌、小櫻緘等創刊。
三人妻(紅葉)即興詩人(鷗外譯)二日ものがたり(露伴)罪と罰卷一(魯庵譯)詩歌論 操山 香川景樹の歌論 操山 國歌の韻(誠實)國詩について(保三郎)文學一斑(魯庵)我觀小景(雪嶺)歌の栞 信綱 和文學史(維樹 文學者小衣(矢一)等出づ。
龍之介、成吉、春夫、八十、大學、春月、陽吉、秋櫻子、三幹竹ら生る。

明治二

一月「椎の友」の諸氏と會合し始む。この頃より屢々句會あり。
二月三日より「日本」文苑に俳句をのせ始む。
三月下旬「俳諧」第一號成る。二號にして廢刊。
二月、四月、病のため社を

この年、早稻田文學(一月に「文學雜談」、同九月に「文學者十二ヶ月」俳句)を發表せしが、大部分は新聞「日本」に發表せり。「文界八つあたり」(三月廿二日—五月廿四日)「芭蕉雜談」(十一月十三日より)の

一月、全國新聞記者團、新聞條例改正運動を起す。二月、文官俸給の十分の一を製艦費に填充の詔下る。三月、郡司大尉、千島開拓に向ふ。六月、福島中佐、單騎シベリアを横斷して歸朝。下瀬火藥を發明す。八月、帝國大學官制公布さる。

直文の淺香社成立。民友社の十二文豪、博文館の世界文學、帝國文庫等出はじむ。文學界、二六新報等創刊。都の花廢刊。

十六年 (1893)

休むこと多し。
六月は病のため、新聞に執筆せるもの「時事俳句」のみ。
五月「獺祭書屋俳話」上梓。
七月十九日、奧羽旅行の途に上り、翌月廿日正午歸京。
この年、俳句に熱をあげ、句作の分量甚だ多し。
虛子三月末上京。四月京都に歸る。飄亭、除隊歸國。

二つの評論及び「はて知らずの記」(七月―九月)等は最も注意すべきものにて、「去來調十二ケ月」其他古俳人の作に擬せし作、或は屢ゝ發表せし「俳句時事評」等は主なるものなり。

心の闇(紅葉)人生に相渉るとは何の謂ぞ(透谷)內部生命論(透谷)吾國の史劇(逍遙)靜思餘錄(蘇峯)枕頭山水(露伴)松田松陰(蘇峰)國詩の形式に就いて(操山)敎育と宗敎の衝突(哲次郎)天地初發(半月)湖處子詩集(湖處子)歌學會歌範評論、胤平、新體詩學、建樹、應用歌學(建樹)日本文人傳(建樹)百人一首講義(信綱)俳諧史談(庚午太郎)等出づ。
泉三郎、千秋、正夫、宗治、信行、哀草果ら生る。
默阿彌歿す。

明治二十七年 (1894)

二月一日、上根岸八十二番地に轉居。二月十一日「小日本」發刊、編輯に從ふ。七月廢刊、「日本」に復歸。秋來、屢ゝ郊外に遊び、俳句寫生につとむ。
一月、飄亭、虛子上京。虛子、二月退京。
一月、露月、不折と知る。共に「小日本」の仕事に携はる。
九月碧梧桐、虛子、仙臺に移る。十一月高等中學退學、上京。虛子は非風と同居、碧梧桐は子規庵に寓し、後共に本郷の下宿に移る。
この年、子規、酒竹、紫影、嶺雲らと共に句作す。

この年「小日本」に短歌數回、小說三篇掲載せしことなど注意すべし。松山發行の田舍文學(二月)に「時雨紀念序」を寄稿せし外、主として「小日本」「日本」に發表「日本」發表の前年來の「芭蕉雜談」(一月三日―二十二日)及び「文學漫言」(七月十八日―八月一日)の評論は代表的なるものなり。その他「日本」には上野紀行、そゞろありき、不忍十景、王子紀行、間遊半日、總武鐵道、或は「地理的觀念と繪畫的觀念」「字餘りの和歌俳句」等を掲ぐ。「小日本」には、發句を拾ふの記、俳諧一口話、亡友山寺梅龕等を發表す。

三月、金玉均刺殺さる。六月、朝鮮に亂起る。八月、征清の勅下る。九月、大本營を廣島に進めらる。
この年六月、高等中學を高等學校と改稱。大學に於てケーベル、ショウペンハウエル等の哲學を講ず。

筑波會生る。
東京文學創刊。しがらみ草紙廢刊。
瀧口入道(樗牛)桐一葉(逍遙)透谷集(透谷)日本風景論(矧川)湖上の美人(雨江譯)歐米名家詩集(建樹輯)明治歌集(信綱)征清歌集(信綱)亡國の音(鐵幹)明治大文學史(建樹)等出づ。
政二郎、鐵兵、嘉樹、洋次、茂索、孝作ら生る。
魯文、透谷、幹次、金羅ら歿す。

明治二十八年 (1895)

戰時人乏しく議會係となりし事あり。從軍の志止み難く、二月遂に決す。三月三日、東京出發、六日廣島に至り、一度松山に歸省、二十一日從軍許可、出發に立ち休戰、四月七日出發の命を受け、十日宇品發、大連金州の方に赴く。五月十七日歸航の船中にて喀血。二十三日、神戸病院に入院。七月廿三日退院、須磨保養院に約一ヶ月、鄕里に約二ヶ月靜養、十月十九日松山出發、月末歸京。上京の途にリウマチを患ふ。神戸病院入院中は母、碧・虚、主として看護に從事す。知友、「日本」關係者等の來訪多し。六月、一家須磨に移住の計畫あり、成らず。松山歸住中屢〻俳諧に耽る。松山松風會の起原なり。歸京後詩作に耽る。この年、「獺祭書屋俳話」再版出づ。增補の最多し。この年四月、古白自殺す。

「逍遙遺稿の後に題す」を「逍遙遺稿」のため執筆せし以外、主として「日本」に發表。「俳諧大要」(十月—十二月)を始めとして、五大畫家百評、養痾雜記・俳三昧等の隨筆評論及び、新体一枝、陣中日記、思ひ出るまゝに等の從軍所見を、その主なるものとす。「[illegible]吟古調」(十二月)等を發表せしも注意さる。病氣のため、發表せしもの多からず。

三月、李鴻章、下關に至り、博文・宗光の應接す。四月講和條約成る。五月、三國干涉の結果、遼東半島清國に還附。六月、天皇、東京に御還幸。

秋聲會設立。帝國文學、太陽、文藝倶樂部、青年文等創刊。少年園、文庫と改題。「たけくらべ」「にごりえ」(一葉)「不言不語」(紅葉)「書記官」(眉山)「變目傳」「黒蜴蜓」(柳浪)「夜行巡査」「外科室」(鏡花)「三味線」(緑雨)「女房殺し」(水蔭)あり。[illegible]山の美人「南汀」[illegible]の詩について[illegible]月[illegible]集「正[illegible]」俳書風聞記(第十)俳諧文圃記(第十一号出づ。[illegible]、[illegible]ら生る。[illegible]、[illegible]二、[illegible]ら歿す。

明治二十九年 (1896)

僅に歩行するを得、一月、久松伯凱旋の宴に連る。三月、診察の結果、腰痛はリウマチに非ざるを知る。俳人折々來訪小集を催す。四月、僅かに立つを得、車上、上野の櫻を見る。夏頃より毎月子規庵に俳句小集を催す。九月五日、上野三宜亭新體詩人會に出席。仲秋の明月を上野元光院に賞す。十一月胃痙を病む。十二月某日開花樓に平家琵琶をきく。秋、露月送別會を兼ね、目黒に栗飯を食ひし事あり。中山寺に遊び船橋に一泊せし事あれど時日明かならず。この年二月、紅綠上京。十月仙臺の河北新聞にゆくを送る。九月、四方太來訪。十二月、極堂上京、ホトトギス發刊のことを定む。

二月以後、早稻田文學に、毎號俳句をのせ、「めざまし草」にも出しぬ。又「日本人」に主として新體詩を載せしこと等注目さる。其他、「めざまし草」に二回歌仙を掲げ、「早稻田文學」に俳句返却届、新年二十九年度、文學(特に文學は注意すべし)發表。「世界の日本」に「我が俳句」を出したり。又鐵幹の「東西南北」に序を執筆。他は大部分「日本」に寄稿せしものにて、隨筆「松蘿玉液」「俳句問答」を連載せしを始めとして、何々體の試みを發表、「作家評家」「戯曲類と四季」「獺祭書屋俳話正誤」其他を發表せり。

めざまし草を始めとして、新聲、世界の日本、いさゝ川江湖文學、俳諧秋の聲等創刊さる。新小説再刊。多情多恨(紅葉)今戸心中(柳浪)照葉狂言(鏡花)寢白粉(風葉)牧の方(逍遙)十五少年(思軒譯)片戀(四迷譯)ポオル、ヹルレエヌ(敏)文學その折々(逍遙)月草(鷗外)東西南北(鐵幹)花紅葉(雨江ら)俳家系譜(酒竹)俳諧獨學(彥輔)等出づ。健、味津三ら生る。彥作、一葉、賤子、半牧、鐵腸ら歿す。

四月、拓務省設置。民法第一、二、三編制定さる。八月、露國、滿洲鐵道敷設權を獲得す。この年三月、富士紡績會社設立。葉・煙草の專賣法公布さる。四月、音樂學校第一回演奏會あり。

一月、子規庵に新年發會式を催し、後、懇親會を長蛇亭に行ふ。一月五日、ホトトギス初號松山より出づ。

この年、早稻田文學に、一月から六月まで俳句を發表。新小説新體詩一篇を載す。新小説に「花枕」(小説)を發表。新體詩は、「日本」及び「日

一月、勞働組合期成同盟會成る。三月、金貨本位制を布く。足尾鑛毒事件起る。四月、職工義友會生る。六月、古社寺保存法公布さる。九月、拓殖務省廢止。この年、日本勸業銀行開業。社會問題研究會成立。

明治三十年 (1897)

二月十八日、露石上京歡迎會の小集を催す。
二月十九日、廿七日、佐藤三吉博士來診、同博士の手術を受く。五月、病狀惡し。
病牀に水滸傳をよみ始む。
六月初旬より一ケ月許り、加藤恒忠の配慮にて看護婦をやとふ。
七月から十二月まで概ね例會を開きし外、七月、九月には臨時俳句會を催す。又俳句分類に從事せし記事屢く見ゆ。
十月、碧、虛と共に小說會を催す。
十二月廿四日、はじめて子規庵に蕪村忌を修す。會者二十人。
この年、月見草、曼珠沙華等の小說をかきしも、發表されず。
一月、碧梧桐、天然痘にて入院。二月、虛子歸省。五月、古白遺稿出版。九月六日、上京中の漱石熊本にかへる。句を以て送る。

「日本人」にのせたり。「日本人」には、外に「新體詩押韻の事」及び「藤野古白」を揭ぐ。他は主として日本新聞とホトトギスに發表。
「日本」に發表せるもの、「明治二十九年の俳諧」「俳人蕪村」を始として、「俳句と漢詩」、「一眼觀と美術」、「詩畫狐を讀む」、「病牀苦吟」、「吉野拾遺の發句」、「若菜集の詩と畫」、「與謝蕪村を評す」、「撰のあまり」、「賤の涙」等あり。
「ホトトギス」には前年に發表せる「文學」(「日本人」所載)の一部、即ち碧、虛、鳴雪等に關する評論を轉載し、又「俳人蕪村」を「日本」より轉載せるを始として「試問」、「俳諧反故籠」等を發表せり。俳句分類も少しく載せたり。
この年三月、新詩會の詩集「この花」出で、子規の詩、數篇みゆ。
七月、三松堂より「俳人一茶」刊行。「一茶の俳句を評す」の文、卷末にあり。
「行脚俳人芭蕉」(金尾文淵堂版)は前年出版とされしも、おそらく、この年三月の誤ならん。

新著月刊、日本主義、其他創刊。
俳諧文庫等刊行さる。
金色夜叉(紅葉)源おぢ(獨步)うき草(四迷譯)小公子(賤子譯)春雨傘(櫻痴)、杏子鳥(孤城)清月(逍遙)明治の小說(樗牛)日本主義(樗牛)天地玄黃(鐵幹)抒情詩(獨步、國男ら外五氏)若菜集(藤村)雪月花(建樹)あま蛙(綠雨)增補蓮月歌集(一平編)國歌新論(謙澄)連俳小史(政一)列傳體小說史(逍遙、不倒)與謝蕪村(酒竹)新派俳家句集等出づ、
義三郎、與一、古實、直得、千代ら生る。
思軒、周ら歿す。

京都帝國大學開設等あり。

明治三十一年 (1898)

一月十五日、子規庵に蕪村句集輪講第一回をひらく。會者、碧、虚兩人。
二月より「日本」新聞に論と作とを併せのせ、和歌革新に邁進す。
三月十七日、腕車に乗り、根岸郊外を巡る。
三月廿五日、子規庵にはじめて歌會をひらく。
五月に入り、果物の常食を廢す。但し前年に比し少康を得たり。
七月十三日、河東銓宛の書簡に墓誌銘同封。
九月十一日、外務省官舎に叔父加藤を訪ひ、歸途神田の飄亭居に寄る。この月、腰部痛み、坐する能はざることあり。
中秋の明月を元光院に賞し百句を以て記に代ふ。
十月廿三日、上野元光院に臨時俳句會を催す。會者十三人。
十一月十一日夜、俄かに發熱、四十度に及ぶ。
十二月廿二日、虚子・小鴨を贈る。盥に浮かせて室内

「日本人」に新體詩を二度發表し、「新文學」(三月)に「曝背閑話」、「中學新誌」(八月)に「すゞし」、「反省雜誌」(八月)に「十年前の夏」を發表せし外、主として「日本」及び「ホトトギス」に發表せり。
「日本」に「歌よみに與ふる書」以下の歌論、「百中十首」以下の歌を多く發表せしことは殊記すべし。
この外、歌に關しては、人々に答ふ、あきまろに答ふ、五七五七七、一つ二つ(歌評)、賀の歌、等を發表。
俳句につきては、明治三十年の俳句、俳人の手蹟等をのせた。なほ閑人閑話、美術學校に就きて、其他あり。
ホトトギスには、前年につゞき、俳人蕪村、試問、俳句分類等を連載し、二月より蕪村句集輪講を掲載し始め、四月より「或問」をのせ始めた。殊に東京より雜誌發行せらるゝに至り、新體詩、句合、連句、短文等をも載せ、卜筮十句集を評

四月、福建省不割讓條約、日清間に成る。東京市民、奠都三十年祭を行ふ。六月、保安條令廢止。憲政黨はじめて組織さる。七月、清國政變により、康有爲ら日本に亡命。十一月、上野公園に西郷の銅像除幕式行はる。十二月、萬國郵便條約公布。

日本美術院創立。いかづち會結成。
續日本歌學全書出版され始む。
心の華創刊。文學界、國民の友、早稻田文學廢刊。
戀慕ながし(風葉)不如歸(蘆花)辰巳巷談(鏡花)黄菊白菊(桂月)一葉舟(藤村)夏草(藤村)新體詩歌自在(秋香)ワルト、ホイットマン(樗牛)宗教と文學(綱三)英獨詩文研鑽(五郎)最近英文傑作集(十吉)日本文學史要(政一)支那文學史(臨風)新俳句(碧梧桐ら編)俳句入門(虚子)ことばの泉(直文)等出づ。
利一、士郎ら生る。
禮嚴、重嶺ら歿す。

に置く。
この年、十月ホトトギス第二卷第一號虚子によりて東京より發行さる。

す、雜感・古池の句の辨、蕪村と几董、吾幼時の美感、寫生寫實、其他この誌に發表のもの多し。
この年三月、新俳句（民友社版）上梓、序文を草す。

明治三十

黒の鴨を羯南居の池に放つ人に負はれて之を見る。
一月八日、俳句發會、會者十五人、終つて宴を開く。酒間福引あり。
この月「俳諧大要」（俳諧叢書第一編）出版。この月、秀眞・麓ら四人、三十番歌合を作り判を乞ふ。
三月十四日歌會、歌人を加へたる歌會の始なり。
この月中旬、神田に虚子を訪ひ、不在。飄亭居に蒲焼を食ふ。この年最初の外出なり。
五月、病惡し「林檎食ふて牡丹の前に死なんかな」の句を作る。二十日すぎてやゝ病勢退く。この頃芭蕉翁の手紙をみる。五、六兩月は俳句の外「日本」に執筆なし。六月、久良岐、

この年、中興五傑集の序を草し、「車百合」のため「車百合につきて」の文を寄せし外、大部分は「日本」と「ホトトギス」に發表。
「日本」には、歌、俳句、歌會記等以外、病牀譫語、萬華集十六、曙覽の歌、歌話艶き和文、室内の什物、本郷まで・小石川まで、其他數篇を發表した。
「ホトトギス」には、蕪村句集講義、俳問俳答（四月より）俳句分類等を連載せしをはじめとして、毎月短文を發表し、和歌、新體詩等も時折出した。
ホトトギス發表の主なるものは、この他、俳句新派の傾向、明治三十一年の俳句界、俳句の初歩、文學美術評論・俳人去來・幻住庵の

三月、著作權法公布。五月、山東省に義和團起る。七月、條約改正實施。十一月、圖書館令公布。佛國、廣州灣を租借す。
この年、東京大阪間に長距離電話開始。ヘーグに萬國平和會議開催。潜航艇發明さる。

わかな會設立。
反省雜誌、中央公論と改題。
續帝國文庫刊行され初む。
己が罪（幽芳）おぼろ夜（[illegible]）蛇いちご（天外）湯島詣（鏡花）煙霞療養（紅葉）審美綱領（鷗外・西崖）時代管見（樗牛）時代の精神と大文學（樗牛）天地有情（晩翠）暮笛集（泣菫）やまとにしき（信綱撰）新撰詠歌法（羽衣）國歌評釋卷一（羽衣）俳句評釋（碧梧桐）中興五傑集（松宇編）丸山作樂傳等出づ。
康成・清一郎、百合子ら生る。
作樂、良吉ら歿す。

二　年　(1899)

寫眞機を携へ來り、緣側に出でゝ子規撮影。
八月二十三日、歌話を輟せんとして、宗武の歌をみ感嘆す。歌話を草して後、車にて虛子宅を訪ふ。同廿八日、杖にすがりて羯南の許に至る。この頃發熱の苦を紛らさんため短册に手習などす。十月、虛子を、十一月、麓宅及び秀眞宅を訪ひ、十月、道灌山にゆき、十二月不折の畫室開にゆきしことあり。
この年の蕪村忌には會者四十六人、未曾有の盛會。秋より書をかき始む。十二月俳人蕪村、俳諧三佳書刊行。
二月、秀眞、麓訪問。十月青々大阪より上京、ホトトギス編輯を助く。

事、俳句と聲、俳句評釋を讀む、牡丹句錄、猶の雫、ゐざり車、雅號につきて、俳諧三佳書序、熊手と提灯等なり。
心の花に秀眞や久良岐により子規の意見發表。

明

一月十六日、淺井忠伯渡歐送別會を子規庵に開く。
三月、小說「我病」を草す。
蕪村句集講義冬の部上梓。
四月十五日、はじめて萬葉集輪講會を催す。この月粘土にて器を作り、又庭上に

この年、「明星」に一回、歌を發表、「國力」に自作の歌及び短歌會稿を、「俳星」に歌及び俳句等を、「大帝國」に歌及び俳句を、「心の花」に歌及び散文「歌と畫」を、又「種ふくべ」に、「俳諧上

三月、未成年者喫煙禁止法布かる。五月、皇太子殿下御成婚式をあげらる。六月、政友會組織。七月、第五師團渡清。八月、聯合軍によりて北京陷落。
この年、救世軍、娼妓廢業のため奔走。

東京新詩社創立。
明星(四月)はじめ、歌舞伎、太平洋、小天地等創刊さる。

明治三十三年 (1900)

大會龍を揚げて思む。廿九日始めて外出、左千夫を訪問。五月十六日、[illegible]會小集。六月、麓宅の歌會にゆく。旋頭歌を作る。七月、「日本」週一に歌を募る。選者に歌を募るの最初なり。八月十三日喀血。廿八年以來の多量なり。この日、元義の歌をよみ驚ず。九月、明星に子規攻撃の文載る。十一月廿日夜碧梧桐宅に蕪村句集輪講行はれ、子規は加はらず。この月以來、子規庵の集會を廢し蕪村句集輪講のみは隔月子規庵に催すことゝす。この頃より寫生文に熱心となり「山會」を行ふ。十二月廿七日第二回[illegible]。病漸く[illegible]、[illegible]。七月[illegible]、一[illegible]三年[illegible]來る。[illegible]月末に[illegible]。五月、[illegible]六月より[illegible]。[illegible]の年[illegible]津[illegible]。[illegible]。

の京と江戸」を發表した。その他太祇全集に「炭太祇」の一篇を附したが、大部分は「日本」及び「ホトトギス」に發表せしものなり。「日本」には、短歌愚考、叙事文・短歌二句切の一種、竹里歌話、萬葉集を讀む、萬葉集讀平家物語につきて、等の外、我國の繪畫につきてを讀む、草徑集を讀む、鐙之屋歌集を讀む、有神[illegible]義をよむ、鶴物語、銅像[illegible]患、我室、我家の長物、過園閑事、龜戸まで、入獄談をきく、等を發表。「ホトトギス」には、隨問隨答、蕪村句集講義、俳句分類、俳諧と八犬傳、病牀問答、明治三十三年十月十五日記事、病牀讀書日記、明治廿二年の俳句界、[illegible]句集序、草上の風光、其他數篇を掲載した。

國史大系出版されはじむ。高野聖（鏡花）はつ姿（天外）雲のゆくへ（秋聲）思ひ出の記（蘆花）審美綱領（鷗外）文學小觀（桂月）[illegible]集（抱月ら）夜潮集（月郊）わか草（[illegible]若ら）[illegible]國文學史十講（矢一）[illegible]信三郎、壯一ら生る。清貝、敬子、武郷、正一、操山・[illegible]ら歿す。

明治三十四年 (1901)

一月、葉集旋頭歌一雪一發表。一月七日小集。十六日より「墨汁一滴」を日本に載せ始む。

二月七日、山會。二十八日左千夫、秀眞、麓來り、會席料理を振舞ふ。

四月、寒玉集第二編上梓。

五月、「春夏秋冬」春の初上梓。

六月、不折渡歐の途に上る子規庵にて送別會あり。

八月中フランクリンの自傳をよむ。廿六日、俳談會を催す。

十月十二日、把栗送別會を子規庵にひらく。十七日、山會、十八日、「一年有半」をよむ。

十一月十一日夜、義太夫會を催す。麻睡藥をのみて之をきく。

十二月廿二日、蕪村忌を道灌山胞衣神社に開く。病篤く子規庵に開く能はざればなり。この月、「俳句問答」(上)を上梓。

この秋より病篤く屢〻苦しむ。二月一日、黄塔逝く。十月、非風歿す。

この年、病篤く、日本及びホトトギス以外の發表殆んど無し。「日本」には「墨汁一滴」の隨筆を發表しつゞけし外、「書中の新年」其他數篇にすぎず。「ホトトギス」には、「蕪村句集講義」以外、初夢、死後、吾寒園の首に書す、病牀俳話、くだもの、其他二三篇にすぎず。なほ歿後公表されしものに「仰臥漫錄」の隨筆あり。蓋し「墨汁一滴」「仰臥漫錄」は注目すべき力篇にして、子規の全面目を示すに足るものなり。

一月、シベリア鐵道ウラジオ開通。四月、皇孫御降誕。五月、神戸下關間汽車開通。社會民主黨組織、即日解散。六月、星亨刺殺さる。九月、清國と講和成る。十二月、日本赤十字社條例公布さる。田中正造、足尾事件直訴をはかる。

この年、日本女子大學創立。職業紹介事業開始せらる。

俳藝、新文藝、精神界等創刊さる。女學雜誌廢刊さる。武藏野(獨步)牛肉と馬鈴薯(獨步)はやり唄(天外)ふところ日記(眉山)良人の告白(尚江)無花果(春雨)黒潮(蘆花)一年有半(兆民)文藝論集(敏)詩聖ダンテ(敏)最近海外文藝(敏)英文學史(逍遙)文藝評論(樗牛)無弦弓(醉茗)みをつくし(敏)露じも(敏)落梅集(藤村)ゆく春(泣菫)ハイネの詩(柴舟譯)曉鐘(晩翠)暗香疎影(雨江)鐵幹子(鐵幹)むらさき(鐵幹)片われ月(薫園)伽具土(射治)みだれ髮(晶子)竹柏園集第一集(信綱)古今和歌集評釋(第一)(元臣)秋聲會誌(知十)等出づ。

知義、小松、貴一、長二郎ら生る。

諭吉、兆民、乙羽等歿す。

明治三十五年（1902）

一月、碧巌集をよみ、しきりに偈の如き語を吐く。この月廿日頃、不安の状あり、以後看護輪番を設け、弟子ら警戒、看病す。二月「俳句問答」（下）上梓。四月「獺祭書屋俳句帖抄」上巻及び「俳句界四年間」上梓。五月、例により苦しむ。加藤恒忠渡欧、留守宅にて男子出生、忠三郎と命名。後正岡家を嗣ぐ。四月から九月（七月休）にかけて蕪村句集輪講を子規庵に催す。六月より薬物帖、八月より草花帖に寫生をたのしみ、僅かに慰む。九月八日、足の甲に水腫来る。十一日以来苦痛甚し。十八日、辭世の句を認め、十九日午前一時歿。廿一日葬儀、田端大龍寺に葬る。會葬者百五十餘人。この年五月、「春夏秋冬」夏の部上梓、碧虚共選なり。

この年、「心の花」に秀眞記の「根岸夜話斷片」「病牀歌話」等の載りし以外、「日本」「ホトトギス」に發表せしものも、その數、多からず。「日本」には、歌、俳句の少數を出したる外は「病牀六尺」の隨筆を連載せり。「ホトトギス」には「蕪村句集講義」以外、病牀苦語、徒歩旅行を讀む、俳句帖抄の序文外二三にすぎず。主要なる作品としては「病牀六尺」及び死後發表されし「仰臥漫錄」の隨筆なり。歿後直ちに（十月）「子規隨筆」出づ。蕪村句集講義、冬、春、夏の部は卅三年より卅五年にかけ順次出版されしが、秋の部は、翌年六月出版さる。

一月、日英同盟成る。二月、學校騒動に關し、文部大臣訓令を發す。九月、東京專門學校、早稲田大學と改稱。この年、一月、青森聯隊の兵、八甲田山にて吹雪のため數多死す。

藝文、萬年艸、文藝界等創刊。黒潮（蘆花）重右衛門の最後（花袋）地獄の花（荷風）聴無情（涙香）舊主人（藤村）春光（秋聲）雨（柳浪）酒中日記（獨歩）起誓文（鏡花）審美極致論（鷗外）新美辭學（抱月）草わかば（有明）夕月（夜雨）半月集（半月）うもれ木（鐵幹）玉篋兩浦島（鷗外）叙景詩（柴舟、薫園選）つゆ草（みづほのや）歌がたり（元臣）新派和歌大要（鐵幹）新體詩歌作法（美妙）等出づ。

樗牛、茂樹ら歿す。

附記

年譜・作品欄は、主として「子規居士年譜」（子規全集第十八巻所載）に據つて子規一生の輪郭を錄し、「時代」の欄は明治文學序說其他の諸書を参酌し、一般重要事件及び文學・思想・學術界の大勢を察知するに便せしものなり。

子規研究文獻目錄

明治三十五年

「木兎」子規追悼號……（一〇）
子規翁と芭蕉翁……紅綠
鳴呼子規先生……挿雲
夢の如し……月兎
子規翁終焉後記……紅綠
子規先生逝く……水巴
其他 數氏執筆
思ひよる日……岡野知十（半面—子規追悼號、一〇）
子規言行錄……小谷保太郎編（吉川弘文館……一一）
「ホトトギス」子規追悼集……（一二）
追懷雜記……鳴雪
子規の書簡……飄亭
思ひ出づるまゝ……四方太
寫生文の事……四方太
短歌會の起り……秀眞
墓側……碧梧桐
子規翁……紅綠
故人の回想……鼠骨
子規子の手簡……虚子
子規年表
子規君に關する記憶……露月
遺髮埋葬式の記……淺紅
其他 追懷記、追悼會記など

明治三十六年

竹の里人……伊藤左千夫（馬醉木、七ヨリ三十八年二月マデ九回連載）
子規忌一週忌の文……矢田挿雲（ハマユミ、一三）
竹の里人……長塚節（馬醉木、一三ヨリ三回連載）

明治三十七年

「はれの日」と「古庵」……高濱虚子（ホトトギス、一）
竹の里人選歌について……伊藤左千夫（竹の里人選歌序、五）

明治三十八年

正岡子規と秋山參謀……高濱虚子（ホトトギス、七）
竹の里歌の內……伊藤左千夫（甲矢、七）
竹の里歌……不言舍（甲矢、三）
獺祭書屋俳句帖抄講義……四澤、外三氏（ハハキ木、一ヨリ）

明治三十九年

絕對的人格……伊藤左千夫（馬醉木、一）
正岡子規……高濱虚子（文章世界、四）

わが崇拜する子規子……伊藤左千夫（馬醉木、一〇）

明治四十年

［中央公論］明治故人評論（五）正岡子規論……（九）

子規先生……紅緑
子規論……醒雪
正岡子規の人物……鳴雪
明治文壇四天王の一人……小波
子規子につき……知十
子規と寫生文……四方太
子規と和歌……左千夫
故子規氏について……春葉生
子規子に對する雜感……殘花
子規氏……竹冷
正岡子規君……松宇
子規書簡集を讀む……瓊音
正岡さん……漱石

明治四十一年

子規居士書簡……（ホトトギス、一）
子規系文學論……增田甚治郎（アカネ、三、四）
正岡子規……窪田空穗（文章世界—近代三十六文豪號—五）
［ホトトギス］子規居士七周忌記念號……一二ノ九

正岡子規……漱石
先生の筆蹟……鼠骨
子規遺墨……不折
子規居士の日常……左千夫
子規子と新文藝……文泉子

明治四十二年

芭蕉と蕪村と子規……大須賀乙字（アカネ、七）
子規句集講義……鳴雪・碧梧桐・虚子等（ホトトギス、一〇ヨリ連載）
子規句集講義[illegible]……中野三允（アラレ、二）

明治四十三年

正岡子規論……服部嘉香（早稻田文學、一）
子規時代と今日の句……荻原井泉水（時事新報、三）

明治四十四年

正岡子規と秋山大佐……柳原極堂（フレンド、二）
子規正岡先生……伊藤左千夫（アララギ、九）
子規居士と余……高濱虚子（ホトトギス、[illegible]ヨリ大正二年[illegible]月マデ）

明治四十五年

[illegible]……森無黄（[illegible]、六）

大正三年

ホトトギス子規居士十三回忌記念號……（[illegible]）
子規居士追憶談……高濱虚子（ホトトギス、一〇ヨリ數回連載）

大正四年

子規居士と余…………高濱虚子著（日月社、六）
子規居士の葉書に就て……吉野左衛門（ホトトギス、九）
子規居士の追憶其他……吉野左衛門（ホトトギス、一〇）
「子規句集」寒山落木より一序……寒川鼠骨（政教社、一三）

大正五年

五月と子規先生の歌……花田比露思（しほさゐ、五）
子規句集講義……内藤鳴雪・高濱虚子等共著（俳書堂、八）
子規居士の月並論……木下春雄（ホトトギス、九）

大正六年

竹の里歌抄……平瀬泣崖（アララギ、一、三）
「俳諧雑誌」子規追悼號……（七）
子規より默語へ……默語――根岸庵の一夜……月斗
糸瓜佛追憶……去工――子規といふ人……古溪日進
子規及び左千夫の未諒……三井甲之（短歌雑誌、一〇）
俳人子規……木下春雄著（實業之日本社、一二）
正岡子規……臼田亞浪編述（俳句世界社、一二）

大正七年

竹の里歌抄……平瀬泣崖（アララギ、一）

子規夜話……赤木格堂（澁柿、二）
子規の遺跡を守る人々……岩谷由梔子（雄辯、三）
人及び藝術家としての正岡子規……西宮藤朝著（新潮社、六）

大正八年

子規夜話……赤木格堂（澁柿、二、三、四）
寫生文の宗祖正岡子規……大谷是空（中央文學、文豪追想號、七）
子規居士追憶斷片録……折井愚哉（俳句と批評、一二）

大正九年

子規夜話……赤木格堂（澁柿、二、三、四）
「俳諧雑誌」糸瓜忌……（一〇）
寫眞を眺めて……鳴石――鶯講の夜……烏堂
根岸庵の追憶……愚哉

大正十年

正岡子規の歌……香取秀眞（俳諧雑誌、九）
子規書簡追憶……露月・不折・花笠・鳴雪（同）
正岡子規に就て……古泉千樫（アララギ、一〇ヨリ翌年一月マデ）
正岡子規歌集所論……齋藤茂吉（正岡子規歌集、アルス發行、三）

大正十一年

偉大なる凡人子規……橋田東聲(短歌雜誌、七)
正岡先生のことども……香取秀眞(あけび、九)
子規に就ての感想其他……大谷句佛(懸葵、一〇)
子規の歌一首……島木赤彦外二氏(アララギ、一一)
香取氏の「正岡先生のことども」を讀んで……岡麓(同)

大正十二年

羯南翁と子規居士とを憶ふ……寒川鼠骨(日本及日本人、二)
人としての正岡子規……松田明三郎(想苑、三)
竹の里歌全集につきて……古泉千樫(アララギ、三)

大正十三年

子規の事ども……三並良(日本及日本人、五)
正岡子規のこと……島田青峰(早稻田文學、六)
新釋正岡子規歌集……橋田東聲著(紅玉堂、六)
子規の面影……河東碧梧桐(碧、六ヨリ六回連載)
子規の觀た芭蕉の心……山田[illegible]浪(石楠、八)
子規の芭蕉觀……野田別天樓(にひはり、一一)

大正十四年

初期の正岡子規……島田青峰(早稻田文學)
正岡子規と長塚君……岡麓(アララギ、一二)
子規の第一歩……河東碧梧桐(俳書堂、一二)

大正十五年

正岡子規……岡麓(アララギ、一)
子規及其周圍……島田青峰(新小説、一)
正岡子規論……三井甲之(日本及日本人、一)
晩年の正岡子規……島田青峰(早稻田文學、四)
子規・鳴雪觀……青木月斗(同人、四)
正岡子規の二態……小酒井不木(短歌、五)
歌壇に謬られたる子規の寫生觀……日比修平(青樹、六)
正岡子規―子規忌にあたりて……齋藤茂吉(國民新聞、九、一八)
子規の歌に就いて……島木赤彦(アララギ、一〇)

昭和二年

子規居士と津僊……小池直次郎(信濃教育、一)
子規の性格及學思想の斷面……藤川忠治(國語と國文學、二)
子規歌語條抄……橋田東聲(短歌雜誌、三)
子規の歌人評論……藤川忠治(國語と國文學、六)
正岡子規全傳……橋田東聲著(春陽堂、一二)

昭和三年

正岡子規に就いて…………古泉千樫（青垣、三、四）
子規と節の關係…………藤川忠治（とねりこ、三、四、五）
正岡子規研究…………河東碧梧桐（日本文學講座十七卷、五）
正岡子規…………齋藤茂吉（改造、六）
子規旨七種談…………寒川鼠骨（改造、六）
晩年の子規の句の一考察…太田鴻村（石楠、八）
「日本及日本人」正岡子規號…………（九）
先師の晩年…………格堂
師影六尺…………紅緑
子規居士の古い時代の句を讀む…………虛子
十句集のことども…………漱石
鶉を聽きつゝ…………露月
思ひ出すまゝ…………不空
發者子規…………鼠骨
のぼさんと食物…………碧梧桐
子規の少年時代…………良
子規の青年時代…………正之
豫備門時代の子規…………仙湖
追憶斷片…………飄亭
「日本新聞」時代の子規…………一華
子規君のこと…………不折
追懷餘錄…………格堂
正岡子規の和歌革新の眞相…………水穗
正岡子規の和歌革新…………甲之
子規の歌學思想…………東聲
未發表遺稿
其他　諸家の追憶記等

昭和四年

子規全集附錄月報…………諸家（六月ヨリ翌々年ニ亙ル）
子規と節と左千夫…………橋田東聲著（春陽堂、三）
子規の俳論…………伊藤靜華（國語國文の研究七、八）
正岡子規の萬葉集觀並にその運動…………橋田東聲（國學院雜誌、一〇）

昭和五年

子規と春園…………土屋文明（アララギ、一）
子規と愚庵…………湯本喜作（水甕、三）
子規居士の最後…………茂野冬篝（同人、九）
子規を憶ふ…………橋田東聲（覇王樹、一〇）
子規先生のこと…………岡麓（短歌雜誌、一二）
歌人子規…………尾山篤二郎（靑海原、一二）
所謂鐵幹子規不可併稱問題…………小島吉雄（能古、一二、一三）

昭和六年

子規が歌を始めた頃…………石榑千亦（覇王樹、一）
根岸短歌會―正岡子規とその周圍…………上田英夫（水甕―明治大正短歌研究號―一）
正岡子規を素描する…………島山榛名（同）
子規の書と歌…………中川一政（短歌新聞、一）
正岡子規に學ぶ…………高田浪吉（アララギ、四）

子規居士の句に就いて……名和三幹竹(ゆく春、五)
子規の自然觀……………加藤 順三(日本文學、六)
「同人」子規居士三十週忌記念號…………………(九)
子規の居蹟………古賀藏人 ┃ 椎の友會まで……織田小蛄
松山回顧…………柳原極堂 ┃ 著作一覽…………茂野冬篝
子規居士の俳句…菅 裸馬 ┃ 其他 諸家の追憶記等
正岡子規……………齋藤 茂吉(岩波講座日本文學ノ內—九)
子規忌小感……………大澤 弘(あけび、一〇)
正岡子規………………中村 憲吉(短歌講座歌人評傳篇、一三)

昭和七年

鐵幹、子規、槐園…………德野 眞士(ポトナム、一)
根岸短歌會の話…………依田 秋圃(短歌春秋、一)
正岡子規に就いて…………高田 浪吉(同)
子規の歌一首……………齋藤 茂吉(アララギ、一)
子規と左千夫……………大熊 信行(まるめら、一)
子規の歌一首補遺………齋藤 茂吉(アララギ、三)
子規の短歌革新の階級性…神畑 勇一(短歌クラブ、三)
文壇活躍前の正岡子規……藤川 忠治(國語と國文學、四)
子規の短歌俳句革新の進歩性と保守性………神畑 勇一(短歌月刊・五)
子規居士の俳句研究………寒川 鼠骨(俳句鑑賞講習篇、七)
根岸短歌會の思ひ出………香取 秀眞(短歌現代結社篇、九)
子規の追憶…………………岡 麓(同)
正岡氏と夏目氏の思ひ出…星野宇平治(心の花、一三)
子規と節の一面……………岡 麓(日本短歌、一〇)
子規と舊派宗匠……………藤川 忠治(國語と國文學、一三)

附記 右の表は、子規歿後より昭和七年に至る間、諸雜誌にあらはれたる諸家の子規研究論文・諸種子規書の主なるもの、及び單行著作・講座所載のものの一部をも併せあげたれども、おそらくは不備の點少からざるべし。切に御叱正を乞ふ。

なほ本表製作にあたり、德田鐵馬及び國田文學士の御援助を得る所多かりき。記して謝意を表す。

俳句索引

（――印を以て子規の句と他の人の句を區別す）

か（が）

さ

し

白魚のすみ田河原と申さばや　二六八
白露や原一ぱいの星月夜　二三六

秋海棠朽木の露に咲きにけり　二四〇
鹿の聲細谷川を集でけり　二四八
鹿笛に谷川渡る音せはし　四九〇
鹿よべば萩を廻りて來りけり　二四八
新涼ふしこえて行く微笑かほ　二三一
宵月やはじめて松の嵐山　二八五
障子ごし月のなびかす柳哉　二四五
泉青み手を出して見る田螺哉　二九三
白魚にもし化しやせん水の雪　二四五
白菊の目に立てゝ見る塵もなし　一七五
白露や家こぼれたる萱の上　二九五

す

すゞ〳〵と鳥雲に入るひゞき哉　二五〇
杉の雪一町奥に仁王門　二六四
涼しさのたゞ水臭き匂ひかな　二五一
涼しさの昔を語れ忍摺　二五二
涼しさや神と佛の隣どし　二五二
涼しさや開けば昔は鬼の家　二五一
涼しさや瀧ほどばしる家の間　二五三
涼しさや裸でこゆる箱根山　二六三
涼しさや香ひる上に牛の雨　一〇一
すつと出て蕾見ゆるや杜若　二三五
須磨の灯か明石のともし時鳥　九六
水飯や辨慶殿の喰ひ殘し　二六九

鮓を壓す石上に詩を題すべく　二〇一
摺鉢の果や穂蓼の枯れ處　二九一

せ（ぜ）

西洋の草花赤し明座敷　二七三
絕壁の巖をしぼる清水かな　二六三
蟬なくや五尺に足らぬ庭の松　二〇五
栴檀の實ばかりになる寒さかな　二六四

宗として寄の絕圖の牡丹かな　二七八

そ

底見えて小魚も住まぬ清水哉　二三九

た（だ）

大木の雲に聳ゆる枯野哉　二七一
大木の下に子のよる休日哉　二七三
絕えず人いこふ夏野の石一つ　二二二
高臺の上に短き白帆かな　二七三
卓一脚香消えんとする牡丹かな　二〇七
筍のきほひや日々に二三寸　二四一
狸ぬれて藪に歸る夜のくれ　二〇〇
棚の絲瓜思ふ庵へぶら下る　二一七
旅人の蜜柑くひ行く枯野かな　二六四
猿一本糸瓜の水も間にあはず　二二八、二二九
煖爐たく部屋暖に福壽草　二〇七
玉川や小鮎たばしる晒し布　二〇四
たらちねの花見の留守や時計見る　二四八
盥漕ぐ鯉の背見ゆる春の水　一九六

内裏雛人形天皇の御字かとよ　一七七
凧の尾にふりけされけり朝の月　二〇〇

に

ぬ

ね

の

は（ば）

ひ（び）

ふ

へ（べ）

ほ（ぼ）

ま

み

む

め

も

や

宿立てゝ通る人なし花薄　二六三
山蟻のあからさまなり白牡丹　二七八
山蟻の猳道造る牡丹哉　二七八
山賤も鹿も眠るや神の前　二四八
山寺に雀集りし小鹿哉　二四八
やゝ廿日月も更けゆくぼたん哉　二七八

ゆ

雪のある山も見えけり上り簗　二二六
行き〳〵てひらりと返す燕かな　二六三
行く春や商人船の立烏帽子　二六四
行く春をうれしさうなる鶉かな　二七七
行く人に笑ひかゝるや野[illegible]の[illegible]　二七七
行く我にとゞまる汝に秋二つ　二七五
夕風や牡丹崩るゝ石の上　二七八
夕顔も絲瓜も同じ棚子同士　三〇七
夕涼松風とめらゝ候そ　二九八
夕立の来て[illegible]を崩しけり　二三九
夕立やはちすを笠にかぶり行く　二三三
夕立や一かたまりの雲の下　二三四
夕月や小牛のやうな沖の岩　二七七
夕月や眞向に立ちし鹿の形　二四八
夕日負ふ六部背高き枯野かな　二三九
夕陽に馬洗ひけり秋の海　二四四
ゆふべ〳〵ひぐらし鳴いて秋近し　二六〇
ゆかしさや山吹の戸に竹はしら　[illegible]
夕風や水青鷺の脛を打つ　三〇一
夕立の戻りの雲や夜の雨　二八五
夕月は空にも隅のなき夜かな　二八四
夕月やさすがに雲も捨てられず　二八五
夕月夜畑の中の角力かな　二九[illegible]
ゆるさ〳〵[illegible]の家の初[illegible]　二九[illegible]

よ

よつ引てひやうとぞはなす大[illegible]　二九八
世の中をかしこくくらす海鼠哉　二六八
世の中を憎らずもがな[illegible]　二七七
宵闇や薄に月のいづる音　二三四
[illegible]千里[illegible]の[illegible]かな　二七一
吉野にて[illegible]花の吉野山　二八三
宵暗の水に向けて子規　二五四

ら

廊下より手燭さし出す牡丹かな　二七七
蘭花樹にかへれど人の行へ哉　二四四
落陽に[illegible]立つ二月三日かな　二[illegible]
蘭夕狐のくれし奇楠を炷ん　二〇二

り

りきみ[illegible]門過ぐる[illegible]かな　二九九
林檎[illegible]二軒月の前に[illegible]　二七[illegible]
涼しして牡丹動かず[illegible]中　二七七

れ

[illegible]に餘花乗むるか日永人　四〇八

ろ

[illegible]なす[illegible]　三〇[illegible]

わ

ゐ

ゑ

を

和歌索引

（――印を以て子規の和歌と他の人の作を區別し、二句までを錄す）

あ

い

昭和八年九月五日印刷
昭和八年九月八日發行

正岡子規
明治文學研究(2)
定價金參圓

編者　藤村作
著者　藤川忠治
發行者　來島正時
東京市神田區北神保町廿一番地
印刷者　小笠原秀雄
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所
東京市神田區北神保町廿一番地
山海堂出版部
電話九段一三一〇番
振替東京二一六九一番